

『源氏物語』と『平家物語』の五節舞とその周辺

著者	武藤 美枝子
著者別名	MUTO Mieko
その他のタイトル	Gosechi-no-mai in The Tale of Genji and in The Tale of the Heike together with other topics relating to the Gosechi event
ページ	1-339
発行年	2019-03-24
学位授与番号	32675甲第446号
学位授与年月日	2019-03-24
学位名	博士(学術)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://doi.org/10.15002/00021760

法政大学審査学位論文

『源氏物語』と『平家物語』の五節舞とその周辺

武藤美枝子

目次

目次	1
凡例	6
序章	7
(1) 五節について	9
(2) 豊明節会	9
(3) 五節舞を中心とした豊明節会の日程	10
(4) 五節舞とはどんな舞だったのか	12
(5) 舞姫の現実	13
(6) 舞姫献上者たちとその負担の大きさ	14
(7) 五節の終焉	15
第一部 『源氏物語』 五節の舞姫の考証	17
第1章 少女巻の五節	17
はじめに	17
第1節 太政大臣光源氏の献上	19
(1) 光源氏の舞姫は公卿分か殿上分か	19
(イ) 殿上分・公卿分の区分	19
(ロ) 舞姫の出立場所から	21
(2) 大臣の献上とは	22
第2節 童女・下仕	25
第3節 舞姫	27
(イ) 惟光娘の内裏参入	27
(ロ) 舞の教習	28
第4節 舞姫たちの宮仕	29
(1) 宮仕	29

(イ) 宮仕の意味するところ	29
(ロ) 少女巻の冷泉後宮の現況	31
(2) 尚侍と御匣殿の可能性	35
(イ) 尚侍	36
(ロ) 御匣殿	37
第5節 少女巻の舞姫献上者たちと政治的意図	41
(1) 少女巻の舞姫献上者たち	41
(イ) 按察大納言	42
(ロ) 左衛門督	45
(ハ) 源良清	54
(2) その後の冷泉後宮から見た少女巻の献上者	56
おわりに	59
第2章 少女巻の夕霧と五節	61
はじめに	61
第1節 「殿上に還る」 夕霧はなぜ六位で昇殿できたのか	63
(1) 蔵人の可能性	63
(イ) 年齢から	63
(ロ) 「浅葱の袍」から	65
(2) 蔵人所と昇殿	68
(イ) 非蔵人	69
(ロ) 蔵人所雑色	71
(ハ) 蔵人所衆	72
(ニ) 非蔵人・雑色と文章生	73
(3) その他の可能性	75
(イ) 侍従	75
(ロ) 内舎人	76
第2節 五節の参内に夕霧は何を着たのか	81
おわりに	86
第二部 『平家物語』と五節	88

第1章 忠盛の昇殿と五節.....	88
はじめに	88
第1節 忠盛の昇殿の悲願	91
(1) 受領忠盛	91
(2) 昇殿への長い道のり	93
(3) 昇殿の喜びを詠んだ忠盛の和歌.....	94
(イ) 舞人忠盛.....	96
(ロ) この和歌に詠まれた昇殿は「院」の昇殿か「内裏」の昇殿か.....	98
(ハ) 「うれしとも中中なれば」の和歌は長承元年のものではない.....	98
(ニ) 忠盛の院の昇殿はいつだったのか.....	100
(ホ) 白河院の昇殿か鳥羽院の昇殿か.....	104
(4) 内裏昇殿への悲願 忠盛の舞姫献上	105
第2節 「殿上闇討」 忠盛の内裏昇殿と長承元年の五節	109
(1) 得長寿院の寄進と見返り	109
(2) 闇討ちと背景	110
(3) 「白薄様」	114
おわりに	119
第2章 仁安3年(1168年)の五節をめぐる解官劇.....	120
はじめに	120
第1節 内大臣源雅通と大納言藤原師長の解官事件.....	121
(1) 事件の概要	121
(2) 事件の終息と背景	124
第2節 平頼盛・保盛の場合	127
(1) 事件の概要	127
(2) 保盛の五節の献上	128
(3) 頼盛の連座	129
(4) 平頼盛について	131
(5) 保盛献上の五節	132
(6) 保盛・頼盛解官の真の理由	135
(イ) 清盛黒幕説.....	136

(ロ) 頼盛の「問題行動」	137
(ハ) 頼盛解官で利益を得たのはだれか	139
おわりに	141
第3章 『平家物語』の時代の五節の献上者たち	143
はじめに	143
第1節 献上者の負担の増大 舞姫の参入と童女御覧を巡る攻防	144
第2節 『平家物語』の時代の献上者たちの考察 元永元年～寿永4年	149
第3節 『平家物語』の時代の舞姫献上者たちとは	217
(1) 公卿	217
(2) 受領	221
おわりに	223
第三部 五節と女性たち	225
第1章 五節舞姫を献上した女性たち	225
はじめに	225
第1節 中宮穩子の舞姫献上 天慶元年(938年)	228
第2節 資子内親王の献上 天元元年(978年)	237
第3節 永延2年(988年)の「皇太后」の献上	241
第4節 永延元年(987年)の献上者 遵子	246
第5節 太皇太后昌子の献上 永祚元年(989年)	250
第6節 定子舞姫献上 献上年の問題	256
第7節 中宮彰子の献上 長保2年(1000年)	264
第8節 寛仁2年(1018年)の一品宮の献上 敦康親王か脩子内親王か	267
おわりに	274
第2章 五節の忌と女性たち	277
はじめに	277
第1節 妊婦	279
第2節 月事	281

(イ) 大嘗会御禊の女御代.....	283
(ロ) 着裳.....	284
(ハ) 舞姫と初潮年齢.....	285
おわりに	287
終章	288
補注	292
【補注1】 第一部 第1章 中納言の娘が女御となった例	292
【補注2】 第一部 第2章 夕霧と大学について	295
【補注3】 第二部 第3章 『平家物語』の時代の舞姫たち	300
【補注4】 第三部 穢による五節の停止 延喜15年（915年）	303
【補注5】 舞師の禄の内容	309
参考資料 舞姫献上者の負担——元暦元年の九条家の例	313
別表 『平家物語』の時代の五節献上者一覧.....	316
参考文献	318

凡例

1. 本論文で参照・引用した古典文献・史料、研究論文・書籍、および、辞書類等の一覧を、論末に「参考文献」として示した。
2. 引用した古典本文テキストには以下を利用した。

『今鏡』	講談社学術文庫
『栄花物語』	新編日本古典文学全集
『大鏡』	新編日本古典文学全集
『源平盛衰記』	三弥井書店
『源氏物語』	新編日本古典文学全集
『古今著聞集』	新潮日本古典集成
『今昔物語集』	新編日本古典文学全集
『十訓抄』	新編日本古典文学全集
『住吉物語』	新編日本古典文学全集
『続古事談』	新日本古典文学大系
『平家物語』	日本古典文学大系
『枕草子』	新編日本古典文学全集
『紫式部日記』	新編日本古典文学全集
3. 新編日本古典文学全集本からの引用は、「新編」と略称を冠して、冊または段とページ数を付す。
日本古典文学大系本からの引用は、「旧大系」と略称を冠して、巻とページ数を付す。
その他の引用は、原則として、出版社名とページ数を付す。出版者名に代えて「学術文庫」といったよく知られたシリーズ名を用いることもある。
4. 本論で参照・引用する史料は書名、または、書名と項目名を記す。
5. 本論を述べる上で参照もしくは引用した研究論文・書籍は、「著者名（出版年）」もしくは「（著者姓 出版年）」と略称で示し、参照箇所をさらに特定する場合にはページ数を「（著者姓 出版年:ページ数）」の形式で挙げる。但し、「参考文献」に同一姓の著者が複数名である場合はフルネームで示す。同一の研究分野によく知られた同姓の研究者が存在する場合などもフルネームで記述する。
6. 参考・引用文献を示す上で、そのタイトル・サブタイトルを明示することが、本論の主張を明確にする場合には、本文もしくは脚注に、それを記す場合がある。
7. 史料本文を引用する際には、原則としては、原文から引用するが、論を進める上で理解が増すと判断する場合には、その訓読文を付す、もしくは、代替する。
8. 書名等や作者の名前は、本論中では新字体で用いることがある。
9. 古典本文における／＼などの繰り返し記号は、横書きであることを考慮して仮名に置き換えたものがある。

序章

天つかぜ雲のかよひちふきとちよをとめの姿しばしとどめむ

(良岑宗貞¹『古今和歌集』872 番)

と殿上人たちを魅了した五節の舞は新嘗祭・大嘗祭（代初めの新嘗祭）²の最終日の豊明節会で舞われた、新嘗祭（あるいは大嘗祭）という一大行事のフィナーレだった。

五節行事は宮中の人たちが楽しみにした行事で、数多くの文学作品にも登場する。例えば『枕草子』88 段には、「内は、五節のころこそすずろにただ、なべて見ゆる人もをかしうおぼゆれ」（新編 174 頁）とあり、五節のころの宮中が普段とちがって優雅に華やいでゆくなか、淵酔を行き来する殿上人たちが常寧殿五節所のあたりを、「直衣ぬぎたれて、扇やなにやと拍子にして『つかさまさりとしきなみぞ立つ』といふ歌をうたひ、局どもの前わたる」（新編 174 頁）と、歌いつつ歩いてゆく様子を記す。官位が昇進して五節の献上を命じられる者が多かったから祝福に値いすることではあっても、舞姫の献上の実際は大変なもので、献上者は過大な経済的負担を負いつつ、2～3 か月前から準備を進めたのである。

五節の行事における舞姫については先行研究もいくつか出ている。

三上啓子「五節舞姫献上者たち——枕草子・源氏物語の背景」（2001）

寺内浩「五節舞姫の献者（延喜～長元）」（2004）

佐藤泰弘「五節舞姫の参入」（2009）

服藤早苗『平安王朝の五節舞姫・童女』（2015）

などである。三上啓子は公卿への献上の任命と官職の昇任との関係を明らかにし、寺内浩は平安期の受領制度における五節舞姫献上の実態に触れ、佐藤泰弘は舞姫たちの参入の実情を明らかにした。服藤早苗は五節舞姫を多方面から詳細に研究して一般の人にも親しめる総合的な概説書を刊行した。

芸能面から見た五節としては、起源論からは

阿久沢武史「五節舞の由来—琴歌譜歌謡考」（1992）

¹ のちの僧正遍照。

² 但し、名称としては「大嘗祭」の方が古く、新嘗祭も「大嘗祭」と呼ばれていた時期もある。

飯島一彦「五節小歌再考—尊經閣本『雲図鈔』の公刊を機縁に」(2012)
などがあり、五節の淵醉については、中世の芸能史の観点から研究が進んでいて、
沖本幸子『今様の時代——変容する宮廷芸能』(2006)
などが刊行されている。

また、五節の行事と物語の関係についての先行研究としては、

新間一美「五節の舞の神事性と源氏物語——少女巻を中心に」(1997)

藤本勝義「源氏物語と五節の舞姫——少女巻における惟光女の舞姫設定をめぐって」
(2008a)

「源氏物語と五節の舞姫（補遺）」(2008b)

などがある。

新間一美は、五節舞の起源論を中心に『源氏物語』に取り入れられた五節の舞姫の神女性を指摘した。近年では藤本勝義が『源氏物語』と五節の舞姫について論じている。しかしこれまでの『源氏物語』と五節の関係の研究は、ほぼ『源氏物語』に登場する舞姫たちに限られて、周辺も含めて史実との関連性を追求したものは少ない。

本論文は先行研究者の成果を踏まえつつ、文学の中に現れた五節を求め、史実との整合性を確認しつつ、物語に見られる五節を通して、この行事を人々がどのように受け止め、生活の中にどのように影響してきたかを探ろうとする試みである。ここで取り上げる題材は『源氏物語』と『平家物語』の描く時代（平安中期～院政期）で、一大イベントである五節をめぐって、五節献上にまつわる時代背景と献上のドラマを考証する。

本論文第一部では、この宮中の一大イベントが『源氏物語』の展開にどのように利用されたか、少女巻で描かれる光源氏の五節舞姫献上の政治的意義を探る。第二部では平家の興亡と関係の深い五節をとりあげ、平家の興亡の節目をマークした五節を『平家物語』との関係において捉えなおす。第三部では特に女性の五節の行事への関わり中で、男性たちに交じって舞姫を献上した女性たちを探り、女性献上の事情を検証する。さらに、五節行事に関わる、女性ならではの日常における事情について付記する。

この序章は、本論文の背景として五節舞行事の最小限度の概略的説明である。

（１）五節について

五節の舞は毎年 11 月の新嘗祭・大嘗祭諸行事の最終日（つまり新嘗祭では辰の日、大嘗祭では午の日）の豊明節会で舞われた。いろいろな辞典類に五節の項目は見出せるが、中には肯けないものもある。本論筆者には『平安時代儀式年中行事事典』が最も簡潔にまとまっているように思われた。以下、該当部分を引用する。

天武天皇が吉野で創設した舞だとされ、八世紀には皇太子阿部内親王が元正太上天皇の前で舞ったのが初見で、大仏開眼供養や宴で舞われた。舞は、袖を上下する、神や天皇に感謝・服従・臣従・恭順の意を表明する芸能であった。桓武天皇ごろから大嘗祭や新嘗祭の豊明節会で舞われるようになり、平安中期には大嘗祭には五人、新嘗祭には四人の五節舞姫が、華やかな衣装で童女や下仕を従え常寧殿五節所に入り、紫宸殿で舞う極めて華やかな行事になった。（『平安時代儀式年中行事事典』十一月「五節の舞とは」）

「この舞後世には十一月の節会に限りたる事なれども、もとは然らざりしこと」と、本居宣長が著した『歴朝詔詞解』³にもいっているように、阿部皇太子が舞ったのは、確かに 11 月ではなく 5 月 5 日の事であり、月次祭に斎宮の采女が「五節舞」を舞っている記録もあるが、平安時代に五節の舞はほぼこの豊明節会での舞をさすようになった。

（２）豊明節会

新嘗祭も大嘗祭も「仲冬」（十一月）の 2 度目の卯の日⁴に行われる。豊明節会は一連の新嘗祭行事の最終日である辰日、大嘗祭においては午日に、天皇が出御して行われる公儀の宴会。豊明の語義については、大嘗祭の祝詞の「千秋五百秋に平けく安らけく聞食して、豊明に坐」や、中臣神寿詞の「赤丹の穂に聞食して、豊明に明り御坐しまして」などの例から豊明に明り坐すという慣用句が宴会の呼称として固定したものとみられている。つまり、「明り」は「赤らむ」で酒を飲んで顔が赤らんだ様をいった。

³ 『歴朝詔詞解』は本居宣長著。内題は「統紀歴朝詔詞解」。『続日本紀』に載る 62 篇の「宣命」を、第一詔から第六十二詔と命名し、校訂し注釈を付したもの。

⁴ 2 度目の卯の日は、3 回卯の日がある月には当然「中の卯」であるが、卯の日が 2 回しかない月には「下の卯の日」とも「中の卯の日」ともいう。

『源平盛衰記』には「昔浄見原帝御宇ニ唐土ノ御門ヨリ崑崙山ノ玉ヲ五、進給ヘリ、其玉暗ヲ照事、一玉ノ光、遠^{とほく}五十兩ノ車ニ至ル。是ヲ豊明ト名付ケタリ」(巻第一「五節始」18-19 頁)とある。そして、天女が舞った時、暗くて見えなかったなのでその玉を取り出して光にして見たのだが、『大嘗会儀式具積』巻第九に「豊明とは宴会を云ふ、古くは宴会豊楽の字を直にとよのあかりと訓ず、大嘗祭の後には必ず宴会あり、仍て大嘗の豊明、新嘗の豊明などとは云へど、節会の字を加へて豊明節会とは云はざりしを、中古以後は十一月の節会の名をとりて、豊明節会と称す」⁵とある。新嘗・大嘗祭の儀礼構成の基本は同じだが、大嘗祭の方が悠紀・主基両国の風俗舞など、より多くの行事や芸能が加わる⁶。

(3) 五節舞を中心とした豊明節会の日程

● 新嘗会 (平安中期の例)

新嘗祭の祭祀は十一月下(または中)の卯の日に行われる。

子の夜～丑日 舞姫参入 帳台試(常寧殿)

寅の日 御前試(清涼殿)

(此の夜 鎮魂祭⁷が行われる)

卯の日 童女御覧(清涼殿) 殿上の淵酔あり 新嘗祭(中和院の神嘉殿)

辰の日 豊明節会 五節舞(豊楽院または紫宸殿)

(一献で国栖の奏、三献で数曲奏樂のあと五節舞になる⁸)

● 大嘗会

子の夜～丑日 舞姫参入 帳台試(常寧殿)

寅の日 御前試(清涼殿)

卯の日 童女御覧 大嘗祭(大嘗宮)

辰の日 悠紀の節会

⁵ 『大嘗会儀式具積』(荷田在満、1738年)巻九が豊明節会次第である。新註皇学叢書第7巻所収。

⁶ 大嘗祭では悠紀・主基の国に斎田が設定され、朝堂院に悠紀殿・主基殿を中心とした大嘗宮が仮設される。

⁷ 鎮魂祭とは簡単に言えば、天皇や皇后などの魂に活力を与え再生する呪術を行い、寿命の長久を祈る儀式(『大辞林』より)。

⁸ 例えば『西宮記』「十一月新嘗祭事」に「供黒白御酒、(中略)国栖奏、(中略)、三献、(中略)別当及歌人着門内床子、<別当座在舞台巽>、大歌又発 物声、<一節尽十三歌也、舞間歌三歌也、所謂和受歌也>(中略)別当参上、如出儀、<掃部司移床子舞台北頭、歌人自舞台東西就床子、皆着当色、赤貨布開腋衣、白半臂、発歌笛、(中略)隨時召別当>、仰内豎立、下小忌台盤、舞姫出、<出自御座西、上髪各相副、女官秉燭添南柱立云々>舞了」。

巳の日 主基の節会
午の日 豊明節会 五節之舞 （豊楽院のちに大極殿。大極殿焼失後は紫宸殿）
一献で国栖の奏、（二献で久米舞）⁹、三献で吉志舞のあと五節舞。
五節舞に続いて倭舞¹⁰（解斎舞）

里内裏居住の場合には、常寧殿などの催行場所の殿舎はそれぞれに里内裏において擬せられた建物¹¹。または、本内裏が存在する場合には里内裏から行幸することもあった。

舞姫の参入は新嘗祭でも大嘗祭でも子または丑の日で、祭祀は新嘗祭でも大嘗祭でも卯の日である。豊明節会は一連の行事の最終日、すなわち新嘗祭では辰の日、大嘗祭では午の日に行われた。寅の日・卯の日には殿上淵酔が行われたが、殿上以外でも中宮淵酔、院淵酔などが随時行われた。

新嘗会と大嘗会における五節の主な違い（平安中期～院政期）は次の通りである。

1. 舞姫の数が新嘗会は4人、大嘗会は5人。
2. 童女御覧は円融朝から始まった娯楽的行事で大嘗会にはないというが、大嘗会でも行われた記録はしばしばあり、『平家物語』の時代には大嘗会でも行われるのが定例となっていた。
3. 新嘗会での豊明節会はかなり早くから紫宸殿に移ったが、大嘗会では引き続き豊楽院が使われた。しかし、康平6年（1063年）の豊楽院焼失後は再建されず、大極殿が使われた¹²。治承元年（1177年）の大極殿の最後の焼亡の後には、紫宸殿（里内裏の正殿）での開催となる。
4. 大嘗会参加の舞姫は叙位されたが、新嘗会には叙位されない。

五節が大嘗祭・新嘗祭の一環として史的に定着したのは、はっきりはしないが清和朝のころだろうといわれる。清和朝に先立つ仁明朝のころの帳台試について、小嶋菜緒子は、常寧殿は仁明朝には物怪と関連付けられる場所であり、悪霊鎮撫の場所として常寧殿で五節の秘儀が行

⁹ 久米舞は早くに途絶えたという。

¹⁰ 倭舞は新嘗祭で舞われることもある。

¹¹ 平安時代以降新嘗祭は原則として内裏西側にある中和院の正殿の神嘉殿で天皇出御で行われた。天皇不出御の場合は神祇官において行われることもあったので神嘉殿での祭儀と天皇不出御の場合の神祇官での祭儀の両方の式次第があった（阪本 2007）。橋本義則は、豊明節会は貞観3年（861年〔清和天皇〕）以降、新嘗会は全て内裏で、大嘗会は豊楽院でおのおの行われていることを指摘している。貞観期までの新嘗・大嘗会の開催場所は表にされている（橋本 1995）。

¹² 例えば、仁安元年（1166年）の大嘗会でも、童女御覧が終わると舞姫たちの控え室である常寧殿の五節所は大極殿へ移設されている（『兵範記』仁安元年11月15日〔卯日〕）。

われた。そしてその時代の神仙思想の下、塗籠の中で舞姫と天皇のエロスがあったという（小嶋 2004：68-9）。嵯峨・仁明朝のころ天皇が五節舞姫と性的関係をもったことは知られており、この時代には公卿層も競って実子を献上した。延喜のころには舞姫は舞が終わると天皇の寝所に侍ることなく家に帰ったと三善清行の「意見十二箇条」¹³は記している。

（４）五節舞とはどんな舞だったのか

大歌に合わせて五節は舞われた¹⁴。大歌は歌だけでなく、和琴・打楽器・笛も含まれるという（飯島 2012）。『西宮記』恒例第三「十一月中卯日新嘗祭事」に大歌の別当が参上して、「発笛琴等声」すると舞姫たちが進み出て舞う、とある。九条良通献上¹⁵の際に琴師にも禄を出している、和琴も加わっているのは確かである。『儀式』巻第五「新嘗会儀」の「大歌并五節舞儀」の項に、当日に儀鸞門から参入する伴奏者たちの中に、歌人・琴師・笛工の他に鐘師・鼓師も見える。

同じく『西宮記』恒例第三「十一月中卯日新嘗祭事」に「大歌又発物声、＜一節尽十三歌也、舞間歌三歌也、（後略）＞」から、五節舞が舞われる間には 13 歌のうち 3 歌が奏されたことがわかる。

先行研究では、五節舞の大歌の歌詞に「少女ども ^{おとめ}少女さびすも（「も」は、または「と」）唐玉を袂に纏きて 少女さびすも」をその一つと推定するものもある（阿久沢 1992）。五節舞の舞にそのものについても、よくわかっていない。（現在の即位大嘗会に舞われる五節舞は、長い断絶のあと、復興されたものを受け継ぐが、どの程度原型を伝えているかは不明である¹⁶。）五節舞の名義は定説を見ないが、服藤は、袖を振る所作に拝舞との共通性を認め、「五節舞は、倭舞と同様に、神や天皇に感謝・服従・臣従・恭順の意を表明する作法として、袖を振り舞う芸態の舞だったと考えられるのである」と述べている（服藤 2015：32）。

¹³ 三善清行が醍醐天皇に奉った。群書類従「雑部」。

¹⁴ 丑の日の帳台試では大歌に対して小歌女官が登場する。帳台試の常寧殿は（出御の天皇とわずかな相伴を除いて）女性専用の空間で扉も締め切られる。男性大歌は建物の外に位置し、大歌を受けて常寧殿内には女官が唱和して（小歌と称した）舞姫は舞った。『兵範記』仁安 2 年 11 月 13 日条にも「大哥於東假廂発哥歌笛了、小哥女官、於母屋幔中打拍子相和」とある。新嘗祭では大歌の座は常寧殿東廂であるが、大嘗会には（東廂には 5 つ目の五節所が設けられるため）后町廊に設けられる。

¹⁵ 良通の献上は元暦元年（1184 年）のことである。

¹⁶ 本章（7）五節の終焉で扱うように、永享 2 年（1430 年）の大嘗会では五節舞はあったが、元文 3 年（1736 年）の復興大嘗祭に五節舞はなく、その前に復興された貞享 4 年（1687 年）の大嘗祭では五節舞は確認されていない。

五節舞の名と由来については、一般的には、『江家次第』（「挙袖五変、故因（イ曰）五節」（巻十、十一月「同節会次第」）や『代始和抄』その他でいうように、天武天皇が吉野の宮で琴を弾くと天女が舞い降りて袖を5変挙げて舞ったことによると伝承されて、『平家物語』にも五節の起源として語られている。（舞い降りた天女の数多くの伝承で5人とされる。）その他にも、五節の名の由来としては、

- 「遅速本末中声の五声の節だから」（『春秋左氏伝』昭公元年条¹⁷）、
 - 「天子の身長に標をつけて（節折）5度繰り返し測ったから」（折口信夫 1930：945）
- という説もある。

阿久沢は、五節舞は元々農耕儀礼であった田舞から分化発展したもので、田舞とは弘仁年間（810～823年）以前には分かれ、宮中儀礼として洗練されていったと考える（阿久沢 1992）。「五節田舞」から五節と田舞が分化したとする研究者たちに対して、服藤は五節舞と田舞は初めから別系統の舞だったとする（服藤 2015：18-33）。

語源や起源がどうだったにせよ、本来、舞姫たちは子の日に参入して一日の教習を受けて、翌丑の日の夜の帳台試に臨んでおり、それ以前に自宅で舞の練習はしていることはしている¹⁸が、舞そのものは一日での教習できる程度の簡単な舞だったと考えられている。

（5）舞姫の現実

きらびやかな舞姫たちであるが、中級下級とはいえ貴族の若い娘たちが重い衣装を着け大勢の前で緊張を強いられたから、気絶したり病気になった舞姫も頻出した。先行研究でも言及されているが、以下のような例が挙げられる。華やかな五節と少女たちの過酷な現実が窺われる。

- 『紫式部日記』で尾張守の舞姫が気分が悪いといって退出している。（「尾張の守のぞ、心地あしがりにぬる、夢のやうに見ゆるものかな」[新編 177 頁]。）
- 『枕草子』では、定子が舞姫を献上した年には、（気分が悪くなって）担がれて出た舞姫はおらず、皆、ちゃんと歩いて上の局まで到着したことをめでている。（「果ての夜も、おひかづきいでもさわがず。やがて仁寿殿より通りて、清涼殿の御前の東の簀子より、舞姫を先にて、上の御局にまゐりしほどもをかしかりき」[新編 86 段 172-173 頁]。）
- 『小右記』長保元年（999年）11月23日に生昌朝臣の舞姫が俄かに参入をやめたとある。

¹⁷ 岩波文庫本では下巻 40 頁。『春秋左氏伝』のこの条には、音楽が万事を節制するために作られたために、音には五節があるという古代中国の思想が語られている。

¹⁸ 第一部第1章で後述するように、例えば、『源氏物語』少女巻に「舞ならはしなどは、里にていとようしたてて」（新編②60 頁）とあり、舞姫として献上されることが決まった娘が「里」（ここは父邸）で舞を教えられたことがわかる。

- 『小右記』長元五年（1032 年）11 月 22 日に舞姫が煩ったと師重が報告している。（「去夜舞姫忽煩之由師重朝臣申」。）
- 『江家次第』（第十、「五節御前試事」十一月中寅）に、「舞姫不足之例」として、「修理大夫悦女」の他、「延喜十九年十一月十六日、一人忽煩物氣、以他人令舞、二十年十一月二十五日一人有所煩不参上」と「天慶五年十一月、殿上舞姫忽病不参、忠幹女」を挙げている。
- 『平家物語』に登場する五節でも例はある。治承 4 年（1180 年）11 月（福原での五節）であるが、『吉記』に「藤大納言舞姫俄所勞更発、仍令昇藤宰相舞姫之間、藤大納言舞姫所勞忽威¹⁹氣、相次各昇了」とあり、すなわち、舞姫がなかなかやって来ないのでどうしたのかと思ったら藤大納言が献上した舞姫が気分が悪くなっていたので、藤宰相の舞姫がまず昇るうちに先の舞姫の気分の悪さも減って 4 人とも無事昇ることができた模様である。

（6）舞姫献上者たちとその負担の大きさ

新嘗祭の舞姫献上者は事典・概説書などでは公卿 2 人殿上人 2 人といわれているが、数は一定ではなかった。先行研究者も取り上げているが、三上啓子（2001）が天元元年（978 年）から長元 5 年（1032 年）の舞姫 4 人の献上者の公卿・殿上別の人数を示している。三上のリストには、

公卿 3 人＋殿上分 1 人

公卿 1 人＋殿上分 3 人²⁰

内親王 1 人＋公卿 2 人＋殿上分 1 人²¹

皇太后 1 人＋公卿 3 人（非参議 1 人を含む）。殿上分なし²²

などの例があり、ここからも、公卿 2 人＋殿上分 2 人は平安時代全般を通じての定例ではなく、長和ごろから公卿 2 人＋殿上分 2 人が定着していったことが分かる。公卿分の献上は新たに参議に昇進した者や昇進したばかりの公卿に任じられることが多かった。殿上人が献ずる舞姫は実子が原則だったが、公卿の献上の舞姫は実子でなくてかまわなかった。

舞姫献上者の用意すべきものは多い。まず、内裏に赴くのは舞姫 1 人ではない。童女 2 人、下仕 2～4 人を伴う。いずれも華美な衣装に身を包む²³。この他にも舞姫のかしづきの女房 6 人

¹⁹ 「減」と傍書がある。

²⁰ 長元元年（1028 年）。

²¹ 天元元年（978 年）。

²² 永延 2 年（998 年）。非参議は源泰清で、この年正月に従三位に叙せられた。

²³ 一行の女性たちの日々の衣装については佐多芳彦（2008）が詳細に報告している。

（人数は一定ではない）、樋洗童なども随行する。『玉葉』元暦元年²⁴（1184 年）は大嘗祭で、九条兼実の嫡男、良通が舞姫（前寮頭忠重女）を献上したが、良通はこの年 18 歳で、実質的には兼実がこの献上を差配した。『玉葉』にはその時の五節関係の品々の一覧がある（別表 1）。つまり、九条家が準備した事物の一覧である。その中のいくつかの物は他の貴族たちが援助している。例えば、初めに挙げられている舞姫装束の丑の日のものは堀川大納言が、寅の日の衣装の一部は中御門大納言がそれぞれ手配しており、寅の日の青色唐衣一式は花山大納言から借り受けるといふ。また、童女装束は八条女院と後白河院から送られている²⁵。しかし、大部分は九条家が家司などを通じて調達している。衣装以外の物としては舞姫たちの控室である五節所の設営と調度の類があるが、屏風・几帳や茵だけではない。火鉢、洗面具、理髪具まですべて献上者が用意する。扇と櫛の手配も別途である。五節に関わる人々へは禄も必要である。舞の師への禄は群を抜く。その他にも、理髪師、五節舞の音楽を担当する琴師常寧殿での帳台試で歌唱（小哥）する女官、あと雑多な仕事に従事する小役人たちにも禄は与えられている。女院や院から童女衣装を持ってきた使いたち（それぞれ宮内卿経家、右馬権頭基輔）にさえ禄は出された。その他膨大な数の人々の饗食、菓子なども準備する。別表 1 の一覧には見えないが、舞姫他の多く女性を内裏へ乗せてゆく牛車の手配も必要である。ことに舞姫を乗せる牛車は飾り立てた立派なものを用意する。五節献上には数えきれない物と準備が必要なのである。

このように多大な出費のかかる五節を献上する者を選定するのはしばしば難航した。そこで新たに参議に昇任した者に献上が命じられるのが通例化していた。新権中納言昇任者も多く献上が命じられた。殿上分はやがて経済力のある見任受領に割り当てられるようになっていったが、舞姫献上受領は見返りに献上を機に昇殿を許されることもあった。佐藤泰弘（2009）は、橘為義が五節献上の年（寛弘 8 年 [1011 年]）の 8 月に、源保任が帳台試の日（万寿 3 年 [1026 年]）に昇殿を許された事例に言及する。

（7）五節の終焉

華やかな五節舞の行事も大掛かりなものであるがゆえに、永遠には続けられない。打ち続く戦乱などで南北朝のころから新嘗会・大嘗会は行われなくなってゆく。その後は、武家政権下で、京都の朝廷経済は困窮してゆく。古記録フルテキストデータベースで検索する限り、最後の舞姫の記録は永享 2 年（1430 年）の後花園天皇大嘗会で、この時は童女御覧もあり、5 人の舞姫が叙位されている。この永享 2 年大嘗会は『康富記』に詳細な記録が残る。貞享 4 年

²⁴ 安徳朝年号では寿永 3 年である。

²⁵ 本論第二部第 3 章でさらに考察する。

(1687 年)、東山天皇が大嘗祭を再興する²⁶。貞享 4 年 11 月 17 日の辰の日²⁷には豊明節会も行われたが、五節舞姫は確認できない。元文 3 年(1736 年)には桜町天皇が再び大嘗祭を復興するなどの復古努力もあったが、このような大嘗祭は簡略化されている。元文 3 年の大嘗祭では午の日に豊明節会もあったが、一献で国栖の奏があり、二献では久米舞はなく、三献ののち吉志舞は舞われた。『八槐御記』²⁸にはこの大嘗祭で「無舞姫参上之儀、末代之儀、毎事遺恨々々」²⁹とあって、五節舞姫が出ないのが残念だったようである。新嘗祭も 3 世紀近く中絶されたのち元文 5 年(1738 年)に復活して、大嘗も新嘗も祭祀部分だけは幕末まで細々と続いてゆく³⁰。その中で、舞姫が舞うことがなかったとは断言できないが³¹、往時のように、着飾った舞姫が童女以下を従え華麗な行列を整えて参入する盛大な行事として復活することはなかった。

平安時代には、宮中人が大きな楽しみとする行事ではあったが、献上者には負担の重い五節が、どのように人々に担われてきたのか、あるいは、文学作品にはどのように登場し、どのような意味・役割を与えられてきたのだろうか。『源氏物語』と『平家物語』を例として考証する。今回は『源氏物語』と『平家物語』しか取り上げられなかったが、他の物語については今後の課題としたい。

²⁶ 近世の新嘗祭については、阪本是丸「近世の新嘗祭とその転換」が詳しい(阪本 2007)。

²⁷ 元文 3 年 11 月 22 日条に貞享 4 年に節会は 2 日間であったという記載がある(東京大学史料編纂所データベース、近世編年)。

²⁸ 広橋兼胤。江戸中期。『大日本近世史料』(『大日本史料』近世編年史[稿本])には、該当記述は見出せない。

²⁹ 『桜町天皇実録』に引用されている『八槐御記』元文 3 年 11 月 22 日条による。『大日本史料』では、元文 3 年 11 月 22 日条は稿本である。

³⁰ 大嘗祭の再興は貞享 4 年(1687 年)。

³¹ 管見の限り記録には見出せない。

第一部 『源氏物語』 五節の舞姫の考証

第1章 少女巻の五節

はじめに

『源氏物語』では、「五節」は次の巻に直接にまたは間接に登場する。

花散里、須磨、明石、漣標、少女の各巻

これらの巻では筑紫大弐の娘で元の五節舞姫が登場する。花散里巻で中川あたりの女と歌の贈答を交わす光源氏が「この程度（中流身分）の女だったら、筑紫の五節がかわいかったなあ」（新編②155頁）と回想することによって、これより以前に五節の折に筑紫献上の舞姫と関係があったことが明かされている。なお、光源氏がこの舞姫に懸想する場面は描かれてはいない。そして須磨巻では、源氏が須磨に謫居していた折、この女が、京へ帰任する父、太宰大弐に従って上京する道すがら、須磨の浦で琴の音を耳にして歌を送り³²、源氏は返歌する（新編②204-205頁）。この五節については須磨以外にも明石（新編②275-276頁）、漣標、少女の各巻に登場して、歌を交わすこともある。漣標巻では大弐の娘は光源氏が忘れられずに、親の持ちこむ縁談に耳を貸さなかったことが描かれる（新編②299頁）ので、結局独身を通してしまったようである。

少女巻

五節に関しては、この巻が中心である。惟光の娘が光源氏の献上する舞姫となる。光源氏の嫡男の夕霧は、幼なじみの雲居雁との仲を引き裂かれて失意のなかで惟光の娘を見初めて恋文を送る。太政大臣となった光源氏が贅を凝らした舞姫一行を送り出す。中宮から童女・下仕たちの衣装が届けられる。参入の日の随行者たちの衣装は花散里が用意した。舞姫だけでなく童女・下仕、参入の随行の人たちに至るまで衣装を調べたりするのだから献上各家の負担は大きい。この年の新嘗祭は、前年が諒闇によって停止されていたので、ことさらに華やかに行われ

³² 筑紫の女性たちは大弐の船を離れて、浦伝いに逍遙してゆく設定にはしてあるが、海辺から入った山の方に住まう光源氏の琴の音が聞こえるというのは現実的には無理な話である。但し、本文にこの時点で光源氏が琴を弾いている描写はない。

る。特別に舞姫はそのまま宮仕させるとの仰せがあったので、公卿も実子を出すという³³。献上各家、舞姫の支度も競い合うなか、光源氏も献上の舞姫に従う童女・下仕も選りすぐった。源氏の舞姫（惟光の娘）も実家でしっかり舞いも練習させて、夕方に光源氏の二条院³⁴から宮中へ出発してゆく様が描かれている。

常夏巻

この巻には内大臣の外腹の娘の近江の君に仕える侍女に「五節の君」という若人が登場する。近江の君が内大臣邸に引きとられてから、はしたないさまで双六を打つ時の相手をした「されたる若人」（新編③242頁）と描かれている。これは、かつての五節の舞姫だったことからの呼び名なのだろう。かつての舞姫が若い女房となっていて不思議はない。

幻巻

幻巻は光源氏の物語の最終章も終わり近く、光源氏が身边を整理していよいよ出家しようというところである。源氏の心は寂寥であっても、世の中は移ってゆく。紫の上が秋 8 月 14 日に亡くなってから 1 年が過ぎ、11 月になって、また華やかな五節の季節がやってきた。夕霧の息子たち（2 人）が童殿上して光源氏のところに挨拶にやってきた（新編④545頁）。雲居雁の兄弟たちである頭中将と蔵人の少将が小忌衣を着用してやってくる。若かった日の五節の思い出が、ふと走馬灯のように光源氏の脳裏をよぎる。平安時代の殿上人たちにとって五節とは毎年の節目で、思い出と結びつく一大行事であったのだ。

総角巻

総角巻では、臨終近い大君に宇治で寄り添う薫は、その日、京の宮中で行われているはずの豊明節会を思い起こす（新編⑤324頁）。豊明節会の華やかさの対極にある宇治の吹きすさぶ風と響き渡る読経の声で、宇治の切迫した状況を際立たせる材料に豊明節会を使っている。

以上の巻に五節の文字が見えるが、この中で五節行事が直接に登場するのは少女巻のみである。少女巻の五節については、先行論文も 2～3 篇ある。しかし、少女巻の五節について、物語の中での位置づけ、その政治的意義については、これまで研究されてこなかった。高橋麻織の最近の優れた著作である『源氏物語の政治学』（2016）においても、この五節は扱われていない。そこで本論文では、光源氏の少女巻における舞姫献上を子細に検討して、少女巻における五節献上の政治的意義を明らかにする。

³³ 紫式部の生きた時代、公卿は通常、実子を舞姫には出さない。

³⁴ 六条院はまだ出来ていない。六条院の完成は少女巻ではあるが、この五節の翌々年の 8 月である。

第1節 太政大臣光源氏の献上

少女巻に「大殿には今年五節を奉りたまふ。何ばかりのいそぎならねど」³⁵（新編③58 頁）という文がある。この年は大殿、つまり光源氏が五節舞姫を献上した。この時、光源氏は33歳でこの秋に太政大臣に就任したばかりで、嫡男夕霧は12歳でこの年の春元服して、六位にとどめられた。冷泉帝は15歳である。光源氏の舞姫となるのは光源氏の乳母子³⁶である惟光の女である。舞姫は公卿と殿上人から新嘗祭は4人、大嘗祭の年は5人献上されるが、この年は新嘗祭だから舞姫は4人である。本文に「按察大納言、左衛門督、上の五節には、良清、今は近江守にて左中弁なるなん奉りける」（新編③59 頁）とあるので、他の3人の献上者は、按察大納言、左衛門督と光源氏の腹心の良清である。按察大納言、左衛門督は公卿であるが、源良清は現在は左中弁で近江守であるので、公卿ではない殿上人である。

（1） 光源氏の舞姫は公卿分か殿上分か

（イ） 殿上分・公卿分の区分

光源氏の舞姫は源氏の乳母子である惟光の娘である。ところで、この舞姫は公卿分（光源氏の献上）なのだろうか殿上分（惟光が献上）なのだろうか。「大殿には今年五節を奉りたまふ」との文面そのまま、光源氏大臣の献上すなわち公卿分と考えるのだが、小学館新編は『弄花抄』を引いて「殿上受領分として、惟光を後援する形か」とする。岩波新大系も光源氏が後援するが殿上分だろうという見解を取っている（岩波②310 頁脚注）。『源氏物語の鑑賞と基礎知識——少女』も「殿上人の分として惟光を後援する形か」（針本 2003：133）とする。新潮集成のみが光源氏を含めて公卿3人の献上としている（新潮集成③256 頁頭注）。惟光はこの時、摂津守であり、惟光の摂津と良清の近江は舞姫を献上する殿上受領として適切な任国である。一条朝から三条朝の史実の殿上受領分献上者の任国（前司を含む）は、わかっている限りでは、越後、摂津、近江、伊予、但馬、駿河、伊予、摂津、尾張、丹波、三河、甲斐、大和、摂津、備中、甲斐、備前、備後であったという（佐藤泰弘 2009）。荘園などの増加で大・上・中・下の等級の国々の内情は変わってきており、参議が権守を勤める国々（参議兼国）が実収入の多い「熟国」と考えられていた。宇多朝以降、平安時代を通して第一級の国と考えられていたのは、近

³⁵ 少女巻内の諸本間の異同については、内大臣の異母兄弟を「左兵衛督」とする（後述）以外には、大局に影響する異同は認めなかった。

³⁶ 乳母子が乳兄弟であるとは限らない。

江、播磨、美作、備前、備中、伊予、讃岐の8カ国。後に、丹波、備後、周防、越前が参議兼国に加わった。しかし惟光が摂津守であったからといって、惟光自身が五節の定めにおいて献上者となったとはいえない。「殿の舞姫は、惟光朝臣の津の守にて左京大夫かけたるむすめ、容貌などいとをかしげなる聞こえあるを召す」（新編②59頁）とあり、惟光の娘を舞姫に召したのは殿すなわち光源氏である。史実では、献上者を定める五節の定めは遅くとも10月初旬までに行われる。上の五節³⁷の献上者を定める時は、初めから女子のあるものが選ばれて蔵人を通じて仰せが下される。惟光は否応もない蔵人からの伝達ではなく、光源氏の要請によって「からいこと」（困ったこと）と不満げに娘を舞姫に出している（新編②59頁）。

惟光娘を光源氏の公卿分と考えるもう一つの理由に良清との兼ね合いがある。この年のもう1人の殿上受領分を献上するのは同じく源氏の側近の源良清である。良清は、源氏の須磨退去にも従い、苦楽を共にしてきた長年の家人である。惟光娘が惟光自身の献上する殿上分だとすると、惟光娘だけへの肩入れは、良清に対してあまりに公平を欠いた処遇だろう。惟光の献上を光源氏が後見したという見解の背景は、事典・概説書などに、新嘗祭の舞姫献上者は公卿2人、殿上人2人とあるところからで、少女巻の公卿分2人分が按察大納言と左衛門督で、殿上は近江守良清がいるので、近江守良清と好対をなす摂津守惟光の娘を2人目の殿上分とする員数合わせから来ているのではないかと推測した。

しかし、公卿分と殿上分が2:2であるというはっきりした規定はなく、公卿分の足りないところを殿上人が補うというのが元々の形だったから、序章（6）に一部を挙げた三上の列举（三上2001）や、佐藤泰弘の殿上分と公卿・后妃分に区分けした献上者リスト（佐藤泰弘2009）などではっきりするように、公卿献上者と殿上分献上者の人数はまちまちである。公卿2人、殿上（後には殿上・末殿上にかかわらず受領）2人に定まるのは光源氏の時代より後のことで、『源氏物語』の時代に、公卿3人に殿上1人の献上は決して異例ではなく、少女巻の公卿分3人は物語ゆえの創作ではない。

『源氏物語』本文には「按察大納言、左衛門督、上の五節には、良清、今は近江守にて左中弁なるなん奉りける。みなとどめさせたまひて、宮仕すべく、仰せ言ことなる年なれば、むすめをおのおのたてまつりたまふ」（新編③59頁）に続いて「殿の舞姫は、惟光朝臣の（中略）むすめ、容貌などいとをかしげなる聞こえあるを召す」（新編③59頁）がくるので、殿の舞姫は殿上分である良清の後に書かれているのだが、これは殿の舞姫が殿上分であることは意味せず、按察大納言、左衛門督、良清と光源氏以外の献上者をまず書いてから、読者にとっても一番の関心事である光源氏の舞姫を続けたもので、その後の展開を導き出す配置であろう。この時代の日記等の記載では、①上の五節、②公卿の五節、が一般的である。光源氏の舞姫だけが

³⁷ 殿上の五節とも言い、弁官や殿上受領が献上する。

実子でなかったが、一人娘である明石の姫はこの年わずか5歳の幼女だったから光源氏の舞姫が非実子となることは世間的にも納得される。

(ロ) 舞姫の出立場所から

さらに、惟光娘が光源氏献上の舞姫であったということは舞姫参入の行列の出立場所からも考えられる。少女巻では、惟光の娘は惟光の屋敷でみっちり教習を受けた後、内裏参入当日に光源氏の二条院に迎えられて、ここから行列を仕立てて内裏へ向かっている。実子でない舞姫が献上者の自邸から出立することは、この時代の有力公卿であった藤原実資の例でも確認できる。実資は数回献上した記録があるが、実資の舞姫は、配下の受領層の娘だったが、内裏参入に先立って一度実資邸へ迎えられている。『小右記』には以下のようにある。

a. 「先遣自車令迎取舞姫<中務少輔遠高女也>」(永祚元年[989年]11月12日条)。

b. 「遣余車令迎舞姫<称備前守相近女者也>」(長保元年[999年]11月22日条)。

上記2例では何れも場合も実資の車を遣ってまず、舞姫を家に迎えている。

c. 「故好任朝臣女今夜於家令着裳、依可為五節舞姫」(万寿2年[1025年]11月2日条)。

万寿2年の献上には先立って右大臣だった実資は自邸で着裳を行っている。

惟光自身の献上なら、娘が五節参入のために二条院にやってくることはなく、夕霧との出会いは生まれなかった。物語展開上からも、惟光娘は光源氏献上の舞姫で、二条院で夕霧と出合わせ、五節の宮中でも、ひとときわ輝いている必要があったのである。

以上の諸点から、少女巻の惟光娘は、光源氏が惟光の献上を後見したのではなく、太政大臣光源氏自身の献上の舞姫と考える。公卿分と殿上分では微妙な差があり、例えば、童女の装束について「ずらう(受領)などはひらぎぬ(平絹)にてあるべきなり」(『満佐須計装束抄』)というように同じような衣装でも材質などに多少格差があったらしい。(もっとも、「決まりがあった」ということと、「それが守られていた」ということはまた別のことではあるが。)豊明節会での五節舞で帝の御前に整列するにせよ、舞台に上るにせよ、上位者献上の舞姫が帝に近い方の位置に立つことはいうまでもない。「件舞姫立於御并左右間、上臈二人当御座間<西上>、次二人各立其東西間」(『江家次第』神道大系495頁)とあるので、主上に対して北面して一列に並ぶと西から身分的に3-1-2-4の順に列立することになる。これは舞台を建てない場合を想定しているが、『九条年中行事』十一月辰日賜宴事の割書きにも「而仁和以来必不用舞台」(仁和以来³⁸必ずしも舞台を用いず)とある。

物語上は、夕霧に懸想させる舞姫は、いやがうえにも華やかなスポットライトを浴びなけれ

³⁸ 仁和年間は885年～889年。

ばならない。惟光娘は太政大臣の献上の姫として最高の場と栄誉を与えられたと解釈したい。

（２） 大臣の献上とは

舞姫献上は昇進を機に命じられることが多かったので、この時代の有力公卿は官人人生で 2 回以上献上している者が多く、道長、実資、公季はいずれも 3～4 回程度舞姫を献上している。献上年と昇進の関係は既に三上啓子（2001）がまとめている。大臣にまで昇った道長、公季、実資の献上とその時の職官を三上のリストから拾えば、次のようになる。

＜道長、公季、実資の例＞

藤原道長 （極官 太政大臣）

永祚元年（989 年） 権中納言（前年正月非参議より）

長徳元年（1037 年） 右大臣 （6 月任）

長和 4 年（1015 年） 左大臣 （参議朝経の服による替え）

藤原公季 （極官 太政大臣）

長徳元年（995 年） 大納言 （6 月任）

長徳 4 年（998 年） 内大臣 （前年 7 月任）

治安 3 年（1023 年） 太政大臣（治安元年 7 月任 隆家の障による替え）

藤原実資 （極官 右大臣）

永祚元年（989 年） 参議 （2 月任）

長保元年（999 年） 中納言 （正月正三位叙）

寛弘 8 年（1011 年） 大納言 （寛弘 6 年任 五節は中止）

万寿 2 年（1025 年） 右大臣 （治安元年〔1022 年〕任）

長暦 3 年（1039 年） 右大臣

一言でいえば、献上は、まず新任の参議、次いで新任の権中納言が候補になる。藤本勝義は、献上者には「蔵人頭あるいは蔵人経験者が率先して選ばれている」³⁹（藤本 2008a）として、

³⁹ 紫式部の時代、蔵人や蔵人頭は上級貴族への登竜門であったから、新任参議や新中納言に蔵人経験者が多いのは当然だろう。さらに、藤本は献上者選定にあたって蔵人頭・蔵人の関与が大きかったと考える。し

三上論文を批判し、光源氏の舞姫献上も太政大臣昇進とは無関係とする。その根拠として、三上論文が太政大臣の献上例をあげていないことと、延喜 19 年（919 年）から 100 年間に 1 例だけある太政大臣の献上例である天慶 8 年（945 年）藤原忠平の場合⁴⁰は、承平 6 年（936 年）の太政大臣就任から 9 年も後のことだったからとする（藤本 2008b）。しかし、藤本自身が挙げている献上者リストにもあるように、太政大臣忠平は天慶元年（938 年）に献上している⁴¹。参議は 7 人も 8 人もいて⁴²、入れ替わりも多かったことに比べて、太政大臣は則闕の官であり、圧倒的に人数が少ないし、新任参議でもすべてが献上者になってはいないことや、太政大臣は別格の役職であったことも考えれば、太政大臣の献上が僅少でも不思議はないと考える。また、本論文第三部第 1 章の穩子の舞姫献上で考察するが、天慶元年（938 年）は任大臣の見返りというより、天変地異の続くなか、他に献上を命じることのできる者がなく、執政の責任で朝廷を支えて頑張った献上であろう。また、上記の複数回献上者のリストからも分かるように長和 4 年（1015 年）の左大臣道長の献上は参議朝経の服による替え⁴³であり、治安 3 年（1023 年）の太政大臣藤原公季の舞姫献上は隆家の障りによる替えであった。大臣はむしろ、ひとたび決定された献上者に障りができた場合の替わりの献上を引き受ける予備的な位置づけのように見える。時の権力者として、より短い期間でも準備が可能であったであろうし、大臣とは宮中行事の催行を恙なく完遂すべき責任を負った地位でもあった。

少女巻の光源氏の献上は太政大臣昇任ゆえの献上だろうか。光源氏の太政大臣就任は何月のことと明記はされていないが、時雨の季節より少し前と考えられる⁴⁴。舞姫献上者は多くの場合 9 月中に決定されることを考えると、新太政大臣就任前に既に舞姫献上者が決定していた可能性も高い。しかし、薄雲巻では、光源氏 32 歳の秋、出生の秘密を知った冷泉帝が光源氏に太政大臣就任を促しているのは秋の司召の前である。今回も、司召の前に冷泉帝の要請があつて、その時点で光源氏が受けていた可能性もある。しかし舞姫献上者を誰にするか、数えて 15 歳の冷泉帝が 1 人で決定したとは考えがたいので、冷泉帝が献上を命じたというよりは、秘密の息子冷泉の盛儀のために自ら買って出た献上と解釈する。いな、本論文で考証するように、そもそも、舞姫を宮仕させようというのも息子冷泉帝のための光源氏の発想であり、献上者を選んだのも光源氏その人であると考え。そして、新太政大臣就任は光源氏の舞姫献上を世間的

かし、天皇が蔵人頭あるいは他の誰にでも意見を求めることは舞姫献上だけではない。天皇が幼少の時は、蔵人頭主導ではなく、摂政の決定事項であろう。

⁴⁰ 『貞信公記』からとする。

⁴¹ 『本朝世紀』天慶元年 11 月 22 日条「太政大臣家舞妓故伊予介源朝臣相国女」。

⁴² 例えば天慶元年には参議は 7 人。『公卿補任』による。

⁴³ 10 月も 19 日になっての交替命令だったので、道長は憮然として他の貴族たちに協力を求めている。

⁴⁴ 本文で、任太政大臣の大饗が終わってゆっくりしたころ時雨の季節になっている。「所どころの大饗ども果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨打ちして萩の上風もただならぬに」（新編③34 頁）とある。

に「あってよいこと」と受け止めさせるには役立ったのであろう。光源氏も太政大臣就任以前に何度か献上しているはずで、その意味では経験もあり、「何ばかりの御いそぎならねど」（新編③58頁）と余裕があるのである。

第2節 童女・下仕

光源氏の舞姫は決まった。しかし、内裏へ行くのは舞姫だけではない。舞姫には他に童女・下仕、かしづきの女房が随行する。特に、童女と下仕は、「童女御覧」と称される天覧があるので美しい者が必要である。そこで、「御前に召して御覧ぜむうちならしに、御前を渡らせてと定めたまふ」（新編③60頁）とあるように、「童女御覧」に出す童女・下仕たちを選定する。童女御覧は、円融朝新嘗祭から始まったとされる。童女は殿上人たちが扶持して一人一人御前に進み、扇を置いて顔を挙げた。『代始和抄』には「童女御覧といふ事は卯日の事なり。舞妓の介錯のわらはづかへを朝所の広庇に召れて天覧ある事也。主上は簾中に出御あり。殿上人等これを扶持す。仰によりてをののかざしたる扇ををかしむ。しかるべきをば召をかれんためなるべし」（群書類従本 363 頁）とあり、『雲図抄』には、童女は承香殿から階上を進み、下仕は庭上を進む図解がある（群書類従本 314 頁）。

光源氏は童女・下仕の選定にかかったが、二条院の童女・下仕が皆優れているので、「いま一ところの料を、これより奉らばや」（新編③60頁）と、二条院から舞姫もう1人分の童女・下仕を出したいものだなどと冗談を言っている。現実の童女御覧の奉仕は大変で、本論文の第二部第3章第1節で述べる藤原兼実の童女御覧勤仕からわかるように、権勢家にとってさえ、さらに負担のかかる行事だった。従って、光源氏のこの余裕は物語上の演出だろう。すなわち、「所どころいどみて、いといみじくよろづを尽く」（新編③59頁）す他の献上者たちは、競って美しい童女を調達しようと奔走しているはずであり⁴⁵、そのような状況の中、素晴らしい童女を何人も抱える光源氏太政大臣邸の余裕ぶりが再確認されているのだ。かしづきについては、少女巻では「かしづきなど親しう身に添ふべきは、いみじう選りととのへて、その日の夕つけてまいらせたり」（新編③60頁）とあるので、惟光の家でしっかり選んだ女房を連れてきたことがわかる。但し、かしづきの女房たちの天皇の御覧はないので、日ごろから惟光娘が安心できるような気心の知れた女房を選んだだろう。一方、天皇の御覧になる童女・下仕は太政大臣家の最高級の女を揃えようと、二条院で、よりすぐりの童女・下仕を用意するのだ。

舞姫は連日衣装を替えた。舞姫には童女・下仕、かしづきの女房たちが従ったが、これらも日々に応じた衣装を用意しなくてはならなかった。なお、五節の舞姫は近年の大正・昭和天皇即位の礼にあたって復興された大嘗会五節舞などから、どうも赤色系統のイメージがあるが、豊明節会（五節舞の本番）では唐衣は青系統であり、赤紐をかけ、小忌の装束に近い⁴⁶。衣装

⁴⁵ 11世紀に藤原明衡によってまとめられた書簡集『雲州消息』52下の末（第193通）には、その年舞姫献上をすることになった左近中将が、治部卿に美しい童女の貸出を依頼している書簡が載せられている（群書類従「消息部」）。書き下しは『新猿楽記・雲州消息』にある（重松明久 1982：234-235）。

⁴⁶ 平成の大嘗祭「大饗の儀」で披露されたものを再現したという国立劇場公演の「五節舞」（2018年3月上演）では表着の色は緑となっている（「国風歌舞公演、宮内庁・東儀博昭首席楽長に聞く」）。

については、鳥居本幸代が『西宮記』、『小右記』、『兵範記』、『雅亮装束抄』、『長秋記』の記述を比較一覧にしている（鳥居本 1986）。また、吉村佳子の論文からも豊明の日の舞姫衣装が確認される（吉村 1997）。

貴族たちは、献上者に衣装や道具を送って助け合った。寛弘 5 年（1008 年）の五節では中宮彰子は献上者である侍従宰相の実成に舞姫の装束などを、右近宰相中將の兼隆にはリクエストにより五節のかづらを送っている（『紫式部日記』新編 175 頁）。

光源氏の童女・下仕の装束は中宮から下賜された⁴⁷。一般の貴族にとっては中宮からの賜物は栄誉であり、特に願って受ける者もあるが、光源氏にとっては中宮秋好は養女であるから、当然のように受け止める。中宮の養父の貫禄である。

⁴⁷ 「中宮よりも、童、下仕の料などえならで奉れたまへり」（新編③59 頁）とある。

第3節 舞姫

(イ) 惟光娘の内裏参入

惟光娘の舞姫は夕方に二条院に到着。準備万端整えて、内裏へ向け出発する。正式な参入は儀礼も必要で費用もかかることから、略儀が好まれるようになり、内々に参入してしまうケースが増えていったが、少女卷では、「五節の参る儀式は、いづれともなく心々に二なくしたまへるを」(新編③62頁)とあるから、密参はなく、舞姫献上者4人全員が、儀礼を伴う正式な参入を用意したことにしたようである。献上者たちの意気込みが知られるところでもある。

参入の日は子の日または丑の日で、舞姫一行は内裏の常寧殿に設けられた五節所に入る。里内裏の場合でもひとつの殿舎が常寧殿に擬せられる。元々は舞姫たちは子の日に参入して舞師から教習を受け、丑の日の夜に仕上げの帳台試が行われた。『小右記』永観2年(984年)11月18日(甲子)条には「殿上五節参入、影舒女也、自余不参」とあり、影舒の娘だけが正式な参入をしたが、「自余不参」という言葉から他の舞姫も子の日の参入を期待していたことが窺われる。『御堂関白記』寛仁2年(1018年)11月19日(丁丑)条には「戌亥時五節参入、即御舞殿、事了帰給。子時」とある。丑の日の夜8時か9時ごろに参入して、すぐ、帳台試に出御があつて、夜中の12時ごろには終わったのだろうが、これでは教習の時間があつたとは考えられない。佐藤泰弘(2009)は、舞姫の参入を精査して、子の日の参入が丑の日となってゆくことを指摘しているが、『紫式部日記』の寛弘5年(1008年)の五節舞姫参入も丑の日ではあつた⁴⁸。このころには、常寧殿での帳台試は、既に自邸でしっかり練習してきた舞の確認と、4人あるいは5人の舞姫たちの舞合わせとなっていた。この帳台試には、主上は数人の近習と共に直衣に指貫の姿に身をやつして練習風景を見に来るのが恒例化していた。少女卷でも、光源氏に本論で論証するような意図があれば、光源氏は当然、冷泉帝に帳台試出御を進めていたはずであり、自身も随行を予定していたと考える。

さて、二条院からの参入の行列であるが、史実として参考になる好例は、藤原実資の献上がある。永祚元年(989年)11月12日丑の日、新任参議実資の舞姫(中務少輔の娘^{こがねづくり})は金作の檳榔毛の車に乗り、他の檳榔毛5両、網代車2両を従えて、五位10余人を含む20余人の前駆に護られて出立した。また、実資の万寿2年(1023年)の献上にあたっては、舞姫が実資の車を使い、檳榔毛の車5両に、かしづきの女房10人と童女2人が分乗、網代車2両に下仕4人と上雑仕などが乗った。金作の牛車は勿論、これだけの数の女性たちの乗るしかるべき

⁴⁸ 『紫式部日記』に「五節は二十日にまゐる」(新編175頁)とある。寛弘5年11月20日は丑の日であつた。

牛車の調達も献上者側の責任である。

『源氏物語』でも、惟光娘は、花散里らが整えた装束に身を包んだ童女・下仕を従え、かしづき女房たちに守られて、おそらくは金作の牛車に乗車して、10両前後の麗々しい檳榔毛の車や、下仕4人と上雑仕などを乗せた網代車を連ねて、多数の前駆や車副に守られながら朔平門を目指してゆくのである⁴⁹。

（ロ） 舞の教習

舞そのものは内裏参入後の子丑の日だけで教習できる程度の簡単な舞だったというのが、公儀の行事で天皇始め大勢の人々の前で舞うのだから、献上各家は自邸に師を招きしっかり練習させて常寧殿に参入させた。『小右記』には実資も自邸に居た舞姫経験者に就かせて内々に「日来」みっちり教習させていた記述がある（万寿2年〔1025年〕11月9日条「家有旧五節、仍日来内々令習」）。大師だけでなく、小師も活躍した。献上各家は大師や小師に禄を出したが、禄の他にも舞師は調度品などを持ち帰ってしまうこともあったらしい（『小右記』長元5年11月の五節）。この他、時代は下るが大治2年（1127年）藤原宗忠が自邸に師を招いて教習させた際、房装束が持ち去られて慄然としている⁵⁰。舞師たちの禄事情については、服藤（2015）に詳しい。

少女巻でも惟光娘は「舞ならはしなどは、里にていとようしたてて」（新編③60頁）と惟光邸（里）でみっちり教習を受けていたことが書かれている。

惟光娘は二条院に到着後、ぐったりして伏している⁵¹。その容姿を夕霧が垣間見して、魅かれて声をかける。惟光娘が舞姫となって、二条院に来なければ、この出会いはなかった。

華やかでモテモテの舞姫たちであるが、中級下級貴族の若い娘たちが重い衣装を着け大勢の前で緊張を強いられたから、既に本論の序章（5）「舞姫の現実」に記したように、気絶したり、病気になって参入できない舞姫も頻出した。実資の永祚元年の献上舞姫の参入は戌の終わりとあるので、夜9時近く、長保元年（999年）の献上時も亥始めとあるので、やはり夜9時過ぎの参入であった。すると、帳台試はずいぶん遅い時間の開始となる。惟光娘は今夜だけでもまだまだ試練が待っている。

⁴⁹ なお、小学館新編③の「参りの夜」の頭注（新編③59頁）に、「天皇が帳台に出て童女を見る『帳台の試み』がある」とあるが、これは誤りである。「帳台試」は舞姫の行事であり、童女御覧とは別物である。常寧殿に特に天皇の座は設けられない。当初は「のぞき見」である。やがて、天皇の出御は恒例化してゆき、大師の局に座が設けられるようになった。一方、童女御覧ははじめてから天覧行事であり、卯の日に行われる。童女御覧は大嘗祭には行われたいとする注や辞典などもあるようだが、大嘗祭でも恒例化する。

⁵⁰ 本論第三部第3章『『平家物語』の時代の献上者たち』の大治2年（1127年）権大納言藤原宗忠の献上の項を参照。

⁵¹ 「（惟光むすめは）なやましげにて添ひ臥したり」（新編③61頁）。

第4節 舞姫たちの宮仕

(1) 宮仕

前年は藤壺の崩御による諒闇で五節は行われず、2年ぶりの行事ということで、貴族たちは張り切った⁵²。『紫式部日記』の寛弘5年(1008年)の五節に「にはかにいとなむつねの年よりも、いどみましたる聞こえあれば」(新編175頁)とあるので、寛弘5年の五節が少女巻の五節のこの表現のヒントになったのだろうか。(そうであるならば、少女巻の執筆は寛弘5年の11月以降ということになるのだろうか。)寛弘5年の五節は諒闇明けなどではなかったが、敦成親王誕生の慶事で、大変華やいだ気運があったのだろう。寛弘5年の新嘗祭の舞姫献上者たちは、公卿が新任参議の藤原兼隆と藤原実成、殿上が尾張守藤原中清と丹波守高階業遠だった。兼隆はその年の正月28日に24歳で従三位で参議となっていた。実成は34歳で同じくその年の正月28日に正四位下で参議となっていた⁵³。

ところで少女巻のこの年の五節は特別なものだった。「按察大納言、左衛門督、上の五節には、良清、今は近江守にて左中弁なるなん奉りける。みなとどめさせたまひて、宮仕すべく、仰せ言ことなる年なれば、むすめをおのおのたてまつりたまふ。殿の舞姫は、惟光朝臣の」(新編③59頁)とあるように、今年は例外的にすべての舞姫たちは宮仕することになった。光源氏の舞姫の惟光の娘以外には、公卿では按察大納言と左衛門督が、殿上分としては近江守で左中弁である源良清が献上する。宮仕させるという仰せごとがあったので、公卿たちも実子を献上するというのだ。

(イ) 宮仕の意味するところ

少女巻で、舞姫たちがとどめられてする「宮仕」が意味するところは何なのか。

古代、少なくとも宇多朝ごろまでは、五節の舞姫は帝と共寝して、キサキとなる例があり、公卿は舞姫を後宮選納の手段と考えて、娘を綺羅を磨いて差し出した。結果として献上される舞姫たちによってキサキの数は膨れ上がったとも言われる。醍醐朝のころには、舞姫たちは「燕寝」に預かることなく虚しく家に帰る⁵⁴ようになって、公卿たちの実子献上は途絶えたと考え

⁵² 「上人の心地も常よりもはなやかに思うふべかめるとしなれば、所どころいどみて、いといみじくよろづを尽くしたまふ聞こえあり」(新編③59頁)とある。

⁵³ 『公卿補任』による。

⁵⁴ 三善清行「意見十二箇条」第五条「減五節妓員事」による。

られている。その後も、大嘗会の舞姫たちは叙位に預かったが、新嘗祭には叙位もなく、莫大な費用のかかる舞姫献上は忌避されるようになった。三善清行はこの状況を憂慮して、「毎年同じ舞姫に勤めさせ然るべき俸給を与えるよう」提言を奏上した（「意見十二箇条」第五条「減五節妓員事」）が、実現された形跡はない。「寛平御遺誡」（逸文）に、公卿は「雖非其子、必令求貢」（その子に非ずといえども必ず貢がしむ）とあるので実子でなくても構わなかったが、殿上分は女子のあるものが選ばれた。『年中行事抄』に「蔵人式云」として、「但殿上舞姫。召仰四位五位有女子之者」とある。「女子ある者」が選ばれたのだから殿上分は実子と規定されていたと解釈される。

舞姫の入内は紫式部の時代には既に行われてはいない。しかし、知識としては、衆人の知るところであったと考える。『住吉物語』という物語があるが、現存本の『住吉物語』では女主人公の父左衛門督中納言は娘を五節の舞姫として入内させるつもり⁵⁵で、何か月も前から準備をはじめることが、大きな筋立てになっている。『住吉物語』の古本（原作）の成立は『源氏物語』以前の『落窪物語』の成立前後といわれており、『源氏物語』の中にも『住吉物語』は登場している。六条院に引き取られた玉鬘が、自分の数奇な運命を『住吉物語』の女主人公に重ね合わせる場面である⁵⁶。古本住吉は散逸して現在に残っていないのだから、現存住吉がどの程度まで古本住吉と共通なのか確定はできない。古本住吉と現存住吉の関係に関しては多くの研究者が論を重ねてきているなか、上坂信男は「平安朝に通行した、いわゆる古『住吉』はその本質においても現存本とあまり隔たりのないものとみて差支えないようである」（上坂 1981：82）とか、『住吉』は平安朝の古い俤を伝えているから、構造の骨格に触れるような重要事象において変改を加えることができなかったものとする（上坂 1981：88）と述べている。また、稲賀敬二も、人物、土地などに相違はあるものの「現存本は古本の筋を大体において踏襲しているものと見て大過はない」と述べる（稲賀 1978：56）。もし、舞姫入内が古本住吉になれば、そこから時代が下り、舞姫入内の記憶がますます薄れていった時点で、改編者が、古本にはない舞姫入内の慣例を、全く新しく考えついて、読者も共通理解のあるものとして、それを物語の大きな柱である女主人公の入内の予定に利用しようとするだろうか。女主人公の舞姫入内が大きな柱として古本住吉にあったからこそ、現存住吉にも受け継がれたと考えるのが自然であろう。すなわち、舞姫が入内した習慣があったということは『住吉物語』から『源氏物語』のころには、作者と読者に共有された知識であったと考える。

⁵⁵ 中納言の娘の入内については、『補注 1』「中納言の娘が女御となった例」を参照。

⁵⁶ 蜩巻（新編③210 頁）にある。「住吉の姫君のさし当たりけむをりはさるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ」で、小学館新編の現代語訳では、「住吉物語の姫君が、いろいろなめにあったその当時はいうまでもなく、現在でもやはり評判は格別のようなだが、主計頭がすんでのところで姫君を盗み取ろうとしたとかいう話などを、あの太夫監の忌まわしさに思ひ比べていらっしゃる」である。

(ロ) 少女巻の冷泉後宮の現況

では、ここから『源氏物語』少女巻における公卿の実子献上と宮仕を考証して、この「宮仕」の政治的意義を探る。

濡標巻で冷泉帝は 11 歳で元服そして即位した。即位は 2 月で⁵⁷、諒闇でもないので大嘗会は即位年となる。11 歳であるから実質的な婚姻にはまだ早かったが、即位の年、光源氏のライバル権中納言（薄雲巻で大納言に昇進）の娘が入内して弘徽殿女御となった。女御は 12 歳で、冷泉帝も「よき御遊びがたき」（新編②322 頁）に思った。また、先帝の後腹の兵部卿宮は濡標巻で娘の入内を望んでいたが果たせず（新編②301 頁）、少女巻にはなんとか入内している。入内準備中の兵部卿宮の娘を、藤壺宮は「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを」（新編②332 頁）と言っているので、弘徽殿の女御と同じぐらいの年齢だったことが分かる。少女巻初めて内大臣光源氏養女の秋好が弘徽殿女御を抑えて立后を果たした。そして、少女巻では冷泉帝は既に 15 歳になっていた。

一方史実では、一条天皇に第一子脩子内親王が誕生したのは長徳 2 年（996 年）だから天皇 17 歳の時だった。『源氏物語』の冷泉帝もそろそろ子作りのできる年となっている。少女巻時点で冷泉の後宮にいるキサキたちは秋好中宮、弘徽殿の女御、王女御の 3 名である。

a. 秋好中宮－光源氏の養女

前坊と六条御息所の間の遺児で、御息所の没後、光源氏が養女にして冷泉帝に入内させた。少女巻で、五節の少し前に、弘徽殿の女御を抑えて立后したばかりである。24 歳で出産適齢期だが、冷泉帝が幼かったせいも大きだろうが、まだ皇子女は挙げていない。

b. 弘徽殿の女御－内大臣の娘

女弘徽殿の女御は、濡標巻で父親が権中納言の時に、祖父摂政太政大臣の養女の格式で 12 歳で入内した。冷泉帝は 11 歳だったから格好の遊び相手となった。父親はこの五節の少し前にさらに内大臣に昇進した。紫式部の時代当時の内大臣たちは、形式的な席次は大臣の末席でも、実際は次期の政権担当者と目されていたから、内大臣の娘が後宮で占める地位は重いものだった。内大臣は常置の官ではないので例は少なく、以下が一条朝を含んで道長の息子藤原教通ま

⁵⁷ 即位が 7 月より後だと大嘗祭は翌年になる。

でのすべての内大臣である。平安以前の初期の内大臣とは性格も異なっていたので、10 世紀（901 年～1000 年）という括りで観れば、以下の下線で示したわずか 5 人を数えるだけである。

<教通までの内大臣たち⁵⁸>

宝亀八年（777 年） 内大臣 従二位 藤原良継（62 歳）正月 2 日任内大臣。

宝亀十年（779 年） 内大臣 従二位 藤原魚名（58 歳）正月 1 日任。

昌泰三年（900 年） 内大臣 正三位 藤原高藤（63 歳）正月 28 日任。

天禄三年（972 年） 内大臣 従三位 藤原兼通（48 歳）11 月 27 日任。

天延 2 年（974 年）2 月 28 日任太政大臣。

正暦元年（990 年） 内大臣 正二位 藤原道隆（38 歳）左大将。5 月 8 日関白。26 日摂政となる。

正暦二年（991 年） 内大臣 正二位 藤原道兼（31 歳）9 月 7 日任。

長徳元年（995 年）関白（「七日関白」）。

長徳元年（995 年） 内大臣 正三位 藤原伊周（22 歳）3 月 9 日宣旨云 関白病間可行公事云々。

長徳三年（1001 年） 内大臣 正三位 藤原公季（41 歳）7 月 5 日任。

寛仁元年（1017 年） 内大臣 正二位 藤原頼通（26 歳）3 月 4 日任。16 日摂政となる。

治安元年（1021 年） 内大臣 正二位 藤原教通（26 歳）7 月 25 日任。

藤原兼通は天延 2 年（974 年）2 月 28 日内大臣から任太政大臣。道隆は任内大臣の翌年内大臣のまま関白就任、すぐに摂政（それから内大臣を辞す）。道兼は正暦 5 年（994 年）8 月右大臣になり、翌年長徳元年 4 月関白。故右大臣師輔の息子の公季は内大臣の後、右大臣を経て（左大臣は経ずに）太政大臣になっている。道長が権力を掌握し切れていない時期である。

『源氏物語』においても、光源氏が准太上天皇となって太政大臣が空席になると、内大臣が（左右大臣を経ずに）昇進しているし（「藤裏葉」新編③454 頁）、光源氏自身も明石から帰京したのは元義父の太政大臣の権威のもとで、内大臣として政治の実権を握ってきて、少女巻の五節のわずか前に内大臣から太政大臣に昇進した。薄雲巻では、出生の秘密を知った冷泉帝が、光源氏に、元義父の太政大臣が薨去して空いた太政大臣への昇進を勧めたことがあったが、内大臣から太政大臣への昇進というのは特に殿上人たちの疑念を招くような異常な人事ではなかったことが前提としてあった。

高橋麻織は、潯標巻での弘徽殿女御の入内については、光源氏は容認しただけでなく、むしろ積極的に迎えたと考える（高橋麻織 2016 : 49-50）。その時点では六条御息所の遺児はまだ光源氏の養女となっていないので、源氏自身が入内させうる姫（養女）はいなかった。そして有

⁵⁸ 『公卿補任』より作成。

力な家から、特に連合「藤氏」の推す后妃を迎えることは冷泉朝が藤氏の支持を得て安定するのに不可欠な政策であった。これは、また、王女御を入内させ唯一の外戚勢力となりうる兵部卿宮に対する抑えでもあったという主旨を高橋は述べている。その通りであろう。但し、濡標巻では光源氏は政界復帰後日も浅くて、政治基盤も磐石ではない。光源氏自身が手を組んだ元舅で摂政太政大臣の娘の資格で入内する女御を阻止すれば光源氏は孤立してしまう危険があった。

濡標巻では、それなりの意味もあり、また、敢えて元舅一家の対立をさけたのであろうが、少女巻では、状況は変化している。いまや女御も 16 歳、冷泉帝も 15 歳で、この「寄せ重い」弘徽殿女御が第一皇子を出産する可能性も出てきた。冷泉帝の最初のキサキとなり、最も格式の高い殿舎をとり、内大臣となった父を持つ弘徽殿の女御こそは中宮位に最も近いところにあったのだ。弘徽殿を母とする皇子ができれば光源氏から見れば孫息子であっても、それを公けにすることはできない。弘徽殿腹が立坊すれば光源氏の血統に皇位は伝わることになっても、光源氏の没後に外戚として突出した勢力を得るのは内大臣（元の頭中将）一家であり、光源氏の嫡子夕霧の太政大臣は実現しない可能性が高くなる。本論筆者は弘徽殿女御は少女巻では光源氏の頭を悩ます種になっていたと考える。

c. 王女御－式部卿宮の中の君

紫の上の父の兵部卿宮は少女巻では既に式部卿宮となっている⁵⁹。光源氏は須磨下向以来、紫の上の父であるのに、反光源氏の勢力におもねったこの宮を快く思っていない。宮の娘の入内も手伝わなかった。親王は太政官職にはつかないのがしきたりなので親王自身は光源氏家の直接の脅威にはならない。しかし宮の息子たちは源氏となっている。后腹の親王の息子たちであるから、臣籍に降下させられたというよりは、政界での栄達を目標に自ら願って源氏となったのであろう。濡標巻での入内はかなわなかったが、父宮は娘の冷泉帝入内をあきらめなかった。王女御も、弘徽殿女御と同年輩（16 歳位）と設定されているので、こちらもこれから出産年齢を迎える。冷泉後宮では光源氏太政大臣の養女の秋好と内大臣の娘（弘徽殿女御）がときめく状況下で、王女御は入内も立后争いにも後れを取ったが、親王筆頭の式部卿宮の一族と王女御は光源氏家にとっては要注意である。

以上、まとめると、少女巻の冷泉後宮は、光源氏の養女の中宮と内大臣家の弘徽殿女御、そして一步遅れて式部卿宮の王女御がしのぎを削っており、他の貴族たちは娘がいても入内はさ

⁵⁹ 朝顔の姫君の父式部卿の宮の薨去は薄雲巻（新編③453 頁）で語られている。

せ得ない状況だった。

ここで疑問が起こる。『源氏物語』の冷泉帝と次代の朱雀院皇子（「今上帝」）へも貴族の娘たちの女御入内の難しさは読み取れるのに、桐壺帝の後宮に沢山の女御更衣が入ることがなぜ可能だったのか。『源氏物語』は桐壺帝即位前の政権構造については述べていないので、推測するしかない。仮に桐壺帝がかなりの壮年で、かつ皇太子時代が短ければ、まず、親王時代にいた比較的身分の低い妻たちが即位後には更衣待遇となる。立場あるいは即位すれば直ちに有力貴族たちが娘の入内を図る。突出した力を持つ貴族がいなか、あるいはその娘が幼少であれば、有力貴族たちは次々娘を女御入内させることになるだろう。桐壺帝の時代、右大臣娘の弘徽殿女御が他の女御たちより先に入内したとしても、桐壺帝が左大臣を利用しつつ、右大臣への権力集中を牽制していただろうことを考えれば、桐壺帝治世の初期においては、安定した政権確立のために積極的に有力貴族たちから女御を迎え取っていた可能性もあるし、帝の年齢と立太子前後の権力分布によって、女御更衣がたくさんいても不思議ではない状況は考えられる。

一条朝においても、関白道隆の病没のみならず、長徳の変によって嫡子の内大臣伊周が失脚した時点で、それまで定子が独占していた後宮に、公卿たちは娘を入内させることが可能となり、3人の女御が誕生する。長徳2年（996年）、当時はまだ大納言（『栄花物語』は「中納言」と誤記）の藤原公季が娘の義子（弘徽殿女御）を、続いて新右大臣顕光が元子（承香殿女御）を相次いで入内させた。少し遅れて故関白右大臣道兼の娘で、一条乳母の繁子を母とする尊子も御匣殿として後宮入りをして、2年半後に女御宣下を受ける。義子は既に23歳、すぐにも妊娠可能な年齢だった。倉本一宏によればこの時代のキサキたちの初産年齢は21.4歳（倉本2003：101）。顕光の娘、承香殿の女御元子の方は生年不明だが、角田文衛は18歳程度であったと推測する（角田1963：39）。定子の初産（脩子内親王）は21歳の時である。この時点では一条の第一皇子敦康親王はまだ生まれていない。誰にでもチャンスはあった。一条の母詮子は道長ひいきといわれるが、『誰なりともただ御子の出でたまはん方をこそ思ひきこえめ』とのたまはす（『どなたであろうと、御子をお生みになるお方をわたしはもっぱら大切にさせていただきます』とおっしゃられた）と『栄花物語』は伝える（新編①229頁）。この時道長の長女彰子はやっと9歳。道長は、まだ9歳でしかない長女彰子を見ながら、臍をかむ思いではなかったろうか。道長は内覧左大臣にはなったものの、公季娘が第一皇子を生めば政権は内大臣公季の手に落ちた可能性は高かった。顕光のほうも元子が「懐妊」した時は快哉を叫んだはずである⁶⁰。

有力公卿たちにとって娘の入内は一家の浮沈を賭けた真剣勝負であった。たとえ物語の架空の冷泉後宮であっても、この時代の読者は背景に、時代に照らした各家の真剣勝負を見通して

⁶⁰ しかし、月満ちても子が生まれることはなかった。想像妊娠だったとも流産だったともいわれている。

いる。少女巻の冷泉後宮の状況では、年ごろの娘を持つ上級貴族たちが、娘の入内を切望しながら果たせないジレンマの存在は当然読み取っているはずであるから、「宮仕」という仰せを千載一遇の後宮入りのチャンスとして舞姫支度にいそしむ按察大納言と左衛門督の姿を想像してうなずくのである。

（２） 尚侍と御匣殿の可能性

太政大臣と内大臣を憚って、女御入内が難しい中、もし女御入内でなければ、少女巻では、どのような「宮仕」が考えられるのだろうか。

舞姫たちは内裏に「とどめおかれる」という表現からは、華やかな女御入内のイメージはないので、上臈女官の役職を得ての宮中出仕が考えられる。女御入内でなくても、上臈女官として出仕させ、帝の寵を待てばよいのだ。このころ、后妃との境界が曖昧な上臈女官職としては尚侍と御匣殿があった。

朧月夜は女御ではなく尚侍となり⁶¹、朱雀帝の実質女御となった。玉鬘は既婚であったので実務に励む尚侍として出仕したが、未婚だったら実質女御となったと考えられる。冷泉帝は尚侍の職には実務をしっかりこなす人材を期待するというが、玉鬘をとにかく宮中に置いておく言い訳にも聞こえる。玉鬘と髭黒の娘、中の君は他のキサキたちを憚って、敢えて「女御入内」の軋轢をさけて実質女御の尚侍として出仕している（竹河巻、新編⑤102頁）。上級貴族の娘たちが上臈女官である御匣殿や尚侍として出仕するのは恥などではないし、准后妃となった尚侍や御匣殿が正式に女御になる事例は史実においても見られることである。また、有力貴族の娘が東宮妃として入内する際は、即位前には女御宣下は受けられないので、尚侍または御匣殿として入内する例は少なくない。また「七日関白」といわれた関白道兼の娘尊子は、一条天皇の乳母だった母の強い願いによって、父の没後、義子と元子にやや遅れて長徳4年（998年）2月に入内したが、当初は従五位上御匣殿別当で、2年半後の長保2年（1000年）8月20日に女御に昇格した⁶²。彰子より後の道長の娘たちの東宮入内にあたっては、尚侍や御匣殿の役職は、東宮即位後の女御宣下に先立つ后妃へのステップの名誉職となっていた⁶³。

少女巻での舞姫たちの「宮仕」が、五節の夜から帰宅することなくそのまま帝の御寝に侍るキサキをはっきりと意味することではなくても、献上家の意向さえはっきりしていれば、尚侍

⁶¹ 当初は御匣殿で、まもなく尚侍に昇格した。

⁶² 尊子は「蔵（あるいは暗戸）部屋の女御」と呼ばれた。父道兼には大事にされなかったという。

⁶³ 女御宣下を受けるのは天皇のキサキだけであり、「東宮の女御」とは紫式部の時代までは原則「東宮の母女御」をさしている。『源氏物語』の明石の姫も東宮入内後で夫君即位までは「淑景舎」と呼ばれている。後代には東宮の妃を東宮の女御と呼んでいる場合も出てくるが。

や御匣殿で出仕して准后妃になるのは、物語の冷泉朝の公卿の共通認識であったはずのシナリオである。

では、按察使大納言娘と左衛門督の娘の尚侍あるいは御匣殿補任は可能なのだろうか。尚侍と御匣殿を考証し、少女巻の公卿実子の舞姫の「宮仕」に迫りたい。

(イ) 尚侍

尚侍は『源氏物語』でも、朧月夜、玉鬘、玉鬘の中君が勤めており、父親は入内時にそれぞれ右大臣、実父内大臣・養父太政大臣、髭黒太政大臣（故人）である。尚侍の定員は2名。それを基に、太田たまきは朧月夜と玉鬘の「前任者」としての2人の尚侍の存在を指摘している（太田 2014）。但し、尚侍の定員は2人であるが、実際には常に2人が在任したわけではないようだ⁶⁴。11世紀に入って道長の娘たちは入内前の幼いころに尚侍に任じられており（妍子 11歳、威子 13歳、嬉子 12歳）、尚侍は摂関家の入内予定の娘の一時的な名誉職となっていた。しかし 11世紀末に、40年以上尚侍のポストにあった藤原道長の孫真子が没すると、150年以上に亘って尚侍任官者は途絶える。

和銅8年（715年）のころには尚侍は従五位に准じて給禄を受けていた。女子の位封禄は減半、位田は減三分の一（つまり3分の2）だったが、天平宝字4年（760年）には尚侍の給禄は男官に准じて全給されることになった。さらに宝龜10年（779年）12月からは尚侍の給禄は正三位に准じることとなった。この時、典侍の給禄も従四位に准じることと改められた⁶⁵。つまり、惟光の娘も典侍になれば従四位に准じる待遇と俸禄が受けられる可能性が高い。

山田彩起子（2012）の尚侍一覧から歴史上の朱雀朝以後の尚侍の名前と任月日を取り出すと、

朱雀～村上朝	藤原貴子	天慶元年（938年）11月14日
冷泉～円融朝	藤原灌子	康保4年（967年）9月27日？
	藤原登子	安和2年（969年）10月10日
	藤原婉子	貞元元年（976年）5月
円融～後一条	藤原惣子	天元5年（982年）5月7日
	藤原綏子	永延元年（987年）9月
	藤原妍子	寛弘元年（1004年）11月27日

⁶⁴ 山田彩起子「平安中期以降の尚侍の考察」（2012）に尚侍（の記録のある限り）が一覧にされている。また、この表以前に平安期には藤原薬子、藤原淑子がおり、奈良時代の尚侍は、志水正司「上代尚侍の一考察」（1963）にある。

⁶⁵ 但し、『讃岐典侍日記』の時代には典侍は従五位下に叙せられている。

藤原威子 長和元年（1012 年）8 月 21 日

藤原嬉子 寛仁 2 年（1018 年）11 月 15 日

となる。

これをベースに補任時期の分かっている者たちの尚侍の補任時の父親の官職を調べると、

藤原貴子（938 年）	忠平 太政大臣	承平 6 年（936 年）から
藤原灌子（967 年）	系譜不明	
藤原登子（969 年）	師輔 故右大臣	天徳 4 年（960 年）没
藤原婉子（976 年）	兼通 関白右大臣	天延 3 年（975 年）から
藤原怱子（982 年）	師輔 故右大臣	天徳 4 年（960 年）没
藤原綏子（987 年）	兼家 摂政（右大臣は寛和 2 年〔986 年〕辞）	
藤原妍子（1004 年）	道長 左大臣内覧	
藤原威子（1012 年）	道長 左大臣	
藤原嬉子（1018 年）	道長 致仕太政大臣（この年の 2 月に辞任）	

となる。以上から、史実でも記録にある限りの尚侍はすべて摂関か大臣の娘たちであったことが確認される。尚侍は定員 2 人（『令義解』「後宮職員」）であるが、少女巻における舞姫献上者である大納言と左衛門督は摂関・大臣でないので、定員に空席はあったとしても、娘に尚侍を望むことはできないことになる。

大納言と左衛門督の娘たちが准后妃となりうる上臈女官の職で尚侍が無理だとなると、御匣殿はどうであろうか。このころ御匣殿はどのような家柄の出身者が勤めていたのだろうか。

（ロ） 御匣殿

御匣殿は尚侍よりは敷居は低い。このころの御匣殿がどの程度の家柄の娘だったのか。元来、御匣殿は貞観殿の中にあり御服を裁縫する「所」で、長官は別当。御匣殿別当を単に御匣殿と呼ぶ例が多い。また、衣服を裁縫するという職掌だから、内裏以外に高級貴族の邸宅にも置かれることがあり、『源氏物語』でも玉鬘巻で六条院に御匣殿がおかれていたことがわかる（新編③123 頁と 134 頁）。

大日本古記録データベースで「御匣殿」を検索すると、

天元 5 年（982 年）3 月 11 日「以藤原泝子為御匣殿別当<參議佐理妻>」⁶⁶ 『小右記』
長徳元年（995 年）正月 19 日「関白二娘⁶⁷<号内御匣殿>、今夜参青宮云々」 『小右記』
寛弘元年（1004 年）11 月 24 日「故御匣殿尼日来重病、送小物」 『御堂関白記』
寛弘 7 年（1010 年）正月 11 日「從華山院御匣殿（平祐之女）許、得横笛」 『御堂関白記』

などがある。最初に挙がる佐理妻の藤原淑子（泝子）は藤原為輔の娘で、為輔の極官は寛和 2 年（986 年）の権中納言であるが、天元 5 年（982 年）当時は従三位の参議である。この御匣殿は公の機関、内裏の御匣殿と考えられる。長徳元年の関白二娘は傍書にあるとおり、原子のことである。正暦 4 年（993 年）他の 2 姉妹とともに着裳した。

検索された「御匣殿」が内裏の御匣殿なのか、それ以外の邸宅の御匣殿のことなのか、判別が難しいものもある。『御堂関白記』寛弘 7 年（1010 年）正月 11 日条にある平祐之女で笛を送って来た「花山院御匣殿」は花山院上皇⁶⁸御所に置かれた御匣殿なのか、あるいは御匣殿であった者が花山院に移ってそう呼ばれていたのか。臘月夜尚侍も朱雀帝譲位後、後院に移って「院の尚侍」と呼ばれている（梅枝巻、新編③416 頁）。准上皇となった小一条院「女御」で道長の明子腹の娘寛子は高松殿御匣殿とも呼ばれた⁶⁹が、これは高松殿に付属する御匣殿の長を務めることはなく、高松殿に居住する御匣殿である。

このころの御匣殿をさらに古記録から拾うと、東宮妃ではなかったが、関白道隆の四女にも御匣殿がいる。四女は父も姉定子も没した後も御匣殿として出仕している。定子没後も敦康親王の母代として出仕していたが、いつしか一条天皇の寵を受ける身となって、懐妊したがまもなく長和 4 年に亡くなったとは『栄花物語』に載る話である（巻第八「はつはな」、新編①369 頁）⁷⁰。

また、『栄花物語』巻第二十七「ころもの玉」に、万寿 3 年（1026 年）のころではあるが、「内の大殿の君たち七八人おはす。御匣殿など、今日明日の女御、后と思ひきこえさせたり」（新編③54 頁）とあり、内大臣教通の娘でわずか 5 歳から御匣殿になっている生子が、すぐにも女御、中宮になりそうだと思われることが語られ御匣殿はここでもキサキ予備軍である。

⁶⁶ 東京大学史料データベースで検索すると藤原淑子とあるが、基経異母姉妹の淑子は別人。そちらの淑子は延喜 6 年（906 年）没。

⁶⁷ 傍書に「藤原原子」。

⁶⁸ なお、花山院は寛弘 5 年（1008 年）2 月 8 日年に没している。

⁶⁹ 『大鏡』に、「高松殿の御匣殿まゐらせたまひ、殿ははなやかにもてなしたてまつらせたまふべかなり」（新編 129 頁）。道長が敦明（立坊前）に高松殿腹の娘寛子をめあわせるつもりであるという噂を聞いて敦明の母皇后が喜ぶというくだりがある。高松殿は寛子の実家であるから、主人格であり高松殿所属の御匣殿の別当をしていたわけではない。

⁷⁰ 道隆四女が御匣殿として出仕して長保 4 年に没したことは『権記』長保 4 年 6 月 3 日条でも確認される。また『大鏡』「道隆伝」（新編 257 頁）にも記事がある。

以上から、御匣殿は参議の娘が任じられた例もあり、後見の弱い故関白の娘など、尚侍より一段低いものの高い家柄の娘で、准后妃待遇となりうる職だったということだけはいえよう。按察使の大納言と左衛門督にとっても御匣殿あたりが望むところだったと推測する。

勿論、女官でなく、はじめから帝の御寝に侍ることを専らにする妻妾としての宮仕も考えられるが、左衛門督はともかく、大納言なら女御入内が望める⁷¹ところを、舞姫という変則的手続きゆえに、しばらくは更衣という資格で侍るのでは甲斐がなく不満であろう。按察使大納言はここはぜひとも御匣殿を取りたかったであろうと考える。

藤本勝義は少女巻での公卿2人の実子献上は帝のキサキにするためではなく、単に冷泉帝の行事を盛儀とするためと考える。藤本は「五節儀の後の宮仕えは、そのまま帝との共寝を意味するものではなかった。少女巻からは、そのようには読めないのである」（藤本 2008 a : 135）と主張する。そして、「ここでの宮仕えがそのまま帝の御寝に侍ることを意味すると舞姫を出す者たちが受け取っていると読めるだろうか」（藤本 2008 a : 111）と疑問を投げかけ、惟光を例にとる。惟光娘は五節ののちすぐ典侍になって出仕することになるからである。「尚侍は帝の寝所に伺候して女御と同等になっていく」（藤本 2008 a : 114）のに対し、典侍は「尚侍の代わりに実質的に女官筆頭として職務に従事するようになる。『源氏物語』の書かれた時代がそのような時期であった」と述べ、一方で「玉鬘も髭黒との結婚がなければ、冷泉帝の寵愛を受けることになり、実質的な女御となったのはまず間違いない」（藤本 2008 a : 114）ともいう。惟光は娘が典侍として宮仕しても、帝との御寝を期待してはいなかったと考える。

確かに、このころは、受領の娘が帝のキサキになりうる時代でなかった。典侍も時代が下れば帝の寵を受ける者も出てくるが⁷²、紫式部の時代には典侍は帝の乳母でなければ実務キャリア女官で、尚侍が后妃化あるいは名誉職化していった実務は執らなくなる間、尚侍に代わって後宮職務をこなす実力派女官であり、准后妃の地位とは考えられていない。しかし、受領の娘たちが御寝に侍ることは献上者も期待していなかったからといって、公卿たちもまた受領たちのように自分の娘と帝との共寝など考えなかったといえるのか。『源氏物語』の公卿の実子の舞姫は藤本勝義のいうように「新嘗祭だったが大嘗祭並の盛儀とするため」よりは、宮中にとどめ置かれて帝のキサキ予備軍となった昔の舞姫の例を念頭に公卿が実子を出す設定としたと考える方が自然ではないだろうか。塚原明弘は、『源氏物語』の少女巻の五節舞姫は後宮選納の復活と読み、背後に光源氏の意味までを示唆している（塚原 1997）。本論筆者は、時代の政治的背景も含めて、少女巻の舞姫の宮仕は天皇の妻妾となる宮仕であり、それは光源氏の周到的な企てであったことを論証するものである。なによりも、実子を差し出すことのない公卿たち

⁷¹ 中納言の娘として入内して女御宣下を受けた例もある。【補注1】に例をまとめた。

⁷² 例えば堀河帝の讃岐典侍、白河帝の藤原経子など。

が、キサキ候補でなければ、単に冷泉帝の今年の新嘗祭（一世一代の行事などではなく）を盛儀とするためだけに、異例の実子献上をするとは考えにくい。

第5節 少女巻の舞姫献上者たちと政治的意図

(1) 少女巻の舞姫献上者たち

確かに、五節舞姫がキサキとなることは「制度」としては早くに終了している。しかし五節舞姫が天皇と共寝する習慣が制度として続いていたかどうかはここでは問題ではない。少女巻では、往古の慣習を伝え聞いていただろう紫式部が、帝に「宮仕させる」と宣言させていることが重要なのである。帝自身が「みな留め置いて宮仕させる」といっているのであるから、これは公卿たちにとっては好機なのである。

このころ『源氏物語』の後宮では光源氏の養女である秋好が立后して、その他内大臣家の弘徽殿の女御、紫上の父式部卿宮の王女御が入内しているとはいえ、未だ皇子の誕生を見ていない。冷泉帝の一人息子あるいは第一皇子となる男子を産めば、大納言でも左衛門督でも、現東宮（朱雀院の皇子）の次の代に、外戚として権力の座に着くのは夢ではない。女御でなくて構わない。実子をそれなりの栄誉職で出仕させて准后妃とすればよいのだ。尚侍・御匣殿などであれば、いつでも帝寵を受けて差し支えない立場である。繰り返すが、物語では朧月夜が尚侍（初めは御匣殿）として後宮入りをし、尚侍となった玉鬘は、既婚でなければ実質女御となっただろうと推測され、玉鬘と髭黒の娘、中の君が、敢えて「女御入内」をさけて実質女御の尚侍として出仕したこと、などの例がある。華やかな女御入内が困難であるなか、舞姫献上を利用しての後宮入りは、高級女官としての宮仕であっても公卿たちにとっては願ってもない好機であった。公職の女官出仕にすれば軋轢を減らせるとはいつても、キサキ予備軍の性格上、娘を既にキサキに送り込んでいる権力者たちには敵対者と警戒される所業であるので、これを冒すのも普通なら躊躇される。ところが、今回は、自分たちからの働きかけでなく、帝自身の命で「やむなく」娘を後宮に送り込むことができるという絶好の好機が到来したのである。

三善清行は「意見十二箇条」で「弘仁・承和二代、尤も内寵を好む。故に遍く諸家をして、この妓を挾び進らしむ。以爲へらく、選納の便りとおもへり。諸家天恩に僥倖して、糜費を顧みず、財を尽くし産を破り、競ひてもて貢進す」と奏上したが、そこで指摘されている、帝寵を期待して財を尽し、競い合って娘を貢進する状況が『源氏物語』の少女巻において再現されているのである。少女巻での公卿分献上両家の挑み交わしての準備は家門の権勢に直結する真剣勝負だったのである。では、娘を後宮に送り込もうとしている公卿2人、按察大納言と左衛門督とはどのような人物なのか。また、一方、帝寵とは無縁と思われる殿上分を、ここで良清が献上する意義は何かを考察する。

(イ) 按察大納言

献上者の1人は按察大納言である。このころと前後(970年から1016年まで)の按察大納言を以下に示す⁷³。

天禄元年(970年)	権大納言	正三位 藤原師氏	58	按察使。7月14日薨。
天禄元年(970年)	中納言	正三位 源雅信	51	8月5日転。兼按察使。
天禄三年(972年)	大納言	正三位 源雅信	53	正月24日転。按察使如元。
(天禄元年中納言で按察使となっていた。)				
天延三年(975年)	大納言	正三位 藤原兼家	47	正月26日按察使。
天元元年(978年)	大納言	従二位 藤原為光	37	中宮大夫。10月17日按察使。
永観元年(983年)	大納言	正二位 源重信	62	正月29日按察使。
永延二年(988年)	大納言	正二位 藤原朝光	38	正月29日按察使。
正暦四年(993年)	大納言	正二位 藤原濟時	53	正月13日按察使。
長徳二年(996年)	大納言	従二位 藤原顕光	62	正月按察使。
長徳二年(996年)	大納言	正三位 藤原公季	48	8月5日按察使。
長徳三年(997年)	大納言	正三位 源時中	56	7月5日按察使。
長保四年(1002年)	大納言	正二位 藤原道綱	48	2月30日按察使。
寛弘四年(1007年)	権大納言	正二位 藤原実資	51	正月28日按察使。
(寛弘六年[1009年]実資 転正、如元按察使。)				
長和五年(1016年)	権大納言	正二位 藤原齐信	50	正月16日兼按察使。

これらの按察大納言の中で、舞姫献上者に選定されたことがはっきりしているのは藤原実資で、寛弘8年(1011年)には舞姫献上者に選定された。但しこの年大嘗会は停止されたのではあるが。

少女巻の按察大納言が奉るのは外腹の娘であるが、藤本勝義は、少女巻の舞姫たちの宮仕は帝寵を意味せず、大嘗祭だけに許される舞姫宮仕を取り入れることによって、この年の五節を盛儀とし、冷泉王朝とそれを支える光源氏一族の栄華に彩りを添えるものだったと考える(藤本 2008a)。実子を舞姫にするといっても、「大納言の女は外腹、つまりは劣り腹であり、左衛門督は公卿といっても従四位下程度の者である。(中略)高級貴族の正妻腹の子女を出すはず

⁷³ 『公卿補任』データベースで抽出。

もないのである」(藤本 2008a : 118) という。本当に大納言の外腹の娘はキサキ候補になりえないだろうか。

a. 按察大納言の「外腹の女」

道長の倫子腹の娘たちが中宮や東宮妃になっていく間、明子腹の寛子が小一条院の「女御」にしかならなかった事実はある。しかし、これは、既に倫子腹の娘たちが必要なだけそろっていたからではないだろうか。長徳 2 年 (996 年) を考えよう。すぐにも出産可能な年齢の義子や元子が次々入内してゆく時に、もし明子腹に 17~18 歳の娘がいたとしたら (実際には 9 歳の彰子が最年長だった)⁷⁴、道長は外腹だからと入内を見送っただろうか。また、次代の頼通は娘ができなかったので養女 (姫子) をとって後朱雀に入内させた。長徳 2 年にもし明子腹に入内可能な娘がいたとしたら、倫子腹でないからと元子と義子の入内を眺めるだけだったとは思えない。そうしたら、全くの推測ではあるが、世間では、9 歳の彰子ではない方の姫ということで「左大臣殿は高松殿の姫君を奉る」ぐらいの表現になったのではなかろうか。

光源氏の娘明石の姫も「物語の事実」としては外腹で劣腹だったが、光源氏は立派に后がねに育て上げた。史実でも、実資の鍾愛の娘で、実資によって早くから小野宮家のほぼ全財産の単独相続人に定められていた一人娘千古 (姉たちは幼時に死亡) の生母は外腹どころか実資の亡妻の女房だった (繁田 2008 : 110)。しかし実資がこの娘にかしづくさまは、大変なもので、『栄花物語』は「小野宮にえもいはず造り建てさせたまひて、寝殿の東面に、この姫君をかしづきたてて住ませたてまつりたまふ。その御前に、われも紐解き乱れても見えたてまつりたまはず、いみじき后がねとかしづききこえたまふほど」(新編②217 頁) と、寝殿に住ませ、自分はきちんとした服装でなければこの娘の前に行かなかったとするほど大切に育てた后がねだったと説く。(母の身分が低いからこそ寝殿に据えて、アピールする必要があったと本論筆者は考えるが。)『栄花物語』は「母北の方」は幸せ者だと「北の方」という語を使うが、実資は愛妻婉子女王の死後正室を迎えることがなかったことはよく知られていて、この女房を北の方として遇したことはない。実資はこの娘を得る前、后がねとする女子の誕生をしばしば神仏に祈願に行っている。やっと生まれた后がねを、天皇・東宮でなく権門との姻戚関係に方針転換したのは、繁田信一 (2008 : 130) の指摘するように、道長の娘たち所生の皇子でなければ立坊は絶望的となっていた状況を判断してだったと考えられる。千古と年齢的に釣り合う後一条天皇 (長和 5 年 [1016 年] 即位) の後宮は道長娘である中宮威子だけであった。実資をはじめとする他の貴族たちが道長を憚って入内を控えた結果であることは明白である。同母弟の教通

⁷⁴ 実際は明子との結婚が、たとえ倫子より前だったとしても、入内できる年齢の女子はできているはずはないが。

が娘生子の入内を図ったが、兄頼通に阻まれたこともよく知られている。(生子は23歳で次の後朱雀の女御になったがこれも頼通の反対により立后できなかった。) 後一条より1歳下の皇太弟敦良親王(後朱雀)の後宮は5人でも、内親王である皇后を除く4人はすべて道長の娘と孫娘たちだった(中宮は頼通養女)。(娘たちの父親は兄弟だったが、仲は良くなかった。) 小野宮家のほぼ全財産を受け継ぐことになっている女との結婚を、劣り腹だからと尻込みする公達がいたのだろうか。小野宮家の成長した唯一人の娘の婿の座をだれが射止めるかは世間も注視するところだった。(『大鏡』にも実資の同様のかしづきぶりを伝えた後に「いみじうかしづき据ゑたてまつりたまふめり。いかなる人か御婿となりたまはむとすらむ」[新編104頁]と結ぶ。) 繁田は、現に実資は頼通の養子で当時、頼通の次の政権担当候補者だった源師房との結縁の打診も受けていることを指摘する(繁田2008:12)。

『源氏物語』で、冷泉帝の立后争いに敗れた内大臣は、せめて雲居雁は東宮の元服に合わせ、て妃にと考えていたことを明かす(新編③35頁)。雲居雁は弘徽殿女御の姉妹であるが、母は元右大臣の四の君ではない。つまり外腹である。(母は按察大納言と再婚している。) もし、雲居雁が入内することになったとしたら、「外腹の女」の入内である。少女巻の「大納言の、外腹のむすめをたてまつらるるなるに」(新編③60頁)の部分も「外腹なれど」というような逆接的な言い方はしていない。大納言の奉る娘が別腹であるといっているだけで、「大事な后がねではないけれど」ようなニュアンスは感じられない。この部分は諸本にも「外腹なれど」といったような逆接の揺れはない⁷⁵。少女巻の大納言の外腹の実子についても、外腹かどうかより、大納言がどれだけかしづく娘だったかの方が問題だったであろう。雲居雁が外腹だったと同様に、大納言の適齢の娘が外腹だったというだけである。光源氏の惟光への言葉も「通例は実子を舞姫にしない公卿のうち大納言ほどの高位の人だって実子を出すのだから、君だって大事な妙齢の実子を出しても何の恥があるものか」の意味以上が意図されているという根拠はないだろう。

舞姫たちは、五節終了後「そのまま宮中に」(「やがて皆とどめさせたまひて」⁷⁶新編③64頁)という帝の意向もでたというが、やはり、いったん退出することになり、惟光・良清の娘たち

⁷⁵ 「大納言の、外腹のむすめ奉らるるなるに、朝臣のいつきむすめ出したらむ、何の恥かあるべき」(新編③60頁)。但し、「何の恥かあるべき」に関しては、「なんのとかゝあらむ」とする本はあるが、「咎」では意味が通じにくい。

⁷⁶ 当初から「みなとどめさせたまひて、宮仕すべく、仰せ言ことなる年しなれば」(新編③59頁)と宮仕の仰せはあった。この当初の仰せ言ごとのところに、河内本、別本系諸本は「やがて宮仕すべく」と、「やがて」を入れるものも多い。新編では、ここ五節終了にたって初めて「やがて」が加わって「やがて皆とどめさせたまひて、宮仕すべき御気色ありけれど」(新編③64頁)となる。本論筆者は、新編(大島本)に従いたい。そして、五節終了時の「やがて」は、若い冷泉帝が華麗をきわめた舞姫全員を大変気に入った結果、五節舞のその日から、もうそのまま宮中にとどめたいという気持ちになった、つまり、事は、光源氏の思惑とおりに運んでいることを願わしていると考ええる。しかし、舞姫たちがいったんは退出するのは、実際問題として4人全員が五節の終了の夜から内裏で生活を始められるだけの準備はなかったからであろう。

は、それぞれ父の任国で解斎の祓えをした。当然、按察大納言の娘も同様にいったんは退出したが、「ことさらに参らすべきよし奏させたまふ」（新編③64 頁）と、準備を万端整えて入内させることをダメ押している。

（ロ） 左衛門督

a. 左衛門督とは

公卿分のもう 1 人、実子の献上者は左衛門督である。これも藤本勝義のいうように「左衛門督は公卿といっても従四位下程度のもの」（藤本 2008a）といえるのか。

これは偶然だろうが、貞観元年（859 年）清和天皇の大嘗会で舞姫をつとめて叙位（従五位下）されて、後宮に入り、のちに二条后と呼ばれた藤原高子の父の長良の極官は従二位権中納言左衛門督だった。長良は仁和 2 年（856 年）に没している。天暦から長和年間（947～1016 年）の左衛門督を見てみると、原則三位で中納言の兼帯である⁷⁷。（任官時には参議でも、間もなく中納言に昇進している。）10 世紀半ばから 11 世紀初めの左衛門督たちの本官を『公卿補任』から作成した。

表 左衛門督（天暦～長和）

和暦	西暦	在年数	左衛門督	任官時本官	位階	年齢	備考 (日付：補任日)
天暦 2 年	948	6	源高明	中納言	従三位	35	1/30 兼左衛門督
天暦 7 年	953	5	藤原師尹	中納言	従三位	34	9/25 兼左衛門督
天徳元年	957	13	藤原師氏	権中納言	従三位	45	4/25 転左衛門督
安和 2 年	969	1	藤原頼忠	中納言	従三位	46	2/7 兼左衛門督
安和 2 年	969	4	源雅信	参議	正三位	50	11/11 兼左衛門督 翌年正月 中納言
天禄 3 年	972	4	源延光	権中納言	従三位	46	左衛門督 ⁷⁸
天延 3 年	975	17	源重光	参議	従三位	53	4/26 転左衛門督 翌々年 任中納言
正暦 2 年	991	5	藤原顕光	中納言	従二位	57	9/21 左衛門督
長徳元年	995	3	藤原懷忠	中納言	正三位	62	8/28 左衛門督
長徳 3 年	997	5	藤原誠信	参議	正四位下	34	1/28 左衛門督

⁷⁷ 左衛門督の相当官位は初期には正五位上。延暦 18 年（799 年）に従四位下に上り、以後定着。相当官位が従四位下ということは、従三位を帯びている者でも位禄の支給は、左衛門督の相当官位である従四位下の分であるということで、左衛門督になったから帯びている位階が従四位下に低下するという事は勿論ない。

⁷⁸ 天禄 3 年条の延光条に「正月廿四日転。督大夫如元」（ここの転は転正で権中納言から中納言）とあるから、天禄 3 年正月 24 日以前の左衛門督補任のはずだが、月日ははっきりしていない。前任の雅信は天禄 2 年には左衛門督在任。雅信が天禄 3 年正月に大納言に昇進した際に左衛門督は外れて、後任として延光が左衛門督に補任されたと考えるのが自然である。

長保3年	1001	9	藤原公任	中納言	従三位	36	10/3 転左衛門督
寛弘6年	1009	5	藤原頼通	権中納言	従二位	18	3/4 左衛門督
長和2年	1013	5	藤原教通	権中納言	正三位	18	6/23 兼左衛門督

(「在年数」は足かけの在年数で示す。)

この表では、3名が参議で左衛門督に任官しているが、藤原誠信を除いて、他はすべて任官時には最低で従三位で中納言または権中納言であった。参議で兼任した雅信はすぐ中納言に昇進。いま1人の重光は2年後ではあるが中納言になっている。唯一の例外の誠信は、失敗・失態が多くて参議に14年とどめ置かれていた問題人物だった。誠信は、長保3年(1001年)、空席のできた中納言を望むも、道長は誠信でなく、誠信の弟の斉信を任官させた。誠信はこれを恨んで絶食して憤死したという。『大鏡』はこの憤死の模様を、(誠信は)「いとど悪心を起こして、除目のあしたより、手をつよくにぎりて、『斉信・道長に我はばまれぬるぞ』と言ひて、ものもつゆまゐらで、うつぶしうつぶしたまへるほどに、病づきて七日といふにうせたまひにしは。にぎりたまひたりける指は、あまりつよくて、上にこそ通り出でてはべりけれ」(『大鏡』「為光伝」新編229頁)と語る。このことは『十訓抄』(九ノ四 新編374頁)にも逸話として載る。また『公卿補任』長保3年誠信の項にも「九月三日薨。不堪超越之恨云々」とあり、誠信の恨みの激しさは巷の噂になっていたらしい。誠信が参議のままで左衛門督を兼任していたのは例外的であった。

『源氏物語』では空蝉の父衛門督は中納言であつたし(新編①96頁、105頁)、太政大臣家の嫡男、柏木も衛門督であつた。空蝉の父中納言は、空蝉を宮仕させる予定⁷⁹で、その意向は帝にも受け入れられていた。([衛門督が自分の娘を]「『宮仕に出だし立てむ』と漏らし奏せし、いかになりけむ」[新編①96頁]と桐壺帝が言ったことを光源氏が覚えている。)「衛門督」であるが、左衛門督の場合には、呼びかけは「左衛門督」が多く、「衛門督」というと右衛門督の場合が多いのだが、若菜上では柏木は、はっきり右衛門督と書かれており、女三宮の婿としては「位などいますこしものめかしきほどになりなば」(新編④36頁)と、位がまだ低いからと選外になった。ことさらに、位の未熟さを強調したためかもしれない。柏木は「若菜下」になって「まことや、衛門督は中納言になりにかかし」(新編④217頁)とあるので、中納言に昇進したのは「若菜上」から「若菜下」の間で、女三宮の婿選び当時は、柏木は本官を参議とする右衛門督だったことになる。

中納言に昇進すると左に転ずるものも多いが右衛門督を続ける者もある。(以下の表を参照。また、左衛門督が空かなければ当然だろうが。)

表 右衛門督(天暦～長和)

⁷⁹ 【補注1】「中納言の娘が女御となった例」を参照。

和暦	西暦	在年数	右衛門督	任官時本官	位階	年齢	中納言・権中納言補任年	備考
天暦元年	947	2	源高明	権中納言	従三位	34	—	元右衛門督。6/6 兼右衛門督。天暦 2 年 権中納言から転正時、左衛門督。
天暦 2 年	948	10	藤原師氏	参議	従四位下	36	天暦 9 年	1/30 兼右衛門督。天暦 9 年 (955) 2/7 叙従三位。任権中納言。「右衛門督如元」。
天徳元年	957	8	藤原朝忠	参議	正四位下	48	応和 3 年	12/25 兼右衛門督。応和 3 年 5/4 中納言。「右衛門督如元」。
康保 2 年	965	6	藤原朝成	参議	正四位下	49	天禄元年	12/14 兼右衛門督。
天禄元年	970	4	藤原齐敏	参議	正四位下	43	ならず	1/28 兼右衛門督。正四位下右衛門督のまま天延元年没。
天延元年	973	4	源重光	参議	従三位	51	天元 2 年	翌々年 参議で左衛門督へ転。
貞元元年	976	13	源忠清	参議	従三位	46	ならず	永延 2 年 右衛門督、16 年 正三位で没。
永延 2 年	988	2	源伊陟	参議	正三位	51	永祚元年 (翌年)	2/27 任権中納言と同時に止督正暦 5 年 9/8 再び右衛門督。
永祚元年	989	3	藤原道長	権中納言	従三位	24	—	3/4 右衛門督。2 年後正暦 2 年 権大納言になるまで右衛門督。
正暦 2 年	991	2	源時中	参議	正三位	50	正暦 3 年 (翌年)	7/1 転右衛門督。任権中納言と同時に止右衛門督。
正暦 3 年	992	3	源道頼	権中納言 (参議)	従三位	23	正暦 3 年	8/28 右衛門督。ほぼ同時に任権中納言。
正暦 5 年	994	2	源伊陟	権中納言	正三位	58	—	9/8 右衛門督。
長徳元年	995	2	藤原実資	権中納言 (参議)	従三位	39	長徳元年	8/28 任権中納言と同時に「即右衛門督」。
長徳 2 年	996	6	藤原公任	参議	正四位下	31	長保 3 年	7/14 遷右衛門督。中納言になってすぐ長保 3 年 10/3 には転左。
長保 3 年	1001	9	藤原齐信	権中納言	従三位	35	—	8/25 権中納言になってすぐの 10/3 に右衛門督。寛弘 6 年 3/4 権大納言になるまで右衛門督。
寛弘 6 年	1009	8	藤原懷平	参議	正三位	57	長和 2 年	3/4 右衛門督。長和 2 年から長和 5 年 4/18 64 歳で辞督まで足かけ 4 年 権中納言で右衛門督。
長和 5 年	1016	2	藤原頼宗	権中納言	従二位	24	—	4/28 兼右衛門督。

(「在年数」は足かけの在年数で示す。)

柏木も中納言昇進後に左に転じていた可能性が高い。(左衛門督は中納言であるが、中納言の衛門督が左衛門督であるとは限らない。) 小学館新編では柏木の死後、人々が柏木を哀れんで『あはれ、衛門督』といふ言ぐさ(新編④340 頁)というくだりが、他本に「あはれ、右衛門督」となっている本もあり、その場合は中納言昇進後も右衛門督に留まっていたことになるが、小学館新編で読む限りでは左に転じていても齟齬は生じない。

『源氏物語』の少女巻に当てはめれば、献上者の左衛門督も中納言が兼官するエリート貴族だったと考えられよう。また年齢的には、前述の表からも寛弘6年（1009年）に頼通が18歳という若さで左衛門督になるより以前の左衛門督は、中年以上の公卿だった。紫式部の脳裏に寛弘年間の当時の左衛門督の公任のイメージがあっても不思議はない。

b. 少女巻の舞姫献上者の左衛門督について

b-1 献上者は内大臣の異母兄弟か

少女巻の舞姫献上者たちは、進んで実子を献上するのだが、ここで問題がある。小学館新編日本古典文学全集、新潮社日本古典集成では、この左衛門督は弘徽殿女御の父内大臣の異母兄弟である。確かに、少女巻の五節が描かれる少し前に、「皆ここには参り集ひたれど、御簾の内はゆるしたまはず。左衛門督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのまに、今も参り仕うまつりたまふ」（新編③52-53頁）と内大臣の異母兄弟に左衛門督がいること示されている。左衛門督の定員は勿論1人である。果たして、この左衛門督が五節を献上した左衛門督と同一人物といえるのだろうか。

ここで物語上の状況を考える。左衛門督が娘をキサキに入れば、内大臣の弘徽殿の女御と真っ向から対立することになる。今年の舞姫は「例の舞姫どもよりはみなすこしおとなびつつ」（新編③63頁）とあるので、宮仕のできる年齢であったことが明かされている。既に入内している内大臣娘の弘徽殿女御も16歳と推測され、これから出産適齢期に入ってゆく年ごろである。成熟した秋好が立后したとはいえ、まだ皇子の所生はない。ここで第一皇子を挙げ、その皇子が登極すれば、母（弘徽殿女御）は中宮を飛び越えて皇太后に立后できるのは東三条院詮子が先鞭をつけている道であり、一発逆転、将来の外戚となって繁栄する道は残されている。内大臣は太政大臣の嫡子であり、后腹の皇女を母としているので、氏の長者の地位は間違いなし。左衛門督の母の身分が劣れば年長でも官位が低くても不思議ではない。内大臣は光源氏より3歳程度年長であると考えられている⁸⁰。左衛門督が内大臣と同程度の年齢としても、例年の舞姫より少し大人びているのだから入内させるのに格好の年ごろの娘をもっていて何の矛盾も起こらない。しかも今回は氏の長者の立場にある内大臣に敢えて挑戦状を突きつけての女御入内を図るわけではなく、舞姫献上が命ぜられたので差し出す姫である。いまだ皇子の誕生のない若い帝の後宮に、娘を「宮仕」させられるなら、高い家柄の貴族である左衛門督が、これを好機と、娘を美しい舞姫に仕立てる準備に奔走したのは当然だろう。

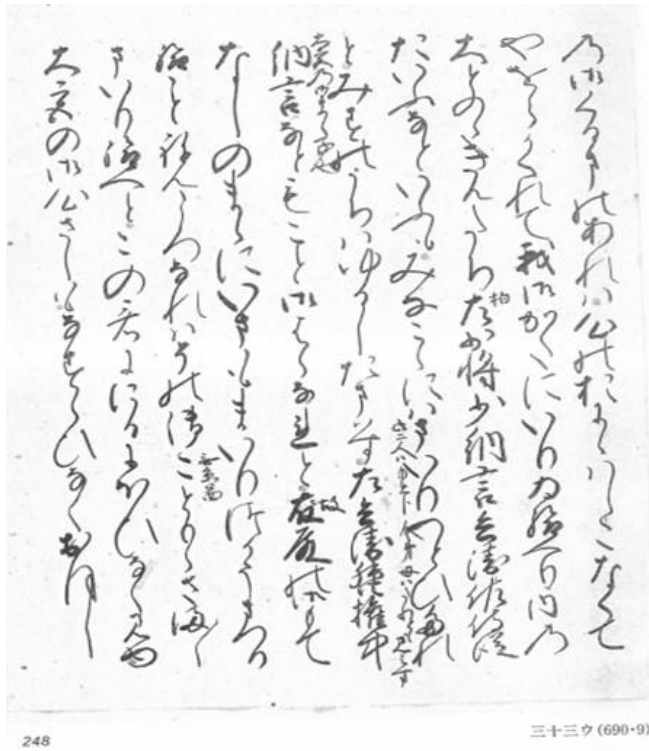
⁸⁰ 葵上が光源氏より4歳年長であるから、葵上を内大臣（当初頭中将）の同母の姉とすれば光源氏より2～3歳年長が妥当となるだろう。以前は葵上を頭中将の妹とされたが、それでは光源氏より5～6歳以上年長になってしまい、頭中将が友人であり張り合う相手としては歳が離れすぎてしまう。

松井健児は、少女巻の左衛門督の娘は公卿分でなく、弘徽殿女御の献上した女御分献上の舞姫であると比定したうえで、この年の舞姫献上を、光源氏／惟光・良清の光源氏側と、弘徽殿女御／左衛門督・按察大納言の内大臣陣営の争いととらえている（松井健児 1988）。しかし、もし、松井健児のいうように、この行事を盛儀とするためだったら、両陣営は何のために対決するのか。立后争いは片が付いている。ここで、内大臣が左衛門督を後押しする、あるいは左衛門督が内大臣を後押しするべき理由があるのか。それぞれの家が挑み交わしたように準備に励み、結果として左衛門督の娘がどんなに好評を博しても、それは舞姫を献上した左衛門督の栄誉である。五節舞姫の準備について貴族たちが物を都合したり助力するのは当たり前のことであるから、一定の助け合いは共同戦線などとは無縁の次元の話である。一方、もしこれが、後宮勢力地図の塗り直しのためなら争いは必死なものになるだろう。しかし、若年の女御が舞姫を献上する場合には、後見である父親または兄弟が全面バックアップするはずで⁸¹、弘徽殿の女御にとって強力なライバルとなりうる従姉妹を「宮中にとどめる」ために内大臣が尽力するなどありえない。一条天皇の後となった定子と彰子は従姉妹同士であるが、道長が、同母兄道隆の娘の定子にどれだけの嫌がらせをしたかを思い起こし、（また『源氏物語』よりは少し後になるが）教通の娘の入内を同母兄の頼通が阻み続けたことを考えれば、兄弟は最大のライバルであり、内大臣・左衛門督・按察使大納言が左衛門督の娘を宮中へ入れるために一致団結して準備することは、この時代の後宮戦略の常道からは逸脱している感がある。内大臣娘の雲居雁の母の再婚相手が按察大納言だと、なぜ按察大納言が、内大臣の陣営になるのか。理由がはっきりしない。盛儀をめぐる争いといっても、立后争いも終っている今、「陣営」がその争いに勝利しても得るところがはっきりしない。

内大臣の異母兄弟がキサキ候補を宮仕させれば、とりもなおさず弘徽殿の女御と帝の寵愛を競うことになる。内大臣が協力するとは思えないが、果たして舞姫献上者の左衛門督は何者なのか。内大臣の異母弟なのか。実は、内大臣の異母兄弟の「左衛門督」には揺れがあった。

現行の刊本の多くが底本とする古代学協会蔵飛鳥井雅康等筆本（大島雅太郎氏旧蔵。通称大島本）においては、内大臣の異母兄弟は左衛門督ではなく左兵衛督なのである。（乙女 33 ウ 5 行目「とみすのうちゆるしたまはす左兵衛督権中」。）

⁸¹ 実際に女御が舞姫を献上した記録は残っていない。



弘徽殿の父大納言が内大臣に昇進して、任大臣の大饗が済んだのが時雨のころ、雲居雁が大宮邸から移されるというその日に雲居雁の祖母である大宮の邸へ集まってきた内大臣の異母兄弟たちの中の左衛門督であるが、現行刊本のうち小学館新編日本古典文学全集は、校訂付記で、「明、証、幽、柏、横、平、池、肖、三、河、別」の「左衛門督」により、大島本「左兵衛督」を改訂したというのである（新編③465頁）。新潮社日本古典集成ではこの左衛門督は内大臣の異母弟とするが、他に注記はない（新潮社集成③250頁）。岩波新

大系は「左兵衛督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も参り仕うまつりたまふ」（新大系②304頁。下線付加）と「左兵衛督」としたうえで注記として「青表紙他本多く『左衛門督』」としている。古注釈においては、『源氏釈』⁸²、『紫明抄』⁸³、『河海抄』⁸⁴には異母兄弟のこの官職についての注釈はないが、『花鳥余情』⁸⁵、『細流抄』⁸⁶、『岷江入楚』⁸⁷では、大宮邸に来たのは「左衛門督」で内大臣の兄弟としている。但し、古注釈をすべて鵜呑みにはできないことは勿論ある。少女巻での舞姫献上者は『源氏物語』（宇治十帖を含むいわゆる第3部を除く）では、少女巻以外に左衛門督は3か所に登場⁸⁸するが、いずれも少女巻の内大臣の異母兄弟が左兵衛督であっても齟齬をきたすことはない。つまるところ、少女巻の内大臣の異母兄弟は左衛門督でも左兵衛督としても物語に大きな矛盾は起こらないように思われる。異母兄弟なら、内大臣への遠慮も考えねばならないので、異母兄弟は左兵衛督で、献上

⁸² 『源氏釈』 藤原伊行著。平安時代末期成立。

⁸³ 『紫明抄』 素寂著。鎌倉時代成立。

⁸⁴ 『河海抄』 四辻善成著。南北朝時代成立。

⁸⁵ 『花鳥余情』 一条兼良著。15世紀成立。

⁸⁶ 『細流抄』 三条西実隆の講義をその子の公条筆録。1510～13年に成立。青表紙系統の本文による最初の注釈書。

⁸⁷ 『岷江入楚』 中院通勝著。安土桃山時代成立。諸注を集成し、三条西家の説や自説を加えたもの。

⁸⁸ ①紅葉賀巻で宰相2人と左右の衛門督が楽の行事を勤めている。②梅枝巻で明石の姫の入内の支度に草子を兵部卿官と左衛門督に書いてもらおうという（新編③417頁）。③鈴虫巻で光源氏が六条院に来ていた公卿たちを引き連れて冷泉院へ参上するが、その中に左衛門督がいる。

者左衛門督は別人と考えたいところではある。

b—2 左衛門督の舞姫

少女巻の献上公卿の1人である左衛門督が内大臣の兄弟だったにせよなかったにせよ、献上者の1人が左衛門督であったことは動かない。そして、その左衛門督は「その人ならぬを奉りて咎めありけれど、それをもとどめさせたまふ」（新編③64頁）と、「その人ならぬ」舞姫を奉って咎めがあったという。

この「その人ならぬ」の解釈には定説はない。小学館新編の頭注には「資格のある人でないのを。具体的には不明だが、昔は女御の奉る五節があり（意見十二箇条 三善清行）、左衛門督はその後宮分なのに不適格者を出したのかともいわれる。実子ではない者とする説（細流抄）は、受領分でないと正しくない」（新編③64頁）とある。左衛門督の献上が女御分というのは当たらないし、「寛平御遺誡」により、公卿が献上する舞姫は実子でなくてよいことが了承されており、紫式部の時代の毎年の五節でも公卿は実子を舞姫にしていないから、公卿である左衛門督の舞姫は実子でなかったからと、何の咎めもあるわけではない。

では、「その人ならぬ」を、資格のない人だとすると舞姫の資格としてはどんなものが考えられるか。舞姫は「未だ嫁ざるもの」という条件があるから、左衛門督の舞姫が未婚でなかったということがあるのだろうか⁸⁹。尚侍や典侍は未婚・既婚は問われないが、神に仕える舞姫は未婚の乙女が期待されていた。「仰せ事ことなる年なれば、むすめをおのおの奉りたまふ」とあるから、左衛門督の舞姫も実子である。わざわざルールを破って既婚の実子を舞姫にすべき理由があるとは信じがたい。『小右記』万寿2年11月に実資は献上に先立って自分の舞姫を自邸へ迎え「舞姫とすべく着裳を行った」（「於家令着裳、依可為五節舞姫」）とあるので、あるいは着裳が終わらない少女だったのか。着裳が終わっていないとどんな障りがあったというのだろうか。着裳は天皇の御寝に侍ったころの名残だろうか。少女巻の舞姫たちは例年より少し大人びていたとあるから、もし着裳が終わっていないのが問題なら、実資が行ったように、参入前に着裳を行えばよかったはずである。

その人ならぬの用例

「その人ならぬ」の上代、中古の用例は管見の限り、この少女巻の例以外では4件が確認された⁹⁰。以下がその例である（下線付加、小学館新編の対応箇所の訳を付し、訳にも下線を付

⁸⁹ 三善清行の「意見十二箇条」に未だ嫁ざるもの（「忝良家子女未嫁者」）とある。

⁹⁰ 検索語は「そのひとなら」「その人なら」「其の人なら」「其のひとなら」「其人なら」を含む。

加した)。

①『枕草子』 95段「五月の御精進のほど」新編186頁

「(前略) 責め出だしてこそまゐるべけれ。むげにかくては、その人ならず」など言ひてとりはやし(「責め立てて召しあがるはずのものですのに。いっこうこんなに召しあがらないのでは、そうした人らしくない」などと言って、明るい調子で座を取り持ち)

②『源氏物語』 行幸巻 新編③301頁

いにしへよりなり来にける。したたかに賢き方の選びにては、その人ならでも、年月の藤になりのおぼる(昔から任ぜられてきている。しっかりしていて賢明な人という条件での選考ならば、そうした家柄の人でなくとも、年月の功勞によって昇進)

③『源氏物語』 若菜上巻 新編④31頁

方々につけて御蔭に隠したまへる人、みなその人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど([院が] お世話しておられる方々は、どなたもみなそうした人として不似合に低い身分ではいらっしゃらないにしても)

④『源氏物語』 橋姫巻 新編⑤134頁

ものの心を問ひあらはさんもことごとしくおぼえたまふ、また、その人ならぬ仏の御弟子の、忌むことを保つばかりの(なんぞの道理を尋ねて明らかにするにも大げさな感じでいらっしゃるし、また、特にこれといったことのない法師で、戒律をまもっているだけの)

このように、おしなべて「その人ならぬ」は「ふさわしい人ではない人」というところに落ち着きそうだが、いったい、なにがふさわしくなかったのか、実子や着裳のことではないとすれば、礼儀作法がかなっていなかったのか、年増すぎたか、醜女だったか。古注にもヒントを発見することはできなかった。

美貌はどうか。童女にさえ飛びきりの美麗さが求められていたのだから、豊明節会のメインイベントとも言える舞姫たちは(几帳や扇で隠されるとはいえ)さらに期待が大きかったろう。

殿上分の舞姫は、このころは原則実子だし、公卿分も知己の殿上人の娘などで選択の幅は狭いので、いつも美女というわけにはいかなかっただろうが、「咎め」が課せられるほどの客観的な美醜の基準の成立は難しいだろう。五節舞姫関係で非難のあった例としては、寛仁元年(1017年)11月21日、童女が(無文だが)織物を着ていたのは便無しとされた件があるが(「御覧童女、則隆童無文織物装束、仰無便由」『御堂関白記』)、これも、便無しは衣装に関してである。

「その人ならぬ」であったからではない。

「その人」を舞姫その人本人という解釈は成り立たないだろうか。体調をくずして倒れたりする恐れもあり、また扇を使うとはいえ、衆人に注視されかねない舞姫には代役を立て、宮仕

には実子を出そうとした戦略はありえないか。しかし、『源氏物語』中の「その人」という語に正身、同一人の用例はなかった。

また、ここで気になるのは、少女たちの年齢である。繰り返しになるが、この年の舞姫たちは例年より大人びていたのである⁹¹。本論文で論証することではあるが、公卿たちが外戚の地位を狙って冷泉後宮に入れようとする舞姫たちであれば、数えて16～17歳以上になっていて、すぐにも妊娠できることが望ましい。例年より年長であるそのためであろう。惟光娘も典侍を申請するのだが、典侍は、栄誉職化した尚侍に代わって実務の責任者となる職なのだから、実務のこなせる年齢になっていたはずで、数えて17～18歳になっていたのではなかろうか⁹²。父惟光は既に男たちからの求愛を気にして、その点を息子たちに訓戒している(新編③65頁)。本論第三部第2章で考証するが、例年より年齢の高いこの年の舞姫たちは大事な日が月事にかかってしまうリスクを負っていたことになる。これは想像の域を出ないが、物語であるから、想像も許されよう。本論筆者がここで当時の女性読者が想像するだろうと想像する事態は、左衛門督の娘は、あいにく直前になって月事のため舞姫が勤められない状況が出来た。月事による忌は実際の期間より長い。時代によって多少変わる(短縮化する)が、10日程度は普通であった。父左衛門督は窮余の策として、家女房から代役を立てた。処罰に値するほどの重大な罪科とは考えなかった。史実には童女御覧に樋洗童を出した献上者もいて⁹³、非難は浴びたが、天覧に入れる童女に樋洗童を使うことを考えた献上者がいたということや、また、本来は入場できない帳台試に、清少納言ら中宮定子付きの女房たちが見張りの制止を振り切って乱入しても、一条天皇は笑っただけという、ある意味でおおらかな貴族社会でもあった。「その人ならぬ」人でごまかそうとした「咎め」は非難や叱責ではあっても処罰ではない。物語であるから、月事などという直接的な言葉は使うまい。読者に推測させるだけである。

月事については本論第三部第2章でさらに検討するが、その結論をいってしまえば、例年の舞姫は、月事の心配をしなくてもいいように、13～14歳での少女が選ばれていたと考える。少女巻の例年より年長だった舞姫は「その人ならぬ」という不明瞭な表現で、資格のない者、本人でない者のことをさして、女性読者は背景事情を察したのではないかと推測する。この推測によれば、「左衛門督その人ならぬを奉りて咎めありけれど、それもとどめさせ給ふ」と、宮中にとどめられたのは代役ではなく、避けがたい事情で舞えなかった左衛門督の娘そのひとであったと解釈する。

⁹¹ 「例の舞姫どもよりはみなすこしおとなびつつ」(新編③63頁)。

⁹² 惟光娘に懸想文を送る夕霧は12歳であるが、女性が年上の結婚はごく普通にあった。

⁹³ 服藤(2015: 134-136)に詳細がある。

(ハ) 源良清

良清は公卿ではないので、舞姫は実子であることが原則であるが、今回の舞姫は全員、宮仕をすることになっている。良清の娘は現時点では、キサキ待遇は望める位置にはいないが、良清も惟光のように娘を舞姫に献上することは「からいこと」と思っただろうか。そもそも、惟光はなぜ娘を舞姫にすることを「からいこと」と思っただのか。惟光は娘は大事に育てて、いずれ自家より高い家柄の男と結婚させようとしているので、男たちの接近は警戒している。しかし舞姫に差し出すのは女房にするわけではない。若き日の光源氏が筑紫の五節舞姫に惹かれたように、貴公子たちのなかに胸焦がす者も現れるかもしれない。女房たちの供給元である中下級貴族には正式な高級女官としての後宮入りはメリットも大きい。典侍（定員 4 人）ならば従四位に准位して、多くの女官たちの実務上のトップとなる。『枕草子』でも「女は、内侍のすけ。内侍」（新編 169 段 297 頁）、と羨まれる職である。また、自分の娘が天皇のそば近くに仕える意味は大きい。

良清娘も当然に典侍あたりを狙える地位にいる。良清は少女巻では、左中弁で、近江守という熟国の守である⁹⁴。この「左中弁」の官職名は小学館新編及び青表紙系によるが、河内本及び別本系の伝二条院讃岐筆のもの、陽明文庫本、及び保坂本では良清は「あふみのかみになりて右中弁なるそ」と右中弁となっている。しかし、良清は既に若紫巻で「かく言ふは播磨守の子の、蔵人より今年かうぶりを得たるなりけり」（新編①204 頁）と紹介されて、従五位下になっている。右中弁だと例外⁹⁵はあるが、紫式部の時代には原則として五位で任官する。その後四位になる者もある。四位になって間もなく左中弁に転じたりする。良清は叙爵から 15 年もたっており、栄耀栄華を極める光源氏の側近であるし、源氏の明石からの帰京後は濤標巻で衛門佐になっている（新編②303 頁に「良清もおなじ佐にて」とある）。

惟光も少女巻では、従四位下より上の官人が任ぜられる左京大夫となっているのだから⁹⁶、ここは、青表紙本どおり良清は左中弁であったと考える。左中弁は顯官である。任官時に既に四位で、そこから直接参議に、つまり公卿に上りうる地位である。このころ参議に昇るには 7 つのコース、つまり、「蔵人頭、大弁、左中弁、近衛中将、式部大輔、7 か国を歴任した受領、散位の三位」⁹⁷の一つで、実際、紫式部のころ、左中弁から参議に上った官人としては、藤原

⁹⁴ 「良清、今は近江守にて左中弁なるなん奉りける」（新編③少女巻 59 頁）。

⁹⁵ 例外には伊周があるが、伊周は永延 3 年（989 年）4 月 5 日藤原道隆在世中に従四位上右中弁になり、10 月 15 日には正 4 位下、正暦 2 年（991 年）の正月 26 日には 18 歳の若年で左中弁を経ずに、右中弁からいきなり参議に引き上げられた。

⁹⁶ 惟光は梅枝で参議に昇っていたことが知られる（新編③408 頁）。

⁹⁷ 任官の慣例をあげた『官職秘抄』に「参議。有七道。蔵人頭。大弁＜為位階上臈者先以大弁任之＞。近衛中将。有年勞左中弁。式部大輔、為帝王ノ師者。七箇国合格受領。散三位等也」とあって、左中弁は直接参議に昇り得る地位であった。『官職秘抄』は 1200 年ごろ成立。

佐理、源扶義、源俊賢、藤原忠輔などがあげられる。

- 藤原佐理は天禄元年（970 年）11 月に従四位下となり、天禄 3 年 12 月に左中弁。天延 3 年（975 年）正月従四位上、同年 10 月紀伊守となった。貞元 2 年（977 年）正四位下に叙せられ、天元元年（978 年）35 歳で参議に昇った。佐理は故太政大臣実頼の孫であり、出自はよかった。
- 源扶義は、永祚 2 年（990 年）8 月 30 日に従四位下に叙せられ同日、左中弁に任ぜられた。正暦 3 年（992 年）12 月正四位下に叙せられた。そして、正暦 5 年 8 月参議となった。源扶義も故左大臣の孫であった。
- 源俊賢は正暦 4 年（993 年）正月に従四位下、正暦 5 年 9 月に権左中弁と同時に右兵衛督。そして長徳元年（995 年）37 歳で従四位下のまま参議となった。俊賢は太宰権帥に落とされた源高明の三男であった。
- 藤原忠輔は左大臣在衡の孫だったが、父の国光は正四位下治部卿どまりで、公卿に列しなかった。忠輔は安和元年（968 年）文章得業生になり、東宮学士を経て寛和 2 年（986 年）大学頭。永延元年（987 年）権左中弁、正暦 4 年（993 年）正月、従四位上に、11 月に正四位下に叙せられた。正暦 5 年 9 月左中弁に転じ、長徳 2 年（996 年）左中弁 9 年の労をもって参議となった。53 歳だった。（以上 4 人『公卿補任』による。）

上記 4 人のうち 3 人が正四位下で、残り 1 人が従四位下で、左中弁に任ぜられているので、良清は少なくとも従四位下（従四位上あるいは正四位下であるかもしれない）という設定であったと考えられる。左中弁は 9 年勤めれば、格別の家柄でなくても公卿となることができる⁹⁸し、まして、良清は、太政大臣光源氏の須磨の流謫先まで伴をした側近であれば、9 年にかかるまい。一方の側近の惟光の娘が夕霧の室となり、多くの子女を設けて繁栄していくのに対して、良清は少女巻以後の消息は語られることはないのだが、公卿まであと一歩というところまで来ているのである。父親の官位が上がれば、娘の後宮における位置も重くなる。娘が力を持てば、家は繁栄する。女官であっても天皇のそば近くに仕える意味は小さくない。良清は、娘の出仕にはそれなりの期待をかけただろう。良清の任国の近江であるが、土田直鎮が公卿昇任者の受領経験国などを調べて、撰関期における各国を格付けしたなかで、近江は播磨とならぶ最上位国の筆頭であり（惟光の摂津は四番目のグループ）、近江の受領を経験して公卿に昇った者の率も高いのである（土田直鎮 1992）。良清は、熟国近江の受領の豊かな財力をもって、公卿の姫たちに見劣りしないようにできる限り華やかな舞姫支度を整えたものとする。

舞姫献上は多大の費用が掛かるので、献上者には何らかの見返りが与えられるのが通例であ

⁹⁸ 前掲の藤原忠輔が 996 年に 9 年で左中弁から参議に昇ったように。

った（非后妃の献上の場合）。見返りに期待されたものは通常、官位の上昇である。献上を命じるのに豊かな国の受領を選ぶなら、近江以外にも多数あったわけで、これがなぜ、わざわざ光源氏の側近だったのか。そして二条院では舞姫献上で大騒ぎしているのに、光源氏は良清の献上に対しては冷淡に見える。童女・下仕などを選ぶ際、「こんなにみんな優れているなら、もう1人分だって献上したいものだ」などと冗談は言っているが、もう1人分を良清にまわしてやるとか、良清の献上を援助した形跡はない。深読みすぎるかもしれないが、舞姫を献上させることによって良清の参議昇進を引き寄せてやろうとしたのではないだろうか。光源氏が良清献上に大幅援助をなどしてしまったら、参議昇任への理由づけはなくなってしまうのだ。

少女巻では弘徽殿の女御も王女御も16歳程度になっている。だから、15～16歳以上の娘を持つ公卿の中から、家柄・人柄をみきわめて、按察大納言と左衛門督を選びだしたのも、光源氏だったと考える。残り2人の舞姫たちが、どちらも光源氏の側近の娘たちであったのも光源氏の思惑である。万一、彼女たちが帝の寵を受けて皇子を産んでも、それは光源氏にとってはめでたいことでありさえすれ、困ることはない。（勿論二人は冷泉帝が光源氏の実子とは知らない設定だから、光源氏養女秋好の手前、娘たちが帝寵を受けることさえ歓迎されるとは思っていないだろうが。）これらの娘の所生でも、他に皇子ができなければ、皇位を継がせることも可能な予備になる。良清・惟光は逆境にあった光源氏にも従った忠実な家臣たちであり、今でこそ殿上受領であっても既に左中弁や左京大夫であり、公卿を目前にしている。（惟光娘は帝の侍妾とはならなかったが、惟光は梅枝巻までに参議に昇っている。）次代の立坊は冷泉帝讓位時まで待てるから、10年、20年の間に官位を引き上げていけばよい。つまるところ、この年、舞姫となって宮仕をする女たちはすべて、光源氏が選んだ、光源氏家にとって都合の良い貴族たちの娘であったと考える。

（2） その後の冷泉後宮から見た少女巻の献上者

そののち冷泉帝の後宮の様子がわかるのはこれから約4年2か月後となる。尚侍として出仕した髭黒大将北の方である玉鬘が承香殿東面に局すると、西に宮の女御がいて、秋好中宮、弘徽殿女御の他、左の大殿の女御がいる。「ことに乱りがはしき更衣たち、あまもさぶらひたまはず。中宮、弘徽殿女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては中納言、宰相の御むすめ二人ばかりぞさぶらひたまひける」（「真木柱」新編③382頁）と、後宮は勢力の微妙な均衡の上に平溢が保たれているさまが描かれている。この左大臣が何者であるか、河内本には右大臣とされるものもあったりして、古来疑問の多い人物となっている。中宮、弘徽

殿女御、王女御以外の女性たちの出自ははっきりしていない。小学館頭注は中納言・宰相の娘2人を更衣ととらえるが、「ことに乱りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず」と「さては中納言、宰相の御むすめ二人ばかりぞさぶらひたまひける」という文章は、1. みだりがはしき更衣たちはたくさんいなかった、2. 女御の他はこの二人だけがさぶらっていた、という2点は意味するが、中納言、宰相の御むすめが更衣だったのか、朧月夜などのように女官職にある実質キサキだったのかは、ここからだけでは断定はできまい。中宮、弘徽殿女御、王女御は少女巻に登場する。それ以外は、左の大殿の女御と中納言、宰相の御むすめ二人の3人である。中納言の娘については、本章第5節の（ロ）の「左衛門督」で検証したように、左衛門督は中納言であるから、この中納言の娘は左衛門督の娘であってもおかしくはない。

では「左の大殿の女御」が五節を献上した按察大納言の娘だったという可能性はどうか。按察大納言については、本章第5節（1）（イ）の項で挙げた天禄元年から長和5年までの14名の按察使のうち、為光、顕光、公季、時中、道綱の5名は筆頭大納言であった時に按察使に任じられた（兼任）。その他、兼家、重信、朝光、済時、実資の5名は次席大納言の時に按察使となり、重信、朝光は筆頭大納言となった後も按察使を続けている。源雅信は中納言ながら按察使となり天禄3年（972年）からは筆頭大納言である。雅信は、紫式部の仕えた彰子の祖父であるから、一層大きい存在である。つまり、紫式部が実際に見たり聞いたりする按察大納言の多くは筆頭大納言であったのだ。

按察大納言の中には左大臣まで昇進した者もいる。以下が左大臣になった按察大納言たちである。

	<u>按察使大納言になった年</u>	<u>左大臣になった年</u>
藤原仲平	延長6年（928年）	承平7年（937年）
源高明	天徳2年（958年）	康保4年（967年）
源雅信	天禄3年（972年）	天元元年（978年）
源重信	永観元年（983年）	正暦5年（994年）
藤原顕光	長徳2年（996年）	寛仁元年（1017年）

紫式部に近いところでは雅信、重信、顕光が左大臣に昇っている⁹⁹。

まとめると、紫式部の知っている按察大納言たちは筆頭大納言であることが多く、道長前後の左大臣たちが按察使兼任を経ていた事実を考えれば、少女巻で舞姫を献上した按察大納言が、4年2か月後に左大臣になっても不自然はない。

⁹⁹ 上記以外に、按察大納言は藤原公季も経験しているが、公季は右大臣から太政大臣になっており、左大臣は経験していない。藤原兼家も按察大納言になっているが、摂政＋右大臣から摂政＋太政大臣になっていて、左大臣は経験しなかった。

「左大臣の女」の後宮入りは『源氏物語』では他にもあって、梅枝巻では明石の姫君の東宮入内に遠慮して他の公卿たちが娘の入内を見合わせてしまうところで、光源氏の「後宮は競い合ってこそ」にうながされて、左大臣が麗景殿女御となる三の君を入内させる。この左大臣は、小学館新編では「ここにだけ出ている人物」となっているが、この梅枝の場面は光源氏 39 歳の春なので、年立て上は真木柱巻の左大臣より 1 年後でしかなく、少女巻の舞姫献上からでも 6 年後なので、真木柱巻の左大臣と梅枝の左大臣が同一人物であっても矛盾はない。今上にも東宮にも娘を配する¹⁰⁰というのは当時的大臣クラスなら当然の後宮政策である。次に示すように、在任期間の短かった左大臣たちもいたので、これらの左大臣をそれぞれ別人と考えることも可能ではあるが、真木柱の左大臣が少女巻の元按察大納言であってもおかしくない。

在任期間の短かった左大臣（寛平～寛弘）

任年月日

藤原良世	寛平 8 年（896 年）7 月 16 日	同年 ¹⁰¹ 12 月 25 日致仕
藤原在衡	安和 2 年（969 年）正月 27 日	同年 10 月 10 日致仕
藤原頼忠	貞元 2 年（977 年）4 月 24 日	翌年天元元年 10 月 2 日任太政大臣
源重信	正暦 5 年（994 年）8 月 28 日	翌年長徳元年 5 月 8 日薨去

但し、少女巻の左大臣が別人だとするには左大臣の交替があったはずで、それに伴って右大臣の転左や内大臣の昇格などの人事があつてよい。『源氏物語』で少女巻の内大臣は、藤裏葉で光源氏が准太上天皇となるまで光源氏である。内大臣が昇任していないのだから、左大臣の交替はなかったのではないかとすると疑問も起こったが、史実を見ると、正暦元年（990 年）、摂政太政大臣兼家の入道によって従一位の右大臣為光が太政大臣となった時は、空席となった右大臣に内大臣道隆は転ぜず、道隆は正二位のまま関白・摂政となって実権を握った（左大臣は源雅信で変更なし）。内大臣に変更がなかったからといってその間左大臣の交替がなかったともいえないのである。一方、内大臣は必ずしも右大臣・左大臣を経るとは限らない。光源氏も内大臣から右大臣・左大臣を経ていないし、光源氏の友にしてライバルの内大臣（元の頭中将）も内大臣から直接太政大臣に昇任している。この左大臣については結論は出せないが、同じであっても別人であっても、少女巻の按察大納言が、真木柱や梅枝の左大臣であっても不自然はない。仮にこの左大臣が少女巻の按察大納言であるとしても、東宮に入内する三の君の母の出自が高かったにせよ、三の君は少女巻時点では舞姫になりうる年齢ではなかった。（しかし、上に 2 人の娘がいたことになる。）

¹⁰⁰ 天皇あるいは東宮に姉妹二人を同時に配することはしないが。

¹⁰¹ 一説に翌々年の昌泰元年（898 年）。

「宰相の御むすめ」はどういう経緯で後宮入りしたのか、あるいは後宮入りできたのかははっきりしない。第一皇子が生まれていないのに、下層の公卿が戦列に加わるなど、弘徽殿女御の父が容認するとは思われない。権力者との軋轢はいつの世でも危険をとまなう。しかし、女官として出仕していた女性を帝が妻妾とするのは阻止できない。少女巻で良清の娘は宮仕をすることになっている。帝にさぶらっているこの「宰相の御むすめ」が良清の娘と断定することはできないが、そうでないとも言えない。梅枝巻（少女巻から6年後）までには既に惟光が参議になっているのだから、良清も既に参議になっているはずである。少女巻では良清は、惟光の左京大夫より参議に近い左中弁であったし、良清の近江国と惟光の摂津国を比べると、近江の国の方が熟国度も高く、受領としての格は高い。また、良清の項で述べたように、良清は舞姫を献上し、その費用を負担したのである（惟光は負担していない）。この「宰相の御むすめ」が良清の娘であってもおかしくはない状況はある。もし、この女が良清の娘でないとすれば、光源氏が後押しして光源氏に近い別の参議の娘を入内させていたのかもしれない。秋好は子ができないまま28歳になっているから、この女性が誰の娘であれ、妻妾にすることは光源氏が冷泉帝にそそのかしたと読めるかもしれない。

真木柱巻（光源氏37歳の10月～38歳11月）は、いわゆる玉鬘10帖の終わりに位置する巻であり、年立て上は4年2か月後の出来事ではあっても、作者が少女巻を書いている時点で（玉鬘系諸帖の作者と同じだとしても）、真木柱巻に描かれる冷泉帝の後宮模様を構想していた可能性はわからない。しかし、真木柱巻を書いた時には、作者は、少女巻から考えられる後宮状況とは矛盾しないように、ことさらに注意は払ったのではないだろうか。真木柱巻に描かれる冷泉後宮の状況が、少女巻の惟光娘を除く舞姫たち3人が冷泉帝の妻妾となっていたとしても矛盾の起こらないものになっているということは、作者も少女巻の舞姫献上の宮仕は帝寵に結びつくものと考えたからではないだろうか。

おわりに

少女巻の冷泉後宮では光源氏の養女秋好は24歳になっているが、まだ子女はできていない。弘徽殿女御と王女御も16歳程度になっている。冷泉帝は15歳になって、子女を儲けることを考える年齢となった。父親としては冷泉帝の子孫繁栄が望まれる。養女秋好が既に立后してゆるぎない地位を獲得した上は、冷泉帝の後宮をもう少し賑やかにして孫の誕生がほしいはずの光源氏だが、帝の皇子となれば皇位をめぐる政治的思惑と無関係ではおられない。そして光源

氏の息子は冷泉帝だけでなく、嫡子夕霧もいる。夕霧は政界で生きていくのである。誰が即位するかで政界の勢力図は塗り変えられる。弘徽殿が第一皇子を産めば、光源氏にとっての孫であっても、光源氏家にとっては血縁関係は主張できず、内大臣家の外孫として、内大臣家に外戚として突出した勢力を与えることになる。光源氏にとって望ましいのは秋好が第一皇子を挙げることである。秋好腹の皇子が即位すれば、夕霧は外伯父となり、政界の中樞で安泰である。しかし、弘徽殿女御が国母となれば、内大臣家の政権下、夕霧の太政大臣就任は難しくなるだろう。もう1人の女御、王女御の父式部卿の宮は簡単に光源氏を「裏切った」人物である。宮の息子たちは源氏となって政界進出を狙っている。この一家が外戚になれば、これまた、夕霧の前途は多難である。秋好が皇子を産めばよいが、産めなければ、次善の策は、夕霧を超えられない公卿を外戚とするか、あるいは内大臣に対抗できる勢力を作り、二大あるいは三大勢力を牽制させ合いながら、そのバランスの上に天皇親政をすすめることであろう。これには弘徽殿が第一皇子の母となるのは不都合なのである。

かくて光源氏は2人の息子たちのために五節の舞姫の宮仕を考え出した。冷泉帝のためには子孫繁栄と天皇親政のため、嫡子夕霧のためには政界での第一の地位を保証するためである。現在の2人の女御たちの父親への刺激を最小にしながら、それを実現させる手段として、女御入内の要請でなく、舞姫たちの宮仕の形をとって、キサキの数を増やす。舞姫の宮仕自体は光源氏が冷泉帝に影で示唆したと考える。光源氏を実父として孝養も尽くしたい15歳の冷泉帝は、自分のために計ったという父の案に反対する理由はない。実際、若い冷泉帝は美しい舞姫たちが気に入って、五節舞終了のその日から側におきたいとさえ思ったようである。光源氏は周到に、例年より大人びた女子のいる公卿を調べあげ、しかるべき家柄と思われる按察大納言と左衛門督の公卿2人に献上を命じさせた。残る2人の舞姫は自分の側近である惟光と良清に各々の娘を出させる。こちらは上級実務女官としての出仕になるが、惟光と良清は早晚公卿に昇る地位にいる。万一帝の寵を受けても問題ない人選であった。つまり、この年の舞姫4人はすべて、光源氏派あるいは内大臣に対抗しうる勢力として光源氏が厳選し、その娘たちを後宮へ送り込んだのである。この舞姫たちが宮仕したとして、のちに梅枝巻に示される冷泉後宮の状況とは矛盾しない。舞姫宮仕の立役者は光源氏であり、二人の息子の将来を慮った巧妙な仕掛けであった。

第2章 少女巻の夕霧と五節

はじめに

少女巻で夕霧は、父光源氏の献上する舞姫となるために二条院にやってきた惟光の娘を垣間見て、五節の終わった後に懸想文を送る。のちに夕霧の室となって、夕霧との間に多くの子女を儲けることになる惟光娘（藤典侍）との出会いがここで創出された。

少女巻の初めの春、夕霧は12歳で元服したが、四位（従四位下）に直叙されるだろうという思惑を裏切って、低位の六位（正六位上）に叙せられた。日ごろは六位の浅葱色の袍を着るのが嫌で宮中へ出かけようとはしていなかった夕霧だが、この日は「五節だから」と特別に許しがでたらしく、浅葱の袍以外のいでたちで、夕霧はいそいそと宮中へ出かけてゆく。

夕霧が五節の内裏へ出かける様子は「五節にことつけて、直衣などさま変れる色聴されて参りたまふ」とある（新編③62頁）。夕霧が元服して六位に叙せられるくだりは、

四位になしてんと思し、世人もさぞあらんと思へるを、まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからんもなかなか目馴れたることなりと思しとどめつ。浅葱にて殿上に還りたまふを、大宮は飽かずあさましきことと思したるぞ、ことわり
にいとほしかりける。（新編③21頁）

とある。現実では一世源氏の子の四位直叙は無理であろうことはさておいても、ここで第一の疑問は「殿上に還りたまふ」である。六位の夕霧は、地下ではなく昇殿を許されていたというのである。しかし、昇殿を許されるには最低でも五位を帯していなければならないはずであったから、正六位の夕霧が元服直後、どのような資格で昇殿できたのか、現在の刊本で、この点に明らかにしているものはない。「浅葱にて殿上に還りたまふ」の現行刊本の頭注・脚注は以下の通りである。

- 小学館新編③21頁、「夕霧は童殿上していたので（濔標2284頁）宮中に『還』るとした」。
- 岩波新大系②281頁、「夕霧には童殿上の経験があったので（濔標99頁）、六位の官人として殿上を許されることを『殿上に還る』と表現した」。
- 岩波旧大系②276頁、「もと童殿上をして居たから、元服して後に昇殿した故『帰り給ふ』と言った」。

- 新潮集成③221 頁、「夕霧は童殿上していたので（潯標 15 頁）、元服後、六位でふたたび殿上を許されたことをいう」。

解説書では、『源氏物語の鑑賞と基礎知識——少女』には言及はなく、わずかに玉上琢也の『源氏物語評釈』（これ以降『玉上評釈』と略す）が「六位に叙せられ、蔵人に任ぜられたうえで、昇殿を許されたのであろうか」（『玉上評釈』「乙女」322 頁）としている。古注釈でもこの点に関して疑問は出なかったらしい。『花鳥余情』、『細流抄』、『岷江入楚』には、「夕霧は童殿上していたので還るといった」旨の注があるだけで、それは「還る」という意味の解説でしかなく、どうして六位で昇殿できたかについては触れていない。

昇殿とはそもそも清涼殿の殿上の間に伺候できることであるが、昇殿できる者は、通常まず五位以上でなければならない。四位・五位でも昇殿を許されていない者も少なくないが、彼らは「諸大夫」と一括される。例外として、蔵人は天皇に近侍するために、六位でも昇殿できることは知られているが、果たして、『玉上評釈』にいうように、夕霧は蔵人に任ぜられて昇殿を許されたのだろうか。

まず、本章の第 1 節で夕霧の蔵人補任の可能性について考察する。続いて、第 2 節で「五節にことつけて、直衣などさま変れる色聴されて参りたまふ」と浅葱色から解放されて夕霧は内裏へ出かけてゆくのだが、いったい何を着ていったのか考証する。

第1節 「殿上に還る」 夕霧はなぜ六位で昇殿できたのか

(1) 蔵人の可能性

(イ) 年齢から

蔵人は、六位も含めて天皇の側近である名誉と誇り、それに伴う権勢を伴った羨望の役職だった。希望者は多く、公卿の子弟も競って望む職でもあった。

『玉上評釈』にいうように夕霧は蔵人になったのだろうか。蔵人には定員があり、紫式部の時代、おおむね五位蔵人3人、六位蔵人4～5人で、頭2人を入れて総勢10名で業務はフル回転である¹⁰²。この時代の蔵人は劇務である。数えて12歳の夕霧は、今なら10～11歳、小学5～6年生に過ぎない。蔵人は、年端のゆかない「児童」が、勉学の片手間で務まるような職ではなかったと思われる¹⁰³。『蔵人補任』で六位の蔵人の年齢の記載は多くはないが、一条朝の六位蔵人で、『蔵人補任』に年齢の記載のあるのは、藤原信経、藤原広業、菅原孝標、藤原資業の4名だけであるが、補任時の年齢はそれぞれ27、21、28、21歳であった。まれではあるが、この時代にも10代の年少の蔵人がいたことはあった。以下に示す。(特に注していないものの出典は『蔵人補任』。)

- ① 藤原伊周¹⁰⁴ (14歳)。権大納言道隆の息子。寛和3年(永延元年)987年10月17日、五位蔵人に補任。しかし、伊周は3か月も経たない翌年の正月7日に従四位下となって蔵人所を去った。初めから、在任は短期が予定されていたと考えられる。
- ② 藤原道雅(16歳)。伊周長男。『御堂関白記』寛弘4年(1007年)正月13日条の道雅の蔵人補任を記した条に、「若年と雖も故関白鍾愛の孫なり。仍りて補せらるるなりてへり。兵部丞広政・惟規等なり。所雑色・非蔵人等を置きながら、件の人を補せらるる事、当時、所に候ずる蔵人、年若く、又、任すべき非蔵人・雑色等も年少なり。仍りて件の兩人は頗る年長にして、蔵人に宜しき者なり。仍りて補せらるる所のみ」¹⁰⁵とある。順番なら蔵人に任官できる蔵人所雑色や非蔵人もまだみんな若いといって差し置いて、故関白(道隆)の孫であるからという理由をもって、16歳の若さで道雅が五位の蔵人に補せられた。しかし、他の蔵人

¹⁰² 蔵人頭は2名で、1名は弁官から、もう1名は近衛府から選ばれるのが原則だった。しかし、『蔵人補任』をみると例外も多いようだが。

¹⁰³ 院政期になると蔵人も変化していく。

¹⁰⁴ 伊周は次子であるが、長子の通頼は祖父兼家の養子になっている。

¹⁰⁵ 読み下しは国際日本文化研究センターの撰関古記録データベースによる。

たちも、蔵人候補の所雑色・非蔵人も若年であるので、心もとないからだろう、「頗る年長で、蔵人に宜しき者」である兵部丞広政・惟規の兩人が蔵人に加えられた。もっとも、16歳の関白孫が五位蔵人であるのに対して、ベテランの広政（庶政）、惟規は六位蔵人であった。しかし、一面、この記事にも「若年だけれど故関白の孫だから」とあることから、16歳は蔵人に任官するには若年であるという認識があったことが推測される。余談であるが、この時、五位蔵人となった故関白孫こそが、後にいろいろな事件を起こし、世に荒三位とか悪三位という異名をとった道雅である。道雅は、三条皇女で前伊勢斎宮の当子内親王と密通したり、敦明親王の従者に重傷を負わせたり、はては花山院皇女（但し落胤）を殺害させた犯人ともいわれている。道雅は、結局、寛弘4年（1007年）正月から寛弘6年（1009年）正月まで丸2年五位の蔵人を務めた。

- ③ 藤原能信（16歳）。道長の四男で明子腹。寛弘7年（1010年）2月、蔵人に補せられた。能信は補任の約一年半後の寛弘8年10月に従四位下となり蔵人所を去った。

時代が下って院政期になると幼年の蔵人が頻出するようになる。寵臣などの子弟や摂関家と関係の深い家司たちの子供が幼年で名ばかりの蔵人に任じられるケースが増えるのである。以下に示す。（『蔵人補任』から拾った¹⁰⁶。父親たちについては主として『平安時代史事典』を参照した。）

- ① 藤原家保（15歳）。家保は白河院の乳母子の藤原顕季の次男であった。
- ② 高階仲章（11歳 [『中右記』では12歳]）。承德2年（1098年）、『蔵人補任』の注として「十一歳補侍中、未有此例、顕季朝臣二男家保、往年十三補侍中、希有例也。何況十一乎、藤原盛輔叙爵替」とあって、やはり、一般的には、「侍中（蔵人）になるには、13歳でも稀であるのにいわんや11歳など論外だ」と考えられていたのである。仲章の父の為章は白河院の院司受領で、上皇皇女の家司も勤めた人物である。
- ③ 藤原顕頼（14歳）。嘉承2年（1107年）に補任。父の顕隆は白河院の近臣。
- ④ 藤原定経（10歳）。仁安2年（1167年）に補任。藤原（吉田）経房の息子。父の経房は実務に有能な官僚で、永万2年（1166年）六条天皇の五位蔵人、仁安3年（1168年）高倉天皇蔵人で、建久9年（1198年）に権大納言まで昇ったが、もとは摂関家の家司であった。
- ⑤ 藤原邦兼（11歳）。仁安2年（1167年）補任。
- ⑥ 藤原為賢（11歳）。仁安2年（1167年）補任。
- ⑦ 高階経仲（11歳）。仁安3年（1168年）補任。経仲の父の高階泰経は後白河院の院司・別

¹⁰⁶ すべてを尽くしてはいない。

当などを勤めた人物。

藤原定経、藤原為賢、藤原邦兼ら 11 歳の子供たちが蔵人となった仁安のころには、蔵人の人数は膨れ上がっていた。仁安 2 年（1167 年）六条天皇の蔵人にはこれらの幼年蔵人を含めて、14 名もの六位蔵人がいたし、仁安 3 年高倉天皇即位後には 11 人もいた。これだけの人数が実際に勤務していたわけではなく、幼年蔵人たちは 1～2 か月で交替が多い¹⁰⁷。幼年蔵人が続出した院政期であっても、無能力な子供たちが長期にわたって蔵人を勤めることはなかったようである。高階氏など、これら幼年蔵人たちの父親は、当時は権門家ではなかった。この時代までには上級貴族の子弟は年爵などを利用して五位に直叙されるのが一般的になっていたから、「六位」の蔵人は彼らにとっては既に名誉の職ではなく、代わって、院の近臣の子弟などの、それなりの地位への登竜門となっていたのだ。

これらの幼年蔵人が頻出した時代は紫式部よりは後代だから、紫式部の知るところではなかったが、六位蔵人の相対的地位の下降は、紫式部の時代にも既に現れており、権門の子弟が蔵人に補せられる場合には、若年で蔵人に補された伊周も、道雅も、能信もみな、六位ではなく、五位の蔵人であった。年齢的には、少数の例外であった若年の、道雅、能信も、補任時には 16 歳、例外中の例外で 3 か月だけの蔵人となった伊周さえ 14 歳にはなっていた。数え 16 歳は現在なら 14～15 歳、夕霧の 12 歳とは同列にはできない。また、夕霧は六位であるから、権門の子弟の補せられる五位蔵人にはなりえない。蔵人は実務に長けた有能な官人が求められていたのであり、例えば近衛府の次将のように、権門の子弟が、弓馬の道は知ることなく、ただ飾り太刀を帯してきらびやかに装えば事足りた職掌ではなかった。まして、光源氏の教育方針により、夕霧は花散里の下で、大学入試（寮試）にむけて、学者を招いてのカン詰め状態で勉学に励むような体制が敷かれていた間、実務の才が求められていた六位蔵人への 12 歳の夕霧の任官の可能性は当時の宮廷社会の中では非常に低いことがわかる。

（ロ） 「浅葱の袍」から

実は、「夕霧は蔵人ではなかった」ことを示す確かな証拠が本文中にあったのである。それは「浅葱の心やましければ、内裏へ参ることもせずものうがりたまふを、五節にことつけて、直

¹⁰⁷ 例えば、藤原家保は嘉保元年（1094 年）6 月 13 日に補任して、7 月 16 日には去った。藤原顕頼は 12 月 9 日補で正月 24 日去、為賢は 9 月 6 日補で 10 月 20 日去、定経は閏 7 月 12 日補で 9 月 5 日去、高階経仲は 8 月 27 日補で 9 月 12 日去、(『蔵人補任』による)。彼らは、記録が見いだせない家保を除いて皆、従五位下に叙されて六位蔵人を去っているので、任六位蔵人は叙爵へのステップだったと思われる。

衣などさま変れる色聴されて参りたまふ」(新編③62 頁) という文章にある¹⁰⁸。今までは、夕霧は、自分が六位でしかないことを自他にあからさまに示す浅葱の袍を着るのがいやで、内裏に参内しようとはしなかったのだが、五節の日には位袍以外の色の衣装を着ることが許されて、内裏に出かけていくというのである。もし、夕霧が蔵人だったらこの言葉は出てこない。蔵人は五位でも六位でも青色の袍を着ることを許されていたからである。夕霧が六位蔵人であったとしたら、浅葱の袍は着る必要はなく、いつでも、青色の袍¹⁰⁹で参内できていたのである。

青色の袍は、蔵人になると任官後数日で勅許が下りる。青色の袍とは、天子の麴塵袍と同色である。しかし、天皇の麴塵袍と全く同じかという、そうではない。織とか文様に差はある。

紫式部の時代に六位蔵人が青色の袍の日常的に常用を許されていたことは『枕草子』からも確認できる。清少納言は、ことのほか蔵人の青色の袍に思い入れがあったようだ。蔵人は日常的に青色の袍の着用を許されていたことを示す『枕草子』の章段は次の通りである。

1. 73 段。場所は内裏の局である。

几帳の帷子いとあざやかに、裾のつまうち重なりて見えたるに、直衣のうしろに、ほころび絶えすぎたる君達、六位の蔵人の、青色など着て、受けばりて、遣戸のもとなどにそば寄せてはえ立たで、塀の方にうしろおして袖うち合はせて立ちたるこそをかしけれ。
(新編 128-129 頁)

直衣姿の若い公達や、青色の袍を着た六位の蔵人¹¹⁰が得意げに遣戸(引き戸)のもとなどに集まって、塀の方に背中を押し付けて袖を掻き合わせて¹¹¹立っている姿が書かれている。これも行事の日ではなく、普段の冬の夜の情景である。

2. 84 段の「めでたきもの」の列举に六位の蔵人が入る。「六位の蔵人。いみじき君達なれど、えしも着たまはぬ綾織物を心にまかせて着たる青色姿などの、いとめでたきなり」(新編

¹⁰⁸ 「色聴されて参りたまふ」の部分には諸本間に揺れはない。

¹⁰⁹ 『職原抄』(1340 年成立)にはなるが、蔵人の極臈は天皇の御衣(麴塵袍)を下賜されることがあるので、それは(他の蔵人の青色との区別において)「麴塵袍」と呼ばれ、その他の同色袍は、それに対して「青色の袍」と呼ぶともいうとある。

¹¹⁰ 小学館新編『枕草子』73 段の「青色など着て」の頭注には「蔵人の袍。天皇の常用であるが、蔵人は晴れに日に限って着用を許された」とあるが、晴れの日に限って許されるのは、蔵人以外の者たちである。蔵人は特別な時でなく、青色の袍を、日常的に着ることができた。また、頭注は続けて、麴塵袍は「天皇の常用」とあるというが、麴塵袍は天皇の略礼装であり、「常用」とはいえないだろう。『枕草子』73 段は特別な時ではなく、普通の時の情景である。

¹¹¹ 「掻き合わせ」は小学館新編の訳による。原文「袖うち合はせて」には「かしこまって遠慮した態度と見る」と頭注がある。

165 頁)とあるように、身分の高い君達でも勝手に着ることのできない青色の綾織物を思いのままに着る六位の蔵人は、清少納言にとってはめでたきものと映る。六位でも蔵人なら青色(且つ綾織物)を思いのままに着ることができるのだ。

3. さらに、190 段にも蔵人の青色の袍の言及がある¹¹²。

内の局などに、うちとくまじき人のあれば、(中略)几帳の方に添ひ臥して、うちかたぶきたる頭つきのよさあしさはかくれざめり。直衣、指貫など几帳にうちかけたり。六位の蔵人の青色もあへなむ。緑衫はしも、あのかたにかいわぐみて、暁にもえさぐりつけでまどはせこそせめ。(新編 331-332 頁)

女房と局で夜を過ごした男が六位の蔵人で、その青色の袍が几帳にかけてあるのはまあいい。これが緑衫すなわち六位とはっきり分かる浅黄色の位袍だったら、興ざめだから、袍を隠してしまって、朝慌てさせてやりたいものだと言っている。これは、特別な行事の日の夜のことでなく、普通の夜である。

4. 274 段。

雪こそめでたけれ。「忘れめや」などひとりごちて、しのびたることはさらなり、いとさあらぬ所も、直衣などはさらにも言はず、うへの衣、蔵人の青色などの、いとひややかに濡れたらむは、いみじうをかしなべし。緑衫なりとも、雪にだに濡れなば、にくかるまじ。昔の蔵人は、夜など人のもとにも、ただ青色を着て、雨に濡れても、しぼりなどしけるとか。今は昼だに着ざめり。ただ緑衫のみうちかづきてこそあめれ。衛府などの着たるは、まいていみじうをかしかりしものを。(新編 428 頁)

この段では、雪に濡れた蔵人の青色の袍はたいへん素敵だと言っている。たとえ六位の緑衫でも濡れたのはそんなに悪くないとは続けるが。これは普通の雪の日のことであって、

¹¹² この引用部分については、以下に小学館新編の現代語訳を引用する。

「宮中の局などに、気の張る男性がいるので、こちらの火は消してあるが、そばにある火の光が、隔ての物の上などから射し通っているの、暗いとは言うものの、物の形はほのかに見えるのだが、丈の低い几帳を引き寄せて、昼はそうに近々と差し向いになることはない人であるから恥ずかしく思って、几帳に近い所に横になって臥している女房の、その傾いた頭の形のよいか悪いかは、隠れようもなくわかるだろう。直衣や指貫などは几帳にうち掛けてある。六位の蔵人の青色の袍も、まあ似合いというものだろう。緑衫ということになると、部屋の後ろのほうに輪のように丸めて、帰る暁なっても男が探し当てることができずにまごまごするようにしてやりたい」。

特別な行事の日ではない。但し、「昔の蔵人」といい、「雨に濡れても、しぼりけるとか」と伝聞形で書かれているので、清少納言が実際には見ていない情景ではある。しかし、今の六位蔵人は、「昼だに着ざめり」と、蔵人が最近では昼間の勤務時間中でさえ、青色袍でなく六位の浅葱色を引きかぶっていると嘆いている。ましてや衛府の役人を兼ねる蔵人がこの青色袍を着るとますます魅力的なのに、と清少納言はいう。

5. 清少納言が「蔵人はいつも青色を着ているのがいいのに」というのは、274 段だけでない。292 段「左右の衛門尉を判官といふ名つけて」にも、「うへ衣の長く所せきをわがねかけたる、いとしきなし。太刀の後にひきかけなどして立ちさまよふは、されどよし。青色をただ常に着たらば、いかにをかしからむ」（新編 445-446 頁）という文がある。蔵人は兼官であり、六位蔵人は検非違使の尉（衛府）の兼任も多い。衛門尉で六位の蔵人を兼ねている者が、袍の裾の部分をつまみ上げて刀の後ろに引きかけたりして、歩き回っているさまは良い。青色の袍をいつも着ていたらどんなに風流だろうかと、ここでも青色の袍への思い入れを書いている。蔵人は青色を日常、着ていていいのに着ていないことを残念がっているのだ。

以上から、『源氏物語』の書かれたころは、日常的に青色を着ない者も増えたとはいえ、六位蔵人は昼夜を問わず（勤務時間中もそれ以外にも）日常的に青色を着ることができたことが読み取れる。青色の袍は束帯である。蔵人は天皇の使いに立つことも多いので、常に束帯で参朝することが要求されていた。もし夕霧が六位の蔵人に補されていたとしたら、夕霧が「我よりは下臈と思ひおとしたりし」「大将、左衛門督の子どもなど」は、『枕草子』84 段でみたように、特別の時以外は着ることの許されていない青色の袍を、自分は着ることができると、意気揚々と参内もできたのである。「浅葱の心やましければ、内裏へ参ることもせず…」と、「浅葱」以外の選択がなかったというところで、夕霧は六位の蔵人ではなかったことは明らかであったのである。

では、六位で昇殿を許されていたが、蔵人でなく、参内には浅葱の袍を着なければならなかったというのはどういう身分があるのだろうか。

（2） 蔵人所と昇殿

職掌柄、六位で昇殿を許されていた蔵人の詰める蔵人所には、蔵人の他、1) 非蔵人、2) 蔵人所雑色、3) 蔵人所衆、4) その他、滝口、鷹飼などが所属していた。この中で、鷹飼と滝口

は夕霧の職としては考えられないので除外する。

前項（イ）で引いた『御堂関白記』寛弘4年（1007年）正月13日条の「所雑色・非蔵人等を置きながら、件の人を補せらるる事、当時、所に候ずる蔵人、年若く、又、任すべき非蔵人・雑色等も年少なり」という文では、「蔵人所には所雑色・非蔵人がいるのに件の兩人（兵部丞広政と惟規）を補任した」といっているのだから、蔵人所には雑色・非蔵人という職掌があつて、彼らは六位の蔵人に欠員ができた場合の優先的な蔵人候補者であつたことがわかる¹¹³。

ここで蔵人所の非蔵人・雑色と昇殿関係について考証する。

（イ） 非蔵人

『御堂関白記』でも蔵人候補者に挙げられた非蔵人とは、「蔵人ではなく、蔵人になる資格はあるが、蔵人ではない人たち」である。『国史大辞典』「非蔵人」の項（武部敏夫）の冒頭には「良家の子弟の六位に叙せられている者の中から選任され、昇殿を許されて殿上の雑務に従事するのを職務とした者をいう」とあり、「その職名、蔵人にあらずして蔵人のごとく昇殿して勤務することによるものという」ともいう。『日本国語大辞典』の「非蔵人」には「（1）平安以来蔵人所の職員。良家の子で六位になっている者からえらばれ、昇殿を許されて蔵人の下で宮中の雑用を務めるもの。四人ないし五・六人が補任された。院庁、東宮にも置かれた。非職（ひしき）の者」（いずれも下線は引用者）¹¹⁴とある。

夕霧が非蔵人だった可能性について、この時代の非蔵人の出自を考えることとする。『小右記』、『権記』、『御堂関白記』、『左経記』、『春記』で、「非蔵人」、「雑色」を検索すると圧倒的に雑色が多い¹¹⁵。雑色は蔵人所以外にもいるのでそれらを除いても、蔵人所の雑色に関する記録は多い。これに対して、非蔵人はわずか8件しか見出せなかった。寛弘5年（1008年）までには3件、長和5年（1016年）までを入れても為理、左衛門尉成行、藤原登任、藤原範永の4人だけである。この4件を調査する。

① 為理

寛和元年（985年）10月25日、大嘗祭の御禊の殿上の留守を、仰せによって非蔵人の縫殿助の為理が勤めたという（『小右記』）¹¹⁶。この時代の「為理」を探すと、菅原為理がいる

¹¹³ 非蔵人・所雑色から蔵人に補せられた例は史上何例も確認できる。

¹¹⁴ 『職原抄』下「蔵人所」に「非蔵人。无員数。重代ノ諸大夫ノ中。未ル補セ蔵人ニ之間先遂ク昇殿ヲ。此ヲ云非蔵人ト。又云非職之者ト。不奉行セ公事ヲ。不着禁色ヲ」（群書類従本 630 頁）とある。

¹¹⁵ 国際日本文化センターの撰関期古記録データベース。

¹¹⁶ 大日本古記録データベース。

¹¹⁷。菅原為理は菅原道真に太政大臣が贈られる時の勅使を勤めた。「正暦四年五月廿一日贈正一位左大臣。勅使武蔵権守藤原幹政。在躬子。淳茂孫也。同閏十月十九日贈太政大臣。勅使散位從五位下菅原為理。幹政姪。輔正子也」(下線付加。『菅家御伝記』[院政時代]より¹¹⁸)。寛和元年(985年)の非蔵人の縫殿助為理は正六位だが、この人物が正暦4年(993年)には從五位下であっても、同一人物としておかしくはない。非蔵人の縫殿助が菅原為理だったとすると父親は菅原輔正で、輔正は天暦元年(947年)26歳で文章得業生となって以来学者畑を歩み、安和元年(968年)に昇殿を許されている。正暦3年(992年)從三位の非参議となり長徳2年(996年)には参議となったが、寛弘4年(1007年)83歳で参議を辞して、代わりに息子の為理の三河守を願い出ている。輔正は没後正二位を追贈された人物であるが、寛和元年(985年)には64歳で太宰大貳兼式部権大輔だったから、この勅使が菅原為理ならばこの非蔵人は太宰大貳の息子であったことになる。

② 左衛門尉成行

寛弘5年(1008年)10月16日、一条天皇の上東門院へ行幸にあたって、「左衛門尉成行<非蔵人>」が、蔵人左兵衛尉惟任と共に大床子を昇いて南階より退下した(『小右記』)。

(実資はこれを大失なりと批判している。)この時代の「成行」は、高階成行であろう。高階成行は長和3年(1014年)正月には丹後守になっている(『小右記』)。また、万寿4年(1027年)3月16日条で春宮大進に任じられている(『小右記』)。娘は菅原孝標と結婚して、『更級日記』の著者の継母となっている。

③ 藤原登任

長和2年(1013年)正月15日、非蔵人から蔵人に登用された(『小右記』)。藤原登任は公任の家人らしい。『栄花物語』において、藤原教通室となっていた藤原公任の娘が出産にあたって、しばしば登任の三条の邸宅に移っていたとの記載がある(新編48-49頁など)。

④ 藤原範永

『御堂関白記』長和5年(1016年)年12月25日条「蔵人を定む。文章生平範国、本雑色。藤原範永、本は非蔵人。雑色に橘成任、本は所の衆」¹¹⁹(下線引用者)。範国は文章生に

¹¹⁷ この時代にはもうひとり「ためまさ(為雅)」がいる。こちらの為雅は、藤原文範の次男で、文範は寛和元年(985年)には中納言になって13年である。文範は永延元年(987年)中納言と民部卿を辞して為雅の伊予被官を申し出ている(『小右記』永延元年正月16日条。大日本古記録)。『公卿補任』では、これは永延2年正月のことで、伊予ではなく備中申任(民部卿は元の如く)と食い違いはある。いずれにせよ、藤原文範の子の為雅だとすると、寛和元年当時は、文範は既に中納言であったので、勅使が藤原為雅だったとすれば、この非蔵人は中納言の息子であったことになるが、とりあえず、漢字表記が「為理」であるのと、道真への贈太政大臣の勅使を勤めたのであるから、菅原姓がふさわしく、この非蔵人は菅原為理であろう。民部卿。正月一辞中納言。卿如元。次男以為雅申任備中守(頭二年。三木大弁五年。中納言十八年)。

¹¹⁸ 『天満宮託宣記』(群書類従本167頁)にも贈太政大臣の勅使として、為理の記載がある。

¹¹⁹ 読み下しは撰関古記録データベースによる。

なっており、雑色を既に約2年務めていた。

(ロ) 蔵人所雑色

蔵人所には非蔵人の他、蔵人所雑色もいた。『貞信公記』承平2年(932年)5月18日に蔵人所の雑色5人が定められ、また同年11月4日に平時常と藤原有茂が蔵人所の雑色となったという記述がある。平時常と藤原有茂については出自は明らかではないが¹²⁰、前述(イ)で挙げた『御堂関白記』寛弘4年(1007年)正月13日条からも、六位の蔵人に欠員ができた際には、雑色もまた、優先的に蔵人に補せられることができたことがわかっている¹²¹。この場合、雑色は、非蔵人は経ず、直接に蔵人補任である。雑色→非蔵人→蔵人というヒエラルキーにはなっていない。『御堂関白記』でも「所雑色・非蔵人」と雑色が先に来ていることなどから、非蔵人と雑色の間に明白な上下関係はなかったようである。蔵人所雑色も昇殿を許されていたことは、例えば『権記』正暦4年(993年)正月9日条からも確認できる。

九日、戊戌。内に参る。昇殿等の事を定めらる。「蔵人頭右中弁俊賢、去ぬる七日、四位に叙す。即ち還復す」と云々。蔵人修理亮源惟時<中納言時中の第三男>・蔭子藤原修政<所の雑色>・左馬頭相尹・右近少将宣方・左少将隆家。已上、元のごとく昇殿す。備後守藤原方隆<殿上>。蔵人所の雑色、文章生橘為義。検非違使、左衛門尉藤原忠親・大中臣宣政、右衛門尉源遠相・平倫範。東宮蔵人、紀致頼。宣方・隆家両重将・左衛門の大夫藤原通頼、元のごとく昇殿す。(下線付加)

所雑色である藤原修政が元のごとく昇殿し、蔵人所の雑色、文章生橘為義も、元のごとく昇殿しているのである。蔵人所雑色からも蔵人になった者たちは他にもいる。以下は『蔵人補任』から拾った雑色経験のある蔵人たちである¹²²。

① 藤原修政 (蔭子・元蔵人所衆。『蔵人補任』) 正暦4年(993年)正月9日六位蔵人に補任。『権記』の正暦4年正月9日の昇殿の記事には「蔭子藤原修政<所の雑色>」。

② 重家 長徳元年(995年)8月1日雑色見任。

¹²⁰ 大日本古記録データベースと群書類従で検索した。

¹²¹ 時代は下るが『禁秘抄』にも、蔵人所雑色は「(前略) 代々皆転蔵人。仍公卿子孫。又ハ可然諸大夫多補之。近頃モ少々相交。但多ハ良家ノ子」(群書類従本)とある。

¹²² しかし、この記録は、雑色たちの進路についての記録ではなく、『蔵人補任』の中から雑色出身者を拾っただけであるから、例えば、上級貴族の子弟は、雑色は勤めても蔵人にはなかったなどということがもしあったら、ここでは拾えていない。

- ③ 源方弘（あるいは奉光と同一人物か） 長徳 2 年六位蔵人補任。文章生・元蔵人所雑色。
- ④ 橘行資 長徳 2 年補任 元蔵人所雑色。
- ⑤ 藤原季任（元蔵人雑色） 寛弘 6 年（1009 年）正月補任。
- ⑥ 源頼国（進士・元蔵人雑色） 寛弘 6 年正月補任。酒吞童子退治で知られる頼光の長男。
- ⑦ 藤原章信 寛弘 8 年（1011 年）正月 8 日六位蔵人になったが、半年もたない 6 月の一条天皇の譲位とともに院（一条）の蔵人になった。寛仁 4 年（1020 年）には右衛門権佐正五位下（『検非違使補任』）として、2 月 5 日、こんどは五位蔵人となった。
- ⑧ 藤原頼成 寛弘 8 年（1011 年）正月蔵人所雑色となる。具平親王のご落胤といわれる。

上記のうち、①の修政は蔭子として叙位されているが、父親は藤原為頼（『尊卑分脈』）で、長徳 4 年（998 年）に従四位下で没している。為頼は師貞親王（花山院）の側近だったが、花山院退位とともに出世の道は止まっていた。為頼は紫式部の伯父である。修政自身も公卿に昇ることはなかった。②の「重家」については『朝野群載』第五／朝儀「蔵人所月奏」長徳元年（995 年）8 月 1 日に「雑色正六位上 重家」という記述がある（姓の記載はない）。この重家は、藤原顕光の長男で承香殿女御元子の兄にあたる人物と考える。顕光の長男重家は長徳 5 年（999 年）正月 10 日に五位の蔵人に補せられているからである。同時代に蔵人所に「重家」が 2 人いたとしたら姓を冠して区別しただろうし、姓なしなら藤原の可能性は高い。顕光は左大臣まで昇った人物であり¹²³、長男重家は母も内親王という出自である。藤原重家は、顔立ち秀麗で光の少将と呼ばれたという（角田文衛 1963：52）。この藤原重家は長徳元年（995 年）には 19 歳だった（長保 3 年 [1001 年] には出家してしまい父を嘆かせる）。長徳元年（995 年）には顕光は新大納言であり、この月奏の時点では、新大納言の嫡男が正六位上蔵人所雑色であった可能性が高い。⑧の頼成は母の身分が低いため藤原伊祐の養子となったが、具平親王ご落胤であることは知られていたようだ。『権記』寛弘 8 年（1011 年）正月（日付は不明）に「藤原頼成を蔵人所の雑色と為すく阿波守伊祐朝臣の男。実は故中書王の御落胤」と割書きされている。

以上を見渡すと、雑色から六位蔵人に補された者たちは、中級貴族の子弟が多いが、重家（顕光男だったとして）や、頼成のようにかなりの家柄のものも含まれていたようだ。

（ハ） 蔵人所衆

蔵人所には、非蔵人・雑色の他、蔵人所衆という職もあり、一条朝では正暦 4 年（993 年）

¹²³ 但し、顕光は実務能力は低く、しばしば失態を演じたとして皆に笑われている。

に六位蔵人になった藤原修政が「蔭子・元蔵人所衆」と付記されている(『蔵人補任』)。所衆は、『貫首秘抄』に「雑色所衆必下名簿」と、雑色より後に置かれている。『西宮記』でも「一、蔵人所雑色并衆等事、＜出納同之、被仰頭補之＞」(第二卷／臨時二)と、やはり雑色の後である。『禁秘御抄』上「蔵人所衆」の項にある所衆の職掌としては、「煤払。日月蝕。席引役。又諸御装束奉仕之時ハ昇殿。仏名名謁猶上簀子。廿人内少々召仕。近候御壺。流例也。(中略)又鳥犬等ニ付テ不可過一兩人。有官者ハ候御壺」(下線付加)などがある。つまり、所衆は、煤払をしたり、日食月食の時には天皇の御所を^{むしろ}席で包む。室礼をする時は殿上に昇る。所衆は煤払い、筵の扱い、御壺に伺候、鳥犬の世話など建物の外での仕事が多いところを見ると、ここの「昇殿」は御仏名・季御読経の設営のために清涼殿殿上間にあがったが、「猶上簀子」とあるのは普段は建物自体に上がることもまれだったのではないだろうか。

『枕草子』にも所衆は登場する。『枕草子』150段(新編275頁)で、季の御読経や御仏名のための設営をするために昇殿する蔵人所の所衆を「えせものの所得るをり。(中略)季御読経、御仏名などの御装束の所の衆。(後略)」(下線付加)と、蔵人所衆を分不相応な晴れがましさを得ているものの一つに挙げる。蔵人所衆は非蔵人や雑色同様に六位は帯していたようだが、昇殿は許されていなかったと見える。それが、仏名などの際、室内の設営をするための時だけに特別に昇殿する様子を清少納言は分相應の晴れがましさといったのである。つまり、日常は昇殿できない職だった。

蔵人所衆に関しては、長和5年(1016年)12月25日条の『御堂関白記』に「蔵人を定む。文章生平範国、本雑色。藤原範永、本は非蔵人。雑色に橘成任、本は所の衆」¹²⁴(下線付加)とあり、元雑色と非蔵人が蔵人に昇格し、所衆が雑色になっている。ここからもヒエラルキー上、蔵人所衆は雑色の下位で、昇任すれば雑色になれたことが確認できる。

(二) 非蔵人・雑色と文章生

蔵人所には非蔵人、雑色、所衆等がいて、すべて正六位は帯びていても、昇殿が許されるのは非蔵人と雑色だけであった。蔵人は、清涼殿の天皇の秘書的業務のため例外として六位で昇殿を許され、蔵人所の雑色・非蔵人は蔵人見習いとしてやはり職掌がら昇殿を許された。

前述の(イ)と(ロ)でみたように、非蔵人と雑色には文章生出身が多い¹²⁵。少し時代は下るが、長く春宮権大夫をつとめた藤原資房の日記である『春記』の長久元年(1040年)正月12日条に、欠員のできた蔵人に、希望が殺到したという記述があり、その中で誰を任じるかとい

¹²⁴ 翻刻は『摂関古記録データベース』による。

¹²⁵ 夕霧は五節の1～2か月前に大学寮の擬文章生になっている。そして五節の3～4か月後に文章生となる。夕霧と大学については、『補注2』「夕霧と大学について」で詳述する。

うことに関して、「抑も実仲、身、已に秀才の雑色たり。尤も理有る者なり」と、既に秀才（文章得業生）になっている雑色もいて、最も理があると考えられ、「非蔵人の中、為経、身、進士たり、又、官有る者なり。然れども年齒、已に老ゆ。尤も哀憐有るべし」というような文が続き、非蔵人が候補であって、進士であることは六位蔵人任官へプラス要素と考えられていたことがわかる。（あまり年を取っていても良くなかったようであるが。）

他にも、同じく『春記』の同条の蔵人任官希望者たちの記事に進士（文章生）の雑色がいて（「進士の雑色資成、年齒、已に長し。頗る此の職に足るか」）、進士（文章生）の雑色資成が、年齢も十分に最適であるといっている（下線付加）。蔵人所など一部諸司では文章生のまま雑色などをつとめていた。

非蔵人の例で最初に挙げた菅原為理も学者の家の子で非蔵人であり、非蔵人だった藤原範永は格別学者出身ではなかったが、同時に蔵人に補せられた元雑色の平範国は文章生であった。前述『権記』 正暦4年（993年）正月の記事にあったように蔵人所の雑色、橘為義も文章生であった。また、『江家次第』には、延喜2年（902年）10月6日に行われた弓場殿試¹²⁶で文章得業生の藤原博文が秀句を作って蔵人所雑色に補され、文章生の藤原諸陰は、句ごとに逸人名を詠み込んで、内所に候うことになった（『江家次第』第十九「弓場殿試事」）。但し、頭書は、内所に候うことになったのは博文で、諸陰が雑色に補されたとするという異説を挙げる。）岸野幸子は、10世紀に進士（文章生）・秀才（文章得業生）蔵人の出現を指摘している（岸野1998）。進士・秀才蔵人の出現に相俟って、蔵人所の蔵人候補たちにも大学寮の学生が補されてゆくのは自然な帰結であるかもしれない。非蔵人と雑色のどちらにしても、文章生や文章得業生など大学寮の学生が兼務している例がみられる。夕霧は元服時に官職はなくても、直ちに師について大学入学試験（寮試）準備をはじめているから¹²⁷、学問をしながらの職としては非蔵人と雑色は適切であり、少女巻で夕霧が六位で非蔵人ないし雑色として浅葱の袍で殿上を許されたと考えれば、まったく無理はない設定であったと考える。

非蔵人と雑色の関係を見ると、蔵人への補任は、非蔵人からも雑色からも直接補任されていて、どちらかがどちらかを経て補任されていない。また、雑色と非蔵人は並列して書かれる時、必ずしも非蔵人・雑色の順ではない（前述『御堂関白記』寛弘4年正月13日条）。しかし、その例は少なく『春記』長久元年（1040年）正月12日条での蔵人昇任人事にあたっては、まず非蔵人からの候補を、ついで雑色からの候補について述べているので、公式には非蔵人のほうが蔵人に近い位置にいるようだ¹²⁸。今まで挙げた非蔵人の経験者には上級の貴族の子弟が含

¹²⁶ 賦詩。進士・秀才蔵人選抜試験であったという（岸野幸子1998）。

¹²⁷ そして少女巻の五節の1~2か月前に寮試に及第して擬文章生になっている。

¹²⁸ 時代は下るが、蔵人になる資格を列挙した『禁秘抄』にも「第一、公卿侍臣の子、これ左右に及ばず。第二、非蔵人。第三、執柄勾当。第四、院の蔵人、並びに母儀の蔵人。各々六位等。第五、所の雑色。第六、

まれていないが、例が少ないので何とも言えない。雑色は実際に蔵人の下で立ち働いている。蔵人とともに行動する必要があったからこそ昇殿が許されていたのだろう。これに対して、非蔵人は「非職の者」だから、日常的に蔵人所に参候して特定の雑用業務に携わったとは思われない。前述の『春記』の「非蔵人中、為経、身、進士たり、又、宜有る者なり」（下線付加）にもみられるように、非蔵人為経は他の官職についていた。断定はできないが、夕霧は権力者である内大臣光源氏の息子であり、光源氏は夕霧には勉学に専念させる手配をしたのだから、やはり日常業務義務がなく、かつ雑色より格上と考えられる非蔵人という設定であったと考えたい。

しかし、非蔵人にせよ雑色にせよ、蔵人以外でも正六位を帯する良家の子弟が昇殿できる職があり、それは大学寮の学生が兼務してもおかしくなかったのであれば、当時の人々にそれは認識されていたであろうから、夕霧が六位で昇殿という状況に、当時は説明を要さなかったということになる。

（３）その他の可能性

蔵人所以外に、良家の子弟が任ぜられ、昇殿できるものはないだろうか。良家の子弟の職と考えられていた職には他に「侍従」と「内舎人」があるが、そのいずれかとして殿上へ還ったという可能性は考えられないだろうか。

（イ）侍従

まず、侍従であるが、一世源氏やその子、あるいは二世源氏（孫王賜姓）たちには若年で侍従に任じられている者は多い。しかし、結論を先に言えば、その可能性はないといえるので理由を付記する。

侍従は天皇に近侍する職ではあったが、蔵人所の充実とともに天皇側近の役は蔵人にとって代われ、侍従は儀式担当の側面が強くなっていた。その意味では、それほどの激務はない侍従は、年若い皇親たちには適任とも思われる。事実、権門の子弟は元服後の初官は侍従が多い。例えば、貞観２年（977年）の雅信の任右大臣以降、長和年間までに大臣にまで昇った人物は皆、大変高い家柄の出自であったが、これら８人、雅信、為光、道隆、重信、道兼、伊周、顕

成業の儒。第七、所々の蔵人判官代」と、非蔵人が資格の二番目、雑色は五番目であることなどから、やはり、非蔵人のほうが蔵人に近かったのだろうか。

光、公季の元服後の初官は、顕光を除いてみな従五位下～正五位下の侍従であった¹²⁹。通貴、いわゆる貴族の仲間入りをする従五位下と、従五位下への叙爵を切望する正六位上の間には高い壁があるのである。

夕霧が従五位下に昇格するのは元服して六位とされた一年半後となる。擬文章生となった翌年の春の冷泉帝の朱雀院への行幸の日に、昔の放島の試みにならって変則的な省試が朱雀院で行われ、そこで夕霧は立派に詩文を作って、省試に合格して文章生（進士）となる¹³⁰。さらにその年の秋に、「秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ」（新編③76頁）。つまり、夕霧は、一年半後に晴れて従五位下になって侍従に任じられるのである。これは逆に、元服後からそれまで、夕霧は侍従ではなかったことの証左でもある。

また、侍従は自動的に昇殿していない。例えば、兼明親王の長男である源伊陟^{これただ}は天慶元年（938年）生まれで、天曆6年（952年）正月7日従五下（「延木御給」）。天曆9年（955年）10月1日侍従となったが、『公卿補任』によれば、天徳2年（958年）8月27日に昇殿とある。（天曆も天徳も村上天皇の元号で代替わりはない）。また一世源氏である自明は承平4年（934年）正月7日従四位上。天慶2年（939年）12月27日侍従となったが、これも『公卿補任』によれば昇殿は天慶3年（940年）12月22日である（朱雀天皇の代）。蔵人の職務の拡充により、侍従の職務は儀礼が中心となってゆき、名誉職化して、公卿の兼帯も現れた。

（ロ） 内舎人

天皇近侍の官として、次に「内舎人」がある。内舎人もまた良家の子弟が任ぜられる職であった。『国史大辞典』の「内舎人」の項（井上薫）にも「大臣の子息の任ぜられることが多かった」とある。『養老令』では、五位以上の子孫で、役任がなく、「性識聡敏、儀容取るべきもの」が選別されて中務省の内舎人に充てられるが、三位以上の者の子は、選別を経ずに内舎人になれたという¹³¹。内舎人の職務は、帯刀して禁中に宿直し、雑使をつとめ、行幸の際は輦の前後を護衛することにあつた¹³²。内舎人は、長上官（常勤）の扱いで¹³³、次の選任に必要な年限（考限）が短く、また、主典を経ずに判官に進めるので、上級貴族の子弟の希

¹²⁹ このうち孫王賜姓した雅信と重信は従四位下直叙。他の6人のうち公季（正五位下）以外は従五位下であった。

¹³⁰ 『補注2』「夕霧と大学について」で詳述。

¹³¹ 『養老令』「軍防令」第十七「凡五位以上子孫年廿一以上、見無_二役任_一者、（中略）、檢_二簡性識聡敏、儀容可取、宛_二内舎人_一。三位以上子、不_レ在_二簡限_一」。

¹³² 『養老令』「職員令」第七「内舎人九十人。掌_下帶_レ刀宿衛、供_二奉雜使_一、若駕行分_中衛前後_上」。

また、内舎人は倭舞の舞人ともなる。倭舞は、神祇官、宮内丞、侍従、内舎人、大舎人がこの順に舞う（今井優 1983）。

¹³³ 『日本史大事典』「長上官」の項（大隅清陽）。

望する初任の官ともなった（井上薫 1961：150）。顕著な内舎人の例としては『家伝』下 武智麿の項に「大宝元年、選良家子_一為内舎人_一、以三公之子_一別勅叙正六位上、徵為内舎人_一、年廿二」とあり、不比等の長子とされる武智麿は三公¹³⁴の子として 701 年、勅によって正六位に叙せられて 22 歳で内舎人となったことが記されている。

他に内舎人となった高官の子としては左大臣藤原内麿の孫で「風容閑雅」な良繩^{よしなだ}もいる。承和 4 年（837 年）内舎人となっているが、このころの内舎人は皆、豪家の若い子弟で、奢侈放縦を尽くす中、良繩が高潔な人物なので、皆が良繩を見て法を遵守するようになったと『日本三代実録』は伝える。

また、『今昔物語集』は、藤原冬嗣の長男が長良中納言、次男が良房太政大臣、その次が良相左大臣、そして、その次が「内舎人良門」と挙げたあと、「昔ハ此ノ止事無キ人モ初官ニハ内舎人ニゾ成ケル」と結んでいる（巻第二十二「高藤内大臣語第七」、新編③173-174 頁）。良門が内舎人となったことは、『公卿補任』の寛平 6 年の藤原高藤¹³⁵の尻付「左大臣冬嗣公孫。内舎人良門二男」にもみえる。良門は正六位上で内舎人となったが、若くして没して、兄たちのように高位に昇ることはなかったので、「内舎人良門」と呼ばれるのに留まったのである。『今昔物語集』の成立は 12 世紀の初めごろであるから、そのころにも、内舎人は「昔は」高官の子弟の初官でもあったと認識されていたことになる。

他に特筆すべき内舎人としては橘清友がいる。仁明天皇の母である橘嘉智子は「内舎人贈太政大臣清友女」で太政大臣を遺贈された橘清友の娘であったが（『皇代記』）、橘清友は延暦 5 年（786 年）内舎人であった。但し、清友のケースでは、娘の夫君が嵯峨天皇となり、所生の皇子が即位（仁明）したため、没後に正一位太政大臣を遺贈される名誉を受けたのであって、清友自身が権門の子で内舎人となったわけではない。清友は内舎人となった 3 年後（32 歳）、正五位下で病没している。清友の孫で、従一位を遺贈された右大臣氏公の長子の中納言岑継は天長 6 年（829 年）3 月 1 日に内舎人に任ぜられたが¹³⁶、当時、父の氏公はまだ参議になっていなかった。

さらに内舎人任官の概観をつかむため、『公卿補任』から内舎人を拾った。『公卿補任』に見られるかぎり、内舎人を経験して公卿に昇った者は 15 名で以下の通りである。（但し、『公卿補任』は、例えば左大臣（贈太政大臣）にまで登った武智麿の経歴に内舎人を含んでいないので、以下の 15 名以外にも公卿に昇った者の中にも内舎人を経験している者はいると思われる。また、高官の子弟で内舎人になっても、良門のように早世その他の理由で公卿に昇らなかった者はわからない。）

¹³⁴ 太政大臣・左大臣・右大臣、のちに左大臣・右大臣・内大臣。

¹³⁵ 高藤は、娘の胤子所生の子が即位した（醍醐天皇）ため、天子の外祖父となった。

¹³⁶ 『公卿補任』。岑継は翌年に蔵人に補せられた。

表 内舎人を経験した公卿

公卿となった年 ¹³⁷	西暦	公卿	年齢	内舎人	父	公卿任官時の父の官職	任内舎人時の父の官職
天平9年	737	藤豊成		養老7年 任内舎人	武智麿	贈太政大臣	中納言
天平15年	743	藤仲麿	38	自内舎人遷大学允	武智麿	贈太政大臣	中納言
延暦13年	794	藤乙叡	31	宝亀9年 内舎人	継縄	右大臣	従三位兵部卿
延暦21年	802	藤緒嗣	29	即授正六位上。補内舎人	百川	贈太政大臣	贈右大臣
弘仁元年	810	藤道雄	53	延暦8年 内舎人19歳	小黒麿	大納言	中納言
弘仁14年	823	清原夏野	42	延暦22年 任内舎人	小倉王	正五位	不明(舎人親王孫)
天長3年	832	藤継業	49	延暦15年 擢自内舎人	百川	贈太政大臣	贈右大臣
承和7年	835	和気真綱	58	延暦25年 任内舎人22歳	清麿	正三位民部卿	従三位民部卿
承和11年	844	藤長良	43	弘仁13年 内舎人	冬嗣	贈太政大臣	右大臣
承和11年	844	橘峯継	41	天長6年 内舎人	氏公	右大臣	正四位下宮内卿兼但馬守
天安2年	858	藤良縄	45	承和4年 内舎人	大津	正五位下備前守	不明(大津の父は贈太政大臣内麿)
貞観12年	870	藤良世	49	承和8年 内舎人	冬嗣	贈太政大臣	贈太政大臣
延喜9年	909	藤定方	35	寛平4年 内舎人	高藤	贈太政大臣(高藤)	従四位下播磨権守
天慶2年	939	伴保平	73	寛平3年 内舎人	春雄	(従四位下播磨守)	(従五位下?)
天慶2年	939	藤忠文	67	寛平2年 内舎人	枝良	参議(従四位上)	(従五位下?)

天慶2年以降、内舎人は『公卿補任』には登場しない。内舎人を振り出しに公卿まで昇った者で父が大臣となった者は、『公卿補任』に拾われている限り、寛平4年(892年)に内舎人となった贈太政大臣高藤の息子の藤原定方を最後とする。(表のうちの最後の二人は高齢で公卿に列したものの、父は従四位下どまりで、高官ではない。)上表の内舎人経験者のうち4名は従五位下叙爵後に侍従となった¹³⁸。また、5名は従五位下叙爵前に(六位の)蔵人となっている。(内舎人から蔵人になり従五位下叙爵後侍従となった長良と良縄は重複して数えている。)

寛平年間(889~898年)以降は、大臣家の子弟は元服して初めから従五位下に叙せられるケースが多くなる。従五位下に直叙されることになれば、正六位上で任官して考限を稼げる内舎人の旨味はなくなったのだろう。それでも、大臣の息子である武智麿が正六位上に叙せられて

¹³⁷ 藤原継業のみ従三位非参議に叙せられた年。他は任参議。

¹³⁸ 3名は大臣の子。

内舎人となったことを考えれば、元服して六位に叙された点で夕霧と共通点はある。しかし、上記でみたように、寛平以降に内舎人を経験して、公卿まで昇った高官の子弟は確認できず¹³⁹、『官職秘抄』でも、延喜年間（901～923）年以降は内舎人に上級貴族の子弟が任じられることは絶えたとする¹⁴⁰。大同2年（807年）には近衛府が再編されて以来、左右近衛が天皇近侍の武官¹⁴¹として職務を拡大して行き、近衛の勅使としての活動は「本来内舎人の役であった側近の雑仕にまで拡大され」（笹山晴生 1985：206）る。大臣家の子弟も叙爵後に侍従を経て、武官コースでは近衛少将や中将となる者が多くなってゆき、左右近衛の上級職の荣誉職化もを進んでいった一方、内舎人には諸家の侍が任じられるようになってゆく。

大臣子弟の少・中将たちは侍従になったあたりで昇殿しているが、果たして、内舎人は昇殿していたのだろうか。内舎人の昇殿に関する記録はほとんど残っていない。わずかに上記の表の内、藤原長良が内舎人となる約1年前（弘仁12年〔821年〕2月）に昇殿、弘仁13年2月1日内舎人となって3月に還昇したという記載が『公卿補任』に見出せるぐらいである。昇殿制がいつ成立したかについては議論もあるところであるが、成立は弘仁年間に求められても、清涼殿に殿上の間が設けられたのは宇多朝であり、昇殿が経歴の一環として一般的になるのは寛平年間以降（古瀬奈津子 1998：342）だから、それ以前に昇殿の記事がほとんどないのも納得できる。武智麿や高官の子弟が内舎人として宿衛した時代は、有事の際に内舎人は天子の傍に駆けつけるわけで、昇殿という手順を踏むことなく、日常職務として帯剣して「殿上で」天皇を警護したものとする。しかし、昇殿が公的な政治秩序となって以後、内舎人は昇殿を許された職だったのだろうか。高官の子弟の補任は既に絶えていたという紫式部の時代に内舎人は、近衛とともに摂関へ隨身として賜るものともなっていた¹⁴²。内舎人の人数は時代によって変化はしたが、40～90人¹⁴³程度と多い。摂関の隨身に昇殿が必要だったろうか。あるいは禁裏常勤の中に一部昇殿を許される者がいたのだろうか。管見の限り内舎人の昇殿の記録は見出せなかった。

博識の紫式部なら、武智麿や大臣家の子弟の内舎人任官の例も知っていて、六位で殿上へ還る夕霧の身位として内舎人が頭をよぎったかもしれない。しかし、まずもって光源氏の教育方針が、嫡子夕霧には学問を修めさせて将来の礎とすることであった。これは光源氏自身が、夜昼、父帝のそばに侍っていたため、学問を究めることがなかったという反省の上に立っている

¹³⁹ 前述のように内舎人になりながら公卿に達する前に没した高官の子弟がいなかったとは言い切れないし、『公卿補任』が拾わなかった内舎人経験がなかったとも言い切れないが。

¹⁴⁰ 『官職秘抄』（群書類従所収）。「内舎人。往代。以大臣子息任之。延喜以降此儀絶畢」。

¹⁴¹ 内舎人は文官である。

¹⁴² 天安2年（858年）摂政藤原良房が内舎人2人・近衛4人の隨身を賜っている。一条朝では兼家、道隆、道長が内舎人を隨身に賜っている。

¹⁴³ 内舎人は「701年（大宝1）90人を任じ（中略）、定員は808年40人に減じ、のちも増減」『日本大百科全書（ニッポニカ）』「内舎人」（井上薫）。

(新編③21-22 頁)¹⁴⁴。ところが、初期の内舎人は長上官の扱いで、禁裏に常勤した。宿衛を宗とし、夜通し帝の警護に侍る職でもあった。養老令の「見無_二役任_一者」という文言から、現職のない者のフルタイムの職務であったことも思い起こしておこう。

二条院東院あるいは大学寮で勉学に励まねばならない夕霧には上日条件を満たすのは困難であろう。光源氏は今回の夕霧に対する措置については「2～3 年は無駄にしても」(「いま二三年をいたづらの年に思ひなして」[新編③21 頁])と明言しているから、考限の年月を短縮する意図は皆無である。一条朝には、大臣の子息の初官にふさわしいものではなかったという点では非蔵人も又然りではあった。しかし、夕霧の昇殿を確保する職としては、まず、昇殿が許され、かつ、上日の拘束がないことが必要であろう。六位夕霧の実際の官職は断定しがたいが、時間的にも大学での勉学と両立しやすい点で非蔵人の資格あたりで昇殿を許されたのだろうと考える。当時の読者は、六位の浅葱の袍で昇殿している若者たちを実際に目にしていたのだから、夕霧が六位で昇殿したということについては、官職を特定せずとも、有りうることとして疑問はなかったのだろう。

¹⁴⁴ 光源氏が大宮に対して夕霧の教育論をのべている。「みづからは(中略)、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむ、はかなき書なども習ひはべりし。(中略)及ばぬところの多くはべる」とある。

第2節 五節の参内に夕霧は何を着たのか

夕霧の官位は六位。参内は位階に応じた色の袍（束帯）が決まりである。六位に位置づけられた夕霧の袍の色は当然、六位の官人たちが着る浅葱色である。上級公卿は勅許を受けて直衣で参内できたが、まだ六位の官人には望むべくもない。夕霧は自分が六位でしかないことを自他にまざまざと見せつけることになるこの色の袍を着るのが嫌で内裏に参入したがいなかった。

しかし、少女巻には「五節にことつけて、直衣などさま変れる色聴されて参りたまふ」（新編③62頁）とある。五節の日は特別ということで直衣などいつもと違った色を着ることを許されて参内したというのだ。直衣は五節では淵酔など非公式の場では着用されるが、日常は直衣参内が許されている者でも、正式な儀式はやはり位袍が当然である。淵酔には、許されたものは直衣で参加するが、五節舞の舞われる豊明節会は天皇が賜う公式の宴会儀式であるから普段直衣参内を許されている者でも束帯着用である。夕霧は直衣であれば、宮中をあるきまわったりすることには参加できる。そこで夕霧は宮中を「まだきにおよすげて、され歩きたまふ」（新編③62頁）と宮中を浮かれて歩き回る様子が示される。しかし、五節舞の行われる豊明節会には公卿たちでさえ直衣では参加できない。また、豊明節会では殿上に座が設けられるのはごく少数の上級貴族だけで、殿上人は「殿上」でなく、庭に座が設けられる。従って、夕霧はもし参加すれば庭に設けられた座から舞姫を見ることになる。『儀式』の新嘗会儀には六位以下の参加についても記述があるが、『内裏式』、『西宮記』の新嘗会の部分には六位についての記述はない。夕霧が節会に参列したかどうか、明らかではない。六位も参列したとしても、おそらく夕霧自身も屈辱的な六位の列に入ることは潔しとせず、不出席の可能性は高い。五節舞は舞台が設けられることも設けられないこともあった。

『儀式』では雨天（小雨）の場合に（のみ）殿上で舞うといい¹⁴⁵、『内裏式』では「必ずしも舞台を設けない」¹⁴⁶、『西宮記』は「承和年間（834年～848年）以降は舞台の上で舞う」¹⁴⁷と言い、『九条年中行事』¹⁴⁸には「仁和（885年～889年）以来必ずしも舞台を用いない」という。

¹⁴⁵ 『儀式』新嘗会〔祭イ〕儀<若有朔旦冬至、便行叙位>「前一日、所司裝飾豊楽院、構舞台於庭前、<自殿南階去十一丈七尺、高三尺、方六丈>、（中略）奏歌笛、訖大歌別当大夫率歌者参入就座、座定奏大歌舞五節、<若有零雨、於殿上舞>其五節妓一行、下自西階、垂雨敷上南行升台、道〔導イ〕引姫四人以上、兩行在前、到舞台階下、東西分坐」とある。

¹⁴⁶ 『内裏式』（十一月新嘗会式の項）「訖大歌別当大夫率歌者参入就座、座定奏大歌舞五節<或於殿上舞、不〔必イ〕構舞台>其五節妓一行、下自西階乘兩〔垂雨イ〕面敷上南行昇〔升イ〕台、導引姫四人以上、兩行在前、到舞台階下東西分座」とある。

¹⁴⁷ 『西宮記』（新嘗祭の項）「歌人自舞台東西就床子、皆着当色、赤貲布開腋衣、白半臂、発歌笛、雨日、着宜陽殿西庇、（中略）、下小忌台盤、舞姫出、<出自御座西、上髪各相副、女官秉燭添南柱立云々>、舞了、<退入、歌人退去、所司撤床子、承和以往舞舞台上>」（下線付加）。

¹⁴⁸ 『九条年中行事』十一月辰日賜宴事の割書「而仁和以来必不用舞台」。

『江家次第』(12世紀初)では舞姫が舞台上舞うことは久しく停止されている¹⁴⁹といい、大歌別当は舞台巽に座るが、舞姫は南庇で舞っている。舞台がなく、舞姫が帝の御前の廂で一列で舞う場合には、舞姫をまじかに見られるのは、殿上で天皇のそばに候じる一部の高官たちだけになろう。夕霧は惟光娘が気にかかって、惟光娘がいる五節所に近づこうとウロウロするが、五節所の「あたり近くだに寄せず」(新編③64頁)とあって、ため息をつくばかりであった。惟光娘を夕霧が内裏で見初める設定は困難で、惟光娘は光源氏の舞姫として、二条院へやってくるのが、夕霧が見初めるためには物語上必要であったのである。

五節の衣装については『満佐須計装束抄』に舞姫と随行者についての詳細な衣装の記述はあるものの、宮中の参会者については詳細はない。五節の期間、宮中の官人たちの衣装については、永万2年(1166年)成立の『助無智秘抄』や『年中諸公事装束要抄』(伝花山院忠定)に記述がある。

まとめると、舞姫が参入する丑の日には舞姫を誘導したりする仕事をする殿上人は束帯である。翌日の殿上の淵酔は、殿上人以上は直衣(または衣冠)でもよい。中宮他の淵酔も、淵酔は直衣(または衣冠)で、肩脱ぎなどしてドンチャン騒ぎする。但し、夜の御前試にはみな直衣を束帯に改めて参内する。時代は下るが、『兵範記』にも淵酔で直衣だった宮中人たちが御前試のため束帯に着替えるため一度退出している記載がある(嘉応元年[1169年]11月14日条「人々著束帯可帰参 御前試之故也」)。夕霧の場合は父太政大臣の直廬で自由に着替えることができる。卯の日の、娯楽性の高い童御覧の参列者(公卿)は直衣である。但し、全体としては直衣で参加できる行事は少なく、天皇出御の公式行事は全員束帯である。五節舞の舞われる辰の日の豊明節会においても、神事に奉仕するため小忌衣を着ることになっている者以外は束帯である¹⁵⁰。

晴れの日の特別に規定が緩められる衣装は後世「一日晴」という制度がある。唐装束・染装束という言葉も一日晴れの衣装として使われた。「一日晴」については『国史大辞典』の「直衣」の項(鈴木敬三)では(直衣の地質、色目、文様について)「なお、表を白に限らず織色で異なる文の直衣を臨時に用いて一日晴とすることもあり」と「一日晴」は直衣にも当てはまるようにも取れるが、「一日晴」の項においては、同じ鈴木敬三が「公家の晴儀の参列者の朝服の下着を当日に限り、服制にこだわらずに、自由とし、好みによる地質・色目・文様の使用を黙許することをいう」と下着、すなわち、下襲に限定している。三条西実隆の『装束抄』に「唐綾」の項に「一日晴」について言及がある。

¹⁴⁹ 『江家次第』(十、十一月節会次第)「久停止事」に「舞姫舞於舞台事」とあり、舞姫が舞台において舞うことは久しく停止されていたという。

¹⁵⁰ 小忌衣も束帯の上に着る。

是ハ唐装束ニテ。文色ナド強チ定事ナシ。下襲表袴ニ唐綾唐ノ顯文紗ナドヲ着スル事也。凡唐装束ハ。一日晴ト称シテ尋常ニ替リ侍ル也。仍定ル儀ナシ。又唐装束染装束ハ。老若ハ用之侍ラザル事トミエタリ。右袍。下襲。時ニヨリ事ニヨリテカハレリ。仍先例ヲ追テ着用シ侍ル事ナリ。着用ノ先例シルシ侍ルベケレドモ。事多ニヨリテ。先色メ計ヲシルシ侍也。 (『装束抄』群書類従本、下線付加)

とあり、唐綾などを用いる唐装束は晴れの装束で、下襲表袴に唐綾などを着ることだという。染装束もまた晴れの日に好みの色で染めたものを着用することであるが、これも袍以外の袴や下襲についてである。例えば、『後照念院殿装束抄』¹⁵¹に、「染装束事。衣笠命云。ヲトナビタル人ハ染下襲計不染表袴」と年長者は下襲だけを染めて表袴は染めないといい、やはり下襲表袴のことであることがわかる。

『駒競行幸絵巻』には、殿上人たちが思い思いの下襲を着用している姿が描かれている。『駒競行幸絵巻』は静嘉堂及び和泉市久保惣記念美術館蔵のものが伝わるが、和泉市本は静嘉堂本のあとに続くもので、万寿元年（1024年）9月19日後一条天皇や東宮が同じく高陽院に行幸啓になった時の模様を描く。この絵巻が描かれたのは14世紀といわれる。万寿元年の実際のどの程度伝えているものであるかは本論筆者には判断できないが、『栄花物語』には、この行幸の装束については「いづれの殿ばらも皆御装束めでたきなかに、関白殿の御下襲の菊の引倍木輝きて、目留まりたり」（新編②421頁。関白は頼通）とあるから、下襲の裾の部分^{ひへぎ}が9月の菊に合わせた豪華なものだったようで、官人たちもみなみな趣向を凝らした立派な装束だったようである。『小右記』にもこの行幸の記述は多量にあるが、特に参列の公卿たちの衣装についての言及は見当たらない。絵巻を見る限り、簀子に座る官人たちは全員黒の袍を着て、いろいろな裾を長く欄干から垂らしている。袍は黒だから、公卿たちの束帯の位袍の色である。やはり、ここでも、自由な装いは、趣向を凝らした裾である。裾だけでなく袍も自由でなければ夕霧は六位の浅葱から逃れることはできないのである。

しかし、特別な日には蔵人以外の下級の官人も青色の袍を許されることがあった。『枕草子』にそれを示す章段がある。これは同時に特別な日以外には蔵人以外が青色を着用するのは難しかったことをも示している。『枕草子』第3段「正月一日は」に、「蔵人思ひしめたる人の、ふとしもえならぬが、その日青色着たるこそ、やがて脱がせでもあらばやとおぼゆれ」（新編31-32頁）で、蔵人になりたいと思っているが、すぐには、なれそうにないといった人が、なりたいたいと思っている蔵人の青色の袍を、特別な日だからというので、着ることができたので、さぞ脱ぎたくないと思っているだろうから、そのまま着せておいてやりたいといっているのである。

¹⁵¹ 『後照念院殿装束抄』 古記・古抄物を引き、故人の談話などによって説明を加えたもので、鎌倉時代の近衛家流のもの。

これは賀茂祭の時のことである。賀茂祭には蔵人所の非蔵人や雑色は、賀茂際の行列の前駆を勤めたりするので青色を許される。この日特別に許されて喜んで着た青色なのだから、そのまま着ていられたら本人はどれほどうれしかったことだろうか。もっとも、非蔵人が許された青色はこの特別な場合でも、織物でなく無紋である。そこで「綾ならぬはわろき」と、無紋であるのは残念だと清少納言はいつているのである。賀茂祭に蔵人所の雑色非雑色、非蔵人が麴塵（この場合青色袍と全く同義）の着用が許されているのは『助無智秘抄』¹⁵²などからも確認できる。また、特別な日に下級役人の青色は無文であったことは『助無智秘抄』も書き留めている。

晴れの日の特異衣装としては「唐装束」という言葉が『中右記』長治元年（1104年）8月6日に初見する。御八講の結願前日に舞楽などがあつた際、右大臣が唐装束であつたという。「染装束」という言葉も見える。「昨日と今日、禁色を許された人たちは染装束を着たりしていたが、頭中将雅俊と蔵人少将は尋常の装いだつた」という旨が『中右記』寛治2年（1088年）7月27日条にある。これは天皇出御の相撲御覧の際のことである。撰関期の記録類に「一日晴」「染装束」「唐装束」のどれも現れないというのは¹⁵³、『源氏物語』の時代に「一日晴」の制度があつたのか疑いを禁じ得ない。あるいは当然すぎて記述がないのだろうか。もし、「一日晴れ」が平安中期にあつたとしても一日晴れは下襲（裾）についてであり、束帯の袍は含んでいないようである。しかし、ある時、突然始まることも考えにくいので、制度としては確立以前に、特別の日には服制をゆるめて着飾ることが行われていたので、後代になって制度化されたと考えるのが自然であろう。

しかし、もし五節の節会などに装束自由になるのが当然の了解事項だつたとすれば、「五節にことつけて、直衣などさま変れる色聴されて」（新編③62頁）と、わざわざ断り書きのような言葉はつけないのではないだろうか。何も書かないか、「五節なれば…聴されて」ぐらいの表現になるのではなかろうか。また、直衣参内の勅許を受けていない者が、特別の日だけ直衣参内を許されたという事例は管見の限りでは確認できない。夕霧は五節の日だから特別にこの日だけ直衣参内が許されたのか、それともこの五節を機にこれ以降、通常の参内に直衣が許されることになったのか。後者は六位という位階を考慮すればあり得ないことになろう。時代は下るが、ちょうど五節の丑日の参内に、まだ14歳の藤原師長が直衣参内の勅許をうけていないので、束帯姿で参内するのは面目ないと、父左大臣頼長が師長の参内を止めた例はある（『宇槐記抄』仁平元年〔1151年〕11月17日条「今夕五節参内、師長未蒙聴直衣之宣旨、束帯参入、

¹⁵² 『助無智秘抄』1166年（賀茂祭ならびに還の日）「麴塵ハ大臣以下非蔵人蔵人所雑色非雑色通用ナリ。但非蔵人ハ無文ヲ用ベシ」（下線付加）とある。非蔵人以外の蔵人所雑色・非雑色については「無文」の言及はないが、当然、非蔵人と同様だから省略されたと考える。

¹⁵³ 国際日本文化センター提供の撰関古記録データベース及び東京大学史料編纂所の大日本史料・古記録フルテキストデータベースを検索した。検索語は「一日晴」「唐装束」「染装束」。

似無面目、仍不参内))。

夕霧が「五節にことつけて、直衣などさま変れる色聴されて」（新編③62頁）の部分は他の諸本では、河内本が「ことつけて」を「心かゝり給て」、別本系の讃（伝二条院讃岐筆七海兵吉藏）、陽明家本、保坂本は「こころかゝりて」、阿里莫本「ことつて」としている（『源氏物語大成』による）。直衣参内は勅許が必要であるから、夕霧が五節に「心にかかつ」たから、参内したというのであれば、「直衣などさま変れる色聴されて」の文章はなぜ、そこにあるのか。五節が気になったから、浅葱を我慢して参内したというならわかるが、夕霧は五節が気にかかったからといって直衣で参内できることにはなるまい。この諸本間の「揺れ」は書写者たちにも直衣で参内した、あるいはできた理由に疑問があったことを想像させる。時の最高権力者の嫡子が五位でなく六位というのが異例であれば、その上に重ねる直衣参内の異例は共に現実を超越した異例なものとして納得されたのであろうか。

『源氏物語』では、後世のように、豪華な裾を付けた下襲を着用する一日晴はまだ制度化されていなかったにしても、それに至る習慣は始まっていたとみることはできる。同じ少女巻で、年が明けて2月20日過ぎに行われた冷泉帝の朱雀院行幸は、式部省の省試として放島の試みなどの行事も行われる盛儀であったが、供奉の「人々、みな青色に、桜襲をきたまふ」（新編③71頁）とあり、行幸という晴れやかな行事に随行した人々はこの日は位袍ではなく青色の袍を着ている。そして、下襲には人々は季節に合わせて、通例とは異なった桜襲などを用いたと語る。朱雀院行幸と同様に少女巻の豊明の日も、同様に、特別のお許しがあつて、公卿以下、人々は青色を着用して、非蔵人も特別な日として、青色を許されたと考えたい。『西宮記』（第二巻／臨時三〔衣〕）に「袍、赤色、主上及一上卿内宴時服之、青色、帝王及公卿以下侍臣、随便服之、＜非蔵人用無文＞」と、これは内宴ではあるが「帝王と公卿以下侍臣たちも便に随って青色を着用し、非蔵人も青色を着用できた。但し非蔵人は無文を用いた」ことが書かれている。

少女巻では夕霧は宮中を「され^{あり}歩き」とあるから、宮中をあちこち窺いてまわって、行く先々で、太政大臣の幼い愛息としてもてはやされ、五節に華やぐ宮中の雰囲気を楽しんだのであろう。もし、夕霧が公式行事にも参加していた場合には、おそらく華やいだ行事の日に許される青色の袍に、洒落た下襲を引いた姿だったろうと推測する。

結論としては、光源氏が舞姫を献上したこの五節の時は、華やいだ気分で「便に随って」みな青色の袍を着て、非蔵人と考えられる夕霧も、無文ながら、浅葱を免れて青色をまとったと考えたい。この五節にも、夕霧が「直衣などさま変れる色」の「など」は、このように日と場所によって直衣参内だけでなく束帯も着用するからであろう。夕霧は史実の例はともかく、五節の参内には直衣を許され、また、豊明節会、御前試など束帯着用 of 行事にも参列を許された

場合も、特別な日とて、浅葱の袍を免れて、無文ではあっても青色の袍に洒落た下襲をつけて参列したと本論稿者は解釈する。

おわりに

少女巻では、まず学問を修めさせるという父光源氏の教育方針により、夕霧は若年で元服したのだが、貴顕の子としては低い六位（正六位上）という官位に叙せられた。しかし、「殿上へ還る」という表現から、昇殿は許されていたことが明示されている。六位でも昇殿を許される例外には蔵人があるが、夕霧は、12 歳に過ぎず、かつ激務である蔵人と学業とは両立しない。また、夕霧自身が、浅葱の色の袍を着るのが嫌で、参内を渋ってきたということがいわれているので、蔵人ではなかったといえる。というのは、蔵人なら青色の袍が許されるから、浅葱の袍を着る必要はなかったからである。蔵人以外にも六位で昇殿できる官職には蔵人所の非蔵人・雑色があった。蔵人所には所衆もいたが、所衆以下は六位であっても昇殿はできない。非蔵人と蔵人所雑色にはかなりの家柄の子弟が補されていた例もみられる。非蔵人と蔵人所雑色は、昇殿は許されたが、蔵人と違って、特別の日を除いて青色の袍は許されなかった。非蔵人と蔵人所雑色は、蔵人に欠員ができた時には優先的に蔵人に補されることができた。蔵人に文章得業生（秀才）や文章生（進士）出身者は望まれていたので、候補生である非蔵人と蔵人所雑色としても大学寮学生は有利であった¹⁵⁴。蔵人に欠員ができた時には、非蔵人からでも蔵人所雑色のどちらからでも直接に蔵人に補されることができたので、二者の間に明らかな上下関係はないようではある。他に高家の若者が補せられる可能性がある官職もある¹⁵⁵が、学問に専念する夕霧には、拘束の少ない非蔵人という資格で昇殿していた可能性が高い。

『源氏物語』が書かれた時代には、非蔵人や蔵人所雑色が宮中にいて、当時の読者には、彼らも六位で昇殿していることは日常の知識であったわけだから、夕霧が六位で「殿上に還る」という表現に何の説明も要しはしなかったのであろう。古注釈も、蔵人所が機能していた時代にはやはり何の注釈も必要とは思わなかったのであろうが、蔵人所が消えて久しい 21 世紀の現代人は、高校などで「昇殿できるのは五位以上、例外として蔵人は六位でも昇殿」と教えられてきた。現行各刊本は夕霧の六位昇殿を軒並み避けて通っており、『玉上評釈』でさえ、「六位に叙せられ、蔵人に任ぜられたうえで、昇殿を許されたのであろうか」と、「蔵人は例外、蔵人だけが例外」の呪縛から逃れられていない。本論文は、蔵人以外でも、六位で昇殿は許され

¹⁵⁴ 但し、少女巻の五節の時点では夕霧は未だ文章生の前段階の擬文章生になったばかりであるが。

¹⁵⁵ 内舍人など。

るが、浅葱の袍からは逃れられなかった官職があったことを提示して、夕霧の六位昇殿を解明できたと考える。

また、浅葱の袍を嫌がって日ごろは内裏に出かけない夕霧も、少女巻では、五節という特別な場合として、「直衣などさま変れる色聴され」て喜んで参内した。但し、史実としては直衣で参加できる行事は少なく、五節でも、舞姫の舞う豊明節会をはじめ、天皇出御の公式行事は全員束帯である。また、直衣参内の勅許を受けていない者が、特別の日だけ直衣参内を許されたという事例は管見の限りでは確認できない（前述の束帯での参内を止めた師長の例はある）。

「五節にことつけて」に諸本間で揺れがあるのも、このあたりに原因があるのではなかろうか。

「五節にことつけて、直衣などさま変れる色聴されて」という表現は、許されたのは直衣と限定せずに、とにかく夕霧の参内を納得させるために服装規定の緩和のみを語っているのだろう。夕霧が参内することによって、読者は自分の視線を、五節に華やぐ宮中を楽しむ殿上人の目線に移すことができるのである。（太政大臣光源氏の目線では階層が違いすぎて、読者は自分たちの参加する五節と同一視はできないかもしれない。）実際、華やかな行事の日には服装規制が緩められることはあって、時代が下ると、豪華な下襲（裾）を着用する一日晴れの制度に発展する。少女巻では冷泉帝の朱雀院行幸に供奉の人々がみな青色の袍で参加した記述があるので、夕霧が公式行事にも参加していた場合には、おそらく特別な日の青色の袍に、洒落た下襲を引いた姿だったろうと推測する。物語の少女巻では、先にみたように、夕霧は宮中を「され歩き」とあるから、直衣か束帯かはさておいても、宮中をあちこち窺いてまわって、行く先々で、太政大臣の幼い愛息としてもてはやされ、五節に華やぐ宮中の雰囲気存分に楽しんだのであろう。そして、読者もまた、毎年の五節でも特に華やかな夜を、想い浮かべているのである。

第二部 『平家物語』と五節

第1章 忠盛の昇殿と五節

はじめに

新嘗祭は毎年 11 月に行われた宮中の一大イベントである。五節舞は新嘗祭・大嘗祭（即位儀礼の仕上げとなる一世一代の新嘗会）の最終日の豊明節会で舞われ、一大行事のフィナーレを飾るものだった。12 世紀に平家が歴史の表舞台に登場し、そして消えていった時代にも、諒闇などの年を除いて五節舞は毎年行われていた。その五節の行事は平家の興亡の節目節目に表舞台にあらわれる。あたかも、平家の栄枯盛衰を見守るかのように。平家胎動の時、地下の侍品さむらいぼんの身分でスタートした忠盛の昇殿の悲願にかかわる五節が 2 回ある。1 件目は天治元年（1124 年）、忠盛が舞姫を献上して昇殿を望んだがかなえられず、大変がっかりした五節で、2 件目は、長承元年（1132 年）、内裏昇殿を許されて初めて迎える五節がそれで、忠盛の昇殿を快く思わない殿上人たちが、忠盛に恥辱を与えようと企てるが、忠盛は機転によってそれを切り抜け、逆に鳥羽院のお褒めにあずかったという、『平家物語』巻第一「殿上闇討」の舞台となった五節である。平家隆盛期、清盛が内大臣となった仁安元年（1166 年、翌年太政大臣となる）の大嘗会では 5 人の舞姫のうち 3 人までを清盛の子息たちが献上して、栄えゆく平家一門の威勢をみせつけた。清盛が起こした治承 3 年（1179 年）の政変の夜、宮中では五節舞が舞われていた。東国で頼朝挙兵の知らせが届き、平家の黄昏を感じる治承 4 年（1180 年）に、清盛の強い主張によって福原で行われた五節は、隆盛を極めた平家の最後を飾る花道となった。平家興隆の礎を築いた忠盛から、壇ノ浦に滅びるまでの五節を検証して、平家の栄枯盛衰のターニングポイントとなった年の五節を『平家物語』との関連において考えてゆきたい。

『平家物語』には五節、または、新嘗祭、大嘗祭は次の 5 か所¹⁵⁶に登場する。

- a. 巻第一 殿上闇討
- b. 巻第一 東宮立

¹⁵⁶ 「舞姫」という語は「徳大寺殿島詣」の章段にあるが、殿島神社所属の舞姫をさしているもので、五節の舞姫のことではない。

- c. 卷第五 五節之沙汰
- d. 卷第六 祇園女御
- e. 卷第十 大嘗会之沙汰

a. 「殿上闇討」 長承元年（1132 年）（旧大系④84-88 頁）

「殿上闇討」に描かれる五節は忠盛の得長寿院の寄進により内裏の昇殿が許された年のもので、覚一本系では（得長寿院の）供養は天承元年 3 月 13 日となっているが、得長寿院の供養は長承元年であることが他複数の一級資料から確認されている。長承元年は新嘗祭で、五節舞姫献上者たちは 4 人。宰相中将宗能、参議左大弁実光、能登守季兼、加賀守顕広であった。『中右記』には舞姫たちの名前はないが、加賀舞姫が 20 日に参入して殿上人が迎えに行き、庭道を敷き、助けて参入させた記載がある。『中右記』他のこの日の記述を載せる一級史料に「殿上闇討」を明示または暗示するような記述は勿論、ない。「殿上闇討」については、本章第 2 節で詳述する。

b. 「東宮立」 永万元年（1165 年）（旧大系⑤115 頁）

六条天皇の父二条院崩御（23 歳）により大嘗会が行われなかったというだけの記述。この時即位した六条天皇は 2 歳（長寛 2 年 [1164 年] 11 月 14 日生まれ）で生後わずか 7 か月¹⁵⁷だった。

c. 「五節之沙汰」 治承 4 年（1180 年）（旧大系⑤378 頁）

安徳天皇はこの年、治承 4 年の 4 月に即位の礼を行っているので、大嘗会は年内に行われるのが原則である。そこで大嘗会をどこで行うか、7 月から 8 月にかけて侃侃諤諤の議論があった¹⁵⁸。福原で行うことは福原を正式に京と位置づけることになるので、清盛は勿論福原挙行を主張し、九条兼実も平安京での催行を主張した。『平家物語』は、福原には大極殿も豊

¹⁵⁷ この間に閏月はない。

¹⁵⁸ 新嘗祭が内裏に移っても、大嘗祭は大極殿、その豊明節会は豊楽院で開催されてきた（いずれも焼亡まで）。豊楽院は康平 6 年（1063 年）に焼亡していた。豊楽院焼亡後の豊明節会は大極殿あるいは朝堂院内で行われた。以下、豊楽院焼亡後の五節の開催場所を示す例をいくつか挙げる。内裏南殿ではなく大極殿が使用されていたことがわかる。

『江家次第』15「踐祚」に「一献 国栖歌笛を奏す 会昌門外に於いて之を奏す」とあり、大歌別当も会昌門から退出しているため、この時は豊明節会は、豊楽院焼亡後の朝堂院内を想定していたと考える。

『台記』康治元年（1142 年）11 月午日、大極殿で雨儀を用いた。

『兵範記』仁安元年（1166 年）11 月 18 日戊午、東福門と昭訓門の名が見える。いずれも朝堂院内の大極殿横の門の名。

『兵範記』仁安 3 年（1168 年）11 月 25 日壬午、高倉天皇が装束された大極殿に出御して 5 人の舞姫の舞があつて殿上人の乱舞もあつたことが書いてあり、主上は小安殿（大極殿の北の殿舎）から鳳輦に載って内裏に帰った。

楽院もないから、大嘗会はできないので、新嘗会のみとなったことを語る¹⁵⁹。新嘗会といっても福原で行われるのは五節（豊明節会）だけとなり、新嘗祭の祭祀は 19 日に平安京の神祇官で行われた。それでも福原への行幸があり、11 月 17 日丑の日に舞姫の参入、18 日寅日に淵酔、19 日卯日に童女御覧、20 日辰の日に豊明節会と五節舞が福原で挙行された。この時の福原での五節の様子は『吉記』に詳しい。11 月 18 日に福原の内裏で丙寅の日殿上の淵酔があり、《万歳楽》の乱舞もあったが、勸杯すべき人たちが参上せず違例の多い淵酔となった。11 月 23 日には安徳天皇は平安京還都へ向け福原を後にした。

d. 「祇園女御」 治承 4 年（1180 年）（旧大系④422 頁 邦綱のエピソードとして）

治承 4 年の五節が福原で行われた時の中宮御所の淵酔で、殿上人らが「竹^{しやうほ} 湘 浦に斑なり」という朗詠をしたが、博識だった五条大納言邦綱は、この文言が舜帝の後二人（姉妹）が舜帝の死を悼み、湘浦^{しやうほ}というところで流した涙が竹にかかって斑^{まだら}になったという故事によるものであることを知っていたので、節会のような場所には忌むべき朗詠だとして「聞くともきかじ」（旧大系④422 頁）と抜き足で立ち去ったというエピソード。邦綱は清盛との親交が深く、清盛と同じ日に発病して同じ月に死んだというのが万事につけ心行き届いた人だったと語るエピソードのひとつ。なお、陳晨は、娥皇と女英の説話は、元来、中国では忌むべき故事ではなく、日本においても『平家物語』のこの引用以前は禁忌ではなく、深い愛情を詠嘆するものとして認識されていたことを論証している（陳晨 2012）。

e. 「藤戸」 寿永 3 年＝元暦元年（1184 年）（旧大系⑤296-297 頁）

平安京で後鳥羽天皇の大嘗会があり、その時、平家は西国にあった。回想として寿永元年（1182 年）の安徳天皇の大嘗会の際の、内大臣宗盛はじめ平家の公達の、りりしかった姿が描かれている。

以上のうち、5 件のうち、b. 「東宮立」では、大嘗会がなかったということだけなので、検討しないが、c. 「五節之沙汰」、d. 「祇園女御」、e. 「藤戸」については本部第 3 章の「平家物語の時代の献上者たち」の該当年で検討を加える。a. 「殿上闇討」については項を改める。

以上『平家物語』に登場する五節を見渡すと、平家のかかわる五節はまず、巻第一も冒頭に近い部分で、地下の身分から苦渋の道を経て着実に栄華への階段を上ってゆく初めの章段に置かれ、もう一つの五節が、福原遷都の夢破れ、平家滅亡への序曲が奏でられた年のものであるのは、五節は平家の興亡の最初と最後を彩っていることになる。

¹⁵⁹ 「しかるを、この福原の新都には大極殿もなければ、大礼をおこなふべきところもなし。（中略）今年はまだ新嘗会・五節ばかりあるべきよし公卿僉議あ（ッ）て、なを新嘗のまつりをば、旧都の神祇官にしてとげられけり」（旧大系④378 頁）。

第1節 忠盛の昇殿の悲願

昇殿は忠盛の悲願だったが、忠盛の昇殿に関わり深い五節は2件ある。天治元年（1124年）、つまり忠盛が舞姫を献上して昇殿を望んだがかなえられず、大変がっかりした五節と、長承元年（1132年）、いよいよ昇殿を許された年に初めて迎える五節である。後者は、忠盛の昇殿を快く思わない殿上人たちが、忠盛に恥辱を与えようと「闇討ち」を企てたが、忠盛は機転によってそれを切り抜け、逆に鳥羽院のお褒めにあずかったという『平家物語』巻第一「殿上闇討」に舞台を提供している。

（1） 受領忠盛

清盛の祖父正盛は院（白河院）の近臣受領である加賀守藤原為房、播磨守藤原頼季の郎従を勤めて、院に接近していった。白河院が鍾愛の皇女媞子内親王（郁芳門院）を悼んで建立した菩提寺へ自身の伊賀の所領を寄進して、白河院の歓心を買ひ、院の北面に加えられた後も成功を続け、源義親（義家の子）の謀反を鎮めた功により、大国但馬守に任ぜられた。この時、貴族たちは、侍身分でありながら大国の受領となった正盛をそねんだという。正盛は武力と経済力をもって白河院に奉仕して平氏繁栄の礎を築いた。正盛の子忠盛が清盛の父であるが、忠盛は父の正盛とともに、白河院と院の寵妃で「祇園女御」と呼ばれる白河殿に奉仕して、大国の受領を歴任した。白河法皇が没すると次の鳥羽院にも武力・財力をもって奉仕して、受領の最高峰である播磨守に任じられたが、公卿直前の正四位上で終わった。

忠盛の受領として確認できる最初の任国は、永久5年（1117年）に見任している伯耆国である（『中右記』）が、保安元年（1120年）に越前守に遷任して以来途切れることなく受領を歴任した。『国司補任』を出発点に忠盛の国司歴を確認すると次のようになる。

平忠盛の国司歴

永久5年（1117年）	伯耆守 従五位下	（『長秋記』、『中右記』）
（おそらく6月28日以前に伯耆守藤原家光が死去。その後を受けたと思われる。）		
元永2年（1119年）	伯耆守 11月13日、19日見任	（『長秋記』、『中右記』）
保安元年（1120年）	越前守 11月25日補任	（『中右記』）
大治2年（1127年）	越前守 11月15日見任	（『中右記』）
大治2年（1127年）	備前守 12月20日補任	（『中右記』）

長承元年（1132 年）	備前守 正四位下 正月 19 日重任	（『中右記』 ¹⁶⁰ ）
保延 2 年（1136 年）	美作守 見任	（『平安遺文』 2339）
天養元年（1144 年）	美作守 正月 24 日見任	（『国司補任』）
	（同じく正月 24 日 藤原有成が任美作守）	
天養元年（1144 年）	尾張守 9 月 29 日見任	（『平安遺文』 2536）
久安元年（1145 年）	尾張守 7 月 9 日見任（兼右京大夫。忠盛か）	（『平安遺文』 2558）
久安元年（1145 年）	播磨守 10 月 28 日見任	（『国司補任』）
久安 5 年（1149 年）	播磨守 正四位上平忠盛 4 月 3 日重任	（『本朝世紀』）
仁平元年（1151 年）	播磨守 正四位上平忠盛 2 月 2 日辞 ¹⁶¹	（『公卿補任』）

保安元年（1120 年）7 月 12 日忠盛は「伯耆守」であるが、同年 11 月 25 日の臨時除目で「越前守」に遷任した（『中右記』）。天治元年（1124 年）11 月 16 日には「越前守」忠盛が五節を献上しており（『中右記目録』）、大治 2 年 11 月 15 日には『中右記』記主藤原宗忠の五節献上に対して忠盛が綿 50 両を送っているが、忠盛はこの時まだ越前守¹⁶²であった。それから約 1 か月後の 12 月 20 日に行われた秋の除目で、「備前守」となった（『中右記』）。長承元年（1132 年）正月 19 日には備前は因幡、武蔵が重任を許されている（『中右記』）。『中右記』のこの日の条の備前に姓名はないが、同年 3 月 22 日条には「備前守忠盛朝臣」¹⁶³とあるので、重任された備前守が、この日に先立って鳥羽院に得長寿院を寄進した備前守忠盛であったことは確実である。保延元年（1135 年）8 月 19 日にも忠盛は備前守であるが（『中右記』）、翌年 2 月 11 日付の『平安遺文』（2339）の中務大輔美作守平朝臣は忠盛とみられる。翌保延 3 年（1137 年）10 月 12 日にも美作守平忠盛が東大寺御封に対する濫行に沙汰する下文を出している（『平安遺文』2377）。保延 5 年（1139 年）3 月 23 日にも美作守平忠盛は東大寺御領に関して下文を出している（『平安遺文』2407）。保延 6 年 4 月も造八幡宮国司等に美作守忠盛の名がある（『後愚昧記』 応安 4 年 5 月 19 日条）。天養元年（1144 年）正月 24 日には美作守は忠盛から藤原有成に交替になり、忠盛は 9 月 29 日には尾張守に見任している（『平安遺文』 2536）。しかし、「尾張守平朝臣」であって、名前はない。久安元年（1145 年）7 月 9 日には見任の尾張守右京大夫が忠盛とみなされており、同年 10 月 28 日には忠盛は播磨守である（『国司補任』）。4 年後の久安 5 年（1149 年）4 月 3 日には正四位上の忠盛は大国播磨を重任した。仁平元年（1151 年）2 月 2 日 56 歳で播磨守を辞して、仁平 3 年正月 13 日に没した。

¹⁶⁰ 重任者の姓名は欠くが、3 月 9 日、22 日に忠盛が見任。

¹⁶¹ 『公卿補任』 仁安 3 年の平教盛の項による。

¹⁶² 『中右記』は「越中守忠盛」と作っているが、当時の越中守は知行主藤原実能の子の公能であるから、忠盛の「越中守」は「越前守」の誤記であると推定される。

¹⁶³ 忠盛が内裏の昇殿を許されてすぐである。

忠盛は途切れることなく国守を歴任しているが、国の数は66（+2島）で任期は4年¹⁶⁴だから単純平均で年に16～17しか国守に空きは出ない。そのうえ、蔵人、検非違使、式部、民部、外記、史の巡爵に加えて、（毎年ではなくても）検非違使、大蔵丞、織部正などの巡によって7～8か国が消えるとすれば、毎年10余の数の国を巡って、重任・新叙希望者が熾烈な競争を繰り広げることになる。そのような中で、次々に任国を得てゆく忠盛の手腕は相当なものであった。

『平家物語』巻第一に置かれる「殿上闊討」では、忠盛は備前守だった時に、鳥羽院に得長寿院を成功して、内裏の昇殿と但馬守への遷任を得たことになっている¹⁶⁵。（「忠盛備前守たりし時、（中略）^{おりふし}境節但馬国のあきたりけるを給にけり。上皇御感のあまりに内の昇殿を許さる。忠盛三十六にて始て昇殿す」〔旧大系④84頁〕）。但馬国は、天承元年（1131年）、長承元年（1132年）、長承2年（1133年）に亘って守は正四位下の源有賢が在任している¹⁶⁶。したがって、堂の供養時には欠国ではなかった。『国司補任』（平治元年〔1159年〕まで所収）及び『国司一覧』の但馬国には忠盛の名は見えないが、忠盛の父正盛は天仁元年（1108年）正月24日から、天永元年（1110年）丹後守に遷任するまで但馬守だった。『平家物語』の忠盛の但馬守は父正盛との混同創作だろうか。忠盛は大治4年（1129年）から備前守で、この年（長承元年）正月19日備前守を重任しているので、得長寿院寄進時は確かに備前守であった。

（2） 昇殿への長い道のり

忠盛は天養元年（1144年）皇后宮得子が白河殿に移徙した際の行事を勤めた賞として10月26日に正四位上に叙されたが¹⁶⁷、結局、公卿の一步手前で仁平3年（1153年）に生涯を終えた。従三位になれば、参議になれずとも「公卿」に列し「忠盛卿」と呼ばれる身分になる。忠盛は正四位下から正四位上に昇ったのであるが、通常、正四位上は飛び階であるから、正四位下の次は従三位が通例であり、正四位上は、任じられる人の稀な位階であった。忠盛は公卿昇進を果たせないまま、仁平3年（1153年）正月15日に（58歳）で没した。公卿は夢だったとしても、大国の受領を歴任し、位階も上昇していく過程で忠盛は昇殿を切望した。まずは院への昇殿、そして究極は内裏の昇殿であった。それは平家の棟梁としての忠盛の悲願であったら

¹⁶⁴ 例外は、陸奥、出羽、大宰府管内で5年。

¹⁶⁵ 忠盛の得長寿院造進と内裏昇殿を『平家物語』（覚一本）では「天承元年」（1131年）と作るが、『中右記』などの一次史料により、得長寿院寄進と忠盛昇殿は長承元年（1132年）であることが確認されているので、以下、「殿上闊討」の年立ては長承元年（1132年）と記述する。

¹⁶⁶ 長承3年になって、守は従五位下藤原隆季に代わる。

¹⁶⁷ 『仙洞御移徙部類記』が引く『冷中記』より。

う。

内裏の昇殿とは周知のように清涼殿の殿上の間への伺候を許されることである。天皇との人的関係を基盤にした新たな秩序関係で、公卿以外にも四位五位の官人の中から勅許によって許された。内裏の昇殿以外にも院や東宮などもそれぞれ昇殿制を敷いており、院では上皇の近臣となり院昇殿を許されるものが輩出した。寛治7年（1093年）の白河院の院殿上人は74人いたという¹⁶⁸。院の近臣は四～五位程度の諸大夫層で、院庁の実質的中心となり、院の拔擢で受領に就任するものが多かった。院の殿上人のごく一部の有能な官人や名門の出身者の中には弁官や蔵人頭に補任され、最終的に公卿に昇進するものもあった。従って、院殿上人は院によって育成された受領層が中心で伝統的公卿層から見れば低い身分であり、「内裏の昇殿にはそれ〔院昇殿〕とは比べ物にならない権威があった」という（福島正樹 2009：139）。内裏の殿上人は、「寛平御遺誡」には六位を含めて30人と定められたが、増大してゆき、堀河天皇の長治3年（1106年）には47人、忠盛・清盛の時代よりは後になるが、土御門天皇の時は100余人、順徳朝は70余人であったという¹⁶⁹。

武士としては、源義家が既に承徳2年（1098年）に院の昇殿が許されていた。しかし、義家の院昇殿も、公卿・殿上人は快く思わなかった。『中右記』承徳2年10月23日条に「前陸奥守義家朝臣・若狭守敦兼被聴一院昇殿、敦宗息男・備後守行実男被補院侍中」（以上行間補書）、「義家朝臣、天下第一武勇之士也、被聴昇殿、世人有不甘心気歟、但莫言」（裏書）とあり、前陸奥守義家と若狭守敦兼が一の院の昇殿を許されたことと、敦宗の息子と備後守行実の息子が、院の蔵人に補されたということと、義家朝臣は天下の第一の武勇の士ではあっても、昇殿を許されたことには「世人甘心せざるの気あるか」と宮中人たちの間に根強い不快感があったことが記録されている。

（3） 昇殿の喜びを詠んだ忠盛の和歌

『玉葉和歌集』¹⁷⁰には、忠盛が昇殿を許されて大変喜んで詠んだという和歌がある。『玉葉和歌集』2768番がそれで、以下がその詞書と歌である。（忠盛の和歌と詞書の引用はこれ以降特に断りのない限り『新編国歌大観』を使用。）

臨時祭の舞人にて八幡へまゐりて侍りけるに、はばかり事ありて御前へはまゐらでむま

¹⁶⁸ 『平安時代史事典』「殿上人」（大津透）。

¹⁶⁹ 『国史大辞典』「殿上人」（橋本義彦）。

¹⁷⁰ 『玉葉和歌集』鎌倉時代の勅撰和歌集。伏見院の命で京極為兼撰。正和元年（1312年）ごろ成立。

ばにたちて侍りけるが、たふとげなる僧の侍りけるにかたらひつきて殿上のぞみ申しけるいのり申しつけて侍りけるに、程なくゆるされにければ、かの僧のもとへよろこび申しつかはすとて

うれしとも中中なればいはし水 神ぞしるらんおもふころは (『玉葉和歌集』 2768¹⁷¹)

忠盛は、石清水八幡臨時祭の舞人になって間もなく「昇殿」を許されたというのだが、詞書は、忠盛が石清水の臨時祭（3月）の舞人に選ばれた時、八幡へ参詣したが、差障りがあって御前までは行かずに馬場にいたところ、尊そうな僧がいたので「昇殿」のお願いの祈りを頼んだところ、それから間もなく、昇殿のお許しが出たので、その僧のもとへお礼をいうのに添えた歌だという。和歌は、「嬉しいというのもかえってわざとらしい位ですので、申しませんが、石清水の神よ、あなたこそ御存じでしょう、私がどんなに喜び、感謝しているかは」（岩佐美代子 1996：636）ということである。

なお、高橋昌明（2004：124）は、この歌を院昇殿の所懐とは解するが、「うれしとも中中なれば」は、目標であった内裏昇殿からみれば初歩的な成果だったから、喜びも中位だと解釈する。確かに「なかなか」とは中途半端で満足のいかないことを表す言葉ではあるが、本論筆者は、この「中中なれば」は「いはし水」の「いはじ」にかかるから、「あえて言いません。ですから、察して下さい私の心のうちの嬉しさがどんなに大きいかを」ということであると考え、岩佐美代子の訳を支持する。勿論、実際どの程度嬉しかったのか忠盛の心奥は知るすべはなく、歌の文字通りではなかった可能性もある。しかし、和歌はひとたび出詠されれば、世人の口にもものぼり、白河院の耳にも入るであろう。であれば、賢人忠盛は、内裏昇殿でないから満足でないなどとは言わないであろう。院殿上人にしてくれた白河院への謝意を伝えるためにも、昇殿を天にも昇る心地で喜んでいると礼をいつているものでもあると考える。

臨時祭（賀茂・石清水）は「臨時」という名は持っていても毎年の行事となっている。石清水の臨時祭は、天慶5年（942年）平将門・藤原純友の乱平定の報賽に臨時に勅使を立て歌舞を奉ったのが始まりで、天禄2年（971年）からは毎年の行事になった。恒祭に対して臨時祭は天皇個人の祈願祭祀の傾向が強い。一方、賀茂の臨時祭は寛平元年（889年）、宇多天皇が始めた。石清水臨時祭は3月の中の午の日（三午なら下午）に行われる。2月に祭使・舞人・陪従（歌、伴奏を担当）などが定められて楽所で歌舞の調習が始められる。恒祭のほうは、通常から歌舞を奉仕する近衛の官人たちが勤仕するが、臨時祭は、天皇の近臣たちが勤仕するので舞は常務ではないから、長期間の調習が必要なのである。例祭の2日ほど前に清涼殿で試楽があり、天皇出御のもと、「使」以下が参入して、舞人たちが、《駿河歌》と《求子歌》を舞う。

¹⁷¹ 『忠盛集』では158番。

同日天皇は祭に供する左右十列の御馬を見る。また祭の日には天皇が出御して、使以下に宴を賜い、舞を見る。式が終ると使以下は社頭に参向、神前舞殿の座で、宣命の読み上げと返祝詞がある。舞殿での舞（東遊）が終わると舞人たちは10頭の馬を馳せる。「使」以下が帰参すると、天皇は清涼殿に出御、「使」以下に酒饌あり（還立）、《求子歌》を舞うという。但し、平安中期には、石清水臨時祭（春）では還立の舞はなかったらしい¹⁷²。『枕草子』の「なほめでたきもの」（新編 136 段 258 頁）の段に、石清水の臨時祭のすばらしさを描いて、でも還立の舞がないのを女房たちが残念だと言うのを帝が聞き、舞人たちを呼び戻して舞わせたというくだりがある。舞人たちは、まさかそのようなことはあるまいと思っていたから、あたふたしながらやってきたという話である。

《駿河歌》と《求子歌》の舞は東遊の中核をなす舞である¹⁷³。東遊は組曲で、全曲の構成は、狛調子、阿波礼、一二歌音出、於振、一歌、於振、二歌、於振、駿河歌歌出、駿河歌一段、駿河歌二段、加太於呂志、阿波礼、求子歌出、求子歌、大比礼歌出、大比礼歌であるが、舞があるのは《駿河歌》と《求子歌》である。

石清水臨時祭に詠まれた「うれしとも中中なれば」の歌はいつのものだったのか。つまり、この昇殿はいつのことをいっているのだろうか。

（イ） 舞人忠盛

「うれしとも中中なれば」の歌の詞書の「臨時祭の舞人にて八幡へまゐりて侍りけるに」であるが、確かに忠盛は石清水臨時祭の舞人となっている。これは『中右記』保安元年（1120 年）3 月 18 日（史料大成本）の記述に、『中右記』の記主、藤原宗忠が申の時に、帰京の途中で土御門西洞院を過ぎる時、石清水の臨時祭の行列が大路を渡っていたので、牛車を止めて見物したというのであるが、この時の舞人の中に忠盛の名があるのである。（「天晴。（中略）申時許帰洛之次、過土御門西洞院間、臨時祭渡大路、留車自然見物、舞人以下渡北陣并院御所西御門前、經東洞院一条西洞院也。（中略）舞人＜忠隆、不召一舞、忠能、顯頼、忠盛、公章、公教、経親、家長、右衛門尉国忠地下＞、藏人左兵衛尉盛行為行事、申刻渡了帰家」〔下線付加〕）。ここの「不召一舞」の「一舞」というのは、最初に 2 人で舞う舞で、『枕草子』136 段にも「一の舞の

¹⁷² 『江家次第』六／三月／石清水還立御前儀に、使と陪従が呉竹の台下に立ち、舞人が進み出て求子を舞うという個所の、割注に「還立、南祭還立日出御、東遊事、近代不被行」と近代には行われていないという。神社で十列の馬を引く時、殿上で《駿河舞》が舞われているので、還立は《求子》を舞うと思われる。

¹⁷³ なお、《駿河歌》と《求子歌》の 2 曲舞うことを「諸舞」、片方のみを舞う形式を「片舞」と呼称しているが、片舞が《駿河歌》の舞なのか《求子歌》の舞なのかは、辞書・研究者によって違っている。ちなみに『統教訓抄』十一上「吹物」には「又求子、駿河舞ヲバ、諸舞トイフ、求子ハカリヲハ片舞トイフ、哥モ則諸舞ノトキハ、初ヨリ哥レ之、片舞ノトキハ、第三句ヨリ哥レ之」（476 頁）

いとうるはしう袖を合はせて、二人ばかり出で来て、西によりて向かひ立ちぬ」(新編 256 頁)とある。一の舞は舞人のうちの上臈 2 人が勤めるのが常だったが、この保安元年(1120 年)の石清水の臨時祭では「不召一舞」であるから、一の舞は舞われなかった。

忠盛はこの前年の元永 2 年(1119 年)11 月の賀茂の臨時祭で新たに舞人となっていた。これについては、『中右記』元永 2 年(1119 年)11 月 19 日条に、忠盛に「新舞人」と注が付けられていることわかる。「天晴、賀茂臨時祭也。(中略)舞人、少納言忠能、兵衛佐忠隆、依為位階上臈為一舞、季成、公教、公隆、<新舞人>、頭頼、忠盛<馬権頭、伯耆守、新舞人>、藏人頭憲、国能、四位陪従家保(中略)抑平忠盛舞人道施光花、万事驚耳目、誠希代勝事也」(下線付加)とある。忠盛は天永 4 年(1113 年)には従五位下に叙せられていたので(盗賊追捕した功)(『長秋記』¹⁷⁴ 3 月 14 日条)、五位の舞人として六位の藏人より先に名が来てよい。しかし、六位でも藏人なら昇殿している。すると、元永 2 年(1119 年)賀茂の臨時祭では新舞人忠盛は、舞人の中では六位の藏人を除いて最下位の位置づけであった。<地下>の付記はないが、昇殿するのは 3 月の石清水臨時祭の際だから、新舞人となった前年(元永 2 年)11 月賀茂臨時祭にはまだ地下であったことになる。『玉葉和歌集』の詞書のある昇殿の喜びの歌はまずもって元永 2 年のことではない。

初めて舞人となった時、忠盛は 24 歳であった。『中右記』のこの記事によると、この臨時祭では忠能、忠隆が舞人の中で位階が上臈であったので一の舞を奉仕した。そして、舞人忠盛を評しては「道施光花¹⁷⁵、万事驚耳目」といっている(但し、宗忠自身は賀茂臨時祭には不参だった)。「光花」は美しく光ることで、『中右記』の忠盛の評は、忠盛が道に光花をもたらし、皆の耳目を驚かせる素晴らしい出来だったという最大級の賛辞であり、忠盛は極めて優れた舞人であったことは確かであろう。そして貴族社会にあっては優れた舞は昇進の大きな契機ともなる。

忠盛は元永 2 年(1119 年)の賀茂の臨時祭で「新舞人」となったから、翌年である保安元年(1120 年)に石清水臨時祭の舞人でもあっただろうことを推測させる。舞人はひとたび選ばれ、舞に堪うる者であると認められれば、毎年臨時祭で舞うからである。この「毎年の舞人」という概念は『枕草子』にも見える。臨時祭(賀茂と石清水)を描いた 136 段に「頭中将といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、亡くなりて、上の社の、橋の下にあなるを聞けば、ゆゆしう、ものをさしも思ひ入れじと思へど、なほめでたき事をこそ、さらにえ思ひ捨つまじけれ」(新編 258 頁)と、清少納言の時代に、とある頭中将が毎年の臨時祭

¹⁷⁴ 『長秋記』記主 源師時 1087(寛治元)～1136 年(保延 2)。朝廷の儀式・礼法に詳しい。源師時は中納言。当時の社会的事件など記録の範囲は多様。天永 2 年(1111 年)以降が現存。

¹⁷⁵ 「道施光花」、宗忠はこの褒め言葉が好きであったらしい。『中右記』に何回か見られる。例えば『中右記』(史料大成本)長治 2 年(1105 年)正月 16 日(踏歌節会)には、長男である左兵衛佐宗能が五位の藏人に補された時に大変喜んで「家施光華、人驚耳目、朝恩之重可喜可恐(家に光華を施し、人の耳目を驚かす、朝恩の重きこと喜ぶべし、恐るべし)」と使っている。

の舞人に選ばれたが、この中将は臨時祭の舞に思い入れが深く、死んだ後までも霊が賀茂の上社の橋の下にとどまっていたという。

忠盛は元永2年に舞人となり、以降、何年か舞人を務めたはずであるから、昇殿の願をかけて許された「うれしとも中中なれば」の和歌が、賀茂の臨時祭で新舞人となった翌年の保安元年のものであるとは、『中右記』保安元年（1120年）3月15日条だけでは断定できないのである。

（ロ） この和歌に詠まれた昇殿は「院」の昇殿か「内裏」の昇殿か

ところで、この忠盛の和歌に詠まれた「昇殿」はどこ昇殿であるのか。昇殿は内裏以外にも上皇、東宮などそれぞれ昇殿がある。岩佐美代子はこれを内裏の昇殿と捉えている（岩佐1996：636）。するとこの歌は忠盛が内裏の昇殿が許された長承元年（1132年）のものであることになり、『平家物語』の「殿上闇討」の五節のあった年と同年の話となる。一方、井上宗雄は、この歌を「恐らく保安元年三月以後間もないころであろう。そしてこの時、許されたのは院昇殿と推測される」（井上1978：380）と述べる。しかしなぜ保安元年（1120年）なのか、それ以上の説明はない。

まず、「うれしとも中中なれば」の和歌は内裏昇殿の時のものではなかったかという可能性について考える。忠盛の内裏の昇殿は、『平家物語』においても、記録類においても、得長寿院の成功によってであることが明らかである。しかし、石清水の臨時祭で許された和歌の詞書などに得長寿院の記述がないことを以て、内裏の昇殿ではなく院の昇殿であると、簡単にいうこともできない。

忠盛は（毎年の舞人になったのだから）、長承元年にも石清水臨時祭の舞人を勤めていたということはなかったと言い切れるのか。あるいは、長承元年に得長寿院を寄進して、そのうえで、石清水で願をかけて昇殿がかなえられたという可能性はないだろうか。忠盛が長承元年に内裏昇殿を許されたのは3月22日直前である。長承元年の石清水臨時祭は3月15日に行われている。3月初旬ごろに石清水で昇殿を願って「ほどない」3月22日に願いがかなっているという時系列はぴったり合う。

しかし、結論からいえば、「この歌は長承元年のものではない」と言い切れるのである。これを次項（ハ）で明らかにする。

（ハ） 「うれしとも中中なれば」の和歌は長承元年のものではない

忠盛の内裏昇殿が長承元年のことであることは『中右記』(史料大成本¹⁷⁶)長承元年(1132年)3月22日条の「備前守忠盛朝臣入来云、被聴内昇殿之後、今日初供御膳也、此人昇殿猶未曾有之事也」にある。『中右記』は、この時「此人昇殿猶未曾有之事也」と記し、貴族たちの多くが「この人の昇殿など前代未聞」と思ったことも伝えている。

前述のように、この年長承元年の石清水の臨時祭は3月午の日(15日)であった。以下が『中右記』(史料大成本)の長承元年3月15日条である。

今日八幡臨時祭也。内御物忌間、人々参籠云々、殿下、新大納言<実行>、右衛門督<実能>、左兵衛督<宗輔>、中宮権大夫<忠宗>、新中納言<雅兼>、左宰相中将<宗能>、右兵衛督<顕頼>、参入、使頭中将公教(中略)

初献内蔵頭清隆、二献右衛門督、<新大納言転盞、使有憚不執也>、三献左兵衛督宗輔(中略)

一舞人蔵人少将公能、少将俊雅、依階也。(中略) 四位陪従顕重、時俊、院女院於三条御所前御見物、三位中将乗院御車後給云々。(下線付加)

ここでは、内裏での儀式の中に「一舞人蔵人少将公能、少将俊雅、依階也」とあるので、この時の一の舞は少将の公能と俊雅が勤めた、そして「依階也」とあるから、一の舞を勤めた理由は舞人たちの中では、この2人の位階が高かったのである。しかし、蔵人とあるからには、五位か六位で、四位ではない。そもそも、石清水臨時祭の舞人は10人で、天皇の代始めこそ参議が使を勤め、舞人は四位のものが4人、五位が4人、六位が2人出るが¹⁷⁷、代始めでない通常の年の臨時祭においては、使いこそ四位のものが選ばれるが、舞人は五位と六位から出る。長承元年の天皇は崇徳であるが、即位は保安4年(1123年)であったから長承元年は代始めではなく、四位の舞人は不要である。忠盛は大治5年(1130年)正月7日に鳥羽院の御給によって正四位下に叙せられている。この時の『中右記』の記述も「人々驚耳目」と続け、例のない昇進ぶりと受けとめられた。忠盛が従四位下になった年月は不明であるが、大治2年(1127年)備前守になったころではないかと考えられている。もし、四位の忠盛が舞人であったら、五位の蔵人が位階を理由に名誉の一の舞を務めて、これが「依階也」と書かれるはずはない。

元永2年(1119年)11月、忠盛が舞人となった時、『長秋記』の11月13日条には「伯耆守平忠盛入臨時祭舞人云々、世以不許」とあるように、すぐ行われる賀茂臨時祭に忠盛が舞人に

¹⁷⁶ 大日本古記録『中右記』には長承元年11月の記事はない。

¹⁷⁷ 『江家次第』に「代初以参議為使、舞人四位四人五位四人六位二人」(神道大系本324頁)とある。『建武年中行事』三月「使舞人十人をかく。代の始にはつかひ参議。舞人四位已下なり。つねにはつかひ四位。まひ人五位六位なり」とある。('かく'は「書く」の意)。

加わったことにさえ風当たりは強かった。臨時祭の舞人は五位または六位ではあったが多くの公卿の家の若い子弟であった。臨時祭舞人はこのような御曹司たちの晴れの舞台¹⁷⁸であったところ、最下品の武士の地下人が加わるなど、多くの殿上人にとっては噴飯ものだったのだ。

世代は替わり、大治4年（1129年）3月16日の石清水臨時祭では、忠盛の嫡子で、従五位下になっていた清盛が既に舞人となっている。それより後の長承元年（1132年）に、36歳になり正四位下にまで昇っている忠盛が五位・六位の舞人に交じって舞うことは考えられないのである。もっとも、長承元年には陪従には「四位陪従顕重、時俊」と四位の者2人がみえる。これはどうしたことか。陪従については通常の年でも四位が出る。舞人は六位まで名が書かれるが、陪従では名が書かれるのは四位陪従だけで、五位六位陪従の名はない。これは、佐藤厚子の説く「臨時祭がある種のイベント性を強めて行く」、そして「その傾向は、時代の降るにつれて強化され、舞人奉仕は、六位のそれをも含め、技量とは殆ど無関係に、若き宮廷人の栄誉の役となった。一方、舞人の技量の無実化に対する反作用のようにして、陪従の専門化が進み、四、五位は形ばかりの『加陪従』として一時代前の名残を留めるだけのものになったのではなかろうか」（佐藤厚子 2003：82）という文の四位の陪従に呼応すると考える。陪従は既に（舞人より早く）専門化がすすみ、実質的には地下の楽人たちの奉仕するものとなった結果、四位陪従は実際に歌ったり伴奏はしないが、四位の顕重・時俊は、威儀をととのえ、箔をつけるための陪従であったのだ。

つまるところ、長承元年には忠盛は既に四位であったということだけでも、「うれしとも中中なれば」という『玉葉和歌集』の和歌は長承元年の内裏の昇殿ではなく、それ以前の昇殿、すなわち、院の昇殿の喜びを詠ったものを意味していたことはこれで明らかなのである。

青年忠盛は石清水の神に昇殿を願ったが、長承元年 37 歳の内裏昇殿は、神でなく、得長寿院に安置された仏たちにつぎ込んだ財の力のなせる業であったのだ。

（二） 忠盛の院の昇殿はいつだったのか

石清水で願った昇殿は、武士として仕える白河院の昇殿のことであろう。では、石清水臨時祭で舞って「うれしとも中中なれば」で喜びをうたった院昇殿はいつのことだったのだろうか。保安元年（1120年）でいいのだろうか。

賀茂も石清水も、恒祭が近衛官人たちによるいかにも公的な体裁に対して、臨時祭は天皇の私的祈願と考えられるので、舞をはじめとする芸能は天皇の側近である殿上人が奉仕する。賀茂臨時祭は『政事要略』に、「清涼記、前月下旬、定使一人并舞人十人。陪従十二人。＜使用四

¹⁷⁸ 時代が下ると地下の専門の舞人が勤めることになってゆくが。

位、舞人五位帶劍者、若殿上人不足時、選諸司帶劍五位六位堪舞者補之、陪從殿上并諸所堪歌者用之」（卷二十八、十一月「四、下西賀茂臨時祭事」）とあり、祭の使いは1人で四位、舞人は10人で五位六位で、もし殿上人で足りなければ（「若殿上人不足時」）、諸司から舞のできる者が選ばれるというのだから、原則、舞人は殿上人であることが要請されていた。内裏殿上ではなく院の殿上人であっても地下とは一線を画する。賀茂の臨時祭は宇多天皇が父光孝天皇（小松の天皇）から皇統を受け継いだ感謝として始めた祭祀というから、同じ皇統の、天皇であった院も含めた天皇家の近臣たちということでは、広い意味で院殿上人も「殿上人」と考えていいのではないか。舞人の記録においては、非殿上人の舞人に対しては往々にして、非殿上とか地下とかの注がついている。地下か殿上か、人々の意識の中での違いはやはり大きかった。

ところで、保安元年（1120年）の石清水臨時祭には前に引用した『中右記』の記録に忠盛を含めて9人の舞人の名がある。「舞人<忠隆、不召一舞、忠能、顕頼、忠盛、公章、公教、経親、家長、右衛門尉国忠地下>」（下線付加）である。舞人は10人であるが、障りなどがあれば欠けることもあった。保安元年については書き落としなのか、舞人が欠場したのか、定かではないが、舞人が欠けた時は、さらに1人を停止して偶数人にして舞うのが原則だった。（『小右記』長和2年3月27日条「舞人七人、往古例、七人参入時被止今一人、六人舞之、而故一条院御時、左府不存此事、或時九人或七人令舞、不然事也」。）

また、臨時祭の舞人の名の列記順は恣意ではない。舞人の後に書かれる陪從たちは前述のように四位の陪從だれそれ、五位の陪從だれそれ、六位の陪從だれそれ、と位階を明記して記される以外に、「加陪從」（四位五位の陪從）、「所作陪從」（六位）という呼称の区別さえある（佐藤厚子 2003：82-83）。

忠盛は天永4年（1113年）には従五位下で、六位の藏人を除けば最下位の位置づけであったが、保安元年（1120年）の『中右記』の石清水臨時祭では最後の右衛門尉国忠に「地下」とつけられている。国忠地下の「地下」という注は国忠1人に付されたもので、国忠の前に名が書かれている家長は、元永元年（1118年）に鳥羽天皇の藏人に任ぜられている。藏人だから殿上人である。これだけからも、最後の地下は国忠だけに付せられたもので、忠盛を含めて家長以前に懸かっていることは明白である。

保安元年（1120年）、忠盛の名は9人の舞人のなかの4番目に挙がっている。前年11月の賀茂の臨時祭では忠盛の名は最後から3番目であった（前項（イ）で引いた『中右記』元永2年11月19日条にある舞人を再掲すると「少納言忠能、兵衛佐忠隆、依為位階上臈為一舞、季成、公教、公隆、<新舞人>、顕頼、忠盛<馬権頭、伯耆守、新舞人>、藏人顕憲、国能、四位陪從家保」であり、この中で、最後の顕憲、国能の2人は藏人であるからこれらは六位の舞人2人に相当するはずである。この藏人2人は舞人であるが、行事も兼ねていたと考えられる。最初

の2人忠能、忠隆は前年の元永元年の賀茂臨時祭の折の舞人最上臈であるので一の舞を舞っている。この時、次に名がある顕頼は藤原北家の息子で既に永久3年（1115年）3月24日に22歳で昇殿している。公章は不明だが、次の藤原公教の父は太政大臣にまで上る三条家の実行で、保安元年現在18歳。保安元年（1120年）には忠盛は4番目に名がある。しかし、名が4番目にあったからといって、殿上が許されていたとは限らない。舞人の列記は殿上非殿上の順でなく、もっぱら位階の順だからである。例えば、天永3年（1112年）3月13日の石清水臨時祭であるが、『宮寺縁事抄』の舞人のリストは

舞人

右兵衛佐能賢	侍従宗成
左兵衛佐顕経	侍実能
侍従成通<蔵人>	右衛門権佐重隆
侍従実衡	左衛門尉源家重
左衛門尉藤盛経<蔵人>	左兵衛尉藤原為忠<蔵人>

となっているが、リストの筆頭に來ている能賢は『殿暦』天永3年3月13日条においては「今日不被仰一舞、依位階次無之、<兵衛佐能賢非殿上、侍従宗成殿上人、兩人無一舞>」とある。これに関する『中右記』の同日の記述は「使右中将師時朝臣、不召一舞、位階上臈能実<地下>、宗成也。新舞人三人」である（「能賢」が「能実」となっているが、同一人物で間違いなからう）。一の舞は通常、上臈2人が舞うのだが、位階2番の侍従宗成は殿上人であったが、最上臈の兵衛佐能賢が非殿上であったので、一の舞は行われなかったというのだ。舞人最上臈が地下であることもあったのである¹⁷⁹。

忠盛は、この翌年の保安2年（1121年）には石清水臨時祭の舞人の中にいない。保安2年の石清水臨時祭の舞人の名は「石清水臨時祭定文」（『朝野群載』保安2年2月30日）にあるが、忠隆、経親、季成、公教、公隆、俊隆、長輔、家長、盛行、範隆で定例の10名である。忠盛はあるいは従四位下になって舞人を外れたのだろうか。忠盛が従四位下に叙せられた年は未詳だが、保安2年では少し早すぎるように思われる。忠盛は天永4年（1113年）に従五位下に叙されて、足かけ5年後の永久5年（1117年）でも従五位下である。このころは、まだ武士台頭の時代であり、院寵臣の武士の子供たちが幼年で叙爵したり受領になったりする時代はまだ来っていない。武士たちがやっと院と結んで政治の舞台に足がかりをつかんでゆく時代に、永久5年

¹⁷⁹ この2年後の永久2年（1114年）には石清水臨時祭は4月25日に行われた。この年には能賢は院殿上人となっていた。『中右記』永久2年4月25日条に舞人の名がある。「舞人能賢、宗章、<以上二人院殿上人>、宗成<殿上>、成通、<殿上五位蔵人>、盛家<地下>、重隆、<地下>、顕盛、<新舞人、院殿上人>、蔵人左衛門尉説雅、同左近将監盛経、右近将監家行」。もっとも、この年も能賢は殿上人となつて、かつ最上臈であったにもかかわらず宗成と成通が一の舞を舞った。『中右記』記主の宗忠は「先々為院殿上人輩、勤仕一舞也、今度不然如何」とこれも疑義を述べる。

からたった4年で従五位下から従五位上、正五位下を経て、保安2年に従四位下以上に駆け上っていたとは考えにくい。なお、忠盛が従四位上に昇ったのは大治4年（1129年）正月6日、白河院の当年の御給によってであった（『中右記』）。忠盛が保安2年（1121年）3月に舞人ではなかったのが位階四位となって引退したわけではなかったとしたら¹⁸⁰、保安2年には何らかの障りがある舞人にならなかっただけなのか。そのような場合、まず、考えられるのは服による不参加である。父の喪はあっただろうか。忠盛の父、正盛は生没年は不詳ではあるが、辞書などによっては正盛の没年として保安元年ごろを挙げているものもある。例えば、『世界大百科事典』第2版の「平正盛」の解説では「讃岐守在任中の1121年（保安2）60歳をすぎて没したと推測される」とあり、安田元久『平清盛』（1971：59）では、正盛の死期は、正確にはわからないとしつつも、「保安元年（1120）以後、二・三年の間に死去したものと思われるが、保安元年とすれば、孫の清盛が数えて三歳の時であった」としているように、概して保安元～3年と考えられているようである。正盛は『国司補任』では保安元年12月14日に讃岐守に任じられて保安2年正月26日には讃岐守見任であり生存していた。もし、正盛が保安2年の2月か3月に没していれば、保安2年の3月の神事に忠盛は舞人たり得ない¹⁸¹。あるいは他の親族の服であったかもしれない。あいにく翌年保安3年の舞人の名前の記録は残っていないので、翌年以降忠盛が舞人に復帰したかどうかはわからない。

天治元年（1124年）の可能性も排除してよい。この年、五節を献上した忠盛はこの時、昇殿を強く望んでいるが、それは内裏の昇殿であったことが明らかだからである。内裏の昇殿を望んでいる時に院の昇殿を許されても「うれしとも中中なれば」の歌を詠むほど意義はないだろう¹⁸²。天治元年（1124年）の3月に石清水臨時祭で院昇殿を許されて、11月には内裏昇殿を望んだという可能性も完全に否定できるものではないが、1年のうちにいきなり院と内裏の昇殿2つは高望みも過ぎようか。武士にとっては院の昇殿でさえ簡単ではなく、内裏の昇殿はまた格段のものであることは承知していたはずである。

すると結局、忠盛の院の昇殿は保安元年（1120年）、保安3年（1122年）、保安4年（1123年）のいずれかとなるが、そのうちどの年であるか決定的な決め手はない。しかし、忠盛には元永2年（1119年）11月に初めて舞人となった賀茂臨時祭では明らかに地下であり、保安元年（1120年）3月石清水臨時祭舞人の列記には、国忠という人物には地下の付記があったが忠盛にはないこと¹⁸³、前年11月の忠盛の舞は人々から賞賛されたこと、舞人は殿上人が望ましか

¹⁸⁰ この年12月の賀茂臨時祭の舞人の記録は見つからないが。

¹⁸¹ 高橋昌明は正盛の死を保安2年4月2日と推定する（高橋正明 2004：121）。もし、正盛の死が急逝でなく、しばらくは病床にあったとしたら、神事奉仕の前は病人の見舞いも慎むものだから、嫡子忠盛が保安2年の3月23日の石清水臨時祭の舞人を辞退しても当然ではあろう。

¹⁸² 本節次項（4）「内裏昇殿への悲願」参照。

¹⁸³ 単に書き落としと言われれば身も蓋もないけれど。

ったことなどを考えあわせれば、忠盛は元永 2 年 11 月の賀茂の臨時祭から舞人となり、次の保安元年 3 月の石清水の臨時祭を前に院の昇殿を許されて、「(院) 殿上人」となり、とりあげず地下を脱した可能性が高い。

本論筆者はこのように推定する。忠盛は、保安元年の石清水での舞に先立ち、舞の祈願と場所の下見を兼ねて石清水に行ってみた。これは舞人に定まった 2 月中だったのかもしれないし、3 月に入っていたかもしれないが、臨時祭の当日ではない。なぜなら、この時忠盛は障りがあるって本殿前までは行っていないというからである。障りがあれば当然舞人には出られない。この日、石清水に到着後は本殿前には行かず、馬場を見に行った。忠盛はこの前年の元永 2 年の 11 月には右馬権頭を兼ねている。馬寮の責を負うものとして、馬場の検分に出かけたのだろうと推測する。また舞人は馬を馳せるのだから、武士として優れた馬術を見せなければならぬと思ったこともあるかもしれない。そして、馬場を検分している時に僧に出会って昇殿の祈願を頼んだ。するとうれしいことに、ほどなく院昇殿の許しが出た。臨時祭の直前である。臨時祭は院殿上人として舞うことができたと考える。「うれしとも中中なれば」の和歌は、石清水臨時祭での舞を前にして昇殿の許しが出て、臨時祭当日には晴れて、(院の) 殿上人としての格式で舞に臨むことのできた喜びがこの歌であったと解釈する。

(ホ) 白河院の昇殿か鳥羽院の昇殿か

もう一つ別の問題もある。忠盛が仕えた院は 1 人だけではない。忠盛を引き立てた白河院が崩じて鳥羽院政が始まったのは大治 4 年（1129 年）である。院の昇殿はもう一つあったわけである。白河院政の末期には白河院と鳥羽との間に軋轢も生じ、白河院没後、鳥羽院政が開始されると、白河院の近臣たちには遠ざけられる者も多かったが、忠盛はうまく立ち回り、また、鳥羽院も忠盛の財力と軍事力をあてにするとところがあったので、忠盛は引き続き鳥羽院にも寵用されることに成功した。忠盛が『玉葉和歌集』に詠んだ、「うれしとも中中なればいし水」の詞書には年号などはないから、この昇殿が院昇殿であれば、鳥羽院の昇殿のほうではないかという疑問も浮上してくる。

石清水臨時祭の舞人は、前にも述べたように、大嘗祭以外の通常年の舞人なら五位または六位である。忠盛は大治 5 年（1130 年）正月 7 日に正四位下に叙せられているので、それ以降に舞人となることは、大嘗祭以外ではあり得ない。忠盛が従四位下に叙せられた年は不明であるが、もし、大治 4 年（1129 年）3 月の石清水臨時祭に五位舞人だったとすると、3 月から翌年正月の正四位下まで、1 年も経たないうちに五位から、従四位下、従四位上、正四位下と駆け上がったことになり、そのような理由も見当たらず大変不自然である。

では『玉葉和歌集』の歌は鳥羽院の昇殿の喜びで、忠盛が五位舞人であった大治4年（1129年）よりは以前で（但し鳥羽が院となった保安4年〔1123年〕正月よりは後）のことではないか、という疑問についても考える。忠盛は白河院の院政下でひたすら白河院とその寵姫たちに忠勤を励んできた。白河院と鳥羽院は父子の間で軋轢を生じ始めている。しかし、治天の君は忠盛を寵臣とする白河院である。そのような間、新院の鳥羽院昇殿も許されても、和歌にしたりして、大きな喜びだと思っていると周囲に広く知らせるのは政治的に得策ではあるまい。

本論筆者は、『玉葉和歌集』「うれしとも中中なればいはし水」の和歌は白河院の昇殿の喜びであり、それは院の昇殿ではあったが、忠盛にとっては初めて「殿上」人となることであり、そのうれしさの大きさをうたったものと特定できると考える。

（４） 内裏昇殿への悲願 忠盛の舞姫献上

天治元年（1124年）、越前守であった平忠盛は舞姫を献上した。殿上閣議に先立つこと8年だった。この時、当今は第75代崇徳で、院政を行う治天の君は白河院（～大治4年〔1129年〕）であった。この時、忠盛は内裏昇殿を切望した。当時、舞姫献上の受領が昇殿を許されるというルールは確立してはいないが、多大な費用を負担した舞姫献上者には何らかの見返りがあるのが普通であった。舞姫2名が見任受領に割り当てられるようになる前には、公卿と殿上受領たちが献上したが、忠盛の時代には受領献上者は殿上とは限らない。『今昔物語集』巻二十八本朝（新編④159頁）で五節を献上して殿上人たちから散々笑いものにされた尾張守は明らかに地下の受領であった。舞姫献上と五節昇殿関係では、佐藤泰弘（2009）は、橘為義が五節献上の年（寛弘8年〔1011年〕）の8月に、源保任¹⁸⁴が帳台試の日（万寿3年〔1026年〕）に昇殿を許されたケースに言及する。他にも管見の限りで以下の事例が見出せる。

- 忠盛献上の天治元年（1124年）の3年後の五節舞姫献上者で治部卿が息子源雅俊を昇殿させている（『中右記』大治2年〔1127年〕11月15日条）。
- 久寿2年（1155年）11月25日、藤原公長が父権中納言季成の舞姫献上によって昇殿を許されている（『兵範記』）。
- 治承4年（1180年）舞姫を献上した因幡守隆清は同年11月6日に昇殿を許されている（『山槐記』11月6日条）。
- 治承4年（1180年）11月7日、伯耆守基輔と中務権大輔経家も昇殿を許されているが、

¹⁸⁴ 万寿3年～4年美作守見任。

「兩人為新昇殿者之者、仍必可候五節之上」と舞姫献上と引き換えであった（『玉葉』治承4年11月15日条）。但し、翌年は諒闇となり、翌々年の大嘗会は献上者名が見出せず、さらに次の年の五節は停止になったのでこの2人の献上は確認できていない。

- 文治2年（1186年）に五節舞姫を献上した参議基家の息子の保家が昇殿を望んだが、院が許さなかった¹⁸⁵。

以上の昇殿は内裏昇殿である。このような例が残っているので、忠盛の時代にも五節献上を理由に昇殿を許される例はあり、それだけに、舞姫献上を機に内裏の昇殿を望んでも、理不尽な高望みとは忠盛は考えなかったのであろう。

越前守忠盛が五節を献上した天治元年（1124年）の他の献上者たちは、公卿は新中納言雅実と右大將為隆で、もう1人の受領分献上者は安芸守為忠だった。このうち、新中納言は中納言昇進に伴うものと解される。何より、もう1人の受領分献上者であった安芸守為忠は11月17日に昇殿を許されたのである（『中右記目録』）。忠盛の悔しさの大きさは想像に難くない。がっかりした忠盛の歌が残っている。

殿上申しけるにせざりければよめる 平忠盛朝臣
おもひきや雲井の月をよそにみて ころのやみにまどふべしとは
『金葉和歌集』¹⁸⁶第九 雑上 561¹⁸⁷

殿上で見たかった月を他の所に眺める心の闇を吐露する。「申しけるに」¹⁸⁸とあるから、正式に申し文を提出していたようだ。詞書が忠盛自身の手になるか確かではないが、『金葉和歌集』の成立は大治元年（1126年）か翌年ごろというのが定説であるので、忠盛が昇殿を願って許されなかったということは同時代の人々に知られていたということにはなろう。忠盛が昇殿を熱望していたことは、この他『忠盛集』¹⁸⁹103番からも知られる。

殿上さうさせ給ひけるころ、内裏の花を見て
ここのへのくもゐのさくらおなじくは わがものにもみよしもがな

¹⁸⁵ 「保家<基家卿子>。望申昇殿、奏院之处、今度五節次第太奇恠、仍不可被許坎云々」（『玉葉』文治2年11月22日条）。

¹⁸⁶ 『金葉和歌集』第5勅撰和歌集。白河院の命により源俊賴撰。白河院の院宣は天治元年（1124年）で初度本は同年末に選進されたが却下され、結局、三度撰進されて1126年に受理された。

¹⁸⁷ これは『金葉和歌集』の三奏本のもの。二奏本では歌番号は571。

¹⁸⁸ 二奏本では「殿上申しけるころ」。

¹⁸⁹ 『忠盛集』は他選であるとされる（犬井1980）。

忠盛は昇殿を願い出たころ、内裏の桜を「わがものにて見たいものだ」といったというのである。ではなぜ、忠盛は許されなかったのに、安芸守為忠は昇殿を許されたのか。『今鏡』「藤波の上」164～165 段はその事情を語る。164 段で（正盛は）「なほ下北面の人にてありけれど、その子よりぞ、院の殿上人にて、四位五位の舞人などしけれども、内の殿上はえせざりけるに、五節たてまつりける年、受領いまひとり、為盛、為業などいひしが父なりし、殿上許されたりしかば」（竹鼻績 1984：④182）とあって、為盛（のちに兼綱と改名）・為業の父で忠盛と同じ年に舞姫を献上した受領安芸守（『今鏡』では丹後守）が内裏殿上を許されたことをいい、165 段で、白河院が為忠に昇殿を許した詳細が語られている。為忠は白河院の乳母子の孫で、為忠の妻室が、白河院が近くに召し使われている女房で氣立てなどがよかったので、白河院はその女房の夫である為忠を昇殿させようと考え、宇佐の使いに立ててその賞¹⁹⁰にしようとした。ところが、新院となった鳥羽院が別人を使いを立ててしまったので、白河院は、為忠には、代わりに五節に舞姫を献上させて、その褒美として昇殿を許したということである。為忠は家に籠りがちだったというが「男こそこもりたれども、女の宮仕へをすれば、加階は許し給ふ」と、世間からは妻のおかげで出世したことを揶揄されたという。同時に舞姫を献上した為忠には昇殿が許されたのに、自分には許されなかった忠盛は大きな打撃を受けて悲しみを歌に詠み、これを歌仲間であつた藤原成通に送っている。

身のうさをおもひいりえの山のはに われもろともにたちかくれなむ 『忠盛集』118

成通は名門の出で、後には大納言まで昇る貴族である。本論本部第 3 章の長承元年（1132 年）の献上者の項で述べるように、蹴鞠の名手で今様を歌う当時最先端の文化人であつた。上記の忠盛の歌に成通は「雲井にぞつひにはすまむ山のはに おもひないりそ秋の夜の月」と慰めの歌を返した。

『今鏡』の前述引用にある「その子よりぞ、院の殿上人にて、四位五位の舞人など」という記述は、正盛の息子である忠盛が五節献上の天治元年（1124 年）以前には院の殿上人だつたといっている。天治元年にもう 1 人の受領為忠が許されたのは羨望の内裏昇殿である。忠盛が同じ土俵で望んだ昇殿なら、当然内裏昇殿であるはずである。『今鏡』の記述通り、忠盛はこの時までには、既に院の昇殿は許されていたと考えられよう。

この時、昇殿を許された藤原為忠の受領経歴は次のようなものであつた¹⁹¹。

¹⁹⁰ 宇佐の使いに立って昇殿を許された例としては寛治 4 年（1090 年）12 月、使いの美作守行家、正治元年（1199 年）使いの民部権大輔の藤原頼範などがある。

¹⁹¹ 『国司補任』による。

元永元年（1118 年）正月 18 日	安芸守補任
天治 2 年（1125 年）正月 15 日	三河守遷任
天承元年（1131 年）12 月 24 日	丹後守補任（元三河守）
長承 3 年（1133 年）12 月 19 日	丹後守見任
康治 2 年（1143 年）2 月 15 日	丹波守見任（実は入道丹後守）

為忠は天永元年（1110 年）には六位の蔵人となり、永久年間（1113～1118 年）の初めに従五位下に叙された。為忠の父は藤原知信で名門ではない。為忠の生年も不明であるが、為忠の安芸守の記録には「元永元年 正月十八日補任」だけで、元〇〇守という付記もなく、『国司補任』などからは元永元年（1118 年）以前の受領の記録が見出せない。忠盛は長承元年には 36 歳であり、忠盛の従五位下の叙爵も永久元年（1113 年）3 月で、天治元年の献上者の名も受領 2 名の中では忠盛のほうに先に書かれているので、おそらく忠盛の位階順が上だったとみていいのではないかと。為忠はこれ以降、三河守・丹後守を歴任して富を蓄え成功に励むことになるが、為忠は安芸守が最初の受領であれば、これ以前の造営成功は大きくはないのではなかろうか。忠盛にしてみれば、為忠は受領として院への貢献もまだ低く、位階の順も自分より下なのに昇殿を許され、自分も申し状を出したのに許されなかったという失望はさぞ大きかっただろうと想像される。

しかし内裏の昇殿となると、白河院としては、いかに寵臣の忠盛であっても、他の公卿・殿上人がなかなか容認するはずもない。為忠には既に宇佐の使いでの昇殿を約していたのだろうし、鳥羽の次に即位した崇徳は天治元年にはまだ 6 歳だったので、為忠 1 人は何とか昇殿させてやった。院昇殿は院の自由裁量だが、内裏の昇殿となると、いかに治天の君であっても、天皇の側近や天皇の側近の貴族たちを完全に無視して押し切ることはできなかったのではなかろうか。結局、白河院の在世中には忠盛は内裏の昇殿は許されず、忠盛が昇殿したのは次代鳥羽院の時代の長承元年（1132 年）になってからであった。その時、治天の君（鳥羽院）は 30 歳。天皇崇徳はまだ 14 歳だった。しかし、この時でさえ、元からの殿上人たちの反発は大きく、忠盛の昇殿が引き起こす波乱として「殿上闇討」が描かれる。これは次節で詳述する。

第2節 「殿上闇討」 忠盛の内裏昇殿と長承元年の五節

忠盛が初めて内裏の昇殿を許されて、それを快く思わない殿上人たちが、五節の行事の夜を利用して忠盛に恥辱を加えようと策略をめぐらしたが、忠盛は機転によってそれを切り抜け、かえって院（鳥羽院）のお褒めに預かったという。平家の台頭を示す話として、『平家物語』諸本の巻第一に置かれる章段である¹⁹²。

（1） 得長寿院の寄進と見返り

忠盛の内裏昇殿は前節で述べたように長承元年（1132年）のことであった。内裏の昇殿を許されたのはやはり、ひとえに白河千体観音堂（のちに得長寿院と命名された）の寄進によるものだった。『中右記』（史料大成本）3月9日条（白河千体観音堂供養習礼）に「堂<備前権守造営也>」とある。実際には忠盛は備前の「権守」でなく、「守」であったが（『国司補任』などによる）。同じく『中右記』の3月13日堂供養の当日の最後に行われた勸賞で「国司忠成被下遷任宣旨、又被聴内昇殿、封戸百烟取寄」とある。（国司「忠成」は観音堂を寄進した忠盛で間違いあるまい。）さらに『中右記』3月22日条に「備前守忠盛朝臣入来云、被聴内裏昇殿之後、今日初供御膳也、此人昇殿猶未曾有之事也」（下線付加）とあり、忠盛の内裏昇殿が未曾有のことと受け止められていたことが知られる。

『中右記』には、忠盛がこの3月13日の勸賞で内裏昇殿とともに「遷任宣旨」を得たとある。遷任とは、別の国の受領に遷れるということであるが、大治2年（1127年）12月20日に備前守になって、長承元年（1132年）正月19日には備前守を重任されている¹⁹³。忠盛は長承元年11月現在備前守であり、そして3年後の保延元年（1135年）にも備前守である。この年、

¹⁹² 五節の起源が述べられる位置は諸本によっていろいろあるが、「殿上闇討」はいずれの本でも最初の巻（祇園精舎のあと）に置かれる章段である。

語り本系

百二十句本（国会本） 五節の起源は巻第五の49「五節の沙汰」

城方本（八坂系） 102「殿上闇討」、511「五節之沙汰」（起源）

高野本 一の巻 「殿上闇討」、五の巻「五節之沙汰」（五節の起源を含む）

読み本系

延慶本（大東急文庫本）

第一本の1 「平家先祖の事」。殿上闇討ちと五節の起源

第一本の3 「忠盛昇殿の事付けたり闇討の事付けたり忠盛死去の事」

長門本 巻一 「殿上闇討」、巻十一「五節之沙汰」（五節の起源を含む）

源平盛衰記 巻第一 「五節夜闇打附五節始並周成王臣下事」

¹⁹³ 『中右記』長承元年正月19日条「重任因幡、備前、武蔵三ヶ国也」。

長承元年正月に重任されているなら、3月に改めて重任の宣旨は不自然である。「重任」と「遷任」に関しては曾我良成の論文があるが、曾我は、重任と遷任はこの時代、明確に使い分けられていたことを論証する（曾我 2006）¹⁹⁴。『中右記』3月13日条の「遷任」が重任との混同でなければ、これは備前守の重任（任期4年）の後、さらに、いずれかの国に遷任できるという、これから4年以上も先の約束手形を既にこの時点で手に入れたということになる。得長寿院の成功は大変大きいもので、昇殿・重任・遷任と破格な見返りを手に入れた。勿論、鳥羽院の方も、忠盛を引き立ててその軍事力を配下にして、自分の政権安定に役立てたことは間違いないと思われる。

『平家物語』の覚一本には堂の供養は「天承元年」（1131年）3月13日として、殿上闇討の五節も同年の天承元年の豊明としているが¹⁹⁵、前述の『中右記』3月9日条他の史料から、得長寿院の供養と忠盛昇殿は長承元年（1132年）であることが確認されている。『源平盛衰記』¹⁹⁶では供養のあった年は「崇徳院御宇長承元年＜壬子＞」と正しい。さらに『源平盛衰記』は、以下のように鳥羽院の感激と、忠盛の昇殿が如何に破格のものであったかを力説する。但し刑部卿は忠盛最後の官職であり、任刑部卿は仁平元年（1151年）のことで、内裏昇殿より大分のちのことである。

禪定法皇叡感ニ堪サセ給ハズ、被_レ下_二遷任_一之上、当座ニ刑部卿ニナサル、内ノ被_レ免_二昇殿_一。昇殿ハ是象外ノ選ナレバ、俗骨望事ナシ。就中先祖高見王ヨリ、其跡久絶タリシ、忠盛三十六ニシテ被_レ免ケリ。院ノ殿上スラ難_レ上、^{いはんや}況_二内ノ昇殿ニ於_二ヲヤ_一。当時ノ面目、子孫ノ繁昌ト覚タリ。法皇常^{おほせ}ノ課ニハ、「忠盛ナカラムシカバ、誰ガ朕ヲバ仏ニ成ベキ」トテ、或時ハ御剣御衣、或時ハ紗金錦絹ヲ、徳得長寿院ヘ可_レ奉_二廻向_一トテ、^{くだし}下賜ヒケリ。

（『源平盛衰記』巻第一「五節夜闇打」三弥井本 14 頁）

（2） 闇討ちと背景

忠盛は長承元年の時点で正四位下であった。つまり、宮中席次では六位の蔵人や、五位や従四位の殿上人たちより上に着席する。忠盛へのねたみは、忠盛に位階を超えられた四位・五位の殿上人に特に強かっただろうと推測する。本文でも「雲の上人これを猜^{そね}み」（旧大系④84 頁）

¹⁹⁴ なお、曾我（2006）は『中右記』の「国司忠成被_下遷任宣旨、又被聴内昇殿」を正月19日条の記載とするが、3月13日条の誤記であろう。大日本古記録『中右記』には長承元年正月の記述は何もない。

¹⁹⁵ 旧大系④84 頁。「同じき年の12月23日」としているが、五節は勿論、11月の行事である。

¹⁹⁶ 以下『源平盛衰記』の引用は特段の断り書きがない限り、三弥井書店『源平盛衰記』による。

といっている。忠盛をねたんではかりごとをめぐらしたのは「雲の上人」たちで、すなわち昇殿を許されている四位・五位の官人たちだった。「雲上人」、「雲客」は通常は公卿は含まない語である。（公卿を含む場合には「卿相雲客」か「月卿雲客」などという言葉がある。忠盛は昇殿しても公卿たちよりは下位であるから公卿たちにはまだ余裕はあっただろう。）雲客たちはいったいどんな恥辱を考えたのだろうか。長承元年の貴族の日記類には忠盛闇討ちの企てなど当然登場しない。物語上でも成就しなかったことだし、最初から創作だろうから、想像するしかない。「殿下乗合」の段では平家の報復で関白の家来の髻が切られ、「主人の髻が切られたと思え」と云っているから、あるいはここでも髻を切るような恥辱を考えたか。しかし、小刀などの刃物を殿上まで持ちこんで使うのは難しいだろう。闇に紛れて打ち据えたり、転ばせたり、地面に突き落としたりするつもりだったのだろう。

殿上での帯剣は公卿以外は限られた者にしか許されなかったが、節会などに際しては束帯服飾の一部として飾剣かざたちの着用があった。しかし、飾剣は細太刀であり、実際に何かが切れるような物ではない。忠盛は勿論のこと、闇討ちを企てている殿上人たちも実戦用の剣は持ち込めない。第一、血でも流れたら、内裏は穢となって五節そのものが中止になりかねない。なお、闇討ちは「暗打」の字を充てている本もある。五節後に殿上人が忠盛を訴えた言葉にある「夫雄剣それゆうけんを帯たいして公宴こうえんに列れつし」（旧大系④87 頁）の「雄剣」の意味することについては、旧大系は特に注さないが¹⁹⁷、小学館新編頭注は「剣の美称」とする¹⁹⁸。しかし、これは単なる飾り剣でなくて、実際に切れそうな本物の刀を節会に持ち込んだという意味であろう¹⁹⁹。帯剣を許されていないのに剣を持ち込んだのであれば、本物の太刀でなかったことが証明できても当然処罰の対象になりうる。飾太刀でなく、実際の刀であったと殿上人たちは訴え、忠盛が反証するのである。節会の時の帯剣者の範囲はかなり広範囲に及んでいる。（貴族の日記はほぼ自分の剣の仕様に終始しているので『平家物語』の時代の行事ごとの帯剣細則は管見の限りでは不明である。）剣は束帯装束の一部であり、身分によって造りにいろいろな差があった。蒔絵剣より螺鈿剣のほうが格が高く、公卿が螺鈿剣の時、殿上人は蒔絵剣のようである。豊明節会は天皇が群臣に賜う公式の宴であるので、臣下は全員束帯である。

『延慶本平家物語全注釈』では「剣を佩帯して儀式に参加することが、勅授帯剣の公卿と武

¹⁹⁷ 「雄剣」に関して、「[寂光院本の]（こうけん）「こ」ハ「ユ」ノ誤カ」を挙げるのみである。

¹⁹⁸ 岩波新大系の注も同様に「りっぱな剣」とする。飾太刀の仕様は身分によって規定されているから、公卿ではない忠盛が佩く剣は美しい太刀ではないだろう。

¹⁹⁹ 「雄剣」の用例では例えば、次のようなものがある。『御成敗式目追加』にある仁治3年（1242年）の乱闘事件についての状である。「一勝定寿院僧坊連々有闘乱度々及殺害事。右武士之郎従。猶以不可及如此狼藉。況於僧徒類乎。是而召仕武勇不調之輩。專不加禁遏故也。加之三昧僧等偏事酒宴。疎其節之由有風聞。非畜破戒行。剩背尋常之法。自今以後僧徒。法師。童子。力者法師。横雄剣差腰刀。一向可停止之。若背制符及刃傷殺害者。宜處過怠。主人固存此旨。不可違犯之由可令触供僧等也。仍執達如件。仁治三年三月三日武蔵守」（下線付加）。この場合の「雄剣」は実際に殺傷能力のある剣である。

官にのみ許され（中略）この特権のない殿上の受領に過ぎない忠盛が、短刀を懐中にし」（第一本、132 頁）と注するが、忠盛が武官でなかった根拠は示されていない。忠盛は前章第 1 節（3）の（イ）で引用した『中右記』の「忠盛<馬権頭、伯耆守、新舞人>」にあったように、元永 2 年（1119 年）11 月には伯耆守で右馬権頭であった。右馬権頭を辞した年月日は不明だが、高橋昌明は「忠盛はこの頃[備前守になったころ] 備前守の他に左馬権頭を兼任していたらしい」と推測する（高橋昌明 2004：136）。長承 2 年にまだ左馬権頭であった可能性は十分ある。左右の馬寮は兵部省の所管であるから武官である。忠盛は馬権頭以前にも左衛門尉、検非違使、海賊追討使など、武をもって奉仕する官を歴任してきた。治天の君が忠盛に期待したものは武と財による奉仕であるから、武将忠盛はたとえ左馬権頭ではなかったにしても何らかの武官の職にあったとして不思議はない。受領といえども、このころは在京であるから、文・武の京官の兼任はできる。武官束帯であれば、正四位を帯する忠盛の帯剣自体は問題になるとは考えられない²⁰⁰。岩波新大系は「束帯のしたにしどけなげにさし」の「しどけなげに」に「武官の上衣は闕腋と言ひ、腋を縫いあわせていないため腰にさした鞘をちらつかせることができた」と、忠盛は武官束帯であったと考えている（但し、官職などについての説明はない）。忠盛は、兵杖を賜っていないのに家来が伺候したことについては説明しているが、刀については、「実否」について調べて下さいと返答していることから、帯した剣が雄剣つまり真剣であったと訴えられたと考える。寛一本系『平家物語』では、忠盛は「参内のはじめより大きな鞘巻を用意して、束帯のしたにしどけなげにさし、火のほのぐらき方に向か（つ）て、やはら此刀を抜き出し、鬘にひきあてられけるが氷な（し）どの様にぞみえける。諸人目をすましけり」（旧大系④85 頁）とあって、帯剣して参列し、刀を抜いて見せたのは、豊明節会に参内した始めのころである。のちに殿上人が忠盛を非難して言う文言も、「夫雄剣を帯して公宴に列し（中略）或は腰の刀を横へさいて、節会の座につらなる」（旧大系④87 頁。下線付加）と非難しているので、これが豊明節会の場であったことは明らかである。

一方『源平盛衰記』「五節夜闇打附五節始並周成王臣下事」では、これに照応する刀を抜いてみせつける場面は節会ではなく、一連の行事の最後の御前の召の退出時となっている（三弥井本①19 頁）。「伊勢平氏ハ眇也ケリ」のハヤシ²⁰¹の場面の後に続く文章である。

著座ノ始ヨリ、殊ニ大ナル黒鞘巻ヲ隠タル気モナク、指ホコラカシタリケルガ、乱舞ノ時モ猶サシタリケリ。

未御遊モ終ラザルニ、退出ノ次ニ、火ノホノ暗キ影ニテ、オホ刀ヲ拔出シ、鬘ニスハリ

²⁰⁰ 節会でなくとも、『平家物語』で、藏人衛門佐定長が神器の返還をもとめて、囚われの重衡のもとへ向かう時、院の御所から使いとして五位の赤色袍の束帯に帯剣している（「内裏女房」旧大系⑤242 頁）。

²⁰¹ 片仮名書きは西川学（2002）に従う。

スハリト引当ケレバ、火ノ光ニ輝合テキラメキケレバ、殿上ノ人々皆見レ之。忠盛如レ此シテ出様ニ紫宸殿²⁰²ノ後ニテ、主殿司ヲ招寄、腰刀ヲ鞘ナガラ拔、「後ニ必^{たずね}尋アルベシ。慥ニ預ケン」トテ出ニケリ。
(三弥井本①19 頁)

殿上人の忠盛非難の文言も「加様ノ雲上ノ交ニ、殿上人タル者、腰刀²⁰³ヲ差頭条、傍若無人ノ振舞也、雄劍ヲ帶シテ公庭ニ座列シ」(三弥井本①20 頁。下線付加)と、「公宴」を「公庭」とぼかして、呼応している。しかし、刀を抜いて見せて殿上人を脅すのが、節会の後の御前の召からの退出時では何の効果が期待できるというのか。節会も御前の召も終わったあとには、闇討ちの場などないではないか。『源平盛衰記』では、節会での闇討ち中止の理由は、節会の前に、布衣姿で控えていた郎等の家貞が、忠盛に何かあったら堂上までも切り上りそうな様子だった上に、忠盛が腰にさしていた黒鞘巻の柄(つまり劍の外見のみ)をみせびらかしたことをあげる。やはり、忠盛が抜いた劍をみせびらかせることなく闇討ちは逃れたことになる。「事ノ様、実ニ主コトニアハバ、堂上マデモ可_レ切上_レ頼魂ナリケル上ニ、忠盛朝臣黒鞘巻ヲ装束ノ上ニ横タヘ、指シテ支度計ナキ体ニテ、腰ノ程ヲ差クツログタル様ニシテ、柄ヲ人ニゾ見セケル。人々事ガラ尤シトヤ被_レ思合_レケン、其夜ノ闇打ハナカリケリ」(三弥井本①15-16 頁)とある。しかし、『源平盛衰記』はこのあと、縫殿陣黒戸の御所の辺りで、中宮亮秀成を忠盛が怪しい人物と見咎めて、劍をすわりと抜いて鬢に引きあてて「狼藉者に当てよう」などといったエピソードを加える。この時、秀成は恐怖に駆られてその場に倒伏するのだが、ここでも、抜かれた劍を見たのは秀成一人だけであり、闇討ちの中止の理由とはなっていない(三弥井本①18 頁)。なお、延慶本では郎等家貞の気色に恐れをなして、闇討ちを中止したことに続けて、「其上忠盛朝臣大ノ刀ヲヌキテ火ノホノクラカリケル所ニテ鬢髪ニ引キアテテ払ハレケリ余所目ニハ氷ナドノ様ニソ見ケル」(『延慶本平家物語全注釈』①110 頁)と秀成以外の殿上人も抜刀身をみて闇討ち中止を一層納得したことにしている。

論理的に時間の流れを考えれば、節会で始めに本物らしい刀を見せつけられ、かつ郎等も控えていたからこそ、殿上人たちは怖がって闇討ちを中止したはずで、その鬱憤晴らしが「伊勢平氏ハ眇也ケリ」(三弥井本①20 頁)のハヤシとなったのではなかったか。すべての行事の最後の最後に劍を抜いて見せても、効果はない。

忠盛が「眇め」と嘲笑された御前の召の場についてであるが、御前の召とは、元は寅の日(御前試の日)の、殿上に始まり中宮などの御所へでかけて淵酔に与った後、再び天子の御前に召

²⁰² 覚一本系でも、忠盛が刀を預けるのは御前の召に参列したのち紫宸殿の主殿司にである。豊明節会は紫宸殿であっても御前の召は清涼殿であるから、清涼殿から紫宸殿へ回って退出するという不自然な経路である。

²⁰³ 腰刀とは、通常、護身用短劍をさすが、『源平盛衰記』では「おほ刀」である。

されて芸能が行われたものであった²⁰⁴。淵酔がいわば貴族仲間の無礼講だったのに対して、天皇も随時、殿上人を召して彼らの芸能を楽しむようになり、豊明節会が終わった後にも殿上人たちを御前に召したのである。

この時も辰の日の豊明節会が終了したのち、御前の召がかかったことになる。忠盛は、節会の後、召によって、殿上の間に赴く。そこでは、節会での闇討ちは断念した殿上人たちが、今度は御前の召の場で忠盛へ恥辱を与えるべく手ぐすね引いて待ち構えていたのである。

(3) 「白薄様」

さて、御前の召で忠盛が舞おうとすると、歌が「白薄様」でなくて、突如、「伊勢平氏ハ眇也ケリ」と変わった事になっている。

「白薄様」については、岩波旧大系は、「白い薄手の鳥の子紙」という紙について以外の説明はない（旧大系⑤86頁）。一方、『源平盛衰記』では、

五人ノ仙女舞事各異節也、サテコソ五節ト名付タレ。彼舞ノ手ヲ模^{うつし}ツハ、雲ノ上人舞トカヤ。其時拍子ニハ、「白薄様、厚染紫ノ紙、巻上ノ糸、靱絵書タル筆ノ軸ヤ」ト、ハヤス也。仙女ノ衣ノ薄^{うすく}透^{うつくし}通リテ、靱^{うつくし}キ有様ガ、薄様ト厚染紫ノ紙ニ相似タリ。舞ノ袖ヲ翻、簪ヨリ上方ニ巻上タル兒、糸ヲ以テ巻タルガ如ク、靱絵ヲ書タル筆ノ軸ヲ、差上タル様ナレバ、昔ヨリ五節宴酔ノ肩脱ニハ、必カクハヤスヲ、

（三弥井本①20頁）

と、天女の薄い衣や髪の巻上げに関連付けられる。

長承元年（1132年）は新嘗祭で、4人の舞姫献上者たちは、能登守季兼、加賀守顕広、宰相中将（藤原宗能）、左大将実光であった。この年の五節の記事は『中右記』に見えるが、「殿上闇討」のたくらみを明示または暗示するような記述は勿論、ない。『源平盛衰記』は上記の「五節宴酔ノ肩脱ニハ、必カクハヤスヲ」に続けて、

御前ノ召ニ依テ、忠盛ノ舞ケル時ニ、サハナクテ、俄ニ拍子ヲ替テ、伊勢平氏ハ眇也ケリトハヤシタリケリ。目ノスガミタリケレバ、取^{とり}成^{なり}ハヤサレケル。最^{いと}興アリテゾ聞エシ。忠盛身ノカタワヲ謂レテ、安カラズ思ヘ共、無^な為^{なり}方^{なり}著座ノ始ヨリ、殊ニ大ナル黒鞘巻ヲ隠タル気モナク指ホコラカシタリケルガ、乱舞ノ時モ猶サシタリケリ。未御遊モ終ラザルニ、

²⁰⁴ 藤原忠実の『殿暦』にも天仁元年（1108年）11月19日丑の日、舞姫参入・帳台試の後、「召殿上人ヲ召集^天散楽アリ」という記述がある。

退出ノ次ニ火ノホノ暗キ影ニテ、オホ刀ヲ拔出シ、鬢ニスハリスハリト引当ケレバ、火ノ光ニ輝合テキラメキケレバ、殿上ノ人々皆見レ之（後略）。

と、忠盛は舞で、伊勢のす甕は粗製だったので、平氏も、なりはあってもその器ではないと侮られ、忠盛自身は眇^{すが}めであると身のカタワを嘲笑されたのである。この、身の欠陥である「眇め」については兵藤裕己の面白い指摘がある。すなわち「眇め」は斜め目・片目で、忠盛が「眇め」だったかどうかは不明でも、一つ目の者の持つ憑依しての象徴性と内在する力に意義を見出している。「目に欠損があることは、祭儀の主役となるヨリシロ（憑巫）に負わされる聖なるしるしである。それは善悪や浄穢の2項目対立的な価値観を転倒させ、原初の創造的混沌を世界へ導き入れる力の可視的な徴表だった」と言い、平家一門の本貫地、北伊勢の多度神社の祭神で一つ目竜として示現する天目一箇神^{あめのまひとつのかみ}がたたりやすい火の神だったことも指摘する（兵藤裕己 2011 : 236）。面白くはあるが、ここで忠盛の神性が必要だったか、深読みに過ぎる気がしないでもない。

五節の悪ふざけは、覚一本系（旧大系④86-87 頁、新編①23-24 頁）にある太宰の黒帥や、人のきらをみがく「播磨よね」と囃された家成など以外にも、『源平盛衰記』では、兼家左中将の話、すなわち、3 人の北の方が一所に出会ったところ三つ巴の殴りあいつかみ合いになったのをからかって、「三妻錐^{もみあふ}コソ揉合ナレ。穴広々ヒロキ穴カナ」と囃したてられた（三弥井本①23 頁）例も挙げる²⁰⁵。「穴黒々黒キ頭哉、イカナル人ノ漆塗ルラン」といわれた季仲卿側はすかさず、基高卿の色の白いの擲揄して「穴白々白キ頭哉、如何ナル人ノ薄押シケン」と返した話（三弥井本①23 頁）を載せる。また五節の夜に、恒例の鬢だたらを使って、善政に励んでいた尾張守を散々に笑いものにした『今昔物語集』巻二十八の説話は特に面白い²⁰⁶。

『平家物語』殿上闇討の段では『白薄様、ござむじのかみ、巻上げ筆、軀絵かいたる筆の軸』なむど、さまざま面白事をのみこそうたひまはるるに」（旧大系④86 頁）と、貴族たちは、「白薄様」を歌って舞っている。しかし、「白薄様」の歌舞が五節に使われるのは 12 世紀終わりごろ以降のことのようで、忠盛の時代には殿上での五節の間の芸能は《万歳楽》の乱舞だけで終わっていた模様である（沖本幸子 2006 : 224）。「白薄様」は、白い薄物から、黒い紙、筆、軸と連想されていく文具の「物尽し」で²⁰⁷、今様に多くみられる物尽しのパターンである。「白薄

²⁰⁵ 藤原兼家は確かに康保 4 年（967 年）、村上天皇の時代に左中将だったが、当時 3 人の妻（＝多分時姫と右大将道綱母と他の妻おそらく町の小路の女をさすか）が一所に会することなどありえない。後妻打ちの習慣がいつ始まったかは知らないが、兼家の時代、上流貴族の階級には考えられない。『源平盛衰記』もかなり時代が下ってからの挿入ではないか。

²⁰⁶ 『今昔物語集』巻二十八「尾張守□五節所語第四」（新編④159 頁）。

²⁰⁷ これらの「物」ひとつひとつがどんな物であるかについては諸説ある。中村義雄（1973）「五節の舞姫雑考」にも概略がある。

様」の五節への登場時期に関して、沖本幸子は、『兵範記』で仁安2年(1167年)の五節の卯の日の建春門院(滋子)の淵酔で《万歳楽》のあと「白薄様」が舞われている記事を引用し、これ以前の乱舞の記録に《万歳楽》以外(「白薄様」を含む)は登場しないことを指摘している(沖本 2006 : 226)。本論筆者も、長承2年近くの年代で保延2年(1136年)の『台記』11月15日(卯)条の殿上の淵酔の記述には、《万歳楽》の乱舞はあったが「白薄様」はないことを確認した²⁰⁸。この年は記主頼長が五節を献上している。豊明節会後の淵酔・御前召の記述はない。中宮や女院での淵酔ではさらに自由な芸能が楽しまれたかもしれないが、内裏において忠盛の昇殿の長承元年(1132年)のころに、「白薄様」が歌舞されたというのは疑わしい。古記録フルテキストデータベース検索では「白薄様」が歌舞された記録としては、『民経記』嘉禄2年(1226年)11月15日寅の日の中宮淵酔で《万歳楽》乱舞の後に「白薄様」が続いたという記録がある。『平家物語』が生成されていく過程で当時行われていた五節芸能が挿入されたのだろう。

忠盛の内裏昇殿は確かに、元からの殿上人たちに嫌われていた。前節でも引用した『中右記』長承元年3月22日条には、忠盛が昇殿の許しを得てからの初めて参内を記した続きに「此人昇殿猶未曾有之事也」と付加していることから、貴族の多くが忠盛の昇殿などは前代未聞だと反応したことが知られる。忠盛以前にあった(しかし事件などにはならなかった)として引かれている例の一つ、藤原家成が花山院忠雅を婿にして「播磨よねはとくさかむくの葉か、ひとのきらをみがくは」と囃されたという事件についてだが、忠雅が、父忠宗の死後に親戚であった家成に引き取られて養育され、長じて家成の娘を妻にしたのは事実である。しかし、忠雅の父忠宗の死は長承2年(1133年)9月の時のことである。つまり、忠雅が引き取られたのは殿上闇討の舞台として設定された年より後のことであるから、長承元年にこのように囃されることはありえなかったのである。

殿上闇討事件については、五味文彦は『平清盛』で「闇討ち事件であるが、殿上人の仲間入りの儀式に際してよく起こる事であった。新たに殿上人や蔵人になった貴族は、その年の11月の豊明節会の際、皆が歌い囃すなかを舞うのが慣例となっていた。かつて蔵人の頭になったばかりの藤原季仲は、肌が色黒であるのを『あなくろぐろ、黒き頭かな』などと囃されたという。このように仲間入りの洗礼として新任者が散々にいたぶられたり、暗闇で打たれることが頻発していたことから、忠盛も、この機会に恥辱を受けることが予測できた」(五味 1998 : 18)と述べる。また、ハヤシ(擲擧)については、『源平盛衰記』を中心にした西川学(2002)があるが、本論筆者は賛同しない。西川は、忠盛は身体的欠陥である眇めを囃されて、「『源平盛衰記』は」すごすごと『其答』もせずに退出した忠盛に対して残念がっている様子である」といい、

²⁰⁸ 「三献経宗、<四位少将>、瓶子蔵人取之、人々^{かたぬぐ}袒、自二献朗詠、今様、三献了、万歳楽、殿上人皆悉舞、上達部不舞、起座如元結紐、徘徊寝殿」(読仮名付加)。これから、みな童女御覧に向かうのである。

ハヤシは新任の蔵人頭や新参の殿上人を歓迎する意味であり、こういったハヤシに対しては見事なハヤシ返しが期待されていたという。しかし、闇討ちなどという大きな恥辱を与えようと待ち構えていた（しかし実行できないことになった）殿上人たちが忠盛を「歓迎して」ハヤシたりするだろうか。当意即妙な切り返しなど、できなくてこそ多少の溜飲も下げられるというものではなかろうか。ハヤシが滑稽な笑いを誘うものに変化して行き、場所柄もかまわずその即妙性を楽しむようになっていったのは、今様好きで芸能愛好には型破りな後白河のあたりからだろう。西川は白薄様のハヤシを保延年間（1130 年代）から確認できるとするが、その根拠を 13 世紀に書かれた説話集である『古今著聞集』や『続古事談』に求めた上で、『兵範記』の初見より 30 年ばかり遡らせる。それで、『源平盛衰記』の忠盛殿上闇討説話が実際の五節殿上淵酔の様子や実態を踏まえたものになっていると言える（西川 2002: 63）だろうか。「淵酔」（宴酔の語を含む）の語を検索すると²⁰⁹、仁安 3 年（1168 年）までに 56 件²¹⁰、『権記』『春記』などを含む撰関古記録データベースで、重複する『小右記』のすべてを除いて 5 件がヒットする。この他『兵範記』（長承元年〔1132 年〕～承安元年〔1171 年〕記載）には 17 件、『山槐記』は（記載は仁平元年〔1151 年〕～建久 5 年〔1194 年〕ではあるが）19 件あった。（但し、これらのヒット数は単語の数の合計で、同一日の淵酔が複数で数えられている例を含んでいる。）十分ではないにしても、何の分析や推測もできないほど過少ではない。記録類の検索をする限り、「白薄様」の言葉の初見は沖本幸子の指摘するように、仁安 2 年（1167 年）である。「白薄様」の歌舞の始まりは、これら同時代の一次史料で論ずべきではないだろうか²¹¹。

『源平盛衰記』は文字通り源平を描いているのかもしれないが、ひたすら平家一門の滅びの美学を追求する『平家物語』において、「殿上闇討」が巻第一に置かれている意味は、軽くはない。「御前の召」であるから天皇の召集であるが、この時の天皇は崇徳で 14 歳。出御の時間はごくわずかだろう。また、この当時、天子の御前²¹²でそれほど乱れた芸能は行われていない。（中宮や女院の淵酔はもう少しだけたものなるだろうが。）『承安五節絵』（早稲田大学蔵）²¹³を見ても、「とらの日は殿上の（淵）酔なり」（「淵」の字は後補）と詞書がある清涼殿²¹⁴の殿上

²⁰⁹ 大日本古記録フルテキストデータベース。

²¹⁰ 淵酔という言葉自体は既に『小右記』で寛和元年 985 年の正月の大臣大饗で用例がある。

²¹¹ 西川の論文には他にも細かい点で私見とは相容れないところがある。『今昔物語集』で鬢ダタラで囃された尾張守のケースも「受領が初めて昇殿し、五節に列席した際にはやされたことも」（忠盛と同様に）「新参の殿上人に対する歓迎の意味のハヤシであったと考えられる」（西川 2002: 67）と述べているが、尾張守は地下であるので殿上の淵酔には参加していない。参加していないからこそ、肩脱ぎも鬢だたらも知らず、底意地の悪いからいが見抜けなかったのである。また殿上の淵酔は確かにくつろいだ雰囲気はあるが、天皇が直衣・指貫姿で参加するわけではない。天皇が（袴の裾を括る）指貫姿で「密々に」御覧するのは帳台試だけである。

²¹² ひとたび譲位した上皇は内裏に来ることはない。

²¹³ 『承安五節絵』（『承安五節之図』長谷川重喬写、江戸中期）。

²¹⁴ 神仙門の文字が見える。

の淵酔では、小板敷に座る蔵人4人（新蔵人成実、仲基、惟頼、範光）を除いて²¹⁵、殿上人たちは直衣姿になっている（コマ番号 15-16）。ところが、御前の召しでは、あちこちの淵酔から帰ってきて、天子御前に出るので装束を直している²¹⁶（コマ番号 21-22）。ここでは石帯をしているが、布袴²¹⁷かもしれない。全員の裾^{きもと}は見えないが、手前の1人は引いているので、他の人は畳み込むなどしているのだろう。少なくとも直衣ではない。忠盛は舞の名手として知られていたから²¹⁸、舞が所望されたのであろう。お定まりの《万歳楽》か、あるいは名人だからと別の曲の所望がされたのかもしれないが、見事に舞って感心されたことであろう。しかし、それでは、物語にならない。『中右記』のいう「此人昇殿猶未曾有之事也」を物語の中で具現しなければならない。忠盛の昇殿とは、殿上人たちの激しい妬み嫉みに遭いつつ、平家の棟梁が殿上へ、そして未来の繁栄へと踏み出す第一歩である。その一歩の大きさは、抵抗が大きければ大きいほどはっきり認識される。そのために、『平家物語』が生成されていくころに流行った五節淵酔の芸能が利用され、忠盛のころはなかったと思われる白薄様や、年代上は無理がある家成の忠雅公の婿取りなどを総動員して「殿上闇討」が創作された。『平家物語』の生成が、13世紀前半としても、長承元年（1132年）の五節の参列者は既に生存していないだろうから、聴衆・読者にしても、同時代の流行の物を以って語られたほうが、理解しやすい。借り入れの結果、実態とは離れたが、物語上は大成功である。行く手に待ち受ける対抗勢力、忠盛の沈着な準備、武家の主従の絆、そして殿上の生活のいわば象徴としての五節、これらの組み合わせの相乗効果によって、その後に来るべき波乱と繁栄の幕が切って落とされたのである。

²¹⁵ 成実は承安元年12月14日に六位蔵人見任している（前年に名前はない）。仲基、惟頼、範光の3名も承安元年に六位蔵人である。蔵人が従事する日中行事・恒例雑事・臨時急事等について橘広相（837～890）が詳説した『侍中群要』五の五節行事の項に「寅日束帯」とある。しかし、蔵人は五位であるから、五節絵の4人の束帯の袍も「黒」であるのは不審（しかし「黒」と書き込みもある）。

²¹⁶ この図で疑問に思うのは、誰も帯剣していないことである。しかし、忠盛が剣を持ち込んだからには、帯剣が許された場であるはずであり、後日の非難に備える忠盛が、正当な非難に値する罪をここで犯すとは思えないのである。殿上人の非難は飾剣であるべき時に物騒な真剣を横たえさしていたことが格式の例に反するといっていると考ええる。

²¹⁷ 時代が下ると束帯は敬遠され、布袴や衣冠で代用されるようになってゆくから、この五節絵でも模写の過程で簡略化が進んだのであろうか。同じ場面を描いた国立国会図書館蔵の模写（『承安五節繪』藤原壽栄、文政13年〔1830年〕写）では石帯も用いず、さらに略装になっている。（国立国会図書館デジタルコレクションでは、寅の日の殿上の淵酔はコマ番号 36-37、御前の召はコマ番号 48-49）。一方、京都大学附属図書館蔵『五節淵酔之屏風絵』（如慶法眼写）では、石帯着用が見える。殿上の淵酔はコマ番号 16、御前召はコマ番号 20-21、豊明節会はコマ番号 24-25。

²¹⁸ 第1節（3）（イ）「舞人忠盛」を参照。

おわりに

11 世紀末、平正盛は白河院の近臣たちに取り入って院へ接近し、院が鍾愛した皇女六条院媞子追悼のために自分の伊賀の所領を寄進して白河院の歡心を買った。正盛は院の北面の武士を皮切りに院に軍事力で奉仕しつつ、大国の受領の地位も手に入れ、平家繁栄の礎を築いた。正盛の息子の忠盛も諸国の受領を歴任して白河院・鳥羽院と 2 代の治天の君に、軍事力と経済力を以て奉仕して、その地位をさらに上昇させていった。その忠盛の悲願が昇殿であった。忠盛は越前守であった天治元年（1124 年）に五節を献上して、その際に内裏昇殿を熱望した。しかし、同じ年に五節を献上したもう 1 人の受領である安芸守の藤原為忠は内裏昇殿を許されたのに、忠盛に許しはなかった。忠盛が大変がっかりして悔しさを詠んだ歌が『金葉和歌集』に残る（雑上 561）。一方、忠盛が昇殿の喜びを詠んだ歌が『玉葉集』2768 番にある。ここでは石清水の臨時祭（3 月）で忠盛が舞人を勤めた際に「昇殿」が許されたので、石清水の神に感謝している。しかし、詞書には年の記載はなく、この歌がいつのものだったか、つまりいつ昇殿が許されたのか、また、その昇殿が院昇殿であるか内裏昇殿であるかもはっきりしてはいなかった。忠盛は長承元年（1132 年）3 月に念願の内裏の昇殿を許されるのだが、本論では、『玉葉集』2768 番で悦んだ昇殿は、この長承 2 年 3 月の内裏昇殿ではなく、それ以前の院の昇殿だったと推定した。なぜなら、『玉葉集』の歌の舞台となった石清水の舞人は通常の年には五位と六位の帯位者であり、長承元年に忠盛は既に四位であったことが確実であるからである。では、院の昇殿とは、白河院の昇殿であるのか、鳥羽院であるのか。本論は、これを白河院昇殿と推測した。

しかし、忠盛の内裏昇殿は、『中右記』に「此人昇殿猶未曾有之事也」（長承元年 3 月 22 日条）とあるように、他の貴族たちからは未曾有の事と思われたのであり、これが『平家物語』の殿上闇討の逸話を生み出してゆくのである。忠盛が昇殿を許されたのは 3 月であるのに、この逸話の舞台に、わざわざ半年以上も後の 11 月の五節の夜がその場に設定されたのは、五節が宮中の華やかな行事の代名詞であったからだろう。『今昔物語集』卷二十八（新編④159 頁）の舞姫献上者の尾張守は国を富ませる力量はあったのに、結局は地下の悲しさ、宮中の慣習などと疎遠であったがために、殿上人に完膚無きまでにいたぶられて終わった。そのような地下の受領たちの状況から抜け出して、ついに念願の宮中に昇る忠盛が最初にこじ開ける門は、やはり、殿上人たちがこぞって楽しみ、また殿上人たちの横の結束がかたい²¹⁹場である五節の世界がふさわしかったのである。

²¹⁹ 献上者に必要な衣装を送りあったり、饗餐の一部を援助したり、牛車を貸したり、「訪」と呼ばれる助け合いが行われた。

第2章 仁安3年(1168年)の五節をめぐる解官劇

はじめに

宮中の皆々が楽しみにし、また献上者が精力を注ぐ五節であるが、この五節を理由に解官(解職)された貴族たちもある。特に仁安3年(1168年)には内大臣源雅通と大納言藤原師長が五節を機に譴責されて左右大将の職を(師長は大納言職も)解かれ、平家にあっても、清盛の甥の保盛とその父の頼盛(清盛の異母弟)がすべての官職を剥奪された事件があった。

このころには既に神事はどこへやら、飲めや歌えやの宴会と化していた五節の行事で解官の憂き目に会うとは一体何があったのだろうか、この事件を追ってみたい。

仁安3年(1168年)の2月19日に六条天皇が譲位して高倉天皇が即位した。六条天皇は二条天皇の皇子だったが、天皇親政を目指す二条と、院政を敷く後白河の父子の確執の中、永万元年(1165年)、病を得た天皇二条はわずか2歳の息子の六条に強引に譲位してすぐ、翌月に崩御していた。その翌年仁安元年(1166年)10月10日、後白河は自身の退位後にできた皇子で、平滋子所生の6歳の憲仁の立太子に成功、仁安3年(1168年)2月には六条を5歳で退位させ、憲仁(高倉)を8歳で即位させたのだった。高倉の母滋子は清盛の妻時子の妹である。清盛は仁安2年2月11日太政大臣に就任²²⁰したが、3か月後の5月17日に太政大臣を辞し、後継者重盛に権限を委譲して表向きは政界から引退し、仁安3年2月22日に入道した。(但し、治承4年[1180年]6月10日になって准三宮宣旨を受ける。)つまり、仁安3年には平家は全盛期にあった。また、この年は、新帝の高倉の大嘗会であり、一段と華やかな五節になるはずだった。しかし、この年の五節に、五節での振る舞いを理由に、源雅通、藤原師長と平頼盛・保盛父子が解官されたのである。源雅通、藤原師長の解官については、帳台試に不扈従、平頼盛・保盛父子の解官については、田中大喜は、清盛が後白河と計って頼盛を服従させるためと解釈する(田中 2003a)が、調べてゆくと、それらと異なった姿が見えてきた。

²²⁰ 太政大臣は多分に名誉職であったが。

第1節 内大臣源雅通と大納言藤原師長の解官事件

(1) 事件の概要

『兵範記』記主の平信範²²¹は、仁安3年11月21日の寅の日、宮中では五節の御前試の行われる日に、後白河院の滞在先である蓮華王院に呼び出され、右近大将と大納言兼左近衛大将皇太后宮大夫である藤原師長（31歳）が前日の五節の帳台試に来なかったそうだから、解任するよう伝えよと命じられたというのだ。

去夕帳台試摂政被参之間、内大臣左大将可相伴之由、兼日²²²被定仰、随供奉行啓、而宮入御之後不顧彼扈從各退出、因茲無扈從之人、摂政及暁更被参帳台、俄召具新大納言左衛門督等之由聞食及、遁有限之公事²²³、為無極之罪過、早触摂政可被解官所帶等者

（『兵範記』仁安3年11月21日条）

右大将とはこの年の8月10日に内大臣となり、12日に右大将²²⁴を兼ねた雅通（51歳）である。「前日の帳台試には摂政が参られるので、内大臣と左大将が相伴すべきことは、前々から定められてあったのに、2人は、皇太后の内裏行啓に供奉してきたが、宮（皇太后）が入御した後は（摂政に）扈從せずに退出してしまった。それで、摂政に扈從する人がいなくなってしまった。それでも暁に及んで、摂政が、帳台試に来ることになったので、代わりの扈從者として新大納言・左衛門督などが呼び出されて奉仕したというから、内大臣と左大将の罪は重い。彼らを解官するよう早速摂政に伝えよ」というものだった。信範は驚いて大臣の解官の例なんかないことをその場で後白河に奏聞しようと思ったが、とりあえずあわてて、摂政の元へ行って院の仰せを伝えた。摂政は、仰せはごもつとも思うが大臣解官の例はあるかと信範に下問があったので、流罪以外はないことを答えた（「奉仰之後、先大臣解官之条先例不覺悟、故直雖可

²²¹ 極官が正三位兵部卿。仁安3年11月現在は正四位下で蔵人頭。

²²² 兼日：兼ねての日。期日より前の日、あらかじめ、日頃。

²²³ 「有限之公事」の有限については宮川久美の論文がある（宮川2007）。「有限公事」については、『万葉集』巻16ノ3804を引いて、「公務にはいついつまでに何々しなければならないという期限がある」という解釈を挙げる（宮川2007：193）。『兵範記』では「公事には期限、つまり、なすべき時があるのだから、それを逃れるのは罪過極まりない」というような意味で、結局は前から決まっていた事をすっぽかすとはけしからんということであろうか。

²²⁴ この時、内大臣が右大将、師長は大納言で左大将だが、左右大将で本官が低位のほうが左大将を務める例は他にもある。古くは寛仁元年（1017年）、実資が大納言で右大将、教通が権中納言で左大将になっている。（実資は45歳から87歳になるまで、足掛け43年右大将。）当然、官位は低くても左大将のほうがエリート性が高い。

奏聞、逆鱗之間、乍存心中周章馳被参殿下、申御旨、御返事云、人々事被仰下趣畏思給、但大臣解官事被尋仰下官、下官引勘文簿申云」[『兵範記』同日条]。この時の摂政は藤原基房 25 歳で、基房は、5 歳で退位させられた六条天皇の摂政だったが、代わって即位した高倉も 8 歳の幼帝だったので、引き続き摂政を務めていた。『愚昧記』では後白河が怒っている事を伝えているが、実際、雅通と師長の 2 人にまず立腹したのは基房自身であった（『愚昧記』11 月 20 日条）。寵姫滋子の内裏行啓は恙なく完了している。帳台試は公式な行事でもなく、勿論、神事ではなく、天皇の出御もあつたり、なかつたりであった。天皇不出御の帳台試不参で傷つけられるのは摂政の権威だけであつたはずである。扈從忌避は摂関家内部のいがみ合いによるものであつたことは後白河は十分知っていたはずなのだが、とにかく後白河は基房の肩を持った。

この事件は『愚昧記』に詳しい記述がある。しかし、記主の三条実房は基房の親派であるので、記述は基房の側に立ったものであり、貴族一般の感想ではないことを割り引いておく必要がある。仁安 3 年 11 月 20 日、藤原（三条）実房は、蔵人保信（泰信）から帳台試に伺候するように伝えられた。『愚昧記』によると「これは、なぜかという、兼ねてから伺候が決められていた人たちのうち右大臣兼実（20 歳）は俄かに所労を申し出てやってこないのだ。内大臣雅通と大納言師長は皇太后（滋子）に供奉して内裏にはやってきたが、雅通は『殿上人が宿衣²²⁵でいるところで大臣が束帯というのはよくない。退出して装束を改めて来るから²²⁶、暁ごろになる』と言い、左大将師長も同様のことを言った。それを聞いて皇太后が雅通に『内大臣は束帯のままでも伺候するように』と言われたが、二人は退出してしまった。そこで私（この時権大納言 22 歳）と、左衛門督で中納言の藤原実国（29 歳）が摂政に扈從するために呼び出されたのだ。あの 2 人が摂政殿に扈從できない理由はあるのか、両人の所存甚だ奇怪だ。且つ又愚かだ。天運があつて大臣や大将の位に昇つたのに、摂政の扈從を嫌うのは甚だ見苦しい。しかも左大将（師長）は（摂政の）一門ではないか、どうして遁避しようと思うのか。皇太后の行啓に供奉してきながら無道の意趣を述べるとは、もう朝威を蔑ろにしているようだ²²⁷。摂政はご立腹で、『所労が発したので〔帳台試に〕罷り出ない』と言われた。しかし、皇太后が頻りに摂政に、帳台試に出仕するようにお勧めになったので、摂政は暁になってやっと慙²²⁸にお出ま

²²⁵ 宿衣は原則として衣冠であるが、殿上人が衣冠の時、公卿は直衣が普通である。時代にもよるが、『満佐須計装束抄』二（群書類従所収）に「とのゐ（宿）そうぞくといふは、つねのいくはん（衣冠）なり」とある。また、行事の際、殿上人は衣冠で公卿は直衣、という例は多い。一例をあげれば、『永久二年白川御堂供養記』「廿四日乙未。御願供養試染。已刻御幸祈願。上達部直衣。殿上人衣冠。但染行事等束帯。予頭弁等又束帯」（下線付加）。永久 2 年は 1114 年、予とは源雅兼で当時は五位の蔵人。

²²⁶ この言い分は公卿としてはかなりもっともな言い分である。

²²⁷ 「而乍供奉行啓陳無道之意趣、已似蔑朝威、殿下立腹」(『愚昧記』11 月 20 日条)。既に丑の日の当日に「朝威を蔑ろにするに似たり」といったのは摂政基房の言葉なのか、記主実房の感懐なのかははっきりしないが、いずれにしろ基房側の見方である。

²²⁸ 慙（なまじいに）：そうするのは無理なのに敢えてするさま。

しになった」という。雅通と師長の2人が扈從しないと知ると、摂政基房も病が出たと称して帳台試へ行くことを渋ったが、頻りに皇太后滋子が勧めたので、実房と左衛門督実国を代わりの扈從者として暁ごろやと帳台試に出かけたのだ。(この新扈從者は束帯のままで扈從した。)

想像にはなるが、2人の不参をいち早く「朝威をないがしろにしたようなものだ」と言い立てて何らかの処罰を後白河に申請したのも基房ではないだろうか。『愚昧記』も帳台試当日の20日の条に「殿下立腹」を記している。皇太后滋子はこの時は内裏に来ていて後白河は蓮華王院滞在中であるから、滋子が直接後白河に何らかの話をした可能性はない。また滋子は平家一門が後見しており、平家は清盛娘盛子を基通の養母としているので基房とは対立的立場にある。滋子にとって基房は息子高倉の摂政であるにしても、摂政が基房でなければならない理由も特にありそうに見えず、基房のため2人の処罰を求めるいわれもないのではないだろうか。まして、源雅通はこの時滋子の皇太后宮大夫であったのだ。自分の配下だからこそ滋子は、雅通に（師長ではなく）、「束帯のままで行ってくれ」と協力を求めたのだろう。滋子は丸く収めようとしたのではなかろうか。平信範はこの時、蔵人頭だったのだから、五節全般の実務を統括しており、基房が渋々出向いた帳台試にも随行して（「両貫首扈從」）いるのだから、当然2人の不参は熟知していた（信範の『兵範記』にもこの二人の不参は書かれている）。にもかかわらず、後白河の呼出しまで2人の解官処分など思いもよらないことだったのである。（『兵範記』11月21日条で後白河の逆鱗に信範は「存心中周章」している。）

この基房という人は、もともと自分の権威が傷つけられると激怒する性格だったとみられる。『平家物語』（巻第一「殿下乗合」）に、嘉応2年（1170年）10月16日に基房の行列に出くわした13歳の資盛（重盛次男）が下馬の令をとらなかったのに腹を立て、資盛はじめ侍たちを馬から引きおろし、さんざん恥辱を加えたという話が載る（旧大系④117頁）。（後日、重盛が報復に基房の行列の前駆や隨身たちを馬から引き下ろして、髻を切った²²⁹のだが、『平家物語』では報復者は重盛が清盛に入れ替わって、清盛の悪行の一つにされる。）天皇の代理として五節の帳台試に出るというのは、天皇の出御しながらに大臣と左右大将²³⁰が扈從するという、基房にとっては摂政の権威が可視化できる晴舞台であったはずだ。これが、右大臣兼実、内大臣右大将雅通、大納言左大将師長など、トップの公卿たちからそっぽを向かれて、晴れの舞台は台無しである。すっかり面目を潰されて、基房が地団駄ふんだ結果の騒動であろう。

それにしても、舞姫たちは災難である。日ごろ外出する機会も多くない少女たちが、おそらく生まれて初めての内裏に参入して緊張の極みにあっただろうに、帳台試のための衣装を身に

²²⁹ 『玉葉』嘉応2年（1170年）7月3・5日、10月21日に関連記事が見える。基実は女車に乗った若者が誰か知らずに恥辱を加えたのかもしれない。重盛に陳謝はしている。

²³⁰ 師長、雅通ともにこの年大将になっていた。

着け、いまかいまかと暁²³¹まで常寧殿で待機させられていたのだから。(なお、仁安3年[1168年]の舞姫たちについては『補注3』で考察した。)

とにかく、その年の11月21日、右大将源朝臣(雅通)・大納言皇太后宮大夫左近大将藤原朝臣(師長)は「不候帳台試」により、各々その官を解却されることになる。この時、基房の命により2人の処分を担当した左大臣藤原経宗(50歳)が、大臣の解官の例(傍書は「無」を補う)「大臣解官^無例敷」を問うと、大外記頼業は「左遷・流罪の外は不候」と答えたという(『愚昧記』11月21日条)。配流以外の大臣解官の例はないということで、雅通の内大臣の解職は実際には行われず、右大将の職を解かれるだけで済まされた(『公卿補任』には「止大将」とだけある)。師長は大納言と左大将を解任された。

(2) 事件の終息と背景

しかし、この事件はあっけない終息を見る。雅通が右大将、師長は大納言・左大将の任は解かれてから、わずか4週間²³²も経たない12月16日に還任されたのである。当初から一時的な停任であったことが了解されていたと考える。なぜなら、左右大将を解任されたのは11月21日で、それから4週間あったのに、後任の大将に別人が任じられることはなく、左右大将は空席のまま残され、いわば2人の還任を「待っていた」のである。(後述の頼盛の場合には解官の2週間後には空席となった参議に藤原成頼が還任している。)

この事件は一体何だったのか。樋口健太郎はこの五節での師長の解官事件を取り上げている(樋口2011)が、師長の束帯云々の言い分については本論筆者は部分的異論を申したい。樋口健太郎は、雅通・師長の帳台試ボイコットについて「この日の帳台試には、皇太后滋子が行啓する予定で、右大臣兼実と両大将にこれへの供奉が命じられていた。ところが、兼実は所労と称してこれを断り、両大将は当日になって供奉を断った。(中略)両大将のボイコットの理由は、この日は大嘗会の叙位があり、装束を束帯に改めるのにもう一度出直さねばならず、時間がかかるというものであった」(樋口2011:201)とする。確かに仁安3年(1168年)の五節には、皇太后に立后された滋子が内裏に行啓している。皇太后への供奉を命じられていたのに忌避したとしたら、罪科は重い。しかし帳台試には皇太后は参加しない。帳台試とは本来(『西宮記』の時代)、舞師による舞姫の教習・試であって、この練習風景を天皇が群臣に紛れて密に見物するところから始まり、帳台試にお供する側近たちも直衣である。非公式な娯楽であったが、『江家次第』のころには天皇の直衣指貫姿での出御が本儀とはなっていた。そして、物忌み

²³¹ 午前3時ごろ。「暁」の呼び方と時刻については小林賢章(2003)に詳しい。

²³² 仁安3年に閏月はない。

などで天皇が出御しない場合、あるいは天皇が幼少の時は摂政が代理で臨席する。この仁安3年にも幼少の高倉の帳台試出御はなく、摂政が代理で出席するのである。一方、后、女房、女性たちが、舞姫の五節舞を見物するのは寅の日の清涼殿御前試である。したがって、丑の日に両大将に命じられていたのは帳台試に行く皇太后滋子の行啓の供奉ではなく帳台試へ赴く摂政基房への扈從であった。滋子のこの日の内裏への行啓は、母后が行事のための内裏入りという晴儀であるから、多くの公卿・殿上人・諸大夫が威儀を正して供奉してきた。勿論、両大将も束帯である。しかし、帳台試には摂政は直衣で参加する。他の随行者も直衣が慣例である。内裏では、丑の日のこの時分には既に殿上人さえ束帯でなく衣冠で立ち回っている。殿上人たちが衣冠（宿衣）の時は公卿たちは直衣が普通である。だから、雅通も師長も自分たちは束帯を直衣に着替えてきたいと、かなり当然な言い分を申し立てているのである。樋口健太郎のいう「大嘗会叙位のために直衣を束帯に着替える」（樋口 2011 : 201）のではなく、逆である。ここで、基房のために滋子が「内大臣は束帯のままでも随行を（雖束帯可候）」と言ったのは、直衣姿の基房に束帯着用で扈從せよということであり、それこそ内大臣雅通や大納言師長にとっては屈辱以外の何物でもなかったはずである。（もっとも以前から帳台試扈從を申し渡されていたのだから、直廬などで着替えられるようははじめから直衣を持参しておけばよかったのだが。初めから扈從する気はなかったのだろう。あるいは途中で二人で申し合わせたのかもしれない。）右大臣兼実 は 早々に病を称して行かないことを事前通告していた。）

以上は束帯云々の申し状についてであるが、その裏にあったのは摂関家の嫡流争いである。師長は、保元の乱で敗死した頼長の長男で、摂関の地位への野心を捨ててはいない（と周囲にも思われていた）。師長の復権は後白河院の引き立てによるものと解されている。もう1名、さっさと事前に所労といって基房の扈從を逃れていた右大臣兼実は、基房の異母弟であったが、異母兄基実の猶子となっていた。基実に実子の基通が生まれてから、立場は微妙なものとはなっていたが、基通が摂政にならなかったのなら、摂政の座にいるのは基房ではなく、基実の猶子であり異母姉皇嘉門院の庇護を受ける自分であるべきだと思ったとしても不思議はない。基房は仁安元年（1166年）異母兄基実が没した時、その嫡子基通が幼かったので、氏長者・摂政となることができた。基通を嫡流、基房を傍流と考える者は多かったのである。『愚昧記』のいう「摂政の扈從を嫌うのは甚だ見苦しい（「嫌摂政之扈從、甚見苦事歟）」というのは当時の公卿の一般的感想ではあるまい。『愚昧記』の記主の三条実房は姉妹2人までが基房の室になっていて基房の義兄弟の立場にあった。実房の感想は基房の立場に立った感懐であって、果たして摂関家の嫡流争いを知る貴族たち一般の感情といえるだろうか。清盛も自分の娘盛子（9歳）を当時摂政だった基実の正室に入れていた。基実が没すると嫡子基通を摂関家の正当な後継者として11歳の盛子の養子とし、盛子に基実の遺領を管理させていた（実質的には清盛が管理）。

したがって、清盛にとっても基房は基通の地位を脅かす警戒すべき対象だった。兼実にしろ、師長にしろ、摂関家の嫡流争いのなか、摂政とは認めたくない基房に扈從するのは甚だ不本意であったのだ。師長が父頼長に連座して配流された先から召還されてから順調に上級貴族へと復歸していったのは後白河の引き立てがあったからこそである。後白河は摂関家嫡流争いを操って何らかの漁夫の利を得たかったのかもしれないが、それにしても、せっかく呼び戻して側近とした師長をこの時点で本気でまた追放したかっただろうか。

内大臣右大将雅通と大納言（左大将）の五節帳台試不扈從を理由とした解官劇は、基房の憤激が後白河を動かし、一時は左右大将が解官されたが、貴族たちの賛同は得られず、2人はあっさり還任して幕を閉じたとみることができよう。

第2節 平頼盛・保盛の場合

もう一組、仁安3年（1168年）の五節で解官されたのは平頼盛・保盛の父子だった。頼盛・保盛父子の事件は前述の雅通、師長と様相を異にしていたようだ。『兵範記』には、平頼盛・保盛父子が「五節参入、并御覧儀」を承引しなかったなどの理由によって、解官されたと伝えるが、すんなり納得しがたい不可解な事件なのである。『大日本史料』でも²³³、「参議平頼盛を解官す」という項を立て、「解官の事由詳かならず」と傍注する。

（1） 事件の概要

頼盛・保盛の仁安3年の解官に至った事件を追ってみよう。まず、『兵範記』11月28日条は頭中将が後白河院に呼び出され、院は保盛の五節献上の次第を聞いた後、頼盛・保盛の親子の解職を命じる。11月28日条は続いて、

父子之間、逆鱗之至、被解五ヶ重職了、五節参入、并御覧儀、奉行職事数度遣御教書、一切不承引、毎度対捍²³⁴、依代始母后入内、其責及五ヶ度之時、無音²³⁵参詣伊津岐嶋社、依入道太相国諷諫²³⁶急上洛、相企件両儀、是先背叡慮之其一也、此外年来之間、漸々積悪、種々違勅、大嘗会之間宰府所課一切対捍、九国支配非法訴條々、被仰禅闇云々、世上作法雖不始^(今カ)之、奉公之間自他相存、猶可跼蹐²³⁷者也、可恐々々、²³⁸

と、解官の理由を記述する。その理由としては、「保盛とその父は五節参入と御覧儀を、奉行職事（ふつう蔵人）を派遣して数度催促したにもかかわらず、承引せず、毎度拒否した。さらに代始めの母后（平滋子）の入内の際には、断りなしに厳島に参詣していたが、入道太相国が忠告したので、急いで上京した。年ごろ、悪事を積み重ね、勅に種々従わず、大嘗会で大宰府に割り当てられた所課もいっさいを拒んだ」ことなどが挙げられて、帯びていた5つすべての職を解官されたというのだ。頼盛・保盛は自身が解官されただけでなく、さらに翌月12月13日

²³³ まだ「稿」である。

²³⁴ 対捍：逆らい拒むこと。

²³⁵ 無音：挨拶するのが適切であるのに、挨拶のないこと。

²³⁶ 諷諫する：遠まわしに忠告すること。

²³⁷ 跼蹐・局蹐：「跼天蹐地」の略。おそれつつしみ、からだを縮めること。

²³⁸ 「可恐々々」（恐懼と同義）の処罰的側面については長谷山彰（1989）に詳しい。

(除目の日)に頼盛の家人6人も解官された²³⁹。このような厳しい処分は何だったのか。

前節で考察した雅通・師長の場合との大きな違いのひとつは、雅通・師長の解任の原因の中心は基房の怒りだったと思われるが、2人はひと月も経たないうちに本官に復している。頼盛はこのような摂関家の嫡流争いとは無関係であった。実は五節不参で解官された例は仁安3年だけのことでなく、仁安元年(1166年)11月16日にも、「五節不参」によって、故右大臣藤原(徳大寺)公能の息子、実家(当時22歳)が蔵人頭中将などを解任されている(『公卿補任』藤原実家)。しかし、実家も翌仁安2年(1167年)2月11日(つまり約3か月後²⁴⁰)に頭中将に復して翌仁安3年2月17日に従三位に叙せられている(従三位の日付については異説あり)。他の五節不参による解官処分がいずれも短期で許されたのに対し、5つの職すべて解かれた頼盛の還任は1年も後の嘉応元年(1169年)12月30日だった。

(2) 保盛の五節の献上

ここでまず知っておかなければならないのは、仁安3年には保盛は五節献上者の1人であったということである。保盛は単なる参列者ではなく、五節行事の立役者というべき舞姫の献上者であった。実際の献上者が終了後に不承引に問われること自体尋常ではない。この年は高倉天皇の大嘗祭であったので舞姫は5人で、保盛を含めて次の5人が献上した。(この5人の献上者たちについてはこの後の第3章『平家物語』の時代の献上者たち』の仁安3年に詳述する。)

公卿分3名

- ① 権中納言藤原成親(31歳)。成親は藤原家成の息子。永治2年(1142年)正月5日に五位(5歳)。天養元年(1144年)12月28日に7歳で越後守になった。永万2年(1166年)正月から蔵人頭。仁安元年(1166年)に従三位で公卿に列していた。
- ② 平時忠(39歳)。時忠は前年仁安2年の2月に参議で右衛門督になっており、この年仁安3年の7月3日に、検非違使別当に就任していた。よく知られるように時忠の姉の時子は清盛の継室であり、この年の3月に皇太后となった滋子は妹である。
- ③ 左大弁源雅頼(42歳)。雅頼は長寛2年(1164年)正月21日に参議に任ぜられ、永万元年(1165年)8月17日から左大弁。仁安2年(1167年)2月11日に従三位に叙せられ、

²³⁹ 『兵範記』仁安3年12月13日条。「解官、右衛門尉藤原季経、左兵衛尉平有季、平助友、兵衛尉平盛成、平有盛、右馬允源信満、件輩頼盛卿家人、併被脱(傍書 解力)官也」。

²⁴⁰ この間に閏月はない。

仁安3年正月11日には正三位に昇叙されていた。

受領分2名

- ④ 能登守通盛²⁴¹。通盛は、清盛の異母弟で頼盛からは異母兄である平教盛の嫡男。保盛からみれば従兄弟である。仁安3年3月15日に正五位下、5月13日から常陸介から能登守に遷り、8月4日に従四位下に叙せられている。生年は不明だが、久寿2年（1155年）ごろの生まれかといわれる²⁴²。そうだとすると、仁安3年には14歳になる。実質的には、五節は、この年参議となり正三位となった父教盛の経営であろう。
- ⑤ 尾張守平保盛。保盛は忠盛の五男頼盛の息子（長子と思われる）で長寛元年（1163年）正月24日右兵衛佐並びに越前守、永萬元年（1165年）正月5日 従五位上、仁安元年（1166年）12月20日から右兵衛佐兼尾張守、この五節の前年となる仁安2年閏7月12日に昇殿を許され²⁴³、そして仁安3年正月11日に正五位下に叙せられていた。ところが、仁安3年11月28日に「五節の参入并御覧儀」の失態を理由に父頼盛とともに解官されることになる。

（3） 頼盛の連座

五節献上者は保盛であったのに、五節における不勤仕を理由に父の頼盛が合わせて解官されたのはなぜだろうか。まず、考えられるのは保盛の年齢だろう。舞姫献上は尾張の国守に命ぜられたのであるが、このころの知行国の国守には知行主の幼年の子息が任命される例は多く、舞姫献上の実質の経営は知行主たる父親である。そこで保盛の年齢を調べる必要がある。

保盛の生年は明かではない。『国史大辞典』などには保盛の掲載はなく、人名辞典などからも不明であるが、保盛の年齢を知る手掛かりは『明月記』にあった。藤原定家の日記である『明月記』の天福元年（1233年）9月28日条に、定家邸を訪れた右兵衛佐が「厳父之病、危急云々、今年七十七云々」と言ったというのである。寛喜2年（1230年）正月25日条の除目の項で「右兵衛佐高頼」があり、傍書に「保盛卿子」とあるので、この傍書によれば厳父が保盛であるこ

²⁴¹ 通盛（左兵衛佐）が正五位下となったのは仁安3年3月15日で（その時、能登守に遷った）、正五位下となったのは保盛より2か月遅いから本来、通盛が最下臈であるはずだが、日記類の史料を見る限り献上者としては常に通盛が先に書かれている。

²⁴² 『朝日本歴史人物事典』（櫻井陽子）。

²⁴³ 『兵範記』仁安2年閏7月12日「昇殿聴、右兵衛佐兼尾張守平保盛」。

とになる。傍書ではあるが、この書き入れは『明月記』諸本に見られるので²⁴⁴、高頼は広く保盛の子と認識されてきたと考えられる。右兵衛佐高頼はその後もしばしば（10～11回）『明月記』に登場し、定家と親交が深かったことを示している。保盛の子には他に保教という息子もあり、保教の方は定家の猶子となっていた。定家は保盛自身とも何度も会っており（『明月記』に6～7回登場する）、特に『明月記』寛喜元年（1229年）10月28日条には「早旦、門の外に出づる次で、隣家の三位入道先日の音信に依り相謁す。往時を言談す」とあり、保盛自身が隣に住んでいて定家と親交があったことがわかる。『明月記』諸本の傍書を信じれば、保盛天福元年77歳の信憑性はきわめて高いといえるだろう。保盛が天福元年（1233年）に77歳であったなら、逆算すると、保盛は保元2年（1157年）生まれとなるから、仁安3年（1168年）のこの五節の時にはわずか12歳である。『公卿補任』から保盛の経歴をたどると、応保2年（1162年）10月9日に叙位されて、長寛元年（1163年）正月24日に右兵衛佐、越前守に任ぜられて、仁安元年（1166年）12月30日から尾張守である。すると、わずか6歳で叙爵され7歳で国守になったことになる。まだ子供ではあるが、このころ、院の近臣やその子息たちは、院の思うがままに官職位階をあたえられ、幼年の叙爵や受領任官は、このころ全く珍しくはなかったのである²⁴⁵。勿論、院分国も院の近臣たちに与えられていった。院分国を賜る場合にも、忠盛のころには自らが近臣受領となったが、この時代には自分の息子を国守に申任して知行する²⁴⁶形をとることが多く、名ばかりの国守となる息子は幼くて全くかまわなかった。また、国守となるには従五位下なりの官職相当の位階を帯していなければならないので、国守任官を前に叙爵されるに必要もあった。以上の諸例からも保盛の6歳での叙爵と尾張守任官も十分ありうることであり、『明月記』の没年の年齢から逆算した保盛の当時12歳という推定は、納得できる年齢である。

つまり保盛は幼少だったので、父頼盛が全面的に五節献上を差配した。だからこそ、保盛の五節不勤仕は父親の解官につながるのである。しかし、いったいどんな失態があったのだろうか。今なら小学生程度の年齢の子供が、夜に行われる参入行事に立ち会わなかったからといって、法皇の逆鱗に触れるのだろうか。

²⁴⁴ 訓読版の底本は国書刊行会本、陽明文庫所蔵の古写本、並びに京都府立総合資料館所蔵の古写本とを校合したという。特段の注記はない。また、徳大寺家本『明月記』にも保盛卿子の書き入れはある。

²⁴⁵ 例えば、康治元年（1142年）には藤原成親が5歳で従五位下に叙せられ、天養元年（1144年）、7歳で越後守に任じられていた。（父の家成は鳥羽法皇の第一の寵臣であった）。その成親の娘の成子の夫であった藤原基宗は応保元年（1161年）7歳で叙爵。加賀守に叙任される。侍従を経て、承安2年（1172年）に正五位下に叙されたし、応保2年（1162年）には清盛五男の重衡も12月に6歳で叙爵。承安3年（1173年）正月6日には、宗盛の子がわずか4歳で従五位下に叙爵されているし、保盛の弟光盛も安元2年（1176年）5歳で従五位下（『公家事典』）になっている。角田文衛（2003：235）に長門本、延慶本、四部合戦状等々にあるとの指摘があり、かなりの信憑性はあるだろう。

²⁴⁶ 公卿は普通、受領を兼ねないし、受領は同時に2つ以上の国守にはなることはない。頼盛は仁安元年8月に従三位（つまり公卿）に昇っている。

さらにいえば、この年大嘗会 5 人の舞姫を献上したのは公卿 3 名と、能登守平通盛と尾張守平保盛の 2 名の受領だったが、通盛の父教盛はこの年 8 月 10 日に参議に任じられており、保盛の父頼盛もこの年 10 月 18 日に待望の参議に補せられたばかりであるから、受領分という形ではあったが、実質は新参議 2 人が献上したといえる。表向きの献上者は受領の保盛であつても、五節経営の責任は父の頼盛が問われるのは必然であつた。

(4) 平頼盛について

頼盛は長承 2 年 (1133 年) の生まれと考えられ²⁴⁷、元永元年 (1118 年) 生まれの清盛より 15 歳年下の弟であるが、母は同じではない。頼盛の母は『平家物語』では「池の禅尼」として知られ、清盛の母亡き後の忠盛の妻たちの中で最も重要な妻であつた藤原宗子であつた。頼盛が平家の都落ちに同道せず、平家滅亡後も頼朝から命の恩人の子として厚遇されたことはよく知られている。清盛は長子ではあつたが、忠盛の継室の宗子の産んだ異母弟たちはライバルとなる。宗子の息子たちの中では家盛が長子であつたが久安 5 年 (1149 年) に病死した。『本朝世紀』の久安 5 年 (1149) 3 日 15 日条に家盛の悲しい死の様子が語られている²⁴⁸。家盛は病をおして熊野御幸に扈從して、途中、宇治川落合のあたりで絶命したのだ。頼盛が叙爵したのは久安 3 年 (1147 年) で 15 歳であつたが、異母兄教盛の叙爵は久安 4 年 (1148 年) で 21 歳であつたから、頼盛の 15 歳の叙爵は特に遅いものではなかった²⁴⁹。しかし、家盛の病死で、頼盛は継室の長子、つまり正室の長子で「母太郎」と呼ばれる立場となった。頼盛は当初は、清盛に次ぐ昇進をしていた。例えば清盛が播磨守となると、それまでの清盛の知行国安芸守となった。しかし、平治の乱以後は清盛直系が抜き出て、頼盛は清盛嫡子の重盛 (保延 4 年 [1138 年] 生) にも大きく離されていくことになる。頼盛の任参議 36 歳に対して、清盛の嫡子重盛が参議となったのは 28 歳、永萬元年 (1165 年)、重盛が 28 歳で正三位の参議となった時、頼盛 33 歳は正四位下の修理大夫であつた。翌々年仁安 2 年正月 28 日頼盛は正三位 (非参議) となるも、8 月 1 日には重盛の弟宗盛も参議になった。頼盛は仁安元年 (1166 年) 10 月 21 日から皇太后呈子の皇太后宮権大夫であつたが、仁安 3 年 3 月、呈子にかわって滋子が皇太后になると、宗盛

²⁴⁷ 頼盛の生年については揺れがある。『国史大辞典』(飯田悠紀子)は長承元年 1132 年、『平安時代史事典』(谷口昭)の「56 歳で没」によれば 1131 年生となる。ここではとりあえず『公卿補任』の年齢に従う。

²⁴⁸ 「是日。從四位下行右馬頭兼常陸介平朝臣家盛卒。扶病扈從熊野御供。自去十三日殊以平歿。今日於宇治川落合之邊氣絶了云々」。

²⁴⁹ 頼盛叙爵時には家盛は存命だった。家盛の生年は不詳だが、長承 3 年 (1134 年) に六位蔵人になっている。頼盛の異母兄の教盛が叙爵したのは久安 4 年 (1148 年) で 21 歳の時だった。

が皇太后宮権大夫となった。一方、頼盛と同様に清盛の異母弟であった教盛は仁安3年8月10日参議となり12日に（従三位を飛ばして²⁵⁰）正三位に叙された。

頼盛の主な官歴は次のようなものである。

久安3年（1147年）	10月14日	15歳	叙爵（従五位下）
保元元年（1156年）	閏9月22日	24歳	安芸守
	10月22日		叙従四位下
保元3年（1158年）	11月26日	26歳	従四位上
平治元年（1159年）	12月27日	27歳	兼尾張守
応保元年（1161年）	2月28日	29歳	叙正四位下
応保3年（1163年）	正月24日	31歳	辞尾張守、以男保盛申任越前守
永万2年（1166年）	7月15日	34歳	兼大宰大貳
仁安元年（1166年）	8月27日	34歳	叙従三位
	10月8日		大宰府に赴任
	10月21日		兼皇太后宮権大夫
仁安2年（1167年）	正月28日	35歳	正三位
	4月17日		依召自西府上洛
仁安3年（1168年）	3月11日カ	36歳	止権大夫
	10月18日		任参議
	11月28日		解却所職
嘉応元年（1169年）	11月16日	37歳	本座
	12月30日		還任

仁安3年10月28日に悲願の参議となることができたのだが、わずか1か月で参議を解かれてしまったのだ。

（5） 保盛献上の五節

『兵範記』による仁安3年（1168年）の頼盛の解官理由は、前にも引いたように「逆鱗之至、被解五ヶ重職了、五節参入、并御覧儀、奉行職事数度遣御教書、一切不承引、毎度対捍」（『兵範記』11月28日条）であるが、田中大喜は「舞姫の参入や御覧の儀式を毎度怠ったことを直接の契機として行われた」（田中2003a）とするが、舞姫の献上は一大事業であり、やっと参議

²⁵⁰ 「二階」とあるから、正四位下から、従三位を経ないで正三位になった。つまり、正四位上は超階で、従四位上から正四位下が「一階」と数えられていたことがここからも確認できる。

になった頼盛が「毎度」と言われるように何度も舞姫献上を命じられたはずもない。献上を「毎度怠った」わけではなく、仁安3年の五節中の、五節参入と御覧儀に、奉行職事を数度遣わしたのに、全くいうことを聞かず、拒絶したという意味であろう。

しかし、記録を見てゆく限り、参入と御覧儀に関して大きな失態があったとは考えられないのである。というのは、まず、11月20日丑の日の舞姫参入の様子については『兵範記』に次のような記述があることがあげられる。

此間五節舞姫参集北陣、別当、時忠、能登守通盛朝臣、尾張守保盛朝臣等舞姫可有参入儀、
権中納言、成親、左大弁、雅頼、姫公以密儀暁参（中略）

別当五節参上、雲客扶持、其儀次第如例、次能登姫公参上同前、次尾張参上同前、此間少
納言泰経奉御教書到来、為申其院宣請文、下官触頭中将退去、帰小板敷、三ヶ姫公参入了
頭中将同帰居

つまり、権中納言成親と左大弁雅頼は正式な参入の儀礼をせずに、暁の密参で済ませたのに対して、別當時忠の舞姫は雲客が扶持して規定通りの儀礼をもって参入が終わり、続いて通盛の舞姫、その後に保盛の舞姫も同様に参入の儀を行った。その真只中へ少納言泰経が御教書を持ってやって来た。院宣請文を申す為に、信範（『兵範記』記主）は頭中将に退去を告げた（後ほど頭中将も小板敷に帰ってくる）ということである。この御教書は保盛の舞姫が既に参入の儀を行っているところへ到着しているのだから、保盛への舞姫参入への参列督促ではありえない。頭中将が去ってから、3人の舞姫の参入はすべて完了している。つまり、保盛の舞姫はきちんと参入の儀を行って参入を完了しているのである。

また御覧儀とは童女御覧のことだから、この年も仰せによって、大理（検非違使別当の唐名、つまり、別当平時忠）の童女には左大臣の中将（左大臣経宗の嫡男頼実）が付き添い、能登守平通盛の童女には按察中将藤原実宗と堀川中将藤原頼定が付き添った（『愚昧記』11月22日条）。『兵範記』11月22日条にも、能登守の童女の記述に続いて、尾張の童女には右少将泰通朝臣1人が付き添い、下仕には非蔵人の仲基が付き添ったことが書いてあるから、保盛も、童女と下仕を御覧に送ったことは確かである。童女の記述がないのは左大弁だけで、1人だけ記述のない左大弁は童女を送らなかったのであろう。参入儀と童女御覧もそれ相応の財と手間がかかるので²⁵¹、奉仕しながらない献上者が多い。舞姫の誰も参入の儀を行わず全員が密参してしまったり、童女御覧にやってくる童女がたった1人だったりする年もまああって²⁵²、それを

²⁵¹ 本論文の第二第3章第1節「献上者の負担の増大―舞姫の参入と童女御覧を巡る攻防」に詳述。

²⁵² 参入に関しては、黒澤舞（2013）「治承4年の新嘗祭と五節舞について」が寛治元年（1087年）～建久2年（1191年）までの「参入」と「暁参」の数をリストにしている。忠盛昇殿の長承元年（1132年）以降、

避けるため、事前に献上者の中から参入の儀や童女御覧の勤仕を行う者を命じておくことが行われた。それでも、例えば長寛元年（1163 年）の良通・兼実父子の舞姫献上では、兼実が童女御覧は経費がかかるから出せないと断っている（結局は条件付きで承諾したが）。献上者たちが回避したがる参入の儀も童女御覧も保盛・頼盛父子はきちんと勤仕したことは確かである。もし、保盛・頼盛の五節献上行事に大きな失態があったとしたら、この五節の記録を残す『愚昧記』と『兵範記』のどちらにも当日の「失態」の記述がないのは不自然である。子孫に対する他山の石として、「こういう間違いはしないように」と書き付けておいてこそ価値ある平安貴族たちの日記なのだから。

左大弁こそ参入も童女御覧も奉仕しなかったようである。勿論、保盛の舞姫は本番の節会でも舞っていることは『兵範記』から確認される。保盛・頼盛の解官理由とされた「五節参入、并御覧儀を一切不承引」というのは、誰もが引き受けたがらない参入・御覧儀を、頼盛もおそらく初めは何度か逃れようとしたのであろう。今回もどちらも勤仕しなかった献上者もいたのだから、結果として立派に勤め上げた頼盛・保盛父子をいまさら不承引と罪過を問うのは酷な話であろう。

そもそも保盛は当初からの舞姫の献上者ではなかった。その年の五節の定めは 10 月 15 日に摂政直廬で行われたが、その時、5 人目の献上者とされたのは武蔵守知盛であった（『兵範記』）。知盛は 2 年前（仁安元年）にも献上しているので²⁵³、新任参議頼盛が経営すべきとして交代となったことは十分考えられることである。但し、いつの時点で交代になったのか管見の限りでは不明である。

頼盛を罪に問う際に、後白河院は頭中将実守に頼盛・保盛父子の五節次第を尋ねているのだが（前掲の『兵範記』11 月 28 日条）、この時、後白河の下問に対して実守は「頼盛卿申状、度々散状」と答えたというが、散状とは何を意味したのか。実守はどういう人物だったのか。何か頼盛に含むところがあったのだろうか。実守は故右大臣公能の三男で 22 歳、この年の 8 月から蔵人頭だった。三条家は代々、故実典礼に明るい家として知られていた。「散状」の意味は「命令や質問に対する略式の回答書」や「なおざり、なげやり」（以上『広辞苑』）が見られる。『兵範記』での「散状」の用例は 10 件²⁵⁴見出せるが、用例は仁安 2 年（1167 年）から承安元

この事件の前年である仁安 2 年（1167 年）までリストにある 16 回の五節のうち、献上者全員について判明しているのは 12 回あるが、このうち「参入」が 1 名しかいない年は 5 回（うち 1 回は大嘗祭）、全員密参が 3 回（うち 1 回は大嘗会）もある。なお、久安 6 年（1150 年）の新嘗祭は黒澤のリストにはないが、『台記』から全員が密参であることが判明している（「件四ヶ所（中略）皆密々参入。世人以為奇怪」）。献上者は皆参入の儀を忌避するものであり、おいそれとは承引しなかった者は頼盛父子だけではなかっただろう。

²⁵³ 『兵範記』仁安元年（1166 年）11 月 13 日条から武蔵守知盛が実際に献上したことが確認される。

²⁵⁴ 歴博データベース 検索語は「散状」

仁安 2 年（1167 年） 3 月 28 日 申禊祭供奉諸司散状、斎院用途未済事、

年（1171 年）に集中しており、いずれも「交名」^{きょうみょう}か「返答」の意味で使われていて、やはり「頼盛卿申状、度々散状」はよくわからない。たびたび口答えがあったという意味だろうか。実守は実定の同母弟で、この2年後の嘉応2年（1170 年）12 月 30 日に参議に昇るが、長寛3 年（1165 年）には正四位下に昇叙されていて中将である（以上『公卿補任』）。仁安3 年（1168 年）現在には参議に昇り得る位置にいたから、前任参議の数が減るのは歓迎すべきことであったには違いない²⁵⁵。もっとも、頼盛が解官されて空席になった参議には、藤原成頼が還任したから、実守は参議にはなれなかったが。（頼盛は藤原成頼の相伝を受けて参議となったので、頼盛が解官されると12 月 13 日に藤原成頼が参議に還任した。）この年の2 年前、仁安元年（1166 年）には実守のすぐ上の同母の兄の実家が「五節不参」を理由に頭中将等を解却されている。（実家は前述のように翌年2 月 11 日に還任して、この年仁安3 年2 月 17 日非参議の従三位となっていた。しかし参議になるのは承安4 年〔1174 年〕であり、弟実守より4 年遅かった。実守は立ち回りがうまい人物だったのかもしれない。）

（6） 保盛・頼盛解官の真の理由

頼盛・保盛父子は大嘗会の舞姫を献上し、参入の儀礼も童女御覧も勤仕するというという大役を果たしながら、突然官職すべてを召し上げられた。

頼盛の解官については田中大喜は、仁安3 年の頼盛解官は背景に清盛がいて「清盛が高倉の皇位安定を目指す上で利害を一致させていた後白河院と提携することによって、頼盛の統制を図った政治的措置であったと考え」ている。つまり、頼盛を重盛に従わせるために、清盛が後白河を動かして解官させたもので、これ以降、頼盛は清盛に逆らわず、清盛の平氏宗家に取り込まれていったとみる（田中 2003a）。

しかし、頼盛の解官は田中大喜のいうように頼盛を重盛に従わせるために、清盛が後白河を動かして解官させたしたものだったのか、疑問がある。

仁安2 年（1167 年）7 月 11 日	奏法勝寺孟蘭盆講僧参否散状、
仁安3 年（1168 年）7 月 25 日	公卿以下供奉諸司諸衛官人差文并散状、
仁安3 年（1168 年）8 月 3 日	両大將以下公卿参否、外記散状之上、
仁安3 年（1168 年）9 月 18 日	凡如此供奉官散状、式部經次官申長官、
仁安3 年（1168 年）11 月 5 日	貞来臨示雜事、官掌宗職又申諸国散状、
仁安3 年（1168 年）11 月 28 日	敝親頼盛卿申状、度々散状次第申上云々、
仁安4 年（1169 年）3 月 29 日	示石清水行幸舞人四位陪従等散状、舞人併称所劳出
仁安4 年（1169 年）4 月 1 日	今日更衣具了、明後日改元定卿相散状、晩頭帰家、
承安元年（1171 年）12 月 24 日	中納言宗家卿参入、公卿散状被問外記広基

²⁵⁵ 実守は、近衛中将であったので、「あるいは任参議」と淡い期待を抱いたところが、10 月の頼盛が8 人目の参議となって、しばらく任参議の望みはなくなった恨みでもあったか。

(イ) 清盛黒幕説

『兵範記』による頼盛の解官理由を再度見てみる。

父子之間、逆鱗之至、被解五ヶ重職了、五節参入、并御覽儀、奉行職事数度遣御教書、一切不承引、毎度対捍、依代始母后入内、其責及五ヶ度之時、無音参詣伊津岐嶋社、依入道太相国諷諫急上洛、相企件両儀、是先背叡慮之其一也、此外年来之間、漸々積悪、種々違勅、大嘗会之間宰府所課一切対捍、九国支配非法訴條々、被仰禪閣云々、世上作法雖不始^(今カ)之、奉公之間自他相存、猶可跼蹐者也、可恐々々、(仁安3年11月28日条)

五節のあたりのことは「背叡慮」のだから、後白河の意向を無視したとのことであるが、後半の「此外」の項目で太宰府の差配が非法であったと「禪閣」に言ったという。この禪閣が清盛であれば、後白河からたびたび頼盛の悪行を聞かされていたので、後白河と相計って頼盛を追放したとの推測もあり得るが、少なくともこの禪閣は清盛ではない。禪閣とは関白・摂政の任にあった者で入道した者のことで、清盛は太政大臣になったが摂政・関白にはなっていない。

『平家物語』全巻を見ても清盛が禪閣と呼ばれているのは一箇所もなく、相国・太相国・入道相国などで大臣を示す相国が使われている。古記録でも、禪閣は前摂政・関白である。『愚昧記』は仁安3年11月20日条で仁安元年(1166年)11月13日の事を引いて忠通を法性寺禪閣と呼んでいる²⁵⁶。清盛入道相国は「相国禪門」であり、「禪閣」ではなく「禪門」という一般に入道を示す言葉が付される。忠通は仁安3年11月には故人ではあったが、このころ「禪閣」といえば忠通だった可能性のほうが高い。『猪隈関白記』²⁵⁷で承元2年(1208年)10月24日条では「禪閣」は藤原基通であり、やはり禪閣は摂関である。さらに検索すると『吾妻鏡』に2~3か所「平相国禪閣」と記したものもあるにはあった²⁵⁸。しかし、清盛の時代から一世紀近くも後代に編纂された史書より、同時代の日記類を信じたい。但し、頼盛が太宰大貳となった仁安元年には忠通は既に故人である(長寛2年[1164年]2月19日没)。太宰大貳となった頼盛について、忠通に何かいうことは不可能ではある。しかし、「後白河が禪閣に言ったといっている」という伝聞であるので、言った相手が事実として禪閣で忠通だったかの確証はない。後白河が誰か高官に不満を述べたとはいっているが、少なくとも、出家した清盛がわざわざ頼盛

²⁵⁶ 『愚昧記』仁安元年11月13日条「法性寺禪閣(藤原忠通)、于時為摂政出給」。

²⁵⁷ 『猪隈関白記』: 関白近衛家実の日記、自筆本23巻、古写本16巻(ともに陽明文庫)、建久8年(1197年)~建保5(1217年)の記事。

²⁵⁸ 例『吾妻鏡』「項年之間、平相國禪閣、恣管領天下、刑罰近臣刺奉」(国文学資料館「古典選集本吾妻鏡データベース」1冊24頁9行目)。

の太宰の差配について不満を言いに行ったことは確認できない。

(ロ) 頼盛の「問題行動」

頼盛のその勝手な行動のひとつとして田中は、頼盛は大宰府大貳に任じられると慣例を破って現地に赴任したことをあげる（田中 2003a）が、頼盛は仁安元年（1166 年）7 月 15 日太宰大貳を兼ねると同年 8 月 27 日赴任賞として従三位が与えられ、10 月 8 日に赴任した。太宰府赴任は予定の行動をとっただけではないか。朝廷から咎められる赴任なら、従三位昇叙という「赴任賞」が与えられるわけはあるまい。朝廷はとにかく、清盛が頼盛の下向をどう思ったかは別ではあるが、赴任賞が既に与えられたからには頼盛の赴任は当然であり、これを勝手な行動とは言えまい。確かに大宰府出立 2 日後に東宮の立太子が行われていて、これには不参となるが、不参に関しての咎めはなく、年が明けて仁安 2 年（1167 年）正月 28 日には、頼盛はさらに正三位に昇叙されている。そして 3 か月後の 4 月 17 日、召しによって大宰府から上洛している。大宰府にいた間、何の咎めもなく、正三位に昇進し、仁安 3 年 10 月 18 日には待望の参議となっているのだから、大宰府赴任が勝手な行動であったとは考えにくい。

田中が次にあげる頼盛の問題行動は「頼盛は、清盛の義妹の滋子が後白河院のもとへ入内した時も、何の連絡もなしに厳島神社に参拝しており、そこに参仕しなかった」（田中 2003a）とするが、これも濡れ衣と思われる。滋子はもともと後白河院の同母姉の上西門院に仕えていた女房で、身分は低く、滋子が「女御」となったのは高倉が立太子して後の仁安 2 年（1167 年）正月である（女御は本来天皇のキサキであり、上皇の妻妾への宣下は例外でもある）。滋子がいつから後白河の寵を受けるようになったか特定はできず、退位後のことではないかと考えられるのだが、たとえ在位中としても、後白河が退位したのは保元 3 年（1158 年）で滋子は 17 歳ごろだが、その時点では滋子は単なる女房で、入内に貴族が供奉するような身分ではなかった。滋子が後白河の院御所法住寺殿へ迎えられたのは応保元年（1161 年）4 月で、皇后忻子らとともに移徙したので、その時、供奉した公卿や殿上人は皇后忻子に供奉したのであって、滋子に供奉が命じられたわけではない。『兵範記』が頼盛解官の理由として挙げた 1 つの母后入内については「依代始母后入内」と書かれている。滋子の内裏参内の記録を拾うと、仁安 3 年 3 月 20 日の立后以後に滋子が（この五節以前に）内裏に行啓したのは、仁安 3 年 3 月 26 日、9 月 15 日、11 月 13 日の 3 回がある。「代初めの母后入内」といっているから、高倉が即位して母后となった初行啓の仁安 3 年 3 月 26 日のことになる。（行啓先としては母后たちの恒例に従って内裏が選ばれている。）

頼盛は前皇太后呈子の皇太后宮権大夫であったが、新皇太后宮職の官人ではないから供奉は職掌ではない。まして、呈子²⁵⁹は滋子のために皇太后宮位を明け渡させられた感が強い女院号（九条院）であったから、頼盛が滋子の行啓供奉に乗り気でないのは当然の感情だったかもしれない。しかし、滋子は平家の継室の実妹だから、一族あげての盛儀とするための詳細の施行はむしろ平家の一門内部の問題であり、盛儀の裏で頼盛ひとりが割り当てられた役をすっぽかしていたとしたら、まず立腹するのは氏の長者である清盛のほうだろう。頼盛があけた穴があったとしても当然、一門の誰かによってカバーされたはずである。皇太后となった滋子の内裏初行啓は滋子の輿の他、糸毛金作 2 両、出車も 12 両²⁶⁰も連ねる華麗なものであった。全体として何の不満の残るようなものではなかったものと考ええる。

厳島参詣については、「無音参詣伊津岐嶋社、依入道太相国諷諫急上洛」で、断りなく厳島神社に行ってしまった頼盛を入道太相国が諷めたので、頼盛は上洛したとある。大相国とは太政大臣をいい、仁安 3 年 11 月現在の太政大臣は、藤原忠雅であるが、忠雅は現職だから当然「入道」ではなく、この入道太相国は、前年 2 月に太政大臣になって同年 5 月には辞任してしまった清盛のこととなる。厳島神社は、清盛自身が信奉する神社であり、敬意を示す参詣そのものに清盛が立腹する理由もなかろう。清盛が本当に怒ったのなら、この時に処分があつてしかるべきであるが、清盛はここでは、むしろ問題にならないように頼盛に上洛するよう忠告をしたのである。そして、清盛からの忠告を容れて、頼盛はおとなしく上洛している。

仁安 3 年は既に 2 月 11 日に清盛は病を得て出家して、重盛を後継として権限委譲はスムーズに行われているように見える。出家者は当然、院や宮中に参入して議定などに参加はしない。

²⁵⁹ 頼盛が権大夫を勤めた皇太后宮は藤原呈子だったが、仁安 3 年（1168 年）3 月 14 日、呈子に九条院の女院号が下された。これは平滋子の皇太后立后のためだった。滋子は後白河の譲位後の愛妾だったが、出自は低く、所生の皇子憲仁の立太子により、やっと女御となった。そして、憲仁の即位により、後白河は滋子を皇太后に立后するため、呈子に女院号を与えて、皇太后位を空けさせたのである。呈子に女院号により頼盛は皇太后宮権大夫を解かれた。代わって新皇太后の権大夫になったのは滋子の姉の時子と清盛の間の息子である平宗盛だった。呈子が仁安 3 年 3 月 14 日に九条院の院号を下された時は摂関の出自でない呈子に女院号は異例であると批判もされたが、「年官年爵如舊」と年官も年爵も元のままで新たに加わらなかったことは『玉葉』『兵範記』に見え、『山槐記』にも「年官季爵如元」と『玉葉』『兵範記』と同じ意味が書かれている。『玉葉』はそれだけであるが、『山槐記』には「御季御服御事不被仰之被止歟、自余皆有」という割注がある。『兵範記』は更に「年官年爵如舊」に続いて「御季御服御封被止了、仍不仰」と割注する。年官年爵は今まで通りでも、『山槐記』と『兵範記』によれば季禄時服の類は停止されたといい、『兵範記』では御封まで停止された模様である。但し、『玉葉』と『山槐記』は封戸について言及はないので、『兵範記』の一人合点かもしれない。『玉葉』『兵範記』『山槐記』のどれにも院号によって封戸が加えられたというような記述はないので、後からの加封は確認できない。このころの女院たちの潤沢な資力は自己の皇統の故人たちの追善供養に多く充てられたことが明らかにされているので（山田彩起子 2010）、あるいは呈子は追善仏事などの御料が必要のない女院であったのかもしれない。この追求は本論文の範囲から外れるので、調査しない。ただ、女院号は荣誉ではあっても、呈子の場合、季禄や時服を失うことはあっても、女院号による実質的な益は皆無だったようだ。

²⁶⁰ 『兵範記』仁安 3 年 3 月 26 日条。

翌年には清盛は福原に移ってしまい、上洛もまれとなる。重盛は福原の清盛にたびたびお伺いを立てはしていたが、既に公的には政治から身を引いた清盛が、五節にかこつけて後白河に頼盛の罷免を求めるだろうか。清盛の嫡男として重盛は既に前年仁安 2 年に従二位で権大納言、頼盛は仁安 3 年 10 月にやっと参議になったばかりである。頼盛は重盛の後継者としての座を脅かせる地位にはいない。とにかく、頼盛にお灸をすえるなら、重盛を通じてさせなければ、重盛に従うようにはならない。清盛が睨みを利かせているとはいえ、平氏宗家は重盛への引継ぎが完了している時点で、重盛を通さずに後白河と図って頼盛を一年間遠ざける意味は見出せない。

(ハ) 頼盛解官で利益を得たのはだれか

もし清盛が頼盛解官の画策者だとすると、大きな疑問が生じる。保盛の尾張守解官によって平家一門は尾張の知行権を失っていることである。仁安 3 年 12 月 13 日、保盛解官に代わって尾張守となったのは藤原家教だった(『兵範記』)。家教は後白河の側近の藤原成親(権中納言)の同母の弟で、つまるところ、後白河院は尾張国を平家から取り上げて、自分の側近に与えたということになる。尾張の知行権を得た近臣の成親は院と男色関係さえうわさされた寵臣であった。もっとも、この成親も翌年の嘉応元年(1169 年)12 月 24 日には延暦寺大衆による「嘉応の強訴」によって解官され配流されることに決まるのだが。(実際には配流は免れた。当然後白河の配慮があったと考えられる。)しかし、この嘉応の強訴で 12 月 30 日には、尾張守は藤原範能に交代している(『兵範記』に尾張守藤範能の名がみえる)。尾張が平家の手に戻るのは、治承 3 年(1179 年)正月 6 日、尾張の知行権が中宮徳子に与えられて、清盛の七男の平知度が国守になった時である²⁶¹。仁安 3 年の頼盛解官が、清盛が頼盛をおとなしくさせるための解官だったとしたら、平家一門の知行国を失うことはしないのではないか。清盛が治承 3 年 11 月福原から軍勢を率いて上洛してきた時、おびえた貴族たちは、これはきっと後白河院が重盛の死後、重盛の知行国越前を没収してしまったことに清盛が立腹したからではないかとささめきあったという。知行国一つを失うことが重大な損失とは自他ともに広く認識されていた。尾張は仁安 3 年には頼盛の知行国だったが、松島周一が指摘するように、尾張と越前は頼盛の一族と清盛の直系一族が交互に知行する国だった(松島 2014)。

尾張守の職にあったものは平治元年(1159 年)12 月 27 日から長寛元年(1163 年)正月 24 日までは頼盛で、その後、清盛系の平重衡が引き継ぎ、そのあと仁安元年(1166 年)12 月 30 日から保盛つまり頼盛の息子が守となった。重衡は清盛の息子であるから、重衡在任中に尾張

²⁶¹ 知度の後は、治承 3 年の政変時に平時宗(平時忠の息子)が国守になり、寿永 2 年(1183 年)7 月には清盛の養子の清定(清貞とも)が国守に見任している。

を奪ったら清盛の猛反発が避けられまい。仁安3年には頼盛の知行国だったが、そのあとはまた、清盛直系が知行になりうるという広い意味では「平家一門」の知行国である。松島も指摘するように、頼盛の失脚は清盛にとって多大な損失を意味していた。一門から尾張の知行権を失ってしまうことを、清盛が画策することはないだろう。清盛はギリギリのところまで後白河の尾張奪取を黙認したのではなかったか。清盛正室の妹の息子という平家にとって都合のよい天皇高倉の政権安定には後白河の協力が欠かせなかったことを見越して打った、後白河の一手であろう。

五節の過失が解官の直接の理由とされるが、五節に関して頼盛・保盛父子の怠慢はなかったようであるし、大宰府への赴任も「赴任賞」（従三位昇叙）をもらっているぐらいだから、非難されることなく厳島へ参拝した件も、清盛の勧告を受け上洛している。ここでも、既に出家して嫡子に権限を委譲した清盛が、頼盛追放を企てて後白河と合議したとは思わない。後白河にしてみれば、自分が御教書を遣わして要求した時には馬耳東風と聞き流しておいて、ひとたび清盛が勧告すれば早速上洛して参入・御覧の2件も整えるとは、面子が立たず、その意味で立腹ひとしおであったのかもしれない。清盛の側では、頼盛を牽制して重盛に従わせるなら、重盛に処分させなければ重盛の権威は保たれない。

本論筆者の結論は、仁安3年の五節をめぐる頼盛解官は清盛の企てではなく、尾張（あるいは熟国ならどこでもよかったのかもしれない）を自分の支配下にとり戻したかった後白河が、本来、責められるべき咎などなかった保盛・頼盛の五節献上に難癖をつけ、大嘗会の所課を果たさなかった²⁶²など、多少は勝手なところはあったかもしれない頼盛の言動に因縁をつけて解官してしまったのだろうと考える。そして、おそらく頼盛は格好の標的として狙われたと考える。重衡は清盛の時子腹の息子であるから、重衡在任中に尾張を奪ったら清盛の猛反発は避けられまい。一方、頼盛なら「母太郎」という立場にあって平家一門の中では清盛と対立的立場にある。これなら、清盛の反発も少なそうだと狙いをさだめたのではなかろうか。『平家物語』を念頭に置くと、平家は早くから長らく全国を思うままにしていたような印象が強いが、仁安3年（1168年）といえば、鹿谷の謀議の安元2年（1176年）の8年前であり、ひとたびは太政大臣となった清盛は出家してしまっており、平家の後継重盛は幼帝の母方の従兄とはいえ、やっと権大納言で（しかもこの年、病のため権大納言を辞している）、政治の実権は後白河が握り、重盛の上には大臣たちや摂政がいた。仁安3年の時点では、まだ平家は専横権力など持っておらず、平家に相当な覚悟がなければ後白河と事を構えることはできなかったはずである。

²⁶² 五節献上者に対しては、五節のための諸国賦課は宥免されることもある。実際に本当に責められるべき所業だったのかも不明。

後白河は清盛の軍事力が必要だったが、清盛にとっても高倉天皇への後白河の後見は必須であり、この時点で後白河と決裂することはできなかったと考えられる。

後白河としても頼盛の五節に難癖はつけるが、それだけでは理由として奇異であるので、何年も前の大した落ち度ではないものを累積拡大したのであろう。大嘗会などの行事の所課を「辞退」するのはよくあることでもある。本当に看過されざる落ち度に激怒したなら、当然その時に咎めがあっただろうに、何年も前の出来事に改めて激怒するのも不自然だが、後白河の性格もあつたかもしれない。しかし、たとえ解官理由は薄弱なものであっても、治天の君が追放を決めたら、理由の正当性や事の真偽などは問題ではない。臣下は服従するより他はない。治天の君を怒らせたなら、それはひとえに臣下が悪いのである。後白河にとっては、尾張を手に入れるために、頼盛を解官と追放したかったのであり、五節不勤仕や積悪云々などの、表向きの理由は後から「とってつけた」のだらうと考える。しかし、雅通・師長の場合のように、ひと月もたたないうちに頼盛父子を復任させたら尾張は手に入らない。「逆鱗」を演出するためにも、1年にわたる追放となった²⁶³と考える。

おわりに

五節は華やかな行事であつたが、一面、解官などのきっかけに利用されることもあつた。仁安3年（1168年）の五節を巡っては、2つの解官劇があつた。ひとつは内大臣右大将の雅通と大納言左大将の師長が摂政基房の帳台試への扈從を忌避して解官されたというものである。これは、その時の摂政の地位を巡っての反目があり、基房の摂政に扈從の礼をとるのを潔しとしなかったトップクラスの公卿2人が扈從をボイコットしたことによる。基房は面子を潰されて激怒したが、結局、わずかひと月もたたないうちに2人とも元通りの官職に復帰した。

もう一つの解官劇は平頼盛・保盛父子である。仁安3年（1168年）に舞姫を献上した平保盛とその父頼盛が解官された。この頼盛・保盛父子の解官は清盛の企てではなく、尾張という熟国を自分の支配下にとり戻したかった後白河が、本来、責められるべき咎はなかった保盛・頼盛の五節献上に難癖をつけ、日ごろ大嘗会の所課を果たさなかったなど、頼盛の過去の言動に因縁をつけて解官してしまったのだらうと考える。

²⁶³ 頼盛は1年後の還任時は尾張権守になっている。権益の一部だけが戻されたことになる。頼盛は参議になっているので自身が受領にならないのは当然として、息子の保盛も左衛門佐にはなったが、受領に返り咲いた記録は見当たらない。

清盛にとっては一門から尾張国の知行権を失うことになる頼盛の解官は得策ではなかったはずである。仁安3年(1168年)は清盛正室(継室)時子の甥である高倉が即位したばかりで、しばらくは後白河の庇護が必要な時である。高倉政権が安定するまで、敢えて後白河と事を構えたくないはずの清盛は、ギリギリのところで頼盛・保盛の解官(と尾張の知行の喪失)を黙認したのではなかったか。仁安3年(1168年)の保盛の五節献上に関しては、これといった落ち度は見当たらず、頼盛・保盛の解官は、頼盛の平家一門内におけるやや特殊な立場に目を付けた後白河による尾張奪還の企みだったと推測する。

第3章 『平家物語』の時代の五節の献上者たち

はじめに

平安中期には、負担の大きい舞姫献上は昇進とセットにされていた。三上啓子は平安中期までの舞姫を献上した公卿たちと昇進の関係をまとめている（「五節舞姫献上者たち―枕草子・源氏物語の背景」[三上 2001]）。しかし、三上啓子の論文は副題の示すようにカバーするのは『枕草子』・『源氏物語』の時代であり、献上者の検討は長暦3年（1039年）を最後とする。それから1世紀経った『平家物語』の描く時代になって、献上者は変わっていったのか、変わらないのか。『平家物語』の時代の献上者の公卿たちと、新たに毎年2名分を担うことになった受領たちについて考察する。

平安中期までは公卿と殿上人たちが舞姫を献上したが、公卿献上者と殿上分の献上者の人数割合は一定ではなかった。公卿で賄えない部分を弁官や殿上受領たち、あるいは后妃たちが補足的に献上した傾向が強かった（后妃たちの献上については第三部第1章で詳述する）。舞姫4人（大嘗会では5人）のうち2人を公卿（大嘗会は3人）が担当し、2人を受領が献上するように固定されたのは後一条朝のころからであるが²⁶⁴、受領分の献上に関しては初期（10世紀）においては新しく受領になった者が選ばれて献上が命じられる傾向はあった。（先行研究では献上者を公卿分と受領分をわけている寺内浩[2004]、佐藤泰弘[2009]のリストが見やすい。）これら献上者となった受領は平安中期には摂関などの家司が中心で、殿上人であった。

献上受領は新しく受領となったものを中心に選ばれてきたと述べたが、受領の数は全国の国の数であるから66、任期は原則4年²⁶⁵であるから、単純計算で年に平均16前後しか空きは出ない。これをめぐって、熾烈な獵官競争が繰り広げられてきたのである。『枕草子』にも受領の除目の悲哀が描かれる²⁶⁶が、平家が抬頭して、繁栄し、滅亡して行く時代の五節献上者たちは平安中期から変化したのか、変化したならどのような変化だったのか、昇任とセットになっていた公卿たちの献上に変化はあったか、また殿上分を受領たちが引き受けるようになってからの献上者たちはどのような受領たちであったのか、また、『平家物語』とのかかわりはどうであったか、公卿、受領それぞれの献上事情について考察する。

²⁶⁴ 『小記目録』第七に「[長保]五年九月四日、可_レ献_二五節_一公卿・受領等況員数、被_二始定_一事」とある。

²⁶⁵ 陸奥・大宰府は任期5年。

²⁶⁶ 『枕草子』第23段「すさまじきもの」に「除目に司得ぬ人の家」、第133段「つれづれなるもの」に「除目得ぬ人・家」とある。（それぞれ新編60頁、253頁。）

第1節 献上者の負担の増大 舞姫の参入と童女御覧を巡る攻防

各々の献上者の検討を始める前に、前節の解官騒動でも問題となった舞姫参入・童女御覧の負担に関して、九条兼実の童女御覧の顛末を紹介する。

五節も平安後期からことに娯楽性を強めていく。特に、神事とは関係なく、美しく着飾った童女や下仕を眺めるという娯楽にすぎなかった童女御覧も、行事として定着して、いよいよ大掛かりなものになってゆく。そのため、その支度を嫌って、童女御覧に童女を奉仕しない献上者たちも増える。丑の日の舞姫の内裏参入に関しても、衣装や禄などの準備が必要な正式の参入をさせて、簡略に密々に参入してしまう²⁶⁷ことが常態化するに及んで、参入の儀礼を以て参入すべき舞姫と、童女御覧を勤仕すべき献上者をあらかじめ決定しておくようになる。各家日記の五節の参入の日に「〇〇参議」（しばしばこの「議」の字が誤用されるが官職名の参議ではない）とあれば、献上者〇〇は「参入の儀を行って参入した」、あるいは「参入の儀を行うことになっている」という意味であり、『平家物語』の時代の五節の記録に、単に「参入」と付せられている場合には正式な儀礼を行って内裏参入する舞姫の献上者、「御覧」は童女御覧を奉仕する献上者を意味する。（但し、「此日五節参入」とあるような場合の「参入」は参内と同じ）。参入の儀はしばしば主上も見物する。例えば、長承元年（1132年）には加賀守顕広（藤原俊成）の舞姫は参入の儀を以て参入したが、主上と中宮、さらに女院がこれを御覧になった。（御覧の御座が設営されている。）『満佐須計装束抄』にあるように、舞姫の他、童女・下仕など舞姫に従って参入する女性たちも毎日の行事によって衣装が変わる。この衣装調達も大ごとだった。史料にはしばしば、中宮や貴顕から舞姫あるいは童女の装束が送られたことが記されている。勿論、中宮などから装束を賜うのは荣誉としても重要ではあったが、実際の費用負担を減じる意味は大きかった。すべて新調していたら大変な物入りになる。

童女御覧を命じられた献上者の葛藤を示した好例が『玉葉』にある。元暦元年／寿永3年（1184年）の大嘗会では、当時は権大納言兼右大将であった良通が献上を命じられた。良通は『玉葉』の記主である兼実の嫡男で、18歳。兼実と敷地続きの邸に住んでいた。そこで、兼実が多方面に亘って指示を出している。『玉葉』の元暦元年については高橋秀樹の非常に優れた『玉葉精読 元暦元年記』（以下『玉葉精読』と略称する）が刊行されており（高橋秀樹 2013）、その年の朝廷の状況、兼実をとりまく環境などを具さにかつ正確に理解することができる。ここで『玉葉精読』の助けを借りて、兼実が良通の童女御覧を渋々受諾させられた過程と手配の苦心を追おう。五節献上者は良通であるが、父の兼実が良通に代わって朝廷からの使者に返答などを出している。兼実は、そもそも童女御覧に対して批判的であり、後白河にも追従しない

²⁶⁷ 誰も参入の儀礼を行わず全員が暁参した一例としては、元永元年（1118年）がある。この時『中右記』は、「誰も参入の儀を行わないなんて、こんなことは滅多になかった」（「年来未見事也」）と評している。

人物だった。この年元暦元年には一の谷の合戦があり、平家が大敗したが、戦いはまだまだ続いていた年であり、政情は不定、諸国は疲弊していた。『玉葉』同年 11 月 18 日条（割書）に「天下衰弊之比、過差之遊興、太以無所拋坎、御覧及淵酔者、非神事非儀式、只為催興宴也、旁案道理、今年御覧専不可然」とある。兼実「天下が疲弊している今、贅沢な遊興を行うことは全く根拠がないだろう。童女御覧や淵酔は神事でも儀式でもない。ただ宴会をするためのものである。とにかく道理を考えると、今年御覧を行うことはまったくもてよろしくない」²⁶⁸と手厳しい正論を記す。良通が献上を命じられたのは、この年の 8 月 3 日で、8 月 18 日に承諾書を送り、準備を進めてきた。童女御覧については、8 月に他の献上者に命じてほしいと申し上げておいたが、そのまま沙汰がなかったので、勤仕しなくていいのだろうと思っていたところ、いきなり催促が始まった。10 月には費用調達も難しいからと辞退しておいたのに、いよいよ再三再四の催促と譴責が始まった。他にも献上者はいるので、なぜ、九条家だけが童女御覧勤仕を命じられ譴責を受けなければならないのか、と憤懣やるかたない。次節の献上者たちの考察に記すように兼実自身は長寛元年（1163 年）内大臣の時に五節を献上したが、その際は父親（禅閤忠通）の命によって参入も御覧も勤仕しなかったのだ（『玉葉』元暦元年 11 月 18 日条）。

兼実は良通の童女御覧の勤仕を辞退する旨を伝えてはあったものの、11 月 1 日再び院の使いが来て童女御覧の勤仕をするようにと申し入れてきた。兼実はやはり承諾しなかった。そして「計略²⁶⁹その力なきの上、ことまた非拋たり」と日記に書く。10 月 27 日に御覧の勤仕を断った時に「計略なきの子細を申し了んぬ」という言葉を院への返答の中で使ってはいる。舞姫にかかる費用は勿論、童女御覧でさえ、費えが大きかったことは事実であろう。しかし、逃れられそうにないと思った兼実は、永久 3 年（1115 年）に自分の父が献上した例に倣って、童女装束の下賜を願い出たところ、何とか、下賜されることになったので、譴責を受けたということに対しての「面目も立った」として受諾する。そして初めは一具しか下賜できないといていた後白河側から、結局、童女装束 2 揃は送られることになった。院から童女御覧の卯の日用として下賜された童女装束 2 揃は「黄菊汗衫²⁷⁰、<面織物>、紅打柏、紫匂柏四領、青単衣、<謂之竜胆>、白菊表袴、紅三重打袴」であった。しかし、御覧の勤仕を承諾すれば、今度は、童女とともに御覧に臨む下仕も衣装が必要になる。そこで、下仕の参入の日の装束を送ってくれることになっていた摂政基通に、その衣装は参入の日でなく、卯の日の御覧の日にあわせてもらうよう依頼する。それを受けて基通は依頼通り、「萌黄唐衣、黄掛四領、<皆同色>、濃蘇

²⁶⁸ 『玉葉精読』の口語訳による。

²⁶⁹ この「計略」を高橋秀樹は「経済的な計らい」と説明して、「費用をまかなう力がない上に」と口語訳する。

²⁷⁰ 「汗衫」は異体字が用いられている。

芳打掛、紅単衣、紅張袴、村摺裳、釵子、＜在緒＞、」の衣装を送った。

良通は参入の儀の方は命じられていないので、丑の日には舞姫は密参で、五節の一行は正式な衣装は着けず、供奉する男たちも略装で来られるのだったが、兼実の童女と下仕には参入儀の衣装を着けさせることにしており、(摂政のくれる下仕の衣装は卯の日にまわしたので)、参入の日の下仕の衣装は、兼実の負担(「余沙汰」)で(兼実の荘園の所課として)発注された。

「梅唐衣、＜立文＞、裏増紅掛三領、青単衣、濃打衣、濃袴、村摺裳、釵子、＜在緒＞」などである。丑の日(参入の日)用の童女衣装の方は八条女院が調べて送ってくれることになった。

「織物白菊汗衫、濃打衣、裏濃蘇芳柏三領、青単衣、白表袴、＜織物＞、濃袴」の2揃である。卯の日の御覧の童女装束は院から下賜となったものの、院や女院から下賜の使者を迎えて装束を受け取る手続きや儀式も簡単ではない。勿論、使いにも相応の禄(裳・唐衣・濃袴の女装束)が与えられた。

11月13日、兼実は御覧に供する童女と下仕を選ぶが、「所望之輩」を召し集めて選定したとあるから、御覧に出る童女と下仕は所望する者の多い役割だったと思われる。

承安元年(1171年)の五節の参入を描いたといわれる『承安五節図』の写本が残っており、承安のころの参入の様子を伝えるものとして貴重である。舞姫は几帳で姿を隠されながら進むので、画面に筵道を進む姿が描かれている女性たちは童女や下仕たちである。これらの女性たちは勿論、牛車で内裏へやってきたのだが、本論の「序章」(6)「舞姫献上者たちとその負担の大きさ」でもふれたように、この手配も献上者を悩ますもののひとつであった。久安2年(1146年)内大臣藤原頼長の舞姫参入²⁷¹の際には、舞姫と童女2人、^{かしづき}傳8人、下仕4人を内裏へ運ぶのに、舞姫は^{こがねつくり}金作の車²⁷²(借用して手配する)に乘坐、前駆20人と車副6人をつける。童女と傳は上達部用車両5台に分乗、車副は4人。下仕も五位殿上人用の牛車2両に分乗した。童女や下仕は勿論、前駆などの男性随行者に至るまで、しかるべき衣装を着用する。また舞姫の乗・下車に当たっては公卿や献上人たちが扶持にくる。参入の儀となると、これらの車両、人員、衣装等の手配が必要なわけで、大仕事である。献上者たちが、これらの用意をせずに済む密参を好んだのは当然であろう。これらの女性たちは本来、常寧殿の五節所で五節の期間を過ごすものだったが、久安2年には内裏参入(儀礼)が終わると、舞姫と、童女御覧に出る童女・下仕2人ずつを残して、他の女性たちは五節所にも入らず直ちに引き上げさせている(『台記』久安2年11月11日条)。

五節献上の莫大な費用負担を多少でも軽減するために、平安中期には、五節にかかる莫大な

²⁷¹ この年は頼長と越前守俊盛が参入の儀を行い、公教と美作守は密参した。

²⁷² 『小右記』永祚元年(989年)11月12日条にも、実資献上の舞姫一行に、金作車1両、枇榔毛車5両、筵張車2両を用意している。金作車は特別の場合に用いられるもので、『小右記』寛弘8年(1011)9月9日条に大嘗会の御禊に出る女御代の車について「彼日可出金作枇榔毛車者、金作車云無世間、又不可忽造」とあり、すぐには製造できない特別な車であったことがわかる。

財・物の一部を仲間の貴族たちの援助によって調達した（「訪」と称する）。摂関期には家司受領もせつせと主筋にあたる公卿の献上家に奉仕した。中央政府も知らん顔はできない。摂関期には舞姫献上者は申請により、官符の発給を受けて、献上公卿は俸料を受け取ることができた（渡辺誠 2005）。確かに、万寿 2 年（1025 年）に藤原実資が舞姫を献上した際に俸料を受け取っている。この時の実資は、当然ながら配下の受領たちから料物を出させているが、6 名の受領たちは自発的な調進である「志」も加えて送っていること、さらに実資との日常的な関係によって 4 名は全く自発的に「志」を送っているのです、この時の総体としては、官符による調達より、私的な関係に基づいて送られた「志」のほうが大きかったということを遠藤基郎は指摘する（遠藤 1990 b）。渡辺誠によれば、五節献上者に対する俸料は 12 世紀初頭までは順調に機能していたという（渡辺 2005）。これ以降については、遠藤基郎は、中央政府からの支給の比重は低下し、権門献上家が官符を経ずに独自に諸国に所課することで料物を調達したという。献上家による直接の諸国所課も初期には供出依頼の形をとったが、「家による受領所課をめぐる既成事実が蓄積され（中略）社会的正当性を獲得」、「私的調達が明確に国家の保証を獲得し制度化した。但し、権門家はなんでも諸国所課できたわけではなく、所課できる行事は「貴族社会共通の行事に限定されたと考えられ」た（遠藤 1990 a : 57）。五節は貴族共通の行事であるから、献上者は諸国に所課できたことになる。これに対し、渡辺誠は、このような権門家による「諸国所課」には法的根拠がなく、権門の諸国所課と見えるものは事前の御教書による供出依頼であって、根本はやはり中央政府による官符による俸料・請奏による料物ではあったのであり、事前依頼によって遅れがちな官符発給に対して対応することができたという（渡辺 2005 : 48-51）。

五節料物調達の例を『中右記』の長承元年（1132 年）の参議宗能の献上に見ると、料物は国は 23 か国²⁷³から供出を受けたが、守が任地へ下向していたり、同年の五節献上者であったりして、調達不能だった国が 21 か国、未進が 5~6 カ国で、辞退した国も 7 か国あった。この『中右記』の記録は 11 月 23 日辰の日が終わった時点の条であるので、未進は不進であろう。つまり、12~13 か国からは、予定していた料物は受け取ることができなかったのである。宗能（49 歳²⁷⁴）は新任参議でもこの時、父宗忠（71 歳）は内大臣の地位にあった。この時の調達が「権門の諸国所課」であったにせよ、官符による召物であったにせよ、望んだ通りの結果は得られなかったようだ。公卿の献上者たちは、やはり、重い負担にあえぎ、私財の他、俸料、あるいは諸国からの料物などすべてを組み合わせる五節経営を工面するため奔走したのである。

²⁷³ この時、備前守だった忠盛は几帳帷 2 帖を送っている。

²⁷⁴ 『公卿補任』による。48 歳ともいう。

五節献上は命じられれば仕方がないが、その上に加わる参入の儀と童女御覧は何とか免れようと献上者たちも懸命だったのだ。

第2節 『平家物語』の時代の献上者たちの考察 元永元年～寿永4年

本節では元永元年（1118年）から寿永4年（1185年）の献上者について考察する。忠盛が内裏昇殿を果たし、『平家物語』が始動するのは長承元年（1132年）であるが、忠盛が昇殿を悲願としたころから壇の浦での平家滅亡までの五節献上者を考察することとし、元永元年（1118年）から寿永4年（1185年）を含めた。平家が台頭し、栄華を極め、滅んで行った時代である。

『平家物語』の時代の舞姫献上者たちの一覧は本論文末の別表にまとめた。

先行研究者による献上者リストとカバーする範囲

- | | |
|----------------|------------|
| a: 三上啓子（2001） | 978年～1039年 |
| b: 寺内浩（2004） | 919年～1030年 |
| c: 藤本勝義（2008a） | 919年～1016年 |
| d: 佐藤泰弘（2009） | 919年～1154年 |
| e: 服藤早苗（2015） | 919年～1186年 |

服藤早苗が扱う年代も長いので、本論文との差異の検討はしばしば服藤作成のリストが対象になる。（以下「服藤リスト」と略称する。）

調査方法としては、東京大学史料編纂所データベース、摂関古記録データベース、歴博データベースの検索と、「記録年表」（『国史大辞典』）に「この月の記録がある」とされる史料の閲覧などで献上者を探し、献上者として官職が挙げた人物については『公卿補任』、『国司補任』、『国司一覧』（『日本史総覧』）などにある人物名を起点として、人物を追った。

注 ◆印は、先行研究と異なるもの（誤記と思われるものも含む）、あるいは「揺れ」のあったもの。

★印は、本論文の新しい追加。

年齢は特に断りがないものは五節の献上年の年齢。

項目名に挙げた献上者名は本論筆者が比定できたものに関してはその名を挙げた。比定にまで至らない年に関しては原史料にある官職などを使用した。

献上者たち（編年）

元永元年（1118 年）

<公卿>

① 帥中納言源重賢

太宰の権帥で権中納言の重資（74 歳）が献上した。重賢は長く参議を勤め、永久 3 年（1115 年）、つまり献上年の 3 年前の 4 月 28 日に権中納言となっていた。

<受領>

② 尾張守源師俊

正五位下右少弁尾張守源師俊は前々年の永久 4 年（1116 年）に舞姫を献上したばかりであったが、元々献上者と定められていた讃岐守顕頼が俄かに服となり、すぐに代替もなく、再度の献上となった。源師俊は永久 3 年（1115 年）12 月 16 日に尾張守に任ぜられた²⁷⁵。しかし同じ受領が 2 度も五節を献上するような事態は非常であるので、後代これを例としないようにと『中右記』記主宗忠は注意を喚起する。舞姫献上が重い負担であり、受領でも 2 度の献上は例外であったことを示す事例ともいえよう。この年は異例の献上者となって余裕がなかったのか、4 人の誰も参入の議を行わない暁参りとなったが、『中右記』は、誰も参入の儀を行わないなんて「年来未見事也」と評している。

③ 能登守藤原基頼

藤原基頼は永久元年（1113 年）正月ごろ高階時章の後に能登守になったと思われる。能登守になって約 6 年が経っている。その前は康和 5 年（1103 年）11 月 1 日陸奥守になり、天永 2 年（1111 年）12 月 2 日まで在任が確認される。

④ ◆ 越中守源俊親

この年は公卿 1 人に受領 3 人という変則的な献上となった。『中右記』によると、当初はもう 1 人の公卿分として源大納言雅俊が決まっていたのだが、7 日間の服となり、辞退となった。そこで越中守源俊親に替えが命じられた。源俊親は以前、若狭守時代に五節を献上している²⁷⁶が、この年は他に代替させられる人もなくて俊親の献上となった。元若狭守の俊親は永久元年（1113 年）12 月 17 日に越中守に任ぜられた。俊親は保延元年（1135 年）4 月 12 日にも見任している。「服藤リスト」の俊頼は誤記であろう。

²⁷⁵ 『公卿補任』の長承 2 年（1133 年）任参議の師俊の尻付による。

²⁷⁶ 俊親は嘉承 2 年（1107 年）に若狭守に見任しているが、舞姫献上の年は不明である。

元永 2 年（1119 年）

<公卿>

① 新中納言藤原実隆

従三位藤原実隆（41 歳）はこの年の正月 24 日権中納言となったので、新中納言の献上である。実隆は権大納言藤原公実の長男。参議になったのは天永 2 年（1111 年）。

② 宰相中将源雅定

正四位下右近中将源雅定（26 歳）はこの年の 2 月 6 日に参議となった。新参議の献上である。雅定は右大臣源雅実の次男。

<受領>

③ 近江守高階重仲

この時の近江守は高階重仲で、寛治 6 年（1092 年）には出雲守であり、永長元年（1096 年）11 月 20 日まで在任が確認される。従四位下重仲はこの年 7 月 30 日に近江守に任ぜられたが、あいにく翌年保安元年（1120 年）9 月 25 日に卒去する。

④ 備中守藤原重通

備中守藤原重通は、権大納言宗通の五男で、天永元年（1110 年）12 歳で叙位。永久 2 年（1114 年）16 歳の正月 22 日に院分で備中守となった。重通はこののち保安 3 年（1122 年）正月 23 日まで備中守であるので、備中守を重任したことになる。重通は少将・中将や蔵人頭を経て長承 3 年（1134 年）従三位権中納言に昇る。公卿の子も国守となって一門の経済基盤に貢献する。

保安元年（1120 年）

<公卿>

① 権大納言藤原仲実

『中右記』（史料大成本²⁷⁷）には「新大納言仲実卿」とあるが、藤原仲実が権大納言になったのは 5 年も前の永久 3 年（1115 年）4 月 28 日であるので、新大納言とはいえない。（保安元年に転正もしていない。）保安元年には源有仁が上臈 7 人を超えて権大納言になっているが、大納言の官職にある仲実と有仁の混同は考えにくいので不審である。「新大納言」は、権大納言が誤写されたものとする²⁷⁸。藤原仲実は大納言藤原実季の三男で寛治 6 年（1092 年）に参議と

²⁷⁷ 大日本古記録『中右記』にはこの日の記録はない。

²⁷⁸ くずし字例を次に挙げる。

なる前は、16歳で丹後守をはじめ、備中守など受領を経験している。

② 治部卿源能俊

治部卿能俊は従二位権中納言兼治部卿源能俊（51歳）である。大納言源俊明の子で、康和2年（1100年）に参議になっていた。能俊が権中納言となったのは天永2年（1111年）正月23日だから9年前である。元永元年（1118年）7月30日従二位に昇叙されている。献上の翌々年保安3年（1122年）12月17日に大納言（権）に昇任する。

この年、新たに参議・中納言に昇進した者はいない。献上者選びは難航したのだろう。

<受領>

③ 加賀守藤原実能

藤原実能は正四位下右近中将で中宮権亮。元美作守（天永2年正月23日～）だったが、元永元年（1118年）12月28日に加賀守に遷任された。献上の翌年の保安2年（1121年）2月29日従三位に叙せられて加賀守を去った。元永元年に鳥羽中宮（後の待賢門院）璋子の同母の兄。

④ 讃岐守藤原顕能

藤原顕能は永久2年（1114年）正月22日に17歳で備中守となった。顕能は天永3年（1112年）7月23日から讃岐守であった。舞姫献上のすぐ後の保安元年（1120年）12月14日には備前守に遷任した。院の近臣で「夜の関白」の異名をとった藤原顕隆の息子。この後も大治2年（1127年）12月20日越前守、長承元年（1132年）4月4日美作守など、受領を歴任した。

保安2年（1121年） 記録なし。

保安3年（1122年）

<公卿>

① 参議藤原顕隆か

この年の貴族の日記類に献上者の名は見出せない。この年正月に新大納言1人と新中納言が2人、12月（五節直後）に4人の新権大納言と5人の新権中納言が誕生する。昇任者のいずれ

下記の左3つが「権」と最右一つが「新」と解説されている。



かが献上したのであろう。服藤は『兵範記』の仁安2年（1167年）10月24日条²⁷⁹から参議藤原顕隆を挙げる。顕隆（51歳）は献上の年保安3年の正月23日参議になった。そして献上の直後12月27日には権中納言になるので、献上者としてはふさわしい。

保安4年（1123年） 記録なし。

天治元年（1124年）

<公卿>

① 権中納言源雅定

史料大成本『中右記目録』の記載は「新中納言雅実」とある。雅実という公卿は天治元年には源雅実がいるが、中納言ではなく従一位太政大臣でこの年の7月7日に既に出家の身となっている。他に雅の字を持つ中納言は天治元年及びその前後には見当たらないので、これも「新」は「権」の誤写で、実も「定」の誤写とみて、権中納言源雅定（31歳）と比定する。『長秋記』には参入の日に宰相中将雅定へ扇を送ったという記述があるので間違いないと思われる。雅定は保安3年（1122年）12月21日権中納言となった。雅定は参議となった5年前の元永2年（1119年）にも献上している。

② 参議左大弁藤原為隆

『中右記目録』は献上者を右大弁為隆と記すが、天治元年『公卿補任』に載る為隆は右大弁ではなく左大弁である。これも書写段階での左と右の混同と考え、参議左大弁の藤原為隆と比定する。為隆は保安3年（1122年）、献上2年前の12月17日に参議となり、12月21日に左大弁を兼ねた。為隆は保安2年（1121年）12月25日には遠江守を辞退して息子の憲方を出雲守に申任している。

<受領>

③ 越前守平忠盛

この献上で、忠盛は内裏昇殿を望んだが、許されず、がっかりしていたことを、本章第1節「忠盛の昇殿の悲願」で述べた。第1節（1）「受領忠盛」で示したように、保安元年11月25日に伯耆守から備前守に遷任して4年目の献上であり、越前を重任して3年後備前守に遷任する。

保安元年（1120年） 伯耆守 11月25日 遷越前守 （元伯耆守）

²⁷⁹ 「加之保安三年顕隆卿献五節之時」とある。

保安元年（1120 年）	越前守	11 月 25 日	補任
天治元年（1124 年）	越前守	11 月 6 日	見任
大治 2 年（1127 年）	備前守	12 月 20 日	補任

④ 安芸守藤原為忠

受領分のもう 1 名の献上者は藤原為忠である。為忠が安芸守に任ぜられたのは、元永元年（1118 年）正月 18 日で、この舞姫献上からすぐ、天治 2 年（1125 年）正月 15 日には参河守に遷任している。『中右記目録』は 11 月 16 日の五節参入に続いて 17 日に「安芸守為忠昇殿」と記す。為忠は確かに五節参入の翌日に内裏昇殿を許されたのである。

天治 2 年（1125 年）

<公卿>

① 中納言源頭雅

正三位源頭雅は献上の 3 年前の保安 3 年（1122 年）正月 23 日に権中納言となり、12 月 27 日には転正した。頭雅は故右大臣源頭房の息子。

② 左宰相中将藤原宗輔

宗輔の任参議はやはり献上 3 年前の保安 3 年正月 23 日。献上の年には 49 歳。10 月 21 日に従三位に昇叙された。故権大納言宗俊の次男。この後 86 歳まで長生きして太政大臣まで昇りつめる。宗輔は笛の名手で、堀河天皇の召しで一晩中笛を吹いて夜を明かしたという話が『今鏡』74 段「堀河天皇笛を好む事」（竹鼻 1984：㊥296）に載る。宗輔はしばしば御遊にも参加して笛・琵琶を演奏している。

<受領>

③ 加賀守藤原季成

藤原季成は保安 2 年（1121 年）4 月 14 日（あるいは閏 4 月 11 日）から加賀守。それ以前は周防の介。周防には永久 5 年（1117 年）から守として源清実が見任しているので、やはり守ではない。永久 2 年（1114 年）4 月 3 日任尾張守と見えるが²⁸⁰、尾張守は天仁元年（1108 年）正月 24 日から永久 3 年（1115 年）12 月 16 日まで高階為遠であるので、季成は尾張では権守であったかもしれない。『平家物語』には季成は巻第四「源氏揃」（旧大系㊥278 頁）に「加賀大納言季成卿」として以仁王の外祖父として名前が登場する。

²⁸⁰ 『公卿補任』保延 2 年（1136 年）11 月 4 日季成の任参議の尻付による。

④ 越中守源顕俊

『中右記目録』の「越中顕俊」は源顕俊と考える。源顕俊は『国司補任』によれば、元永2年(1119年)7月30日に任河内守であるが、元永3年以後の河内守の名はなく、保安4年(1123年)2月14日の河内守は藤原姓の人物であるらしいので、元永3年以降保安4年までに顕俊は河内守を去っていたことになるが、いつ越中守になったのかは不明ではある。「顕俊」の名(姓はない)という越中守は、天治2年11月22日、つまり、この五節の献上者名を伝える『中右記目録』のみである²⁸¹。

大治元年(1126年)

<公卿>

① ◆ 中納言

『中右記目録』には中納言としか記載がない。この年、あるいは前年に中納言(権)に昇任した者はいない。保安3年(1122年)に源顕雅、藤原俊忠、藤原実行、藤原顕隆、藤原長忠、藤原実能、源雅定が新中納言となったが、このいずれかが献上したとして、大治2年(1127年)の宗忠の記述を消去法で顕隆、実能、実行と既に献上した顕雅、雅定を外せば、中納言となつてから献上者記録に名が見えないのは藤原俊忠、長忠、実隆である。

服藤はこの中納言を「実隆(カ)」とする(典拠は『中右記目録』)が、これからだけでは実隆と比定できない。保安3年(1122年)にも実隆は新中納言ではなかった。実隆は翌年10月に死去するが、この大治元年(1126年)に献上して、翌年死去した可能性はある。俊忠、長忠も保安3年以来献上の記録は残っていないが、次年の『中右記』大治2年10月16日条に「所残四五人、去年去々年献舞姫也」のうちの1人で天治元年(1124年)かその翌年の献上者だった可能性もあり、この中納言の特定は難しい。

<受領>

② 甲斐守源雅職

源雅職が甲斐守となったのは保安元年(1120)年12月24日である。甲斐守に遷任してくるまで雅職は永久5年(1117年)9月ごろから相模守だった。献上の年以後、大治3年(1128年)正月24日に元和泉守の藤原範隆が甲斐守に任ぜられるまで、『国司補任』に甲斐守の名はないので雅職がいつまで甲斐守だったかは不明だが、雅職がまる7年間甲斐守だった可能性は高い。雅職は『満佐須計装束抄』を著した雅亮の父。

²⁸¹ 他姓の顕俊という名は『国司補任』には拾われていない。

大治 2 年 (1127 年)

<公卿>

① 権大納言藤原宗忠

「下官俄献五節舞姫」と『中右記目録』にあるので、『中右記』の記主である藤原宗忠の献上である。この時、宗忠は 66 歳で正二位権大納言だった。「^{にわか}俄」というのは、献上を言われたのが、10 月 16 日だったのである。この年は、服喪者が多く、献上者選出は難航。宗忠は貧乏を理由に何とか辞退しようと画策した。

頭中将送書札云々、五節舞姫可献之由御気色者、進返事云、謹承了、但期日近々、万事不叶歟、辞有恐、欲献無叶、(中略)近代右府、藤大納言、皇后宮大夫、民部卿、<已上 4 人四条宮服日数中>、源中納言雅顕兄弟假、新中納言雅定<重服>、左衛門督通季、右衛門督実行、<以上三人兄服>、所残四五人、去年去々年献舞姫也、自本中納言一、参議三欠也、此四カ年不被成、(中略)、数度献五節、貧道人被仰下条、誠以難堪(後略)

(『中右記』史料大成本 大治 2 年 10 月 16 日条[大日本古記録にこの日の記録はない])

この年の公卿分の献上者には左衛門督通季と右衛門督実行が定められていたのだが、この日 10 月 16 日侍從中納言実隆が薨去した。実隆は通季と実行の兄であったので、2 人は献上者から外れることになる。他に(献上者候補となりそうな)左兵衛督権中納言実能も実隆の兄弟である。「右府、藤大納言、皇后宮大夫、民部卿」は「四条宮服」とあるが、四条宮とは、太皇太后藤原寛子(頼通の娘で後冷泉の後)で、この年の 8 月 14 日に 92 歳の大往生を遂げていた。大治 2 年の中納言 6 人のうち 5 人が服、残り 1 人の中納言顕隆は既に保安 3 年(1122 年)に献上している。参議 5 人の中では藤原宗輔が天治 2 年(1125 年)に、藤原為隆が天治元年(1124 年)に献上している。残りの 3 人、源師頼、源師時、藤原伊通については残っている記録には見えないが、宗忠が「残る所の 4~5 人は去年、去々年舞姫を献じている」という 4~5 人の中に入っているのだろう。結局、この年の献上が急遽、自分と能俊に振り替えられるのは仕方がないことと宗忠も観念はしたようである。宗忠は、「数度献五節、貧道人被仰下条、誠以難堪」と、貧乏人にとって五節を何度も献上するのは誠に耐えがたいことだと書き、懸命に辞退しようと摂政(忠通)に直訴したようであるが、17 日の夕方、摂政からやはり献上せよ「猶可進之由」の仰せが頭中将を介してもたらされた。そこで再び摂政のところへ行き、童の装束を賜りたいと申し出たところ、許しがあって喜んだ(「仍参殿下、童装束可調給由、申請候処、有恩許、誠為悦畢」『中右記』大治 2 年 10 月 17 日条)。

また、五節参入の日は舞姫教習のための小伊与という舞師を朝迎えて、夜に帰す際、舞師は通常の禄以外に房の装束を故実と称して皆持って行ってしまった、と嘆いている。（「今朝迎舞師<小伊与>、於侍廊令習舞々姫、晚景令帰之間口例禄之外、房装束皆以放取了、称故実、又不制止也、大略近年作法者」。）「房」に「女敷」という傍書があり、傍書は女房装束のことかといっているが、この「房」は部屋で、「装束」は調度品のことであろう。舞師たちは調度品の一切切を禄と称して持ち帰ってしまったのである。宗忠は献上は3度目であるが、舞師の調度品持ち帰りについては、ここで明らかに驚いているから、前2回にもあったようには見えない。経験があれば、それなりの心の準備はしていただろう。宗忠は調度持ち去りは近年の作法と言われたようだが、『小右記』長元5年（1032年）の五節²⁸²にも類例が見える。但し実資から舞師が持ち去った調度は常寧殿五節所で使われたもので、内容も畳や几帳の類だった。（盥に関しては実資家の男の下人と争っている。）しかし、この年、宗忠は自邸で教習させているのだから、宗忠邸の部屋の調度一切を持ち去ってしまったことになる。『源氏物語』の中で、故常陸宮の邸に残る古くても由緒がありそうな調度品を、貧窮した娘の末摘花から購入しようと半可通が持ち掛ける場面があるが（「蓬生巻」新編②328頁）、上級公卿の家の調度品は高値で売れたのだろう。すべての舞師が「持ち帰り」をしたわけではなさそうだが、たった一日の教習でここぞと稼ぐ舞師はしたたかである²⁸³。

五節の終わった18日の日記に宗忠は、3度も献上させられることになったぼやきをふたたび書き残す。「下官献上五節三ケ度、康和二年、<参議左大弁時>、永久二年、<別当左兵衛督左兵衛中納言時>、今度大治二年大納言時、三ケ度献、舞姫、頗難有事也」。舞姫献上は公卿にとって大変大きな負担だったのだ。

② 治部卿源能俊

従二位治部卿源能俊（57歳）も権大納言だった。権大納言となったのは宗忠と同年同日保安3年（1122年）12月17日だった。能俊も既に一度、保安元年（1120年）に五節を献上しているが、この年は、上記の宗忠の項で詳述したように、当初予定の献上者服喪のため、10月16日になってから、替えとして押し付けられた献上であつた。この献上が大きく影響したのだろうが、能俊の息子の源俊雅は五節参入の日に昇殿を許された。

大治2年には当初予定者の服のため、代替の献上者選びが難航し、5年も前に同日に大納言となった2人に押し付けられたのである。宗忠が「万事不叶敷」など言い立てたかいがあつてか「治部卿<能俊>、下官、姫命令暁参」と、代替の2人はとにかく、参入の儀は免れたよう

²⁸² 実資の献上ではなく、婿の兼頼の献上であつたが、実資がせっせと援助した。

²⁸³ 舞師たちの禄については『補注5』『舞師の禄の内容』を参照。

である。宗忠は前述のように童装束を摂政からもらうことになっていたはずだが、結局この2人は童御覧を勤仕していない。童を出したのは尾張守と越後守だけである。

なお童御覧の日、服喪中のはずの右大臣、藤大納言経実、民部卿忠教、左衛門督通季、右衛門督実行が御前に伺候している。右大臣と2人の大納言の太皇太后の服喪の詳細は未調査であるが、通季・実行は兄弟の服であるから服喪令では3か月のはずである。童御覧は神事ではないが、新嘗祭祭祀が終わらないうちの内裏参入は興味深い²⁸⁴。但し、童御覧の後、頭中将以下20人の貴族たちが斎院に行く時には「服日数中輩不参」とある。（但し、藤大納言と民部卿は参入している。）

<受領>

③ 藤原長親か

『中右記』11月15日条に「如法参入」（定例の儀礼にのっとり）参入した2人の舞姫のうちの1人の献上者の記載は単に「尾張」だけである²⁸⁵。大治2年（1127年）の尾張守は、『国司補任』は（『二中歴』からとして）正月19日に藤原長親が重任されたとする。「国司一覽」も『二中歴』からとして大治2年正月19日の長説の重任を載せるが藤原長説と書く。『新加纂録』所収の『二中歴』（第十「当任歴」）は「尾張藤原長親＜大治二年正月十九日任＞」で、「重任」としていないが、尊経閣善本影印集成の『二中歴』の該当箇所には重任の文字がある。長親か長説についてだが、本論文筆者は、くずし字データベースを参考にして「親」と読む。献上翌年の大治3年（1128年）の守の名は『国司補任』・「国司一覽」にはなく、大治4年（1129年）2月24日には尾張守は長親ではなく顕盛である。（「尾張守顕盛朝臣」。『長秋記』裏書。）これより前、保安4年（1123年）6月10日には長親は備中守見任である（『百鍊抄』）が、同年10月1日には長親は既に備中守ではない。（藤原敦兼が守として見える〔『国司補任』〕。）五節より後であるが、天承元年（1131年）正月19日には長親は伯耆守に見任している。長親以前の尾張守は保安3年（1122年）11月1日に藤原敦兼が守に見任している。『二中歴』は編纂物で、成立は鎌倉末期ともいわれる。典拠は『二中歴』のこの一か所だけであるが、（重任にせよ、遷任にせよ）この年の献上者の尾張守は正月から任に就いていた藤原長親ということになる。藤原顕盛は翌々年の大治4年2月24日までのいつかに尾張守になったのであるから、可能性は低いが顕盛かもしれない。

④ 越後守藤原政教

藤原政教（雅教）が献上した。政教は元永元年（1118年）正月6日わずか5歳で叙爵（禎子

²⁸⁴ 服喪中の参内の装束も関心あるが未調査。

²⁸⁵ 『中右記』大治2年（1127年）11月の記録は史料大成本のみで、大日本古記録本には見当たらない。

内親王給)。保安4年(1123年)正月22日に11歳で越後守に任ぜられ(院分)、大治4年(1129年)12月25日に遠江に遷任した。越後は新叙とみられるが、父親の参議家政は、既に永久3年(1115年)に早世している。母は権中納言顕隆娘。政教はこの後いくつかの国の受領を歴任した後、保元の乱で功を立て、保元元年(1156年)9月13日に参議兼左大弁となって公卿に列し、保元3年(1158年)従三位権中納言となる。

大治3年(1128年)

<公卿>

① 右大臣藤原家忠

大治3年の右大臣は藤原家忠(76歳)である。家忠は保安3年(1122年)12月17日、源雅実の任太政大臣の後を受けて右大臣となった。保安3年には5人の新権大納言と7人の新権中納言が誕生した。それで保安4年(1123年)以降(この年も含めて)新任の参議・中納言がない。ここ数年は献上者選びが難航したはずで、右大臣の献上となったのだろう。

② 民部卿藤原忠教

権大納言兼民部卿藤原忠教が献上した。忠教は前摂政関白太政大臣藤原師実の五男。忠教が権大納言となったのは献上の6年前、大量昇任のあった保安3年12月17日。保安3年の参議・新中納言の昇任者で未役の者は順繰りに献上していると思われるが、前年の大治2年は兄の服喪中であつた。

<受領>

③ 美濃守藤原顕保

顕保が美濃守に任ぜられたのは天治元年(1124年)12月28日。天承元年(1131年)12月27日まで在任したと思われる。美濃守以前は土佐守(永久5年3月12日には見任)。

④ 備後守藤原時通

藤原時通は大治2年(1127年)12月7日任備後守。天承元年(1131年)正月19日までは在任が確認される。時通は保安元年(1120年)因幡国守となった。17歳以下と考えられる。因幡は院分で藤原宗通が知行主だった²⁸⁶。

大治4年(1129年)

²⁸⁶ 寺内浩(2004:150-151)の少年受領の表による。『朝日人名歴史辞典』「藤原宗通」にも「『中右記』は一家で備中・因幡を知行し、家門は繁盛していると評している」とする(吉田早苗)。

<公卿>

① 皇后宮大夫大納言藤原能実

藤原能実が権大納言となったのは保安3年（1122年）12月17日、5人の新大納言と7人の新中納言の誕生した年である。それ以来、公卿の定員になかなか空きがでていないので、未役の公卿として選ばれたと思われる。能実^{ママ}は故摂政関白太政大臣師実の息子。

② 左衛門督中納言藤原実行

藤原実行もまた保安3年（1122年）新権中納言昇任者の1人である。五節未役によりこの年の献上となったと考えられる。実行は崇徳天皇の母である待賢門院の異母兄であり、久安5年（1149年）に右大臣、久安6年（1150年）に太政大臣に至った。

<受領>

③ ◆ 因幡守藤原通季（通基）

『中右記』の11月21日五節参入の日の献上者名では「因幡^{ママ}道季」とあるが、同じ史料大成本『中右記目録』では21日「五節参入」では「通季」である。『長秋記』でのこの年の五節献上者名は、「因幡守通季」となっている。『中右記』11月21日条の道季は、音による誤記か誤写であろう。しかし、この五節から2年前の『中右記』大治2年（1127年）12月7日条の小除目では「因幡守藤通基、＜元武蔵守＞」とあり、大治2年の武蔵守としての名は通基である。

『中右記』は、五節参入4日後の節会の日（辰の日）である11月24日条にも「因幡守通基」と記載する。また、この五節の3年後の長承元年（1132年）正月19日条の『中右記』には「重任因幡、備前、武蔵三ヶ国」とあり、守の姓名はないが、因幡守が重任されている。長承元年（1132年）の因幡守は『中右記』で藤原通季となっている。

これらを考え合わせると、通基は通季と改名したのではないかと推測される。そして改名の時期は五節献上の前であろう。通季という名の人物は同時代にもう1人いて、待賢門院^{あきこ}瑋子の同母兄に藤原通季であるが、この通季はこの五節の前年の大治3年6月17日に左衛門督権中納言で薨じている²⁸⁷。あるいは権中納言の薨去によって、通基は通季を名乗ることに遠慮がなくなった改名でもあったのだろうか。通季の因幡守在任は大治5年6月24日まで確認されている。

④ 丹後守源資賢

大治4年の丹後守は『国司補任』では源資賢である。『中右記』は、この年大治4年3月12

²⁸⁷ 『尊卑分脈』では子や孫に通基という名はない。

日条及び閏7月19日に「丹後守資賢」と書き、また、11月24日齋院の御神楽でも「笛丹後守資賢」と書いているので、この年の献上者は源資賢と断定してよかろう。資賢は今様を能くしたことから後白河院に気に入られ、権大納言まで昇った。後白河の側近だったので治承3年（1179年）の政変では一時追放されたが、翌年には許された。『公卿補任』の資賢が永暦2年従三位に叙せられた時の尻付には「丹波守」となっている。資賢は天治元年正月22日12歳で従五位下丹後守となった。天承元年（1131年）12月24日源資賢は参河守に遷任する。（父は源有賢で功により永久6年〔1118年〕に三河守となっている。）父の有賢は大治4年（1129年）現在は阿波守で、従三位となって公卿に列するのは保延2年（1136年）である。

大治5年（1130年）

<公卿>

① 新中納言藤原長実

長実は献上年の10月5日に任権中納言（56歳）。白河院の近臣で諸国の受領を歴任した後、公卿に列し権中納言まで昇った。長実の没後、娘の得子が鳥羽院の寵姫となって近衛天皇の母となったことから、のちに正一位左大臣を追贈された。

② 宰相中将藤原忠宗

正四位下藤原忠宗は長実と同じ除目で献上年の10月5日参議となった。ついで11月5日に従三位に昇叙した。右大臣家忠の長男で新参議の献上であった。

<受領>

③ 土佐守藤原家長

藤原家長は天治元年（1124年）に土佐守となり（元美濃守）、献上の前年大治4年に土佐守に復任している。献上の翌年の天承元年（1131年）の12月27日に備中守に遷任した。家長は、白河院の寵臣であった藤原家保の息子で、大治5年現在父の家保は伊予守である。受領は2か国を兼ねないから、知行することになった国の守には息子を申任する。家保のもう1人の息子家成²⁸⁸も大治5年10月27日から播磨守である。この後、家長は保元の乱で忠実・頼長に従って失脚した。

④ 甲斐守藤原範隆

藤原範隆が甲斐守となったのは大治3年（1128年）正月24日でそれまでは和泉守だった。

²⁸⁸ 保延元年（1135年）に献上者となる。

範隆はこの後、長承2年（1133年）8月27日に甲斐守で卒する。

天承元年（1131年） 記録なし。

長承元年（1132年）

この年、平忠盛は得長寿院の成功によって念願の内裏昇殿を許された。初めて昇殿して参加する五節の行事の夜に、殿上闇討事件が起こるのであるが、この年忠盛が正式の参列者として初めて目にする舞姫を献上した人たちを考証する。

<公卿>

① 参議藤原宗能

この年（長承元年）の宰相の中将は2人いた。参議で左中将の宗能と参議で右中将の藤原成通である。宗能も成通もは献上前年の天承元年（1131年）12月22日に任参議になっており（中将如元）、献上者となるにふさわしく思われる。『兵範記』のこの献上年の長承元年11月20日条の五節参入の記事には献上者たちの列記はなく「戌剋加賀五節参北陣」から、加賀が五節を献上したことがわかるのみである。『兵範記』にはこの他は童御覧の日などにも献上者名は見られない。『中右記』も記述は簡略で、11月20条の五節に関する記述は「今夕五節参入、此宰相中将、左大弁実光、能登守兼暁参、加賀守頭広一所如法参入、依御物忌無御出云々、今夜女院令入内給、依五節御覧也」で、献上者の1人が「此宰相中将」であったことがわかる。さらに献上者宰相中将が還って来たという記述があるので、「此宰相中将」は「此处」の宰相中将つまり、敷地続きに住んでいた息子の宗能と判明する。宗忠の『中右記』の11月23日条に五節の料物の調達先の一覧がある。宗能は49歳であったが、父である内大臣宗忠が助力した様子が窺われる²⁸⁹。

② 左大弁藤原実光

参議左大弁の藤原実光（65歳）である。実光は献上前年、天承元年（1131年）12月22日に参議に任ぜられているので、参議として初めて迎える五節での献上である。

つまり、この年、長承2年の公卿分献上者は2名とも前年に参議となった新参議たちの献上であった。

<受領>

²⁸⁹ 前節「献上者の負担の増大」でも言及した。

③ 能登守藤原季兼

この時点の能登守は従五位下の藤原季兼で、能登守になったのは大治2年（1127年）2月24日（または26日）。献上の翌年の長承2年（1133年）5月6日遷阿波守。季兼も『平家物語』には直接登場しない。『平家物語』巻第八「法住寺合戦」で、義経らが一時滞在した熱田の大郡司（大宮司）が藤原季兼の子孫であると頭注で紹介されている（旧大系⑩161頁）。

④ 加賀守藤原顕広

従五位下加賀守藤原顕広が献上した。顕広とは歌人俊成のことである。藤原（葉室）顕頼の養子となり、54歳で実父の御子左家に戻って俊成と改名するまで顕広と称した。加賀守顕広一所だけが参入の議を行った。この年、長承元年閏4月4日に俊成は任加賀守（元美作守。美作守になったのは俊成10歳²⁹⁰の大治2年〔1127年〕正月19日）。養父顕頼は前年の天承元年12月22日参議となったが、それ以前の保安4年（1123年）4月5日から大治2年正月19日まで丹波守だった。国守の任期は一期4年だが、俊成は長承元年（1132年）4月4日まで美作守を延任して、五節の年の4月に加賀守を得ていたことになる。保延3年（1137年）12月16日遷遠江守。

長承2年（1133年） 記録なし。

天承元年（1131年）に新参議あるいは新中納言となった者の中で、長承元年（1132年）、長承3年（1134年）、保延元年（1135年）に献上者として名が挙がっていない者が献上した可能性は高い。天承元年の新参議は藤原宗能1人だけだが、宗能は翌年の長承元年に献上した。天承元年の新中納言は藤原忠宗と源雅兼の2人だが、忠宗は参議になった大治5年（1130年）に献上者となったばかりである。記録は残っていないが、源雅兼あたりに献上が命じられた可能性は高いだろう。

長承3年（1134年）

<公卿>

① 別当藤原顕頼

別当顕頼とは従三位権中納言檢非違使別当藤原顕頼（56歳）で俊成の養父のことである。顕頼はこの献上年の2月22日に任権中納言。新中納言ではあるが、前々年には養子の俊成が加賀守として受領分を献上しており、俊成はその時、15歳だったのだから、実際の経営は顕頼だ

²⁹⁰ 寺内浩（2004：150-151）の表による。

ったはずで、しかも舞姫は顕広一所だけが参入の儀を行ったとあるから²⁹¹、大変重い負担である。

顕頼は『平家物語』巻第三「法印問答」（旧大系④252 頁）にその名が登場する。重盛が死んで清盛が悲嘆に暮れるころ、後白河院は八幡へ御幸して、音楽も催し、重盛の死に少しも哀悼の意を示さない。清盛がそのような後白河を批判して、賢帝というものは賢臣を惜しむものだといって、鳥羽院は信頼していた臣下が死んだ時、その死を悼んで八幡行幸を延期して、御遊もしなかったとして、鳥羽院が悼んだ賢臣としてこの顕頼民部卿をあげた。

② 修理大夫藤原家保

従三位修理大夫藤原家保は、大治 5 年（1130 年）献上の土佐守家長の父で、白河院の寵臣。献上年である長承 3 年（1134 年）2 月 22 日参議となった。新参議の献上である。新参議の家保自身は大治 4 年（1129 年）から伊予守であったが、天承元年（1131 年）12 月 24 日守を止められたが、1 か月後の長承元年（1132 年）正月 26 日に従三位に叙せられ公卿となった。（公卿は自身では受領を兼ねないのが常例である）。しかし、息子たちを受領にして、公卿としては裕福だったと推察される。

この年の献上公卿 2 名はそれぞれその年の新任の権中納言と参議であった。

<受領>

③ 能登守藤原季行

藤原季行は大治 5 年（1130 年）に阿波守となり、長承元年（1132 年）5 月 6 日、季兼の後に能登守となっていた。19 歳と考えられる²⁹²。保延 6 年（1140 年）4 月 7 日因幡守に任ぜられるまで、能登守を続けた。長承元年（1132 年）～保延 6 年（1140 年）を重任したことになる。父は敦兼で諸国の受領を歴任した。敦兼も季行も筆算の名手であった²⁹³。季行は、平治元年（1159 年）には従三位となり公卿に列した。季行の娘が兼実の長子良通の母であるため、季行は兼実

²⁹¹ 『中右記』11 月 20 日条は「今夕五節参入、別当顕頼、<参入>、能登守季行、<暁参>、長門守顕盛、<参入>、修理大夫家保、<暁参>」であるが、『長秋記』11 月 20 日条は「晴、五節参る、別当、顕頼、長門参入、家保、師能暁参云々」とあり、暁参したのは季行でなく「師能」という名前がある。この年は常年だから、舞姫は 4 人である。師能は不審。

²⁹² 寺内（2004：150）の「少年受領」の表から計算。

²⁹³ 敦兼が音楽によって妻の心を取り戻したという逸話が『古今著聞集』319「刑部卿敦兼の北の方、夫の朗詠に感じ契りを深うする事」（新潮日本古典集成④381—382 頁）に見える。敦兼妻が、ある年五節を見てから夫の醜顔が嫌になって疎遠にしたのを敦兼は嘆いて、筆算を時の音にとりすまして吹いて、朗詠をしたところ、離れていた妻の心が夫に戻ったという話。但し、この時敦兼がくり返し「うたった」という「ませのうちなるしら菊も、うつろふみるこそあはれなれ、我らがかよひて見し人も、かくしつこそ枯れにしか」は 7+5、8+5、8+5、7+5 の形式で今様である。

の九条家と親密であった。

④ 長門守藤原顕盛

藤原顕盛（顕成とも書かれる）は大治5年（1130年）正月28日長門守に任ぜられ、長承元年（1132年）11月23日には（顕盛が）見任している（『中右記』）。保延4年（1138年）正月22日に備後守となった。

保延元年（1135年）

<公卿>

① 按察権大納言藤原実行

藤原実行（56歳）が献上した。鳥羽の中宮で崇徳・後白河の両天皇の母となった待賢門院（藤原璋子）の異母兄。実行が権大納言になったのは献上の4年前の天承元年（1131年）12月22日。天承元年には新参議は4人もいたし、新任の（権）中納言も2人いた。しかし、この年（保延元年）には新任参議はおらず、新中納言は1名だった（源師俊）が、前年長承3年（1134年）には新任の参議が3名おり、うち2名は長承3年に舞姫を献上した。長承3年（1134年）の新参議の残り1名の実衡が今年（保延元年）に献上する。実行は久安年（1146年）に舞姫を献上する公教の父である。

② 右宰相中将藤原実衡

藤原実衡（35歳）は前年長承3年（1134年）2月12日に参議となった。新参議の献上である。権大納言実行がこの年に献上者となった経緯は不明だが、実衡は新参議としての献上といえるだろう。『平家物語』には実衡の名が高倉宮以仁王の名笛「蟬折」のエピソードで引かれる（巻四「大衆揃」、旧大系④307頁）。以仁王が三井寺から落ちてゆく時、持っていた二つの漢竹の笛のうちの一つで、生きた蟬のように節のついた笛竹で作られた重宝だったのに、中納言実衡卿がうっかり膝より下に置いてしまったので、笛が無礼を怒って蟬が折れてしまったというエピソードである。

<受領>

③ 播磨守藤原家成

正四位下播磨守藤原家成は大治5年（1130年）に10月27日任播磨守であるから、播磨を重任したことになる。（それ以前は、若狭守、加賀守、讃岐守を1～3年で転任している。）この年、保延元年（1135年）正月4日に正四位上に叙せられた。このころ正四位上は越階と認識さ

れているので珍しいケースといえるだろう。(清盛父の平忠盛は正四位上から従三位公卿に昇ることはなかったが。家成の父の家保は翌保延2年(1136年)8月14日に薨じ、家成は服中の10月15日、首尾よく従三位に叙せられ、重服明けの保延3年10月6日参議に列した。家成は鳥羽院の寵臣であり、清盛とは親交深く、『平家物語』にも頻繁に登場する。重盛の正室は家成の娘となっている。まずは「殿上闇討」では、五節の淵酔で忠盛のように揶揄された過去の人の例として家成の例が挙げられる。まだ播磨守だった家成が、孤児とはなったが貴顕の子である忠雅を娘婿にしてもてなしていたのを、五節の時に、「播磨よねは、とくさかむくの葉か、人のきらをみがくは」(旧大系④86頁)²⁹⁴と囃された。家成は大治5年(1130年)4月21日に昇殿を許され、その年の10月27日から播磨守である(『公卿補任』)から、「播磨よねは」と囃されたのは大治5年(1130年)以降の五節であることになる。淵酔での揶揄が新殿上人の通過儀礼だとすれば、「播磨よねは」の出来事は(実際にあったことだとすれば)大治5年のことであるはずで、忠盛の昇殿よりわずか2年前のことであり、『平家物語』の「上古にはか様にありしかども事いでこず」²⁹⁵とあるが、「昔」といえるほど前のことではなかったことになる。

なお、家成が婿とした忠雅は天治元年(1124年)の生まれであるから(『公卿補任』で逆算)、大治5年(1130年)なら7歳となる。家成は忠雅の母方の伯叔父にあたるので、父を亡くした忠雅を引き取って養育したというのが真実だろう。

④ 出雲守藤原光隆

藤原守光隆が出雲守となったのは大治5年(1130年)10月27日で、16年後の久安2年(1146年)12月29日に出雲守から但馬守に遷任している。『国司補任』には、大治5年から保延2年(1136年)4月7日まで出雲守、保延4年12月29日の2年半、安芸守となるが、保延4年12月29日に再び出雲守となっている。(光隆が安芸守であった2年半の出雲守の名前は『国司補任』にはない。)寺内浩(2004:150)の少年受領の表から計算すると、五節献上時には光隆は9歳になるので、五節の経営は当然父の清隆が差配したと思われる。父清隆は大治4年(1129年)から保延3年(1137年)正月30日播磨守に遷任するまで越後守であるので、出雲は新しい知行国と考える。五節献上の前年に出雲の重任を得たことになる。後に『平家物語』で木曾義仲に愚弄される「猫間中納言」光隆の若き日である。

保延2年(1136年)

<公卿>

① 右大将藤原頼長

²⁹⁴ 旧大系頭注の口語訳「播磨米はとくさかむくの葉だろうか。人をあんなに磨きたてているよ」。

²⁹⁵ 旧大系頭注の口語訳「昔はこんな事があったが、事件が起こらなかった」。

この時の右大將は権大納言頼長で、頼長は献上の年（保延 2 年）の五節の直後 12 月 9 日に内大臣となった。いわずと知れた保元の乱の崇徳上皇側の中心人物。『台記』の記主。次男だったが、父忠実に鍾愛され、父によって兄忠通の養嗣子とされていた。『平家物語』にも何度も登場する。

② 中納言藤原成通

藤原成通は献上年（保延 2 年）11 月 4 日に権中納言となった。成通は『平家物語』に直接の登場はないが、蹴鞠の名手でもあった他、多芸で、今様も笛も馬術も能くしたという。今様は同じ歌を一日 100 返 100 晩繰り返して練習したという（『今鏡』「藤波下」第六、雁がね 226。竹鼻 1984：485）。また、特に蹴鞠の名人で、『成通卿口伝日記』は成通がいかに蹴鞠に精進したかを記す。2000 日の間 1 日も欠けることなく鞠を蹴り、病気のときには、臥しながら鞠を足に宛て、大雨の時は大極殿へ行って鞠を上げたという。成通は多くの歌も詠んでおり、同じく歌人でもあった平忠盛とも交流があった。平忠盛が五節を献上しながら、内裏昇殿が叶わなかったことを嘆き悲しんで詠んだ歌「身のうさをおもひいりえの山のはに われもろともにたちかくれなむ」（『忠盛集』）を送った先は実はこの成通であった。成通も「雲井にぞつひにはすまむ山のはにおもひないりそ秋の夜の月」と慰めの歌を返している。しかし、成通は「すきもの」であり、自由奔放なところもあった。『平家物語』巻一「殿上闇討」で忠盛が五節の淵酔で「伊勢平氏は眇也けり」と囃された時、過去にも五節の淵酔で、太宰権帥の季仲が色が黒かったので「いかなる人のうるしぬりけむ」と囃された例を挙げる（旧大系④86 頁）。早川は、これは、実は季仲をからかったものではなく、以前からあった「穴黒々黒主哉」という囃子歌の「黒主」を蔵人頭にかけて「黒頭」と替えて、蔵人頭であった源雅兼に淵酔で「舞をせず逃げてしまうのはズルいぞ」と、「穴黒々黒主哉」を歌って何度も芸を迫ったものという説を挙げる（早川 2008）。この源雅兼事件は忠盛昇殿の直前である天治 2 年（1125 年）または翌年と比定され、『今鏡』によれば、この時、囃子歌で迫った張本人が成通で、後日、雅兼が（蔵人頭饗応の場でのしつこさを）院へ訴えたので譴責があったという。

<受領>

③ 和泉守藤原宗兼か

保延 2 年（1136 年）の具体的氏名は『中右記』にはないが、『国司補任』の長承元年（1132 年）には和泉守として藤原宗兼の名が見える。その前年には和泉守としては源盛季の名が見えるので、宗兼の任和泉守は天承元年（1131 年）～長承元年（1132 年）の可能性が高い。そして、長承 3 年（1134 年）閏 12 月 30 日に（姓名は欠くものの）和泉守は重任された記録があるの

で、献上者和泉守は宗兼と考えられる。翌保延3年（1137年）12月29日『中右記』には和泉守「宗長」が石見守に遷任されているが、「宗長」は宗兼のことと思われる。宗兼は五節の翌年の遷任となる。平忠盛の後室となった藤原宗子（池禅尼）の父である。

④ 伊賀守藤原光房

この時点の伊賀守は藤原光房である長承元年（1132年）9月9日見任。前年の天承元年（1131年）正月19日には前任者だろう源光行が見える²⁹⁶。光房は長承2年・3年（1133年・1134年）、保延元年（1135年）、4年（1138年）に伊賀守に見任しているので、保延2年には少なくとも延任、おそらく重任していると思われる。光房の父は為隆で、天治元年（1124年）に新参議として五節を献上している。光房は『平家物語』には直接は登場しないが、その子の吉田大納言経房という人が、権力者にへつらったりすることのない厳正な人で、12歳で父光房に死に別れはしても順調に出世して、後白河が鳥羽殿に幽閉された時も、経房はその厳正さを買われて、平家と院の仲立ちになったと紹介されている。『平家物語』巻第十二「吉田大納言之沙汰」（旧大系⑤392-393頁）。

保延3年 1137年 記録なし。

保延4年 1138年 記録なし。

保延5年 1139年 記録なし。

保延6年 1140年 記録なし。

永治元年 1141年 記録なし。

康治元年（1142年） （近衛天皇大嘗会）

<公卿>

① 権中納言藤原実光

実光が権中納言に任ぜられたのは保延2年（1134年）とだいぶ前のことになる。この五節の翌年には息子和泉守の重任を願って権中納言を辞した。

²⁹⁶ 『国司補任』による。

② 参議藤原顕業

左大弁文章博士だった藤原顕業（53 歳）が参議に任ぜられたのはこの五節の前年の永治元年（1141 年）12 月 13 日であるから、参議になって初めての五節である。

③ 参議藤原経定

左中将藤原経定が参議に任ぜられたのも献上前年の永治元年（1141 年）12 月 2 日であるから、経定も参議になって初めての五節であった。

<受領>

④ 越後守藤原家明

家明が越後守となったのは 5 年前の保延 3 年（1137 年）正月 30 日であるので、延任（重任か）して 2 年である。これから 2 年後の天養元年（1144 年）12 月 18 日に美濃守に遷任した。家明の父は藤原家成で、家明が越後守となったのは 10 歳の時だった。

⑤ 甲斐守藤原顕遠

元摂津守の藤原顕遠が甲斐守になったのは、この五節の年康治元年（1142 年）の正月 23 日だった。明けて康治 2 年正月 3 日には正五位下に叙せられた。その後、甲斐守を久安 6 年（1150 年）正月 29 日まで勤めた。

康治 2 年（1143 年）

<公卿>

① 右大將藤原実能

実能は保延 2 年（1136 年）任権大納言。保安元年（1120 年）加賀守の時代にも五節を献上している。

康治 2 年（1143 年）に新参議はいない。前年康治元年の新参議は藤原清隆（53 歳）1 人だけであった。12 月 21 の任であるから清隆にとっては、この年が参議となって初めての五節であったが清隆は献上者とはならず、献上したのは、権大納言となつてから久しい実能だった。実能は、一度献上していたが、それは受領分でかつ 23 年前であった。公卿としては未役として選ばれたのだろうか。

② 参議藤原教長

藤原教長は献上 2 年前の永治元年（1141 年）12 月 2 日任参議。参議となって 2 年目の五節での献上である。

<受領>

③ 土佐守高階^{もりのり}盛章

永治元年（1141 年）8 月 25 日土佐守として見任。前年の保延 6 年（1140 年）の守は空白なので、盛章の任の年月はわからない。天養元年（1144 年）、久安 2 年（1146 年）、4 年（1147 年）に盛章が見任。久安 5 年（1149 年）10 月 2 日には藤原信頼が守として見えるので、盛章は保延 6 年（1140 年）～天養元年（1144 年）～久安 4 年（1148 年）と重任したと考えられる。『平家物語』の巻第四「若宮出家」では、以仁王の敗死後、八条院にかくまわれていた宮の遺児が探し出され、頼盛が八条院に引き渡すよう申し入れたので、この若宮の生母である三位局が泣く泣く若宮の髪をなでつけ、御衣を着せて送り出すさまが描かれる。旧大系本はこの王子の母を伊予守盛教の娘²⁹⁷とする（旧大系④319 頁）が、『本朝皇胤紹運録』では以仁王王子の僧道尊の母は「伊予守盛章女」とされるから、この高階盛章の娘である。若宮は、死を免れ、仁和寺において出家させられたが、のちには仁和寺の大僧正まで昇る道尊である。

④ 上野介藤原保説

藤原保説は保延 3 年（1137 年）正月 30 日に任上野介。保説は五節献上の翌年の天養元年（1144 年）正月 16 日見任しているが、12 月 14 日には肥前守に見任している（久安 5 年〔1149 年〕3 月まで肥前守）。

天養元年（1144 年） 記録なし²⁹⁸。

久安元年（1145 年）

<公卿>

① 参議藤原忠雅

この年の献上者の全員はわかっていないが、参議藤原忠雅（22 歳）が献上したことは判明する。『本朝世紀』11 月 18 日の項は、

²⁹⁷ 新編では「伊予守盛章が娘」（新編①330 頁）、延慶本では「伊与守顕章ノ娘」（『延慶本平家物語全注釈』巻四 354 頁）。

²⁹⁸ 4 月 21 日に鳥羽准母で太皇太后の令子内親王崩御。

十八日己丑。於摂政直廬。被行朔旦叙位。』又園韓神祭也。』今夜。五節参内』今日参議忠雅被申慶賀。

とある。「五節が参内した。忠雅卿が慶び申した」のであるが、これだけでは、五節献上と忠雅卿は関連付けられない。「五節参内」と「今日参議忠雅被申慶賀」の間に、わざわざ「同日の記事二事以上の場合」を示す記号である「 』 」を入れて、前 2 件と別件であることを示唆している。しかし、この年の『公卿補任』を見る時、この「 』 」で区切られた二事は表裏一体であったことがわかる。忠雅は永治 2 年（1142 年）従三位となっていたが、それからこの年久安元年（1145 年）まで非参議で、この年 11 月 17 日に晴れて参議に補された。そして、『公卿補任』忠雅の任参議の該当部分には「明日為献五節被任云々」と説明が付されている。翌日五節を献上するからという理由で参議に任ぜられたというのだ。これにより、五節が参内した直後に、忠雅が任参議の慶賀を申した文が続くことが納得される。この年（久安元年）には忠雅の他には新たに新参議に任ぜられた者はいない。また、前年（天養元年）にも前々年（康治 2 年）にも参議の新任はなかった。忠雅の任参議は献上者確保のための任参議の例であり、また五節献上が新任参議の役目と了解されていたことを如実に示す例だろう。

忠雅は家成の娘婿として「殿上闇討」にその名が登場する後は、卷第三「公卿揃」（旧大系⑤ 222 頁）の治承 2 年（1178 年）安徳天皇誕生の際である。公卿たち 33 人が六波羅に駆けつけた（右大弁以外直衣で）。しかし、不参の人たちも 10 余人いて、これら不参の人たちは、後日布衣を着て西八条へお祝いに出向いたというが、その筆頭に花山院前太政大臣忠雅公の名が書かれている。

久安 2 年（1146 年）

<公卿>

① 内府藤原頼長

内府頼長（27 歳）の任内大臣は 10 年前の保延 2 年（1136 年）12 月 9 日頼長 17 歳の時だった。頼長は内大臣となる直前（保延 2 年 [1136 年]）にも権大納言右大将として舞姫を献上した。

② 大理藤原公教

大理とは検非違使別当で中納言^{きんのり}公教。公教も権中納言になったのは頼長と同じく 10 年前の保延 2 年 12 月 9 日（あるいは 11 月 4 日）のことである。『平家物語』では公教は名前だけが登場する（卷第三「城南之離宮」旧大系⑤ 266 頁）。清盛が後白河院を鳥羽殿に軟禁してしまう

が、そのような暴挙を諫めることができただろう臣下たちは既に故人となっていたり、残っていた二人成頼・親範も世を嘆いて出家遁世したと語る。故人となった重臣たち4人の中に三条内大臣すなわち公教がいる。三条公教は康和5年(1103年)生で没年は永暦元年(1160年)だから、公教は後白河の幽閉よりは20年近くも前に没している。

康治2年(1143年)、天養元年(1144年)、久安元年(1145年)と新しい参議は出なかった。参議は別名 ^{やくらのつかさ} 八座 というように、定員は8名と考えられており、既にずっと8人体制が続いていた。権中納言も出なかった間、献上者選びは難航したのだろう。公教も未役だったのだろうか。

<受領>

③ 越前守藤原俊盛

俊盛の任越前守は天養元年(1144年)12月30日。元丹後守。翌年の久安3年正月5日俊盛は従四位下に叙せられた。俊盛は鳥羽院の寵姫得子(美福門院)の甥で得子の庇護を受けた。保延2年(1136年)に丹後守になったのは丹後が得子が知行する分国になったからで、任越前守も越前が得子に分国(知行国)されたからと考えられる。俊盛の五節献上は越前守で2年経過した時であるが、結局越前守を2期重任した。『台記』久安2年(1146年)11月13日条「越前皇后被_レ賜、因_ニ五節事皇后沙汰_一云々」とあり、この年の五節は皇后得子の差配であったことが知られる(寺内2004:154)。

④ 美作守平親家

献上者は美作守であるが、『本朝世紀』のこの年の4月17日条に賀茂斎院禊の前駆の中に右兵衛佐美作守平親家がいるので、美作守は親家だろう。『国司補任』が久安2年(1146年)に平親家を美作守見仁とするが、その2年前の天養元年(1144年)には正月24日「平範家」を美作守としている(「親家の誤りか」と注記がある)。平範家は保元2年(1157年)10月27日44歳で従三位に叙せられた。その際の『公卿補任』の尻付によれば長承3年(1133年)閏12月30日に任相模守で、永治元年(1141年)12月2日に相模守を辞しているが、美作守についての記述はないので、献上者美作守を親家と比定する。但し、平「親家」という名の受領は、ここ以外に見出せず、経歴も重任・遷任については不明である。

久安3年(1147年)

<公卿>

① 権中納言藤原成通

成通の任権中納言は保延2年(1136年)11月4日(あるいは12月9日)で、9年前である。成通は献上の翌々年久安5年(1149年)7月28日権大納言に昇進した。

② 権中納言藤原公能

公能の任権中納言は永治元年(1141年)12月2日だから、献上の8年前だった。

2人とも任権中納言からは年月が経っているが、前述の久安2年の項でふれたように、久安元年(1145年)に五節献上のために忠雅が(9人目の)参議に任じられたのを除いては、康治2年(1143年)以降、新たな参議の任命がなかった。この五節の翌年久安4年(1148年)にも新たな参議は任ぜられていない。康治2年(1143年)以降新たな権中納言の任命もなかったもので、前年に引き続き献上者の決定が難航したのであろう。参議が既に8人おり、参議の新任が難しく、権中納言も新任がない場合の公卿分献上者決定は、大変だった事を窺わせる例である。

<受領>

③ ◆ 長門守源師行

「服藤リスト」の藤師行は誤記と考える。源師行は康治元年(1142年)正月23日に正四位下で長門守に任ぜられている。重任(あるいは延任)されているわけだが、『台記』に、師行は久安2年(1146年)には高松第の造営の功によって正四位上に叙され、遷任されたことが書かれているので、長門守の重任は高松第の成功との関係が大きいだろう。なお、遷任とあって、重任となっていないので、曾我良成(2006)が忠盛の得長寿院の成功に関していうように、遷任が重任の書き誤りでないとすれば、源師行も長門守の重任の後さらにいつれの国かへ遷任する権利の約束手形を得たのであるかもしれない。すると、五節献上は長門の重任と直接的には結び付かないのかもしれないが、重任に加えて遷任も得たのであれば、舞姫献上ぐらいは当然の奉仕であったのかもしれない。

④ 能登守通重

藤原通重は康治元年(1142年)4月7日には能登守を見任している。久安4年正月28日任丹波守(元能登守)であるので、11月の五節献上後の正月の除目で丹波守遷任した。なお、通重は翌々年久安5年(1149年)8月1日に没した。

久安 4 年（1148 年） 記録なし。

久安 5 年（1149 年）

<公卿>

① 左兵衛督藤原重通

権中納言藤原重通の任権中納言は永治元年（1141 年）12 月 12 日。献上の 8 年前。

② 太宰権帥藤原清隆

帥中納言藤原清隆（59 歳）はこの年（久安 5 年）の 7 月 28 日に権中納言に任ぜられたばかりであった。清隆自身は『平家物語』には登場しないが、『平家物語』に登場する猫間中納言の父である。

康治 2 年以来新任参議の不足にくわえて、この年久安 5 年の始めには中納言も正・権合わせて 11 人もいたが、宗能と成通が権大納言に昇進したのを受けて、正三位参議であった清隆と従三位参議であった忠基が権中納言に昇進した。早速、清隆が舞姫を献上した。

<受領>

③ 讃岐守藤原成親

鳥羽院の第一の寵臣家成の息子で、従五位上藤原成親が讃岐守となったのは久安 2 年（1146 年）の 12 月 29 日わずか 9 歳の時であった（その前は 7 歳で越後守）。後に鹿谷の陰謀の中心となったあの成親である。長じて後白河院の寵臣となり、院との男色関係もうわさされた。保元元年（1156 年）には諸大夫の家柄ながら近衛少将となる。五節献上の年には 12 歳なので、成親の父の家成（この時は権中納言）が五節は経営したと推定される。明けて翌年久安 6 年（1150 年）の正月には正五位下に叙せられた。その後、成親は讃岐守として、久安 5 年、6 年、仁平元年（1151 年）、2 年に見任として見え、久寿元年（1154 年）正月 28 日越後守に遷っている。これより後、久寿 2 年（1155 年）の正月 28 日には越後守に遷任しているが、これ造鳥羽御堂功である（『公卿補任』仁安元年任参議）。成親はその後も保元 2 年（1157 年）に金剛心院の造営、春興殿の造営を行って位階を進めている（『公卿補任』）。成親は『平家物語』にたびたび登場することになる。

④ 周防守藤原成頼

従五位下藤原成頼は前権中納言顕頼の息子で、成頼が周防守となったのは天養元年（1144 年）

正月 24 日 9 歳の時である。久安 3 年、4 年、5 年周防守見任で仁平 2 年（1155 年）に阿波守に遷任している。周防守延任（重任だろう）2 年目の献上である。成頼はこの後平治の乱に当たっては内裏を脱出した二条天皇が清盛の六波羅邸に入ったことを触れ回り、公卿諸大夫らが六波羅に結集、一気に形勢を清盛有利に導いたことなどから、清盛と良好な関係を保った人物である。この献上の年にはまだ 14 歳の少年だった。なお、成頼の表記は『本朝世紀』による。『台記』では諸頼に作る。

久安 6 年（1150 年）

<公卿>

① 権中納言藤原経定

藤原経定（51 歳）はこの年久安 6 年の 10 月 20 日に権中納言に任ぜられたばかりである。この年 8 月 21 日に中納言藤原公教が権大納言となり、参議に 1 人欠員ができたのに合わせて経定が 8 人目の中納言（権）となり、早速の献上であった。経定の任権中納言は「超公隆」と付記される。経定が超えたとされる公隆が参議になったのは保延 4 年（1138 年）11 月 17 日であったから参議歴は 12 年で、中納言昇進の目安とされる 15 年は経っていない。経定が参議になったのは公隆より 2 年あとの保延 6 年だったが、経定は左中将であったから参議から中納言への良いルートにいたとはいえ、この年他の公卿人事の宣旨は 8 月 21 日付であるので、五節献上と引き換えに公隆を超えて 10 月 20 日に任権中納言になった可能性は高いと考える。

② 参議源雅通

源雅通（33 歳）が参議となったのはこの年久安 6 年の正月 29 日である。参議となって初めて迎える五節で舞姫を献上した。なお、雅通は『台記』では雅道に作る。

<受領>

③ 近江守源成雅

正四位下成雅が近江守となったのは前年の久安 5 年（1149 年）7 月 8 日とされるが、この五節以降国司補任に近江守としての名はない。仁平 3 年（1153 年）正月 23 日には藤原朝方が近江守で「重任」されている。これが近江守重任だとすると、任期 4 年として、朝方の任近江守は久安 5 年のこととなり、久安 6 年に朝方も近江守であったことになってしまう。保元の乱では頼長とともに崇徳上皇側につき、敗れて越後へ流された。

『平家物語』では、巻第一「鹿谷」で治承元年（1177 年）の謀議に加わった者の名の中に「近江中将入道蓮浄俗名成正」として見える（旧大系⑤124 頁）。帰京したのちは後白河につかえて

いたが、鹿谷の謀議で佐渡へ流された。

④ 但馬守藤原定隆

定隆は『本朝世紀』によった。『台記』では家隆とあるが、但馬守なら藤原定隆である。藤原定隆の父は清隆であるから、親と子が続けて献上したことになる。また保延元年（1135年）に五節を献上した光隆とは兄弟である。定隆の任但馬守は久安6年（1150年）正月29日。五節献上の年の正月である。この時、17歳。但馬守以前は永治元年（1141年）12月2日に8歳で任備中守。これは父清隆が伊予守を辞して、定隆を備中守に申任したものだ。定隆は仁平元年（1151年）、2年に但馬守として見任、仁平2年12月30日に任加賀守。父清隆は永治2年（1142年）正月5日正三位となり参議となっていた。

仁平元年（1151年）

<公卿>

① 参議藤原経宗

左中将藤原経宗（35歳）が参議に任ぜられたのは献上2年前の久安5年（1149年）7月28日であった。献上の前年久安6年には新参議が2名誕生し、そのうちの1人源雅通はその年に早速舞姫を献上したが、もう1人の藤原為通は何か障りがあったのかその年とこの年は献上せず、仁平2年（1152年）に舞姫を献上した。経宗は仁安2年（1167年）49歳で左大臣の時、再度舞姫を献上することになる。経宗は二条親政派として後白河と対立し、清盛とも一時は対立するが、両者とも協調し、政治の中枢に居続けた。

② 参議藤原師長

左大藤原臣頼長の息子である師長はこの年2月21日に14歳で参議となった。師長の父頼長は久安6年（1150年）に氏の長者となっており、それ以後は頼長の息子たちは順調に出世してゆくことになる。前年の10月に経定が権中納言になって参議の席が1つ空いたので、師長が8人目の参議となったわけである。こののち保元の乱で頼長の敗死とともに師長ら兄弟4人はそれぞれ配流となるが、1人だけ生きて京都に召喚され、後白河院の引き立てで出世する。『平家物語』でも登場回数が多い。

師長は仁平元年の献上者ではあるが、『宇槐記抄』によれば「師長未蒙聴直衣宣旨、束帯参入、似無面目、仍不参内」。つまり、14歳の師長にはまだ直衣で参内を許す宣旨が出ていなかった。すると束帯で参入せねばならず、それは面目ないからと父頼長が参内させなかったようである。

<受領>

③ 備前守源信時

源信時は久安5年(1149年)11月16日には備前守であったことが確認される。信時は献上のあと明けて仁平2年(1152年)正月28日に伊賀守に遷任した。

④ 武蔵守藤原信頼

藤原信頼は鳥羽院の近臣忠隆の息子で、武蔵守になったのは五節献上の前年久安6年(1150年)7月28日だった。この後も武蔵守を続けて久寿2年(1155年)再び重任を得ている。信頼の『平家物語』の登場回数は多い。後白河の寵臣となり、権勢を得て、『平家物語』では冒頭「祇園精舎」で驕り高ぶってほろんだ人物たち「丞平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼」(旧大系⑤83頁)の中に書かれる1人だが、仁平元年の献上の時はまだ19歳の若者だった。

仁平2年(1152年)

<公卿>

① 参議左大弁藤原資信

藤原資信(71歳)の献上である。資信が参議となったのは献上3年前の久安5年(1149年)正月29日だった。参議となって経験する3回目の五節での献上となった。

② 中宮権大夫藤原為通

藤原為通(41歳)は権大納言伊通の長男。崇徳天皇の寵臣だった。この献上の2年前の久安6年(1150年)に参議となった。舞に秀でていたという²⁹⁹。この2年後の久寿元年(1154年)6月に卒去。

<受領>

③ ◆ 尾張守藤原親隆

尾張守藤原親隆が献上者だったが、実際には阿波守藤原成頼の経営であると『兵範記』はいう(11月11日条「<実阿波守成頼營之>」)。「服藤リスト」は成親に作るが成頼の誤記だろう。『山槐記』は献上者としては尾張守朝隆と記し、『本朝世紀』は「阿波守成頼」とだけ記す。成頼は3年前の久安5年(1149年)に五節を献上している(久安5年の項を参照)ので事実上2

²⁹⁹ 『平安時代史事典』(関口力)。

度目の献上となる。成頼の任阿波守はこの年仁平2年の正月28日だった。この後、保元元年（1156年）まで阿波守だったことが見える藤原親隆の方は前年の仁平元年（1151年）12月30日に尾張守の重任を得ていた。

④ 摂津守藤原重家

重家は応保2年（1162年）に一時、白河法皇の意向で解官された。歌人として知られる。嘉応2年（1170年）に従三位（非参議）に上った。重家は初め光輔といった。

仁平3年（1153年）

<公卿>

① 右大臣源雅定

右大臣左大将の源雅定（60歳）は献上4年前の久安5年（1149年）に内大臣となり、翌年久安6年（1150年）8月21日右大臣となっていた。

② 参議右近衛中将藤原兼長

参議右中将の藤原兼長（16歳）は、師長と同じく左大臣にして氏長者となった頼長の息子である。従三位非参議だった兼長はこの献上年の9月14日に参議に任ぜられ、さらにこの年の五節後の12月23日に権中納言を辞した忠基に代わり8人目（正・権合わせて）の権中納言になった。保元の乱で父頼長が敗死して兼長たち兄弟の運命が大きく変わる保元元年（1156年）まであと3年のことであった。『平家物語』でも保元の乱後に同時に流罪になって配所で没した他の兄弟三人の中の御兄右大将兼長として紹介されている（巻第三「大臣流罪」旧大系④256頁）。

<受領>

③ 能登守藤原基家

藤原基家の任能登守は久安4年（1148年）正月28日。その後、仁平元年（1151年）、3年、久寿元年（1154年）、2年に守として基家の名が見える。保元元年（1156年）正月2日には守基家の名が見えるが、正月27日に美作守に任ぜられたという。そして同日能登守には藤原家長が任ぜられたというが、9月8日再び基家が能登守に任ぜられて保元2年、3年見任で平治元年（1159年）まで、能登守である。献上の年は能登守2回目の2年目である。

④ ◆ 伯耆守平親範

平親範は仁平元年（1151 年）12 月 30 日に重任され、保元元年（1156 年）正月 27 日に停められるまで伯耆守。親範は、いわゆる堂上平氏で父の範家は保元 2 年（1157 年）に従三位となる。「服藤リスト」の藤親範は誤記だろう。親範自身は永萬元年（1165 年）29 歳で参議となる。五節献上のこの年は 17 歳で伯耆守を重任してから約 2 年後。親範は直接には『平家物語』には登場しないが、後年、重衡が生け捕りになった時、契りのあった女房へと文を送り、今生の別れの対面をしたが、その「みめかたち世にすぐれ、なさけふかき」女が民部卿入道親範の娘だったと示されている（巻第十「内裏女房」旧大系⑤247 頁）。

久寿元年（1154 年）

<公卿>

① 中納言中将藤原師長

この年 5 月 29 日に中納言藤原家斉が薨じて、中納言は一席空いていた。『兵範記』では 11 月 16 日条で献上者「中納言中将」であるが、11 月 18 日条には「新中納言五節」である。仁平 4 年（1154 年）に新たに中納言となった者は、11 月 12 日つまり五節の直前に権中納言となった左中将師長（17 歳）だけである。また『台記』久寿元年（1154 年）11 月 19 日条に「師長五節退出如参入儀」という記述があるので、師長が献上者であったことは明らかで、佐藤泰弘リストの権中納言兼長は誤記だろう。兼長も権中納言だったが、この年 8 月に右大将になっているので、そこから、この「中納言中将」は師長に比定できる。兼長は前年舞姫を献上したばかりである。

② 富小路宰相藤原公通

藤原公通（38 歳）の任参議は久安 6 年（1150 年）正月 29 日だから、献上より約 5 年も前のことになる。公通は保元 2 年（1147 年）10 月 27 日に権中納言になる。

前年参議となった朝隆（58 歳）は前年もこの年も献上していない（そして翌年も献上していない）のは何らかの理由があったのだろうが、未詳。

<受領>

③ ◆ 常陸守平頼盛

『兵範記』には常陸守教盛とあるが、本論筆者は平頼盛と比定する。服藤の献上者リストには、この年の受領献上者に「常陸守藤教盛」を挙げて、『台記』、『兵範記』を出典とし、佐藤泰弘（2009）のリストは「常陸守教盛」で、出典として『兵範記』を挙げる。史料大成本『台記』

にはこの年の受領の献上者名は見出せなかった。しかし、平教盛にこのころ常陸介の記録はない。教盛は仁平元年（1151年）2月2日に上臈数十人を超えて淡路守になった（『公卿補任』仁安3年）。これに対して頼盛の任常陸介は久安5年（1149年）6月4日（『公卿補任』）、そして仁平3年（1153年）つまりこの献上の前年の3月13日に常陸介に復任している。『本朝世紀』仁平3年3月13日条に「被行『復任除目』」として「中務大輔平朝臣清盛、安芸守、同常陸介朝臣、淡路守同朝臣教盛」、割注で「已上、故忠盛朝臣子」とある。つまり、この五節の前年の3月13日に教盛は淡路守に、頼盛は常陸介にそれぞれ復任しているのである。『国司補任』は『御八講記』に頼盛の常陸介が久寿元年（1154年）4月22日、8月8日、9月18日、29日、そして11月16日に見えるとしている。そして、『兵範記』自体にも保元元年（1156年）つまりこの献上から約2年後の3月5日に頼盛の常陸介が見える。献上の前年に頼盛が常陸介に復任して、献上の2年後に頼盛が常陸介見任なのであり、前年に淡路守に復任した教盛が、献上の前後わずかな期間だけ常陸介になったとは非常に考えにくいことである。なお、2年後の、保元元年（1156年）閏9月22日清盛が安芸守から播磨守に遷ると頼盛が安芸守となり、空いた常陸介には異母兄平経盛が入った。保元3年（1158年）8月10日頼盛は再び常陸介となったが、10月3日参河守となった（藤原顕長と交換）。教盛のほうは平治元年（1159年）12月27日、平治の乱の勲功により越中守に遷った後すぐ永暦元年（1160年）正月21日に常陸介に遷った（『公卿補任』）。

なお、頼盛は保元2年（1157年）の信西の内裏の再建で貞観殿を造営。10月22日その成功の賞として従四位下に叙せられる（『公卿補任』仁安元年）。翌保元3年（1158年）8月10日に再び常陸介となったのは貞観殿の成功かもしれない。

つまり、この年、久寿元年（1154年）の献上者が常陸介なら平頼盛で、もし献上者が淡路守だったら、教盛となる。淡路国は下国であって、五節献上が命じられる豊かな国ではなかろう。他年の献上者の記録でも国名だけを書いて、人物名はないことは多いが、常陸介と淡路守の書き誤りより、発音の似ている頼盛を教盛と書き誤った可能性のほうがよほど大きいだろう。従って、本論筆者は久寿元年（1154年）の受領献上者の1人は、前年に復任した常陸介平頼盛と比定する。

頼盛は清盛の継室の長子（次男だが、長男は早世）で、『平家物語』の登場場面は多が、久寿元年ころの登場はない。頼盛については本論第二部第2章で詳述した。

④ ◆ 丹波守藤原成兼

藤原成兼の任丹波守は久安5年（1149年）8月28日だから、久寿元年（1154年）には延任しているわけだが、成兼は献上翌年久寿2年（1155年）に卒した（『山槐記』9月12日条）。な

お『兵範記』では献上者丹波守は成清と作る。

久寿元年（1154 年）の舞姫の 1 人は「忠基卿女」（『台記』同年 11 月 16 日条）と記されるから、公卿の娘である。公卿の娘が舞姫となるのも抵抗なくなってきたのだろうか。但し、久寿元年の献上者に忠基卿はいない。忠基はこの時は 54 歳で散位前中納言の太宰権帥であった。忠基はこれから 2 年後の保元元年（1156 年）7 月に薨去する。

久寿 2 年（1155 年）（後白河天皇大嘗会）

<公卿>

① 大納言民部卿藤原宗輔

藤原宗輔（79 歳）の任（権）大納言は保延 6 年（1140 年）3 月 17 日。15 年も前である。転正は久安 5 年（1150 年）7 月 28 日。宗輔は天治 2 年（1125 年）にも舞姫を献上している。

② 大納言春宮大夫藤原宗能

藤原宗能（72 歳）の任権大納言も久安 5 年（1150 年）7 月 28 日。5 年も前のことである。宗能はのちに応保元年（1161 年）に内大臣に昇る。宗能は参議だった長承元年（1132 年）にも献上した。宗能は有職故実にも明るく、兼実は日記『玉葉』に 86 歳で没した宗能の死を惜しむ言葉を記している（『玉葉』嘉応 2 年 2 月 12 日条）。『今鏡』には、五節の帳台試に初めて出御する崇徳天皇が着する指貫の文様を、当時蔵人頭だった宗能が「霰地に窠の文」³⁰⁰だと教えたという（『今鏡』卷六「藤波の下」「唐人の遊び」、430-436 頁）。『今鏡』のこの段で、宗能は父の宗忠と同様催馬楽の名手だったと伝える。

③ 権中納言藤原季成

『兵範記』の記す「藤中納言（季）」を権中納言季成（44 歳）と特定する。季成の任権中納言は康治元年（1142 年）12 月 21 日。これも 12 年も前のことである。『平家物語』には季成は直接は登場しないが、以仁王の母が加賀大納言季成卿の娘であったと紹介される（巻第四「源氏揃」旧大系④278 頁）。

この大嘗会の年の公卿献上者はいずれもこの年あるいは前年に新任も昇叙もなかった長老たちだった。この年、中納言（権と合わせて）は 8 人だったが、参議は 6 人に減っている。さらに 1 名（藤原教長）が 12 月 22 日に参議を辞す。但し、この年には参議も新任はなかった。

³⁰⁰ 窠の文：瓜を輪切りにした形の紋様とも、蜂の巣をかたどった紋様とも。雅楽の装束によく用いられる。

翌保元元年（1156 年）には保元の乱の結果、権中納言の兼長・師長の兄弟が配流となり、参議 3 人が権中納言に昇格して、新参議が一举に 7 名も誕生する。新参議のうち 1 名（藤原伊実）は正月 27 日に参議となり、その年の 9 月 13 日に権中納言に昇った。しかし、それは翌年のことで、仁平 2 年（1152 年）、3 年（1153 年）、4 年（1154 年）とこの年久寿 2 年（1155 年）には、既に献上者となったことがある兼長と師長以外、4 年続けて新参議・新中納言は誕生していなかったせいだろう、この年の公卿分献上者たちはすべて、昇進とは関係のない貴族たちであった。

<受領>

④ ◆ 播磨守源頭親

「服藤リスト」には藤頭親とあるが、源頭親であろう。源頭親の任播磨守は、はっきりしないが、仁平 3 年（1153 年）には播磨守として名が見える。翌年、保元元年（1156 年）7 月 11 日平清盛が播磨守となるまで頭親が播磨守であった。

⑤ 安芸守平清盛

平清盛（38 歳）が献上した。久安 2 年（1146 年）2 月 1 日に正四位下に叙せられて翌日安芸守となった。保元元年（1156 年）7 月 11 日、保元の乱の勲功で播磨守となるまで安芸守。永暦元年（1160 年）2 階昇叙して正三位となって参議となるまでにはあと 5 年あった。

保元元年（1156 年） 記録なし。

保元 2 年（1157 年）

<公卿> （保元 2 年の公卿分献上者は 2 人とも昇任者である。）

① 右大臣藤原基実

藤原基実は 15 歳。『兵範記』に「右大臣殿五節所」「右大臣殿舞姫」とあるので基実に比定できる。基実は関白忠通の実子。頼長を偏愛する忠実によって、頼長が忠通の養子となって関白職を継ぐことになっていたのだが、前年、保元の乱で頼長は敗死して頼長の 4 人の息子たちも流罪となったので、忠通の実質上の長子³⁰¹として、権大納言だった基実が、この年 8 月 9 日（あるいは 10 日）、4 人を超えて右大臣となった。この年の基実の献上は、忠実—基実の継承ラインが確立したことを示す晴れがましい献上だったであろう。『平家物語』巻第一「吾身栄花」で清盛の 8 人の娘のうちの 1 人が六条の摂政殿（すなわち基実）の北政所になったと記される

³⁰¹ 兄たちは夭折。

(旧大系⑤93 頁)。

② 権中納言藤原朝隆

藤原朝隆^{ともたか}は新任参議が僅少だった仁平3年(1153年)に参議になっていたが、なぜか献上者となった記録がなかった。保元の乱の後処理の人事で保元元年(1156年)、つまり献上の前年の9月13日に朝隆を含む当時の参議4人がそろって中納言に昇進した。特に朝隆は『公卿補任』には「依病不仕之間任之畢」とあり、病で出仕していなかったにもかかわらず昇進したという「棚ぼた」であったから、献上は、順当すぎるほど順当なものだったろう。

<受領>

③ 甲斐守藤原盛方

藤原盛方の母は平忠盛の娘。父顕時は院の近臣だったので、盛方は14歳で六位蔵人になり、少年受領となった。献上の年には21歳だった。

④ 因幡守藤原信隆

藤原信隆(32歳)は後白河院の近臣で、この献上の年から4年後、憲仁親王を皇太子に擁立しようとしたとして、二条天皇によって因幡守を解官される。『平家物語』(巻第一「吾身栄花」旧大系⑤93頁)でも述べられているように、平清盛の娘を妻としていた関係から親平家であり、また、信隆自身の娘殖子(七条院)が高倉天皇の皇子2人を産んだがそのうちの1人尊成(後鳥羽)が即位するにいたって左大臣を追贈された。信隆娘と尊成が、都落ちした平家に合流しようとしたところ信隆の北の方の兄紀伊守範光に押し留められたことによって尊成即位への幸運が開けたことが『平家物語』(巻第八「山門御幸」旧大系⑤122頁)にある。

保元3年(1158年)

<公卿>

① 按察使藤原重通

按察使は権大納言藤原重通(60歳)。重通の任権大納言は献上2年前の保元元年(1156年)9月13日だった。

② 皇太后宮権大夫藤原伊実

皇太后宮権大夫は権中納言藤原伊実(34歳)。伊実の任権中納言も献上2年前の保元元年9月13日だった。参議になったのもこの年保元3年正月17日。超スピード出世だった。伊実も

直接は『平家物語』には登場しないが、重衡の北の方が「鳥飼の中納言惟実のむすめ、五条大納言邦綱卿の養子、先帝の御めのと大納言佐殿」であったことが語られ（巻第十一「重衡被斬」旧大系⑤372 頁³⁰²）、灌頂巻「大原御幸」で建礼門院に侍す尼の 1 人が「鳥飼の中納言惟実のむすめ、五条大納言邦綱卿の養子、先帝の御めのと大納言佐」（旧大系⑤453 頁）と同じ言葉で紹介されている。

<受領>

③ 越前守藤原実清

藤原実清の任越前守は仁平 3 年（1153 年）4 月 6 日。保元 3 年従五位上。平治元年（1159 年）見任。正月 6 日正五位下に叙せられる。実清は『平家物語』では巻三「公卿揃」（旧大系⑤222 頁）で、安德天皇誕生の際治承 2 年（1178 年）、六波羅に駆けつけた公卿 33 人の最後に新三位実清と名が挙げられている。『公卿補任』で治承元年（1177 年）11 月 12 日、40 歳で従三位に叙せられたことが確認できる。従って献上の年には 20 歳の若者だったことになる。

④ 伊豆守藤原経房

『吉記』の記主（吉田と号したことによる）。経房は仁平元年（1151 年）7 月 24 日伊豆守となり、この五節の直後の保元 3 年 11 月 26 日に安房守に遷任した（『国司補任』の「経房」の尻付による）。藤原経房は摂関家の家司から六位蔵人になり、実務に優れていたので昇進を重ねた。後に大納言に昇る藤原経房もこの時はまだ 17 歳にすぎなかった。経房は寿永 4 年（1185 年）にも献上することになる。

保元 4 年（1159 年） 記録なし。

永暦元年（1160 年）

<公卿>

① 権中納言藤原雅教

藤原雅教（48 歳）は献上 2 年前の保元 3 年（1158 年）年 8 月 10 日に権中納言になって、この年転正した。この年の新参議には平清盛もいる。前年の平治の乱が勃発・終息、この年、6 月 20 日に正四位下から従三位も飛ばして、正三位に叙せられ、8 月 11 日参議となった。

② 別当藤原公光

³⁰² 新編では「伊実」の文字を使い、頭注に「底本『惟実』。『尊卑分脈』等により改む。（後略）」とある（新編②428 ページ）。

権中納言別当藤原公光^{きんみつ}（31 歳）の権中納言任官はこの年永暦元年（1160 年）4 月 2 日。新任の中納言の献上である。この年は、平治の乱の結果、権大納言藤原経宗、参議藤原惟方らが解官、流罪となり、新たな権大納言や参議が誕生した年だった。

<受領>

③ 若狭守藤原隆信

藤原隆信は似絵の名手として知られる。定家の異父兄。歌集も残している多才な中級貴族であった。献上の年には 19 歳。受領を歴任するが、公卿に昇ることはなかった。

④ 丹波守藤原成行

藤原成行の任丹波守は保元 3 年（1158 年）10 月 6 日。その前年保元 2 年 12 月 29 日備中守に任じられた。丹波守の後の去就は不明。

応保元年（1161 年）

<公卿>

① 権中納言源定房

従三位源定房（32 歳）は、前年（永暦元年）8 月 11 日に権中納言となり、この年（応保元年）正月に正三位に叙せられた。なお、平清盛はこの年、9 月 13 日に権中納言に進んだ。

『平家物語』では徳子の出産に六波羅に駆け付けた公卿の中に源大納言定房の名がみえる（巻第三「公卿揃」旧大系④222 頁）。また、重盛が大納言定房を超えて内大臣になったという（巻第一「俊寛沙汰 鵜川軍」旧大系④125 頁）。

② 権中納言藤原顕時

藤原顕時（52 歳）は平治元年（1159 年）4 月 6 日（平治の乱以前）に参議に任じられて、献上の前年永暦元年（1160 年）10 月 3 日に権中納言になっていた。『平家物語』では、顕時の長男で 51 歳の前左少弁行隆が、10 年余り官職を停められて貧乏暮らしをしてところ、清盛から呼び出しがあった。行隆は人に車を借りて恐る恐る西八條へやってくると、清盛は行隆に、「あなたの父の顕時は何かと相談に乗ってくれた人だった」と、荘園などを贈り、五位の藏人左少弁に返り咲かせて、恩義に報いたという話を載せる（「行隆之沙汰」旧大系④260-261 頁）。また、公卿揃に安徳天皇の乳付けの乳母とされる帥の典侍（旧大系⑤「公卿揃」221 頁）は顕時（太宰権帥）の娘と見られる。

<受領>

③ 摂津守高階泰経

『山槐記』11月21日条にある献上者摂津守は高階泰経である。『平家物語』巻第三「大臣流罪」で治承3年(1179年)の政変で清盛によって解官された貴族たちの中に「大蔵卿右京大夫兼伊予守高階泰経」の名がみえる(旧大系④258頁)。泰経は『平家物語』では義経の院への取次役として登場する。元暦2年(1185年)正月10日、義経が院の御所へ行って平家追討への出発の意気込みを奏上したのが大蔵卿泰経を通じてであり(巻第十一「逆櫓」旧大系⑤302頁)、義経出立後、住吉の神主が「神社から鎗矢が西を指して飛んで行った」という報告をもってきたが、それを院に奏上したのも大蔵卿泰経であった(巻第十一「志度合戦」旧大系⑥326頁)。文治元年/寿永4年(1185年)11月2日、義経が九州へと都落ちするにあたって「義経を大将としてその下知に従え」という院宣を願ったが、それを院へ奏上したのも大蔵卿泰経だった(巻第十二「判官都落」旧大系⑦390頁)。泰経は文治元年/寿永4年(1185年)末に頼朝から義経に与同したとして、頼朝の要求により解官配流を要求されるが、文治5年(1189年)に出仕を許された³⁰³。

④ 伯耆守平基親

『官職秘抄』の編集者。伯耆守平基親は平姓ではあるが、平親範の息子であるから高棟王流で清盛一門ではない。平基親はこの年わずか11歳。平治元年(1159年)～仁安元年(1166年)に伯耆守。任伯耆守から3年目の献上である。後白河の近臣であった基親はのちに治承3年(1179年)の政変で解官されるが、寿永2年(1183年)還任。のち建久元年(1190年)従三位となり公卿に列した。『平家物語』の巻第三「大臣流罪」(旧大系④258頁)で治承3年の政変によって師長が尾張に流罪になったと同時に蔵人左少弁兼中宮権大進藤原基親が3つの官職すべてを「留^{とどめ}らる」と記される。「藤原基親」とあるが、『公卿補任』ではこの時解官されたのは平基親である。あるいは藤原姓の誰かの養子にでもなっていたか。

応保2年(1162年) 記録なし。

◆ 長寛元年(1163年)

① 内大臣藤原兼実

兼実の日記『玉葉』のこの日の記録は残っていない。しかし、元暦元年(1184年)11月に息子良通の献上を記録した中に「下官為大納言献五節之時、<長寛元年>、依故禅闍命、参入・

³⁰³ 『朝日本歴史人物事典』の「高階泰経」の項(土屋恵)を参照した。

御覧共無其儀、即為愚父例」とあり、自分が大納言で五節を献じた時は、父禅閣忠通の命により、参入も御覧も勤仕しなかったといっている。

「服藤リスト」は兼実の献上を長寛 2 年とするが、上記記事の割注は「長寛元年」であり、『公卿補任』で確認しても、長寛元年には兼実は 15 歳で権大納言であるが、翌長寛 2 年の閏 10 月 23 日には内大臣になっている³⁰⁴ので、大納言であった時の献上であるなら、長寛 2 年ではないだろう。権大納言になったのは応保元年（1161 年）であった。

兼実は、摂政忠通の三男で、基実、基房の異母弟。のちに摂政・関白・太政大臣を勤めた人物であり、『玉葉』の記主として知られている。後白河院と平氏の抗争の中でもどちらとも深くは結ばず、平氏滅亡後は頼朝の後援を受けたが、建久 7 年（1196 年）の政変によって失脚した。同母弟に『愚管抄』を著した慈円がいる。兼実は『平家物語』にはしばしば登場するが、まず、「吾身栄花」で清盛の 2 人の息子の重盛と宗盛が左右の大將に任ぜられた時、今までは兄弟で左右の大將を務めるのは摂関家の子弟だけが例外だったとして二条天皇の時代（保元 3 年〔1158 年〕～長寛 2 年〔1164 年〕）の基房と兼実の兄弟の例が挙げられている（巻第一、旧大系㊦92 頁）。兼実の舞姫献上はちょうどその時代である。勿論、治承 2 年（1178 年）の徳子の出産時は右大臣で六波羅に駆けつける公卿たちの中にも右大臣月輪殿と四番目にその名がみえる（巻第三「公卿揃」旧大系㊦222 頁）。安德天皇の即位に当たっては太極殿が焼失していたので、人々が太政官庁での即位を提案したところ、紫宸殿での即位を主張した人物として描かれる（巻第四「還御」旧大系㊦277 頁）。

平家の都落ちに連行されないようにと後白河が御所を脱出して比叡山へ逃れた時には、続々と叡山へ登る公卿官人たちの中には勿論、右大臣（兼実）もいた（巻第八「山門御幸」旧大系㊦119 頁）。巻第十では一の谷に討たれた平家の人々の首を大路を渡して獄門にかけようという義経らの要求に反対した五人の最上級公卿の中に右大臣（兼実）もいる（旧大系㊦238 頁）。(但し史実では諮問を受けたのは五人ではなく、太政大臣は空席だったので四人であった。)

特に五節とかかわりの深い出来事では、養和元年（1181 年）の安德天皇の大嘗があるべき年、新嘗会を福原で挙行したい清盛と、平安京での催行を主張する貴族たちの中で先鋒となったのが兼実だった。また、治承 3 年（1179 年）11 月、清盛が軍勢を率いて上京した夜、豊明節会の席にいて悲壮な覚悟を『玉葉』に残したのも兼実だった。

この年の兼実以外の献上者は不明である。

長寛 2 年（1164 年） 記録なし。

³⁰⁴ 兄である基実が兼実の内大臣を申任して関白左大臣を辞した。

永万元年（1165 年） 諒闇（二条天皇崩御）により五節停止。

仁安元年（1166 年） （六条天皇大嘗会）

<公卿>

① 右衛門督平重盛

いわずと知れた清盛の嫡子である。権中納言平重盛（29 歳）は前年の永万元年（1165 年）5 月 9 日に参議となり、献上の年の 7 月 15 日に権中納言になった。新中納言の献上である。

重盛が叙爵されたのは 13 歳であるから、院の近臣たちの子弟が往々幼年で叙爵しているのに比べれば特に早いということではなかった。父清盛は重盛の献上年の五節の 2 日前の 11 月 11 日に内大臣に昇った。

② 参議藤原成頼

藤原成頼（31 歳）の妻の父である邦綱卿はこの年正月 12 日に参議に任ぜられるも 8 月 27 日に婿の成頼を申任して辞職。成頼は譲りを受けて同日参議となった。従って新任参議の献上である。成頼は久安 4 年（1148 年）周防守時代と仁平 2 年（1152 年）尾張守の献上を成り代わって経営しているので、記録に残る限りでは 3 度目の献上となる。

③ 参議平親範

平親範（30 歳）は献上の前年永万元年（1165 年）正月 23 日に任参議。前年の五節のころは父の死で服解しており、12 月 20 日に復任した。親範は仁平 3 年（1153 年）に伯耆守として受領分を献上している。

仁安元年には公卿分献上の 3 人ともが昇任して初めて迎える五節で献上者となった。

<受領>

① 美作守平宗盛

この献上では宗盛が舞姫参入の儀を行った。宗盛は清盛三男であるが³⁰⁵、時子所生では長子である。久安 3 年（1147 年）生まれの宗盛はこの年 20 歳で、嫡子重盛より 9 歳若い。宗盛は長寛元年（1163 年）12 月 20 日美作守に遷任された（『公家事典』）。遷任後 3 年の献上であるが、献上の翌年仁安 2 年（1167 年）には守を止められた。しかし、これは参議となるために止

³⁰⁵ 次男基盛は応保 2 年（1162 年）に病死している。

められたと考えられ、翌年は大栄転で参議となる。(『公卿補任』は閏 10 月 12 日に「止守」に、「7 月か」と傍書する。仁安 2 年に閏 10 月はなく、参議になるので守を止められたはずであるから、傍書のように、閏 7 月末に美作守を止めて 8 月 1 日に参議となったと考える。)

② 武蔵守平知盛

知盛は清盛の四男。宗盛の同母弟である。永暦元年(1160 年)2 月 28 日に武蔵守となった(9 歳)。献上時は 15 歳ということになる。献上の翌年の仁安 2 年 12 月 30 日には平知重³⁰⁶を後任として武蔵守を辞している。その次の年仁安 3 年正月に従四位下に昇叙はされている。また、仁安 3 年 2 月 18 日は昇殿を許されているが、六条の新帝昇殿であり、二条天皇時代の昇殿の有無は不明で、五節献上と昇殿は直接結びつけられない。知盛に関しては五節献上が人生に有利に働いた可能性は少ない。しかし、知盛は『平家物語』の華々しい武将ぶりとは乖離して、実際は病がちの人物だったらしく、時子の実際の次男としては特筆すべき出世はしなかった。この後は 11 年後の治承元年(1177 年)正月 24 日 26 歳で従三位に叙せられ公卿に列したが、参議となるのはさらに 4 年後の養和元年(1181 年)30 歳の 3 月 26 日で、同年 9 月 23 日には参議を辞した。(但し翌年 10 月 3 日任権中納言。)

仁安 2 年(1167 年)

<公卿>

① 左大臣藤原経宗

左大臣は藤原経宗(49 歳)で、経宗は平治の乱でもうまく立ち回ったが、二条天皇親政を掲げて後白河の怒りを買って、永暦元年(1160 年)2 月 28 日に解官されて阿波に配流された。二条親政の確立で、応保 2 年(1162 年)に召還されて、長寛 2 年(1163 年)には権大納言に還任、同年閏 10 月 23 日に右大臣となっていた。召還後は過激な行動を控え、二条崩御後は後白河院にも恭順。清盛とも協調して、献上の前年仁安元年(1166 年)11 月 11 日左大臣になった。左大臣任官翌年の献上である。なお、経宗は重盛の息子の 1 人の宗実という人物を養子にしていた。『平家物語』では、宗実は既に平姓から藤原姓になっていたにもかかわらず、世間体をはばかって経宗は宗実(18 歳)を追い出してしまったと書かれている(巻第十二「六代被斬」旧大系④416 頁)。しかし、五味文彦は経宗の嘆願によって、この時、宗実は死を免れたという³⁰⁷。

この年は大臣が献上したわけであるが、実は、この年まず献上を命じられたのは権中納言実房³⁰⁸(21 歳)だった。実房は前年の仁安元年 6 月 6 日に、非参議から参議を経ずに権中納言と

³⁰⁶ 平知重は平頼盛の子と言われる。

³⁰⁷ 『朝日本歴史人物事典』「平宗実」の項。

³⁰⁸ 『愚昧記』記主。

なっていた。9月2日に「献上せよ」との使いが来たのだが、故障を申し立てて断っている。
やはり、献上者の第一の候補は大臣でなく、新参議・新中納言であったことが窺われる。

② 治部卿藤原光隆

治部卿は権中納言藤原光隆（41歳）で、献上の年仁安2年8月1日に権中納言となった。新中納言の献上である。光隆は「猫間の中納言」として『平家物語』に登場する（『平家物語』巻第八「猫間」旧大系⑤139-140頁）。居住地が猫間という名だったという。寿永2年（1183年）京に上った源義仲を用事があって訪問した光隆は、義仲によって猫殿と呼ばれ、うず高くよそわれた飯類の食器の汚さに食べるのを躊躇していたところ、義仲の精進用の食器だと言われて仕方なく食するふりをしたところ、猫おろし³⁰⁹をしたと揶揄されたり、散々に愚弄されて、そのまま急いで帰ったという。

<受領>

③ 若狭平経盛

平経盛は清盛の異母弟。安芸守、常陸介、伊賀守を歴任して応保元年（1161年）10月19日から若狭守。献上の前年、永万2年（1166年）正月12日若狭守に重任された。この時40歳。壇の浦では、異母弟の教盛と鎧の上に碇を負って手を取り組んで入水したと語られる（巻第十一「能登殿最後」旧大系⑤338頁）。没時の年齢は62歳。経盛は一門に従い、一門と運命を共にした。平家の歌人としては忠度のほうが有名であるが、経盛も優れた歌人であった。『平家物語』は巻第七「一門都落」（旧大系⑤111-112頁）で、それぞれ屋敷に火をかけて都を落ちてゆく一門の人々の中がうしろを振り返り、立ち上る煙を見て詠んだ経盛の歌「ふるさとを焼け野の原にかへりみて すゑもけぶりのなみちをぞゆく」を載せる。巻第八「緒環」では、筑紫で月の夜、忠度たちと歌を詠みあった（「恋しとよこぞのこよひの夜もすがら ちぎりし人のおもひ出られて」旧大系⑤129頁）。実際、勅撰の『千載集』に、忠度の「さざなみや」の歌と同様に、経盛の歌「いかにせむ御垣が原に摘む芹の ねにのみ泣けど知る人のなき」も「詠み人知らず」として入撰した（恋。668番歌）。

④ 出雲<某>

この時点の出雲守は藤原朝時。『愚昧記』11月13日参入記事に献上者たち4人目の出雲守の「某」に藤原朝時の傍書がある。鎌倉時代の歌人に藤原朝時がいるが、元久元年（1204年）ごろの生まれで年代が合わない。朝時という人物については不明である。

³⁰⁹ 「猫おろし」は頭注に「猫が食べ残すことか」とある。

仁安 3 年 (1168 年) (高倉天皇大嘗会)

仁安 3 年の五節については本論文第二部第 2 章「仁安 3 年 (1168 年) の五節をめぐる解官劇」に詳述した。

<公卿>

① 権中納言藤原成親

成親は家成の三男で、久安 5 年 (1149 年) 讃岐守時代にも献上している。成親は後白河の側近で、平治の乱では信頼とともに首謀者であった。信頼は処刑されたが、成親は妹が重盛の妻だったところから解官されるにとどまり、応保元年 (1161 年) 4 月に右中將に還任はしたらしいが、同年 9 月 28 日二条天皇によって再び解官。二条の死後、永万 2 年 (1165 年) 正月に左中將に返り咲いて、後白河院の引き立てで、この献上の前々年の仁安元年 (1166 年) に参議となりこの前年仁安 2 年 2 月 11 日に権中納言となっていた。

② 権中納言檢非違使別当平時忠

平時忠 (39 歳) は、この献上年の 8 月 10 日に権中納言に任官した。時忠は清盛の継室時子の同母弟。高棟流の平氏。異母妹滋子が後白河の寵を受けて憲仁 (高倉) を産んだ。応保元年 (1161 年) 9 月 3 日には時忠は皇子憲仁を東宮に擁立しようとして二条天皇の怒りを買って解官され出雲に配流となったが、二条の崩御とともに復活する。高倉が即位すれば天皇の生母の (異母) 兄弟であり、時忠の妻は安徳天皇の乳母 (帥の典侍) となって、地位は磐石だった。勿論、『平家物語』にも頻繁に登場する。時忠は「此一門にあらざらむ人は、皆人非人なるべし」と言った人として有名であるが、この文は巻第一「禿髪」 (旧大系④90-91 頁) に登場する。仁安 3 年、清盛が病のために出家したところ宿病がたちまち癒えて六波羅の一族が栄華を極めたさまを指していつているのだが、『平家物語』によれば、清盛の出家入道は仁安 3 年 11 月 11 日 (史実では 2 月 11 日だが)、まさに頼盛保盛父子が失脚したこの年の五節のころのことになる。時忠は、高倉が 3 歳の安徳へ譲位した時も「3 歳だからといって早すぎることはない」という (巻第四「厳島御幸」旧大系④271 頁)。平家都落ちに従ったが、出発に際しては「三種の神器に加えて「印鑰、時札、玄上、鈴かな (シ) どもとりぐせよ」と落ち着いたところを見せている (巻第七「主上都落」旧大系⑤96 頁)。山城の国を出る山崎関戸の院では、時忠は、帝の輿を置いて、男山 (石清水) 八幡宮に再びの帰京を祈り (巻第七「一門都落」旧大系⑤111 頁)、大宰府では、頼朝・義仲側についた豊後の国司を「鼻豊後」と侮蔑し (巻第八「太宰府落」旧大系⑤133 頁)、義仲からの「同盟して頼朝を打とう」という申し出に対しては「我々は帝王を

奉じているのだから義仲のほうから降伏してくるべきだ」と知盛とともに反対し（巻第八「法住寺合戦」旧大系⑥162 頁）、八島では、内侍所（神鏡）の都への返還を求めに来た法皇からの使者で花方という者の顔に、浪方という焼印をつけさせて帰京させる（巻第十「請文」旧大系 251 頁）など、気骨のある人物として描かれている。壇の浦で生け捕りにされたが、兵士が内侍所の蓋を置けようとしたのを制止（巻第十一「能登殿最期」旧大系⑥338 頁）、都へ連行されると宗盛・清宗に続いて八葉車の簾を上げて大路を渡された（巻第十一「一門大路渡」旧大系⑥350 頁）。その後は保身のため娘を義経に嫁がせたりして、生き延びるが、結局は寿永 4 年（1185 年）9 月能登の国に流されることになり建礼門院徳子に別れの挨拶に出かけている（巻第十二「平大納言被流」旧大系⑥383-385 頁）。時忠は文治 5 年（1189 年）配流先の能登で没した（60 歳）。

以上 2 人はともに新任権中納言の献上である。

③ 左大弁源雅頼

雅頼（43 歳）が参議となったのは長寛 2 年（1164 年）正月 21 日。約 5 年前であるから、任参議とこの年の献上とは直接の関係はみられない。この年 3 月 11 日に正三位に昇叙されているが、これは閑院より大内の遷幸の本家賞である。但し、雅頼は、献上の翌年（嘉応元年〔1169 年〕）の正月に母の死で服解、5 月に復任して約半年で権中納言に昇任した。この時、前任の参議 2 人を抜いている（『公卿補任』）。この人事が舞姫献上と関係があったかどうかはわからない。雅頼は長承 2 年（1134 年）3 月 4 日 7 歳で叙爵した。自身も父雅兼も弁官コースを歩んだ。有職家で歌人でもあった。『平家物語』では巻第四「鶴」（旧大系④326 頁）の頼政の鶴退治の話で、射手に頼政を推挙した若い左少弁として登場する。頼政は勅命を受けたので仕方なく 2 本の矢を用意して参内したが、一本目で仕損じたら、2 本目で雅頼を射るつもりだったと答えている。また福原遷都の直後、厳島明神が平家に与えた節刀を召し返されたという夢を見たのが雅頼に使える青侍だった（巻第五「物之怪沙汰」旧大系④342-344 頁）。

<受領>

④ 能登守平通盛

通盛は、清盛の弟教盛の嫡男、つまり清盛の甥にあたる。この献上の年である仁安 3 年の 5 月 13 日に常陸介から能登守に遷任された。その後、越前が重盛の知行国になると、通盛は長く越前守を勤める。安元 2 年（1176 年）に越前守となり、治承 3 年（1179 年）10 月 9 日能登守、同年 11 月 18 日、治承 3 年の政変で藤原季能の越前守を停めて通盛が越前守に再任、養和

元年（1181 年）8 月 15 日まで越前守。通盛は常に一門とともに行動している。通盛が討ち死にしたという知らせを聞いた身重の恋女房である小宰相が通盛を追って入水する。この 2 人の恋物語がなれそめから巻第九「小宰相身投」で語られる（旧大系⑤233-235 頁）。

通盛の生年が不詳なのではっきりはしないが、『朝日歴史人物事典』（櫻井陽子）などは大体久寿 2 年（1155 年）ごろと推測している。五節献上の仁安 3 年には 14 歳ほどになっていただろうが、やはり、父教盛の実質経営であろう。この献上の年である仁安 3 年（1168 年）の 8 月 10 日に参議に任ぜられている。しかし、続く嘉応元年（1169 年）と嘉応 2 年（1170 年）は 4 人の献上者が判明しているが、教盛は献上者になっていない。舞姫は通盛の名で献上された受領分となったが、その実質は、通盛と財布を一つにする父で新参議の平教盛とみることもできよう。

⑤ 尾張守平保盛

第 2 章「仁安 3 年の五節をめぐる解任劇」で見たように、保盛は、忠盛の五男頼盛の長子で長寛元年（1163 年）正月 24 日右兵衛佐並越前守、永萬元年（1165 年）正月 5 日従五位上、仁安元年（1166 年）12 月 20 から右兵衛佐兼尾張守、仁安 2 年（1167 年）閏 7 月 12 日に昇殿を許された（『兵範記』仁安二年閏七月十二日条「昇殿聴、右兵衛佐兼尾張守平保盛」）。そして仁安 3 年（1168 年）正月 11 日に正五位下に叙せられていた。保盛はこの年おそらく 12 歳。同じく献上者となった通盛とはいとこ同士になる。保盛の父の頼盛もこの献上の年に待望の参議に任ぜられた。但し、補任は 10 月 18 日であるので、五節の献上はその前に決定していたと考えられる。

嘉応元年（1169 年）

『兵範記』嘉応元年 10 月 13 日条に「可献五節舞姫人々、殿下^{ママ}＜常陸介頼実朝臣、伯耆守宗頼＞、権大納言藤原朝臣、権中納言藤原朝臣」とある。献上予定者たちである。11 月の記録に実際の献上者名のまとまったものはない。

<公卿>

① 権大納言藤原実房

10 月の五節の定めに挙がっている権大納言は藤原実房。その日記『愚昧記』で「予童」といっているので実際に献上したことは確かだろう。実房（23 歳）の任権大納言は献上の前年の仁安 3 年（1168 年）8 月 10 日。但し、仁安元年（1166 年）には新参議が 3 人、新中納言が 4 人いた。仁安 2 年（1167 年）には新参議が 2 人、新中納言が 4 人いた。仁安 3 年（1168 年）には

新参議が2人に加えて1人（成頼）が還任した。

② 新中納言藤原邦綱

上述の『愚昧記』では「予童」に「邦経卿童」が続いている。この邦経は邦綱と考える。邦綱は権中納言となった藤原邦綱（48歳）ということになる。邦綱の任権中納言は献上の前年仁安3年（1168年）の12月13日。この献上は権中納言任官後では始めて迎える五節であった。邦綱は清盛の盟友であるが、『平家物語』では財産家（大福長者）で賢人として描かれる。中宮徳子の出産には馬2頭を献じ（巻第三「御産」旧大系④218頁）、清盛死後を伝える巻第六「祇園女御」では国綱の人物像が詳しく描かれる。特に福原で行われた治承4年の五節では中宮の御所で（中宮淵醉だろう）殿上人が「竹湘浦に斑なり」と朗詠するのを聞いて、抜き足で逃げ出したという（旧大系④422頁）。

<受領>

③ 常陸介藤原頼実

上掲の『兵範記』嘉応元年10月13日条から、受領分の献上者として、常陸介頼実朝臣と伯耆守宗頼に舞姫献上が命じられたことがわかる。（但し、実際に献上したかは確認できなかった。）この頼実とは藤原頼実と考える³¹⁰。藤原頼実は経宗の長男で嘉応元年には15歳。治承3年（1179年）の政変でも父経宗が解官されなかったように、頼実も治承3年11月7日³¹¹、25歳で従三位となり公卿に列した。

④ 伯耆守藤原宗頼

藤原宗頼は前権大納言光頼の四男で頼実より一年年長であったが、なかなか出世できず、ようやく参議になったのは建久6年（1195年）12月9日で42歳になっていた。

嘉応2年（1170年）

嘉応2年（1170年）の献上者は服藤リストにはない。他の先行研究者はこの年代はカバーしていない。

<公卿>

① ★ 中納言藤原忠親

堀川中納言忠親（40歳）の任権中納言は仁安2年（1168年）2月11日。献上の2年前であ

³¹⁰ 歴史上に源頼実という人物もいるが、寛徳元年（1044年）に没している。

³¹¹ 『公卿補任』によるが、おそらく11月17日の誤記だろう。

る。『平家物語』では山門の大衆が加賀守師高の流罪を求めて神輿をおったてて内裏へ押し寄せる事件（治承元年〔1177 年〕）の時には師高の尾張流罪を決定した上卿中納言（巻第一「内裏炎上」旧大系④138 頁）であり、巻第十「首渡」で、義経たちの平家の首渡しの要求に際して後白河が諮問した 5 人の公卿の 1 人に堀河大納言忠親がいた（旧大系④238 頁）。

② ★ 源宰相資賢

参議源資賢（59 歳）はこの年、つまり五節の直後の 12 月 30 日権中納言に昇進した。鳥羽院の近臣だったが、芸能に堪能で今様が上手かったので後白河院にも気に入られた。二条天皇によって一時は信濃に追放されたが、復帰後は参議、中納言から権大納言まで出世した。後白河の側近として、治承 3 年（1179 年）の政変では清盛によって解官されたが、養和元年（1181 年）12 月 4 日に権大納言に還任した。なお、この年の童女御覧に童を出したのは資賢 1 人だけだった。『平家物語』は、ちょうどこの年、嘉応 2 年の正月、藤原成親（35 歳）が、長老であった資賢と「栄花の人」である兼雅を超えて右衛門督兼檢非違使の別当に任ぜられたことを語る（巻第二「大納言流罪」旧大系④181 頁）。しかし、資賢自身も 12 月には権中納言になったのだ。

<受領>

③ ★ 上総介藤原基輔か

仁安 2 年（1167 年）3 月 20 日に藤原基輔が上総介となり、献上年である承安元年（1170 年）10 月 9 日に基輔が見任している。10 月 9 日といえば五節献上者は既に定められている時期であり、献上者上総介は藤原基輔とみて間違いあるまい。この年の五節では上総介だけが参入の儀を行い、他の 3 人は密参（『愚昧記』）。基輔は歌人として知られていた。

④ ★ 越中守藤原行雅か

この年の受領分献上者の 1 人には但馬守が定められていたが、重病に依り越中（守）に改定された（『玉葉』11 月 13 日条）。越中は嘉応元年（1169 年）正月 11 日に藤原行雅が受領となり、この献上年の嘉応 2 年（1170 年）の 5 月 22 日に見任している。その後は、安元元年（1175 年）に平俊盛が見任していて、治承 4 年（1180 年）正月 28 日に平業家が重任した（以上「国司一覧」）。行雅から平俊盛への交替時期は不明だが、業家の重任が補任から 4 年目のこととすれば補任は安元 2 年（1176 年）ごろ、するとその前の守の業家の補任は承安 2 年（1172 年）か承安 3 年（1173 年）ごろの可能性は高く、行雅が嘉応元年（1169 年）から業家補任まで、4 年 1 期勤めた可能性は高く、嘉応 2 年（1170 年）の 5 月 22 日以降、五節の 11 月までに転出した可能性は低いといえよう。

承安元年（1171 年）

<公卿>

① 中御門中納言藤原宗家

藤原宗家（33 歳）は前年嘉応 2 年（1170 年）2 月 11 日父の服喪から服解、復任。宗家の任権中納言は仁安元年（1166 年）8 月 27 日であったので、5 年も前の事ではある。しかし、翌年の承安 2 年（1172 年）3 月 29 日には従二位に昇叙した。『平家物語』は承安 3 年に藤原成親が正二位になって、宗家が超えられたと語る（巻第二「大納言流罪」旧大系⑤181 頁）。

② 新宰相藤原頼定

藤原頼定（45 歳）の任参議は前年の嘉応 2 年の 12 月 30 日であるので、参議となって始めて迎える五節での献上である。

<受領>

③ 美作藤原雅隆

美作守藤原雅隆（25 歳）は、五節献上の前年の嘉応 2 年（1170 年）正月 18 日に備後守から美作守に遷った。五節献上から約 3 年後の承安 5 年（1175 年）正月 25 日に美作守を重任される。元暦 2 年（1185 年）6 月 10 日、39 歳で従三位に叙され公卿に列する。

④ 相模守藤原有隆

『玉葉』による献上者は相模有隆である。『兵範記』で「相模守（藤原）有隆」は、仁安 3 年（1168 年）8 月 4 日、仁安 4 年（1169 年）2 月 1 日、嘉応元年（1169 年）6 月 8 日の条に見えるので、承安元年の献上者相模有隆は、少なくとも仁安 3 年（1168 年）には相模守になっていた藤原有隆で間違いない。

この年は宗家が参入の儀と御覧（童女御覧）を勤仕し、雅隆は参入の儀のみ、頼定と有隆は御覧を勤仕した（『玉葉』11 月 19 日条）。

なお、承安元年の行事であることを示す詞書を持つ『承安五節絵』の写本がいくつか伝わっていて、参入の様子の詳細が見られる³¹²。しかし、絵に書き込まれている天皇出御が承安元年にはなく、承安 2 年にはあったことなどからこの五節は承安 2 年（1172 年）のものではないか

³¹² 例として、早稲田大学図書館蔵（乙）本の『承安五節之図』がある（住吉系模写に分類される。）

とも考えられ、はっきりしたことはわかっていない。承安五節絵の描く写本には、五節に集う貴族たちの名前、官職、年齢も書かれている。（ただし、書き込まれた官職・年齢はこの五節が承安元年のものであるか承安2年のものであるかの決定的要因とはなっていない。）写本系統のうち、山本陽子によれば、有職故実に重きを置いた高橋宗直系統に対し、住吉内記に発する系統の写本では髪形はじめ詞書の字配りまで正確に写し取ろうという姿勢があったという（山本 2002：95-116）。そして、住吉内記系の五節絵の模写に描かれた貴族たちの顔立ちや口髭の有無などを比較して似絵性を検証し、「承安絵の個々の顔貌の差異は、内記の模写以前の原本にすでに存在していたことになる」と述べる。つまり、我々は、維盛や忠度など『平家物語』の登場人物の風貌を、ここに書かれた貴族たちの容貌から想像することが許されるわけだ。

承安2年（1172年）

<公卿>

① 権大納藤原実国

『玉葉』には新大納言実国とあるが、藤原実国（33歳）の任権大納言は嘉応2年（1170年）12月30日で、約丸2年も前のことであるから、新大納言と呼ばれているのは不審である。この「新」も「権」の混同ではないだろうか³¹³。実国は文化人で、笛と神楽に長じ、高倉天皇の笛の師も勤めた。歌人としても名を残している。

② 権中納言資長

『玉葉』承安2年11月9日条に「召遣兼光、父納言五節経営之間、忿々不可来之由令申、力不及」とある。『玉葉』の記主である藤原兼実が、配下の兼光の父の納言を召しに遣ったところ、父の納言は五節の支度中だからと、断ってきたというのである。兼光というのは当時権中納言だった藤原資長の息子であるから、この年は「権中納言資長」が五節を経営していたことがわかる。経営は献上者でないこともある。例えば、幼い息子に代わって父が経営するというようなこともあるが、たとえ名目上の献上者が別にいたとしても、資長が実質の献上者であったことは間違いない。藤原資長は永暦元年（1160年）10月あるいは12月3日、43歳で右大弁から参議に昇り同日左大弁に転じた。ちょうど同じ年の8月11日、清盛も43歳で参議になっている。資長が権中納言になったのは永萬元年（1165年）8月17日であるから、献上年より7年も前である。但し、この年も前年も新任の参議も権中納言もいない。資長は保元元年（1156年）7月39日院試に合格して秀才となっているだけに漢詩に長じていたが和歌も能くした。（兼光も保元3年文章生となり、この年承安2年〔1172年〕には25歳あるいは27歳で、のち

³¹³ 保安3年の献上者藤原顕隆の項を参照。

に寿永2年〔1183年〕平家都落ち後の除目で正四位下で参議となった。)

<受領>

③ ★ 信濃守藤原隆雅か

『玉葉』11月14日条の童女御覧に「信濃童」が出ているので、献上者には信濃守がいたことになる。信濃守には仁安3年(1168年)正月の除目で藤原隆雅が任じられている(『兵範記』正月11日条)。そして『玉葉』承安2年(1172年)閏12月7日条に「近江守実範、殊寵之間、可被相転江州於熟国坎、信濃<前相国知行>、出雲<朝方卿知行>等、応其撰云々」とあるので、承安2年12月まで信濃の知行主は前相国(前太政大臣)であったことが知られる。承安2年時点の前相国は藤原忠雅である(『公卿補任』)。一方、近江守だった「実範」とは院の寵臣、藤原家成の子の実教のことで、この相伝には信濃と出雲が応じたが、実教は閏12月7日に信濃守となっている(『公卿補任』文治4年実教の尻付)。隆雅は忠雅の息子³¹⁴だから忠雅が信濃の知行主である間の承安2年の五節の時点では、隆雅がそのまま国守であったとみるのが順当であろう。なお、近江と信濃は相伝(交換)であったはずだが、近江国の実教の後任に「隆雅」の名は見えず、姓を欠く守「為経」³¹⁵が承安3年に没している³¹⁶。信濃守以後の隆雅の消息は知られていないので、あるいは、信濃守在任中に卒した可能性もゼロではない。その場合には忠雅の他の子弟が国守を引き継いでいるはずだが、『尊卑分脈』に為経の名は見えない。勿論、『尊卑分脈』が拾わなかった子女がいたかもしれない。承安2年11月の五節時点の信濃守は隆雅の可能性は高いが、兄弟など他の人物であったにせよ、承安2年(1172年)12月まで信濃の知行主であった忠雅が五節経営を全面援助しただろうことは想像に難くない。太政大臣にまでなった忠雅は、父の死後、家成に養われていた人物である。『平家物語』巻第一「殿上闇討」で、「花山院前太政大臣忠雅公、いまだ十歳と申し時、父中納言忠宗卿にをくれたてまって、みなし子にておはしけるを、故中御門藤中納言家成卿、いまだ播磨守たりし時、聳にとりて^{はなやか}聲花にもてなされければ、それも五節に、『播磨よねはとくさか、むくの葉か、人のきらをみがくは』(旧大系④86頁)と囃されたという。家成の養いで娘婿である忠雅の家は相伝相手にふさわしかったと考えられる。

³¹⁴ 『尊卑分脈』による。母は不明。一説には養子であるという。

³¹⁵ 「為経」が忠雅の近親であった記録は見つからないが、『尊卑分脈』に隆雅の弟(母は不明)として、「兼経」という名が見える。あるいは発音もくずし字も近いものがある「為」と「兼」の混同があつて、兼経が近江守として承安3年(1173年)で没した為経であったのだろうか。兼のくずし字(兼)には為(為)に近いものもある。

³¹⁶ 『山槐記』「除目部類」承安4年正月21日の菅原在経の守補任を伝える記事の割書に「藏人巡。去年守為経死去」とある。

承安3年(1173年)

<公卿>

① 花山院中納言藤原兼雅

『玉葉』のこの日の記述の中には、献上者としての名の列挙はないが、11月14日条の童女御覧に「次童女参上、<花山中納言兼雅許也>、兵衛佐基範、<成範卿子>、一人付之」により、兼雅の童女だけが童女御覧にやってきて、その童女には兵衛佐の基範1人だけが(扶持に)付いたという記述から、権中納言藤原兼雅が五節の献上者の1人と比定できる。花山院兼雅は名門の出身で3歳で叙爵。永萬元年(1165年)年7月27日従三位の非参議となっていた。仁安3年(1168年)2月17日、参議を経ず権中納言に任じられた。6年近くも前のことである。但し、この年も前年も、新任の参議や新権中納言はいなかった。承安3年(1173年)当時は26歳。任権中納言や大納言昇任はないが、献上の年が明けて承安4年(1174年)正月5日に兼雅は従二位に昇叙された³¹⁷。兼雅は清盛の娘を妻として平家全盛時にも順調に出世してゆき、最終的には太政大臣まで昇った。

兼雅は『平家物語』では、巻第一で内大臣師長が辞して空いた大将の座を望んだうちの1人として登場する(巻第一「鹿谷」旧大系⑤121頁)が、「鹿谷」が描くのはやはりその座を望んだ1人である成親のなりふり構わぬ願掛けである。嘉応2年(1170年)正月には、成親に官位を超えられた1人で、特に名門の嫡子でありながら超えられたのだから、成親を恨みに思っただろうと『平家物語』は推測する(巻第二「大納言流罪」旧大系⑤181頁)。

② ★ 参議左大弁藤原実綱

この年の献上者の1人は参議左大弁藤原実綱と比定する。舞姫を献上する参議には翌年に限り2合の支給があった³¹⁸のだが、『除目大成抄』に、承安4年(1174年)12月1日付で、去年の五節舞姫献上により特別支給になった2合分の処分が記録されている³¹⁹ことによる(これを出したのは参議左大弁藤原実綱)。この2合は割書に「左大弁藤原朝臣去年依献上五節舞姫」とあるので、「去年」すなわち承安3年に参議左大弁が舞姫を献上したことによって与えられたものであることがわかる。承安3年の参議左大弁は藤原実綱であるから、承安3年の五節の公卿献上者の1人は藤原実綱であったと特定できる。

実綱(長寛元年改名。元の名は実経)は内大臣公教の長男で、仁安2年(1167年)2月21日、献上年の6年前に40歳(あるいは41歳)で参議に任じられた。『平家物語』では、実綱(実経)は、巻第三の治承2年(1178年)の安徳天皇誕生に駆けつけるすべての公卿たちの名とと

³¹⁷ 但し、院の御給という。

³¹⁸ 『職原抄』「参議」の項。

³¹⁹ 結局、佐伯沢成が備後掾に任じられた。

もに、権中納言として登場するだけである（「公卿揃」旧大系⑤222 頁）。

<受領>

③ ★ 備中守源雅賢

この年の献上は『玉葉』11月12丑日条に「源中納言資賢卿知行国<備中>」とあるので、この年4月、備中守になった源雅賢³²⁰（資賢の孫）が献上者ということになる。『玉葉』同条には、献上者からの願いによって舞姫装束を送りに立つ使者について問題を提起する。今回は職事（六位蔵人）の国行が使いに立った。公卿が献上する時は職事が使いに立つが、受領が献ずる時は差別があるべきではないか、女侍を使いにすべきではなかったかと兼実は考え、先例を調べると、過去にも尾張守成雅が五節を献上した時の例は、故殿（忠通）より童女装束を送るのに、職事の国親を使いとした。この時、舞姫装束の方は中宮が送ったが、中宮も六位の進（中宮進）の盛業を使いとした。尾張守の時の例は全くの受領であったが、今の場合は、献上者は備中国守で受領であっても、要請をしたのは資賢で公卿である（「彼者偏受領也、是雖為知行国之事、其身已公卿也」³²¹）のだからますます職事を用いて使いにしてよいのだ、というものであった。相手の身分によって、装束を送るだけの使者の位階まで問題になる時代だったのだ。この年には公卿分の献上者は既に2人いるので、備中国は明らかに受領分の献上である。備中守源雅賢（元土佐守）は、久安4年（1148年）生まれの26歳。承安元年4月21日から備中守で、献上の約1年後の安元元年（1175年）正月22日に重任を得ている。雅賢は治承3年の政変で解官され追放されるが、治承5年には還任、養和2年3月には祖父資賢の権大納言辞官申任によって右中將に昇進する。文治元年（1185年）12月29日、平親宗（平時忠の異母弟）の解官によって参議となって公卿に列した。

これから5年後の治承2年（1178年）の五節献上者の受領分である上野、加賀も国守の名は『玉葉』にはなく、知行主の名だけが書かれている。献上者は国守であるが、国守が誰であれ、知行主が責任をもって献上してくれればいいという考えが表われているのだろう。

承安4年（1174年）

<公卿>

① 右衛門督平宗盛

権中納言兼右衛門督平宗盛（28歳）は嘉応2年（1170年）12月30日9人目の中納言（権）

³²⁰ 『公卿補任』文治元年（1185年）源雅賢の任参議の尻付「入道前権大納言資賢孫。嘉応三年四月二十一日遷備中守」による。

³²¹ 「彼者」は尾張守、「是」は源資賢。

となっていた。権中納言昇進は4年前ではあるが、宗盛は献上の前年（承安3年）10月または11月21日に上位者4人を超えて従二位に叙せられているので、当然の献上であろう。宗盛は仁安元年（1166年）にも献上している。

② 平宰相教盛

清盛の異母弟である教盛（47歳）は献上の6年前の仁安3年（1168年）8月10日に参議になっている。6年前であり、教盛にこの前後特筆すべき昇任も昇叙もない。この年は新しい参議は2人いた（正月に実家、8月に成範）のに、なぜ教盛が選ばれたか不明であるが、この前2年間と後1年は記録が残っていないので、あるいは新参議2人はこの年の前後に献上しているのかもしれない。

<受領>

③ ★ 常陸介高階経仲か

『玉葉』には献上者受領に「常陸」が挙がる。承安元年（1171年）12月8日、高階経仲が常陸介に任じられており、経仲が治承3年（1179年）11月17日に常陸介を解官されている。また、治承3年（1179年）正月6日に知行国主として高階泰経の名が見える³²²が、経仲は泰経の長男である。以上から、承安4年（1174年）の常陸介はおそらく高階経仲と考えられる。経仲は承安4年には18歳、父泰経の助力を得つつ献上したものだろう。

④ ★ 因幡守藤原隆保か

同じく『玉葉』にもう1人の献上受領として「因幡」が挙がる。因幡は応保元年（1161年）10月19日から藤原隆房が国守で嘉応2年（1170年）正月18日に秩満し、代わって藤原隆保が国守となり治承2年（1178年）正月28日秩満しているので、承安4年（1174年）現在因幡守は隆保だったと推定される。（治承2年には隆保秩満の同日に隆清が因幡守となった。）因幡は藤原隆季が知行する国で、隆房、隆保、隆清は息子たちとみられている³²³。隆季は承安4年現在48歳で権大納言兼中宮大夫であった。

安元元年（1175年）

この年の五節は閑院内裏で行われることになり³²⁴、丑の日に閑院に舞姫が参入し帳台試が行

³²² 『日本史総覧』の「国司一覧」による。寿永2年に泰経は従三位に昇ったが『国司補任』尻付には知行国は書かれていない。

³²³ 『公卿補任』建久8年（1197年）隆保の従三位昇叙の際の尻付による。

³²⁴ 大内裏は存在していたので、行事の際は、しばしば天皇は通常起居する里内裏から内裏へ行幸していた。例えば、永暦元年（1160年）の五節には二条天皇が大炊御門高倉殿から11月13日に内裏へ行幸して11

われ、卯の日には童ご覧も行われたのだが、未の刻に火災が発生。閑院の西裏の建物にも数か所飛び火した（『玉葉』11月18日条）。21日辰の日には豊明節会も行われたが、献上者名は不明。『玉葉』はこの後に「人々不訪五節所云々、是里内ハ不訪事もありと云々」と続ける。通常、殿上人たちは五節所を巡っては酒肴のもてなしを受けるのだが、「里内裏の時は、そうした五節所の訪問はしないともいう」といっているのだから、このころ例年は五節は本内裏で行われていたということだろう。

安元2年（1176年） 母后平滋子崩御による諒闇で五節なし。

治承元年（1177年）

<公卿>

① 左兵衛督藤原成範

権中納言兼左兵衛督藤原成範（43歳）は献上の前年の安元2年（1176年）12月5日任権中納言。中納言（権）となって初めての五節で舞姫を献上した。成範は信西の息子で『平家物語』巻第一「吾身栄花」に登場する。清盛の娘と婚約したが、平治の乱での信西の失脚に連座して、一時下野国に配流されたのだが、桜を愛した風流人で、敷地に桜を植えならべてその中に家屋を建てて住んで桜町中納言とよばれたと紹介される（巻第一「吾身栄花」旧大系⑨93頁）。治承3年幽閉された後白河のもとへは、成範（重教）・脩範の兄弟二人だけが参上を許されたとある（巻第四「厳島御幸」旧大系④269頁）。成範は箏の名手で歌人でもあった。また、悲恋の小督局の父とされる（巻第六「小督」旧大系⑤394頁）。

② 右大弁藤原長方

長方（39歳）の任参議も安元2年（1176年）12月5日。やはり、参議となって初めての五節で献上した。長方はちょうどこの献上の年（治承元年）の5月、後白河が西光父子の讒言を入れて、叡山の座主明雲を遠流にしようとした時、公卿の末席に連なった左大弁参議（『公卿補任』では右大弁）長方が、高德の高僧を遠流にすべきでないと「はばかりところもなう申」と『平家物語』は正義感ある人物と描く（巻第二「座主流」旧大系④142頁）。

<受領>

③ ◆ 丹後守平師盛

月27日に高倉殿へ帰還。応保元年（1161年）にも新嘗祭のため11月19日に内裏へ行幸して11月26日に高倉殿へ帰っている。安元元年にも内裏へ行幸の予定であったのを中止して、五節は閑院で催行することになったのである。

もう一人の受領献上者は丹後守である。『玉葉』には＜丹後、参入、安房、御覧＞とあるので、献上者丹後守は参入の儀も行ったことがわかる。『愚昧記』では、長方と丹後が参入云々、そのほかは密参といい、「丹後」に（平）の傍書を付し、＜内府沙汰也＞という割注がある。さらに割注の「内府」に「平重盛、師盛父」という傍書がある。丹後参入への「平」の傍書はともかく、「内府沙汰也」は割注であるから、信用度は高い。そして、確かに治承元年の内府は平重盛である。丹後国は安元2年（1176年）3月4日に平師盛が国守に見任しており、治承2年（1178年）正月28日に平経正が丹後守に補任されているので（『国司総覧』）、治承元年11月の丹後の国守は平師盛と考え献上者丹後守は平師盛と比定した。なお、「服藤リスト」の源師盛は誤記と思われる。

師盛は承安元年（1171年）生まれであるので³²⁵献上年にはわずか7歳だったことになるから、父である重盛が経営するのは当然だった。平師盛はこの翌年の治承2年（1178年）に従五位下・若狭守となり、翌年11月に備中守に転じている。また『平家物語』に師盛の兄弟の忠房が丹後侍従と呼ばれている³²⁶ことから、丹後国守は一族の相伝の様子が見える。

師盛は『平家物語』では、三草合戦に大將軍の1人として参戦（巻第九「三草合戦」旧大系①93頁）、主従7人で小舟で落ちてゆくところ、新中納言知盛の侍が乗せてくれというので漕ぎ寄せたところ大男が飛び乗った勢いで船が転覆して討たれてしまい（巻第九「落足」旧大系①225頁）、その首（備中守³²⁷）は大路を渡されたという（巻第十「首渡」旧大系①239頁）。

④ ◆ 安房守藤原定長

藤原定長は永万元年（1165年）新帝（六条）即位の日に蔵人になった。献上の11年前の仁安元年（1166年）正月に蔵人の巡で日向守となった。六条即位の時はまだ院政に対立した二条天皇が在世していたので、巡による国守就任も行われたのだろう。定長は安元2年（1176年）正月5日に安房守になり、治承4年（1181年）正月に重任する³²⁸。安房守となって2年目の献上である。「服藤リスト」では阿波守とあるが、『愚昧記』も『玉葉』も安房守であるので、誤記であろう。『愚昧記』の定長に続く割書に、（安房は）「右中弁経房知行也」とある。経房は定長の兄である。定長は実務官僚として出世、のちに文治5年（1189年）7月10日に参議に任ぜられる。実務官僚である定長は『平家物語』では蔵人衛門権佐として登場。安德即位の模様を立派だったと厚紙10枚ばかりに書いて安德祖母の二位の尼へ送っている（巻第四「源氏揃」

³²⁵ 『朝日日本歴史人物事典』（田中文英）による。

³²⁶ 例えば寿永2年（1183年）の出来事である「維盛都落」で都落ちに加わる師盛5兄弟の中に丹後の侍従忠房の名がある（旧大系①99頁）。

³²⁷ 師盛は寿永3年には「備中守」と呼ばれていた。「落足」での師盛の最期は「小松殿の末子、備中守師盛は」で始まる。

³²⁸ 『公卿補任』文治5年「藤定長」の尻付による。安房守の前は日向守。

旧大系⑤278 頁)。寿永 2 年(1183 年)には義仲が北国で兵を上げ、平家は倶利伽羅峠で敗走した。朝廷では乱が平定されたら伊勢神宮へ行幸をとおぐ計画を立て、藏人右衛門権佐定長(と神祇の権少副大中臣親俊)を殿上の下口に召してその旨下命した(巻第七「還亡」³²⁹、旧大系⑤82 頁)。また囚われた重衡が京へ送られてくると、藏人左衛門権佐定長(右衛門か)が院の使いとして重衡を訪ね、三種の神器を返還すれば重衡を八島に返してやると伝えに行く(巻第十「内裏女房」旧大系⑤242 頁)。

治承 2 年(1178 年)

治承 2 年の五節は平家にとってうれしい五節だった。五節参入の迫る 11 月 12 日中宮徳子が待望の皇子(安徳)を出産したのである。

<公卿>

① 大納言藤原隆季

権大納言藤原隆季(52 歳)が献上。隆季の任権大納言は仁安 3 年(1168 年)12 月 13 日であるので、10 年近くも前のことになる。治承 2 年の新任は宗盛の権大納言だけだった。宗盛は既に過去 2 度の献上の記録がある(直近は承安 4 年[1174 年])。隆季は家成の長男で清盛とは 2 重の姻戚関係を結び(妹は重盛の妻になり、清盛の娘を隆季は嫡子の隆房の室に迎えた。後者は『平家物語』巻一「吾身栄花」旧大系⑤93 頁)、親平家を鮮明にしている。これより後、治承 4 年(1180 年)厳島御幸に出発する高倉院は幽閉中の父後白河の鳥羽殿に見舞う同意を宗盛から取り付け、大宮大納言隆季卿が夜半に高倉院御所へ参上して鳥羽殿へ出発させた。隆季は和歌にも秀でていた。高倉院の厳島からの帰途では院が隆季に命じて、岸に咲いていた藤の花を折らせ、隆季はまた仰せによってその花で院の長寿の歌を詠んだ(巻第四「還御」旧大系⑤276 頁)。

② ◆ 参議藤原実宗

『玉葉』治承 2 年 11 月 18 日条に五節献上公卿として割書に「隆季『大納言』、実守『参議』、」と、藤原実守を挙げる。「服藤リスト」は『玉葉』通りの実守をあげるが、本論筆者は参議藤原実宗と比定する。

実守は『玉葉』の翌年の治承 3 年(1179 年)の公卿献上者にも「公卿、<権中納言朝方、参議実守>」とある。そして『山槐記』治承 3 年 11 月 11 日条の「今夜五節参入」に続く献上者の名の中に「宰相中将、<実守>」があるので、治承 3 年の献上者宰相藤原実守は 2 つの日記

³²⁹ 他本で「玄昉」。

で合致する。治承2年と3年と公卿の2年続けての献上はありえない。治承3年は2つの日記により実守献上が確かなものであれば治承2年が疑わしい。『山槐記』他には治承2年の献上者名はないが。) 治承2年の『公卿補任』をみると、参議には右中将備中権守の実守(32歳)の他、藤原実宗がいる。実宗は34歳で、実守と同じく右中将で備前権守であった。参議・右中将であることが同じで、実名も任国名も似ているので、『玉葉』での混同が疑われる。宗と守の字はそれほど似てはいないようだが³³⁰、書写の過程で混同がなかったとは言い切れない。

藤原実宗は前権大納言公通の長男で、治承2年の前々年の安元2年(1176年)12月5日に参議となったので、参議となってから迎える2度目の五節であった。治承2年と治承元年に新しく参議・(権)中納言に任じられた者はいなかった。実守の任参議は嘉応2年(1170年)12月30日のことであった。本論筆者は、転写過程の宗と守の字の混同を疑い、治承2年の公卿献上者の参議は実守でなく実宗であったと推定する。

<受領>

③ ◆ 上野介藤原頼高

本論筆者は上野介藤原頼高が献上したと考える。「服藤リスト」は上野守藤原兼光とする。『玉葉』(名著刊行会本)には献上者として「上野、左少弁兼行光知国也、加賀、権弁親宗知行国也」の割書がありとあり、五節は上野国から献上されて、上野は藤原兼光の知行国であったことはわかる。「兼行光知国」は知行国の行の字の位置がズレたのであろう。受領分の献上であるので、献上者は上野介のはずである。兼光は公卿ではないから、受領でもおかしくないが、そのまま上野の受領と確定できない。公卿でなくても知行国には息子や被官を国守にすることは多い。兼光はこののち寿永2年(1183年)12月10日(平家都落ち後)39歳で右大弁兼参議となるが、少なくとも『公卿補任』に兼光が上野守(介)だった記録はない。

『玉葉』(宮内庁書陵部本)も「上野[左少弁兼光知行也_イ]、加賀[権弁親宗知行国也_イ]、」(割書)である。名著刊行会本にも宮内庁書陵部本にも童御覧の童たちのリストには「兼光童」という記述がある。

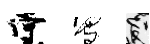
ところで『玉葉』にあるこの前年の治承元年(1177年)9月6日条に、「左少弁兼光給上野国、辞退摂津国也。＜本国司頼高任上野＞、是可修造真言院云々」とある。これにより、兼光はこの献上の前年、真言院の修造を引き受ける代わりに、上野国(摂津は辞退)の知行権を与えられたという事情が分かる。上野国を得て、元(本)の国の国守であった頼高を上野介に申

³³⁰ 以下、宗と守の字例 くずし字データベースより。

「宗」と判読されている字：



「守」と判読されている字：



任したのである。『山槐記』治承2年11月13日条に「上野守頼高可献五節、而被鳴弦、舞姫参入夜当七夜、可有憚歟之由所申也」とあって、五節を献上することになっている上野守頼高が、舞姫参入の夜は七夜にあたるが、参入してもよいかを尋ねている。これは前日12日に中宮徳子が皇子（安徳）を出産した。皇子誕生のめでたい事でも御産には産穢がある。徳子出産の日には多くの公卿や殿上人たちが駆け付けたが、多くの人たちは「中門廊外縁尻懸列居」していた。つまり、産穢に触れないように中門の外で待っていたのである。皇子が誕生すると、「五節参入が7日のうちになる」ので、「殿上人、穢るべからず」と通達された。そこで関白と兼実（実）は穢れに触れぬよう退出したが、多くの公卿は着座してしまった。このような状況下、献上者である上野守頼高は「五節参入日とされる丑の日18日はちょうど7日目にあたるが、参入は問題ないか」確認したのである。これで治承2年（1178年）の献上は上野守頼高であったことは確実である。兼光と頼高の関係であるが、多くの知行国で知行主の息子が受領となる例にもれず、頼高は兼光の息子であった³³¹。「本国司」、（名著刊行会本では「元国司」）は上野国に元からいた国司ではなく、兼光が辞退した「もとの国」である摂津守であったわけである。治承2年（1178年）の受領分の献上者は上野介藤原頼高であったが、経営の大部分を父の兼光が行ったのであろう。受領である頼高であろうと、左少弁兼光であろうと朝廷としては非公卿分の五節が献上されさえすればよく、特に名前を厳格に使い分けなかったと見える。

藤原兼光は14歳で文章得業生、仁安元年東宮学士。承安2年（1172年）から左少弁。献上の1年後の治承3年10月9日右中弁に昇任するが、舞姫献上の年には左少弁に過ぎなかった。しかし、兼光は、後白河法皇の寵妃高階栄子（丹後局）の婿となって順調に出世した。

兼光は『平家物語』では実務官僚として登場する。安元3年（1177年）の叡山の大衆の御輿を振って内裏に押しかけて来た事件では蔵人左少弁兼光が殿上の公卿詮議をひらくよう命じられている（巻第一「内裏炎上」旧大系⑤137頁）。なお、6年前の承安2年（1172年）には兼光の父である権中納言資長が献上している。

④ ◆ 加賀守平親国

『玉葉』治承2年（1178年）11月18日条には受領献上分として上野の兼光に続けて「加賀[権弁親宗知行国也_イ]、」という割書がある。これを「服藤リスト」は加賀守平親宗とするが、本論筆者は以下の理由で加賀守である親国（親宗の子）の献上と考える。

権弁親宗とは『公卿補任』で平親宗と確認される（寿永2年[1183年]に参議となった年の尻付から）。平親宗は平時忠の異母弟、つまり時子と建春門院滋子にとっても兄弟である。後白河の近臣となり、治承3年の政変で後白河の近臣として解官される。時子の弟ではあるが、宗

³³¹ 石丸熙の知行国守表による（石丸1971：66）。但し、『尊卑分脈』では確認できなかった。

盛とは仲は良くなかった。親宗は安元元年（1175 年）12 月 8 日から治承 3 年 10 月 9 日まで権右中弁であるので、献上の年には確かに権弁である。政変で一時解官されたが、そののち左中弁、右大弁と上昇して、寿永 2 年（1183 年）正月 22 日に右大弁のまま参議となるが、同年 11 月（あるいは 12 月）28 日、木曾義仲により両職を解却された。舞姫献上年である治承 2 年（1178 年）には右中弁で正月 5 日に従四位上に叙せられていた。国守経歴でいえば親宗は、仁安 2 年（1167 年）伯耆守となり、嘉応 2 年（1170 年）正月 26 日讃岐守になっているが、『公卿補任』にはその後の加賀守については記述はない。この年もう 1 人の受領献上の上野国と同じく加賀国の治承 2 年（1178 年）正月 6 日に知行主は平親宗で国守には知行主の子平親国となっているので（石丸 1971）、治承 2 年の献上者名としては加賀守平親国であるべきと考える³³²。また、この五節から間もなくの治承 3 年正月 1 日の『山槐記』の記述にも「加賀守親国」がみえる。治承 3 年 11 月の政変で 11 月 17 日「加賀守親国」が解官されている。治承 2 年 11 月の加賀守は親国で間違いはない。ここでも、朝廷としては親宗が責任をもって、これまた非公卿分の舞姫が出されさえすれば、親宗と親国との間の分担関係など関心はなかったものと思われるが、献上者はあくまでも「国」ではなくて国守である。

舞姫献上の実質的責任を負った親宗は『平家物語』では、卷第十一「一門大路渡」で壇の浦で生け捕られてきた宗盛が、大路を引き渡される時の回想シーンである宗盛任内大臣の行列（前年）に前駆をつとめた殿上人 16 人の筆頭に蔵人頭親宗の名が挙がる（旧大系⑩352 頁）。

治承 3 年（1179 年）

この年の五節は劇的な五節だった。治承 3 年 11 月 14 日、突如、清盛が福原から軍勢を率いて上洛し、後白河を幽閉した（いわゆる治承 3 年の政変）。この日は辰の日、つまり五節の豊明節会の日であった。中山忠親の『山槐記』治承 3 年 11 月 14 日条には次のようにある。

入道大相国率数千軍兵自福原上洛、被着八条亭、京師怖恐、衆口噉々、或曰、故内大臣所賜之越前国法皇召取之、大成怨、又白川殿庄園法皇又有御沙汰、又除目間非據等不甘心云々

『玉葉』は次のように記す（11 月 14 日条）。

今日入道相国入洛、宗盛卿去十一日首途³³³、令参巖島、而自路呼還、相共上洛、武士数千騎、人不知何事、凡京中騒動無双、今夜出仕、雖非無所恐、為勤公事出仕、不可有横災之

³³² 『尊卑分脈』でも親宗の息子に親国がいることは確認される。

³³³ 首途：自分の家を出発して旅に向かうこと。

由、深存中心、仍令企参仕之处、果以無為、凡洛中人家、運資財於東西、誠以物忝、亂世之至也、

それでも兼実は、恐れるところなくはないが、公事のためと悲壮な覚悟で節会に奉仕した。豊明節会の日、宮中で不安の中で五節舞の大歌が響く時、外では京の人々の恐怖の声が満ち、舞姫が舞う時、街路では人々が右往左往逃げ惑っていたのである。

豊明節会の翌日 15 日にはまず、清盛の後見する基通の座を脅かす関白基房が解任されて大宰府の権帥に落とされた。基房の息子の師家もわずか 8 歳で任じられた権中納言（中将職も）も解官される。16～19 日にかけて、後白河院の近臣を中心に 39 人が解官され、清盛の信任する者たちの除目が行われた。

戌の刻（午後 8 時ごろ）であろうか、兼実は参内した。子の刻（深夜 12 時）のころ天皇の出御があつて豊明節会は始まった。関白基房も出席していた。この騒然とした日、宮中で行われた節会で舞った舞姫たちの献上者たち 4 人は次の人々であった。

<公卿>

① 新中納言藤原朝方

権中納言朝方は 13 年前の仁安元年（1166 年）11 月 16 日に「依不参五節」を理由に右大弁を解かれ蔵人頭を停められたことがあつたが（『公卿補任』）、翌仁安 2 年（1167 年）2 月 11 日に待賢門院の御給で 33 歳で従三位に叙せられた。しかし、安元元年（1175 年）11 月 28 日参議となるまで 9 年近くも非参議に留まっていた。そして、この年、治承 3 年（1179 年）10 月 12 日権中納言となり、権中納言となった直後の献上であつた。幸い、五節直後の政変で院の近臣ら 39 人が解官される中、朝方は後白河の近臣ではあつたが解官は免れる。朝方は『平家物語』では寿永 2 年（1183 年）に木曾義仲が入京して解官した 49 人の筆頭に名が挙がる（「三条中納言朝方卿をはじめとして、卿相雲客四十九人が官職をとめておッこめ奉る」[巻第八「法住寺合戦」旧大系⑩160 頁]）。

② 宰相中将藤原実守

藤原実守（32 歳）の任参議は嘉応 2 年（1170 年）12 月 30 日と、8 年も前である。但し、この年治承 3 年と前年の治承 2 年、治承元年には新参議も新中納言もいなかった。邦綱が治承元年権大納言になっているのみである。3 年前の安元 2 年（1176 年）に新参議となった実宗は治承 2 年の 1178 年に献上したと考える。新参議・新中納言がいない中の献上者選びは難しかったのだろう。実守も幸い翌日から始まる一連の解官は免れている。

<受領>

③ 遠江守藤原盛実

藤原盛実俊盛の子で遠江は俊盛の知行国であった（石丸 1971：67 の表）。藤原俊盛のおばの得子（近衛の母、美福門院）が鳥羽上皇の寵を受けると得子は俊盛を自身の知行国の国守に任じた。俊盛は得子の知行国の国守を歴任しその間蓄えた財力で得子に奉仕した。永暦元年（1160 年）4 月 7 日、讃岐守だった俊盛は、息子の季能を讃岐守に申任して守を辞した。美福門院の死（永暦元年〔1160 年〕11 月 23 日）後は後白河院の信任を得て、長寛 2 年（1164 年）に従三位になり公卿に列した。俊盛はこの献上の 2 年前治承元年（1177 年）9 月に 58 歳で出家した（『公卿補任』）。献上者である遠江守盛実自身は人名事典などには登場しない。『安徳天皇御五十日記』に、安徳天皇（治承 2 年〔1178 年〕11 月 12 日生）の五十日の祝で中宮徳子の御膳のうち内殿上堦飯を遠江守盛実朝臣が調進した記述があるぐらいである。（割書で、件国〔遠江〕が大宮権大夫入道俊盛の知行であったことが記されている。）入道俊盛とは勿論、治承元年に出家した父である。俊盛は後白河院にも信任されていたが、治承 3 年以前に出家していたし、息子の盛実もこの政変での解官は免れたようである。（39 人のリストには入っていない。また、遠江が治承 3 年に平家の知行国に組み入れられた様子もない。）

④ ◆ 備後守藤原宗隆

『山槐記』11 月 11 日丑条には献上者名として備後守<宗隆>が挙げられている。『玉葉』11 月 11 日条では「受領<遠江、甲斐>」とある。藤原宗隆は仁安元年（1166 年）生まれだから、この献上の年は 14 歳である。宗隆は承安 4 年（1174 年）に 9 歳で甲斐守となり、甲斐の次には治承 2 年、つまり献上年の前年（1178 年）正月 28 日に備後守になっていた。この年、治承 3 年の五節の日に、軍勢を率いて上京した清盛により、17 日～18 日、甲斐守藤原為明が解官されると、宗隆が甲斐守に再任される。『山槐記』治承 3 年 12 月 12 日に「甲斐守同宗隆<元備後>」とある。五節参入の 11 月 11 日現在は備後守であった。

『玉葉』がこの年の献上者を甲斐としたのは、推測するに、『玉葉』11 月 11 日の条は 1 週間以上遅れて書かれたか、あとで可逆的に直されたか、あるいは宗隆は前年まで甲斐守であったから、まだ甲斐守という意識が強かったかなどの理由によるものではないだろうか。『山槐記』の方は名前もあるので、『玉葉』の方の国名の誤認であろう。宗隆が献上時 14 歳であれば、五節は父の長方（41 歳）が経営したと思われる。長方は故権中納言藤原顕長の長男で、3 年前の安元 2 年（1176 年）12 月 5 日に参議に任じられていた。宗隆自身は建久 9 年（1198 年）参議に昇った。

治承 4 年（1180 年）

本来、安徳天皇の大嘗会となるべき年だったが、新都福原での挙行には貴族たちの反対があり、場所（大極殿など）も整わなかったため、新嘗会となり、『平家物語』に「今年はたゞ新嘗会・五節ばかりあるべきよし公卿僉議あ（ッ）て、なを新嘗のまつりをば、旧都の神祇官にしてとげられけり」（旧大系④378 頁）とあるように、祭祀は平安京で行われ、福原では五節（豊明節会）のみが行われた³³⁴。前年治承 3 年（1179 年）11 月の政変で反平家の多くの人たちは官職を追放されていたから、この年の献上者たちは基本的には親平家の面々であった。翌治承 5 年は正月に高倉院が崩御したため諒闇となり、安徳の大嘗会はさらに寿永元年まで延期される結果となった。

<公卿>

① 藤原実国

権大納言藤原実国（41 歳）は 10 年前、嘉応 2 年（1170 年）から権大納言であり、権大納言となって 2 度目の献上であった。これは当初は左大将の実定の代替である。実国はこの年、治承 4 年 2 月 21 日、安徳の受禪により新院（高倉院）の別当となっていた。この五節の前年の治承 3 年の、いわゆる治承 3 年の政変で 11 月、公卿 8 人を含む後白河院の近臣たち 39 人の官人（『平家物語』では 43 人）が解官された。大臣も例外ではなかった。『平家物語』での実国の登場は、その政変による「大臣流罪」の段で、院側の按察大納言源資時とその息子と孫息子と思われる雅賢が京から追放されることとなり、それを博士判官仲原範定に仰せ付けた上卿大納言がこの実国であった（巻第三「大臣流罪」旧大系④258 頁）。

② 参議藤原定能

この前年治承 3 年（1179 年）正月 19 日参議に任ぜられたが、後白河院の近臣であったので 11 月 16 日治承 3 年の政変により左中將を止められていた（参議は解官されていない）。しかし、この年治承 4 年正月 24 日に朝参を許された。管絃に秀でていた³³⁵。兼実と親しく九条家に奉仕した。寿永 2 年、平家の都落に際して姿を隠していた後白河が比叡山へ御幸したと聞いて駆けつけた大勢の公卿・殿上人たちの中に定能もいた（旧大系④119 頁）。

³³⁴ 新嘗祭祭祀には天皇不出御の例も多く、序章の注でみたように天皇不出御の新嘗祭の儀礼も定まったものがあつたから、祭祀から切り離れた五節が前代末間の清盛の横車だったとは言えない。ただ、神事にかかわる人たちの京・福原の物理的移動距離は何ともしがたかった。

³³⁵ 中原有安の教えを集めたといわれる『胡琴教録』にも「当世に管絃のかぶととすべき人おほかたなきなり。藤中納言<定能>。こそどうだいなり。かつは物よくならひたる人なり」（群書類従第十九輯 137 頁）と紹介されている。

<受領>

③ 因幡守藤原隆清

因幡は権大納言藤原隆季が知行主で、息子である隆清が国守となっていた(承安4年[1174年]隆保の献上の項参照)。隆季は親平家の先鋒でもあった。この年の新嘗祭の開催にあたっては、隆季は清盛の福原開催を支持して九条兼実と対立している。『吉記』の割書によれば、舞姫献上は初め備後守保房が予定されていたが急な服のため、因幡に替えられた。因幡も帥大納言の知行国であり、急に他人には替えられないからだという。帥大納言はこの時、隆季である。保房は人名事典などには見当たらないが、隆季の子供たちの名が隆房、隆保、隆雅、隆清、保実などであるので、保房もやはり隆季の子であるか、あるいは忠実な近親として隆季の知行国の守となったのであろう。保房が献上できなくなったので、隆季が知行する因幡守を代替としたのである。

④ 但馬守平経正

経正は清盛の弟経盛の子で長子と考えられる。経正の献上の年の前年治承3年の政変で、清盛は後白河院を鳥羽殿に軟禁し、後白河の院分受領国中の13国の受領を一挙に獲得したが(石丸1971:73)、但馬はその時に平家の知行に入った国の一つで、国守の源信賢が解任されて、代わって経正が国守に任命された。したがって、治承4年のこの五節は、経正が但馬守となって初めての迎える五節であった。

経正は琵琶の名手だった。巻第七「竹生嶋詣」(旧大系⑩63-65頁)では、木曾義仲を追討する副将軍として近江へ進軍した折に琵琶湖の竹生島にわたり、上玄石上の秘曲を演奏すると明神が白竜となって袖の上に現れた。また、名器「青山」との関連で『平家物語』の名場面を作る。巻第七「青山之沙汰」は、青山の由来を語るが、まず、経正が17歳の時に宇佐八幡へ勅使として下る時、青山を賜って持って行き、神前で秘曲を演奏して伴の宮人たちが感涙にむせんだ逸話を載せる(旧大系⑩107頁)。同じく巻第七「経正都落」(旧大系⑩105-107)では、寿永2年(1183年)の平家の都落ちに同行するに際して、名器「青山」を仁和寺宮に返却しに行き、宮と別れに歌を交わした(ここでは弾いていない)。経正の生年は不明だが、仁安元年(1166年)に従五位上に叙せられている³³⁶。父の経盛の昇進は異母弟たちより遅く³³⁷、例えば叙・加階では異母弟教盛に比べ年齢的には6〜8年遅れているので³³⁸、仮に経正の昇進も教盛の長子の通

³³⁶ 『兵範記』仁安元年(1166年)11月14日条の加階の記事の中に「平経正<上西門院久寿元年>」とあり、久寿元年(1154年)の「御給」の脱落とみられる。

³³⁷ 生母の出自のためか。

³³⁸ 従五位下になったのは、教盛21歳・経盛27歳。従五位上は、教盛26歳・経盛34歳、正五位下は教盛30歳・経盛37歳という具合である。経正の弟たちの官位は不明であるが、教盛の長子通盛をみると、従五

盛に 6 歳遅れとすれば仁安元年は 19 歳前後であろうか。経正は歌も能くしたので、筑紫では忠度、経盛（父）と歌を詠みあっている（巻第八「緒環」旧大系⑤129）。経正は一の谷の汀で船に向かう途中、河越小太郎重房の手勢に討たれた（巻第九「知章最期」旧大系⑤222-223）。

養和元年（1181 年） 諒闇（高倉院崩御）につき五節停止。

寿永元年（1182 年） （安徳天皇大嘗会）

この年五節そのものの記録は一次史料には見出せないが、寿永元年の安徳天皇の大嘗会の御禊の行幸については『玉葉』に記事がある。そこには、節下の大臣をつとめた宗盛が供奉の間 2 度落馬したこと、節旗の柄が折れて不吉だったということが語られる。『平家物語』にもやはり寿永元年の大嘗会御禊が登場するが（巻第十「藤戸」旧大系⑤296-297 頁）、内大臣宗盛初め、平家の公達のりりしい姿が描かれている。これに対して元暦元年（1183 年）の供奉の義経などは「平家のなかのゑりくづよりも猶おとれり」と見下げられている。ここにおける平家の公達の賛美は、あたかも平家への鎮魂歌の一つの役割を担っているようだ。

寿永 2 年（1183 年） 五節停止。

元暦元年（または寿永 3 年）（1184 年） （後鳥羽天皇大嘗会）

この年は安徳天皇を奉じた平家が 2 月に一の谷で大敗し、重衡が生虜となり、維盛の戦線離脱があり、源氏の範頼が西国へ下向した年である。前年の寿永 2 年（1183 年）8 月 20 日、平安京では後鳥羽天皇が神器のないまま践祚した。そして、この年寿永 3 年（平安京では元暦元年）7 月 28 日、剣璽のないまま後鳥羽の即位式が挙行されて、この年の五節は大嘗会となった。『玉葉』記主兼実も剣璽もない即位式には反対した。献上者のうち良通は童女御覧を勤仕し、頼実も参入の儀を勤仕した。他の 3 人の献上者たちはどちらも奉仕しなかった。

<公卿>

① 権大納言右大将藤原（九条）良通

良通（18 歳）は摂政関白兼実の嫡男。献上の 2 年前の寿永元年（1182 年）10 月 3 日に権大納言になっていたのが権大納言になって 2 年目の献上である。童女御覧を勤仕するよう後白河から催促を受け、父兼実は再三再四断ったが、結局童女の装束の下賜を条件に受けざるを得なかった。

当時は良通のライバルで、清盛の後見を受けていた基通が摂政だった。後鳥羽の践祚によっ

位下は 8 歳（1160 年）、従五位上は 13 歳（1165 年）である。仮に通盛より 6 歳遅れとすれば 1166 年の従五位上昇叙の時は 19 歳前後であろうか。通盛は寿永 2 年には従三位（非参議）であるが。

て、基通は寿永 2 年（1183 年）11 月 21 日一時摂政を停められたが、この献上年の寿永 3 年（1184 年）正月 20 日、摂政並びに氏の長者に復帰していた。この復帰には後白河との男色関係も噂されている。しかし、文治 2 年（1186 年）3 月 12 日に基通は摂政並びに氏の長者を停められて、10 月 29 日良通が 20 歳で内大臣に任ぜられた。摂関家の後継として父兼実が期待したが、良通はこの 2 年後の文治 4 年には 22 歳で急死する。『平家物語』での良通の登場は治承 4 年の福原遷都で、頼盛の邸が皇居となったので凡人である頼盛が賞として正二位となって、位階において凡人に摂関家の子息である良通が超えられたという記述がある（巻第五「都遷」旧大系⑤331-332 頁）。

② 左兵衛督藤原頼実

頼実（29 歳）は左大臣経宗の長男。後白河の近臣だったが、治承 3 年（1179 年）の政変でも解官されずに、11 月 7 日³³⁹、25 歳で従三位となり公卿に列した。献上の前年の寿永 2 年 4 月 5 日に参議を経ずに権中納言に任ぜられているので、権中納言となった次年の献上である。頼実は嘉応元年（1169 年）にも常陸介として舞姫を献上している。

③ 平宰相親宗

平親宗は高棟王流の平氏で後白河の近臣。治承 2 年（1179 年）にも息子の加賀守親国の献上を実質的に経営している。親宗は平時子の兄弟ではあったが、後白河の近臣として治承 3 年の政変で解官された。寿永 2 年（1183 年）正月 22 日には参議となったが、木曾義仲により 12 月 28 日に解官された。木曾義仲失脚後、この年寿永 3 年（1184 年）9 月 18 日参議に還任した。

親宗は『平家物語』では巻第十一「一門大路渡」の章段で、白の狩衣（浄衣）を着た宗盛が八葉車に乗って大路を渡される時、前々年、宗盛の内大臣就任の華やかな行列に扈從した殿上人 16 人の筆頭に蔵人頭親宗の名があげられる（旧大系⑤352 頁）。

<受領>

④ 但馬守藤原範能

範能は正三位参議左京大夫藤原修範の長男。嘉応元年（1169 年）12 月 30 日に院分国である尾張守となった。献上の前年、寿永 2 年（1183 年）8 月 16 日に但馬守に遷った。この年の 11 月 12 日の大嘗会叙位で従四位下に昇叙されている。こののち建久元年（1190 年）に従三位になっている。遷但馬守の翌年の献上である。『平家物語』では、巻第十一「内侍所都入」で内侍所を迎えに行った人々の中に但馬少将範能（教能）がみえる（旧大系⑤344 頁）。

³³⁹ 『公卿補任』によるが、おそらく 11 月 17 日の誤記だろう。

⑤ 紀伊守藤原範光

範光は寿永2年(1183年)には紀伊守となり、紀伊守となった翌年の献上である。異母姉妹の範子・兼子が乳母となった尊成親王が即位(後鳥羽天皇)すると権勢をふるう。建仁元年(1201年)従三位、極官は従二位権中納言。範光は『平家物語』では後鳥羽即位を可能にした重要人物である。京に残っていた尊成親王(四の宮)を迎えに来た平家と共に、西国へ向かうべく西八条まできたところ、尊成の乳母範子の兄である紀伊守範光が押し止めた。すると翌日に後白河院から迎えの車が来て尊成は即位(後鳥羽)できたという(巻第八「山門御幸」旧大系⑩122頁)。しかし、後鳥羽即位後は範光には恩賞もなく歳月を送り、思い余って宮中に2首の歌を落書したところ、それを主上がご覧になって、正三位の位を与えられたという。また、義仲との合戦に後白河院方が敗れ、法皇は法住寺殿を出た時、天皇后鳥羽は池に船を浮かべて避難するが、その時、七条の侍従信清と紀伊守範光が供奉して兵たちが矢を射かけるのを止めさせた(巻第八「鼓判官」旧大系⑩157頁)。

文治元年／寿永4年(1185年)

この年3月24日平家は壇ノ浦に滅ぶ。平家滅亡後の11月の平安京の五節である。

<公卿>

① 権中納言藤原経房

『吉記』の(吉田)経房(44歳)は後白河院の信任が厚く、実務官僚として順調に出世、養和元年(1181年)に参議に昇進し、2年後に従三位に叙された。献上の前年の元暦元年(1184年)9月18日権中納言に任官。平氏都落ち後は源頼朝と朝廷の取次ぎ役となった。

『平家物語』巻第十二「吉田大納言沙汰」(旧大系⑩393-393頁)でも、鎌倉殿は、朝廷への奏聞は経房に任せたこと、また、経房は人にへつらわない立派な人であったので、それは自ずから現れて(「人の善悪は錐袋をとほすとてかくれなし」、昇進は人を超えることはあっても、人に超えられたことはなかったと言ひ、世にまれな人だったと最大級の賛辞を贈っている。また、巻第十一「内侍所都入」では文治元年(1185年)4月25日、壇の浦から引き揚げられた内侍所と神璽の都入りを鳥羽まで迎えに行った公卿の筆頭に名が挙げられている(旧大系⑩344頁)。

② 新宰相中将源通資

源通資(44歳)は、この年文治元年(1185年)6月10日任参議。参議となった年の献上で

ある。通資は内大臣にまで昇った源雅通の息子だったが、父の死後は叔父の雅定の養子となった。晩年の元久 2 年（1205 年）6 月に内大臣任官の話が出たが通資は重篤な病の床にあった。女院が任官させるように責め申したが勅許は出なかった。しかし、信清卿が通資邸へ使いに来た時、通資は誤解して大臣に任じられたと披露してしまったので家人や雑人たちは通資を大臣殿と称したが、結局勅許を得ることなく 7 月 8 日に薨去したという（『明月記』6 月 19 日条、7 月 8 日条）。

<受領>

③ ★ 美作守藤原公守

この年の受領献上者としては、『玉葉』文治元年（寿永 4 年 [1185 年]）11 月 22 日条の割書に「美作、内大臣知行」とある。文治元年の内大臣は藤原実定（47 歳）である。美作国は治承 4 年（1180 年）正月 28 日に藤原公守が国守に補任された（『玉葉』）。公守は実定の次男である（『尊卑分脈』）。この五節の直後の文治元年 12 月 27 日には知行国主は実定の兄弟の実家で、29 日には実家の次男の公明が知行国主となるが、11 月現在で実定が知行国主なら息子公守が美作国守として献上者ということになる。公守は 12 月 29 日に越前守となったが（父実定が知行国主）³⁴⁰、その人事は頼朝の介入といわれる（佐藤圭 2012 : 362）。

④ ◆ 越前守高階隆経

受領献上分として上記史料割書の「美作内大臣知行」に続いて「越前泰経卿」とある。「服藤リスト」には越前守泰経とあるが、泰経は知行主であるから、越前守は別人であろう。泰経は後白河院の寵臣で、この時既に公卿であるので、受領にはならない。この五節の当時、越前守だったのは泰経の息子とみられる高階隆経である。『玉葉』文治元年（1185 年）12 月 18 日条に、前日に高階高経（隆経）が解官されたという記事があるので、11 月五節の日（22 日が参入日）の越前守なら隆経だろうが、朝廷としては献上は泰経が責任をもってさえくれればいいので、美作同様、献上者の名前に関心は薄かったのだろう。高階泰経は、若狭守で終わった高階泰重の息子で生没年不明。文章生から始めて、蔵人や各地の受領を歴任した。治承 3 年（1179 年）の政変では右京大夫・大蔵卿・伊予守を解官され、治承 5 年（1181 年）5 月 26 日更任した。寿永 2 年（1183 年）2 月 21 日従三位に叙せられて、「卿」と呼ばれる身分になったが、その年の 11 月 28 日木曾義仲により院の近臣として大蔵卿は解官されてしまうが、義仲の失脚とともに復帰した。泰経はこの献上の年文治元年（1185 年）12 月 27 日義経の謀反に与同したとして頼朝の怒りを買って解官され、29 日に伊豆の国に配流と決まるが、下向することはなかつ

³⁴⁰ 越前守になって半年足らずで落馬がもとで死亡したという（佐藤圭 2012）。

た。4 年後に許されて出仕して正三位に昇った。

以上、元永元年（1118 年）から寿永 4 年（1185 年）の献上者たちについて考察してきたが、これらから見えてきたことを次節にまとめた。

第3節 『平家物語』の時代の舞姫献上者たちとは

(1) 公卿

五節の舞姫献上に平安時代中期から公卿分にはまず新参議、次いで新権中納言が命じられるのが定例であり、これは『平家物語』が描く時代でも変わらなかった。このことは本章第2節の元永元年（1118年）から寿永4年／文治元年（1185年）までの献上者たちにより確認された。以下は、本章第2節で昇任関係が判明する献上者たちを通覧した結果である。「年」は五節献上年を示す。

a. 参議・中納言になった年、または昇任して初めて迎える五節で献上を命じられた貴族たち

<u>年</u>	<u>新参議 17人</u>	<u>年</u>	<u>新中納言 14人</u>
1119年	源雅定	1119年	藤原実隆
1122年	藤原顕隆		
1130年	藤原忠宗	1130年	藤原長実
1132年	藤原宗能、藤原実光		
1134年	藤原家保	1134年	藤原顕頼
		1136年	藤原成通
1142年	藤原経定、藤原顕業		
1145年	藤原忠雅		
		1149年	藤原清隆
1150年	源雅通	1150年	藤原経定
1151年	藤原師長		
1153年	藤原兼長		
		1154年	藤原師長
		1160年	藤原公光
1166年	藤原成頼		
		1166年	平重盛（任参議も同年）
		1167年	藤原光隆
		1168年	平時忠

		1169 年	藤原邦綱
1171 年	藤原頼定		
1177 年	藤原長方	1177 年	藤原成範
		1179 年	藤原朝方
1184 年	平親宗（還任）		
1185 年	源通資		

b. 前年の五節以前と前々年に昇進した献上貴族たち

<u>年</u>	<u>新参議 7 人</u>	<u>年</u>	<u>新中納言 11 人</u>	<u>年</u>	<u>新大納言 4 人</u>
1124 年	藤原為隆	1124 年	源雅定		
1135 年	藤原実衡				
1143 年	藤原教長				
1151 年	藤原経宗				
1152 年	藤原為通				
		1157 年	藤原朝隆		
		1158 年	藤原伊実	1158 年	藤原重通
		1160 年	藤原雅教		
		1161 年	源定房、藤原顕時		
		1166 年	平親範		
				1169 年	藤原実房
		1168 年	藤原成親		
		1170 年	藤原忠親		
				1172 年	藤原実国
1178 年	藤原実宗				
1180 年	藤原定能				
		1184 年	藤原頼実	1184 年	藤原良通
		1185 年	藤原経房		

c. 五節の直後（年内の 12 月あるいは翌年の正月）に昇進・昇叙した人たち 3 人

1136 年 藤原頼長 12 月 9 日 権大納言 → 内大臣

1153 年 藤原兼長 12 月 12 日 参議 → 権中納言
1170 年 源資賢 12 月 30 日 参議 → 権中納言

d. その他、参考までに、献上の 3 年前に昇進したもの

1118 年 源重賢 任中納言
1120 年 源能俊 任権大納言
1125 年 源顕雅 任権中納言 藤原宗輔 任参議 源顕雅 任権中納言
1152 年 藤原資信 任参議

以上、1118 年から 1185 年まで献上公卿（延べ）94 名³⁴¹のうち、新しく参議あるいは中納言になって初めて迎える五節で献上したもの（a グループ）は、それぞれ 17 人と 14 人。前年の五節以前または前々年に参議、中納言、あるいは大納言時に昇進したもの（b グループ）は、それぞれ 7 人、11 人、4 人で、新任と呼べそうなこの 2 つのグループの合計は 53 名である（56%）。11 月の五節の直後（12 月あるいは翌年の正月）に昇任して、五節との関連が考えられる公卿（c グループ）も 2 名いるが、この数字に含めていない。また大臣昇任者も含めていない。この 56% という数字は多く思えないかもしれないが、現任の参議も中納言（含む権官）も、それぞれ定員いっぱいの 8 名が続いて、辞任・死亡などによる空きが出ないと、何年も続けて新しい参議・権中納言が誕生しないことがあることを考え合わせたい。そのような時、久安元年（1145 年）藤原忠雅がひたすら舞姫献上のために 9 人目の参議に任ぜられた例を考えれば、『平家物語』の時代にも、五節献上は、まずもって新任参議の役目と理解されていたと考えてよいだろう。献上すべき公卿が服喪、あるいは故障となれば、任官して久しい大納言たちや大臣たちも献上を命じられることになる。受領に比べると収入の原資の限られている公卿たちには余裕のないものも多い。大治 2 年（1127 年）に他の公卿たちの服喪により、3 度目の献上を命じられた藤原宗忠（『中右記』記主）のぼやきももっともに思われる。この時やはり急遽代替として五節を献上した従二位権大納言治部卿源能俊は五節参入の日に、息子である源俊雅の昇殿を許されている。

官人たちは公卿になれば国守は辞するのが原則であるが³⁴²、収入確保のためには、やはり領

³⁴¹ 1122 年献上の藤原顕隆も加えてある。

³⁴² 公卿でありながら受領を兼ねた者がいなかったわけではない。

『大間成文抄』第五に「公卿任受領」の例が挙げられている。従三位源資綱の備前守補任についての例であるが、6 人のうち『公卿補任』で確認できるのは参議藤原通任の近江守、参議藤原資平（但し、美作守。伊予は権守）、参議源朝任の備前守の 3 件のみ。また、最後の年が長元 2 年は 1029 年であるから、平家の時代より 1 世紀以上前の例である。

長保元年（999 年） 近江守従三位源泰清 兼

国（知行国）獲得を望み、得られた場合には多くの場合は息子を国守にする。公卿たちも、息子の国守への任官には奔走して、息子を受領に申任するため自らの官職を辞す者も出てくる。天永2年（1111年）正月23日に権大納言源俊実（66歳）は息子の忠高を美濃守に申任して権大納言を辞退、また永治元年（1141年）には権中納言の藤原顕頼が息子の惟方を越前守に申任して権中納言を辞し³⁴³、康治2年（1143年）11月には権中納言の藤原実光（75歳）は息子の光盛の和泉守の重任を願って、権中納言を辞す旨を申し入れている³⁴⁴。また、仁安2年（1167年）2月11日には按察大納言の藤原公通51歳が息子の実仲を下総守にするため、権大納言を辞した（按察使は如元）。（以上4人は『公卿補任』から、天仁元年〔鳥羽天皇〕以降寿永3年までの前中納言以上の散位たちを追って拾った。すべての例は尽くしていないかもしれない³⁴⁵。）公卿が息子などを申任して官職を辞すれば、年齢による致仕などと違って、「理解」（「理」

同2年（1000年）	近江守従三位菅原輔正	兼
治安3年（1023年）	美作守従三位藤原通任	兼
万寿元年（1024年）	伊予守従三位藤原道雅	兼
長元元年（1028年）	伊予守従三位藤原資平	兼
同2年（1029年）	備前守従三位源朝任	兼

上島亨（2020：763）の著した表1に「11世紀以降における公卿の国守補任」を『公卿補任』からまとめている。上島の表には長保元年（1001年）から康平4年（1061年）まで19名が挙がる（うち9件が備前守、3件が播磨守）。

どちらの表の公卿にしても、公卿は受領を兼任しても短期間が多い。やはり、公卿本人が受領を兼任する例は大変少ないといえるだろう。

³⁴³ 『公卿補任』前田家本によるという。他本は息子の光頼を以って権右少弁に申任したという。顕頼は中納言は辞したが、同日民部卿に任ぜられている。

³⁴⁴ 実光は翌年出家した。この時の辞官の申し入れは容れられなかったようだが（「然而不被下止納言宣旨」、翌年の天養元年（1144年）無事、光盛の和泉国守重任が見える（「依勘例」とある）。

³⁴⁵ 受領にではないが、息子の官職を申任して辞官した者もいる。

- 保安3年（1122年）藤原長忠（65歳）が12月17日に権中納言となるも、21日は息子能忠を権右少弁に申任して権中納言を辞した。
- 長承4年（1135年）4月9日権中納言の源雅兼（57歳）は息子の雅綱を権右少弁に申任して権中納言を辞した。雅兼は12月12日に出家した。
- 保元3年（1158年）中納言藤原資信（77歳）が中納言を辞する時には猶子の資忠を木工頭に申任した（資信は11月8日に出家。同月18日に薨）。同年中納言藤原忠雅35歳は左衛門督を辞して弟の右少将忠親を左中將に申任した。
- 平治2年（1160年）太政大臣藤原宗輔（84歳）は息子の参議俊通の右中將の兼任を申して上表した。
- 永暦元年（1160年）権大納言藤原末成（49歳）は息子の公光の権中納言を申任して権大納言を辞した。長寛元年（1163年）には権中納言藤原雅教（51歳）が息子の駿河守雅長の左少將を申任して中納言を辞した。（雅長の駿河守は如元）。
- 長寛2年（1164年）には内大臣藤原宗能（81歳）が上表、息子の宗家の叙正三位を申した。
- 永万2年（1166年）権中納言顕長（50歳）は6月6日左衛門督を辞官して、外孫の公綱の左衛門佐を申任し、8月27日に権中納言を辞して、息子の左少將長方の右衛門佐の兼任人を申した。顕長自身は皇后宮大夫は留任した。
- 仁安元年（1166年）権中納言顕時（57歳）は息子の丹波守盛隆の木工頭を申任して権中納言を辞した。
- 安元2年（1176年）前権中納言治部卿藤原光隆（50歳）は治部卿を辞し息子の家隆の侍従を申任した。

のある解)ではないので、職封・職封・季禄はすべてを失うことになるが³⁴⁶、受領の領国からもたらされる財のほうが大きかったのである。(実光の場合には 70 歳以上であるので、致仕できる年齢ではあったが、それでも息子の任下総守のほうが大きかったのだろう。) 領国の獲得は一家を挙げての大事であった。

(2) 受領

舞姫献上は公卿で賄いきれない分を后妃や弁官や昇殿している受領たちが担ってきたが、後一条朝のころからは、受領が五節 2 名分を献上するのが定められた。これらは、摂関家家司を中心とした殿上人の受領であった。しかし、『平家物語』の描く時代、すなわち 12 世紀になると、受領の任命制度も変わっていった。財力を蓄えた受領たちに恃むところがいよいよ大きくなり、殿上・非殿上にかかわらず、富裕とみられる受領が選ばれて五節の献上が申し付けられた。

平安中期には、貴族の日記類において、献上者の列挙は、殿上分・公卿分の順で書かれていた。殿上分とは、公卿分の不足を天皇が補足するため、蔵人経験者など天皇に侍臣が代わって献上するという意味合いがあったからだと推測されている。しかし、平家の時代にはその意味合いはなくなり、殿上・非殿上を問わず、財力のある受領に献上が命じられることになったので、献上者の列記は公卿分・受領分の順で記されるようになっていく³⁴⁷。

受領の任命については、『平家物語』の時代には、全国 66 か国のうち蔵人や史の労（在任年数）によって任命される数が減り、院が国主の任命権をもつ院分国を側近・寵臣たちに与える数が増えた。こうした院分受領国においては国務は受領が沙汰して、税收の一部が院に納められるが、石丸熙（1971）によれば、院が決定権を持つ院分受領国は増大して、鳥羽院政末期までに約 30 国の固定を見るようになったという。固定的院分受領国となった国々としては和泉、摂津、尾張、三河、甲斐、美濃、信濃、陸奥、若狭、越前、加賀、能登、越中、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、淡路、播磨、美作、備前、備中、備後、周防、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、筑前の 31 国の名が挙がる。これら院分国 31 国にはいわゆる熟国が多いが、受領（特に

³⁴⁶ 致仕の場合には、季禄は支給されない（位田・位封・位禄は在任中のまま）が、「理解」として職封・職田は致仕前の半分が支給される。辞官であっても「理解」には半分が支給される（〔高橋崇 1970 : 191-194〕及び『平安時代史事典』「致仕」〔藤木邦彦〕、「職封」〔阿部猛〕などの項を参照した）。但し、この時代には、すべてにおいて支給は滞りがちだったが。

³⁴⁷ しかし、例えば『兵範記』嘉応元年（1169 年）10 月 13 日条は「可献五節舞姫人々、殿下^{マツ}常陸介頼実朝臣、伯耆守宗頼、権大納言藤原朝臣、権中納言藤原朝臣」と、受領分が先に来ているが、殿上分（下は上の誤りだろう）という意識があったからかとも思われる。藤原頼実は大名家の息子で 1168 年に滋子の皇太后宮権亮になっていることなどからして殿上人と思われる。

熟国の受領)の任命の鍵を握るのが治天の君の院となれば、近臣たちも院の歡心を買って受領に任せられるべくせつせと成功をなす(「受領功」)。これには、院が命じて受領が応じる成功と、受領が自発的になす成功があったが、特に前者は、造営の規模が大きいものが多いだけ、褒賞も大きかったようである。多くの受領が成功に励むと必然、成功競争も激化する。競争を勝ち抜くために、成功にさらに成功を加える「超越功」もなされる。そして、受領任命が成功の結果となると、蔵人や史などからの労・巡による新叙にまわせる国はいよいよ少なくなる。これは、一たび獲得した国(知行国)も一度手放すと再度の獲得は難しいことにもなることでもあり、手放さずに済むように「重任功」や「延任功」あるいは次の国を約束される「遷任功」も行われた。

つまり、舞姫を献上した受領たちの多くは、それまでの受領のように長年の労や巡によって受領に就任したものでなく、院に奉仕して院の意向によって領国を獲得した近臣たちであったといえるだろう。結果として本論本章第2節でも考察したように、この時代の記録に残る受領献上者は全員が重任・延任・遷任者で、かつ任国はいわゆる熟国であったことが確認できる。国守の4年間で富を蓄え、重任・遷任となると蓄財は一層の拍車がかかる。そのような裕福とみなされる受領に五節献上は割り当てられたのである。

『今昔物語集』には、舞姫を献上した尾張守が五節所で殿上人たちにいたぶられる話が載っている(『今昔物語集』卷二十八「尾張守□五節所の語第四」、新編④159頁)が、ここから寺内浩は、尾張守が、前司が亡弊させた尾張国を努力して復興させて3年、「収入も増やしたであろう受領に対してさっそく五節が割り当てられている」ことを読み解いている(寺内2004:97)。この老尾張守は「亦、此ノ五節奉ル事ハ、己ガ好テ望テ奉ルカハ。天皇ノ押宛被責レバ、堪難ケレドモ奉ニコソ有レ」、すなわち「自分で望んだことではない。天皇に押し付けられたから仕方なく献上したのに」と、息子にぼやいている。

領国は成功によって獲得されるもので、五節献上の対価ではなかったが、五節の献上を服などのそれなりの理由なしに断れば、院の勘気を買ひ、次の重任・延任はあやうくなりかねない。したがって、受領たちは、物入りで難儀な五節献上を、蓄財に対する役課として受け入れ、奉仕することによって、さらなる重任・遷任への道を決かなものにするステップとしていたのである。

五節を申し付けられる受領は、第1節でみたように重任・遷任国司などが中心だが、不都合な人が多く出た場合には、初任の人も候補となった。以下の『山槐記』応保元年(1161年)9月30日条がそれを示している。

応保元年九月卅日乙酉 天陰、晩雨下、去夜蔵人治部大輔行隆被綸言示送曰、五節事可申

沙汰者、申承了之由、仍公卿受領く遷任国司等也、但無便人不幾、仍初任人少々書之、未役人々書折紙³⁴⁸、未刻参内奏聞く至于明日内裏有五体不具穢、仍不昇殿（後略）。

「五節のことを申し付けるべき者からは返答はあったので、公卿受領ともまだ五節を勤仕したことがない（未役）人々を折紙に書いて未の刻に参内して奏聞する」という内容だが、「（受領は）遷任国司などだが、都合の悪い人が少なくないので、初任の受領も少々入れる」という旨の割書がある。『平家物語』の時代には、まず未役の者が選ばれるが、受領は国守新任者より、遷任や重任を許された受領が真っ先に候補となり、難航する場合には初任も候補となったようである。

忠盛は院分国の受領となり、自身が国守になったが、知行国制の進展とともに幼年受領が多くなった。知行国を得られることになった近臣も息子を国守に申任した³⁴⁹から、5歳やそこらの幼年受領も出現する（寺内 2004：150）。（勿論、そのような幼年では受領といっても名ばかりで、受領の実務は父が担った。）知行主にとって国守は自分と利益を一つにするものである必要があったので、独立前で自邸に暮らす若年の息子は最適であった。幼年受領の国宛ての賦課は国守に宛てて発符されたが、賦課を領状して差配する実質上の国守はやはり父親（知行主）であったから、仁安3年（1168年）の14歳の平保盛に宛てて命じられた舞姫献上も、実際は父頼盛が経営することは万人の了解事項であったからこそ、父頼盛の解官の理由に五節の「失態」が使われたと思われる。

おわりに

五節の舞姫献上者には平安時代中期から公卿分にまず新参議、新権中納言が命じられるのが定例であり、これは『平家物語』の時代でも変わらなかった。適当な献上者が見つからなかった久安元年（1145年）には、五節献上のために藤原忠雅が9人目の参議となった例もある。

しかし、受領分のほうは、記録に残る献上者では新任は見られず、重任や遷任ばかりである。献上者となった受領たちは前後して、重任・遷任を許されているものが多いが、それらは基本的に成功の成果であり、舞姫献上の直接の見返りとはいえない。院が意のままに国守を任命できる国が増えれば、蔵人や史が巡で任命され得る国の数は減り、新任はいよいよ少なくなって

³⁴⁸ 折紙：古文書の用紙の形。1枚の和紙を横に半折したもの、またはそれを用いた文書。平安時代末よりみられる。『日本大百科全書（ニッポニカ）』の解説より。

³⁴⁹ 公卿でなくても、受領が同時に2か国の受領となることはできない。

ゆく。受領たちは任国を失わないようますます成功に励んで重任や遷任を手に入れる。朝廷のほうでも、彼らの成功によって多くの造営を成し遂げる構造が出来上がる。こうした重任・遷任によって、より豊かな蓄財が期待される受領に舞姫献上は命じられ、受領たちも蓄財に伴う負担として受け入れていたのである。

第三部 五節と女性たち

第1章 五節舞姫を献上した女性たち

はじめに

序章でみたように、11月の五節の舞姫は新嘗祭の年には4名、大嘗祭³⁵⁰には5名が献上される。新天皇の即位³⁵¹が7月以前だと大嘗祭は当年の11月に、即位が8月以降だと翌年の11月に行われる。最終日に天皇は豊楽殿または紫宸殿において群臣に宴を賜う。いわゆる豊明節会である。豊明節会では4人の舞姫（大嘗祭では5人）たちが天皇・公卿群臣の前で五節の舞を舞う。新嘗祭のハイライトとして、宮中の人たちが心躍らせる五節は、多くの文学作品にも登場する。殿上人たちにとっては大きな楽しみだった。豊明節会は新嘗祭では辰の日に行われる。大嘗祭では祭祀の日は新嘗祭と同様に卯の日であるが、辰の日に主基節会と清暑堂御神楽が、巳の日に悠紀節会が行われるので最終日の豊明節会は午の日になる。五節舞のいわば本番は最終日の豊明節会での舞であるが、例年、舞姫たちは丑の日（初期には子の日）に参入して、常寧殿に設けられた控え室に入る。丑の日の夜、常寧殿での帳台試に臨み、翌日寅の日に清涼殿の御前試で舞う。宮中のキサキや女房たちが五節舞を見るのは寅の日の清涼殿での御前試の舞である。

舞姫一行を仕立てる役目は公卿や殿上人などが担ったが、多くの財力を費やさねばならなかったもので、献上したがない者も多く、献上者選びは難航することも多かった。男性官人たちは、新たに昇進したものを中心に献上が命じられていったが、序章でも述べたように舞姫献上者の負担は重く、献上者選定は苦労の種だった。そこで公卿たちに加えて女御も巡番に献上させるような制度ができた。さらには后、内親王（親王）も献上者の候補となった。女性をも献上者とした規定を示す文献としては、鎌倉初期の成立とみられる儀式書である『年中行事抄』が、「寛平御誠に云」として引いている記述に「毎年五節。無人進出。迫彼期日。経営□□□□□□卿之中。令貢二人。雖非其子。必令求貢。殿上一人選之召之。当代女御又貢一人。公卿女御依次貢之。終而復始。以為常事。須入十月節召仰」（下線付加）とあって、殿上1名の他、当

³⁵⁰ 天皇即位後初めての新嘗祭を大嘗祭と呼ぶが、古くは明確な区別なく使われた。

³⁵¹ この場合の「即位」は踐祚でなく即位の儀をさす。

代女御 1 名も献上者となり公卿女御は次いでにより（順番に）貢ぐ、一巡したら初めに戻るようにとある。「寛平御遺誡」は宇多天皇が寛平 9 年（897 年）、譲位に際し、新帝となる 13 歳の息子の醍醐天皇に与えたものであるが、原文は残っていない。（現存は残欠本。群書類従所収のものには、女御の献上に言及した箇所はない。）また、源高明の『西宮記』恒例第三／十月に「上卿五節被仰受領、弁官有女子輩、（或二人、式部大輔在昌、献上卿五節之、）后宮親王尚侍女御諸卿等献之、大嘗会年五人、預爵諸卿受領召其身仰」（下線付加）とあって、弁官が献上者となる時は女子のあるものを選ぶことと、后、親王（内親王の意であろう）、尚侍、女御も献上者となることを示す。『小野宮年中行事』の「十月」に「三日以前点定五節舞姫事。藏人頭奉仰召仰可献五節舞姫之公卿或親王。但后妃。女御。尚侍可献之。別遣中使令仰示矣。又殿上舞姫召仰四位五位有女子之者。殿上舞姫。或一人。或無之」とあって、10 月の 3 日以前に献上者を決めることに続いて、后妃、女御や尚侍が舞姫を献上する時は別に中使が発遣されると規定しているので、后妃、女御や尚侍も献上を担う者として期待されていたことがわかる。なお、『小野宮年中行事』では、殿上の舞姫は四位五位の中から女子のある者を選び、殿上の舞姫は 1 人だったりあるいはないこともあるといっている。献上者の内訳が公卿から 2 名（大嘗祭は 3 名）と受領から 2 名という分担が定着したのは後一条朝のころからである（服藤 2015 : 49）。

舞姫は例年 4 人（大嘗祭には 5 人）だから、献上者も毎年 4～5 名いるわけで、藤原実資のように生涯に 4 度も献上した貴族もいる。男性官人の場合には、舞姫献上は昇進と表裏一体であったが、后妃の場合昇進とは無縁である。舞姫を献上した女性たちは、どのような状況下で献上者となったのだろうか。なお、記録に残る女性献上者はすべて新嘗会における舞姫献上であったので、以下すべて新嘗祭についての考察となる。

舞姫献上者たちについてはいくつか先行研究によって、献上者がリスト化されており、女性献上者も特定されている。第三部においては、三上啓子（2001 : 34-35）、寺内浩（2004 : 86-87）、藤本勝義（2008a : 121-122）、佐藤泰弘（2009 : 25-31）、服藤早苗（2015 : 巻末）のリストを適宜引用する。

和暦	（西暦）	献上者	献上者リストに挙げている研究者	備考
天慶元年（938）		皇太后／中宮藤原穩子	寺内、佐藤、藤本、服藤	a
天元元年（978）		内親王資子	三上、寺内、佐藤、藤本、服藤	
永延 2 年（988）		皇太后藤原遵子	三上、寺内、佐藤、服藤	
		皇太后詮子	藤本	
永祚元年（989）		太皇太后昌子内親王	三上、藤本、服藤	
正暦 4 年（993）		皇后／中宮中宮藤原定子	三上、藤本、佐藤、服藤	b

長保 2 年 (1000)	中宮藤原彰子	三上、藤本、佐藤、服藤
寛仁 2 年 (1018)	一品内親王脩子	三上

(寺内、佐藤、服藤は女性ではなく、敦康親王献上とする。) c

備考

- a 天慶元年——この皇太后と中宮は同一人物であるが、服藤は皇太后、佐藤泰弘と藤本は中宮と呼ぶ。穩子はこの時、皇太后の尊称は得ていたが、『本朝世紀』がこの時の献上者を中宮と呼んでいるので、本論筆者は「中宮穩子」とする。なお、三上は対象範囲を天元元年以降とするため天慶元年は範囲外である。
- b 正暦 4 年——服藤は皇后と呼ぶが、献上時点では定子は中宮である。
- c 寛仁 2 年——服藤、佐藤、寺内はこれを敦康親王 (男性) の献上とする。藤本リストは長和 5 年 (1016 年) までで範囲外である。

本論筆者は女性献上者を以下の 8 名と考える。(下線部分が先行研究と異なる部分)

- | | |
|-----------------------------------|---------------|
| (1) 天慶元年 (938 年) | 中宮 (皇太后) 藤原穩子 |
| (2) 天元元年 (978 年) | 一品内親王資子 |
| (3) <u>永延元年 (987 年)</u> | <u>中宮遵子</u> |
| (4) 永延 2 年 (988 年) | 皇太后藤原詮子 |
| (5) 永祚元年 (989 年) | 太皇太后昌子 (内親王) |
| (6) 正暦 4 年 (993 年) または <u>5 年</u> | 中宮藤原定子 |
| (7) 長保 2 年 (1000 年) | 中宮藤原彰子 |
| (8) 寛仁 2 年 (1018 年) | 一品内親王脩子 |

本論筆者は、永延 2 年の献上者の皇太后は藤原詮子であり、寛仁 2 年の献上者の一品宮は内親王脩子であると考えているのだが、永延 2 年の献上者は三上、寺内、佐藤、服藤の 4 名までが遵子とし、藤本のみが詮子とする。また、寛仁 2 年の献上者は寺内、佐藤、服藤は (女性ではなく) 敦康親王とする。唯一、三上が脩子内親王とするが出典の記載はない。次章では舞姫献上を献上した女性について考証しつつ、研究者間の献上者の揺れの原因を探り献上者を比定する。

第1節 中宮穩子の舞姫献上 天慶元年（938年）

『本朝世紀』天慶元年（938年）11月22日条に

今年五節。殿上中宮各一人。太政大臣。中納言藤原実頼卿同有被奉之事。＜但、先日被定中納言藤原師輔〔卿〕可被奉一人之由。而俄有死穢。停止已了。仍太政大臣家俄奉件五節＞、殿上舞妓前美濃権守平朝臣隨時息女。中宮舞妓故右近衛少将藤原朝臣滋幹息女。太政大臣家舞妓故伊予介源朝臣相国息女。中納言実頼卿舞妓故信濃守源朝臣公家息女也。今夜且三人参入。＜殿上中宮太政大臣家³⁵²舞妓也。但中納言実頼卿家。自去十九日犬死穢。舞妓今夜不参入＞。（下線付加）

とあり、天慶元年（938年）の新嘗祭には中宮の献上した舞姫がいた。

（1）穩子

この献上者の中宮は藤原穩子（皇太后）である。天慶元年時に后位にあったのは穩子だけであり、穩子は皇太后あるいは太皇太后の尊称を得てからも中宮職が奉仕している。忠平の日記である『貞信公記』でも、穩子が皇太后、あるいは太皇太后の尊称を得てからも、一貫して穩子の中宮と呼ぶ³⁵³。師輔の『九曆』においても同様である。

この時のほかの献上者は殿上1人、それから太政大臣、中納言藤原実頼で、舞姫たちの出自（父親の名）が記録されている。但し、割書「但、先日被定中納言藤原師輔〔卿〕可被奉一人之由。而俄有死穢。停止已了」に示されるように、この年のもともとの定めでは中納言藤原師輔が奉ることになっていたのだが、急な死穢にあったので、師輔の献上は停止され、俄かに、太政大臣が代わって献上することになったのである。殿上の舞姫は、前美濃権守の平^{よりとき}隨時の献上で、隨時は公卿の身分になっていない殿上人であるので舞姫は実の娘となる。中宮が献上する舞妓は故右近衛少将藤原滋幹の娘、太政大臣が献上する舞妓は故伊予介の源相国の娘、中納言実頼が献上する舞妓は故信濃守源公家の娘であった。そして恒例の参入の丑の日である11月22日夜、殿上、中宮、太政大臣家の舞妓たち3人は内裏に参入したが、中納言実頼の邸では犬の死があったため、実頼の舞姫は参入はしなかったといっている。

数少ない女性献上者の1人であり、記録に残っている女性献上者としては最初となる中宮穩子はどのような状況下で献上者となったのだろうか。

³⁵² 「家」の部分是他本では「等」の字を充てている。

³⁵³ 時折、「太后」、（上皇と同席の場合）「上皇・々后」、「皇后」といった表記はある。

穩子は仁和元年（885 年）に生まれた。父は太政大臣藤原基経、母は仁明皇子さねやす人康親王の娘である。宇多女御となった温子³⁵⁴は異母姉であり、菅原道真を大宰府へ追いやった時平は異母兄である。寛平 3 年（891 年）穩子 7 歳の時、父基経が薨去する。その後は、異母兄の時平が穩子の後見となった。穩子は、自分の庇護者となった時平に恩義を感じていたらしく、同母兄忠平（六歳年上）と結びついた後も、時平の子女たちを優遇している。時平は、寛平 9 年（897 年）東宮受禪の日の 7 月 3 日に、穩子を新天皇醍醐に入内させようとしたが、醍醐の父帝宇多の母班子女王は穩子の入内を快く思わず、穩子の参入を差し止めた。班子女王は、同じ 7 月 3 日その日に入内して 25 日に妃に立てられた為子内親王の母である。以後も班子女王の穩子入内への妨害は続く。穩子は、それでもなんとか昌泰 2 年（899 年）夏ごろ入内したとされる³⁵⁵。入内がいつにせよ、女御宣下がなされたのは、皇太后班子女王が昌泰 3 年（900 年）の崩御の翌年 3 月まで待たねばならなかった。穩子は延喜 3 年（903 年）、19 歳で皇子崇象（保明）を出産。保明は誕生の翌年の延喜 4 年（904 年）に皇太子となったが、延長元年（923 年）3 月、21 歳で没。菅原道真の怨霊のためと噂された。傷心の穩子を醍醐は中宮に冊封して保明の子、よしより慶頼王を皇太孫とした。保明親王薨去後約 4 ヶ月後の 7 月、穩子は 39 歳で 2 番目の男子（醍醐にとっては第 14 皇子とされる）を出産した。後に朱雀天皇となるゆたあきら寛明³⁵⁶である。一方、皇太孫であった慶頼王は延長 3 年（925 年）5 歳で死去。寛明は慶頼王の死後立坊する。さらに延長 4 年（926 年）には穩子 42 歳の時に桂芳坊で成明親王（村上）を産んだ。穩子の後見だった時平は延喜 9 年（909 年）に薨じていたが、以後は同母兄の忠平と結び、東宮の母として朝廷での立場は強固なものになってゆく。延長 8 年（930 年）寛明（朱雀）が 8 歳で即位すると翌年 11 月、穩子は皇太后となった。（但し、皇太后宮職には改組されず、中宮職が継続した。）

夫君醍醐天皇の延長 8 年（930 年）の死後も穩子は幼帝朱雀の母后としてそのまま内裏に居住していた。承平 7 年（937 年）、つまり穩子が舞姫献上することになる年の前年、正月に朱雀は 15 歳で元服していた。朱雀（寛明）は穩子の第二男子だったが、最初の男子保明とその子慶頼王を失った穩子は、朱雀を道真の怨霊から守るため、朱雀の幼児期には朱雀と同殿して昼でも格子を上げずに御帳台の中で育てたという。その愛息が元服の日を迎えて、穩子の喜びはひとしおだっただろう。（なお、朱雀が皇太弟村上に譲位すると、穩子は村上の母后として内裏居住権はあったにもかかわらず、朱雀とともに上皇后院へ遷御している。3 番目の息子で新天皇となった成明〔村上〕より、2 番目の息子で上皇となった朱雀と共にいることを選んだことから、朱雀こそが穩子の鍾愛の息子だったと考えられる。穩子は天曆 6 年（952 年）の朱雀の

³⁵⁴ 温子は後に醍醐天皇の養母として皇太夫人となったため中宮と呼ばれた。

³⁵⁵ 角田文衛（1984：3）。但し、入内月日のはっきりした記録はない。『朝日日本歴史人物事典』（服藤早苗）は穩子入内を昌泰 2 年（899 年）としている。

³⁵⁶ 「ひろあきら」とも。

死まで朱雀と暮らし、一時短期間だけ二条院に単独居住したこともあるが、朱雀の死によって、ただ1人残った息子の村上の居る内裏に還って居住した。仁和元年(885年)生まれの穩子は、舞姫を献上した天慶元年(938年)には既に54歳、朱雀はその時16歳だったが、天慶9年(946年)に譲位するまで朱雀は在位中に皇后を冊立することはなかったので、穩子は、ただ1人の后として後宮に君臨していた。

(2) 天慶元年(938年)の献上者

さて天慶元年の4人の献上者のうち、殿上分を献じた前美濃権守平随時を別として、忠平は穩子の同母兄、実頼は忠平の長男であり、忠平は穩子自身の献上にも全面的に援助をしたらうから、この年の五節はまさに忠平と穩子の身内の主宰の行事の観がある。負担の大きい舞姫を3名まで献上できるという財と力を誇示した忠平一家の我が世の春のようにも見える。しかし、実情は少々違っていただろう。

舞姫献上者の決定は天皇あるいは摂政が行う。天慶元年(938年)には朱雀は16歳になっていたが、忠平が摂政を務めていた。(忠平は承平7年[937年]天皇元服以来、何度も上表を出していたが、摂政辞任は許可されていない。忠平が摂政を辞したのは天慶4年[941年]11月のこととなる。[但しそのまま関白となった。])宇多天皇が朱雀の父醍醐に与えた訓戒である「寛平御遺誡」は、舞姫献上者決定は難事だから、10月に入ってからすぐに決定するようにといている。『北山抄』では「近例は九月」という。しかし、天慶元年は10月7日になっても献上者が出揃っていなかった。この時点では、正月に権中納言昇任していた師輔で公卿分1名は確保されていた。しかし、『貞信公記』天慶元年(938年)10月7日条に「右衛門督来、称五節不堪由不調」という記載がある。献上を命じられたもう1名の右衛門督は、「五節に堪へざる由を称して調はず」と、辞退してしまったのである。そこで9日に「五節事を中宮に申し」、10日に「五節を右大将に仰せた」。中宮とは勿論、穩子であり、右大将は実頼である。この時点の右衛門督は参議源清蔭で、清蔭は陽成天皇の長子で延喜3年(903年)従四位上に直叙された。その後22年経った延長3年(925年)に42歳で正四位下の参議となって臣籍降下した。しかし、それから14年参議のままであった。清蔭の室は醍醐の皇女で斎院であった韶子内親王である。内親王を妻とする一世源氏の立場だから献上辞退も可能であったのかもしれない。天慶元年時点では、55歳で従三位にはしてもらったが、それだけで、舞姫献上の過大な負担は堪えられないと思ったのだろうか。清蔭はこの翌年天慶2年(939年)に権中納言に昇進し、天曆2年(948年。村上代)には正三位大納言にまで昇った。(以上官歴は『公卿補任』による。)あるいは権中納言になってから、意気揚々と舞姫を献上したのだろうか。但し、天慶2年に献

上を命じられて承諾したのは新任参議4名（『貞信公記』天慶2年10月2日条）、藤原元方、源高明、伴保平、藤原敦忠であって、清蔭の名前は見えない。天慶2年の新参議は他に藤原忠文67歳もいるが、任参議が12月27日であるので、10月時点ではまだ参議ではない。また天慶3・4年の献上者名は判明していないので、天慶元年には献上を免れた清蔭が天慶3・4年に献上者となったかどうかについては不明である。

天慶元年『貞信公記』の10月9日条に「五節事申中宮」、10月10日条に「五節仰右大将」とあるのは、10月7日、清蔭の調整が不調に終わったので、窮した忠平が9日に穩子に1名を依頼し、10日に、右大将つまり、自分の息子である右大将の実頼に献上を割り振って残り1名を自身で献上することにして殿上1名と公卿3人の献上者を揃えたと推測する。

以上、摂政忠平が天慶元年に献上者を確保するのに苦労したさまが窺われる。以下が、やっと揃えた4人の舞姫たちである。

① 平随時の舞姫

随時は公卿にはなっていない。公卿でない殿上人が献上者となった時は実子を舞姫とするのが決まりである。殿上分献上の平随時は、雅望王の王子で仁明天皇の孫。承平四年（934年）閏正月29日に美濃権守になり、天慶元正月には防鴨河使³⁵⁷に任じられはしたが、防鴨河使は臨時の職にすぎず、本来は兼官職である。献上者として「前美濃権守」と記されたように、天慶元年には任国もなく、いわば失業中の身の上であった。忠平家との関係は分からないが、殿上分は実子を献上するために、年ごろの娘を持つものが選ばれる。年ごろの娘がいたので白羽の矢が立ったのだろう。随時はこの舞姫献上のすぐ後、12月14日に左衛門権佐、翌年天慶2年2月に任国として丹波を得ている。丹波は権守でなく守である³⁵⁸。舞姫献上の見返りは得たと考えられる。

② 穩子の舞姫

この年の中宮穩子の舞姫となったのは少将滋幹の娘である。この滋幹の母（舞姫から見ると祖母になる）はたいへんな美人だったという。谷崎潤一郎の小説『少将滋幹の母』³⁵⁹のモデルとなった美女である。『今昔物語集』卷二十二本朝「時平大臣取国経大納言妻語第八」（新編③183頁）に、谷崎にこの説話をもとにした物語がある。老いた国経大納言の若い妻が大変な美人であると聞き、甥の藤原時平が、これを手に入れようと策略をめぐらして国経に近づく。国経は策略にまんまと嵌まって、時平から受けた厚誼の礼にと若い妻（滋幹の母）を譲ってしま

³⁵⁷ 防鴨河使は鴨川決壊の際、堤防修復の任にあたる。

³⁵⁸ 平随時は最終的には天曆2年（948年）59歳で参議に昇る。

³⁵⁹ 谷崎潤一郎著『少将滋幹の母』新潮文庫、1967年。

う。妻は実際に時平邸に連れ去られて、国経に返されることはなかった。老大納言国経は、酒の上で「譲る」と言ってしまったことを後悔したが、どうにもならない。国経は妻に恋いつつ死んでしまう。この美人妻は在原業平の子の棟梁³⁶⁰の娘とされる。『十訓抄』中、巻第六（新編251-252 頁）にも簡略に、国経大納言が甥の時平に謀られて妻を奪われて嘆き悲しんだ話が出ている。時平に奪われた国経の妻の祖父である在原業平も『日本三代実録』（卷卅七元慶4年[880年]5月28日辛巳）で「体貌閑麗」と謳われた美男子であるから、国経妻が噂通り、時平、平中を夢中にするような美人で、滋幹娘が、その在原家の美貌の遺伝子を受け継いでいたとしたら、中宮穩子の舞姫は他を圧倒する美しさで穩子の権威をいやがうえにも高めるのに役立っただろう。但し、舞姫滋幹娘に関しての美醜の評判の記録は残っていない。父、滋幹が美男であった確証もない。滋幹母についても、『今昔物語集』、『十訓抄』などが、美男業平を意識して、その孫娘を絶世の美女に仕立てたのかもしれないが、国経の妻が国経との間に滋幹を産み、のちに時平の妻となって敦忠（中納言）を産んだというのは史実であるから、滋幹の母は権力者の時平が寵愛する程度には美人であったと解釈してよいだろう。また、天慶5年（942年）には藤原忠幹の娘が舞姫になるが、忠幹は滋幹の異母兄弟である。滋幹の母は在原氏の血統で絶世の美女だったというなら、その血統を引けば、天慶5年に舞姫となった忠幹の娘も美しい少女だったのだろうか。因縁が面白い話ではある。

穩子は父基経の死後時平の庇護を受けていたので、時平のもとに「奪われて」きた滋幹母とあるいは知己であり、その縁で滋幹娘が舞姫になったのかもしれない。

③ 実頼とその舞姫

10月9日にもなって³⁶¹、実頼は、父忠平から五節の献上を申し付けられた。実頼は忠平の長男でこの年には40歳で、中納言従三位で右大将を兼ねていた。実頼の母は『公卿補任』によれば源順子だが、宇多天皇の皇女とも源能有の娘昭子とも伝えられる。実頼の弟師輔の母は右大臣能有の娘であるから、実頼の母が昭子ならば、師輔と実頼は同母の兄弟となる。天慶元年に師輔は従三位権中納言になったから、兄実頼の従三位中納言にほぼ追いついたことになる。実頼は女子が3人³⁶²と少なく、入内させた娘たち（朱雀室慶子、村上室述子）も皇子を生まなかったもので、外戚となることができず、一方、師輔の長女安子は村上との間に次々と皇子女を儲けて師輔一統が栄えてゆく。

実頼が献上した舞姫は故信濃守源公家の娘だった。公家については史料が残っていない。『公卿補任』はもとより『国司補任』の信濃国にも掲載はなく、群書類従にも登場せず、実頼の経

³⁶⁰ 「むねはり」とも。

³⁶¹ 五節献上者は通常9月中、遅くとも10月3日までには決定される。

³⁶² 養女も含む。

歴にも信濃守などの記録はないので、まったく不明である。『尊卑分脈』においても、「源公家」は経基王（清和天皇孫、清和源氏の祖）から七代になる伊那中太郎なる公家が見えるのみである。史料は見つからないが、源公家の娘は何らかの縁で実頼の舞姫に選ばれて、準備を進め、舞の練習も重ねてきたのだろう。しかし、実頼の邸で 19 日に犬の死穢が出来たため、22 日の丑の日に内裏参入はできなかった。当然その夜の常寧殿の帳台試にも参加できなかったことになる。犬の死穢は 5 日であるから、25 日辰の日には参入も可能となるから、五節当日には皆の前で五節舞を舞ったことだろう。しかし、あいにく、天皇はその日は物忌みのため豊明節会には出御しなかった。この舞姫は大仰な準備のわりには出番が少なく、多少寂しい気がしたのだろうか、それともホッとしたのだろうか。

④ 太政大臣忠平とその舞姫

『本朝世紀』にあるこの年の献上者の太政大臣家とは勿論、藤原忠平のことである。忠平は中宮穩子の同母の兄であり、良き協力者であった。忠平は、昌泰 3 年（900 年）21 歳で従四位下参議として公卿に列してから順調に出世、右大臣、左大臣、摂政左大臣などを経て天慶元年には 59 歳で従一位の摂政・太政大臣であった。

忠平は、当初、献上を定められていた次男の権中納言藤原師輔の代替として献上者となった。師輔はその年 31 歳、正月 7 日に従四上に叙せられ、6 月 23 日には上位者 7 人を超えて従三位の権中納言に任じられていたから、師輔の舞姫献上はその時点で既定路線であったと考える³⁶³。しかし、五節も迫った 11 月 5 日に師輔の妻の勤子内親王が薨じたことによる死穢で献上は停止された。勤子内親王は醍醐の第 4 皇女で、内親王の身分のまま臣下に降嫁した初めての皇女だった。（それまで臣下と婚姻した皇女は一世の源氏だった。）そこで死穢の次男に代わり、急遽、父である太政大臣忠平が献上することになったのである。五節までは 2 週間余りしかなかったから、師輔がしてきた準備を忠平がそのまま引き継いだらうことは想像に難くない。そして、前述の『本朝世紀』は忠平が献上した舞姫は故伊予介源相国の娘だったという。源相国についての詳細は分からないが、「故伊予介」であるから、天慶元年（938 年）には既に故人である。当初の献上者であった師輔は承平 6 年（936 年）正月 29 日に従四位下参議右近権中將で伊予権守を兼任しているので（『公卿補任』）、伊予権守であった師輔が、伊予介であった源相国

³⁶³ なお、師輔は承平 5 年（935 年）にも献上しているらしい。『江家次第』（巻十、十一月、神道大系本）に、承平 5 年には殿上分の舞姫はなく、4 人とも公卿（中納言伊望、参議是茂、伊衡、九条殿イアリ）が献上したと傍書がある記事がある。師輔は承平 5 年に参議になっているので、承平 5 年の献上はうなずけるころではある。（承平 5 年 2 月 23 日任参議。28 歳。従四位下。母は右大臣正三位能有の娘。『公卿補任』による。）承平 5 年の他の献上者である是茂、伊衡の両名も前年承平 4 年の 12 月に参議になったばかりで、伊望も同じく承平 4 年 12 月に中納言に任じられたばかりである。この『江家次第』の傍書は典拠も異説の詳細も分からないが、新参議と新中納言の献上は大いに納得できるころである。

と知己で、その縁で師輔の舞姫に選ばれ、忠平に引き継がれたと推測したいが、『国司補任』では源相国の伊予介は確認できない。承平6年(936年)8月15日には伊予介には従五位上大江朝綱が任じられているが、それ以前の介の記録はないので、師輔が正月に権守となってから、大江朝綱が伊予介となる8月まで源相国が伊予介であった可能性は否定できない。

(3) 天慶元年(938年)という年

実は、この年、天慶元年は惨々な年だったのだ。4月15日大地震がおこり、その日から地震は続いた。『貞信公記』は4月16日、17日、18日、19日、20日、21日、22日、23日、26日、28日、29日に地震を記録する。15日の地震では宮城でも内膳司の建物が壊れ、4人の死者を出した。内膳司は天皇の食事を調理するところで、清涼殿からも遠くはない(「昨夜内膳司屋臥、死者四人、宮城四面垣多臥、京中人宅垣悉頽、自余損害多数、不能具記」『貞信公記』天慶元年6月16日条)。京の人家も大打撃を受け、京の惨状は描き切れないものであったようだ。17日には差し迫った賀茂祭(4月の中の酉の日)の中止が発表された。24日には地震により左右の獄舎の囚人30人が放免されている(『貞信公記』天慶元年4月24日条)。勿論、誦経、修法は間断なく行われ、各地の社に使いは派遣される。5月22日に承平8年を天慶と改元したが、5月以降11月までも地震は頻発している。6月20日には鴨川が大洪水、(鴨川の氾濫は珍しいことではなかったが)「西堀河以西如海」(『貞信公記』6月20日条)という状態になった。西堀河とは右京の荒地ではなく、貴族の邸宅も立ち並ぶ左京の住宅地である³⁶⁴。邸宅が水没した公卿や殿上人もあったであろう。11月に入っても地震は続き、『貞信公記』は新嘗祭までに11月4日、5日、6日、11日の地震を記す。天慶元年には、将門・純友の乱こそまだ反乱としては表面化していなかったが、天変地異が続いて人心は動揺し、損壊した家屋の修復に追われる貴族も多かったと思われる。

世情不安の中、献上者選びは難航する。3人までを忠平の一族が担った舞姫献上は、忠平一家の栄華の誇示というよりは、執政の地位にある忠平の責任として自家負担を決断せざるを得なくなった結果であったのだろうと考える。右衛門督には拒否されて、10月9日に穩子に1人を依頼して、10日にあと1人を自分のもう1人の息子に割り振って、とにかく4人をそろえたと忠平は思っただろう。ところが、早くから献上者に決まっていた次男師輔が妻の服喪により舞姫献上ができなくなった。これは11月5日と日にちは切迫していたし、既に10月7日の時点で他に献上者候補はいなかったのであるから、忠平自らが師輔の準備を引き継ぐ形で献上を引き受けるしかなかったと思われる。勤子内親王重体の状況下であるいは覚悟していたことか

³⁶⁴ 参考「平安京オーバーレイマップ」アクセス2017年11月25日
<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/heian/heianoverlay.html>

もしれないが。

（４） 天慶元年（938 年）の五節

やっとなんとか舞姫 4 人は調達されて、参入の日を迎え、穩子、忠平、随時の舞姫たち 3 人は通常通り丑の日 22 日に内裏に参入した。しかし、紫宸殿での豊明節会には、天皇は物忌みにより出御しなかった。「依御物忌不御南殿、又不卷玉簾」と、簾をおろしたままである（『貞信公記』）。この忌みはおそらく天皇の姉の勤子内親王の服喪と思われる。前述のように、藤原師輔は、正室であった勤子内親王の死によりその年の舞姫献上は停止されたが、勤子内親王は醍醐の第 4 皇女だから朱雀にとっても姉（異母）になるわけで、朱雀も服喪となるはずである。

『本朝世紀』天慶元年 11 月 20 日の条に「成明親王＜童親王也＞依勤子内親王喪著輕服、神事之比、不可在禁中、仍便乘尚侍車、被向太政大臣家寄住云」とあり、朱雀の弟である成明（後の村上天皇）が姉の死（輕服）によって、尚侍の車に乗って神事中の宮中から忠平の邸へ退下していることがわかる。朱雀は天皇であるから、たとえ父母の死であっても内裏を出ることはないが、『養老令』『喪葬令』（第二十六）2 条に、天皇は本服 2 等以上の親喪のためには錫紵を着ることが定められている³⁶⁵。11 月 5 日の姉である勤子の死によって 11 月 9 日に朱雀は錫紵を着した。そして、4 日目の 11 月 12 日に脱いでいる（『本朝世紀』朱雀天皇天慶元年 11 月）。兄弟姉妹の服は 3 か月であり、錫紵は 1 か月を 1 日と計算して着用日数にするので、姉の死による錫紵の着用は 3 日が規定であったが、4 日目が御衰日にあたったので、1 日延ばされて 4 日になった（増田美子 2001）。天皇の親族である親王の死によって天皇家の行事が延引された例もあるが³⁶⁶、五節は朝廷の公の神事であるので、日にちの変更はなく、22 日丑の日には舞姫も参入し、新嘗祭の祭祀日である卯の日には天皇は神嘉殿（中和院正殿）に出御している。しかし、喪中のために節会への出御は見合わされたと考える。

天慶元年の五節は、中宮・太政大臣という朝廷のトップクラスが舞姫を献上したものではあったが、うち続く震災や洪水の年のなかでようやくのことで行われたもので、天皇の臨席もなく寂しいものだったかもしれない。

（５） 穩子の献上とは

³⁶⁵ 「凡天皇。為本服二等以上親喪。服錫紵」。

³⁶⁶ 例えば、永平親王の薨去によって永延 2 年（988 年）の賀茂臨時祭は延引されている。臨時祭は恒祭に対して、天皇の個人的祭祀の傾向が強い。

この年に、穩子が舞姫を献上したのは直接的には、舞姫の献上者選びに困った同母兄であり同志であった摂政太政大臣忠平の要請を受けてのことになるが、穩子が難色を示せば、忠平は要請を撤回せざるを得ない立場であった。穩子は今上の母后であり、天皇さえ拝礼を捧げる至高の位にある。そして今上朱雀は決して母后の意向に逆らうことはしない天皇であったとして知られている。例えば、朱雀が24歳の若さで弟の村上に譲位したのは、母后穩子が、弟の村上へ譲位することを望んでいると早トチリしたからだ（『大鏡』は語る（『大鏡』人の巻、新編378-380頁）。朱雀天皇は『源氏物語』の朱雀帝そのままに、強力な母の下、自己主張をしない天皇であった。したがって穩子にその気がなければ、舞姫献上者となる必要はなかったのである。しかし、「皇太后」である穩子が舞姫献上を引き受けたのは、直接的には、その年の舞姫不足を補うためだったが、それはなにより、愛息朱雀のため、つまり、中世の娯楽化した五節とは違い、この時代の五節はまだ高い神事性を保っていたので、その神事を完遂することにより、神霊を安からしめ、うち続く地震が沈静化して、息子朱雀の帝王の威徳を取り戻し、その治世の安からんことを神に祈る母の愛だったと考える。

第2節 資子内親王の献上 天元元年（978年）

『日本紀略』天元元年（978年）11月20日丑の日の条に「今夜。五節舞姫参。一品資子内親王。参議源忠清。同惟正。左少弁平季明等也」という記述があり、丑の日に、一品宮資子が参議源忠清、源惟正、左少弁平季明とともに舞姫を参入させたことがわかる。

（1） 資子内親王

資子は村上天皇の第9皇女で天曆9年（955年）生まれと考えられる（薨去時の年齢から逆算）。薨去は長和4年（1015年）。母は中宮安子。安子は師輔の娘であった。資子に父母の愛情は深かったといわれる。資子は円融天皇や大斎院選子の同母の姉であり、同母の弟である円融天皇とは特に親しかったという。資子が10歳の時、母安子は選子の出産で死去、父村上もその2年後の康保4年（967年）5月に在位のまま42歳で崩御した。村上の死後は同母の兄が即位して（冷泉天皇）、資子は安和元年（968年）12月14歳で着裳して三品に叙せられた。冷泉が在位2年で譲位させられて弟の守平（円融天皇）が即位すると、資子は円融の手厚い保護のもと内裏で華やかな生活をするようになる。資子（19歳）が天禄3年（972年）3月25日に内裏の昭陽舎で藤花宴を催した日、15歳の円融も臨席して、この日資子を一品に叙した。さらに、この年の12月資子は准三宮となり、年官・年爵に封戸1000戸が加えられた。『栄花物語』において、資子は次のように叙述されている。

内には、一つ御腹の女九の宮、先帝いみじう思ひきこえたまへりしを、この今の上もいみじう思ひかはしきこえさせたまひて、一品になしたてまつりたまへり。内裏のいとさうごうしきに、をかしくておはします」
(新編①75頁)

と、先帝がたいそう可愛がっていた資子を先帝の死後は、同母の円融が一品に叙して、資子が内裏で美しくはなやいで暮らしていたことが語られている。

資子は円融が在位中はずっと内裏で生活して、内裏で藤花宴、萩花競、乱碁歌合などを催して終始華やかに暮らしていた。内裏のどの殿舎に住んでいたかについてははっきりしないが、安田徳子は昭陽舎での藤花宴は誤りで、資子は藤壺（飛香舎）に居住していて、藤壺で藤花宴を開いたと比定する（安田徳子1983）。資子の内裏居住については、山田彩起子が、資子は円融の不婚の同母姉内親王であることを以て、円融の父村上が、父母不在の円融の王権の弱点を少しでも補うべく、国母代役として内裏居住を遺言したと考えている（山田2010：90-95）。確

かに、天皇と同母とはいえ、1 人の内親王がこのように華やかに内裏居住するのは異例であるから、山田の指摘は首肯できる。つまり、資子は単に同母弟円融の恩恵だけで内裏居住しているわけではなく、冷泉や円融の父帝である村上の遺志により、国母のそれに准ぜられた確固たる居住であったから、内裏で誰に気兼ねすることもなく、宴や歌合せなどを多く主催したりして、のびのびと生活していたし、また逆にその華やかさが円融朝の安定の表象ともなったことになる。

円融が長じるとキサキたちが入内してくる。まず、天延元年（973 年）には関白兼通の娘皇子が、円融より 12 歳の年上の 27 歳で入内して中宮に冊立された。その前年、関白だった兼通が没したが、兼家を嫌う兼通は、最期の執念によって兼家の関白就任を阻み、従兄の頼忠を後任の関白としていた。兼通が死んでようやく兼家は娘を入内させることが可能となったのである。詮子は天元元年入内して、天元 3 年（980 年）6 月 1 日第一皇子懷仁（のちの一条天皇）を産む。

天元 2 年（979 年）6 月 3 日、兼通の娘で中宮だった皇子の死によって中宮位は空いていた。兼家・詮子父娘は、第一皇子の母となった詮子が立后するのが当然とは思っていたが、天元 5 年（982 年）、円融は頼忠の娘遵子の中宮に冊立してしまう。遵子立后を円融は内々に進めていたという。遵子は子女を産んでいなかった。兼家・詮子の父娘は第一皇子の母である詮子を差し置いての遵子立后という円融の仕打ちを深く恨んで、円融に意趣返しをすることになる。この間も資子は内裏にあってそれぞれのキサキたちと交流していた。

永観 2 年（984 年）に円融が譲位して堀川院へ移ると、資子内親王も内裏を出て三条宮に移り住んだ。永観 2 年 11 月 28 日資子が「初めて」三条宮へ遷ったという伝聞が『小右記』に見える。しかし、天元元年（978 年）11 月の舞姫献上の時には資子はまだ内裏で生活していた。寛和 2 年（986 年）正月 13 日に資子は落飾して尼になり（『日本紀略』）、三条宮で生活を続けた。それから 29 年後、長和 4 年（1015 年）4 月 26 日、61 歳で薨じた。甥にあたる三条天皇は叔母の薨葬にあたって錫紵を着した（『小右記』長和 4 年 5 月 10 日条）。

（2） 天元元年（978 年）の他の 3 人の献上者たち

天元元年の資子以外の献上者は、この節の冒頭でも述べたように、参議源忠清、源惟正、左少弁平季明であった。

① 献上者源忠清

忠清は天慶 6 年（943 年）生まれで、醍醐皇子有明親王の第一王子。母も左大臣藤原仲平の

娘で出自はよく、天暦2年(948年)孫王として従四位下に直叙された。参議から右衛門督等を経て正三位に昇って寛和2年(986年)に没した(以上『公卿補任』より)。参議になったのは天禄4年(973年)であるから、天元元年(978年)の献上是直接昇進と結びついたものではなかった。しかし、献上年の天元元年10月17日、参議右衛門忠清は近江守に補されている。伊予守の4年の任期が終わったところだから、同じく熟国である近江からのこれから4年間の収入は旨みのあるものだったと思える(参議兼国ではあるが権守ではなく、「守」である)。

② 献上者参議源惟正

惟正も源氏であるが、文徳源氏で、源氏になってから世代を経ており、中納言の孫という立場でしかなかった。46歳で従四位上で参議になったが、参議任官は天延2年(974年)だからこの五節の4年も前になる。五節の前年(977年)に正四位下に昇叙されているが、これは造宮功によるもの(『公卿補任』)で五節のためではない。しかし、天元元年には惟正は従三位に昇叙して2月3日に大和の権守をもらっている。

③ 殿上分献上者左少弁平季明

季明という人は光孝天皇系の平氏。是忠親王の子の式しきせん贍王の子。天暦年間(947～957年)に平姓をあたえられ、備中守を経て民部大輔となる。極位は正四位下³⁶⁷。左少弁であるので、舞姫は実子であったはずである。年ごろの娘がいたから選ばれたと考える。

(3) 資子内親王の献上とは

この五節の年である天元元年(978年)は円融の2人の女御が入内した年である。4月10日に新たに関白となった左大臣頼忠の次女遵子が入内して承香殿に入り、5月に女御となった。入内時は女御宣下はまだだったが、女御に准じて輦を許されての晴れやかな入内であった(『日本紀略』)。8月17日に大納言兼家の娘詮子が梅壺に入り、五節の直前11月4日に女御となっただけである。資子はこの間内裏にあって³⁶⁸後宮文化の中心サロンとして、皇子、詮子、遵子のそれぞれと平穏に交流したようである(安田徳子:1983)。資子は、円融の一粒種を生みながら立后されなかった詮子にも同情的だったという(『栄花物語』巻第二「花山たづぬる中納言」新編①114-115頁など)。

資子は、父母不在という円融の王権の弱点を少しでも補うべく内裏に居住する国母代役であったから、その舞姫献上は、まずは円融王権の安定に貢献するものではあった。この年、円融後宮は中宮皇子と新しい女御2人でキサキが3人となったわけだが、既に中宮の位にあり、32

³⁶⁷ 『日本人名大事典』による。『本朝皇胤紹運録』によれば、従五位上。

³⁶⁸ 天元5年11月17日の内裏火災の折、資子は内教坊に避難しているので内裏居住が確認されている(『日本紀略』「円融天皇」)。

歳になっていた皇子は別としても、遵子と詮子との間には(少なくとも実家の父たちの間では)、どちらが先に皇男子を産むか火花を散らすような思惑が渦巻いていたことだろう。華やかな表面下、帝寵と皇子懐妊をめぐる闘いの幕が切って落とされたこの年、後宮文化サロンの主宰者であった資子内親王の舞姫献上は、波乱を秘めた表面を美しく塗粧したものだったともいえよう。

第3節 永延2年(988年)の「皇太后」の献上

『小右記』の永延2年(988年)11月19日条に「^(源)亥終五節参上<皇太后宮、左京大夫泰清、修理權大夫^(藤原)安親、侍從宰相^(藤原)誠信>」とある。当今である一条天皇は寛和2年(986年)6月23日に践祚して、7月22日に即位した。大嘗祭は新帝の即位式が7月以前だとその年に、8月以降だと翌年が大嘗祭となる。一条天皇の大嘗祭は即位の寛和2年(986年)の年内の11月に行われており、永延2年(988年)の五節は例年の新嘗祭である。新嘗祭の舞姫は4人で、『小右記』は、皇太后宮、左京大夫源泰清、修理權大夫藤原安親、侍從宰相藤原誠信の4人が献上したと述べている。ところが、この皇太后が誰であるかについて、五節の先行研究者の服藤早苗、佐藤泰弘、三上啓子、寺内浩の4名はともに藤原遵子としているのである。藤本のみは皇太后詮子とする。

本節では、この時の献上者である皇太后を考証し、永延2年の献上者皇太后は遵子ではなく詮子であったことを明らかにする。また、遵子は永延2年の献上者ではなかったが、遵子は前年の永延元年に舞姫を献上していたと推定する。

(1) 『栄花物語』の記述

まず、永延2年の献上者が遵子とみなされた過程を考えたい。三上と寺内のリストには献上者名の典拠は付されていない(三上 2001、寺内 2004)。佐藤は献上者比定の典拠に『小右記』をあげる(佐藤 2009)。服藤は献上者の典拠として『小右記』と『栄花物語』を挙げる(服藤 2015)。藤本は典拠を『小右記』として、皇太后詮子とする(藤本 2008a)。

しかし、上記の永延2年の『小右記』の割注で述べているのは献上者の筆頭が「皇太后」であったということだけであって、皇太后遵子とはいっていない。では、もう一つの典拠とされる『栄花物語』をあたると、『栄花物語』で五節の献上については、巻第三「さまざまなよろこび」の中に見出だされる。

四条の宮の御五節、また左大臣殿の左兵衛督時仲の君、さては受領ども奉る。御前の試の御覧の夜などは、上若うおはしませど、后宮おはしませば、その二間の御簾の内のけはひ、人のしげさなど(中略)なほ宮の御五節はいと心ことなり。(新編①160頁)

とあって、四条の宮が舞姫を献上したこと、その年の他の献上者は、左大臣家の左兵衛督時仲と受領たちであったことと、宮(四条の宮)の献上した五節舞姫一行はとくに素晴らしかった

ことが語られている。

四条の宮とは関白藤原頼忠の長女遵子で、母は代明親王（醍醐天皇皇子）の娘巖子女王である。遵子の父の邸宅は左京の三条殿の他に四条にあった³⁶⁹。遵子は夫君円融の永観 2 年（984 年）の譲位後は四条にある里邸に暮らしていたので、永延年代の「四条の宮」なら遵子でまちがいない。（邸宅が後の住居となると「宮」と呼称される。）さらにこの五節が永延 2 年のことと比定された過程を推測すると、『栄花物語』で、この五節に先立つ段落で、東三条殿で兼家の六十賀が行われた 10 月に続く 11 月に四条の宮が五節を献上した、つまり、四条の宮の遵子が五節を献上するのは、兼家の六十賀が行われた年ということになるからだろう。そして、兼家が 60 歳になったのは実際、永延 2 年（988 年）である。史料でも、兼家は永延 2 年（988 年）の 3 月 16 日に法性寺で六十賀を行い（『小右記』）、3 月 25 日には天皇が内裏常寧殿で兼家の六十賀を行った（『日本紀略』）他、11 月 7 日に息子である権大納言道隆が兼家の六十賀を行う（『小右記』）など、永延 2 年に盛んに兼家の六十賀が催されていることが示されている。

しかし、『栄花物語』では、四条の宮と同時に舞姫を献上した官人たちは左大臣殿の左兵衛督時仲の君とその他受領たちであるという。ここでもう一度、『小右記』の記述を思い起こせば、永延 2 年に五節を献上したのは、皇太后宮、左京大夫（源）泰清、修理権大夫（藤原）安親、侍従宰相（藤原）誠信の 4 名のはずであり、時中の名はない。誠信³⁷⁰は宰相だから公卿であることは明らかだが、他の 2 人、左京大夫（源）泰清と修理権大夫（藤原）安親は受領なのか。源泰清は、『公卿補任』によれば、この年永延 2 年の正月、従三位に叙せられ、非参議ながら公卿に列した。藤原安親も前年の永延元年（987 年）11 月 11 日に参議（兼修理大夫）に任じられていて公卿であるから、この年の献上者に受領はいない。

『栄花物語』の記述には他にも矛盾点が多い。『栄花物語』の兼家の六十賀を描く段落に、

帝も行幸せさせたまひ、東宮もおはしまして、殿の家司どもみなよろこびしたるなかにも、有国、惟仲を大殿いみじきものに思しめしたり。有国は左中弁、惟仲は右中弁にて、世のおぼえ、才なども、人よりことなる人々にて、おのおのこのたびも加階していみじうめでたし。

（新編①159 頁）

とある。これによれば、東三条院で 10 月におこなわれた兼家の賀に、帝（一条）と東宮（居貞、後の三条天皇）も行幸・行啓したことになる。しかし、『日本紀略』では、兼家六十賀は行幸ではなく、内裏の常寧殿で天皇主催の賀が 3 月 25 日に行われているのである。東三条院で行われたのはその後宴で 3 月 28 日のことであるという（勿論、天皇の行幸はない）。

³⁶⁹ 『朝日日本歴史人物事典』（隴谷寿）の解説による。

³⁷⁰ 「しげのぶ」とも。

（２） 永延２年の「皇太后」の比定

それにもまして、『小右記』が云う永延２年の献上者の皇太后が遵子でないのは決定的な理由がある。永延２年の皇太后は詮子であって、遵子ではないのである。

永延２年（９８８年）といえば、遵子の夫君、円融天皇は既に永観２年（９８４年）に譲位しており、次の花山天皇は「欺かれて」、在位わずか１年１０か月で出家退位、それをうけて寛和２年（９８６年）に円融皇子である幼い懐仁親王（一条天皇）が７歳で即位してから２年目である。一条が寛和２年（９８６年）６月２３日践祚すると、７月５日に、母である女御詮子は、皇后を経ずに皇太后に冊封された。詮子は、第一皇子（そして結局、円融のただ１人の子）を産んでいたにもかかわらず、夫君円融は、詮子を差し置いて、関白藤原頼忠³⁷¹の娘、遵子を立后（中宮）させていたのだ。遵子は子女を産んでいないので、「素腹の後」と揶揄されたと『大鏡』は語る（新編 115 頁）。遵子の立后以来、不満を募らせた詮子は、円融の内裏召還に応ぜず、ずっと父の兼家の東三条殿で里居を続けていたのだが、息子の一条が即位するに及んで７月９日内裏に参入し、以来、大半を内裏で過ごしていたのである。（詮子の内裏居住は正暦元年〔９９０年〕末まで続く。）

このあたりの状況については、倉本一宏『一条天皇』（２００３）に詳しい。また、兼家・詮子父娘の円融天皇に対するいやがらせは、繁田信一『天皇たちの孤独』（２００６）の第２章「円融天皇の嫌悪」で語られている。なかでも、繁田は、円融天皇が一人息子の懐仁に会うことができたのは在位中ではたった３回だけであったと考える（繁田 ２００６：５３）。うち２回は五十日祝と着袴の儀の折で、兼家と詮子の父娘は、着袴には懐仁親王を参内はさせたものの、儀式が終わるとさっさと親王を連れて帰ってしまい、それ以後は、円融天皇にとっては一粒種である懐仁を内裏に参内させたり、対面する機会を与えたりはしなかったことを述べている。

ともあれ、この五節のあった永延２年（９８８年）には皇太后は寛和２年（９８６年）に冊立された国母詮子であり、詮子が内裏に「君臨」していた。詮子が皇太后となったのに対して、円融中宮であった遵子のほうは永延２年現在、身位は中宮のままである。天皇が退位して太上天皇となっても、妻后は自動的に皇太后にはならない。例えば、『源氏物語』でも桐壺帝が譲位した時は新帝朱雀の母弘徽殿の女御が皇太后となり、前帝妻后であった藤壺は中宮のままである。『源氏物語』の弘徽殿の女御はまさに、詮子が女御から直接に皇太后へ冊立された事象を踏まえているのである。『源氏物語』でも、藤壺が中宮位に留まっている限り、朱雀帝は自身の妻后（中宮）を立てることはできない。弘徽殿太后が藤壺中宮を「めざましきもの」と憎く思う所

³⁷¹ 頼忠は貞元２年（９７７年）から関白。一条践祚で辞任。

以である。

永延2年(988年)の時点での3后を確認しよう。中宮が遵子で、皇太后は詮子、そしてもうひとつの後位である太皇太后は、冷泉中宮だった昌子(内親王)が占めていた。昌子は、詮子が皇太后に冊立されるため、寛和2年(986年)7月に皇太后から太皇太后に転上していた。一方、遵子が「皇太后」となるのは長保2年(1000年)であり、その年には太皇太后昌子(内親王)が崩じ、詮子が太皇太后に転上して、皇太后位が空いたのである。但し、中宮遵子は永延2年の2年後の正暦元年(990年)には皇后へと呼称を変えさせられることになる。藤原道隆が娘の定子をとにかく立后させるため3つの后位を4后に増やすためであった。

以下に永延元年(987年)から永延2年を経て長保2年(1000年)皇后定子が没するまでの后位にいた人物の変遷をまとめた。

表 一条朝后位変遷 (一条天皇: 寛和2年[986年]6月23日花山出家を受け踐祚)

和暦	西暦	太皇太后	皇太后	皇后	中宮
永延元年	987	昌子内親王 (冷泉正妻)	詮子 (円融妻・一条母)		遵子 (円融正妻)
永延2年	988	昌子内親王	詮子		遵子
永祚元年	989	昌子内親王	詮子		遵子
正暦元年	990	昌子内親王	詮子	遵子	定子 (10月25日立后)
正暦2年	991	昌子内親王	詮子 (9月女院号、東三条院)	遵子	定子
長保元年	999	昌子内親王 (12月1日崩御)		遵子	定子
長保2年	1000		遵子	定子 (12月16日崩)	彰子 (2月25日立后)

天皇: 冷泉—円融—花山—一条

もう一度いうと、永延2年(988年)には遵子の中宮であり、「皇太后」といえば、それは詮子のことであった。

では、誤記の可能性はどうか。『小右記』の「皇太后」が皇后の誤記である可能性は限りなく低い。なぜなら、天元5年(982年)3月11日に遵子が立后されて中宮職が設置されて以来、正暦元年(990年)12月に定子が中宮として立后されて遵子が皇后と呼称を変えるまで、『小右記』において遵子に言及する約60件の記載はすべて「中宮」と表記されている。『小右記』において初めて遵子を皇后宮と表記するのは、定子の中宮冊立後の正暦元年(990年)12月18日のことである。実資の中宮と皇后の呼び分けは、このようにはっきりしていた。後代

の転写の過程で皇太后の「太」の字が抜け落ちる可能性はゼロとはいいきることはできないが、「太」が落ちれば、遵子は「皇后」と書かれるのだろうが、永延2年なら遵子は「中宮」であり、皇后ではない。逆に中宮を皇太后と誤記・誤写する可能性は文字数や字の非類似性などを考えれば、まずないといっていいただろう。

以上から、永延2年の五節献上者である「皇太后」は詮子であって、「中宮」遵子ではないことがはっきりしたと考える。

(3) 詮子の献上とは

では、詮子の献上はどのような状況下で行われたのだろうか。永延2年(988年)、詮子の愛息一条は980年生まれの9歳。舞姫の献上者を決めることなどできるはずはない。国母となった皇太后詮子は、幼帝を擁して内裏の実力者にのし上がった。(実際に行幸などには同輿している。)母後の意向は時の権力者である摂政(兼家)、太政大臣(頼忠)、左大臣(源雅信)、右大臣(為光)も逆らえない。詮子に献上を「命じる」ことのできるものなどいなかったはずである。しかし、舞姫献上は晴れがましいものでもあった。円融の皇嗣男子を産んだのに、自分は女御に留め置かれ、子をなさない遵子が立后したことに對する恨みは大きかったが、いまや立場は逆転し、自分は国母にして遵子より格上の皇太后である。詮子は、我が世の春を謳歌していたことだろう。円融上皇の崩御は正暦2年(991年)2月12日であるので、永延2年には健在であった。但し、寛和元年(985年)に出家して法皇である。円融は後院に暮らし、詮子はほとんどを内裏で息子のそばで暮らした。永延2年の詮子の献上は、円融と遵子に対する勝利宣言ではなかったか。そして、前年の遵子の五節(次章参照)を確実に上回る華美な舞姫を出したことは想像に難くない。

第4節 永延元年（987年）の献上者 遵子

前節で、永延2年（988年）の献上者は遵子ではなく、皇太后詮子であったことを論証した。しかし、『栄花物語』の四条の宮の五節献上記事では、他の献上者については、左大臣家の左兵衛督時仲と受領たちであったこと、また源時中をあげるなど、大変具体的であり、一から十まで作り事とも思えない。『栄花物語』の正編の著者は赤染衛門が有力視されているが、赤染衛門は天徳4年（960年）前後の生まれとされ、紫式部や清少納言とほぼ同年代の人物である。正編の著者がたとえ赤染衛門でないにしても、『栄花物語』の成立は1035年以前だろうといわれている。歴史物語では、著者の主観や誇張は入れ込んでも、その出来事を知る人たちが生きている間、出来事そのものが架空の作りものであっては読者は納得するまい。『栄花物語』の遵子の舞姫献上の記述をもう一度考えよう。

（1）『栄花物語』の記述

永延2年に、遵子とともに献上者となったという時中³⁷²は、この時「左大臣家の左兵衛督」であったという。そこで、源時中が左兵衛督で、かつ父親が左大臣であったのは、永延元年（987年）7月11日～正暦2年（991年）9月21日の4年間であることが『公卿補任』からわかる。時中の父雅信はこの間ずっと左大臣であったので左大臣家に問題はない。この4年のうち、正暦2年（991年）9月には時中は右衛門督に転じているので、正暦2年の11月の五節の時には既に左兵衛督ではない。永延2年（988年）については『小右記』の割注によって4人の献上者全員が判明しているが時中は献上者には入っていない。したがって、この年も除かれる。したがって、左兵衛督時中が献上者でありえたのは永延元年（987年）、永祚元年（989年）、正暦元年（990年）の3年間に絞られる。

表1 源時中 （『公卿補任』による。下線付加）

寛和二年条（986年）	<u>非参議</u> <u>正三位</u>	45	<u>7月23日叙</u> 。元正四位下。10月15日任三木。
寛和二年条（986年）	参議 正三位	45	10月15日任。大藏卿皇太后宮権大夫等如元。
<u>永延元年条（987年）</u>	参議 正三位	46	大藏卿。皇太后宮権大夫。 <u>7月11日左兵衛督</u> 。止卿。大夫如元。8月20日庚戌着座。
永延二年条（988年）	参議 正三位	47	左兵衛督。皇太后宮権大夫。正月29日。
<u>永祚元年条（989年）</u>	参議 正三位	48	左兵衛督。皇太后宮権大夫。

³⁷² 小学館新編では時仲と表記。ここでは『公卿補任』の表記に従った。

正暦元年条（990 年）	参議 正三位	49	左兵衛督。皇太后宮権大夫。
正暦二年条（991 年）	参議 正三位	50	皇太后宮権大夫。左兵衛督。9 月 16 日止権大夫（依本宮御出家也）。同 21 日 <u>転右衛門督</u> 。

この 3 年のうち、正暦元年（990 年）の献上者は『小右記』から左大臣源雅信、参議藤原時光、近江守平惟仲、和泉守藤原時明と全員の名が判明する。そして、時中の名はないので、正暦元年も除かれる。そして、永祚元年（989 年）6 月 26 日には遵子の父頼忠が薨去しているので、遵子は重服となり、この年の遵子の献上はまずあり得ない。（後代には服喪中でも献上を命じられたものも出てくるが。）

したがって、上記の消去法により、遵子が左兵衛督時中と同じ年に舞姫を献上した可能性があるのは永延元年（987 年）のみとなる。

（2）『栄花物語』のその他の記述との整合性

前節で述べたように、『栄花物語』には、兼家の東三条院での六十賀へ、帝と東宮が行幸啓して、家司である左中弁有国と右中弁が加階したという記述がある。

帝も行幸せさせたまひ、東宮もおはしまして、殿の家司どもみなよろこびしたるなかにも、有国、惟仲を大殿いみじきものに思しめしたり。有国は左中弁、惟仲は右中弁にて、世のおぼえ、才なども、人よりことなる人々にて、おのおのこのたびも加階していみじうめでたし。
(新編①159 頁。下線付加)

兼家の東三条院での六十賀への行幸は現存する一次史料には見あたらないようだが、前年の永延元年（987 年）の 10 月 14 日に天皇が摂政兼家の東三条第へ行幸した記録は『日本紀略』と『扶桑略記』にある。この東三条院への行幸では擬文章生の省試を兼ねた詩宴を行った。その行幸で、有国（当時是在国）は家司賞として従四位下に加階され、同日右中弁から左中弁に転じた。平惟仲もまた、永延元年（987 年）10 月 14 日の行幸の家司賞として、正五位上に加階され、次月 11 月に右少弁から右中弁へ転じているので、『栄花物語』の記述と一致する。

表 2 家司たち（藤原有国・平惟中） (『公卿補任』より。下線付加)

藤原在国	永延元年(987 年)	右中弁。10 月 14 日従四下（此日行幸枇杷第。以家司有此賞）。同日左中弁。
平惟仲	永延元年(987 年)	右少弁。9 月 4 日兼大学頭。同 10 月 14 日正五上（此日行幸摂政第。

家司預此賞)。11月³⁷³転右中弁(依加階越左少弁保信)。

『栄花物語』で遵子と同じ年の公卿分の献上者とされる源時中は、表1でみられるように、左兵衛督となる前年の寛和2年(986年)7月23日に正四位下から越階して正三位に昇叙されて、同じ年の10月15日に参議に補任されている。舞姫献上するにふさわしい大きな昇進である。時中が永延元年に新任参議として舞姫献上を命じられたことは大いにあり得ることである。

『栄花物語』はこの五節の記事に続いて、「五節も果てぬれば、臨時の祭、二十日あまりにせさせたまふ」と、遵子の五節献上の年の賀茂の臨時祭りが五節後すぐ11月20日過ぎに行われたことを語る。これを、新編の頭注は、永延2年の賀茂臨時祭は12月7日に行われたから、これを「二十日あまり」というのは「史実に反する」という。確かに、永延2年(988年)の五節は11月21日辰の日に行われ、例年11月の下酉の日に行われるはずの賀茂臨時祭は12月7日の申の日に行われた。永延2年の賀茂臨時祭は永平親王の薨去によって延引されたからである。ところが、前年の永延元年(987年)には、五節は11月22日辰の日に行われ、賀茂の臨時祭は11月26日、すなわち延引などではなく例年通り11月の下酉の日に行われているから(『日本紀略』)、この遵子の献上が永延元年であれば『栄花物語』の記述は全く史実に則していることになる。

また、一条の即位は寛和2年(986年)7月22日であり、かろうじて7月中であるから大嘗祭はその年のうちに行われるべきことになり、実際、寛和2年に大嘗祭は催行された。永延元年(987年)の五節は大嘗祭の翌年となり、『栄花物語』でいう「御即位の年はさるやむごとなき事にて、今年は五節のみこそは有様げざやかに」と、「去年は即位の年の大嘗祭で五節も埋もれがちだが、今年の五節こそは」(新編①159頁)とみんなの期待も高まった、という状況にいかにもぴったりに合致するのである。

『栄花物語』正篇は康保4年(967年)からは1年単位の編年体になっており、事件の配列の順序が比較的正確で、書かれている人物の官位なども大きな誤りのないことが指摘されている。しかし、故意か記憶違いか、史実との1~2年のズレは所々に見られることである。

(3) 遵子の舞姫献上についての結論

以上を勘案すると、『栄花物語』の四条の宮の遵子の五節献上は作り話ではなかったが、永延2年(988年)のことではなく、その一年前の永延元年(987年)の五節を描いたものだったと考えられる。つまり、「中宮」遵子は、永延2年(988年)ではなく、永延元年(987年)に、

³⁷³ 日は不明。

五節を献上した。その年の他の献上は左大臣源雅信の長男時中と殿上受領2名であったと推定できる。

（4）遵子の献上とは

『栄花物語』は、「なんといっても四条の宮の奉った御舞姫は全く格別であった」（新編①160頁）と語るが、遵子は永観2年（984年）8月に夫君円融の譲位と共に内裏を出て自分の里邸に暮らして4年。子をなさなかった前帝の正室に内裏で居場所はない。寛和2年（986年）7月には兼家の娘詮子が皇太后になっている。自分を憎んだ詮子が、今度は意趣返しをねらっているかもしれない内裏へ五節のために参入するのは気の進まないことであつたにちがいない。（実際に遵子の五節所は経営されていたが、遵子自身が参入したのか確認はできなかった。）

舞姫の献上は費用がかさむものながら、同時に晴れがましい役割でもあつた。そしてこれまで舞姫を献上した後たちは内裏に居住してときめいていた女性たちであつた。しかし、里邸にひっそり暮らす遵子が、なぜいまさら五節の舞姫を献上することになったのだろうか。この理由については第8節の脩子内親王の献上の項で検討したい。遵子が皇子をなさなかったので外戚になり損ねて、一条の即位により関白を辞さざるを得なかった父頼忠と、昇進が停滞することとなった弟公任、そして遵子自身が、おそらくは望まなかっただろう舞姫献上に寄せる心のうちはどのようなものであつたのだろうか。

第5節 太皇太后昌子の献上 永祚元年（989年）

太皇太后が永祚元年（989年）の舞姫献上者と定まったことは『小右記』永祚元年9月21日条に見出せる。

参内、蔵人左少弁源扶義仰云、可献五節、但唐衣外不可令着織物綾、又陪従数輩重可禁遏者、太皇太后・右衛門督道長、左大弁藤原懷忠同可献云々。（大日本古記録本。下線付加）

9月21日に実資が参内すると蔵人左少弁源扶義を通じて、この年の五節の献上を命じられた。その際、他の3人の献上者が、太皇太后、右衛門督藤原道長、左大弁藤原懷忠であることを聞かされた。実資は新任参議であり、献上の命は想定内だったはずである。献上の命と同時に、舞姫に唐衣以外は織物を着せるような華美や、付添いの一行も華美を厳重に禁じることなどが告げられている（「重可禁遏者」）。この年の献上者の1人の皇太后は、寛和2年（986年）に太皇太后になった昌子内親王である。右衛門督道長は藤原道長で、後に摂政となり絶大な権力を振るった道長も、この五節の前年に権中納言になったが、この五節の年に右衛門督を兼ねたまだ24歳の若者に過ぎなかった。左大弁懷忠はこの年の7月に55歳で参議に任じられていた。昌子以外の3人は全員参議以上の公卿であるので、この年は殿上の五節献上はなかった。9月21日に献上を定められた4人が11月に全員実際に舞姫を献上したことは『小右記』のこの年の11月15日条から確認される。（各人の直廬を回って盃事がなされている。）

（1）昌子内親王

昌子の生年は天曆4年（950年）とされる。『権記』の長保元年12月5日条「去一日、太皇太后昌子内親王崩、于時春秋五十」と『小右記』長保元年12月1日の崩御の記事の「春秋五十、在位三十三年」による逆算である。父は朱雀上皇（退位後の誕生）で、母は保明親王の娘従三位女御熙子女王である。父の譲位後の誕生ではあったが、誕生の年、天曆4年8月10日に内親王宣下を受けた（『類聚符宣抄抄』第四／親王）。母は昌子出産後間もなく薨去した。

『栄花物語』に、

朱雀院は御子たちおはしまさざりけり。ただ王女御と聞えける御腹に、えもいはずうつくしき女御子一所ぞおはしましける、母女御も御子三つにてうせたまひにしかば、帝、われ一所心苦しきものに養ひたてまつりたまひける。いかで後に据ゑたてまつらんと申しけれ

ど、例なきことにて、口惜しくてぞ過ぐさせたまひける。昌子内親王とぞ聞えさせける。

(新編①19 頁)

とある。朱雀のキサキとしては、藤原実頼の娘で女御慶子もいたが、皇子女は産んでいない。退位後に生まれた昌子だけが唯一の子であった。朱雀は天暦 6 年（952 年）、昌子 3 歳の年に、一人娘の昌子の将来を案じつつ崩御した。皇子のいなかった朱雀は、弟成明（村上）に譲位していたが、村上は昌子の良き庇護者となる。

『栄花物語』は昌子の母のほうに昌子 3 歳の時に亡くなったように書くが、母の死は天暦 4 年、昌子誕生間もなくと考えられるので、『栄花物語』には年代のズレがあるが、『栄花物語』はここで朱雀院が昌子を後の位に昇らせたいと願っていたことを語る。朱雀上皇の死後、昌子は、叔父の村上天皇の庇護を受け、応和元年（961 年）12 月、12 歳の時、内裏の承香殿で立派な裳儀の式を挙げて三品に叙せられた。村上天皇の心づくしであったという。応和 2 年（962 年）には村上天皇とともに仁寿殿で蹴鞠を見て侍臣に汗巾を下賜したりした。応和 3 年（963 年）2 月 28 日、村上是自身の第二皇子で東宮だった憲平の元服の際に、14 歳となった昌子を添臥とした。康保 4（967）年 5 月 25 日に村上が崩御すると憲平が即位（冷泉天皇）。村上崩御による諒闇の間のことではあったが、9 月に昌子は 18 歳で皇后に立てられ、封戸 1500 戸を受けた（『日本紀略』）。村上の生前の決定だったといわれる。ここで昌子に中宮職が設置され、従三位の参議で右衛門督の藤原朝成³⁷⁴（51 歳）が中宮大夫に任ぜられた。『栄花物語』のいう父朱雀上皇の「後の位に」という本意はかなったわけであるが、夫君冷泉は、後人から奇行を指摘されるような人柄で、即位 2 年で譲位に追い込まれることになる天皇だった。近年には、冷泉の奇行の数々は単なる若気の至りに過ぎなかったものを、時の政治抗争の中で誇張されたのだろうと言われるものの、あまり思慮深い天皇ではなかったことは確かなようだ。昌子は立后したものの、父母はなく同母の兄弟もおらず、叔父村上の死後は全く後ろ盾のない身であった。時の権力者の藤原伊尹の娘懷子は既に冷泉の東宮時代に入内して康保元年 10 月 19 日に皇女宗子を、康保 3 年には皇女尊子を出産して、康保 4 年（967 年）9 月 4 日に懷子は女御となった。昌子は康保 4 年 9 月 4 日に立后して、12 月に参内はしたが、（立後の宣命は里邸でうける）、翌月（安和元年）正月には昌子は内裏を退出した。『栄花物語』は懷子の入内が 2 月に決まったからだという（新編①63 頁）。伊尹の娘懷子の入内は冷泉の東宮時代だったから、これは大きく事実と反するが、後ろ盾を持たない昌子の立場の弱さを言ったものだろう。安和元年（968 年）10 月に藤原兼家の娘超子が入内して 12 月に女御となった。同じ日に師輔（伊尹、兼家の父）の六女怱子も女御とされた。懷子は安和元年（968 年）第一皇子師貞（花山天皇）

³⁷⁴ 「あさひら」とも。

を出産、安和2年(969年)8月13日、冷泉は円融に譲位したが、その際に、師貞が立坊した。東宮の母女御として懷子は立場を盤石にした。兼家の娘超子は、光子、居貞、為尊、敦道と冷泉天皇の3男1女を生んだ。中でも、居貞はのちに一条天皇の皇太子に立てられる(のちの三条天皇)。懷子、超子、怱子の女御たちが冷泉後宮で寵を競うころ、中宮昌子は里居がちに過ごしていたが、安和2年に冷泉譲位の日、東三条に移御した(『日本紀略』安和2年8月13日条「今日皇后移御東三条」)。昌子の在所は後に「三条宮」とか「三条第」とか呼ばれている。

冷泉の退位してからの後院は冷泉院であるから、昌子は別居である。昌子は三条宮に移御の後、毎年正月の中宮大饗(天延2年以降は皇太后大饗)を行っている³⁷⁵。天禄4年(973年)、昌子は皇太后に転上するが、これは円融が関白兼通の娘、嬪子を中宮に冊立するため、中宮(皇后)位を開ける必要があったからである。寛和2年(986年)7月5日には昌子は今度は太皇太后に転上した。これは、一条天皇の母となった女御詮子を皇太后とするためであった。昌子は後ろ盾の弱い后ではあったが、朝廷の貴族や皇族たちと積極的に交流していたさまが窺える。皇太后昌子は、天元3年には当時まだ従四位下で右近の少将であった藤原実資宅にもしばらく滞在していた記録がある。(「藤実資 天元三年「七月廿五日従四位上皇太后宮日來御座件朝臣宅。還御本宮後」『公卿補任』)とあり、皇太后宮滞在により実資は従四位上に昇叙された。)昌子は深く仏道に帰依して永観3年(985年)大雲寺内に観音院を創建して行啓している。

最晩年、昌子は長保元年(999年)権大進橘道貞の宅に移御した。病氣平癒のために他所に移ったほうがいいという占いがあったからだというが、権大進は太皇太后宮職でも3等官に過ぎない下臈である。太皇太后を迎えるため急遽、四脚門が造られた。昌子は大進道貞の家で同年12月1日崩御した。蛇足ながら、橘道貞は和泉式部の夫である³⁷⁶。昌子は25日に権大進橘道貞の家に移って29日には本宮への還御の日を12月7日と定めていたが、還御より前、12月1日にそのまま道貞の家で崩御した。遺命によって、葬儀は素服・挙哀を停めるだけでなく、陵もおかず、葬送は凡人に異なることない質素なものだったという。(素服・挙哀を停めた院や后は昌子だけではないが。)『朱雀天皇実録』の皇后昌子内親王崩御の記述の後には「資質淑慎、后妃ノ徳アリ、又深ク仏法ヲ信ゼラレ、精舎ヲ建立シ供養アラセラル、崩ズルニ臨ンデ遺令一卷ヲ新書シテ、具ニ後事ヲ注シ給フ」と褒め言葉を連ねる(『日本紀略』「一条天皇」)。

この昌子の移御について想像することを許されたい。病悩による移御にしても、「近いから」といって、わざわざ大進という低い身分の家を選んだのは定子に対する同情があったからではないだろうか。『小右記』長保元年10月12日条に「宮御書被賜尼君御許、其御書云、両三年御悩不平、御占頻勸申可他處之由、心有所憚、口未出言、然而苦悩之間、不思人難、大進雅教宅去宮不遠、若度彼宅如何者、即令啓云、雅教是宮司、但有御下臈宅難敷」と、移御先に大

³⁷⁵ 安和3年(970年)、天禄2年(971年)、天禄3年(972年)の記録はある。

³⁷⁶ 2人の結婚は長徳年間に始まったらしいが長保元年に結婚が続いていたかは不明である(伊藤博1990)。

進宅を挙げているのは昌子である。これに対し御書を受け取った尼君は「雅教は太皇太后宮職の役人だが、いらっしゃる先が下臈の家なのは難点か」³⁷⁷と言いつつ、「四足門にすれば何とかなる」（「造四足門、移御何事之有也」）と答えている。実際に昌子がそれから2か月弱³⁷⁸の12月1日に崩御したのは雅教宅ではなく、権大進橘道貞宅であったが、どのみち大進・権大進は太皇太后宮職の三等官に過ぎない。定子は中関白家没落後、道長によってさまざまな辛酸をなめさせられて、今また、中宮³⁷⁹が当今の子を出産するという大事³⁸⁰にあたっても、道長に睨まれることを恐れた貴族たちは産所を提供しようとはしなかったといわれる。定子の里邸は焼亡していた。弟隆家は前年5月4日に赦免されて（兄伊周も）帰京はしていたが、長徳4年（998年）10月23日にやっと兵部卿の職だけを得た状態³⁸¹で、隆家・伊周に、定子を迎えるべき屋敷はなかったのだろう。中宮定子が（敦康親王を）出産のため（出産は11月7日）、中宮大進の平生昌成宅に移御したのは、昌子が病悩による移御を言い出す僅か2か月前の8月9日で、昌子が移御した10月25日には定子は生昌邸に滞在中である。定子の中宮大夫だった平惟仲は7月8日に辞任。定子の皇后宮大夫は見当たらない。『公卿補任』には、藤原公任に長徳元年9月21日から寛弘元年9月まで毎年「皇后宮大夫」の文字があるが、公任は姉の円融中宮（のちに皇后）遵子が皇太后となった長保2年時点には遵子の皇太后宮大夫となったはずであるし、そもそも定子の死によって長保3年以降寛弘元年に皇后職の設置はないから、長保元年（999年）以降の公任の「皇后宮大夫」は単純に「皇太后宮大夫」の誤記であろう。このころ、道長に追従の姿勢を明確にした公任が、道長の圧迫で皇后と呼称を変えた定子の宮司となるわけもない。また中宮権大夫をしていた源扶義は長徳4年（998年）7月25日に没していた。定子のあらたな皇后宮職には長官がいなかったと思われる状態であった。当然、生昌宅は中宮が滞在するような家でなく、急遽四脚門³⁸²を造り、なんとか定子の輿は入れた。しかし、女房たちの大型の牛車は入らず筵道を歩かされる羽目になって難儀したという『枕草子』の記述は知られている（6段、新編33頁）。昌子も権力者の娘たちの入内³⁸³のため、内裏に居づらい思いをしてきた。昌子も道長のやり方は苦々しく眺めてきただろう。中宮職大進の家しか行先がなかったという中宮定子の受けた屈辱に同情した賢后昌子が、太皇太后である自分も同じく大進の家に行啓して滞在することによって、後の滞在先として大進の家の別例をつくり、定子を「大進

³⁷⁷ 昌子は以前に、天元3年に、藤原実資宅にも滞在したことがあったが、実資は当時従四位下とはいえ、小野宮大臣家の御曹司である。その家は下臈宅とは難じられまい。

³⁷⁸ この間に閏月はない。

³⁷⁹ この時点で彰子はまだ入内はしていない。8月の時点で定子は中宮である。

³⁸⁰ 御湯殿儀から続く産養など一連の生誕儀礼が行われる場ともなる。注目が集まるからこそ、産所となるのを避けたかったのだろうか。

³⁸¹ 隆家が中納言に復するのは長保4年（1002年）のことである。

³⁸² 皇后は四脚門から入るのが規定である。

³⁸³ 女御懷子は伊尹娘、女御超子は兼家娘、女御怱子は師輔娘。

ごときの家滞にせざるを得なかつた唯一の後」という惨めさから救つたのではないだろうか。深読みのし過ぎであらうか。

（２）永祚元年の五節

さて、永祚元年（989 年）の太皇太后昌子の舞姫献上であるが、新任参議として献上する実資は自己の舞姫献上に関しては舞姫の出自他の詳細な記録を『小右記』に残している。11 月 12 日丑の日に「金作車一両、檳榔毛五両、筵張二両」の牛車を仕立てて、陪従 10 人、童女 2 人、下仕 4 人、樋洗・上雑仕に、五位の 10 余人を含む前駆 20 余人をつけて夜の 9 時ごろ参入させた。実資の舞姫は中務少輔良峯遠高の娘であつた。15 日辰の日の豊明節会の日には実資は午の刻に参内した。摂政兼家（61 歳）はこの日は物忌みで不参であつた。やがて雨が降り出し、さらに雨脚が頻りになったのでこの日の儀式は雨儀へ変更された。五節の舞姫たちが紫宸殿に到着する前、藤中納言、右衛門督、勘解由長官、修理大夫、三位中将、左大弁、侍従宰相など公卿が連れ立って、まず太皇太后の直廬に行つて、盃一巡があつたことも記録されている。

大歌別当が宜陽殿の壇上で大歌を發して、舞姫たちの舞は始まるのであるが、大歌は召される前に、承明門の壇上で一節を歌つた（雨儀によるものだった）。この日舞姫たちは西側に寄つて舞つたので、公卿たちは訝しんだとある。つまり、この日は舞台を建てておらず天皇の御前で一列で舞つたのだが、舞姫は西側（天皇から見て右側）にかたまつてしまった。

この日のすべての行事が終わつて実資が退出したのは子の刻ごろだったようだ。直廬での酒食のもてなしも含めて、太皇太后昌子は立派に舞姫献上の大役を勤めあげたようだ。

（３）昌子の五節献上とは

昌子内親王は皇子女もなく（村上皇子永平を養子にしようとしたこともあつたが）、摂関の後ろ盾もなく、弱い立場の皇后・皇太后・太皇太后ではあつたが、貴族・皇族たちとは交流し、後の務めは真剣に果たした人と思われる。舞姫献上も、後の務めの責任感から引き受けたのではないだろうか。弱い立場とはいえ出自が内親王の太皇太后である。固辞すれば、天皇といえども皇室の年長者に無理強いはできまい。昌子は翌年永祚 2 年には資子内親王家に滞在しているので、資子内親王と親交があつたと考えられるから、天元元年（978 年）に舞姫を献上した資子内親王からアドバイスなどもらえたかもしれない。昌子は実資宅にも滞在して実資を従四位上に昇叙した関係もあるから、実資も粗略には扱うまい。実資は五節当日も真つ先に（他の貴族たちも一緒だが）太皇太后の直廬へ参上して盃を受けている。（左大弁の直廬へは行つて

いないが。)正月の皇太后大饗などで三条宮を訪れた貴族たちからも支援は得られたと考える。
永祚元年の太皇太后昌子の舞姫献上は永延元年(987年)の中宮遵子、永延2年(988年)の
皇太后詮子に続いて、后位にある者の務めとして引き受け、周囲の支援を受けながらの献上で
あったと考える。

第6節 定子の舞姫献上 献上年の問題

『枕草子』に、中宮定子が五節の舞姫を献上した時の話が語られている。

宮の五節出ださせたまふに、かしづき十二人、こと所には女御、御息所の御方の人出だすをばわるき事になむすると聞くを、いかにおぼすにか、宮の御方を十人は出ださせたまふ。いま二人は、女院、淑景舎の人、やがてはらからどちなり。(中略)

辰の日の夜、青摺の唐衣、汗衫をみな着せさせたまへり。女房にだにかねてさも知らせず、殿人にはましていみじう隠して、みな装束したちて、暗うなりにたるほどに持て来て着す。赤紐をかしう結び下げて、いみじう瑩じたる白き衣、かた木のかたは絵にかきたり。織物の唐衣どもの上に着たるは、まことにめづらしき中に、童はまいてすこしなまめきたり。下仕へまで出でゐたるに、殿上人、上達部、おどろき興じて、小忌の女房とつけて、小忌の君達は、外にゐて物など言ふ。(中略)

(前略) 小兵衛といふが、赤紐の解けたるを、「これ結ばばや」と言へば、実方の中将寄りてつくろふに、ただならず。(中略)

(前略) 舞姫は、相尹の馬頭のむすめ、染殿の式部卿宮の上の御おとうとの四の君の御腹、十二にていとをかしげなりき。

『枕草子』「宮の五節出ださせたまふに」86段(新編169-172頁)³⁸⁴

定子が献上した舞姫の一行は、ふつう6～8人であるかしづきの女房を12人もつけたうえ、舞姫・童女だけでなく下仕に至るまで、一行の全員に織物の唐衣を含む見事な衣装を着せて、殿上人の注目を浴びた。定子の実家である中関白家の隆盛を背景に、屈託なく楽しむ定子の姿が回想されている。

ところで、この定子の舞姫献上は正暦4年(993年)の新嘗祭のこととされているが、実は、はっきりとはしないのである。これだけ注目を集め、清少納言の目にも強烈な印象を与えた定子の有名は五節の献上はいつのことだったのだろうか。献上年を考証したい。

これまでの、先行研究者5人すべての舞姫献上者リストにおいては定子の献上は正暦4年のことになっている(三上2001、寺内2004、藤本2008a、佐藤2009、服藤2015)。藤本と佐藤は典拠として『枕草子』、服藤は典拠として『小右記』と『枕草子』とを挙げる。三上と寺内はリストに典拠を明示しない。『小右記』は一次史料であるから、『小右記』にあれば信頼性は高い。しかし、管見の限りでは服藤が使用したという『小右記』(大日本古記録本)に定子献上の五節

³⁸⁴ 新編では88段にも五節の記事がある。岩波新大系では86段と88段、新潮集成では85段と87段が対応する。

の記録は見当たらない³⁸⁵。『小右記』にもこの年の五節の記録はあるが、11月12日丑の日条（舞姫参入の日）と15日条の豊明節会の記事だけで、献上者の名はない（大日本古記録本291-295頁）。検索対象を正暦年間すべてに広げても献上者に関しては、正暦元年（990年）9月15日条に、昨日今年の五節を献すべき人々が、左大弁近江守の平惟仲、和泉守藤原時明、左大臣、大蔵卿藤原時光になったという主旨の記事があるのみである。

（1）現行正暦4年説と前田本

現行の『枕草子』の刊本をみると、新編³⁸⁶86段の頭注は「正暦4年11月15日のことであるらしい」とする（新編169頁）。岩波新大系³⁸⁷86段の脚注は「この出来事は正暦4年（993年）11月」（新大系115頁）と断定。枕草子研究の大家、田中重太郎も『前田本枕冊子新註』以外に、能因本を底本とする『枕冊子全注釈』においても、これを正暦4年の五節であると注釈する（田中重太郎1972：222）。岩波旧大系90段ではこの五節の年に関する注記はない（旧大系139頁）。新潮集成³⁸⁸の85段の頭注のみが「前田本の注記に『正暦4年11月12日中宮定子献五節給』とあるが、他に旁証となる記録を見出さない」（集成㊥205頁）と慎重である。つまり、「正暦4年」は、各注釈者がそれぞれに推定した献上年であって、三卷本、前田本、能因本の本文に記載されたものではないのである。

では、正暦4年の献上説の根拠となった前田本の注記とはどのようなものだろうか。下図が前田家尊経閣文庫蔵の写本の抜粋である。他に同系統の写本はない。この写本には、この他にもいろいろな章段に、同一者のものと思われる年月日の注が加筆されている。前田本は鎌倉中期以前の書写とはされるが、この注記に関しては誰がいつ何に基づいて加えたものかわからない。注記の書き入れは漢字である年号が多く、ひらがな本文との筆跡の比較が難しい。しかし、「二月廿より」の「廿」を十に変更したり、右兵衛（督）を左衛門（督）に訂正したり、年号にも「正暦四年事也」などといっているので、誤写とか脱字の訂正でなく、自らの注解として加えたことがはっきりしている。また、本文を訂正しているのだから、それ以前の書写者が残したものをそのまま写したわけでもあるまい。この尊経閣文庫蔵の書写以後に加えられたものということになる。問題の注記のある「みやの五節いたさせ給に」という個所の左側で、「御息所の人いたすをはわろ」の右に書き入れられた「正暦四年十一月十二日中宮定子献五節給」という注記だが、正暦4年（993年）には中宮は勿論1人しかいないし、清少納言が仕えたのは

³⁸⁵ データベースも利用して、「中宮+五節」、「中宮+舞姫」、「中宮+献」、「中宮+舞妓」で正暦4年を検索したがヒットする条はなかった。一応念のため「中宮」を「皇后」に変えて同じ検索もした。

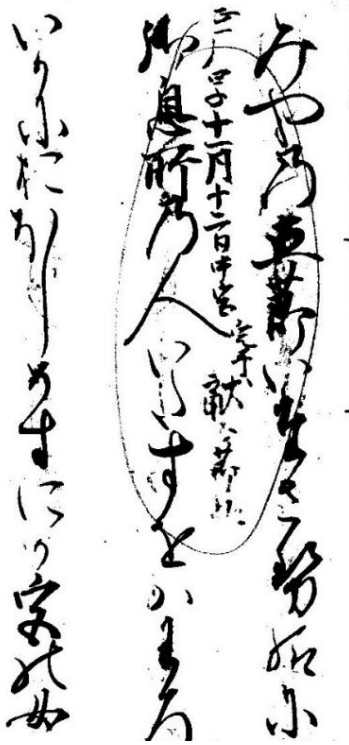
³⁸⁶ 底本は三卷本一類陽明文庫本、75段までは弥富本。

³⁸⁷ 底本は三卷本一類陽明文庫本、冒頭欠損部は内閣文庫蔵本。

³⁸⁸ 底本は三卷本一類陽明文庫本、74段までは第2類の尊経閣文庫本。

中宮定子であることは清少納言と同一時代の人間には明白であるので、注記は不要だし、中宮の位にある人の実名は加えるまい。同時代の注を写したものはないことだけは確かである。定子の舞姫献上はいつのことであったか、いまいし検討を加えたい。

この五節の回想では、辰の日に、清少納言が小兵衛という女房に代わって和歌を作っている



のだから、清少納言は実際にその場に居合わせている、すなわち定子のもとへ出仕していた時代の出来事である。清少納言の出仕の時期は、はっきりせず、正暦2年(991年)9月16日、正暦3年説、正暦4年説などがあるが、一番矛盾の少ないものとして有力視されているのが正暦4年の春または10月説である³⁸⁹。

正暦2年(991年)は2月12日に、一条の父円融院が崩御しているので諒闇となり、たとえ清少納言が正暦2年に出仕していたにしても正暦2年には五節舞は行われぬ。また定子の父の道隆は長徳元年(995年)の4月10日に薨去したので、父の死で重服となる定子から、長徳元年の献上はあり得ない。長徳2年の正月には定子の兄弟である伊周と隆家が花山法皇に矢を射かけるといういわゆる長徳の変が起こって、4月には伊周と隆家が目の前で検非違使に捕縛される。この時、定子は悲

嘆のあまり、自身で落飾してしまったので、長徳2年の落飾後の定子の舞姫献上はあり得ない。僧尼は神事中は忌むべき存在であるからである。以上から、定子の舞姫献上は正暦3年(992年)か正暦4年(993年)か正暦5年(994年)かのいずれかに限られる。

佐藤智子の『枕草子』90段[宮の五節いださせ給ふについて]について」というタイトルの論文は、舞姫献上の年を正暦4年とする説を補強する(佐藤智子1989)。そこでは清少納言の出仕を正暦4年の10月ごろとしたうえで、出仕の時期が「雪の降る寒い折だった」にしても、10月でも矛盾はないことと、出仕して1~2か月(正暦4年は10月に閏月が入る)にしかない清少納言がこの章段では、既に物慣れた対応をしているように見えるのも不思議ではないとして、この五節を正暦4年のものとしている。しかし、これでは、この五節が正暦4年のものであって不整合はないということはいえても、正暦4年以外の年、例えば正暦5年ではなかったとはいえない。

(2) 登場人物からの特定

³⁸⁹ 主として新編巻末の永井和子の解説(新編491頁)によった。

では、この章段に登場する人物から年を特定できないだろうか、登場人物を探る。この章段に登場して個人が特定できそうな人物としては、清少納言本人の他、「女院」、「淑景舎」、はらからの女房、小兵衛、実方中将、弁のおもと、及び定子の舞姫がいる。はらからの女房とは、女院と淑景舎から 1 人ずつ出されたかしづきが姉妹であったということである。舞姫の父は相尹すけまさの馬頭で、母は、染殿の式部卿宮の正室の妹であったと記述が本文中にある（「舞姫は、相尹の馬頭のむすめ、染殿の式部卿の宮の上の御おとうと³⁹⁰の四の君の御腹、十二にていとをかしげなりき」[新編 172 頁]）。女院とは一条の母である東三条院詮子である。詮子は正暦 2 年（991 年）9 月、院号を授けられ、没したのは長保 3 年（1001 年）であるから、正暦 3 年でも、4 年でも 5 年でも女院はいて、それは詮子である。そして、詮子が史上初めての女院であるからこの時期、詮子以外に女院はいない。（太皇太后昌子内親王は女院にはならなかった。）

定子が舞姫献上をした五節豊明の日（辰の日）に、実方の中将が小兵衛という人の赤紐が解けたのを結んだという。小兵衛はこの段以外、「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」（新編 83 段、151 頁）と、「円融院の御果ての年」（新編 132 段、250 頁）に登場する。定子が職の御曹司にいたのは長徳 4 年（998 年）末から長保元年（999 年）正月までなので、「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」段は正暦 4、5 年の五節の年の比定には役に立たない。「円融院の御果ての年」段は円融院の諒闇が明けたのは正暦 3（992 年）2 月になる。この時、清少納言が既に宮中にいたことになると、出仕を正暦 4 年（993 年）とする説にとっての最大の矛盾点となるが、正暦 4 年出仕説では、この章段は、清少納言の直接の見聞ではなく伝聞によって書かれたものとする。どのみち、小兵衛の存在は定子の舞姫献上の年の比定には役立たない。

実方であるが、従四位下実方が中将（右中将）になったのは正暦 2 年 9 月 21 日で、正暦 5 年 9 月 8 日に従四位上左中将に転じている（『近衛府補任』）。長徳元年（995 年）正月には左中将を停止され陸奥守になって任国へ下るが、正暦 4 年（993 年）から長徳元年（995 年）正月までは確かに実方は中将だった。ここからいえることは、定子の献上は正暦 2 年（991 年）以降のことであれば、それが正暦 4 年でも正暦 5 年でも実方に関する限り整合性に問題はないということだけである。

弁のおもとは、清少納言が小兵衛に代わって詠んだ歌を実方中将に伝えるのに中継を頼んだ人だった。しかし、（和歌を）「弁のおもとといふに伝へさすれば、消え入りつつえも言ひや

³⁹⁰ なお、能因本は「宮の上」の「上」の字を欠くため意味が通らない。「上」の字を欠く能因本では、四の君は式部卿宮の妹で、つまり皇女ということになってしまう。相尹の祖父師輔は右大臣ではあったが、父遠量に従四位上どまりの中下級貴族となった。相尹自身、左少将にはなったが正暦 3 年従四位下で少将を止められ左馬頭に転じた。「宮の上」の上の字を欠くと、皇女が中下級貴族と結婚したことになってしまう不合理である。

らねば」で、弁のおもとは気後れして、清少納言が小兵衛に代わって詠んだ歌を実方に伝えなかった。弁のおもとはここにしか登場しないので詳細はいっさい分からない。

定子の舞姫は手掛かりにならないだろうか。舞姫の父、藤原相尹は右大臣師輔の孫であるから、出自はよかった。正暦 3 年（992 年）8 月 28 日に従四位下で左少将から左馬頭に転じた（『近衛府補任』）。長徳 2 年（996 年）4 月 24 日には長徳の変の処罰として伊周・隆家の配流が発表されたが、同日、「左馬頭相尹」も「勘事」に遭っている（『小右記』同日条）。これは、断定はできないが長徳の変の連座らしい。相尹の娘が定子の舞姫となったのだから、相尹が中関白家と親しい関係にはあったのだろう。この長徳 4 年の「勘事 左馬頭相尹」の記事から、相尹は正暦 3 年に左馬頭に転じてから長徳 2 年正月まで左馬頭であったことが確認され、この五節が正暦 3 年、4 年、5 年のいずれであって相尹は「馬頭」で不合理はない。

道隆は正暦 5 年（994 年）11 月 20 日に病悩して、翌長徳元年（995 年）4 月に死去するのだが、正暦 5 年の五節としても定子の華やかな舞姫献上が不合理であるような、死期の迫った重病人と思われていたとは考えにくい。病ではあったが、除目など政務は一応こなしており、特に長徳元年正月に原子を東宮に入内させたあと、2 月 10 日には、原子・定子の母である高階貴子と牛車に同車して内裏に来て、定子の在所である登花殿において定子・原子の二人の娘を前に、冗談を言って、終日上機嫌で栄華を喜んでいる。この日は一条も午後 2 時ごろやってきて、すぐ御帳台に定子と二人してひきこもり、日が暮れるまで共寝する。この間、道隆はずっと周辺にいる。この時の様子は『枕草子』の「淑景舎、春宮へまありたまふほどの事など」（新編 100 段、199-207 頁）に詳しい。定子の献上が正暦 5 年の 11 月であっても中関白家は確かに栄華の極みにいた。誰も翌年の凋落を予想してはいない。正暦 5 年としても、中関白家の栄華を反映して、贅をつくしたきらびやかな五節であって当然でもある。道隆の病も、『枕草子』の描く定子の舞姫献上が正暦 4 年（993 年）でなければならない理由とはならない。

唯一、正暦 4 年が有力かと思われる事案には隆家の昇叙がある。『公卿補任』を見ると正暦 4 年、定子の弟である隆家が 11 月 15 日に従四上に昇叙されている。11 月 15 日といえば、その年の豊明節会すなわち五節舞の当日である。定子の舞姫献上には当然、実家である中関白家が総出でサポートしていたはずであるから、その功として兄弟のひとり昇叙したというのはいり得るのかもしれない。しかし、大嘗会は関係者が叙位される慣行はあるが、新嘗会は特にはない。正暦 4 年の 11 月 15 日には蔵人たちも叙位されている。蔵人たちの叙爵は通常正月であるが、蔵人の叙位は特別なものではない。隆家昇叙と比較になりそうな中宮彰子の長保 2 年（1000 年）献上の時には、彰子の兄弟たちは元服前だから、豊明節会でも叙位されることはない。（頼通の元服は長保 5 年〔1003 年〕、12 歳の時。）正暦 4 年の隆家の昇叙は『公卿補任』にも「臨時」とあるだけで、〇〇の賞というような記述はない。道隆は 2 人の息子の昇進を急い

であり、もっともらしい理由があろうとなかろうと、できるところではすべてで位階を引き上げているようにみえるから、隆家の昇叙の理由はわからず、舞姫献上の見返りであったという根拠も見出せない。

(3) 淑景舎

最大の問題が「淑景舎」である。定子が出した舞姫のかしづき 12 人のうち 10 人は定子の女房から、あと 2 人のうち 1 人は女院の、もう 1 人は淑景舎の女房から出たという。

この淑景舎は、定子の妹である原子なのであろうか。この五節が正暦 4 年の 11 月にせよ、正暦 5 年にせよ、五節の時点では原子はまだ東宮妃淑景舎ではないのである。原子が東宮居貞の妃となって、淑景舎の住人となるのは長徳元年（995 年）の正月 19 日なのである³⁹¹。枕草子年表などには正暦 4 年（993 年）の 3 月 27 日に原子の入内を記載するものがある。例えば、小学館新編の巻末「枕草子年表」では正暦 4 年（993 年）2 月 22 日の「道隆二・三・四女著裳」に続いて「三月二十七日 道隆二女原子、入内」と続く。『前田本枕冊子新註』（田中重太郎 1951：[年表] 6）でも正暦 4 年（993 年）3 月 27 日に「摂政道隆の二女原子入内。淑景舎」とある。但し、両書とも、長徳元年（995 年）正月 19 日にも「道隆二女原子、東宮に入り女御となる」（新編）、「道隆の二女原子（淑景舎）、東宮女御となる。内御匣殿と号す」（『枕冊子新註』）も載せる。『小右記』をみると、確かに正暦 4 年 3 月 27 日条に、「摂政二娘今夜入内、或云、参中宮、為見明後日縣已了又云、為備御所令参入云々、居宮定有思給歟」³⁹²の記述は見える。しかし、正暦 4 年 3 月 27 日の「入内」は「為見明後日縣已」、つまり、明後日に開催されることになっている賭弓を見るためだったか、参入した先は東宮でなく中宮であった。入内という言葉は后妃となるため内裏へ参入する以外に普通に「内裏に参入する」という意味でも使われている。近いところでは、『小右記』正暦 4 年 2 月 5 日条「左衛門陣、上卿不参、結政了、仍入内、頃之退出」、4 月 17 日条にも、「左大弁自之、結政着了、午時許入内」とか同年 4 月 4 日条「卿相入侍従所了、外記・史等入内」（それぞれ下線付加）などがあり、実資や外記や史が入内して后妃となるのでないことは論ずるまでもない。

ところで、正暦 4 年 3 月 27 日条の「入内」の記事中の、「又云、為備御所令参入云々、居宮定有思給歟」はどういう意味であろうか。御所の備えの為に、賭弓の当日でなく、前日でもなく、2 日も前に、そして他に同母妹たちもいるのにすぐ下の妹原子だけを呼び寄せたのである。定子は何を思ったと実資は思ったのか。あるいは中関白家では既に原子の東宮入侍は既定路線だから、宮中の生活を見せてやるために呼び寄せたのか。そうだとしたら、淑景舎に入るであ

³⁹¹ 『小右記』長徳元年正月 19 日条に「関白二娘＜号内御匣殿＞今夜参青宮云々」とある。

³⁹² 大日本古記録本の『小右記』、「縣已了」に「賭弓」、「居宮」に「后」の改訂がある。

ろう³⁹³原子を、定子付きの女房たちが「淑景舎」と認識していたこともありうるのかもしれない。しかし、『小右記』の正暦4年3月27日条の「摂政二娘今夜入内、或云、参中宮、為見明後日縣已了」で原子は「摂政二娘」であり淑景舎とは呼んでいない。『前田本枕冊子新註』が、年表6頁の正暦4年3月27日に付した「摂政道隆の二女原子入内。淑景舎」は田中重太郎独自の注釈に過ぎない。

定子の舞姫献上が正暦5年の11月だとすれば、五節の辰の日は11月20日となり、原子の東宮入侍の2か月前となる。（ここに閏月はない。）おそらく、入内の吉日は決定され、婚儀のための準備は進められていただろうし、正月の行事の多さを考えれば、淑景舎の室礼も大方年内で、このころは整っている時分ではないだろうか。原子に随って宮中に入る女房の人選も終わっており、舞姫のかしづきに出されたという女房も、淑景舎に入ることに決まっている女房の1人だったのだろうと考える。もしこれが、摂関家の女房だったら、『枕草子』86段のいう「女御、御息所の御方の人出だすをばわるき事」とする「女御」との共通項は何なのか。

清少納言は『枕草子』を回想で書いたから、登場する人物を当時の官職でなく、のちの極官名で描いてはいないのだろうか。しかし、例えば「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」（新編102段、209頁）は長保元年か2年のこととされているが、極官権大納言である藤原公任を「公任の宰相」と長保年間の官職名でよび、やはり極官権大納言である源俊賢を宰相と同時代の官職名で記し、「左兵衛督の中将におはせし」といっているように、いずれも極官名でなくその時の官職名で呼ぶ傾向が強い。『枕草子』内で原子の他の段の登場場面と呼称を調べたが、東宮妃となってからは、当然ながら淑景舎とよばれている。しかし、260段（新編397頁）では、清少納言は原子を「中姫君」と呼称している。260段は法興院（積善寺）での一切経供養の日のことなので正暦5年2月21日³⁹⁴と特定される。原子の東宮入侍と日時などがいつ決定されたのかは史料からはわからないが、東宮入侍1年前に「中姫君」と呼んでいた原子を、それより以前に「淑景舎」と呼ぶ可能性は低いのではなかろうか。定子の舞姫献上が正暦4年だとすると、原子の女房もまだ摂関家の中姫君の女房であろう。定子の舞姫献上が正暦5年の11月であっても、原子はまだ東宮妃にはなっていない。しかし、入内の1か月半前で³⁹⁵、既に淑景

³⁹³ 正暦2年に東宮に入侍した姫子は宣耀殿である。正暦4年現在の東宮居貞の在所ははっきりしないが、冷泉朝以後東宮曹司であった昭陽舎（梨壺）と考えられている。（倉本一宏 2010：17 など）。宣耀殿、麗景殿に東宮妃がいたのだから東宮在所は昭陽舎であろう。勿論『源氏物語』で東宮に入内した明石の姫君が淑景舎となるのも桐壺が光源氏の直廬であった以上に東宮曹司が昭陽舎であるのが前提であろう。『権記』に長保2年（1000年）12月13日条、居貞が昭陽舎にいたことがわかる記事が見える。（いつから昭陽舎に居住していたかではないが）。「東宮に参る。戊剋、昭陽舎に入御す。御車、寝殿に*す」（「*」に入る漢字は「差」のエの代わりに車を入れたもの。逆向に戻って堂前につけるの意。）

³⁹⁴ 『日本紀略』及び『本朝世紀』正暦5年2月21日。新編頭注は「入内したのは正暦4年3月（『小右記』）であるから、この時（正暦5年2月）既に宮中の人だったことになる」とするが、これも正暦4年に、定子と呼ばれて（賭ろ見物か）参内したと東宮入侍の混同であろう。

³⁹⁵ 『枕草子』100段（新編199頁）では原子の東宮入内は正月10日と書かれている。

舎が整い、随行する女房が決定している時点であれば淑景舎の女房といっても違和感は僅少ではないだろうか。

原子の殿舎が淑景舎となるのは必然であった。居貞の最初のキサキとなった藤原綏子は里居がちであるとはいえ麗景殿の尚侍であり、正暦2年に入内して、正暦5年には既に東宮居貞の第一王子敦明（のちの小一条院）を5月に出産したばかりであった藤原城子は宣耀殿にいた³⁹⁶（城子は後に立后する）。これから東宮に入内する有力者の娘の在所となるのは残っている淑景舎以外は考えられない。後日談だが、原子は長保4年（1002年）8月3日に急死する。『権記』で「頓滅」、『小記目録』も「頓滅」という言葉を使う。『栄花物語』巻第七「とりべの」は「御鼻口より血あえさせたまひて、ただにはかにうせたまへるなり」（新編 358 頁）と死の異常さを言い立て後宮での口さがない噂を語るが、後宮は必死の闘いのある場所でもあることを窺わせる噂である。

定子の舞姫献上を正暦5年の11月と考えれば、正暦4年の五節とした場合に起こってくる、出仕直後としては物慣れた印象などの疑義は解消されるし、「淑景舎」の問題も僅少化する。定子の舞姫献上は正暦4年だったと断定する根拠は前田本に書き入れられた後世の注解以外にはなく、注解の書き入れの時期や根拠は不明である。書き入れの11月12日という日付にしても、正暦4年とすれば、参入は丑の日だから12日にしたというだけではなかろうか。前田本の書き入れだけを根拠に定子の舞姫献上は正暦4年であって正暦5年ではなかったということはできず、むしろ、正暦5年であった可能性が高いと考える。

³⁹⁶ 大納言の娘城子は、目と鼻の先の桐壺が、権力者関白の娘を迎えるべく準備がされていくのをどのような思いで眺めていただろうか。

第7節 中宮彰子の献上 長保2年(1000年)

『紫式部日記』には、彰子が敦成親王を出産した寛弘5年(1008年)の五節が描かれている。

「五節は廿日にまゐる」(新編 175 頁)に始まり、五節の様子と、衆人環視の中を進む舞姫・童女に寄せる式部の感懐が綴られている。敦成親王出産の慶事に華やかに行われた五節であった。紫式部が彰子のもとへの出仕したのは寛弘2年(1005年)あるいは3年の12月29日とされるので、彰子はこの8年前の長保2年(1000年)に、舞姫を献上していた。式部は中宮の舞姫献上を実際には見ていない。中宮彰子の献上を考証する。

(1) 長保2年の献上者

長保2年の彰子以外の舞姫献上者は『権記』長保2年11月19日条「□□公卿・殿上人等、中宮の五節所に向かふ。還る間、右大将・民部卿・□□中納言・平中納言及び宰相等、殿上人と相共に藤宰相の五節所に到る。事了りて、本座に還り侍り」(撰関古記録データベース。大日本古記録本)という記述があり、中宮の他、藤宰相が五節所を経営しているので藤宰相も献上者だったことがわかる。藤宰相は参議懷平である(『公卿補任』)。懷平は長徳4年(998年)10月23日に従三位で参議に任じられたので、2年後の献上は順当なところだろう。

同じく『権記』18日卯の日の童女御覧の条に「十八日、辛卯。童女を覧る<中宮四人>。



藤中納言、童□□を申す。御覧、了んぬ。又、将に中宮の御方に参らんとす(後略)」(撰関古記録データベース。大日本古記録本)とある。すると、藤中納言と童の関係と、誰が誰に申(謙譲語)したのかが不明瞭になる。佐藤泰弘(2009)や寺内(2004)の献上者リストで藤中納言を長保2年の献上者に含めていないのは、この理由によるものではないかと推察する。しかし、史料大成本の『権記』及び続群書類従完成会の『権記』では、この部分に読点はなく「覧童女、<中宮四人>、藤中納言童申□□(2字以上を意味する長方形)、御覧了」であるから、藤中納言の童と解釈できる。「藤中納言の童」となれば、舞姫に従ってきた童女のことになり、藤中納言が舞姫を献上したことになる。『権記』の写本として最古のものである伏見宮本(左に挙げた)で「藤中納言」と「童」の間には特に意識的断絶はないように見える。むしろ「童」と「申」の間のほうが広い。「藤中納言童が、何かを申した」と解するのに問題はないように思う。ところで、この年に藤中納言は2人いた。藤原実資と藤原時光である。あいにく『権記』ではどちらの『藤中納言』かはっきりしない。「藤中納言」は『権記』長保2年7月16日条では「藤中

納言<実資>」であり、8月25日条には「藤中納言時光卿」、10月5日条には「中納言藤原朝臣<実>」と表記しているが、実資は前年の長保元年に舞姫を献上したばかりであるから（『小右記』で確認される）、舞姫献上者であるならこれは時光と解釈できる³⁹⁷。

（2）彰子の献上とは

彰子は藤原道長と倫子の間に生まれた長女である。彰子は前年の長保元年（999年）11月1日輦車宣旨を得て入内し、11月7日に女御宣下を受けた。道長はなんとしても定子の出産前に彰子を入内させたかったらしい（倉本一宏 2003：101）。彰子の女御宣下があったのと同じ日、中宮定子は大進平生昌宅で一条の第一皇子敦康を出産した。長保元年の12月、太皇太后宮であった昌子内親王が没した。后位が一つ空いたのである。ここで、皇太后詮子は太皇太后に、皇后遵子は皇太后へ繰り上がって皇后位に空きが移る。そこで彰子は翌長保2年の2月に立后されて中宮となり、定子は皇后と呼称を変えた。彰子は中宮となって初めて迎える五節に舞姫を献上したことになる。しかし、この時、彰子は13歳。21歳の夫一条にとって彰子は関係を持つには幼すぎる雛遊びの後に過ぎなかった。この間、長保2年の五節の11月には、もう1人の妻后である皇后定子（25歳）は、再び出産（媛子内親王）のため、前年敦康出産時と同様に皇后宮大進平生昌の家に滞在しており、宮城にはいなかった。

舞姫献上者決定は天皇または摂政の専権事項であり、天皇一条は21歳になっていて、道長は左大臣であって摂政ではなかったので、道長に献上者の決定権はなかった。では、一条が彰子に舞姫献上を言いつけたのだろうか。一条が、あまりに幼くて扱いかねている彰子に舞姫を献上しろと下命するとも思えない。しかし、彰子の方から、献上を申し出たとしたら、どうだろう。舞姫の後宮入りの慣習が絶えてから、天皇が舞姫献上をトップダウンで命じなければならない最大の理由は、費用が掛かりすぎるため、献上を回避したがる者が多かったからである。この章の「はじめに」に引いた『年中行事抄』に掲載された「寛平御遺誡」に「毎年五節。無人進出。（中略）令貢二人」とあったように、自発的に進み出る者がなかったので、献上者を選んで貢がさなくてはならないのであった。自発的な献上の申し出は却下すべきということではない。

確証はないが、この年は、道長が彰子の献上を申し出たと考える。献上者決定は長保2年の9～10月ごろであるから、彰子は立后して間もない一方、皇后定子は既に第一皇子を出産している。そして后腹の第一皇子は東宮の最有力候補である。貴族たちは道長に睨まれることを恐れて定子に産所を提供せず、定子の行啓に供奉しなかったのだが、権力の趨勢は注意深く見守っている。道長自身も、彰子に男子ができずに敦康が立坊した時に備えて、定子の没後には敦

³⁹⁷ 史料纂集本は18日条の藤中納言に時光と傍書する。

康を彰子に養育させている。道長にしてみれば、名ばかりの中宮である幼い彰子をなんとかしても貴族たちに権威ある后であることを印象付けたかったのではあるまいか。長保元年現在で后位にあった4人である太皇太后昌子、皇太后詮子、皇后遵子、中宮定子はすべて過去に舞姫を献上している。

一条のキサキとしては、長徳元年の道隆の死後には、彰子以前に3人の女性が次々として入内していた。まず、長徳2年(996年)7月20日、大納言公季の娘義子が入内して8月9日弘徽殿女御となり、11月14日に右大臣顕光の娘元子が入内して、12月2日に女御となった(承香殿)。さらに長徳4年(998年)2月11日、故関白道兼の娘の尊子が入内して御匣殿となっていた。義子と尊子是一条に厚遇されなかったが、元子は定子が不在の間、一条の寵愛を受けている³⁹⁸。長保2年の彰子の13歳という年齢を考えれば、この年に舞姫を献上しなくてもよさそうに見えるが、幼いながら、彰子は他のキサキたちとは一線を画する中宮であること、そして1人前の后であることを殊更にアピールするには、太皇太后を筆頭とする后たちが輪番で行ってきた舞姫献上が有効であると道長が判断したのではなかろうか。勿論、13歳の彰子が自分で舞姫献上を差配できるはずもない。すべては父道長が取り仕切ったはずである。実際、この豊明節会では、道長は自ら内弁を務めている。この推論通りに、彰子の献上が道長の発案だったとして、これを受け入れた一条はどんな思いだったのだろうか。彰子の立后を、一条はためらったが、母后詮子や道長の意を受けた藤原行成などの攻勢によって、押し切られた格好で承諾したという。一条の逡巡の様子は行成の『権記』からもみてとれる。彰子の后としての立場を強くする舞姫献上は、とりもなおさず定子の地位の相対的低下につながる。定子を慮る一条は彰子の舞姫献上をどのような思いで受け入れたのだろうか。

³⁹⁸ 元子は長徳4年(998年)には一条の子を懐妊したとして内裏を退出したが、今でいう想像妊娠か、流産であったのか、子が生まれることはなかった。

第8節 寛仁2年(1018年)の一品宮の献上 敦康親王か脩子内親王か

寛仁2年(1018年)の舞姫献上者は9月14日に定められた。『御堂関白記』(大日本古記録本) 寛仁2年9月14日条に「十四日、癸酉、從内出、參中宮、還来、此日被定五節者、一品宮・資平宰相・備前守景齊・信濃守道成云々」とある。「資平宰相」は実資の養子で、前年の寛仁元年3月4日に31歳で参議(正四位下)に任じられたばかりであった。五節は11月の2度目の卯の日に行われるが、今はまだ9月の中旬。後日、差し障りが出て、献上者交代もないことではない。しかし、この年は11月の『御堂関白記』にも、19日条に、「參一品宮、退出後、献彼宮薰爐并薰香等、舞姫装束給道成、加薰香少々、而後參大内、從大宮一品童女装從皇太后給資平宰相舞姫装束云々」(傍書はそのまま)とあり、道長は19日(丑の日)一品宮のところに行って退出後、彼の宮には薰炉と薰香などを献上、道成には舞姫の装束と薰香少々を与えた。それから内裏へ行くと、大宮(彰子)が一品宮に童女の装束を、皇太后が資平に舞姫装束を送ったということを聞いたということであり、一品宮、道成、資平に五節の雑物を送られているので、この3人は9月の定め通りに献上したことが確認される。景齊だけが、確認できないが、『小右記』11月25日条に頭書ではあるが、「五節人々、殿上備前守景齊・信乃守道成、一品宮、参議某<作名也>」と五節を出した人々として名があるので、おそらく4人とも実際に献上したものと思われる。ここの参議某は資平に照応する。資平は実資の養子であるから、実資が助力しており『小右記』には資平献上の準備などの様子の記述は多い。備前守景齊はともかく、豊明節会の日には公卿たちが連れ立って「一品宮の五節所」や資平の五節所を訪れているので、この年に一品宮が献上したことは疑いない。

問題は一品宮が誰であるかである。『小右記』、『御堂関白記』いずれも一品宮に敦康親王を充てている(大日本古記録本)。先行研究でも寺内(2004)、佐藤(2009)、服藤(2015)3人³⁹⁹のリストは献上者一品宮を敦康親王としている。佐藤は典拠を『御堂関白記』と『小右記』とし、服藤は『御堂関白記』、『小右記』、『左経記』としている。『左経記』では寛仁2年の五節関係の記事は11月21日卯条の「己卯、参内、道成朝臣殿上堦飯、人々多被参入。於清涼殿東廂、御覧二童下仕等、新嘗祭於神祇官被行(後略)」と22日辰の天皇は舞姫を召す以前に還御したという簡略なものだけである。21日条では道成朝臣が殿上の堦飯を供していることが知られ、殿上の堦飯も舞姫献上者が用意するのが通例であるので、道成朝臣の献上のさらなる裏付けにはなる。一方、三上の献上者リストは一品宮を脩子内親王とするが、出典の記載はない。

(1) 敦康親王

³⁹⁹ 藤本のリストは長和5年(1016年)までである。

親王の最高品位である一品宮は同時に数多くは存在しない。長和 4 年（1012 年）には三条天皇皇子敦明を入れて 3 名いたが、敦明は長和 5 年に立太子した時点で「一品宮」ではなく「東宮」と呼ばれ、長和 6 年（1014 年）、東宮位を辞して准上皇となつてからは「院」と呼ばれているので、寛仁 2 年（1018 年）9 月～11 月現在の「一品宮」は皇后定子所生の敦康親王と、同母の姉宮脩子内親王の 2 人だけである。

寛仁 2 年に舞姫を献上した一品宮は敦康親王なのか。まず、疑問に思ったのは献上者名に官職名がないことである。同時代の日記類には、1 人に特定される高貴な男性は実名が付されることはまずなく、男性親王も帥宮、弾正宮あるいは上野親王など、官職名で呼ばれるのが通例である。この時代の皇族の中で最も格の高い式部卿宮でも、式部卿宮あるいは一品式部卿宮とよばれており、一品は冠されることはあっても官職の方は落ちていない。

では、敦康親王は寛仁 2 年に官職がないほど幼かったのか。長保元年（999 年）11 月 7 日生まれの敦康は寛仁 2 年（1018 年）には 20 歳。寛弘 7 年（1010 年）7 月 17 日に清涼殿（里内裏）で父一条天皇の見守る中、12 歳で元服して三品に叙せられた。『大日本史料』は『御堂関白記』、『権記』、『日本紀略』から引いたこの元服のそれぞれの記録を載せるが、三本とも敦康を「一宮」と記している。『大日本史料』はこの 1010 年の元服の項の条項名として「同親王を三品に叙し、大宰帥に任ず」とする。

ところが寛弘 8 年（1011 年）8 月に『小右記』は敦康を「男一宮」、寛弘 9 年（1012 年）6 月 19 日に「男一品宮」と呼んでいる。敦康が、『大日本史料』の条項名のように寛弘 7 年（1010 年）7 月に帥宮になっていたとしたら、ここでは（官職があるのに）官職で呼んでいないことになり、官職は敦康と脩子の呼び分けの論拠にはならないことになる。

しかし、『大日本史料』所掲の敦康の各元服記事を通覧すると、『日本紀略』『御堂関白記』の敦康元服の項の引用中には大宰帥（または帥宮など）の文言はない。（撰関古記録データベースの『権記』では敦康元服記事は別記とされており、確認できない。）敦康が元服と同時に太宰帥に任じられたとするのは続く『栄花物語』の引用のみである。ここには「内の一宮御元服せさせ給て、式部卿にとおほせと、それは東宮の一宮さておはします、中務にても二みやおはすれは、たゞ今あきたるまゝに、今上の一宮をは、そちの宮とそきこえける」（大日本史料『栄華物語』第八「はつ花」）とある⁴⁰⁰。『栄花物語』の話では、敦康の父一条天皇は敦康を元服の時に式部卿にしたかったが、既に東宮の長男である敦明が式部卿に任官して空いていなかったのも、たまたま空いていた帥宮にしたという。しかし、敦明が式部卿になるのは、敦明の父である居貞親王が即位（三条天皇）した寛弘 8 年であり、敦康元服の寛弘 7 年 17 月には敦明はまだ式

⁴⁰⁰ 小学館新編『栄花物語』では①460 頁に相当する。

部卿にはなっていない。敦明は寛弘7年には、東宮の王子に過ぎず、親王の最高格である式部卿は無理である。敦明は寛弘8年から式部卿であるが、敦明の前は、村上皇子で母が中宮安子である為平親王が式部卿だったから、敦康元服時に式部卿が空いていなかったのは事実である。(為平は寛弘7年10月9日に出家した。) 帥宮も若い親王の官職として悪くはない。村上天皇となった成明は后腹の三品太宰帥から立坊している。(『日本紀略』に「天慶七年四月二十二日甲子寅時、太宰帥ノ親王成明親王坐凝花舎、同日御南殿、以成明親王為皇太子」とある。)

敦康は元服の翌年寛弘8年(1011年)6月2日、一品に叙せられ准三宮とされる。これは死を前にした一条が、立坊させてやれなかった愛息にみせた、せめてもの配慮であったことは明らかだろう。それから3週間も経たない6月20日に一条は崩御した。敦康の帥宮任官の正確な年月日は不明ではあるが、もし元服時に太宰の帥になっていたなら、『御堂関白記』『権記』『日本紀略』のどれか一つぐらいにはその記載があってもよいだろうに、いずれの史料でも、「元服時には敦康は三品に叙せられた」というだけで、太宰や帥の他の官職の記述はないから、元服後12歳ではすぐには官職につかなかったと解釈しておきたい。

『小右記』が、敦康を寛弘8年(1011年)8月に「男一宮」、寛弘9年6月19日に「男一品宮」と呼んでいるのは、官職があるのに官職で呼ばなかった例外ではなく、敦康が、品階のみで官職は未就であったゆえの呼称であったと考える。任官の年月日は不明ながら、敦康は、一条の没後の長和2～3年には太宰の帥になっており、その時点では『小右記』でも帥宮と呼ばれた。例えば、長和2年(1013年)9月23日条では敦康を「帥宮」と記載する。そして、長和5年(1016年)三条皇子敦明の立太子によって式部卿が空席となったので、敦康は式部卿となり、この任官後は、『小右記』でも『御堂関白記』でも式部卿宮あるいは式部卿親王と呼ばれている。

(2) 一品宮敦康親王と一品宮脩子内親王の呼称

敦康親王と脩子内親王がどのように呼び分けられていたか、『一条天皇実録』を基に、それぞれの親王の記述を辿ろう。

① 脩子内親王の呼称

『権記』寛弘6年(1009年)10月4日条の「一宮、一品宮同車御南門(後略)」は、内裏に火事があったので、脩子と敦康が一つの車で南門に行ったという記事である。寛弘6年(1009年)には敦康はまだ一品に叙せられていないし、元服さえしていないから、ここの一品宮が脩子で一宮が敦康であることは明白である。

『小右記』寛弘8年(1011年)8月11日条には「今夜一品親王從院渡給中納言隆家云々、但男一品宮不遷給云々、一品宮令他処之事、左府気色不快云々」(下線付加)という記事がある。父一条天皇崩御から約2か月、脩子是一条院を出て隆家の第へ移った。敦康は遷らなかった。道長は脩子が隆家の第へ移ったことが気に入らなかったという。脩子が隆家の邸に移ったことは事実であり、ここの「一品親王」と「一品宮」が脩子で、「男一品宮」が敦康であることも明らかだろう。この年、脩子は16歳、敦康は前年元服したばかりの13歳。敦康が一品に叙され准三后宣下を受けたのはこの2か月前の6月2日だった。

脩子の方は寛弘4年(1007年)4月、一品に叙せられたが、一品に叙せられる前は、『小右記』と『御堂関白記』では「女一宮」と表現しているが、一品に叙せられたからは、「一品内親王」、「女一品宮」、「一品宮」である。

『小右記』長和2年(1014年)正月27日「今夜故院一品内親王渡給三条宮」(故院は一条天皇)

『小右記』長和3年(1015年)11月10日「資平云、昨日帥宮被参女一品宮、左相国同車」

『小右記』(久世本)治安4年(1024年)3月4日「辛卯(中略)一品宮<脩子>、廿余日有被惱、而去夕俄出家、<尼>、若是御本意歟、有何事」

② 敦康親王の呼称

これに対し敦康親王を示す語は、『権記』においては寛弘7年7月17日の元服の条で「一宮御元服」、同じく『権記』(桂宮本)寛弘8年5月7日条では「一宮御方」と、「一宮」である。

『小右記』	寛弘8年(1011年)8月11日	男一宮
『小右記』	寛弘9年(1012年)6月19日	男一品宮
『小右記』	長和2年(1013年)9月23日	帥宮
『小右記』	長和3年(1014年)10月12日	帥宮
『小右記』	長和3年(1014年)10月25日	帥宮
『小右記』	長和3年(1014年)11月10日	帥宮
『小右記』	長和4年(1015年)10月6日	帥宮
『御堂関白記』	長和5年(1016年)7月20日	式部卿宮
『小右記』	寛仁2年(1018年)12月15日	式部卿親王

寛弘 9 年 (1012 年) に『小右記』で官職名でなく男一品宮と呼ばれている。前述のように『栄花物語』では敦康は寛弘 7 年に元服と同時に帥宮となったというが、『御堂関白記』、『権記』、『日本紀略』にはいずれにも敦康元服の項に太宰帥の記述がなかったことから、元服時には敦康は三品に叙せられただけで特に官職はなかったからだろうと考える。とにかく、長和 2～3 年には「帥宮」と呼ばれ、長和 5 年 (1016 年) 式部卿任官後は、『小右記』でも『御堂関白記』でも式部卿宮あるいは式部卿親王と呼ばれていることが確認される。

ここまで、もし寛仁 2 年 (1018 年) の舞姫献上者が敦康であれば一品宮でなく、式部卿宮と呼ばれたであろうことを検証してきた。したがって、寛仁 2 年の舞姫献上者の「一品宮」は、官職をもっては呼ばれ得ない一品内親王脩子であったと考える。

なお、敦康親王は寛仁 2 年 12 月 17 日、五節から約 3 週間後に 20 歳の若さで病死した。15 日には病篤く、17 日の暁に出家して午後未刻に薨去した。『左経記』寛仁 2 年 12 月 17 日に「早旦参式部卿宮、<日来御悩、昨今殊重、仍今暁御出家云々>」とある。「日来」は主観的な言葉ではあるが、2～3 日だけのことでないのではないのか。病人は神事では忌むべきものだから、敦康にとって人生最後の五節は病床で想像するだけで終わったのかもしれない。

(3) 脩子内親王の献上

以上見てきたことから、寛仁 2 年 (1018 年) の舞姫を献上した一品宮が敦康でなく脩子内親王であったということが明らかになったと考える。

脩子は、父は一条天皇、母は中宮定子で、2 人の中の最初の子として、長徳 2 年 (996 年) 12 月 16 日生まれた。母定子は脩子が 5 歳の長保 2 年 (1000 年) 12 月に死去した。定子の後見であった中関白家が没落すると脩子も頼りない身となったが、父一条は愛情を注ぎ、寛弘 2 年 (1005 年) 3 月 27 日着裳と同時に三品に叙した。翌年寛弘 3 年二品に、寛弘 4 年 (1007 年) 正月には一品に叙し、准三后とし、本封の他に封戸 1000 戸を加えた。父一条の寛弘 8 年 (1011 年) 6 月 22 日死後、道長たちの世話になることを潔しとせず、寛弘 8 年 8 月 11 日、脩子是一条院を出て母定子の弟である隆家の邸へ移った。この時敦康は一条院に残ったので、それ以降は姉弟別々に暮らすことになった。(長和 2 年からは脩子は三条宮に暮らす。)

政治抗争を離れ、三条宮でひっそりと暮らす身であった脩子は、寛仁 2 年 (1018 年) に舞姫献上を命じられた時、固辞したという(『小記目録』第七、十一月新嘗会「一品宮被固辞五節事」)。脩子は固辞はしたものの、『小右記』(寛仁 2 年 11 月 19 日条、25 日条)や『御堂関白記』の寛仁 2 年 11 月 19 日の記録からわかるように、結局、一品宮脩子は寛仁 2 年 11 月に舞姫を献上して、彰子から童女の装束、道長からも薫炉・薫香などを送られた。舞姫献上者は天

皇の決定事項であるが、寛仁2年には後一条は11歳、当然舞姫の献上者を決めることなどはできない。したがって、これは摂政の決定であつたはずである。この時は、道長は既に摂政を頼通に譲っていたが、頼通は何事によらず、父道長の決定を仰いでいたことは衆人の承知するところであつた。舞姫献上者決定も実質的に道長の意向によるものであろう。

寛仁2年(1018年)とはどういう年だったのだろうか。この五節に先立つこと約2年、三条天皇は、道長(及びその意を受けた貴族たち)からの度重なる譲位の圧力を受けていた。百人一首に採られて有名な「心にもあらでうき世に長らへば 恋しかるべき夜半の月かな」(『後拾遺集』雑一)と、苦しく悲しい思いを託した歌を残した三条は、長和5年(1016年)正月29日、自身の長子敦明の立坊を条件に退位した。三条はこの歌を詠んだ時には、既に眼病によって月を見ることはできなかつただろうと考えられている。正月29日、直ちに道長の外孫である敦成親王が践祚して、道長は摂政に就任した。長和5年(1016年)の五節は、後一条天皇(敦成)の大嘗祭の一環として行われた。翌年寛仁元年(1017年)、病んだ三条上皇は5月9日に崩御した。8月6日には父の後ろ盾さえ失った敦明が東宮を遜位。8月9日には彰子の2番目の皇子の敦良が立坊した。この敦良の立坊は、脩子にとっては、同母弟の敦康の皇位への道が完全に断たれたことでもあつた。次代の天皇も道長の外孫が継ぐことになったのである。母を亡くした幼い時には肩を寄せ合うように脩子と暮らした敦康の将来は道長によって奪われた。脩子にとって道長父子からの舞姫献上の命令などさぞ不本意なことだったろう。そのころ、脩子にとって頼りとなる叔父の中納言隆家は、自ら希望して大宰権帥となり、長和4年(1015年)4月24日正二位に叙されてその日に赴任して行つたので、京にはいなかった⁴⁰¹。

脩子は、なぜ舞姫献上を命じられるハメになったのだろうか。結論をいえば、それは脩子が准三后であつたからだを考える。准三后とは、太皇太后、皇太后、皇后の3つの后に准じた位で、前にも述べたが、脩子は寛弘4年(1007年)に父一条によって准三后とされ、封戸1000戸が加封されている。寛仁2年(1018年)には後一条は11歳で、まだ子女が儲けられる年齢ではなかつたが、3月7日に道長女威子が20歳で入内(それまで尚侍)、10月16日に中宮に立つたばかりであつた。舞姫献上者が決定された9月14日現在の中宮は三条の妻后妍子であつたが、三条退位で枇杷殿に移っており、内裏の後一条後宮に「后」はいなかつた。この時の内裏は4月に新造なつたばかりの本内裏である(詫間直樹『皇居行幸年表』1997)。皇太后彰子は幼帝の母后として内裏居住権はあつたが、中宮時代の長保2年に舞姫を献上したことがあるので、既に巡による献上は果たしている。妍子に加えて寛仁2年現在には、もう1人三条の妻

⁴⁰¹ この五節の翌年である寛仁3年4月には、刀伊(女真族)が対馬・壱岐から北九州を一帯を襲撃。殺戮と略奪をほしきままにした。隆家は太宰の長として府官人や現地の士兵を率いて戦い、これを撃退せしめたことはよく知られている。この奮戦にも、当初、朝廷は兵士たちに恩賞の必要はなしという意見に傾いたが、実資の意見でやっと恩賞は出ることにはなつたと史料に伝わる。

后がいた。皇后娥子である。娥子は正暦2年(991年)東宮時代の三条の妻となって以来、三条の愛情は深く、敦明はじめ6人の皇子女を生んでいる。寛弘9年、妍子に遅れること2か月で、道長の不興を承知で立后された⁴⁰²。娥子もまた三条の退位とともに内裏を出ている。内裏外居住なら准三后脩子より、同じく内裏外居住ではあるが、中宮妍子または皇后娥子のほうを献上者とするほうが順当に見える。三条の足掛け6年の在位中に五節は2回は停止されて、3回が催行されている。寛弘8年(1011年)は10月24日に三条の父冷泉院が崩じたため、また長和4年は11月17日の内裏の9度目の焼亡の為の中止であった。催行された3回のうち長和2・3年(1013年・1014年)の献上者は判明しており、長和元年(大嘗会)のみが不明である。この不明の年の献上者たちの1名が中宮妍子または皇后娥子であった可能性はゼロではない。三条上皇が前年寛仁元年(1017年)5月9日に崩御しているので、妍子も娥子も、夫の死で重服は1年(13か月)であるから、寛仁2年(1018年)6月まで服である。『一代要記』によれば、娥子は寛仁2年3月25日忌となる⁴⁰³。(そこに傍書で、寛仁2年を3年に訂正している)。忌になれば当然もう舞姫献上者となることはないが、『小右記』の寛仁3年3月25日条「皇后宮令御出家云々、年来御国名剋念云々」とあるので『一代要記』の誤りであろう。長和元年大嘗会に献上していないにしても、寛仁2年には妍子と娥子に何らかの事情か障りがあったのではなかろうか。寛仁2年には脩子以外にも女性の准三后はいた。妍子所生で三条皇女の禎子内親王が、長和4年(1015年)に准三后になっていた。道長の外孫である。しかし、長和2年(1013年)生まれの禎子は寛仁2年にはわずか6歳であるから、献上者となる年齢ではなかった。もし、妍子と娥子に障りがあったとしたら、次に候補となるのは脩子であって不思議はなかった。『小記目録』の「一品宮被固辞五節事」は本文が伝わらないので脩子が固辞するのに理由を挙げたのか、挙げたとしたらどんな理由であったのかは不明である。一方何らかの理由で中宮妍子・娥子に障りがあったとしたら、脩子が献上者となるのは一応順当な巡であったといえよう。

女性の舞姫献上は「女御も次いでによりこれを献上せよ」という規定は、あとから加えられた「后妃」の献上規定の「后」の献上という形で踏襲された。意図された「后妃」は、もともと妻后を意味したはずだが、中宮遵子、皇后定子と彰子以外に、皇太后穩子、太皇太后昌子、皇太后詮子も献上者となった。さらには資子内親王、脩子内親王という准三后もまた、舞姫献上者となったのである。

⁴⁰² 立後の本宮の儀に参列した公卿は実資、隆家他2名だけ、殿上人はゼロで、皇后宮大夫も他に引き受け手がないので中納言隆家が引き受けたという寂しい皇后だった。

⁴⁰³ 『続神道大系』朝儀祭祀編所収。

おわりに

寛和元年（985年）正月16日条の『小右記』に「両后不被献舞妓、依御別宮、依仰候後、事了罷出、（中略）今朝以進正信從宮被仰云、御他所時、不被献妓女云々、仍無其儲、（中略）皇后御他所之間、不被献妓女之事、已是定事也、又有所見、此数令啓了」と2人の后が、内裏以外の宮にいるから舞妓を献じなかったという記事がある。これは正月の踏歌に関する事なので、11月の五節ではないのだが、寛和元年、正月16日の女踏歌に舞妓を出すように要請のあった2人の后は舞妓を献じなかった。寛和元年には后は2人しかいない。詮子が皇太后となるのは息子一条天皇の寛和2年（986年）の即位のあとであるから、寛和元年の后は皇太后昌子と中宮遵子である。昌子たちは、踏歌節会の妓女を出すように要請されたのである。女踏歌は内教坊の妓女40人と東宮・中宮からあわせて4人または6人が出て行くという⁴⁰⁴。そこで中宮分の舞妓の要請があったものと思われる。

しかし、昌子と遵子は踏歌節会に関して、「内裏に居住しない后は妓女を出さないと思っていたからその用意がないので出せない」といつてきたのである。使いで来た「正信」であるが、詳細は不明ながら、寛和元年4月9日に円融上皇と中宮の連絡でやってきた「少進正信」という人物がおり、これは中宮職の少進であると考え（院司なら判官代、主典代となるはずである）。踏歌の舞妓の件で来た使いも「進正信」であるので、同一人物で正信は中宮職の進、つまり、「舞妓が出せない」と伝言を託した后は中宮遵子であったことになる。遵子の伝言を聞いた「殿」は「本当か、すぐに舞妓を送るべきではないか」と実資に質問してきた。そこで実資は、内裏外にいる后は舞妓を献上しないことについては、そういう定めはあったことを告げている。この「殿」は寛和元年現在に関白・太政大臣であった頼忠と考えられる。頼忠は中宮遵子の父である。

ここで見てくるのは、踏歌に関して舞妓を出すのは内裏にいる中宮で、内裏外に居住する后は献上しないという認識があったことである。宮中の行事ならば、先ずもって内裏の中宮が関わるのはやはり当然であろう。

五節は年中行事の中でも別格の一大イベントで、しかも当時はまだ十分神事性を保っていたから、内教坊の踏歌とは同列にはできないが、宮中行事に関わる后はまず以って内裏居住の後であるのが筋であろう。当時もその認識はあったと見られる。五節の舞姫を献上した中宮（皇太后）穩子も資子内親王も献上時には内裏に居住していた（資子は准后）。踏歌の際には「内裏外におり、予定していなかったから準備していない」と舞妓献上を断った中宮遵子・太皇太后

⁴⁰⁴ 『大日本百科全書（ニッポニカ）』の山中裕の解説による。

昌子もその後、五節の舞姫は献上することになる。かくて、内裏外に居住している后たちも五節舞姫の献上の役割を担うようになり、内裏外にひっそり暮らす准后脩子内親王にも献上が命じられることになったのだろう。

后妃も献上者となるという規定が加えられたのは「当代女御」が献上者として加えられた後代の事であり、この「后妃」は、当今が命じることのできる妻妾である后妃が想定されていたはずである。しかし、母后である穩子が、息子を案じて舞姫を献上する例を作れば、后妃は端から妻妾以外の后にも拡大されたことになる。逆に、女御の献上は実際問題として難しかったのではなかろうか。絶妙なバランスを保った経営が要求されている当代の後宮で、どの女御に献上させるかという問題は、「寛平御遺誡」で宇多天皇が「大変な難事であった」と伝える「どの公卿に献上させるか」以上の難題となっただろう。昇進とセットにならない後宮の女御たちを、ましてや帝寵とセットにしたり、序列につながる位階とセットにしたりしたら、女御たちの実家同士にどんな波風をたてることになっただろうか。中宮は、実家の運命をかけて競い合う女御たちからは抜きでた存在で、自身の湯沐（食封）2000戸という経済力も持っていた。また、内親王たちが「献上すべき者」に入っている、無品親王たちには到底献上できるだけの資力はあるまい。記録に残る献上者で内親王だった2人はいずれも品封に加えて封戸1000～1500戸が与えられた准后であった。封戸1500戸なら大納言の職封800戸の倍近く、1000戸でも左右大臣の職封2000戸⁴⁰⁵の半数である。職封のすべてが順調に収受されなかったにせよ、后たちは一応の経済力を備えていた。舞姫を複数回献上する公卿たちが出てくる間、后たちの献上は、与えられた封戸に対する一応の経済負担を求められた結果といえよう。

后妃・女御・尚侍などと規定された女性たちによる舞姫献上は、結局「后」だけが巡に献上を引き受ける結果となった。后は妻后だけでなく、皇太后や太皇太后、准后までもが献上を引き受けた。かくて、後一条朝ごろまでに、少なくとも8名の「后」たちが、舞姫を献上した。後一条朝期に、4人の舞姫のうち2名分を受領たちが引き受ける制度が確立すると、公卿からの献上者は2人だけを確保すればよいことになった。公卿の数も増加傾向にあった。天慶元年、穩子が舞姫を献上した年の公卿（8月1日現在）は12人であったが、後一条の治世最後の年である長元9年（1036年）の8月には25人の公卿がいた。12～13人のうちから年に3～4人の献上者を担うのは難しいが、25～26人から2人なら、公卿の負担は軽くなった。公卿分を補う形で要請された後の献上はほぼ必要なくなったといえるだろう。

服藤は、彰子を最後に女性の舞姫献上がなくなった理由として、女性の経済力・政治力の低下を挙げている（服藤2015：49）が、平安末期・院政期には、后あるいは不婚内親王たちに院号が下され、所領が加えられる例が輩出している。八条院の広大な所領は特に有名である。こ

⁴⁰⁵ 『大宝令』『養老令』による封戸数。『簾中抄』（平安末期成立）では大納言600戸、左右大臣1500戸。

これらの女院たちがもつ所領は、摂関家の女性であっても、男性家長などから独立して女院自身が経営したものであったことは諸家の女性院領の研究によって明らかにされてきた（山田彩起子 2010）。女性献上者がなくなった理由は、后たち女性の経済力低下ではなく、公卿の人数自体も増加したところへ裕福な受領が毎年2名を引き受けることによって、公卿の人数負担は半減された結果であると考ええる。

五節を献上した後たちのうち、当今の中宮であれば、正式な定めとなる前に、夫君天皇から、「よろしく頼む」と話があったかもしれない。帝寵を専らにする当代の中宮なら、宮中におけるゆるぎない立場を見せつけるような、贅を尽した五節を企画もしたろうが、内裏外に居住する何代か前の帝の妻后や、准后の中には、唐突な仰せつけに戸惑って、葛藤しつつ献上することもあっただろう。男性官人の場合には、献上は昇進に付き物だったが、見返りの昇進などのない后たちの舞姫献上は、その年の時代の要請に、より強く反応したものだった。男性官人たちの献上は個人の官人人生の中の一段階であったが、後の献上は、後の生きた時代のそのものの中にあったものだったといえよう。天変地異のなかの祈りともいえる献上もあった。殿上人の耳目を驚かすような趣向を凝らした舞姫一行を献上した中宮もあった。その中宮のその後の人生を見れば、きらびやかな五節もまた、時代に翻弄された儂い花だったといえよう。女性たちの献上はそれぞれが時代のドラマの中にあった。

第2章 五節の忌と女性たち

はじめに

五節は本来神事であったから、潔斎が必要だった。神事の際の潔斎には散斎・致斎の別があった。散斎は本格的で嚴重な致斎（^{まゐ}真忌）の前後の潔斎で、弔いをしたり、病気を見舞ったりすることや、糸竹歌舞は控えるが、散斎の間は通常の朝廷業務は続行される。神事の何日前から散斎に入るかは神事によって異なるが、例えば大嘗祭（大祀）の場合は、散斎1か月、致斎3日である（『令義解』二「神祇」）。大祀は踐祚大嘗祭のみで、中祀は祈年、月次、神嘗、毎年大嘗会、賀茂の五祭⁴⁰⁶、小祀は大忌、風神、鎮花、三枝、相嘗、鎮魂、鎮火、道饗、園韓神、平野、春日、大原野、梅宮、神今食、大神祭の十五祭である⁴⁰⁷。踐祚大嘗祭は大祀であるから致斎3日間だが、「毎年大嘗会」とは新嘗祭であり、中祀であるから、致斎は2日でよい⁴⁰⁸。

「中祀五祭と、小祀のうち大忌と風神兩祭は祭事に当たり諸司すべて及び内裏も斎戒に入る。その他の小祀は神祇官だけの斎となるが、勅使差遣の場合には内裏も斎戒することが規定されている」という（岡田重精 1982 : 134）。致斎の日には、当該祭事以外のすべての業務は停止される。

大嘗祭は大祀で致斎は3日間だが11月1日から末日まで散斎1か月である。大嘗祭の散斎は初期には3か月も続いたが、大同年間（806～810年）のころからは1か月、すなわち11月1日から11月晦日までだけになった。しかし、11月晦日までとあるように、致斎（丑、卯、辰の3日間）の前だけでなく、神事が終わった後も11月末日まで続く（『令義解』二「神祇」）。

新嘗祭は致斎は2日間で、11月1日から新嘗会当日すなわち2度目の卯の日までが斎日である。新嘗祭祭祀は卯の日であるから五節舞の舞われる豊明節会の辰の日は既に致斎・散斎期間ではないことになる。

『延喜式』卷三神祇三／臨時祭に「凡祈年、賀茂、月次、神嘗、新嘗等祭前後散斎之日、僧尼及重服奪情従公之輩、不得參入内裏、雖輕服人、致斎并散斎之日、不得參入、自余諸祭斎日、皆同此例」とあって、新嘗祭の前後の散斎期間中は僧尼、重服の者は宮中に参入できない。輕服の者といえども致斎並びに散斎の日に参入できないといっている。

『禁秘御抄』神事次第の「十一月中卯日新嘗会」に続く割注に「自一日至其日、辰日解斎、神事様同神今食、但先例五節之間、丑寅日或輕服人參、然而不可參事歟、有行幸時、殊可有潔

⁴⁰⁶ 『延喜式』では中祀は祈年、月次、神嘗、新嘗、賀茂等としている。

⁴⁰⁷ 『拾芥抄』による。洞院公賢原編で実熙増補と見られる。南北朝時代。

⁴⁰⁸ 小祀は当日限りでよい。

齋也」(「一日より其の日に至る。辰の日解齋。神事のさま神今食に同じ。但し、先例、五節の間、或ひは輕服の人参る。しかれども参るべからざるか。行幸有る時は、殊に潔齋あるべき也)」とある。時代が下ると輕服の忌も緩んだようである。

五節は華やかな行事で、時代が下るとともに神事より娛樂に重点が置かれるようになっては行つたが、五節舞を含む新嘗祭・大嘗祭行事は元来れっきとした神事であるので、それなりの精進潔齋はやはり必要とされた⁴⁰⁹。女性の生理現象も忌の対象であつたから、五節に妊婦は内裏にいることはできず、宮中から退出する。(『延喜式』の規定によれば、妊娠3か月で退出する。) また、月事の女性は、天皇や中宮などの前に出られないから、せつかくの五節を曹司で過ごすことになるわけである。『源氏物語』と『平家物語』では妊娠による五節前の退出は確認できなかったが、他の物語には、妊娠によって内裏を退出する女御はいる⁴¹⁰。この章では五節の忌と女性たちのかかわりについて探る。

⁴⁰⁹ 觸穢となれば五節そのものが中止となることもあつた。『補注4』を参照。

⁴¹⁰ 例えば、『狭衣物語』には院の女御の妊娠による退出がある(卷四新編②224頁)。「院の女御は、五節のほどに堀川に出たまひしに、齋院のおはしましし方にぞおはしける」と院の女御が五節の前に宮中から里邸とする堀川へ退出したとある。この女御は翌年4月1日に皇女を出産する。すると遡って懷妊は5月終わりがりとなり、11月初旬には(閏月がなければ)妊娠6か月目に入っていることになる。

第1節 妊婦

女性の忌みとしては、まず、妊婦があるが、女性の忌を規定した条文は『延喜式』にある。

凡宮女懷妊者、散齋之前退出、有月事者、祭日之前、退下宿廬、不得上殿、其三月、九月
潔齋、預前退出宮外、
(『延喜式』第三 神祇三 臨時祭)

「凡宮女懷妊者、散齋之前退出」、つまり、懷妊した女性は神事に先立つ潔齋のうち、散齋の始まる前に宮中を退出することが要求されていた。妊婦の神社参拝についても、『禁秘御抄』上「神事次第」に「妊者五月以後忌之、或三月已後、同夫当月猶不忌、不入内院許也」とあり、妊婦妊娠5か月あるいは3か月以後の参詣は控えるべきであるが、妊婦の夫もまた、出産予定当月は内院には入ることは忌むとある。『拾芥抄』下「觸穢部」には妊婦は3か月以後、夫は5か月以後の参拝は憚るべき（従って5か月以上の妊婦の夫は神社への奉幣使には立たない）だという。しかし、妊婦とその夫の参詣については各神社ごとにそれぞれ規定を設けており、妊婦の参詣に関しても5か月以後を禁じた神社や、3か月とした神社もあった。妊婦の夫も、神社に参拝しようと思ったら、その期間だけ同じ家に居なければいいというのだが、この「同じ家」については『都玉記』で建久2年(1191年)11月1日条に春日神事の札を立てることに關して、女房着帯以後、妻室と同室であっても、母屋と廂で別れていれば、あながちに忌まなくてもよいかと鷹揚な解釈をしている⁴¹¹。

妊婦たちは妊娠5か月あるいは7か月で着帯する。『源氏物語』の時代では、藤原彰子が、賀茂祭の神事の忌のため、懷妊5か月の寛弘5年(1008年)4月13日に多くの貴族が供奉する中、一条院内裏から土御門第に退出した(「四月十三日、子刻中宮自一条院、遷上東門第、依御懷孕五月也。依為神事之間所出御也」(『日本紀略』)。神事を避けたための退出であるから、彰子はこののち再び内裏に参内しており(「六月十四日、中宮入御内裏<牛車>〔後略〕」(『御堂関白記』)、実際の出産のための退出は7月16日であった(『御堂関白記』、『権記』、『日本紀略』)。時代が下っては承保元年(1074年)10月16日に中宮賢子が懷妊7か月で禁中から退出した(『扶桑略記』30「白河」)。白河の即位は延久4年(1072年)12月8日だが、翌年父である後三条上皇が病没しているから、次の年、すなわち、この承保元年が大嘗祭(11月21日)である。したがって、11月1日より前の退出となったのだろう。

⁴¹¹ 『都玉記』(記主は日野資実[1162～1223年])に「女房著帯以後也、於妻室雖為同室之内、可有母屋庇差別敷、強不可忌敷」。

新嘗祭の潔斎については、前述のように、新嘗等祭の前後の散斎の日には僧尼や重服の者の
宮中参入も禁じられる⁴¹²。(軽服の者は致斎と散斎の当日だけ宮中に参内できない。) 滋野井公
麗(1733~1781)の『禁秘御鈔階梯』には、「自一日至其日。辰日解斎。神事様同神今食。但先
例五節之間、丑寅日。或軽服人参。然而不可参事歟。有行幸之時。殊可有潔斎也」とあり、丑
寅の日には軽服の人も参内したといい、確かに『中右記』、『山槐記』に先例が見られた。『中右
記』保延元年(1135年)11月20日条に「軽服日数中、五節之間参内、無其憚也。但不入帳台
内」とあり、五節の間、帳台には参入できないが、参内は憚りなしとあっており、『山槐記』治
承4年(1180年)11月19日の卯の日の童女御覧に軽服中の左大将実定と、軽服中の右宰相中
将実守が召しによって御前に伺候している(「左大将<実定、軽服>別当<時忠>右宰相中将
<実守軽服>依召候御前」)。卯の日は新嘗祭祭祀当日であり、致斎日であったはずである。本
来神事であった五節も娯楽性を強めていくと同時に、忌みも緩んでいった側面がある。

⁴¹² 神事の宮中へ僧尼は参入できない。これを使って、五節に関してではないが、道長が定子の内裏参入に嫌
味をいっている。長保2年(1000年)年2月10日、入内して3か月弱の女御彰子が里邸へ退出すると翌
11日には中宮定子がひっそり参内した。勿論、一条天皇が彰子退出に合わせて呼び寄せたのである。二后
並立とは言うが、実際に中宮彰子と皇后定子が同じ日に内裏にいたことはない。彰子が退出すると定子が
参内、そして彰子の参内前に定子は退出する。(それぞれの退出日と参内日は上村悦子[1967]に詳しい。)
「女御」彰子の里邸退出へは、源大納言(時中)、右大将(道綱)、平納言(惟仲)、左衛門督(誠信)、左
大弁(忠輔)、宰相中将(齊信)、源宰相(俊賢)など時勢にさとい公卿たちが追従した他、四位・五位の
殿上人24人、六位2人が「勅に依って供奉した」と『御堂関白記』は得意げに記す。一方、翌11日に中
宮である定子がひっそりと参内したのだが、定子に供奉したのは、中宮職の進である役目柄の藤原惟通と
右近将監藤原永家などごく僅かであった。(この時、皇后宮大夫は長保元年[999年]以来藤原公任であっ
たのだが。)そして、この時、道長が定子参入を「神事日如何 事与毎相違」といっているのだ。定子は長
徳2年(996年)5月、いわゆる長徳の変に遭って自ら髪を切っていたので、定子を出家した尼とみなし
て神事のある日の参入を非難したかったのだ。この日の神事は春日祭の使いの出立であった。

第2節 月事

神事の間、妊婦は宮外へ退出しなければならなかったが、一般女性が月事だからと退出しなければならないことはない。「有月事者、祭日之前、退下宿廬、不得上殿」(『延喜式』卷三「神祇」臨時祭)であるから、生理中の女性は、祭日つまり斎日の前に宿廬に退下した。「退下宿廬」という言葉は群書類従全巻(含む続、続々)を通じて、月事の個所しか用例がなく、『日本国語大辞典』や『国史大辞典』などに掲載はないが、唯だ3月9月は宮中外に退出と云っていることから、3月と9月以外は斎日の始まる前に宮中内の曹司に下がっていけばよいということだろう。この『延喜式』の規定は『小野宮年中行事』『雑穢事』にも引かれている。『拾芥抄』下末第二十「觸穢 忌血事」の項に「有女月事者、先斎日退出下曹司、不得殿上、唯三月九月御斎、則退出宮外」(下線付加)と、はっきり「曹司」という言葉に置き換わっている。しかし、宮中にいられるといっても、「不得殿上」であるから、主上や中宮の前には出られない。

しかし、月事はいつも予想通りというわけにもいかない。予想外の日に始まることも多い。前述の『拾芥抄』の「唯三月九月御斎、則退出宮外」に続く「并斎日内忽覺遭月事、則登時退耳、不為穢」という文は、斎日に突然月事となってしまった時は、直ちに(曹司に)に退出すれば穢にはならないといっているのだ。

さらに鎌倉時代末期の物ではあるが、伊勢外宮祢宜の記した『古老口実伝』⁴¹³に、「一 月水女血氣。或鋪設。或板敷落付事出来者。〔子良中御氣殿板敷橋月水不淨之時□□□□〕以他人削退之後。沐浴解除以後。参宮无憚云云。但鋪設者。可取退也」(〔 〕内は傍書。割書ではない)とあるが、これは、「経血を床などに落としてしまった時は、(自分ではなく)他人(召使など)にそれを消除させて、沐浴して解除すれば参宮して差し支えない」と読める。

月事の忌みについて『延喜式』には日数は見当たらないものの、『玉葉』、『禁秘御抄』、『拾芥抄』などで、原則7日の忌みに集約されてゆくように見える。

宮女や女房たちは月事の期間中、新嘗祭なら、おのおのの曹司に下がっていけばよいようであるが、舞姫はどうするのか。舞姫は11月の2度目の丑(あるいは子)の日に参内して、天皇や群臣の前で舞を舞う。この五節の舞姫たちが月事にあたったらどうするのか。舞を習い、様々な準備を整えてその日に備えてきても、心理的な重圧の中、予定が狂うことは当然起こり得る。しかし、実際の例は、記録には見出せない。舞姫の献上者たちは内々の心積もり(参議昇進したとか)もあるだろうし、正式な仰せも2~3か月も前にあるが、舞姫は同時に確定しなければならないものではない。舞そのものは1~2日みっちりかければ習得できる種類のものであるし、衣装も洋服と違い、和装は何とか、着る人に合せられる。従って、「あやうい」とみれば

⁴¹³ 『古老口実伝』鎌倉時代末期。伊勢神宮外宮の祢宜の渡会行忠著。神宮祠官、殊に外宮祠官たるものの心得べき古来の慣習・故実を記したもの。

直前の交代などの手配は可能ではあろう。しかし、内裏参入後に月事が始まったらどうなるのか。

『拾芥抄』下末「觸穢」に「(前略) 其言語称赤汗者、可忌之状、与僧条同、但血之為物、可不謂之穢惡乎、因茲頃年例(後略)」と月水は忌むべきではあっても「穢惡」ではないという⁴¹⁴。舞姫に月事が始まった者が出て、勿論それだけで内裏が穢となることはない。(内裏の曹司には月事の者もいるわけであるし。)

五節舞は畢竟、豊明節会内での行事で、新嘗会の一連の神事の解斎行事のひとつでもある。知らぬふりもできたのだろうか。普通の舞姫は受領や四位五位の娘でよいのだから、代役候補は考えられよう。例えば、延喜 19 年 11 月「十六日、庚辰、(中略)、五節一人忽煩物氣、以他人令舞云云、参議悦女也」(『貞信公記』同日条)のように、舞姫が 1 人、物の気を煩って舞えなくなって急遽代役が立てられたこともある。記録は伝えないが、舞姫が病などにより舞えなかった例の中には、あるいは月事によるものあったのではないだろうか。

舞姫以外にも、決まった日に行事の大役を女性が勤めることはある。大嘗会に先立つ天皇の御禊には、きらびやかな牛車を 10～20 両率いて女御代が供奉する。この女御代は大臣の娘が勤めるが、御禊の女御代を勤めた女が天皇のキサキになる例が知られている。天皇御禊の女御代については、伊藤亜樹子(2006)に詳しいが、朱雀天皇以降(土御門ごろまでは)女御代とキサキとのつながりは極めて高い。五節舞姫は受領階層の娘でよいが、女御代は大臣家の娘である。しかも、女御代からの入内を予定する場合は、何か月も前から準備するわけだから、当日「困ったこと」が起こらない保証はない。月水の忌を 7 日程度とすれば、単純な確率として、4 分の 1 の確率で障りが出る計算になる。いざとなったら影武者でも使うのだろうか。それとも、そしらぬ顔をするのだろうか、月事は一身のみの忌で伝播する穢惡ではない。大臣家の姫ともなれば、男性では親兄弟以外に顔を見知っているものはいない(まれな垣間見は例外)。一握りの女房が口裏を合せば、代役が知れわたる事はまずない。大きな穢惡を知らぬ顔で行事を催行した話としては、『大鏡』が語る寛和 2 年の一条天皇の即位式の話がある(新編『大鏡』「道長」405 頁)。即位式当日、嫌がらせだったのだろうが、高御座の内に生首が置かれていた。あわてた行事が一条の外祖父兼家に注進に行った。が、兼家は狸寝入りを決め込んで聞こうとはしない。兼家は、しばらくしてから目を覚ました風で、「ご装束は果てぬるにや」(大極殿のお支度は済んだのか)と言って何食わぬ顔で即位式へ向かって行った。注進した行事は、兼家はそのような不吉なことは「なかったこと」にするつもりだったことに気がついて、言わずもがなのことを言ってしまった自身を恥じた。そして、即位式をそのまま挙行了した兼家の処置は上首尾だったと『大鏡』の作者は評している。この生首事件が実際にあったこととは到底思え

⁴¹⁴ 「穢惡」については大本敬久(2013: 第 3 章第 3 節「悪穢について」)を参照。

ないが、このように明らかに重大な穢惡をものとししない実際的な解決とそれに対する好意的な見方が平安時代にあったことを知れば、少々の忌み事を表沙汰にせず現場でやりくりしてしまいうことが、まま行われていたのではないかと考えてはいけないだろうか。

(イ) 大嘗会御禊の女御代

穏健な解決策として考えられるのは、まず、第一には、儀式そのものを突然の事態に対処できるようにしておけばよかったのではないか。五節は新嘗祭・大嘗祭の最後の一部分であるが、大嘗祭の場合には祭祀に先立って天皇が御禊を行い、その際には女御代が随行する。女御代には大臣の女が選ばれて、その後は天皇のキサキとなる。后妃入内が可能な姫であるから幼女ではない。伊藤亜樹子は、この女御代は、斎宮などと違って、実際の御禊で果たす役割は神事そのものにかかわっていないことを指摘する。10 台程度の牛車を率いて行幸に花を添える飾りであり、「女御代は御禊儀に関与することはなく、隣接する幕所に控えているのみであったろう」

(伊藤 2006 : 2) という。天皇が内裏を出発する時には女御代も参内はするが、待賢門の南(後二条天皇御禊の例)⁴¹⁵あるいは郁芳門外の北掖に牛車を立ててそこから降りることはないという⁴¹⁶。また、河原の頓宮では、女御代の車を頓宮の北錦幌内の北に立てるが、これも幌の内である。伊藤はさらに、女御代は神事の核である奉幣の前に帰還してしまうことを指摘している。以上、女御代の果たす役割と神事からの距離を勘案すれば、月事となった場合でも、牛車・幕所を宿廬にみたてて、沐浴してうえで、行列参加していたのではないかと本論筆者は想像してみる。

なお、服喪や觸穢の者が別車で同行する例は史料に見出せるのである。

車 『小右記』長和元年(1012 年)4 月 5 日、道長が、出家してしまった三男の顕信に会うため比叡山に登った際、実資の養嗣子の資平も同行したが、実資は資頼の車に乗り、「資平依觸穢別車」と觸穢の資平は別の車に乗って同道している。

船 『御堂関白記』長和 2 年(1013 年)年 10 月 6 日道長は公卿や殿上人を引き連れて宇治で舟遊びをしたが、この時、権大納言は觸穢によって別船だった。

觸穢となっても別車・別船で参加できるのである。まして月事は悪穢とは考えられていない。女御代の御禊の儀式次第では、女御代は月事にかかっても、随行できるように式次第が出来上がっているのではないかと推測する。今のところ本論筆者の憶測にすぎないが、女性の参列が

⁴¹⁵ 「大嘗会御禊節下次第」(正安 3 年[1301 年]3 月 24 日の後二条天皇の大嘗会御禊で節下の大臣の執務の順序を示したもの)。

⁴¹⁶ 『江家次第』卷十四「大嘗会御禊皇后同輿儀」に「次女御代車列立郁芳門外北掖<以南為上>(中略)女御代参入之後有_二行幸_一」。

必須の行事には案外それなりの対策が立てられていたのではなかろうか。尚侍の定員が2名であるのも、月事によって業務が停滞するリスクを減らしていたという説もある。さらに、本論筆者の関心のある点は、伊勢斎宮が月次祭（日にちは決まっている）に赴く時、斎宮は瑞垣御門の外側に玉串を立てるだけで、肝心の玉串を正殿に奉獻するのは父の神官に扶けられた童女である。斎宮は黒木の御所に入りそこから出ないので、役割は小さい。また『古老口実伝』（伊勢外宮）で「月水女血氣。或鋪設。或板敷落付事出来者。以他人削退之後。沐浴解除以後。参宮无憚云云」と、沐浴解除すれば参宮できるということと斎宮の関連⁴¹⁷、さらには天皇の神社行幸の際は、肝心の奉幣は上卿が行うことは、青年天皇の場合、キサキのうちの誰かが懷妊していても神事が滞らないため⁴¹⁸の安全策ではないだろうか、など今後の課題にしたい点が多い。

（ロ） 着裳

奉仕する女性が特定の人物と決まっていなかったのであれば、リスク回避の解決策は、初めから月事の心配のない年齢の少女を選ぶことだろう。公卿は自分の娘でなくてよいのだから、十分若い少女を舞姫に仕立てればよい。殿上分は実子だが、女子の有るものを選ぶのだから、その際年若い少女を持つ殿上人を選べばよい。では、舞姫たちは、何歳ぐらいだったのか。

実資が自分の五節の舞姫とするために、参入より前に自邸で着裳させていることから、舞姫たちは着裳後の少女たちだったと推測される。そこで、この時代の貴族たちの娘たちの着裳年齢を拾った。これらは上級貴族の娘たちで、当然入内させる前には着裳させたはずであるので貴族全体の例ではないかもしれないが、とりあえず幼女から結婚可能な女性と考えられていた年齢の参考にはなろう。

表 着裳年齢⁴¹⁹

史料名	着裳年月日	西暦	娘	誕生年	着裳年齢	父	備考
小右記	永祚元年 10 月 26 日	989	藤原定子	976	14	道隆 (内大臣)	一条天皇后
小右記	正暦 4 年 2 月 22 日	993	藤原原子	980 ?	14 ?	道隆 (摂政)	東宮(後の三条天皇) 妃
			道隆三女 (藤原頼子?)			道隆 (摂政)	敦道親王(冷泉皇子) 室

⁴¹⁷ 岡田重精は『北山抄』を引いて、斎王は月事になれば祭に不参、離宮で月事があると外宮に行かず、外宮で月事があれば内宮に行かず、幣物も祓い棄てることを指摘している（岡田 1982 : 332）。

⁴¹⁸ 妊婦の夫の参拝にも制限がある。しかし、産月が近づけば妊婦は退出するし、内裏でも殿舎が別なら忌はないのだろうか。

⁴¹⁹ 『小右記』と『御堂関白記』（東京大学史料編纂所データベースによる）。『摂関古記録データベース』も参照した。検索語は「着裳」と「著裳」。

			道隆四女	985 ?	9 ?	道隆 (摂政)	一条天皇御匣殿
御堂関白記	長保元年 2 月 9 日	999	藤原彰子	988	12	道長	一条天皇后
小右記	長保 2 年 11 月 もしくは 12 月	1000	恭子女王 (斎宮)	984	17	為平親王	
小右記	寛弘 2 年 3 月 27 日	1005	脩子内親王	996	10	一条天皇	
御堂関白記	寛弘 6 年 3 月 27 日	1009	藤原寛子	999	11	道長	
御堂関白記	長和元年 10 月 20 日	1012	尚侍威子	999	14	道長	
小右記	長和 4 年 12 月 (予定)	1015	当子内親王 (斎宮)	1001	15	三条天皇	
御堂関白記	寛仁 3 年 2 月 28 日	1019	藤原嬉子	1007	13	道長	尚侍
御堂関白記	寛仁 3 年 2 月 29 日	1019	禊子内親王	1003	17	三条天皇	
小右記	万寿元年 12 月 13 日	1024	藤原千古	1011 ?	14 ? 420	実資	
小右記	万寿 2 年 11 月 25 日 (予定)	1025	嫔子女王 (斎宮)	1005	21	具平親王	

上記の例は数が少ないので、一般化はできないが、結婚する予定のない斎宮（恭子 17 歳・嫔子 21 歳）たちの着裳年齢は高めであり、后がねとなった権力者（道隆や道長）の娘たちの着裳は早め（9~14 歳）であることが窺われる。

(ハ) 舞姫と初潮年齢

現在日本の女性たちの初潮年齢は、12 歳 2.3 か月（50%の中央値）という⁴²¹。日本の少女たちの初潮年齢については、他にも多くの調査もなされてきたわけだが、初潮年齢の若年化は世界的に普遍的現象であり、日本においても同様で、1880 年代には 16.5 歳であった平均初潮年齢は 1960 年代には 12.3 歳にまで低下した（早田みどり・守山正樹 1991）。特に日本においては第 2 次世界大戦後の窮乏の時代から復興の時代に入って急激に若年化したことは広く認められている。体格と初潮年齢との関連も検証されており、「初潮はある体位にまで発育が進行した後で起ってくるという現象」で、「体位の中で身長よりはむしろ体重が、あるいは脂肪蓄積割合が、より密接な関係を持つ」（守山 1980）ということらしい。平均初潮年齢は 50%の既潮率をもとに算出されているが、舞姫の「心配事」を考える時、50%では安心できないかもしれない。その点、山崎図南（1959）は、年齢別の未潮者／既潮者を示していて参考になりそうだ。これによれば、昭和 25 年と 27 年（1950 年と 1952 年）に 13 歳だった少女たちの未潮率は 80% 前後で、14 歳でも 1950 年 60.6%、1952 年 54.8%ある。また、前述の早田みどり等による論文

⁴²⁰ 千古の誕生年・着袴年齢は不明だが、万寿元年の着袴を（同時代の多数例により）3 歳と仮定した繁田（2008：28）による。

⁴²¹ 多くの統計がとられているが、大阪大学大学院人間科学研究科・比較発達心理学研究室の行った 2011 年 2 月第 13 回全国初潮調査資料を参照した。<http://hiko.hus.osaka-u.ac.jp/hinorin/introduction.pdf> 最終アクセス 2017 年 11 月。

(早田みどり・守山正樹 1991) は初潮年齢の平均値と最小値・最大値をあげている。これによれば、サンプル数は少ないが 1870～1879 年に生まれた 6 人の平均初潮年齢は 17.3 ± 1.11 だが、最若年は 15 歳、最年長は 18 歳、1880～1889 年生まれでは 40 人の平均初潮年齢は 16.5 ± 1.60 で最若年は 13 歳、最年長は 20 歳であった。1000 年前の調査記録などは勿論ないだろうが、平安貴族の子女たちの食料事情は飢餓からは程遠かったとしても、脂肪の蓄積は少なかつただろうし、もっぱら室内で、いざって生活していた少女たちの発育が、1880 年代生まれの人たちより、良かったとは考えにくい。1880 年生まれの人たちより遅い初潮は考えられても、早いことはないだろうから、出生年 1880 年の結果を下限として参考にすれば、平均的には初潮年齢は 16～17 歳以上になるだろう。しかし個人差はあり、13 歳で初潮を迎える少女もいないとは限らない。これを数え年齢に直して、舞姫献上者たちの立場からみれば、数え 14 歳はほぼ安全、13 歳なら絶対安全ということになる。舞姫にはおそらく、14 歳未満の少女たちが選ばれて、献上者は万一の事を心配せずに準備に励むことができたということだったのだろう。

舞姫の年齢がわかるものとしては、定子献上の舞姫がいる。「舞姫は、相尹の馬頭のむすめ、染殿の式部卿宮の上の御おとうとの四の君の御腹、十二にていとをかしげなりき」(『枕草子』新編 86 段 172 頁) とあり、定子の出した舞姫は、父は馬頭の相尹で母が式部卿宮の北の方の姉妹という娘で 12 歳の少女であった。

数えで 12 歳なら、今なら 10～11 歳でほとんど「童女」であろうが、月事の心配は一切ない「安全」な年齢で舞姫を選んでいった結果ではなかったろうか。舞姫たちは受領クラスの娘たちが多かったとはいえ、家にいれば、お姫様として、邸宅の奥で人前に出ることも少なく、召使たちにかしづかれる身である。そのような若い少女たちが重い衣装を身に着け、天皇や中宮の御前、また大勢の群臣たちの前で舞うという重責を負わされたのである。気を失う舞姫が続出して無理はなかろう。例年の舞姫はおそらく未潮の数え 12～14 歳だが、『源氏物語』少女巻で「例の舞姫どもよりはみなすこしおとなびつつ」(新編③63 頁) ある舞姫たちは、それより年長で 15～17 歳程度であったと推量する。

ちなみに定子は 15 歳で入内したが、第一子脩子出産は 21 歳の時であり、彰子の敦成親王出産も、彰子は 21 歳の時であった。彰子は 12 歳で入内したが、当初は一条との男女関係は想定されていないキサキであった。詮子の一人子の一条出産は 19 歳(あるいは 18 歳とも)の時だったし、藤原穩子が保明親王(夭折)を出産したのも 19 歳の時、安子が第一子の承子内親王を出産したのは 22 歳の時だった。早期の皇子誕生が切望されたキサキたちの第一子出産年齢は 20 歳前後であったのだ。ちなみに道長の正妻倫子は永延元年(987 年)に 23 歳で道長と結婚し正暦 3 年(992 年) 28 歳で長男頼通を産んだ。藤原城子の第一子敦明の出産は 23 歳だった。初産年齢が 20 歳前後というのが当時の身体的発育からのやむをえない下限であったとみてよ

いではなかろうか。おそらく、貴族女性たちは数え 17～18 歳程度で初潮を迎え、20 歳ごろ初産というライフサイクルを生きていたと考えられる。『源氏物語』中で明石の姫が東宮の第一王子を出産したのは、本文中に年齢明記はないが、光源氏が明石滞在中にできた娘だから 14 歳以上にはならない。この異常な設定の理由は分からない。ここで第一王子を必須としない設定もできたのではないかと思うのだが。母親の明石の君の年齢や六条御息所の年齢設定に大きな矛盾が指摘されて久しいが、ここも意図しない不整合だったのであろうか。）

おわりに

五節は神事であるから潔斎が必要であった。忌むことがある者、身内に不幸があつて服している男女の他、何らかの穢に触れたものは五節に参入できない。僧尼も参内できなかったが、彼らは元来、五節行事とは無縁であった。女性ならではの理由で五節から疎外されたのは妊婦や月事の女性があつた。妊娠した女性は五節を前に宮中からの退出を求められ、月事の女性は曹司に下がっていなければならなかった。肝心の舞姫も、おそらくは月事の心配を避けるため、数えで 12～14 歳程度の幼い女の子たちが駆り出されるようになったのだろう。そして、あわただしく着裳の儀礼をおこない、晴れ姿ではあっても重い衣装を着けて、一生一度の重い役目を担ったのである。

終章

毎年 11 月に行われる新嘗祭（代始めは大嘗祭）の最終日にあたる辰の日（大嘗祭では午の日）に天皇は豊楽殿または紫宸殿で群臣に宴を賜った。この宴（豊明節会）では 4 人の舞姫（大嘗会は 5 人）が五節舞を舞った。五節は、宮中人が楽しみに待つ行事であったが、五節に舞姫を献上する人々の負担は重かった。しかし、醍醐朝ごろまでの舞姫は天皇と共寝して後宮に入り、キサキとなる道が開かれていたので、公卿たちは費用も顧みず、競って自身の娘を飾り立てて舞姫として差し出した。

『源氏物語』の少女巻に描かれる 4 人の五節の献上は、過去の舞姫たちの後宮入りの事象を利用して、秘密の息子冷泉帝の子孫繁栄と、元服したばかりの嫡子夕霧の将来を安泰なものとするべく、用意周到に仕組まれた光源氏の計略だったと解釈する。そこには、娘を後宮に入れて皇子を産ませ、その皇子を即位させて外戚として権力を握る、という当時の上層貴族たちの飽くなき野望の実態が、按察大納言と左衛門督の献上に見え隠れする。一方、彼らのその野心を利用して、冷泉帝には子孫をもたらすと同時に、嫡子夕霧にとって最大の対抗勢力となりうる内大臣への権力集中を抑えるという、光源氏の政界構想が読み取れる。また、少女巻の五節で、光源氏の舞姫になることによって二条院にやってきた惟光女と夕霧の出会いの場が創り出された。五節は少女巻で巧妙に利用され、『源氏物語』の政治背景に奥行きを与え、ストーリーの展開になくはない演出として使用されている（第一部第 1 章）。

さらに、『源氏物語』では、元服して六位に叙せられた夕霧は、六位の着る浅葱の袍を嫌って参内することを避けてきたが、五節ということで特別に直衣参内などが許され、喜々として宮中に出かける様子が描かれる。元服後の夕霧の「殿上へ還る」という表現から、昇殿は許されていたことが示されているが、六位は本来、昇殿は許されない。例外には六位蔵人があるが、本論では、夕霧は蔵人ではなく、非蔵人であったと推定した。第一部第 2 章でみたように非蔵人は昇殿は許される時でも蔵人の青色の袍は許されないので、浅葱の袍からは逃れられない。また、夕霧が五節の日の参内に着用したのは華やかな行事の日に許される青色の袍ではなかったかと推測する（第一部第 2 章）。

平安院政期に至り平家興亡の時代には、五節献上は、任国からの収益で豊かな富を蓄えた受領たちに割り当てられた。新叙より、一層の蓄財が推測される重任や遷任を得た受領に献上を命じられることが多かった。平家繁栄の礎を築いた平忠盛は、天治元年（1124 年）に五節を献上して内裏の昇殿を望んだが、許されず、失望の歌が『金葉和歌集』に残る。忠盛は、結局、

長承元年（1132年）得長寿院の寄進という莫大な成功による見返りの一環として内裏昇殿を手にしたが、殿上人たちの風当たりは強かった。昇殿して初めて迎える五節で、それをそねむ殿上人たちとの軋轢が豊明節会の夜を舞台に繰り広げられる。それを機転で切り抜けた忠盛の逸話が『平家物語』の冒頭を飾る。忠盛の嫡子清盛は太政大臣にまで昇りつめ、平家一門は繁栄を謳歌した。平家の隆盛期にある仁安元年（1166年）の五節（大嘗会）では、5人の舞姫のうち3人までを平家一門の重盛、宗盛、知盛が献上し、平氏の財力・権力を象徴する。清盛が福原から軍勢を率いて上洛して後白河院を鳥羽殿に幽閉した治承3年（1179年）11月、京洛に軍馬のいななきと逃げ惑う人々の喧騒が満ちた夜、宮中では奇しくも五節の舞が舞われていた。翌年の治承4年（1180年）6月、清盛は福原に遷都を強行、福原を都と認めさせたい清盛は新嘗祭の福原での催行に執念を燃やした。しかし、東国では頼朝が挙兵し、平家崩壊の序曲が奏でられた時、新嘗祭祭祀から切り離された五節のみが、福原で催行されたが、五節が終わると人々は直ちに福原を捨て、平安京への帰還を始めた。福原の五節舞は平家最後の花道となった。平家にとって五節はその興亡の始まりと絶頂、そして終わりを象徴するものとなった（第二部第1章・第3章）。

華やかなイベントである五節も時として政治抗争の舞台を提供した。仁安3年（1168年）の五節では、左右の大將と平頼盛・保盛父子が解官されるという事件が起こった。内大臣で右大將の源雅通と、大納言で左大將の藤原師長は関白基房の五節帳台試への臨席への扈從を忌避したからであった。五節帳台試への扈從忌避は、基房の関白の権威への挑戦であり、基房を激怒させたが、結局、雅通も師長もわずかひと月もたたないうちに復任した。一方同じ年の五節の頼盛・保盛の解任は様相を異にした。頼盛・保盛の解任は第一に五節の参入并御覧儀が後白河の怒りに触れたためとされ、すべての官職から一年にわたる追放となった。しかし、保盛はこの年の舞姫献上者であり、ふつうの献上者たちからは敬遠される舞姫参入の儀礼も童女御覧もソツなく勤めており、舞姫も五節舞を舞い、格別の失態は見当たらない。本論筆者は、頼盛・保盛の解任は、頼盛の落ち度に帰すべきではなく、頼盛の知行国尾張を奪還して近臣に与えようとした後白河院の策謀であったと考える（第二部第2章）。

醍醐朝のころから舞姫の後宮入りがなくなると、貴族たちは多大な費用と手間のかかる舞姫献上は回避したがるようになり、新嘗会4人、大嘗会5人の舞姫調達は難しくなってゆく。そこで、公卿の舞姫献上は昇進とセットにされ、新たに参議に任じられた者に献上が命じられることが不文律となったが、公卿からの献上舞姫の不足を補うべく、女性たちも舞姫献上した。記録に残る女性の舞姫献上者は8名あり、当代の妻后、内裏に君臨した母后、内裏外で暮らす太皇太后、そして准后内親王たちと、立場は色々だったが、全員が「后」位にあった女性たちであった。男性官人たちにとっては、舞姫献上は、新参議補任に伴う役課など、自身の官人人

生においての必要不可欠なステップでもあったが、后たちは昇進とは無関係である。女性献上者たちは、あるいは息子の治世の安泰を願う母であったり（中宮穩子）、中宮の威厳を誇示するような幼い少女の献上であったり（中宮彰子）、いわば、それぞれが置かれた立場を取り巻く時代の要請を受容して献上を担ってきたといえよう。なお、本論筆者は、先行研究で皇太后遵子とされていた永延 2 年（988）年の献上者は詮子であり、遵子は前年に中宮として献上していたと考える。また正暦 4 年（993）年のこととされる『枕草子』の中宮定子の献上は正暦 5 年のことであった可能性が高く、寛仁 2 年（1018）年の献上者である一品宮は敦康親王でなく、脩子内親王であると考え（第三部第 1 章）。

五節舞は宮中人が楽しみとする行事で、娯楽性も増進したが、本来神事である。したがって、服喪中の者、何らかの穢に触れた者などは参加することができなかった。懐妊中のキサキも宮中を退出し、月事の女性は曹司に下がっていなければならなかった。五節の舞姫たちも「突然の事態」を避けるためには低年齢化が進んだと考えられる。『枕草子』が伝える中宮定子の舞姫も数えて 12 歳であった（第三部第 2 章）。

五節という行事は宮中の人々の日常に深く根ざしていた。ある人にとっては官位昇進の喜びであったが、華やかな舞の裏側で、政権安定への願いや、外戚の地位への野望、多大な負荷へのウラムツラミなど、多くが渦巻き、妊娠したキサキたちは宮中からの退出をうながされ、果ては、五節は理不尽な更迭の原因としても利用されたのである。

五節は華やかな行事であるだけに、人々の思い出の契機ともなり、過去の美しく懐かしい場面を呼び起こす。文学作品にも多く登場して、物語に奥行きを与えている。『源氏物語』は少女巻で冷泉後宮をめぐる人々の思惑を背景に置いていた。五節はまた、平家の興亡の節目を彩ってきた。五節は人々の生活の中にあって多くのドラマを生んできたのである。

今回の本論は、『源氏物語』と『平家物語』というもっともよく知られている 2 つの物語についてしか考察できなかった。この他の物語でも、『住吉物語』では女主人公が五節の舞姫となって入内が予定されるという、「五節入内」が重要なファクターとして利用されている。古本『住吉物語』は散逸して現在には伝わらず、現存『住吉物語』がどの程度、古本『住吉物語』と共通なのか確定はできないが、舞姫の入内という設定は、天皇との共寝が途絶えて 200～300 年以上を経た時代に新たに発想されたものではあるまい。「五節に参らせばや」という一言で、女主人公の後宮入りだと読者が理解した時代の発想であろう。『住吉物語』では女主人公の入内の時期が 11 月の五節と設定されているからこそ、その日に向けての準備が着々とすすみ、同時に男主人公の焦りが増してゆくという物語の緊張感が生まれるのである。『うつほ物語』、『狭

衣物語』などにも五節はしばしば登場する。五節が近づき華やぐ宮中で、讃岐典侍の脳裏を満たしたのは、前年堀河天皇と過ごした最後の五節の朝だった（『讃岐典侍日記』）。五節にはしゃぐ天皇との共寝の朝の思い出の中ではその時、着ていた自分の衣装まで覚えているという女心が切々と伝わる場面に五節はあった。『源氏物語』総角巻では、宇治で大君に寄り添う薫が、京の宮中で行われているはずの豊明節会を思い起こす。豊明節会の華やかさを対極にある吹きさらば風と響き渡る読経の声で、宇治の切迫した状況を際立たせる材料に五節は使われた。『枕草子』が語る五節は、当時、定子の置かれていた悲惨な状況は捨象して、輝く中宮と華やぐ日の思い出を綴ったものだった。

人々の生活と密着した五節が、物語にどのように登場して、物語展開上どのように利用されてきたか、他の物語についても考察を続けてゆきたい。

補注

【補注1】 第一部 第1章 中納言の娘が女御となった例

第一部第4節（1）（イ）「宮仕の意味するところ」において、『住吉物語』の左衛門督中納言が娘を五節の舞姫として入内させる予定であったこと、また、『源氏物語』では、空蟬の父である衛門督中納言が娘（空蟬）を宮仕させることの了解を桐壺帝から取り付けていたことにも言及した。また、第5節（1）（ロ）「左衛門督」で言及したが、原則中納言である左衛門督でも娘の宮仕に期待をかけて実子を舞姫としたと論じた。ここで、中納言の娘が女御となった先例をあげて、中納言たちも娘の入内に大きな期待をかけ得たことを示したい。

（1）中納言の娘が女御となった例

- 藤原元善（善子、元子、元善子とも）光孝天皇女御

仁和3年（887年）2月16日女御となる。山蔭中納言の娘。父、藤原山蔭はその約半年前の仁和2年（886年）6月13日に63歳にして従三位に叙せられて同日中納言となったばかりであった⁴²²。翌仁和4年（888年）2月4日、中納言になって足掛け3年で薨じた。仁和3年に元善の父親が63歳であったことを考えると、元善は光孝が親王時代に結婚したのであろうが、光孝との間になした子女は記録されていない。光孝即位後、斎宮・斎王を除いて一斉に賜姓された皇子女は名前は伝わるものの、生母についてはほとんどわからない。従って、この中に、女御となった元善の子が含まれていなかったとは言い切れない。ましてや、父親が中納言という身分で女御となったのだから、皇子女を産んでいたと考えたいところではある。しかし、光孝の一斉賜姓は母親の身分に関係なく、全ての子女を臣籍に下したものだ。この時、定省を含んだ班子女王所生の子供たちも源氏となったのだ。（定省の即位後⁴²³、班子女王の産んだ子女は皇籍に復し親王・内親王となったが。）

- 菅原衍子

寛平8年（896年）11月（あるいは12月）宇多天皇の女御となる。父は菅原道真である。道真は寛平5年（893年）2月に参議に列し、衍子の女御宣下により一年前の寛平7年10月26日に中納言になったばかりであった。翌寛平9年6月19日、宇多天皇譲位（7月

⁴²² 仁和2年 参議 正四位下〈藤原〉山蔭 63 左大弁。6月13日従三位。同日任中納言。（『公卿補任』より。）

⁴²³ 宇多天皇。

3日)に先立って道真は権大納言に任じられた。

- 藤原能子 (善子)

延喜 13 年 (913 年) 10 月 8 日、醍醐天皇の女御となる。のちに右大臣となる父の藤原定方も能子の入内時は中納言であった。

定方	任中納言	延喜 13 年 (913 年) 正月 28 日	39 歳
	任大納言	延喜 20 年 (920 年) 正月 1 日	46 歳

定方の父 (能子の祖父) 藤原高藤は昌泰 3 年 (900 年) 正月 28 日に正三位内大臣となるも、3 月 12 日薨。14 日に正一位太政大臣を贈られた (『公卿補任』)。つまり、能子は父が中納言になってすぐ女御になった。祖父は内大臣になってすぐに薨去。『源氏物語』では冷泉帝に入内する権中納言 (光源氏のライバルの元の頭中将) の娘は祖父の太政大臣の養女となって入内するが、能子の場合の祖父が太政大臣を遺贈されたのは、没後約 13 年も経っているから、入内時の能子は純然たる新中納言の娘である。

(2) 非参議の娘が女御となった例

中納言どころか、女御となった時、父が参議にさえなっていなかったキサキもいた。

- 藤原超子

冷泉天皇の女御となり、のちの三条天皇を産んだ超子は、藤原兼家と時姫との間の長女である。時姫は道隆、道兼、道長 3 兄弟の母でもあり、のちの東三条院詮子も超子の同腹の妹である。超子は安和元年 (968 年) 10 月 14 日に御匣殿として入内 (『日本紀略』)。同年 12 月女御となった。この時、父の兼家は 40 歳で、同年 (安和元年) 11 月 23 日にやっ

と従三位にはなったが、非参議で蔵人頭であった。(翌安和 2 年の 2 月には参議を経ないで中納言に任ぜられはしたが。) つまり超子が女御になった時、父親は参議にさえなっていなかったのであり、『十三代要略』の藤原超子に「蔵人頭従三位兼家女。安和元年十二月七日為女御。父未公卿子為女御。初有此例」と、父がまだ公卿に列していない者の子が女御になった初例とされている。(同様に『一代要記』冷泉の後宮の女御超子にも、「未為公卿女、為女御初例也」とある。実際は兼家は従三位であるから公卿であるが。なお、超子はこの年 10 月 26 日に大嘗会の御禊の女御代をつとめている。蔵人頭藤原兼家はのちに太

政大臣や摂政・関白とはなるが、三男であり、安和元年の時点ではまず、長兄に伊尹が、次兄に兼通がおり、先行きは見えていなかった。実際、伊尹の死後は兼通が関白となり、兼家を恨む兼通の最後の除目により兼家は治部卿に格下げされている。

『源氏物語』において光源氏の母は故察大納言の娘で更衣であった。従来の「大臣の娘は女御、大納言以下の女は更衣になる」という見解が適切でないことは既に高橋麻織などが論証している（高橋麻織 2016 : 134）が、光源氏の母は殿舎を賜った例外的な更衣ではなく、按察大納言の娘なのに女御宣下が受けられなかった例外的な更衣であった。本論第一部第1章内の「按察大納言」の項で検証したように、紫式部の時代の按察大納言は筆頭もしくは次席の大納言である。女御所生の皇子は賜姓しないという原則があるから、生母を女御にしないのは物語上の必要であるが、桐壺更衣の待遇はすべて女御と同等だった。殿舎を賜い、（彰子以前の）女御と同等あるいはそれ以上である正四位下の位階（正四位上は越階である）を帯びていた。「淑景舎」自体も格の劣った殿舎ではない。東宮が梨壺に居住すれば、最有力妃の殿舎となる。（道隆の次女で、定子の同母妹原子は東宮に入内して淑景舎に入っている。）

少女巻の舞姫献上者の左衛門督も冷泉帝にまだ皇子が生まれていない今、多大な期待をかけて娘の後宮入りを望むのは自然である。たとえ初めは更衣待遇であっても、第一皇子を挙げるか、父親自身の官職が上昇すれば女御昇格は可能である。

【補注2】 第一部 第2章 夕霧と大学について

第一部第2章では、夕霧の昇殿を論じ、夕霧は元服と同時に就学したことに言及した。そして、六位の夕霧の非蔵人としての昇殿の資格を論じた際、第1節(2)(二)「非蔵人・雑色と文章生」で、蔵人補任と文章生の関係も考察した。第一部第2章第1節(3)「その他の可能性」において侍従の可能性を考察した際には、夕霧の進士合格に触れた。ここでは夕霧と大学進学との関係を今少し明確にしたい。

夕霧は、元服が終わると学問を始める。まず、字をつける儀式を終え、二条東院で4～5か月、師に随ってみっちり勉強して、秋(10月か11月)に寮試に合格して擬文章生として大学に入学する。『史記』もまたたく間に読了したという。このころの貴族の幼い子弟の学習書に関しては、元服後の書始めには『史記』が用いられ、元服前の幼童時には『蒙求』、『千字文』、『李嶠百二十詠』⁴²⁴などが教科書として用いられたが、『蒙求』、『千字文』、『李嶠百二十詠』などは内容的な理解を必要とせず、世間百般の事象に関する単純な文句を、暗唱するものであったことが示されている(桃裕行1994: 401-402)。夕霧もおそらく元服前に『蒙求』、『千字文』、『李嶠百二十詠』などを暗唱しており、入学の礼をとってから、師に付いて『史記』を読んだのだろう。

翌年の春の冷泉帝の朱雀院への行幸の日に、昔の放島の試みにならって変則的な省試が朱雀院で行われ、そこで夕霧は立派に詩文を作って、省試に合格。文章生(進士)となる。さらにその年の秋には、叙爵されて侍従になった(「秋の司召しに、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ」[新編③76頁])。つまり、夕霧の元服前後の出来事を時系列にすると次のようになる。

春～夏 3月、藤壺宮の一周忌。

夕霧元服。12歳。春3月、於三条宮。

夏 字つける儀式、於二条東院 (「釣殿に召す」「短き頃の夜なれば」)。

入学、二条東院に籠ること4～5か月。

秋 寮試の予行演習(学問開始から4～5か月だから9～10月ごろ)。

(場所はおそらく光源氏の二条院、若しくは二条東院。)

冬 寮試、10～11月ごろ(寮試は元来不定期であるが、この年はおそらく光源氏家の要請によって夕霧の予行演習後まもなく行われたと考える)。大学入学⁴²⁵。

梅壺立后。

⁴²⁴ 李嶠は初唐の人。

⁴²⁵ 大学に入学した夕霧は少女巻で惟光女を垣間見て和歌を詠んだ場面で「大学の君」と呼ばれている(新編③60頁)。

光源氏、任太政大臣大饗 10 月。於二条院。

光源氏、五節舞姫献上。11 月中の丑の日。

大宮、夕霧の正月衣装を調える。年の暮れ。

夕霧、六位の身分で参内するのは気乗りしないという。

春 冷泉帝、朱雀院へ行幸。翌年 2 月 20 日。

夕霧省試（放島の試み）及第。文章生となる。行幸当日。

夏 六条院完成。8 月。

秋 夕霧、秋の司召し（例年 10 月）で従五位下、侍従となる。

夕霧の受けた寮試は 10 月か 11 月に行われたと考えられ、省試は翌年 2 月 20 日過ぎに朱雀院行幸の日であった。ということは、夕霧は擬文章生になってからわずか 3～4 か月で省試に合格して文章生に成ったことになる。寮試合格で擬文章生になってからわずか 3～4 か月の勉強で省試に合格できるものだろうか。いろいろ疑問が湧いてくるが、古代の大学制度については久木幸男の研究がある（久木 1990）。

久木の研究結果を、夕霧と関係づけると、次のようなことになる。寮試は、擬文章生 20 人に欠員が生じるたびに行われたが、受験のためには文章博士の推薦を必要とした。寮試は「読み」の試験であったから、夕霧は「四五月のうちに、史記などいふ書は読み果てたまひ」（新編③28 頁。下線付加）たのであり、二条院（あるいは二条東院か）での予行でも「ひとわたり読ませたてまつりたま」ったところ、夕霧は「至らぬ隈もなくかたがたに通はし読みたまへるさま」（新編③28 頁、下線付加）⁴²⁶を示したので、光源氏は息子の受験の準備ができているのを確認した。そこで、光源氏が博士に推薦を要請、その要請により寮試が組まれたと考える。夕霧が「かたがたに通はし読みたまへる」について新編頭注は「あれこれの記事を関連づけて。あるいは、諸説にわたって、とも、音訓両様にわたって、とも」と注する（新編③28 頁）が、寮試は読みの試験であるから、本論筆者は「音訓両様にわたって」の意味だと考える。「読み」は内容をある程度理解していないと難しいだろうが、寮試は入学試験であって、あれこれの記事を関連づけるなどの内容をすべて修得したうえでの高度な分析などは要求されているはずはない。『史記』の内容は大学紀伝道の 770 日の講義項目になっている。入学試験である寮試で『史記』などの内容の修得が問われるとは考えられない。

寮試の様子は、紫式部の時代よりは二分後代にはなるが、『兵範記』⁴²⁷の平信範の息子の平信

⁴²⁶ 小学館新編（底本は大島本）③28 頁にある「いたらぬ隈もなく」は、他の青表紙諸本によって「いたらぬくもなく」を改訂したものだという。「いたらぬ句も無く」だと、もっとはっきり「読み」だけであったことが推測される。

⁴²⁷ 『兵範記』の記録は長承元年～承安元年（1132～1171 年）。

義の寮試の情景がある。正六位上の信義は仁平4年（1154年）の4月18日に寮試を受けた。

天晴、今日息男信義<字、平幸>、可入学受寮試、午後令着束帯、(中略)仰堂監召学生名
<貢挙次第、信義第三云々、然而依殿下御分、無左右被召第一了>、先信義於幔門外、下
裾抱書<三卷々籠美紙結中、(中略)史生仰云^{シルシ}版、信義進立版石下、史生教正又仰云、^{スシメ}進、
信義緩歩進直着幄南頭床下<北面>、置読書上、次頭仰云、^{セク}冊^(ママ)、信義以左手取冊、三
授試博士、試博士申上書名目、頭仰云、令読ヨ、信義随博士目披書読之<高祖本紀、簫相
国世家、張儀伝、各端端、兼日能々謹誦之>、各三四行読之間、頭叩笏、随其響、読止之、
三卷読了、如初卷裏紙結中、(中略)試給オ呆イムツノクラキカムツシナ平信義、文義共得
タリト申ス
(『兵範記』仁平4年4月18日条)

この寮試の様子を見ると

- 平信義は平幸という字をもっていた。(夕霧にも字をつける儀式が行われた。)
- 平信義は夕霧と同じ正六位上（オホイムツノクラキカムツシナ）で、
- 夕霧が寮試のため大学へ行ったように、信義も大学へ出かけて受験した。
- 寮試は「読む」ことである。大学の頭が「読ましめよ」というと、信義は書を披いて、これを読んだ。読んだ書は高祖本紀、簫相国世家、張儀伝であった。
- 結果は「文義共に得たり」と判定された。

仁平4年（1154年）、近衛天皇のころには大学の試験は形骸化しており、信義も寮試にあたって、出題箇所は事前に知らされており、その部分は日ごろから能く練習していた。一条朝でも大学の試験は形骸化がなかったわけではないが、紫式部は『源氏物語』では公正な試験が行われていたことにしてある。学者の家に生まれ育った紫式部にとっては公正な試験制度は譲れないところであつたろう。

夕霧が受験した省試であるが、省試は、久木幸男（1990：202）によれば、毎年2月と8月の2回行われる規定であり、擬文章生でないものも受験を認められていた。少女巻の朱雀院への行幸は2月20日過ぎであるので、これは時期的には定期の省試（文章生試験）と考えられ、夕霧の他に擬文章生など10名が受験した。この10人は作詩が優秀であるということから招集されたようである。省試は何度でも受験できるので、この10人も、今回は受験を予定していなかったのに受験させられて、かつ行幸行事に気おくれして実力が発揮できずに及第できなくても不利益はない。さらに、10世紀初頭からは、不合格者からの申請によって及第に列する取り扱いも始まっている。文章生試験は作文（作詩）である。今回の文章生試験は、新太政大臣の嫡男の受験ということもあつてか、式部省の出題（だから「省試」と呼ばれる）ではなく、

「式部の省の試みの題をなすらへて」の帝からの御題となった。ここで、夕霧は「その日の文うつくしう作りたまひて、進士に」（新編③76 頁）なった。

文章生試験は擬文章生でなくても受験できたのだから、寮試験後の期間の要件はないことは確認できた。でも、寮試験合格から、たった 3～4 か月の勉強で合格できるのかという疑問が残るが、寮試験合格はもともと省試（文章生試験）受験の必須条件ではなく、「読み」の試験である寮試験は、省試や文章得業生試のような難しい試験でもなかったのだから、寮試験受験の段階で、既に文章生並の実力があれば、寮試験の直後でも合格はありえたことになる。

但し、小学生の児童の年齢相当の夕霧が、勉強を始めてから一年もたたないうちに、何年もひたすら勉強に励んできた他の擬文章生者たち（「年積もれるかしこき者ども」新編③76 頁）を追い越すというのは不思議であるが、物語の登場人物という架空の人間の能力についてであるから、可能不可能を論ずる種類の事柄ではない。ちなみに『弘仁式』、『延喜式』における教科書の学習年限は紀伝道では『史記』80 巻、『漢書』115 巻、『後漢書』115 巻、『文選』60 巻それぞれ各 770 日である（久木幸男 1990：199）。

夕霧は元服後、花散里の二条東院の曹司で師についてみっちり勉強して、『史記』などを読してから寮試験をうけて合格したが、この部分は「文人・擬生などいふなることどもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子もいとどはげみましたまふ」（新編③30 頁）が、新編の頭注では「文人は文章生道の学生の進級過程における一資格。擬生は擬文章生（寮試験に合格した者）」とあるのに、現代語訳では「若君は文章生、擬文章生とかいう試験をはじめとして、どれもすんなりと合格してしまったので、今はひたすら学問に心をうちこんで、師匠も弟子もますます勉強努力しておられる」と「文人」が文章生になってしまって、擬文章生と文章生の順序が逆になってしまっている。夕霧が最初に受けた試験は寮試験で、これは大学寮の入学試験である。これより前、元服後に「うちつづき、入学といふことせさせたまひて、やがてこの院の内に御曹司つくりて、まめやかに、才深き師に預けきこえたまひてぞ、学問せさせてまつりたまひける」（新編③27 頁）とあるように、学識ある師などを迎えて学業を開始したのが入学であって、ここの「文人」は初学者ぐらいの意味だろう。夕霧はこの「入学」で大学紀伝道⁴²⁸の学生になったわけではない。大学紀伝道の定員は文章生 20 名（2 名の文章得業生を含む）と予科にあたる擬文章生員 20 名。入学希望者に対しては選抜試験が実施される。それが寮試験で、合格すると晴れて予科にあたる擬文章生となり、大学紀伝道で文章道を学び、省試（式部省が行う）に合格したら本科生にあたる文章生（進士）である。そのうち優秀な 2 人が文章得業生になり、文章得業生が任官試験に合格して官吏となった（「秀才」と呼ばれた）。得業生以外の文章生たちも労などにより任官していった。文章生になれば未

⁴²⁸ 夕霧の入学する学科は紀伝道である。文章道という学科はない。但し博士の名称は文章博士。

来は明るい（はずだった）。

夕霧は太政大臣の嫡子であるから、中級以下の貴族の子弟が歩む学者の道へは進まないが、ここでは夕霧の勤勉ぶりと、他の官人たちが何年もの研鑽を積んでから挑戦する「国家試験」に大変な短期間で合格してしまう天賦の才つまり光源氏の血筋の優秀さが強調されているのだ。

【補注3】 第二部 第3章 『平家物語』の時代の舞姫たち

第二部第3章第1節「内大臣源雅通と大納言藤原師長の解官事件」では、摂政の五節帳台試に扈從を忌避した源雅通と藤原師長を取り上げたが、その日、五節所の帳台の中で深夜まで待機させられた舞姫たちを取り上げたい。この仁安3年（1168年）の五節は大嘗会であった。大嘗会の舞姫は叙位されるのが通例であったので、この年の舞姫たちについての記録がある。仁安3年（1168年）は大嘗会であったので（舞姫は5人）、舞姫には叙位が行われ、4人の舞姫が叙爵した。

五節舞姫五人可叙爵、其中権中納言、別当、左大弁等、被献名簿、仍袖書注其人申、能登守通盛朝臣舞姫献例申文、短冊云、五節舞姫申爵、是長元九年寛治元年例也。尾張守保盛、依被解官、不進申文、不及沙汰、（『兵範記』仁安3年12月4日条 大嘗会女叙位）

成親、時忠、雅頼、通盛はそれぞれの舞姫たちのために恒例に従って叙爵希望の名簿を献じた。しかし、保盛は解官されたので、申し文は提出できず、沙汰に及ばずということになり、保盛の舞姫だけが叙爵しなかったのである。大嘗会に舞うため、練習を重ね、正式な参入の儀を経て、極度の緊張のなかで大役を務めながら、5人のうち1人だけ叙爵しなかったかわいそうなこの舞姫は名前さえ残らなかった。

これら仁安3年の舞姫たちの出自は不明ではあるが、最初の3人は公卿分であるので、実子でなくてよかった。列記順は献上者の位階順と思われ、舞姫の藤原成子、平久子、源保子の3人までの姓が献上者、藤原成親、平時忠、源雅頼の姓と位階順にも一致しているので、実子でなくても一族のそれなりの娘を舞姫としたと推測する。いずれの女名も『尊卑分脈』などで確認できないので、献上者の父親は比定できない。一方受領分では、保盛はおそらく14歳なので実子はいないだろう。通盛の生年は不詳ながら、「久寿2（1155）年ごろの生まれか」⁴²⁹ともされる。だとすると、通盛もこの年14歳程度で、やはり実子がいたとは考えにくい。つまり、受領分の舞姫も献上者自身の実子ではなくなっていた。

舞姫4人のうち、「藤原成子」という名は『尊卑分脈』に複数名見受けられる。まず1人は献上者であった成親自身の娘である。成親には成子という娘がいた。『尊卑分脈』によれば、成親の娘の成子は盛能の次室となり、後に基宗卿（『尊卑分脈』は「基家」を「基宗」と訂正。基家は基宗の父）の室となって、後堀河院の御乳母となり、従二位にまで昇った。夫となった「盛能」の出自は不詳だが、藤原（持明院）基宗なら久寿年（1155年）の生まれだから仁安3年

⁴²⁹ 『朝日本歴史人物事典』の解説（櫻井陽子）による。

(1168 年) に 14 歳であり、のちのその室となる成子が舞姫となるにふさわしい年ごろであっておかしくない。成親自身も、鳥羽院の近臣であったが、伝統的な上級貴族の出身ではなかった。娘の 1 人を太政大臣となった師長の室に入れ、1 人は清盛の直系惟盛の妻にというように、娘は自家の栄達のために巧みに利用しているのである。実子が大嘗会の舞姫に出して叙爵させ、上臈女官出仕の足掛かりにするのは願ってもないことだったのかもしれない。しかし成子が仁安 3 年(1168 年)の五節で 12～15 歳程度で、後に成子がめでたく後堀河院の乳母になったと仮定すれば、後堀河院の誕生時の建暦 2 年(1212 年)には 50 代も半ばとなる。乳を与える乳母は別にいて、成子は養育乳母だったとしても、基宗の妻となった成子とすると年齢的には疑問がある。

もう 1 名、藤原季成の娘に成子がいるが、年齢的に仁安 3 年(1168 年)の舞姫にはなりえない。藤原季成の成子は雅仁親王(後白河)の寵愛をえて、亮子内親王(殷富門院)、守覚法親王、以仁王、さらに式子、好子、休子の各内親王を生む。従三位。播磨局、高倉三位局とよばれた。安元 3 年(1177 年)3 月 11 日死去⁴³⁰。亮子内親王の誕生は、久安 3 年(1147 年)であるから、この内親王の母親なら仁安 3 年(1168 年)に舞姫とはなりえない。

成子という名の女性是他にもいたかもしれないので、仁安 3 年の舞姫成子は、献上者の藤原成親の実子であったかもしれないという可能性の一つとするにとどめたい。

既に服藤早苗が指摘している(服藤 2015 : 90-96)が、『平家物語』の時代、舞姫たちの出自は上昇しているようだ。平安中期には公卿が実子を出すことはなくなっていたが、久寿元年(1154 年)には「忠基卿女」が舞姫になっている(『台記』久寿元年 11 月 16 日条)。忠基はこの時、54 歳で前年 12 月 23 日権中納言を辞して太宰権帥に任じられていた(『公卿補任』)。但し、久寿元年の公卿分献上者は藤原師長と共通であり、献上者に「忠基卿」はいない。

また、『玉葉』元暦元年(1184 年)11 月 16 日条では良通の舞姫に割書で「前寮頭『君達、』忠重女」とあり、良通の舞姫の出自が君達層であったことが示される。対して、童女 2 人の割書は「一人行頼女、『大将女房』、一人正綱女、『余女房』とあるので、童女は女房クラス⁴³¹であるから、舞姫には女房クラスより上の「君達」の出自が求められたと考えられる。君達(公達)とはどのような階層であるのか。『日本歴史大辞典』「公達」(古瀬奈津子)によれば、「公家の家格を示す語。君達とも記す。元来、中世において、公家の家格は、公達、諸大夫、侍に大別されていた。公達の家柄が成立したのは 10 世紀末から 11 世紀にかけてである。藤原忠平以降の摂関家や宇多源氏以降の賜姓源氏の子孫で、侍従や近衛少将、中将などを経て公卿に昇進す

⁴³⁰ デジタル版『日本人名大辞典+Plus』による。

⁴³¹ 舞姫よりさらに若い童女なら 10～13 歳程度であろうから、女房名を持った女房とすると若すぎる。童女として邸内にいたかもしれないが、女房の娘ではないだろうか。

る上級貴族の家柄である」ということで、このころまでには公達・諸大夫・侍という家格が成立しており、女房クラスの童女は諸大夫の娘を選び、舞姫は公達の家格の娘ということで納得できるが、良通の舞姫の父親は 10 代の娘がいる年齢で前寮頭というとトップエリートとは思えない。

『国史大辞典』「公達」（橋本義彦）は、『中右記』などの用例により、もとは相対的に家柄のよい廷臣を指す語であったことを挙げ、「公家の家格が形成されるに伴い、清華とほぼ同じ意味に用いられるようになった」といい、そして、公達（君達）は清華家と同義であって大臣まで昇ることのできる家柄という見解⁴³²と、公達は大臣まで昇進しない清華三家の庶流を指す用例のあったことを挙げる。

仁安 3 年の 2 年前の仁安元年（1166 年）に行われた六条天皇大嘗会では献上者は、平重盛、藤原成頼、平親範、平宗盛、平知盛と 4 人まで平氏であり、叙位された舞姫たちは、平成子、平節子、平長子、平仲子、平仙子と平姓であった。ほとんどが舞姫は一族の中から出しているのだろう。

⁴³² 中原康富の見解。康富は室町時代の官吏で『康富記』を残した。

【補注 4】 第三部 穢による五節の停止 延喜 15 年（915 年）

第三部第 2 章の「はじめに」において、五節は新嘗祭の一部であり、新嘗祭は神事であるので潔斎が必要であることを述べた。神事であるから、觸穢となったら、潔斎では済まない。新嘗祭や五節そのものが停止されることもあった。例えば、予定されていた新嘗祭の停止の例として『古事類苑』にまとめられているだけでも、『平家物語』の時代以前で以下の例がある。（備考部分は本論筆者が補足した。）

天安 2 年（858 年）（清和） 園韓神祭が停止、その後の諸祭は皆、停止となった。

貞観 13 年（871 年）（清和） 9 月 28 日の太皇太后（文徳の母順子）崩御による。

元慶 7 年（883 年）（陽成） 内裏で死があった。

延喜元年（901 年）（醍醐） 内裏穢。

康保 4 年（967 年）（冷泉） 5 月 28 日の冷泉父の村上崩御で諒闇となった。

応徳 2 年（1085 年）（白河） 11 月 8 日、皇太子実仁親王（庖瘡で）薨去。

天永 2 年（1111 年）（鳥羽） 穢気の蔓延⁴³³。

この他、管見の限りでも、長保 3 年（1001 年）11 月 18 日に内裏焼亡の際は、当然ではあるが、直後の神事は、24 日の予定だった新嘗祭を含んで、すべて中止されている。

しかし、内裏で穢が発生しても、新嘗祭行事は催行すべく努力が払われる。『政事要略』「十一月中卯新嘗祭事」に、内裏に穢が発生しても新嘗会が行われてきた例として（「内裏有穢行新嘗会例」）、承和 18 年⁴³⁴、延喜元年（901 年）11 月 19 日丁卯、3 年（903 年）11 月 19 日乙卯、7 年（907 年）11 月 18 日辛卯と 4 回はあったことを記す。これらの年には、内裏で穢があったにもかかわらず新嘗祭は挙行されているのである。

延喜 15 年（915 年）にも五節は停止された。これは本論筆者の興味を引いた。延喜 15 年 11 月 21 日（醍醐天皇）丁丑に左兵衛佐の曹司で死穢があった。丑の日といえば舞姫参入の当日であった。この死穢により舞姫の参入が止められた（「停五節舞姫、依左兵衛佐源敏相曹司死穢也」〔『日本紀略』醍醐天皇〕）。左兵衛佐の曹司の場所は殊更には書かれていないが、左兵衛府とすると大内裏の東端で内裏からは遠い。一方、兵衛の兵たちが宿営に当たる左兵衛陣は宣陽門⁴³⁵（内裏の東を区切る）にあったが、佐（次官）の曹司がどちらにあったのか不明である。大内裏の八省の建物は独立しており、ひとつの司の穢は他に伝播しない。それまでも、あるひ

⁴³³ 乱闘で 3 人を切り殺した下野守明国が帰京後、そのままあちこちに行ったため穢が蔓延。新嘗祭は停止され、賀茂臨時祭は 12 月に延引された（『中右記』天永 2 年 11 月 4 日条）。

⁴³⁴ 承和は 14 年までしかないので、承和 18 年は承和 8 年（841 年）の誤りだろうと考えられている。

⁴³⁵ 左衛門陣から内側が内裏の範囲を考えられていた。内裏の範囲については山本幸司（1992）が明らかにしている。

とつの司で穢が発生した場合は、穢に触れていない建物・場所を使い、穢に触れていない官人たちを使って神事は催行されてきた。左兵衛陣は「この門〔宣陽門〕の内外左右に左兵衛督宿所その他の候所が建てられていた」（『国史大辞典』〔福山敏男〕）というから、佐の曹司も「左兵衛陣」のある宣陽門付近にあったのかもしれない。曹司が左兵衛の陣だったとしても、例えば、延喜3年（903年）の新嘗祭で、左兵衛陣に犬死穢が発生したが、11月19日卯の日、新嘗祭は神祇官において催行されている（「延喜三年十一月十九日乙卯新嘗会、依左兵衛陣犬死穢、於神祇官行之」〔『日本紀略』〕）。舞姫参入が止められたあと、23日卯の日の新嘗祭そのものが「八省穢により」停止になった（『西宮記』第六卷十一月）。この経緯を探ると、この少し前の11月10日には園韓神祭が穢によって中止されていたことがわかる。その際、新嘗会についても停止が進言されている。新嘗会は23日の予定だった。「園韓神祭の中止の原因となった穢は前月22日の左兵衛府の胎穢が内裏に入ったためであり、新嘗祭の23日は、穢発生から満30日を経過しているので穢外ではあるが、散斎中であるから、停止すべきである」ということがいわれた模様である（『園太暦』貞和3年〔1347年〕6月13日条「觸穢間神事等沙汰」）。

しかしこの理由さえ、かなり意識的なこじつけに思える。たとえ宣陽門が閉鎖になっても内裏には12も門がある。他の門を使い、直ちに警告の札をたてたりして、儀式空間に穢が及ばないように、また觸穢の人が増えないように注意が払われるのが常套である。しかも胎穢というのは死穢ほど明確でない。4か月以上が死穢と同じ扱いで忌30日であるが、3か月までは流産とみなされ忌は7日だけである。何か月の胎であるか行事の判断にかなり作為もできそうな余地のあるところである。『大鏡』の逸話で兼家が一条天皇即位の日に高御座にあった生首を無視した事が是と考えられたという話（本当にあったことではないだろうが）が対極として思い起こされる事例ではある。

この停止の背景にはこの年の世情があると考ええる。この年、延喜15年は8月に、京中の樹木に花が狂い咲きをしたかと思ったら赤痢が大流行した（『扶桑略記』23裡書、『日本紀略』「醍醐天皇」）。そのため9月7日に石清水、賀茂上下、松尾、平野、大原野、稻荷などに奉幣が行われた（『西宮記』第九卷「九月例祭」）。但し、この日は内裏で犬の死穢があったため、奉幣使は左衛門陣外から発遣されたのだったが。そして、諸国旱損疫の由によって9月9日の重陽の宴は停止された（『日本紀略』、『扶桑略記』）。しかし、疫病はおさまらず、疱瘡までもが流行しはじめたので9月25日には疱瘡と赤痢を鎮めるべく3日間の仁王経読経が始められた。しかし、10月に入って、ついに醍醐天皇も疱瘡に罹患してしまう。そこで10月16日に紫宸殿大庭、建礼門、朱雀門の3か所で大祓を行ない、仁寿殿で読経、建礼門前で戌の刻に鬼気祭⁴³⁶が

⁴³⁶ 鬼気祭というのは、平安時代に疫鬼退散を祈って催行された祭祀である。疫病は疫鬼のもたらすものと考えられていた。公的にも、私的にも行われ、私的に行われる場合には風邪などの病に対しても行われたが、公的に（国家行事として）行われる場合にはほぼすべての場合において対象疫病は疱瘡であった。これと

行われた。醍醐天皇の疱瘡は快方に向かい、平癒を祈った天台座主法眼和尚位増命には少僧都の位が授けられた⁴³⁷。さらに10月26日には大赦や税の減免が行われた（『日本紀略』）。

延喜15年の新嘗祭停止は、この大変な時期の新嘗会開催への人々の懸念があらわにされているように感じられる。疫病の伝染も懸念されたのではないだろうか。しかし、11月10日の進言の際には一応、新嘗祭「挙行」の方向は変わらなかったようで、丑の日の舞姫も参入も予定されていたわけである。しかし、舞姫参入の日、再び左兵衛佐の曹司で死穢が発見されて大勢は停止へと動く。ついに翌々日23日の新嘗祭は「八省穢によって」停止された⁴³⁸。

余談にはなるが、この年、新嘗会が停止された時は、例外的に見参がとられた。見参とは出席簿である。『延喜式』大蔵省の「諸節禄法」では、正月7日節（「十一月新嘗准此」）・同16日節（踏歌節会）・同17日節（大射）・5月5日節（端午節会）・9月9日節（重陽宴）⁴³⁹などの出席者に禄（節禄）が支給されることになっているのである。「十一月新嘗准此」とあるので、新嘗会の節禄は正月七日（白馬節会）のものに准じる。新嘗会に出席した官人たちが（正月7日に准じて）もらえるはずの禄は、以下の通りである。

表 職位ごとの節禄規定

職位	純 (疋)	綿 (屯)	備考
皇太子	80	500	
一品	45	350	
二品	40	300	
三品	35	250	
四品	30	200	
無品	20	100	
太政大臣	70	500	
左右大臣	50	400	
大納言	30	200	
中納言	25	150	
三位参議	20	100	
四位参議	15	60	
四位参議	15	60	
一位	30	200	
二位	25	150	

似たものに道饗祭がある。道饗祭は鬼魅が外から侵入してくるのを京師に入れないようにするため、京城の四隅の路上で饗応し遏むるというものであるが、道饗は6月と12月に行われる定期的な祭祀であったのに対して、疫病の流行は時を選ばないから、鬼気祭は臨時の道饗祭的意味合いを持っていた。鬼気祭については、宮崎真由（2012）に詳しい。

⁴³⁷ 天台座主が少僧都というのは少し低いようにも思えるが、貞観6年（864年）の定め以降、法眼和尚位は僧都階であった。

⁴³⁸ 『西宮記』第六卷裏書「新嘗会事」に「御記云、延喜十五年十一月二十三日己卯、新嘗会、依穢停止、仍大赦」。

⁴³⁹ 『養老令』では、節禄の支給は正月1日、同7日、同16日、3月3日、5月5日、7月7日、11月大嘗会の七節となっている。（この大嘗会は毎年大嘗会、すなわち新嘗会のことである。）

三位	15	60	
四位	6	30	
五位	4	20	
外五位	3	10	
六位女王	2	4	女王には翌日支給。

(『延喜式』巻三十 / 大蔵 諸節禄法より)

支給の基礎となる位階は本人が帯している実際の位階ではなく、就いている官職の相当位階である。つまり新嘗祭の最後を飾る五節の節会に出席すれば、五位以上の官人は節禄にも預かれたのである。官人たちが五節を心待ちにするのは、華やかな行事に加えて節禄の支給も勘定に入っていたに違いない。もっとも、平安時代、既に三善清行のころにも封禄支給は滞りがちで、年に2回支給されるはずの季禄も、上級公卿や、大蔵省など出納にかかわる諸司の官人たちは曲がりなりにも毎年支給があったが、中下級官人は所属の役所によっては季禄が5～6年一回になってしまうことさえあったという(所功 1989 : 166) から、これら節日に支給されることになっていた禄も満額支給されたかどうかという話は別ではあるが。とにかく、この延喜15年には、新嘗祭は急遽中止になったが、見参簿が取られ、見参簿に載った者には禄は支給されることになった。さらに特別処置で、病で外出できない者も禄に預かれることになった。先ほどの『西宮記』の「御記云、延喜十五年十一月二十三日己卯、新嘗会、依穢停止、仍大祓」につづいて「但此度会雖停止、依元慶七年寛平二年例、進見参、煩庖瘡不参五位以上<二十二人>」、とあり、この時、庖瘡を煩って外出できず、不参のままこの処置の恩恵にあずかった五位以上の官人は22人にのぼった。見参も、当初は官人は外記局で見参の手続きをすることになっていたのだが、これでは病のため外出できない官人は禄をもらえなくなってしまうと意見書を提出し、この処置を導いたのは三善清行であった(所功 1989 : 187)。(『政事要略』「十一月中卯新嘗祭事」に清行の進言が載る。)

なお、延喜15年の五節の停止が初めに本論筆者の関心を引いたのは、源敏相娘との関連であった。延喜15年11月21日に曹司に死穢のあった左兵衛佐は源敏相(『日本紀略』)と^{きね}いって、人^{やす}康親王の孫であった。敏相は、元慶4年(880年)に臣籍に降下した人物である。源敏相は『国司補任』に但馬国、延喜元年(901年)に「元左兵衛佐、権守」として名があるが、正月27日任(『政事要略』)左降除目とある。延喜元年とは昌泰4年(901年)のことであり、まさに菅原道真が太宰権帥に左遷された昌泰の変の起こったのがこの年この月で、この事件に関与して、敏相もこの時、但馬権守に左遷されたとみえる。昌泰4年に左兵衛佐で、延喜15年(915年)にも左兵衛佐であったということは昌泰の変以来、出世に見放されていたのだろう。

通例なら、穢があっても五節は中止とならない左兵衛陣の穢で、まだ五節の中止が決まっていない段階で舞姫の参入が停止されたというのは、この舞姫が穢にふれた源敏相の関係者だっ

たからではないかと考えた。ところで、醍醐後宮に源敏相の娘が見出せる。敏相の娘は、左兵衛佐局、さらに兵衛御息所と呼ばれるが、帝寵を受けて、延喜19年(919年)に皇子を生んだ⁴⁴⁰。第十三皇子と言われる^{すけあきら}允明である。身分の低い母所生の13人目の皇子の賜姓は当然ながら、一世源氏は四位直叙が期待できる。敏相にとっては一族の上昇を懸ける大事な若君となったはずである。皇子允明は2歳の12月末に高明・兼明など他の6人の皇子女とともに賜姓した。元服は承平4年(934年)12月27日16歳の時で中務親王が加冠役を務めた。しかし允明は天慶5年(942年)従四位上の播磨権守で24歳で卒した。

ここで、本論筆者はこの兵衛御息所が延喜15年の中止となった五節の舞姫予定人ではなかったかと、考えてみた。敏相が献上者か父親であったから、参入できなくなったのではないだろうか。結局五節は中止になったが、中止の場合は献上者は翌年に繰り越すのが原則である。

一方、我々が醍醐朝のころに舞姫入内の習慣がなくなったと考えるのは三善清行が延喜14年(914年)に醍醐天皇に提出した「意見十二箇条」で、「弘仁・承和の2代は舞姫を後宮に入れていたが、今の聖朝にいたって、帷薄を修めたので舞姫たちは燕寝に預かることなく、家に帰る」といっていることに基づいている。

伏案_二故実_一。弘仁^{嵯峨}承和^{仁明}二代尤好_二内寵_一。故遍令_三諸家_二択_一進此妓_一。即以為_二選納_一之便_一也。
諸家僥_二倖天恩_一不_レ顧_二摩^{〔磨〕}費_一。尽_レ財破_レ産競以貢進。方今聖朝修_二其帷薄_一。立其防^{〔閑〕}
_一。此等妓女舞了帰_レ家。無_レ預_二燕寝_一。然則此妓数人遂有_二何用_一。 (「意見十二箇条」)

しかし、「聖朝にいたって、帷薄⁴⁴¹を修め」たというのは、実は三善清行のお世辞かキツイ皮肉ではなかったか。あるいはこうなってほしいという予祝だったのか。醍醐天皇の後宮はよく知られている通り、まことに賑やかで、生まれた子は皇子だけで18人以上、皇女16人以上を数えるのだから。三善清行は、弘仁(嵯峨)・承和(仁明)が尤も内寵を好んだというのが、醍醐の内寵は仁明を上回る。「内寵を好んだ」仁明天皇の記録に残るキサキは生涯で11人、皇子皇女は合計で19人である(『仁明天皇実録』)が、一方、醍醐はキサキ15人、皇子皇女の合計は少なくとも34人はいる(『醍醐天皇実録』)。醍醐の妻妾のうち何人が三善清行の提言のあった延喜14年(914年)より前に後宮入りしていたかは明らかにできないが、「意見十二箇条」提出の前年、延喜13年までには、皇子9人皇女11人計20人が生まれている。勸子内親王(昌泰2年[899年])、宣子内親王(延喜2年[902年])、恭子内親王(延喜2年)、保明親王(延喜3年)、慶子内親王(延喜3年)、克明親王(延喜3年)、代明親王(延喜4年)、婉子内親王(延喜4年)、勤子内親王(延

⁴⁴⁰ この皇子の母が『醍醐天皇実録』及び『系図纂要』に「左兵衛佐源敏相女」と記されているところから、皇子の母の父親が左兵衛佐源敏相であることは確かなようである。

⁴⁴¹ 帷薄は帷幕で、帷帳、また、閨房。(『字通』)。

喜4年)、都子内親王(延喜5年)、常明親王(延喜6年)、敏子内親王(延喜6年)、重明親王(延喜6年)、式明親王(延喜7年)、有明親王(延喜10年)、雅子内親王(延喜10年)、普子内親王(延喜10年)、時明親王(延喜12年)、長明親王(延喜13年)の19人と修子内親王で20人。(修子は普子と同母であり、延喜10年生まれの普子が11皇女といわれる一方、修子は第八皇女と記されているから延喜10年以前の誕生とした。しかし、延喜14年生の2人、高明と兼明は誕生月日まではわからないので除いてある)。元慶9年(885年)正月生まれの醍醐天皇は延喜14年(914年)には30歳。このままでゆけば、まだ次々皇子女の誕生は見込まれた。(最終的に34人以上に上るのだから。)

三善清行の「これらの妓女、舞ひ了りて家に帰り、燕寝に預かることなし」を文面通りと受け取ってよいのか。当今を批判できない学者臣下として、批判ではなく、言霊信仰よろしく、あるべき姿を表現したものだったのではないか。キサキの数と生まれた皇子女数を見ると、これが「帷薄を修めた」ということに、にわかには同意できかねる。宇多上皇も「寛平の御遺誠」で、逸文で見る限り、舞姫を後宮に入れてはいけないとはいっている箇所はないと思われる。「献上者を定めるには熟慮せよ」といっているだけである。

本論筆者は醍醐は舞姫の後宮選納を全廃はしていなかったと推測している。源敏相の娘が舞姫となって醍醐の後宮に入ったというのは仮説であり、確証はない。もしかしたら、敏相には同年代の娘が二人以上いて、舞姫となった娘と、醍醐の寵を受け皇子允明の母となった女は別人かもしれないし、そもそも敏相娘が舞姫だったという確証もない。

何も確かなことはいえないが、醍醐の皇子女の数が34人余りにのぼっていることを考える時、三善清行の延喜14年の「まさに今聖朝、その帷薄を修め、その防閑を立つ。これらの妓女舞ひ了りて家に帰り、燕寝に預かることなし」は疑ってよいのではないだろうか。

【補注5】 舞師の禄の内容

第二部第3章第2節『『平家物語』の時代の献上者たち』において大治2年（1127年）の献上者である藤原宗忠の項で舞師の禄について言及した。舞師の禄については、既に服藤（2015：119-127）に詳細な研究があるので、本論では、関係者たちに与えられた禄が具体的にどのような価値のものであったかを少々考察したい。以下は生涯で4度も五節を献上した藤原実資が舞師に与えた禄を見てみる。（他の献上者への援助を含む。）

- 永祚元年（989年）11月、舞姫は中務少輔遠高（良峰）の娘。修理大夫（藤原懷平）が大師の膳と絹6疋・綿3屯を送ったと聞いた（「十四日、辛卯、修理大夫今夕送大師前物等、
＜相加絹六疋・綿三屯云々＞」『小右記』）。懷平は実資の実兄。実資自身の禄は大日本記録本（広本）には見当はたらない。
- 長保元年（999年）11月16日、藤原実資は実資の献上する舞姫の宅に舞師を送っている。この日（16日）は未の日であるので、舞姫の内裏参入予定の丑の日より6日前になる。舞姫宅で実際にどのぐらいの長さ教習したかはわからない。この時、舞師に対して禄として絹3疋、饗料として米5石（このうち2石は従者用）の他、菓子、魚物などが与えられている。（絹3疋から推論してこの師は小師だろうが、大師でなかった確証はない。）
- 寛弘8年（1011年）五節は停止になった。
- 万寿2年（1025年）実資の舞姫は故好任朝臣の娘。五節大師の要請により前例はないとしながら桑糸3疋送っている⁴⁴²。理髪師にも絹2疋を送った。8日戊の日に大師の申し入れによって夜に入って小師へ迎車をやった。飯菜を出した。9日夜に舞師を送遣した。舞姫内裏参入は11日の丑の日。舞師を迎えたのは昨今だったが、家に五節経験者（旧五節）がいて、日ごろから内々に練習させていたのでわずかな期間（8日の夜に来て、9日夜に返している）で間に合ったといっている。舞姫の居所に教習に来た舞師に対して、舞師の要請により前例より多い禄、絹3疋、綿3屯、米5石を送っている。服藤の表には挙げていないが、実資も大師の要請により前例はないが桑糸3疋を送ったと記す（8日の条）。要請がなければ送らなかったかもしれない。12日には五節所の大師へは理髪に菓子を送っている。朝干飯は中宮権の大夫能信が大師のもとへ送った。
- 長和3年（1014年）には実資は、献上者である藤原能通の五節所へ師の前物、絹六疋、綿3屯、褌⁴⁴³絹を送った。

⁴⁴² 服藤の表には入っていない。

⁴⁴³ 褌は「ふくろ」の意。

では、これらの禄はどのようなものだったのだろうか。

① 絹（疋）

『国史大辞典』の「疋」の項では「長さとは不明、品目により相違しているらしい」との説明があるだけである。山下信一郎（1994）によれば、五位以上の諸司官人に春夏に支給される纁⁴⁴⁴3丈7尺+帛1丈5尺=5丈2尺、及び秋冬に（綿を除く）支給される纁⁴⁴⁵3丈7尺+帛1疋7尺=一疋4丈4尺の時服はそれぞれ袍・袴各一つを春夏（単）、秋冬（袷）作成できる分量だったと解説する。

女官の時服としては五位以上には、夏（4月2日）絹1疋、冬（10月2日）はこれに綿3屯がプラスされる。女儒以上は夏絹3丈、冬はこれに綿2屯がプラスされた。内教坊未選女儒には夏に絹3丈+質布1端、冬は絹3丈+綿2屯に調布2端が支給された（『古事類苑』「時服」、『延喜式』「中務」）。

② 米（石）

当時の一斗は現在の0.4斗といわれるが、それでも1斗は15kg x 0.4=6kg、3石=30斗=30 x 6=180kg 従者用は別に支給されているから、わずか数日の五節所詰めで180kgの米を消化できるとも思われない。饗料という名目の謝礼の一形態なのだろう。長元5年、この年は実資の愛娘千古の婿兼頼が献上したが、『小右記』長元5年（1032年）11月24日条に、大師に前物代米5石・絹1疋を送ったとあるので、膳の代わりとして、米5石を送ったわけで、それはそのまま大師の物となったのだろう。

③ 綿（屯）

屯は律令時代に用いられた綿の質量・取引単位。『角川古語辞典』によれば令制では1屯は2斤で約1.2kgとある。これがどれ位の量であろうかということ、現在の普通の55cm x 53cmの家庭用座布団が、綿（合成綿）一枚で大体800gほどであった。材質によって重さは変わるだろうが、とりあえず3屯は現在の座布団4～5枚分の量だったと推測する。

古代・中古に日本で綿花の栽培は行われていなかったから、辞典類では綿は真綿、すなわち絹、との解釈が一般的だが、『平安時代史事典』では「綿」は現在でいう綿と同様に解釈しているようにみえる。庶民の衣料としては麻の他、藤や葛、楮^{こうぞ}などからとった繊維も知られているから、綿が純絹だったと、断言はできそうにない。綿に代わるものとして舞の大師に対して信

⁴⁴⁴ 纁^{あしぎぬ}：帛一白色の厚手の絹。1疋=10丈。

⁴⁴⁵ 纁^{そひんそび}は、黒みがかった薄赤い色。五位の官人の袍の色。

乃（信濃布⁴⁴⁶）が6段送られたという記述がある（『左経記』長元4年11月19日条）が、信濃布は絹ではない。

禄として与えられた「綿」とは、おそらく綿は絹糸を含め、くず糸を集めたものであろうが、糸の材質はともあれ、いわゆる「わた」であり、平安時代の文学作品からは「綿」は防寒対策に広く用いられていたことが確認できる。

綿の用途

以下、綿がどのように使われていたか、菊にかぶせたりする以外の用途がわかるものから適宜拾った（木綿は除く）。検索には小学館新編古典文学全集を使用した。

- a. 「赤色の織物の直垂、綾のにも綿入れて、白き綾の桂重ねて、六尺ばかりの黒貂の裘、綾の裏つけて綿入れたる」（寒い夜の宿直装束を持たせた） 『うつほ物語』②蔵開中 451 頁
- b. 「畳には高麗綿を薦に、紫の裏つけて」 『うつほ物語』②蔵開中 519 頁
- c. 「先つ頃、綿の衣縫はせて」 『うつほ物語』②蔵開下 530 頁
- d. 「御装束どもは、白き襖、綿入れて」 『うつほ物語』③国譲下 312 頁
- e. 「薄き縹の綾の張綿重ねて着たる人の」 『うつほ物語』③楼の上 421 頁
- f. 「はり綿」 『落窪物語』27 頁、36 頁、51 頁
- g. 「汗の香り少しかかへたる綿衣の薄きを」 『枕草子』100 頁
- h. 「青鈍の指貫の綿入りたる、白き衣どもあまた着て」 『枕草子』225 頁
- i. 「夏とほしたる綿衣のかかりたるを」 『枕草子』326 頁
- j. 「物裁ちなどするねび御達、御前にあまたして、細櫃めくものに、綿ひきかけてまさぐる若人どもあり」 『源氏物語』③野分 281 頁
(寒い朝、花散里の居所では夕霧の装束を仕立てているが、綿を使っている)
- k. 「胸つぶれて、いかなるにかと思し嘆き、御衣ども綿厚くて急ぎさせたまひて、奉れなどしたまふ」 『源氏物語』⑤椎本 187 頁
- l. 「かならず冬籠る山風防ぎつべき綿衣など遣はししを思し出でてやりたまふ」 『源氏物語』⑤椎本 204 頁

⁴⁴⁶ しなのぬの【信濃布】：信濃で生産された布。信濃の語源は一説にはシナノキにちなんだものといわれるように、古代の信濃にはシナノキがたくさん自生していたのであろう。信濃布というのは本来このシナノキの繊維からつくる粗くて丈夫な布（楮布しなのぬの）であるが、その他、信濃では畠に栽培する麻や苧（からむし）からつくる高級の布も生産されていた。信濃の年貢は古代以来、輸送の便利もあってかほとんどが軽量の布で京進された。律令時代は調布2万端、庸布4万端、商布約7500端の貢進となっている（『世界大百科事典』の解説より）。

(山籠もりをする八宮のために、娘たちが綿入りの衣を用意する)

- m. 「また、寝たまふ畳の上簀に、綿入れてぞ敷かせたてまつらせたまふ。寝たまふ時には、大きな熨斗持ちたる女房三四人ばかり出で来て、かの大殿籠る簀をば、暖かにのしなでてぞ寝させたてまつりたまふ」(閑院の大將朝光は、北の方を離縁して財産のある新しい妻のもとに通うことになったが、新妻の邸では綿入れにさらに熨斗を使って暖める歓待ぶりだった。)

『大鏡』216 頁

上記は敷布団の例となる。

- n. 「出でさせたまひけるには、緋の御相のあまたさぶらひけるを、「これがあまた重ねて着たるなむうるさき。綿を一つに入れなして一つばかりを着たらばや。しかせよ」と仰せられければ(中略)あまたを一つにとり入れてまゐらせたるを奉りてぞ、その夜は出でさせたまひける」

『大鏡』304 頁

これは顕信(道長の息子)が出家してしまった時の様子であるが、出家を決意した顕信は乳母に「相を何枚も重ねて着るのは煩わしいから、綿をまとめて一つの相に入れ、一枚だけを着ていたい」と言って、何枚かの相の綿を一枚に入れたものを着て出て行ってしまった。この場合の相は「中古の男子の中着。束帯の時は下襲と^{ひとえ}単との間に、衣冠・直衣の時には袍・直衣と単との間に着用した」ものだから、平安人たちも季節や用途に応じて束帯や直衣の下に着る衣料にしっかり綿を入れて綿を厚くしたり、寒さをしのいでいたことがわかる。

つまるところ、五節に関して舞師などに与えられる禄である綿は、平安人の防寒対策として必須の実用品であったのである。

禄の相対的価値

五節の舞師の禄を他の禄と比較すると、女性の給う俸禄としては女王禄^{お う ろ く}⁴⁴⁷などがあるが、女王禄における支給品は『権記』長保三年(1001年)11月26日条に1人に絹2疋・綿6屯とある。舞大師が得る絹6疋は女王禄の絹3回分にも相当している。

服藤は実資のような禄は献上各家が送っていると推定される。各献上家からこれだけの禄が与えられるとすると、舞師は笑いの止まらない仕事であるようだ。

⁴⁴⁷ 「女王禄」については、『日本大百科全書(ニッポニカ)』で山中裕は、「正月8日(「白馬節会」の翌日)と11月の新嘗祭の翌日、女王に禄を賜る儀式。天皇、皇后の出御をはじめ、尚侍、典侍なども参加、紫宸殿の庭に帷を張り、女王たちに絹や綿などを賜った。禄を賜る順序は年の順ではなく、世次によった。禄を賜る女王は262人もいた、と『延喜式』にある」と解説する。

元暦元年の良通の献上にあたり、九条家が発注した物品が『玉葉』元暦元年 11 月 22 日条に列挙されている。発注リストであるので品目の調達先／贈り主も記しているが、ここでは主な品目のみを抽出した。以下引用は『玉葉』宮内庁書陵部（図書寮叢刊）元暦元年 11 月 22 日条による。

（1）衣装関係

九条家の用意した物は多岐にわたるが、まずは舞姫の衣装である。これは五節舞本番の豊明節会の日はもちろん参入の日（丑の日）、帳台試（寅の日）にもふさわしい衣装が必要である。

（元暦元年は大嘗会であったので豊明節会は午日であった）。

① 舞姫装束

丑日、赤色織物唐衣、濃打柏、裏濃蘇芳柏一領、青単衣、濃張袴、赤色扇、地摺裳、
寅日、裏濃蘇芳柏一領、青単衣、濃打柏、濃張袴、青色扇、青色唐衣、裙帯*比礼、蘇芳末濃裳、
午日、青摺唐衣、濃打柏、裏濃蘇芳柏一領、青単衣、濃袴、目染裳、裙帯*比礼、青摺扇、

*ネ偏に帯

そのほか、日蔭糸、蘿、古々呂葉、赤紐、理髪用の七尺鬘が用意された。但し、舞姫は丑の日には装束を着用しなかったが（11 月 16 日条）。

② 童女装束

この年は良通に命じられたのは童女御覧（卯の日）であったが、九条家では参入にも童女・下仕に衣装を着けてさせることにしたので、童女も丑の日と卯の日の衣装が必要であった。

丑日二具、織物白菊汗*衫、濃打衣、裏濃蘇芳柏三領、青単衣、白表袴、織物、濃袴、扇、
卯日二具、黄菊汗衫、面織物 紅打柏、紫匂柏四領、青単衣、謂之竜胆 白菊表袴、紅三重打袴、扇、

*ネ偏に子

③ 下仕装束

下仕も童女御覧の日に庭で御覧にあずかるので丑の日（参入）と卯の日の衣装が用意された。

丑日 梅唐衣、立文、裏増紅梅掛三領、青単衣、濃打衣、濃袴、村摺裳、釵子、在緒 扇、
卯日 生絹仮裏、不置衣篋蓋、萌黄唐衣、黄掛四領、皆同色、濃蘇芳打掛、紅単衣、紅張袴、

村摺裳、釵子、在緒、扇、

④ その他

着用衣装ではないが、五節所の打出も 4 具（「裏増紅梅掛五領、濃打衣、濃紅梅単衣、梅表着、葡萄染唐衣、不出袴、」）を用意した。

仕丁 8 人（退紅^{たいこう}）にも、「退紅、襖袴、襖衣、帯、烏帽子」が 8 具用意された。

（2）五節所の設営

調度も献上者が用意する。調度は棚、薫炉、打乱筥、脇息などであり、室内設営（装束）としては、屏風 5 帖、壁代 7 帖、几帳 8 本、茵 2 枚、御簾計 13 間、畳 15 枚、弘筵 5 枚、差筵 30 枚、鎮子 12、燈楼 4、燈台 3 本、火櫃 2 口、炭取 2 口が用意された。このほか、盥具（手洗 2 口、櫛^{はんぞう} 2 口）、理髪具として末額、7 尺鬘、蒔櫛、彫櫛、上櫛、下櫛、釵子 4、本結、日蔭、心葉 2、蘿も用意された。

（3）禄

舞姫に関わった膨大な人員への禄の負担は重い。

舞の大師は無論のこと、理髪、琴師、小師、圍司、小歌、拍子、今良 3 人、小舎人 3 人、仕人 2 人まで禄の対象となった。禄の筆頭は大師であるが、大師には女官も付くので、女官の分も含めて、「長絹六疋、綿三連、三十両 凡絹百疋、代白布十反、白布七反、共女官七人料、長絹一疋、執行女官料、乱筥一口、在裏料美絹四丈、火櫃一口、在鉢箸、炭取一口、紙立菓子十合、雑菓子二百七十合、饗料五石」が用意された。末端の仕人は布 1 反ずつである。（小舎人は不参だったので、実際には給付されなかったが。）

童女装束が後白河院と八条女院から、下仕装束が摂政基通から送られているが、これらを持ってきた使者たちへも禄は授けられた。禄は、後白河院の使者宮内卿経家に女装束一襲^{ちようがん}、庁官にも 6 丈絹 1 疋、八条女院の使者馬権頭基輔に女装束一襲、庁官に 6 丈絹 1 疋、摂政基通の使者兵部権少輔信広に白打掛 1 領であった。

（4）食・餐

舞姫献上者は大勢の人員に食事もふるまわねばならない。大師・理髪には膳、小歌へは衝重、屯食を「六府各一具、北陣一具、藏人所小舎人二具、進物所膳部一具」へ 10 具、大破子 11 荷が、「小歌二荷、脇陣二荷、掃部寮一、主殿寮一、内膳司一、主水司一、朔平門一、

和徳門一、玄輝門一、」に運ばれた。そして、雑菓子に「内侍所女官卅合、掃部女官廿五合、同男官十、御服所女官廿、洗女官十、東童三十、御手水女官十、御匣殿女官十五、主殿女官廿、御菓女官十五、御膳宿女官十五、御湯殿刀自十五、進物所女官廿五、水司女官十、御樋殿女官十、小歌女官四十、大盤所女官卅、上御厨子所十、上刀自廿五、命婦十五、菓殿十、書女官十、油守十、主水十、御門守十、女史十、内膳刀自十五、采女中廿、同官人中十五、縫殿女官十、御井廿、墨摺十、圍司十、糸所十五、水取十、女孺十、当女十、上御厨子所廿、御厠人十、長女十、御服所命婦廿、下御厨子所十、御髪上女官廿、主殿十、女工所十、孺十、蔵人所五十、行事所小舎人卅、仕人中廿、内豎中五十、官召使廿、木工寮十、和徳門十、朔平門十、脇陣廿、左右各十合、縫殿陣十、内膳十、六府各十、」へ送った。

（５）その他

院や、女院他の貴顕へ送る 80 余りの棚などが発注されている。良通は参入の儀の勤仕は免れていたというものの、やはり相当数の牛車が調達（借用）されている。

もし、参入の儀もとなると、牛車を飾り立て、車副など大勢の随伴者の衣装なども必要となっていたであろう。

＜別表＞ 『平家物語』の時代の五節献上者一覧

西暦	和暦	参入日の条	舞姫献上者たち	典拠史料	備考	清盛年齢	清盛	一門	世の中	平家物語関係章段
1118	元永元年	11月17日	帥中納言重賢、尾張守師俊、能登守基頼、越中守俊親	中右記		1				
1119	2年	11月11日	新中納言実隆、宰相中将雅定、近江重仲、備中重通	中右記／長秋記		2				
1120	保安元年	11月16日	新大納言仲実、治部卿能俊、加賀実能、讃岐守顕能	中右記		3				
1121	2年					4				
1122	3年	不明	参議藤原顕隆	兵範記	仁安2年10月24日条。	5				
1123	4年					6				
1124	天治元年	11月16日	新中納言雅定、右大弁為隆、越前守忠盛、安芸守為忠	中右記目録	翌日、為忠は昇殿を許さるが、忠盛は許されず。	7				
1125	2年	11月22日	源中納言顕雅、左宰相中将宗輔、加賀季成、越中顕俊	中右記目録		8				
1126	大治元年	11月22日	中納言、甲斐雅職	中右記目録		9				
1127	2年	11月15日	尾張、越後政教、治部卿、藤原宗忠	中右記	参入の日に献上者治部卿の子の源俊雅が昇殿。宗忠（中右記記主）、献上3回目という。	10		正月ころ（推定）、忠盛従四位下か。		
1128	3年	11月21日	右大臣（家忠）、民部卿忠教卿、美濃顕保、備後時通	中右記目録	この年、越中守忠盛綿50両送る。	11				
1129	4年	11月21日	大納言能実、中納言実行、因幡通基、丹後資憲 皇后宮大夫、別当、因幡通季、丹後守資賢	中右記目録 長秋記		12	正月、従五位下。任左兵衛佐。			
1130	5年	11月14日	中納言長実、参議忠宗、土佐家長朝臣、甲斐範隆 新中納言長実、宰相右中将忠宗、土佐守家長、甲斐守範隆	長秋記 中右記		13		正月7日、忠盛叙正四位下。		
1131	天承元年					14	正月、従五位上。			
1132	長承元年	11月20日	宰相中将（宗能）、参議左大弁実光、能登守季兼、加賀守顕広	中右記	この年、備前守忠盛、宗能に几帳帷2帖を送る。	15		3月13日、忠盛内の昇殿。		「殿上闊討」
1133	2年					16				
1134	3年	11月20日	権中納言別当顕頼、参議修理大夫家保、能登守季行、長門守顕盛 （「能登守季行」を「師能」に作る。）	中右記 長秋記		17				
1135	保延元年	11月20日	按察大納言実行、右宰相中将実衡、播磨守家成、出雲守光隆	中右記		18	正五位下。従四位下。			
1136	2年	11月13日	権大納言右大將頼長、宰相中将、（新権中納言）成通、和泉守宗兼、伊賀守光房	中右記	11月10日の除目で、盛時の別功賞で、子の平政時 左兵衛権少尉。	19				
1137	3年					20	任肥後守。			
1138	4年					21				
1139	5年					22				
1140	6年					23	従四位上。		近衛天皇即位。	
1141	永治元年					24				
1142	康治元年 大嘗会	11月13日	権中納言実光、参議藤原顕業、参議藤原経定、越後守家明、甲斐守顕遠	本朝世紀	近衛天皇大嘗会。	25				
1143	2年	11月13日	右大將権大納言実能、宰相中将教長、土佐守高階盛章、上野介藤原保説	台記／ 本朝世紀		26				
1144	天養元年					27		10月28日、忠盛正四位上。		
1145	久安元年	11月18日	参議忠雅	公卿補任		28				
1146	2年	11月11日	内大臣頼長、権中納言公教、越前守藤原俊盛、美作守平親家（?）	本朝世紀		29	正四位下。安芸守。	忠盛播磨守見任。		
1147	3年	11月17日	権中納言成通、権中納言公能、長門守源師行、能登守通重	本朝世紀		30				
1148	4年					31			6月26日、内裏焼亡。	
1149	5年	11月11日	左兵衛督重本朝通、帥中納言清隆、讃岐守盛親（本朝世紀では成親）、周防守成頼 （「周防守成頼」を「諸頼」に作る。）	兵範記 本朝世紀		32		忠盛播磨守重任。		
1150	6年	11月17日	権中納言藤原経定、参議源雅道、近江守成雅、但馬守家隆 （「参議源雅道」を「雅通」に、「但馬守家隆」を「定隆」に作る。	台記 本朝世紀	全員密参。	33				
1151	仁平元年	11月17日	参議藤原経宗、参議師長、備前守源信時、武藏守藤原信頼	本朝世紀		34		忠盛刑部卿。		
1152	2年	11月11日	中宮権大夫為通朝臣、左大弁宰相資信、尾張守親隆朝臣、摂津守重家朝臣 参議左大弁資信、中宮権大夫為通朝臣、尾張守親隆朝臣（実は阿波守成頼、之を嘗む）、摂津守重家朝臣 参議為通朝臣、資信朝臣、摂津守重家朝臣、阿波守成頼	山槐記 兵範記 本朝世紀		35				
1153	3年	11月16日	右大臣源朝臣、参議右近衛中将（藤原兼長）、能登守藤原基家、伯耆守（平）親範	兵範記／ 本朝世紀	相公之外参入の儀なし。参議兼長だけが参入の儀を行った。	36		忠盛没。		
1154	久寿元年 (仁平4年)	11月16日	中納言中将師長、富小路宰相、常陸介平頼盛（兵範記では「平教盛」）、丹波守成兼（兵範記では「成清」） （「富小路宰相」は『国司補任』から「参議公通」のこと。） （「丹波守成兼」は『国司補任』による。）	兵範記／ 台記／ 国司補任	五節無参議（儀）。	37				
1155	2年 大嘗会	11月21日	民部卿大納言宗輔、春宮大夫権大納言宗能、藤中納言季成、播磨守（源）顕親朝臣、安芸守清盛朝臣	兵範記／ 山槐記／ 台記	以上5人共参の儀なく、各密参。 後白河天皇大嘗会。	38			後白河天皇即位。	
1156	保元元年				諒闇。7月2日、後白河の父鳥羽上皇崩御。	39	任播磨守。		保元の乱。崇徳院配流。	

(裏面へ続く)

西暦	和暦	参入日の 条	舞姫献上者たち	典拠史料	備 考	年齢	清盛	一門	世の中	平家物語関係章段
1159	平治元年					42		12月29日、頼盛尾張守、重盛伊予守、宗盛遠江守、教盛越中守、経盛伊賀守。	12月19日、平治の乱。	
1160	永暦元年	11月15日	中納言雅教、別当公光、若狭守隆信、丹波守成行	山槐記	雅教、公光、隆信、暁参。	43	6月20日、正三位、公卿の仲間入り。 8月11日、任参議。 9月2日、任右衛門督。			
1161	応保元年	11月21日	源中納言定房、権中納言顕時、摂津守泰経、伯耆守基親	山槐記	基親以外密参。	44	正月23日、任檢非違使別当。 9月13日、任権中納言。			
1162	2年					45	8月20日、従二位。			
1163	長寛元年		内大臣兼実	玉葉	元暦元年（寿永3）11月18日条。	46				
1164	2年					47				
1165	永万元年				諒闇。	48	正月23日、任兵部卿。 8月17日、任権大納言。	5月9日、重盛三位。	6月、六条天皇踐祚。 7月、二条院崩御。	「東宮立」
1166	仁安元年 大嘗会	11月13日	右衛門督重盛、参議成頼、参議平親範、美作守宗盛、武蔵守知盛	兵範記	「此中美作有参儀」とある。 六条天皇大嘗会。	49	正二位。 11月11日、任内大臣。	7月15日、重盛任中納言。 11月14日、宗盛正四位下。		
1167	2年	11月13日	左府（藤原経宗）、権中納言治部卿藤原光隆、若狭守（平経盛）、出雲守（藤原朝時）	兵範記／ 愚昧記		50	2月11日 従一位任太政大臣、 宣旨。 5月、辞太政大臣。	2月11日、重盛任大納言、宗盛右中將、従三位参議。		
1168	3年	11月20日	檢非違使別当平時忠、中納言藤原成親、左大弁源雅頼、尾張守平保盛、能登守平通盛。	兵範記／ 愚昧記		51	2月11日、出家。	宗盛正三位。	2月19日、高倉天皇踐祚。 3月20日、滋子皇太后に。	
1169	嘉応元年	11月13日	権大納言実房、新中納言邦綱←童御覧に童女をだしている。常陸介頼実、伯耆守宗頼	兵範記／ 愚昧記	常陸介頼実と伯耆守宗頼は10月13日条の定めによる。	52			4月12日、滋子女院（建春門院）。	
1170	2年	11月13日	堀川中納言忠親、源宰相資賢、上総（藤原基輔<推定>）、越中（藤原行雅か）	愚昧記／ 玉葉	*越中は但馬の代わり。3か所密参。上総一所有参入儀。童女を出したのは資賢だけ。	53		2月、宗盛任中納言。		
1171	承安元年	11月19日	中御門中納言宗家、新宰相藤原頼定、美作雅隆、相模有隆	玉葉		54				
1172	2年	11月12日	新大納言実国、兼光父の権中納言（藤原資長）、信濃（藤原隆雅か）	玉葉／ 兵範記	12日、主上初めての帳台試出御に左大臣、九条兼実、左大將とともに重盛、時忠供奉。13日には中宮徳子淵歿。	55		2月10日、徳子立后。		
1173	3年	11月12日	権中納言藤原兼雅、参議左大弁藤原実綱、備中源雅賢（権中納言源資賢知行国）	玉葉／ 除目大成抄	童女御覧に童女を出したのは兼雅だけ。	56				
1174	4年	11月18日	権中納言右衛門督宗盛、平宰相教盛、常陸守（高階経仲か）、因幡守（藤原隆保か）	玉葉		57				
1175	安元元年			玉葉	11月20日、童御覧に右大將重盛御前に候。	58				
1176	2年				諒闇。母后滋子崩崩御。	59			7月、滋子と六条天皇崩御。	
1177	治承元年	11月18日	権中納言左兵衛督成範、参議右大弁長方、安房守藤原定長、丹後守平師盛	愚昧記／ 玉葉	長方と師盛のみが常の参入（愚昧記）。成範と安房を御覧（玉葉）。師盛には重盛が沙汰した（愚昧記）。	60		1月24日、重盛左大將、宗盛右大將。 3月、重盛内大臣。	6月1日、鹿谷の陰謀発覚。	「吾身栄花」「落足」
1178	2年	11月18日	権大納言藤原隆季、参議藤原実宗<推定>、上野介藤原頼高（左少弁兼光知行国）、加賀守親国（権弁親宗知行国）	玉葉	五節参入の日が迫る末の日（11月12日）、中宮徳子皇子出産。	61		4月、宗盛権大納言。	11月12日末の日、言仁親王（安德）誕生。 12月15日、立太子。	「御産」「公卿揃」
1179	3年	11月11日（前丑）	新中納言朝方、宰相中將実守、遠江守盛実、備後守宗隆（山槐記）	山槐記／ 玉葉	豊明節会の当日、清盛は大軍を率いて上洛し、法皇を幽閉した。	62		7月29日、重盛没。	11月19日豊明節会の日、治承3年の政変。法皇幽閉。	「医師問答」
1180	4年	11月17日	権大納言藤原実国、藤宰相定能、但馬守経正、因幡守隆清	吉記／ 山槐記	大嘗会（新嘗会となる）を福原での挙行を主張する清盛と平安京催行を主張する兼実等とが喧々諤々。	63			2月12日、安德天皇踐祚。 6月2日、福原遷都。 8月17日、頼朝挙兵。 11月23日、遷都。 12月23日、南都焼討。	「源氏揃」「都遷」「富士川」「都帰」
1181	養和元年				諒闇。	64	閏2月4日、没。		正月14日、高倉院崩（後白河院政復活）。 11月、徳子女院号。	「新院崩御」「入道死去」
1182	寿永元年 大嘗会		（玉葉11月22日～25日条に舞姫献上者名の記述無）	玉葉	安德天皇大嘗会。			宗盛、9月に権大納言、10月に内大臣。		「大嘗祭会之沙汰」
1183	2年				五節停止。			宗盛、正月に従一位。2月に辞内大臣。 8月、平氏一門解官。	8月 後鳥羽踐祚。	
1184	元暦元年 （寿永3年）	11月16日	権大納言右大將九条良通、左兵衛督頼実、平宰相親宗、但馬守範能、紀伊守範光	玉葉／ 吉記	平安京で賑々しく大嘗会（後鳥羽天皇）が催行された。				正月、正月の儀式整わず。 木曾義仲戦死。 2月、一の谷合戦。 10月、大嘗会御禊。 11月、大嘗会。	「坂落」「落足」「大嘗会之沙汰」
1185	2年 ／文治元年 （寿永4年）	11月22日	権中納言経房、新宰相中將通實、美作守藤原公守、越前守高階隆経	大日本史料（稿本）	11月22日、五節参入。「是日雨降れど猶晴儀を用ふ」。権新受領二人（美作、越前）のうち美作は内大臣知行、越前は泰経卿。 11月25日、豊明節会。			一門の多く戦死あるいは入水。 6月、宗盛父子処刑。 12月、六代逮捕さるも助命。	3月24日、壇ノ浦の戦い。	「先帝身投」「女院出家」
※ 「舞姫献上者たち」の欄には、典拠史料の表記を転記することを心掛けたが、誤記等により実際の献上者とは認定できない場合には、私に書き改め、典拠史料の表記を注記する。										
別表										

参考文献

研究論文・書籍

- 青木和夫 他 編 1992～1994 『日本史大事典』 平凡社
- 阿久沢武史 1992 「五節舞の由来——琴歌譜歌謡考」『三田国文』 17: 1-11 慶應義塾大学国文学研究室
- 浅井虎夫著・所京子新訂 1985 『女官通解』 講談社
- 麻原美子・名波弘彰 1998～2000 『長門本平家物語の総合研究』 勉誠社
- 阿部秋生 1960 「勅撰和歌集の詞書の立場」『国文学』 29: 27-36 関西大学国文学会
- 阿部猛・義江明子・相曽貴志 2003 『平安時代儀式年中行事事典』 東京堂出版
- 伊井春樹 1969 「五節と花散里の登場の意義——「おもふさまにかしづき給ふべき人」(濤標巻)の構想と二条東院から六条院造営への展開について」『季刊文学・語学』 52: 70-79
- 飯倉晴武校訂 1982～1983 『弁官補任』 続群書類従完成会
- 飯島一彦 2012 「五節小歌再考——尊経閣本『雲図鈔』の公刊を機縁に」『日本歌謡研究』 52: 69-79
- 日本歌謡学会
- 飯田悠紀子 1970 「平氏時代の国衙支配形態をめぐる——考察」『日本歴史』 262: 55-72 吉川弘文館
- 池添博彦 1999 「古代歌謡の食文化考——神楽歌、催馬楽、東遊歌、風俗歌について」『帯広大谷短期大学紀要』 36: 27-36 帯広大谷短期大学
- 池田龜鑑 1953～1956 『源氏物語大成』 中央公論社
- 石田穰二・清水好子校注『源氏物語』 ※新潮日本古典集成
- 石丸熙 1971 「院政期知行国制についての一考察——とくに平氏知行国の解明をめざして」『北海道大学文学部紀要』 19 (3) : 57-119 北海道大學文學部
- 市川久編 1989 『藏人補任』 続群書類従完成会
- 市川久編 1996 『衛門府補任』 続群書類従完成会
- 市古貞次編 1978 『平家物語研究辞典』 明治書院
- 市島謙吉編 1906 『平家物語——長門本』 国書刊行会
- 出雲路修 1988 『大礼と朝議 付有職故実に関する講話 (復刻版)』 臨海書店
- 伊藤亜樹子 2006 「女御代の成立と展開」『日本歴史』 701: 1-19 吉川弘文館
- 伊藤慎吾 1974 「五節舞姫考」『滋賀大國文』 11: 93-98 滋賀大國文会
- 伊藤博 1990 「和泉式部と橘道貞」『大妻女子大学文学部紀要』 22: 33-48 大妻女子大学

- 稲賀敬二 1978「延喜・天曆期と『源氏物語』とを結ぶもの——大斎院のもとにおける」新版『住吉』の成立」広島平安文学研究会編『源氏物語——その文芸的形成』47-108 頁 大学堂書店
- 犬井善壽 1980「『平忠盛集』本文考」『文藝言語研究 文藝篇』4: 109 - 146 筑波大学
- 井上薫 1961『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館
- 井上沙織 2006「斎王の三節祭に関する覚書」『専修史学』41: 75-89 専修大学歴史学会
- 井上宗雄 1978『平安後期歌人伝の研究』笠間叢書
- 井野辺茂雄 1900「禁色考」『考古』1 (5) : 1-5
- 茨木裕子 1994「平安朝服飾における聴許の流れ——禁色・雑袍」『服飾美学』23: 61-79 服飾美学学会
- 今井堯・児玉幸多・小西四郎・竹内理三 1984「国司一覧」(『日本史総覧』2) 新人物往来社
- 今井優 1983「神楽・東遊の新研究」『武庫川女子大学紀要 文学部編』31: 13-35 武庫川女子大学
- 今江廣道 2002『前田本『玉燭宝典』紙背文書とその研究』続群書類従完成会
- 今川文雄 1979『訓読明月記』河出書房新社
- 岩佐美代子 1996『玉葉和歌集全注釈』笠間書院
- 岩沢愿彦監修 1990～1999『系図纂要』名著出版
- 上坂信男 1981『物語序説』有精堂出版
- 上島亨 1992「平安後期国家財政の研究——造営経費の調達を中心に」『日本史研究』360:33-68 日本史研究会
- 上島亨 1994「受領成功の展開」上横手雅敬監修『古代・中世の政治と文化』401-425 頁 思文閣出版
- 上島亨 2010『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会
- 上杉和彦 2008「平安時代の官職・位階——制度と変遷」日向一雅編『王朝文学と官職・位階』10-38 頁 竹林舎
- 上村悦子 1967「定子と彰子」『國文學——解釈と教材の研究』12 (7) : 31-40 學燈社
- 海野泰男 1983『今鏡全釈』福武書店
- 延慶本注釈の会編 2005『延慶本平家物語全注釈』汲古書院
- 遠藤基郎 1990 a 「権門家政機関と諸国所課」『日本史研究』332: 36-65 日本史研究会
- 遠藤基郎 1990 b 「十～十二世紀における国家行事運営構造の一断面——五節舞姫献上をめぐる家の国家行事」『歴史』74: 60-78 東北史学会
- 大饗亮 1991『玉葉事項索引』風間書房

- 大阪大学大学院人間科学研究科・比較発達心理学研究室 2011 「発達加速現象の研究」『第 13 回全国初潮調査資料』 <http://hiko.hus.osaka-u.ac.jp/hinorin/introduction.pdf> (最終アクセス 2017 年 11 月 30 日)
- 太田たまき 2014 『源氏物語』——五人の尚侍』『紀要・言語・文学・文化』113 (249) :43-60 中央大学
- 大津透 1991 「平安時代の地方官職」山中祐・鈴木一雄編『平安貴族の環境』(国文学解釈と鑑賞別冊) 161-179 頁 至文堂
- 大羽吉介 1985 「抜丸説話と平頼盛平氏一門離反をめぐって」『駒澤國文』22: 55-65 駒澤大学文学部国文学研究室
- 大本敬久 2013 『觸穢の成立——日本における穢の概念の変遷』創風社出版
- 岡田重精 1982 『古代の齋忌』国書刊行会
- 岡田荘司 1991 「神社行幸の成立」『大倉山論集』30: 29 - 58 大倉精神文化研究所
- 小川彰 1985 「古記録記事を通して見た禁色勅許——平安後期殿上人層を中心として」『国史学』127: 41-64 国史学会
- 小川彰 1990 「禁色勅許の装束について」古代学協会編『後期摂関時代史の研究』416-432 頁 吉川弘文館
- 小川彰 1991 「赤色袍について」山中裕編『摂関時代と古記録』311-325 頁 吉川弘文館
- 沖本幸子 2006 『今様の時代——変容する宮廷芸能』東京大学出版会
- 小野恭靖 1992 「五節間郢曲資料続考」『学大國文』35: 111-125 大阪学芸大学国語国文学研究室
- 尾ノ上尚恵 2010 『平家物語』における平頼盛の人物像—ふた心の意味』『広島女学院大学国語国文学誌』40: 13-32 広島女学院大学日本文学会
- 折口信夫 1930 「大嘗祭の本義」『古代研究』第 1 部第 2 「民俗學篇」862-949 大岡山書店
- 梶原正昭編 1985 『平家物語必携』學燈社
- 片岡耕平 2014 『日本中世の穢と秩序意識』吉川弘文館
- 加藤宏文 1998 「源氏物語、端役の去就——筑紫の五節がらうたげなりしはや」『研究論叢 人文科学・社会科学』48: 35-47 山口大学教育学部
- 加藤美恵子 2014 「女性と穢れ——『玉葉』を手がかりとして」、鈴木則子編『歴史における周縁と共生』115-138 頁 思文閣出版
- 加納重文 1996 「治承の兼実」『女子大國文』120: 1-33 京都女子大学国文学会
- 川口素生 2011 『大いなる謎平清盛』PHP 研究所
- 川島絹江 2004 「五節舞の起源と琴(きん)」『東京成徳国文』27: 32-48 東京成徳国文の会
- 川本重雄・小泉和子 1988 『類聚雜要抄指図卷』中央公論美術出版

- 韓明心 2002 「羽衣説話と霓裳羽衣曲—五節舞姫幻想」『麗沢大学紀要』75: 196-183 麗沢大学
- 岸野幸子 1998 「文章科出身者の任官と昇進——蔵人との関係を中心に——」『お茶の水史学』42: 81-118 お茶の水女子大学史学科読史会
- 木本好信 2001 「藤原季仲と『季仲卿記』小考」 所功先生還暦記念会『国書・逸文の研究』124-137 頁 臨海書店
- 久下裕利 2008 「道長・頼通時代の受領たち——近江守任用」『學苑』817: 2-13、昭和女子大学近代文化研究所
- 久保田淳 1976 「平家の世紀の光と影—治承4年までの平家とその周辺の文化・社会」『国文学解釈と教材の研究』21 (11) : 26-33 學燈社
- 倉本一宏 2003 『一条天皇』吉川弘文館
- 倉本一宏 2009 『御堂関白記』講談社 ※講談社学術文庫
- 倉本一宏 2010 『三条天皇——心にもあらでうき世に長らへば』ミネルヴァ書房
- 黒澤舞 2013 「治承4年の新嘗祭と五節舞について」小原仁編『「玉葉」を読む——九条兼実とその時代』315-348 頁 勉誠出版
- 小嶋菜温子 2004 「王と舞姫——仁明朝の常寧殿・五節にみる」『源氏物語の性と生誕——王朝文化史論』67-82 頁 立教大学出版会・有斐閣
- 小林賢章 2003 『アカツキの研究——平安人の時間』和泉書院
- 小林理恵 2014 「平安期貴族層における服喪慣習の展開」『寧楽史苑』59: 65-80 奈良女子大学史学会
- 五味文彦 1999 『平清盛』吉川弘文館
- 小山利彦 2004 「光源氏と皇権——聖宴における御神楽と東遊び」『國語と國文學』81 (7) : 1-16 東京大学国語国文学会・至文堂
- 小山利彦 2005 「光源氏による住吉の聖宴——東遊びと御神楽の資料から」『儀礼文化』36: 15-26 儀礼文化学会
- 栄原永遠男監修 1996 『日本人名事典』むさし書房
- 阪本是丸 2007 「近世の新嘗祭とその転換」『近世・近代神道論考』第2編 103-122 頁 弘文堂
- 佐々木八郎 1971 「『富士川』『五節の沙汰』について（「平家物語の達成」—統一—）」『国学院雑誌』72 (11) : 22-39 国学院大学出版部
- 笹山晴生 1985 『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会
- 佐多芳彦 1998 「『類聚雜要抄』の生まれた社会と時代——儀式・人・服装——」 川本重雄・小泉和子編『類聚雜要抄指図卷』361-372 頁 中央公論社
- 佐多芳彦 2008 『服制と儀式の有職故実』吉川弘文館

- 佐藤厚子 2003「石清水臨時祭」『中世の国家儀式——「建武年中行事」の世界』71-112 頁 岩田書院
- 佐藤圭 2012「鎌倉時代の越前守について」『立命館文學』624: 648-662 立命館大学人文学会
- 佐藤智子 1989『『枕草子』第九〇段「宮の五節いださせ給ふに」について』『成蹊国文』22:57-65 成蹊大学文学部日本文学科研究室
- 佐藤全敏 2018「蔵人所の成立」佐藤信編『律令制と古代国家』吉川弘文館
- 佐藤泰弘 2009「五節舞姫の参入」『甲南大学紀要 文学編』159: 1-32 甲南大学
- 繁田信一 2006『天皇たちの孤独』角川学芸出版
- 繁田信一 2008『かぐや姫の結婚』PHP研究所
- 重松明久 1982『新猿楽記・雲州消息』現代思潮社
- 斯波辰夫 1989「倭舞について」直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集 下』149 - 176 頁 塙書房
- 柴辻俊六 1982「甲斐国八代荘をめぐる長寛勘文（〔地方史研究協議会1982年度〕大会特集——盆地——その歴史と地域性）——（問題提起）」『地方史研究』32（4）:4-6 地方史研究協議会
- 志水正司 1963「上代尚侍の一考察」『史學』36（2）:325-338 三田史學會
- 下向井龍彦 2001『武士の成長と院政』講談社
- 新聞一美 1997「五節の舞の神事性と源氏物語——少女巻を中心に」『甲南大学紀要 文学編』107: 1-18 甲南大学
- 末松剛 2010「摂関家における服飾故実の成立と展開——赤色袍の検討を通じて」『平安宮廷の儀礼文化』153-206 頁 吉川弘文館
- 鈴木彰 2000「頼盛形象を規定するもの——〈平家都落〉像変貌の方向を探りつつ」『国文学研究』131: 12-23 早稲田大学国文学会
- 鈴木敬三 1959「年中行事絵巻「内宴」について」『日本歴史』134: 59 - 71 吉川弘文館
- 曾我良成 2006『『重任』と『遷任』』『名古屋学院大学論集』言語・文化編17（2）:70-63 名古屋学院大学総合研究所
- 曾我良成 2017『物語がつくった驕れる平家——貴族日記にみる平家の実像』臨川書店
- 大丸弘 1964「禁色雑袍の風俗史的研究」『風俗』3（3）:7-17 日本風俗史学会
- 多賀宗集 1969「平頼盛について」『日本歴史』254: 1-5 吉川弘文館
- 多賀宗集 1971「平家物語と平頼盛一家」『國語と國文學』48（9）:1-12 東京大学国語国文学会・至文堂
- 多賀宗集 1974『玉葉索引』吉川弘文館

- 高橋貞一 1988～1990『訓読玉葉』高科書店
- 高橋崇 1970『律令官人給与制の研究』吉川弘文館
- 高橋秀樹 1996『日本中世の家と親族』吉川弘文館
- 高橋秀樹 2013『玉葉精読 元暦元年記』和泉書院
- 高橋麻織 2016『源氏物語の政治学——史実・准拠・歴史物語』笠間書院
- 高橋昌明 2004『清盛以前——伊勢平氏の興隆——』文理閣
- 高橋昌明 2006「福原遷都をめぐる政治—治承2年（1178）から同4年8月末まで」『歴史学研究』816: 1-16 青木書店
- 高橋昌明 2007『平清盛福原の夢』講談社
- 高橋昌明 2009『平家の群像——物語から史実へ』岩波書店
- 高橋由紀 2013「脩子内親王の文化圏——『枕草子』の善本所蔵に関連して」『大妻国文』44: 37-53 大妻女子大学国文学会
- 瀧浪貞子 1994「平安宮¹ 大内裏の構造」角田文衛総監修『平安京提要』117-142頁、角川書店
- 詫間直樹編 1997『皇居行幸年表』続群書類従完成会
- 竹内理三 1999『院政と平氏政権』角川書店
- 竹内理三 2004『武士の登場』中央公論新社
- 田中重太郎 1971『前田家本枕冊子新註』古典文庫
- 田中重太郎 1972『枕冊子全注釈』角川書店
- 田中大喜 2003 a 「＜研究ノート＞平頼盛小考」『学習院史学』41: 144-154 学習院大学
- 田中大喜 2003 b 「平氏の一門編制と惣官体制」『日本歴史』661: 38-51 吉川弘文館
- 田中文英 1992「治承三年十一月の政変と摂関家」『女子大文学 國文篇』43: 66-85 大阪女子大学国文学研究室
- 田畑千恵子 1981「枕草子における「昔」「今」の意識——六位蔵人と青色をめぐって」『国文学研究』75: 41-49 早稲田大学国文学会
- 玉上琢弥 1965『源氏物語評釈』角川書店
- 丹羽明弘 1996『続日本紀』歌謡論——阿部内親王の五節舞を中心に——『奈良大学大学院研究年報』1: 118-123 奈良大学大学院
- 陳晨 2016『『平家物語』における「娥皇女英」説話をめぐって』法政大学修士論文 法政大学人文科学研究科
- 塚原明弘 1997「少女巻の五節——夕霧のかいま見をめぐって」伊井春樹・高橋文二・廣川勝美編『源氏物語と古代世界』205-223 頁 新典社
- 津田大輔 2009『西宮記』女装束条について——女子装束における摺衣と青色』『古代文化研

- 究』17: 164-140 島根県古代文化センター
- 土田直鎮 1992「公卿補任を通じて見た諸国の格付け」『奈良平安時代史研究』146-164 頁 吉川弘文館
- 角田文衛 1963『承香殿の女御』中央公論社
- 角田文衛 1977「池禅尼」『王朝の明暗』東京堂出版
- 角田文衛 1984『平安人物志』上 法蔵館
- 角田文衛 2000『平家後抄——落日後の平家』講談社
- 寺内浩 2004『受領制の研究』塙書房
- 戸川点 1990「長寛勘文」にあらわれた荘園整理令——保元令と国司申請令のあいだ』『日本史研究』335: 29-42 日本史研究会
- 時野谷滋 1977『律令封禄制度史尾の研究』吉川弘文館
- 徳江元正 1975「中世歌謡の享受」『季刊文学・語学』73: 33-43 日本古典文学会
- 所功 1989『三善清行』吉川弘文館
- 所功 1998「賀茂臨時祭の成立と変転」『京都産業大学日本文化研究所紀要』3: 20-69 京都産業大学
- 所功・野木邦夫 2000「宮廷儀式行事の研究文献目録（稿）」『京都産業大学日本文化研究所紀要』6: 473-375 京都産業大学日本文化研究所
- 所京子 1970「御匣殿の別当〔含御匣殿別当一覧表〕」『芸林』21（6）: 266-290 芸林会
- 所京子 1971「御匣殿の別当〔本誌21巻6号掲載〕—補遺—」『芸林』22（6）: 302-304 芸林会
- 鳥居本幸代 1986「平安朝期における五節舞姫装束」『風俗』25（2）: 1-12 日本風俗史学会
- 永池健二 2012「立歌考——東遊・白拍子から椎葉神楽まで」『日本歌謡研究』52: 13-26 日本歌謡学会
- 中川芳雄 1963「東遊び駿河舞の一伝統」『日本文学論究』23: 74-80 國學院大學國文學會
- 中村義雄 1973「五節の舞姫雑考——五節関係文献資料抄」『日本文学研究』12: 19-34 大東文化大学日本文学会
- 成清弘和 2003『女性と穢れの歴史』塙書房
- 西井芳子編・角田文衛総監修 1994「皇居略年表」古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』885-939 頁 角川書店
- 西川学 2002「五節のハヤシについて——『源平盛衰記』を中心に」『日本歌謡研究』42: 61-71 日本歌謡学会
- 野口孝子 2006「閑院内裏の空間構造——王家の内裏——」高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』83-114 頁 文理閣

- 橋本政宜編 2010 『公家事典』 吉川弘文館
- 橋本義則 1995 「平安宮草創期の豊楽院」『平安宮成立史の研究』 塙書房
- 長谷山彰 1989 「摂関期官人統制における慣習的処罰法——「恐懼」「除籍」による処罰を中心に」『法学研究』 62 (5) : 58-104 慶應義塾大学法学会
- 早川厚一 1993 『平家物語』 「殿上の闇討」話の先例説話——延慶本の上代・末代について『國語と國文學』 70 (6) : 15-25 東京大学国語国文学会・至文堂
- 早川厚一・曾我良成・橋本正俊・志立正知 2008 『源平盛衰記全釈 三』 名古屋学院大学論集人文・自然科学編: 44 (2) 名古屋学院大学産業科学研究所
- 早田みどり・守山正樹 1991 「長崎における初潮年齢の時代推移」『公衆衛生』 55 (5) : 325-328 医学書院
- 原田信男 1993 『歴史のなかの米と肉——食物と天皇・差別』 平凡社
- 針本正行編 2003 『源氏物語の鑑賞と基礎知識——少女』 至文堂
- 檜垣泰代 2006 「平安朝文学に見る職穢と服喪」 京都女子大学博士論文 京都女子大学
- 樋口健太郎 2005 「藤原師長の政治史的位置」『古代文化』 57 (10) : 509-522 古代学協会
- 樋口健太郎 2011 『中世摂関家の家と権力』 校倉書房
- 久木幸男 1990 『日本古代学校の研究』 玉川大学出版部
- 土方洋一 2013 『源氏物語』 須磨巻の書き手と読み手——付五節の君のこと『青山語文』 43: 67-78 青山学院大学
- 兵藤裕己 2011 『平家物語の読み方』 筑摩書房
- 兵範記輪読会 2013 『兵範記人名索引』 思文閣出版
- 平間充子 2008 「平安時代の臨時祭における《東遊》——場の論理より奏楽の脈絡を読む」『桐朋学園大学研究紀要』 34: 155-169 桐朋学園大学
- 福島正樹 2009 『院政と武士の登場』 吉川弘文館
- 服藤早苗 1995 「五節舞姫の成立と変容—王権と性をめぐって」『歴史学研究』 667: 1-16 青木書店
- 服藤早苗 2011 「平安朝の五節舞姫—舞う女たち—」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』 11: 327-342 埼玉学園大学
- 服藤早苗 2012 「五節舞師—平安時代の五節舞姫—」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』 12: 325-340 埼玉学園大学
- 服藤早苗 2013 『源氏物語』 の五節舞姫と史実『アナホリッシュ國文學』 4: 149-156 響文社東京分室
- 服藤早苗 2015 『平安王朝の五節舞姫・童女——天皇と大嘗祭・新嘗祭』 塙書房

- 藤本勝義 2008 a 「源氏物語と五節の舞姫——少女巻における惟光女の舞姫設定をめぐって」
森一郎他編『源氏物語の展望』第4輯 109-137 頁 三弥井書店
- 藤本勝義 2008 b 「源氏物語と五節の舞姫（補遺）」『青山学院女子短期大学紀要』62: 1-11 青山学院女子短期大学
- 古瀬奈津子 1998 『日本古代王権と儀式』吉川弘文館
- 保立道久 1998 「歴史学からの提言『竹取物語』と王権神話——五節舞姫の幻想」『源氏研究』3: 27-52 翰林書房
- 増田美子 2001 「平安時代の喪服 諒闇装束を中心に」『日本家政学会誌』52 (10) : 973-982 日本家政学会
- 増田美子 2010 『日本衣服史』吉川弘文館
- 松井健児 1988 「幻巻の11月——光源氏と五節舞姫」『國語と國文學』65 (1) : 35-49 東京大学国語国文学会・至文堂
- 松島周一 2004 「治承五年前半期の内乱の状況と平家物語」『日本文化論叢』12: 17-30 愛知教育大学日本文化研究室
- 松島周一 2014 「三河守・尾張守としての平頼盛」『歴史研究』60: 21-49 愛知教育大学歴史学会
- 松本新八郎 1949 「玉葉にみる治承四年」『文学』17 (10) : 17-32 岩波書店
- 三浦智 1997 「五節舞攷」『梁塵』15: 37-46 中世歌謡研究会
- 三上啓子 2001 「五節舞姫献上者たち——枕草子・源氏物語の背景」『国語国文』70 (6) : 22-35 京都大學文學部國語學國文學研究室・京都大學國文學會・中央圖書出版社
- 三橋健 1990 「五節舞起源伝説考」『国学院雑誌』91 (7) : 74-96 國學院大學綜合企画部
- 三橋正 1986 「賀茂・石清水・平野臨時祭について」二十二社研究会『平安時代の神社と祭祀』301-355 頁 国書刊行会
- 三橋正 2000 『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会
- 源豊宗 1976 「承安五節会」『大和絵の研究』239-252 頁 角川書店
- 宮尾素子 2008 「『一日晴』の表袴考——池田光政所用『紅地雷文四菱繋ぎに泊蝶文様繡表袴』・『金茶地雷文菱繋ぎに九曜紋文様繡表袴』について」『林原美術館紀要・年報』3: 13-30・図巻頭2頁 林原美術館
- 宮川久美 2007 「正倉院文書に現れる「有限」と「在限」」『古代文化とその諸相』: 200-185 (『奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集』15) 奈良女子大学
- 宮崎真由 2012 「陰陽道祭祀の一考察——鬼気祭・四角四堺祭を中心に」『皇學館論叢』45 (3) : 20-44 皇學館大学人文学会
- 宮崎康充編 1989～1999 『国司補任』続群書類従完成会

- 宮崎康充編 1998～2006 『検非違使補任』続群書類従完成会
- 村田正志 1988 『石清水』神道大系編纂会
- 明月記研究会編 1996 『明月記研究——記録と文学』1 山川出版社
- 元木泰雄編 2002 『院政の展開と内乱』吉川弘文館
- 元木泰雄 2012 『平清盛と後白河院』角川学芸出版
- 桃裕行 1993 『上代学制論攷』思文閣出版
- 桃裕行 1994 『上代学制の研究』思文閣出版
- 桃崎有一郎 2004 「中世里内裏陣中の構造と空間的性質について——公家社会の意識と「宮中」の治安」『史學』73 (2-3) : 195-223 三田史學會
- 桃崎有一郎 2005 「中世里内裏の空間構造と「陣」——「陣」の多義性と「陣中」の範囲」『日本歴史』686: 17-33 吉川弘文館
- 森公章 2016 『平安時代の国司の赴任——『時範記』をよむ』臨川書店
- 守山正樹・柏崎浩・鈴木継美 1980 「日本における初潮年齢の推移」『民族衛生』46: 22-32 日本民族衛生学会
- 門澤功成 2002 『源氏物語』少女巻の五節舞姫——光源氏・夕霧の対照性と和歌の働き』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊 48: 41-52 早稲田大学大学院文学研究科
- 八代國治・早川純三郎・井野邊茂雄編纂 1925～1926 「記録年表」国史大辞典編集委員会編『國史大辭典』吉川弘文館
- 安田徳子 1983 「資子内親王の生涯——円融朝歌壇の一側面」『名古屋大学文学部研究論集』85: 55-68 名古屋大学文学部
- 安田元久 1964 『武士団』塙書房
- 安田元久 1971 『平清盛——権勢の政治家と激動の歴史』清水書院
- 安田元久 1984 『権勢の政治家 平清盛』清水書院
- 安田夕希子 2000 『穢れ考——日本における穢れ思想とその展開』国際基督教大学比較文化研究会
- 柳井滋 他 校注 1993～1997 『源氏物語』※新日本古典文学大系
- 山岸徳平校注 1958～1963 『源氏物語』岩波書店 ※日本古典文学大系
- 山崎図南 1959 「近年の女子の初潮と体格の推移」『医学研究』29 (9 臨増) : 260-268 大道学館出版部
- 山下正治 2004 「大前神社本『平家物語』の「殿上閣討」について」『立正大学文学部論叢』119: 57-72 立正大学文学部
- 山下信一郎 1994 「律令俸禄制と賜禄儀」『史学雑誌』103 (10) : 1739-1772 公益財団法人史学

会

山田彩起子 2010『中世前期女性院宮の研究』思文閣出版

山田彩起子 2012「平安中期以降の尚侍をめぐる考察」『古代文化』64 (2) : 212-232 古代学協会

山中裕 1972『平安朝の年中行事』塙書房

山中裕・鈴木一雄 1991『平安貴族の環境』至文堂

山本幸司 1992『穢と大祓』平凡社

山本陽子 2002「『承安五節絵』の似絵性について——住吉内記系の模本による」『跡見学園女子大学紀要』35: 95-117 跡見学園女子大学

吉村佳子 1997「五節の舞姫の服飾——平安朝女子服飾の一考察」『服飾美学』26: 1-21 服飾美学学会

歴史と文学の会編 2011『平清盛小事典——平家物語の真実』勉誠出版

和田英松著・所功校訂 1983『官職要解』講談社

渡辺誠 2005「俸料官符考——平安中期後期財政史研究の再検討に向けて」『史学雑誌』114 (1) : 37-60 公益財団法人史学会

渡辺直彦 1972『日本古代官位制度の基礎的研究』吉川弘文館

古典本文テキスト

『今鏡』

竹鼻績 1984 講談社 ※講談社学術文庫

底本: 慶安3年刊『続世継』

『うつほ物語』

中野幸一校注 1999～2002 小学館 ※新編日本古典文学全集

底本: 尊経閣前田家各筆本二十冊

『栄花物語』

山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注 1995～1998 小学館 ※新編日本古典文学全集

底本: 梅沢本古写本（旧三条西家本、現文化庁所蔵）

『大鏡』

橘健二・加藤静子校注 1996 小学館 ※新編日本古典文学全集

底本: 京都大学附属図書館蔵旧近衛家本

『落窪物語』

三谷栄一・三谷邦明校注 2000 小学館 ※新編日本古典文学全集

底本: 実践女子大学図書館常盤松文庫蔵本（旧安田文庫本）

『源平盛衰記』

市古貞次 他 校注 1991 三弥井書店 ※中世の文学

底本: 内閣文庫蔵慶長古活字版全 48 冊

- 『源氏物語』 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注 1994～1998 小学館 ※新編日本古典文学全集
底本: 伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（古代學協會蔵、通称「大島本」）等
- 『源氏物語』 古代學協會・古代學研究所編 1996 『大島本源氏物語』 角川書店
底本: 飛鳥井雅康筆本（古代學協會蔵、通称「大島本」）
- 『古今著聞集』 西尾光一・小林保治校注 1983～1986 新潮社 ※新潮日本古典集成
底本: 広島大学附属図書館蔵本（九条家本）
- 『今昔物語集』 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注 1999～2002 小学館 ※新編日本古典文学全集
底本: 卷第 11、13-16、19-20、22、24-26: 実践女子大学蔵二十六冊本。卷第 12、17、27、29: 鈴鹿本。卷第 23: 東京大学国語研究室蔵二十一冊本。卷第 28、30-31: 東京大学国語研究室蔵十五冊本
- 『狭衣物語』 小町谷照彦、後藤祥子校注 1999～2001 小学館 ※新編日本古典文学全集
底本: 深川本（吉田幸一氏蔵）
- 『讃岐典侍日記』 石井文夫校注 1994 小学館 ※新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』
底本: 神宮文庫蔵本
- 『十訓抄』 浅見和彦校注 1997 小学館 ※新編日本古典文学全集
底本: 宮内庁書陵部所蔵本（片仮名本）
- 『住吉物語』 三角洋一校注 2002 小学館 ※新編日本古典文学全集『住吉物語 とりかへばや物語』
底本: 大急記念文庫蔵一位局筆本
- 『続古事談』 川端善明・荒木浩校注 2005 岩波書店 ※新日本古典文学大系『古事談 続古事談』
底本: 名古屋大学附属図書館小林文庫本（平仮名本）
- 『平家物語』 高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注 1956～1957 岩波書店 ※岩波古典文学大系
底本: 龍谷大学図書館蔵本（覚一本系）
- 『平家物語』 市古貞次校注 1994 小学館 ※新編日本古典文学全集
底本: 高野本

- 『平家物語』延慶本 延慶本注釈の会 2005.5～ 『延慶本平家物語』 汲古書院
底本:大東急記念文庫本
- 『枕草子』 松尾聰・永井和子校注 1997 小学館 ※新編日本古典文学全集
底本: 陽明文庫蔵本（三卷本系統第一類）
- 『枕草子』前田本 1927 『前田本枕草子』 前田家育徳財団 ※尊経閣叢刊 国会図書館デジタルコレクション（「その他」の項に別記）
底本: 旧前田家蔵・育徳財団蔵本
- 『紫式部日記』 中野幸一校注 1994 小学館 ※新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』
底本: 宮内庁書陵部蔵本（黒川真道旧蔵）『紫日記』

『源氏物語』古注釈

- 『異本紫明抄 紫明抄』 1978 日本図書センター ※源氏物語古註釈大成
- 『河海抄 花鳥余情』 1978 日本図書センター ※源氏物語古註釈大成
- 『花鳥餘情』 伊井春樹編 1978 桜楓社 ※源氏物語古注集成
- 『源氏釈』 渋谷栄一編 2000 おうふう ※源氏物語古注集成
- 『源氏物語細流抄 源氏官職故実秘抄』 1978 日本図書センター ※源氏物語古註釈大成
- 『細流抄』 伊井春樹編 1975 桜楓社 ※源氏物語古注集成
- 『紫明抄』 田坂憲二編 2014 おうふう ※源氏物語古注集成
- 『岷江入楚』 中田武司編 1980~1984 桜楓社 ※源氏物語古注集成
- 『岷江入楚』 1978 日本図書センター ※源氏物語古註釈大成
- 『弄花抄』 伊井春樹編 1983 桜楓社 ※源氏物語古注集成

史料・資料

- 『吾妻鏡』 黒板勝美・國史大系編修會編 1964~1965 新訂増補 吉川弘文館
- 『安徳天皇御五十日記』 群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 29 輯 雑部 卷五百二十七 1959~1960 続群書類従完成會
- 「意見十二箇条」 群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 27 輯 雑部 卷四百

	七十四 1959～1960 続群書類従完成會
「意見十二箇条」思想大系本	竹内理三校注 1979『古代政治社会思想』岩波書店
『一条天皇実録』	藤井讓治著・吉岡眞之監修・解説 2007 ゆまに書房
『一代要記』続神道大系本	石田実洋・大塚統子・小口雅史・小倉慈司 2005 神道大系 編纂会
『宇槐記抄』史料大成本	増補史料大成刊行会編 1965 臨海書店
『雲州消息』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 6 輯 文筆部 卷八 二 1959～1960 続群書類従完成會
『雲図抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 29 輯 公事部 卷五 百二十七 1959～1960 続群書類従完成會
『園太暦』	斎木一馬 他 校訂 1971～1986 続群書類従完成会
『延喜式』国史大系本	黒板勝美・國史大系編修會編 1952～1953 新訂増補 吉川 弘文館
『延喜式』神道大系本	虎尾俊哉校注 1991～1993 神道大系編纂会・精興社
『大間成文抄』	吉田早苗校訂 1993～1994 吉川弘文館
『小野宮年中行事』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 6 輯 公事部 卷八 十四 1959～1960 続群書類従完成會
『家伝』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 5 輯 伝部 卷六十 四 1959～1960 続群書類従完成會
『菅家御伝記』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 2 輯 神祇部 卷二 十 1959～1960 続群書類従完成會
「寛平御遺誠」群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 27 輯 雑部 卷四百 七十五 1959～1960 続群書類従完成會
「寛平御遺誠」思想大系本	大曾根章介校注 1979『古代政治社会思想』岩波書店
『貫首秘抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 7 輯 公事部 卷百 四 1959～1960 続群書類従完成會
『官職秘鈔』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 5 輯 官職部 卷七 十 1959～1960 続群書類従完成會
『看聞日記』	宮内庁書陵部編 2002～ 宮内庁書陵部 ※圖書寮叢刊
『儀式』	故實叢書編集部編 1993 『内裏儀式 内裏儀式疑義弁 内裏 式 儀式 北山抄』 明治図書出版 ※故實叢書
『吉記』史料大成本	増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店

『宮寺縁事抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 1 輯 神祇部 卷十四 1959～1960 続群書類従完成会
『宮寺縁事抄』神道大系本	村田正志校注 1988『石清水』神道大系編纂会
『九暦』大日本古記録本	東京大学史料編纂所編纂 1958 岩波書店
『禁秘御鈔』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 26 輯 雑部 卷四百六十七 1959～1960 続群書類従完成会
『禁秘御鈔階梯』	物集高見編 1927『新註皇学叢書』第五卷 廣文庫刊行會
『公卿補任』国史大系本	黑板勝美・国史大系編修會編 1964～1966 新訂増補 吉川弘文館
『九条年中行事』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 6 輯 公事部 卷八十三 1959～1960 続群書類従完成会
『愚昧記』	東京大学史料編纂所編纂 2010～2018 岩波書店
『江家次第』神道大系本	渡辺直彦校注 1991 神道大系編纂会
『玉葉』	宮内庁書陵部 1997～2013 ※圖書寮叢刊
『皇代記』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 3 輯 帝王部 卷三十一 1959～1960 続群書類従完成会
『皇太神宮儀式帳』神道大系本	胡麻鶴醇之・西島一郎校注 1979 神道大系編纂会
『弘仁式』	黑板勝美・国史大系編修會編 1965 新訂増補 吉川弘文館
『高野山記』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 続第 28 輯上 釈家部 卷八百十七 1959～1960 続群書類従完成会
『胡琴教録』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 19 輯 管絃部 卷三百四十四 1959～1960 続群書類従完成会
『国書逸文』	和田英松纂輯・森克己校訂 1995 新訂増補 国書刊行会
『後愚昧記』大日本古記録本	東京大学史料編纂所編纂 1980～1992 岩波書店
『後照念院殿装束抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 8 輯 装束部 卷百十五 1959～1960 続群書類従完成会
『御成敗式目追加』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 22 輯 武家部 卷四百 1959～1960 続群書類従完成会
『近衛府補任』	市川久編 1992～1993 続群書類従完成会
『古老口実伝』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 1 輯 神祇部 卷十 1959～1960 続群書類従完成会
『権記』史料大成本	増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店

- 『権記』撰関期古記録データベース 国際日本文化研究センター（「その他」の項に別記）
- 『西宮記』神道大系本 土田直鎮・所功校注 1993 神道大系編纂会
- 『桜町天皇実録』 藤井譲治著・吉岡眞之監修・解説 2006 ゆまに書房
- 『左経記』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店
- 『左経記』撰関期古記録データベース 国際日本文化研究センター（「その他」の項に別記）
- 『山槐記』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店
- 『三長記補遺』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 『三長記 三長記補遺』臨川書店
- 『三内口決』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第27輯 雑部 卷四百七十二 1959～1960 続群書類従完成会
- 『重憲記』 宮内庁書陵部蔵『清原重憲記』新日本古典籍総合データベース（「その他」の項に別記）
- 『侍中群要』神道大系本 渡辺直彦校注 1998 神道大系編纂会
- 『拾芥抄』故實叢書本 今泉定介編 1906 吉川弘文館
- 『十三代要略』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 続第29輯上 雑部 卷八百五十四上 1959～1960 続群書類従完成会
- 『春記』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店
- 『春記』撰関期古記録データベース 国際日本文化研究センター（「その他」の項に別記）
- 『春秋左氏伝』岩波文庫本 小倉芳彦訳 1988～1989 岩波書店
- 『装束抄』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第8輯 装束部 卷百十六 1959～1960 続群書類従完成会
- 『小右記』大日本古記録本 東京大学史料編纂所編纂 1959～1986 岩波書店
- 『小右記』撰関期古記録データベース 国際日本文化研究センター（「その他」の項に別記）
- 『小記目録』大日本古記録本 東京大学史料編纂所編纂 1986 『小右記』10 岩波書店
- 『職原鈔』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第5輯 官職部 卷七十一 1959～1960 続群書類従完成会
- 『助無智秘抄』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第8輯 装束部 卷百十三 1959～1960 続群書類従完成会
- 『除目大成抄（大間成文抄）』史籍集覧本 近藤瓶城・角田文衛・五来重 1973 臨川書店
- 『新加纂録類』史籍集覧本 近藤瓶城編 1984 臨川書店
- 『宸筆御八講記』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第24輯 枳家部 卷四百二十八 1959～1960 続群書類従完成会

- 『宸筆御八講記 天曆九年～文安二年』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 続第
26 輯下 釈家部 卷七百五十八 1959～1960 続群書類従完成會
- 『朱雀天皇実録』 藤井讓治著・吉岡眞之監修・解説 2007 ゆまに書房
- 『政事要略』国史大系本 黑板勝美・國史大系編修會編 1964 新訂増補 吉川弘文館
- 『仙洞御移徙部類記』 宮内庁書陵部編 1990～1991 宮内庁書陵部 ※圖書寮叢刊
- 『続教訓鈔』覆刻日本古典全集本 狛朝葛著・正宗敦夫編纂校訂 1977 現代思潮社
- 『尊卑分脈』国史大系 黑板勝美・國史大系編修會編 1966～1967 新訂増補 吉川弘文館
- 『台記』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店
- 『醍醐天皇実録』 藤井讓治著・吉岡眞之監修・解説 2007 ゆまに書房
- 『大嘗会儀式具积』 本居宣長著・物集高見編 1928 『新註皇學叢書』第七卷 廣文庫刊行會
- 『大内裏図考証』故実叢書本 裏松光世著・故實叢書編集部編 1993 : 26-28
- 『大日本史料』 東京大學史料編纂所編纂 1968～東京大學出版會
- 『代始和抄』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 26 輯 雑部 卷四百六十六 1959～1960 続群書類従完成會
- 『大嘗会御禊節下次第』 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 7 輯 公事部 卷九十三 1959～1960 続群書類従完成會
- 『治承元年公卿勅使記』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 1 輯 神祇部 卷八 1959～1960 続群書類従完成會
- 『中古京師内外地図——中昔京師地図 大内裡図』故実叢書本 故實叢書編集部 1993 明治図書出版
- 『柱史抄』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 7 輯 公事部 卷百六 1959～1960 続群書類従完成會
- 『中右記』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店
- 『長秋記』史料大成本 増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店
- 『朝野群載』国史大系本 黑板勝美 國史大系編修會編 1964 新訂増補 吉川弘文館
- 『貞信公記』大日本古記録本 東京大學史料編纂所編纂 1956 岩波書店
- 『貞信公記』東京大学史料編纂所データベース 東京大学史料編纂所（「その他」の項に別記）
- 『天満宮託宣記』群書類従本 塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 2 輯 神祇部 卷二十 1959～1960 続群書類従完成會

『殿暦』	東京大學史料編纂所編纂 1960～1970 岩波書店
『都玉記』	日野資実 建久元年（1190 年）～二年（1191 年）尾張国増田氏蔵書印 国会図書館蔵本
『成通卿口伝日記』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 19 輯 蹴鞠部 卷三百五十四 1959～1960 続群書類従完成会
『二中歴』尊経閣善本影印集成本	前田育徳会尊経閣文庫編 1997～1998 八木書店
『日本紀略』国史大系本	黑板勝美・國史大系編修會編 1965 新訂増補 吉川弘文館
『日本三代實録』国史大系本	黑板勝美・國史大系編修會編 1952 新訂増補 吉川弘文館 ※本文中では「日本三代実録」と記す。
『仁明天皇実録』	藤井讓治著・吉岡眞之監修・解説 2007 ゆまに書房
『年中行事抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 続第 10 輯上 公事部 卷二百五十三 1959～1960 続群書類従完成会
『年中諸公事装束要抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 続第 11 輯下 装束部 卷三百十一 1959～1960 続群書類従完成会
『八槐御記』	東京大學史料編纂所編纂 大日本史料（稿本）
『百鍊抄』国史大系本	黑板勝美・國史大系編修會編 1965 新訂増補 吉川弘文館
『扶桑略記』国史大系本	黑板勝美・國史大系編修會編 1965 新訂増補 吉川弘文館
『兵範記』史料大成本	増補史料大成刊行会 1965 臨川書店
『兵範記』データベースれきはく	国立歴史民俗博物館（「その他」の項に別記）
『平安遺文』	竹内理三編 1974 新訂版 東京堂出版
『北山抄』神道大系本	土田直鎮・所功校注 1992 神道大系編纂会
『本朝皇胤紹運録』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 11 輯下 装束部 卷三百十一 1959～1960 続群書類従完成会
『本朝世紀』国史大系本	黑板勝美・國史大系編修會編 1999 新訂増補 吉川弘文館
『本朝文粹』国史大系本	黑板勝美・國史大系編修會編 1999 新訂増補 吉川弘文館
『満佐須計装束抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第 8 輯 装束部 卷百十二 1959～1960 続群書類従完成会（『雅亮装束抄』とも。）
『御堂関白記』摂関期古記録データベース	国際日本文化研究センター（「その他」の項に別記）
『御堂関白記』大日本古記録本（陽明文庫本）	東京大學史料編纂所編纂 1952～1954 岩波書店
『明月記』	国書刊行会 1911～1912
『康富記』史料大成本	増補史料大成刊行会編 1965 臨川書店

『養老令』	井上光貞・関晃（他）校注『律令』1976 岩波書店
『令義解』国史大系本	黑板勝美・国史大系編修會編 1975 吉川弘文館
『類聚雜要抄』群書類従本	塙保己一編・続群書類従完成会校訂 第26輯 雑部 卷四百七十 1959～1960 続群書類従完成會
『類聚符宣抄』	宮内省図書寮 1930 宮内省図書寮
『歴朝詔詞解』廣文庫本	本居宣長著・物集高見編 1928 『新註皇學叢書』第七卷 廣文庫刊行會

絵・絵巻

『五節淵酔之屏風絵』京都大学附属図書館蔵

<https://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k167/image/01/k167s0001.html>

アクセス: 2017 年 11 月 30 日

『承安五節絵』早稲田大学図書館蔵 長谷川重喬写 承安五節之図 安永 5 年

http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi04/chi04_06304/chi04_06304.pdf

アクセス: 2017 年 11 月 30 日

『承安五節絵』国立国会図書館蔵 藤原壽栄写 文政 13（1830 年）

国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542679>

アクセス: 2017 年 11 月 30 日

『承安五節淵酔屏風絵』京都大学図書館蔵

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k167/image/01/k167l0001.html>

アクセス: 2017 年 11 月 30 日

『駒競行幸絵巻』和泉市久保惣記念美術館蔵 ※重要文化財

文化遺産オンライン <http://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/150601>

アクセス: 2017 年 11 月 30 日

事典類

「記録年表」（『國史大辭典』収録）八代國治・早川純三郎・井野邊茂雄編纂 1925～1926 吉川弘文館

「皇居略年表」（『平安京提要』885-939 頁）西井芳子編・角田文衛総監修 1994 角川書店

- 「国司一覧」（『日本史総覧』2 収録）今井堯・児玉幸多・小西四郎・竹内理三 1984 新人物往来社
- 『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社編 1994 朝日新聞社
- 『衛門府補任』市川久編 1996 続群書類従完成会
- 『官職要解』和田英松著・所功校訂 1983 講談社
- 『玉葉索引』多賀宗隼 1974 吉川弘文館
- 『公家事典』橋本政宜編 2010 吉川弘文館
- 『藏人補任』市川久編 1989 続群書類従完成会
- 『検非違使補任』宮崎康充編 1998～2006 続群書類従完成会
- 『系図纂要』岩沢愿彦監修 1990～1999 名著出版
- 『源氏物語大成』池田龜鑑編 1953～1956 中央公論社
- 『皇居行幸年表』詫間直樹編 1997 続群書類従完成会
- 『広辞苑』新村出編 2008 第6版 岩波書店
- 『國史大辭典』国史大辞典編集委員会編 1979～1997 吉川弘文館 ※本文中では『国史大辞典』と記す。
- 『国司補任』宮崎康充編 1989～1999 続群書類従完成会
- 『古事類苑』神宮司廳編 1969-1971 吉川弘文館
- 『字通』白川静 1996 平凡社
- 『新編国歌大観』「新編国歌大観」編集委員会編 1983～1992 角川書店
- 『世界大百科事典』平凡社編 2014 改訂新版 平凡社 オンライン版（ジャパナレッジ）
- 『大辞林』松村明編 2006 第3版 三省堂
- 『平清盛小事典——平家物語の真実』歴史と文学の会編 2011 勉誠出版
- 『日本国語大辞典』第2版 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 2000～2002 小学館 オンライン版（ジャパナレッジ）
- 『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館 1994 小学館オンライン版（ジャパナレッジ）
- 『日本史大事典』青木和夫 他 編 1992～1994 平凡社
- 『日本人名大辞典+Plus』上田正昭・西澤潤一・平山郁夫 三浦朱門監修 2001 講談社 オンライン版（ジャパナレッジ）
- 『日本人名大事典』平凡社編 1979 復刻版 平凡社
- 『日本人名事典』栄原永遠男監修 1996 むさし書房
- 『女官通解』浅井虎夫著・所京子新訂 1985 講談社

『平安時代儀式年中行事事典』	阿部猛・義江明子・相曽貴志 2003 東京堂出版
『平安時代史事典』	古代学協会・古代学研究所編 1994 角川書店
『平家物語研究辞典』	市古貞次編 1978 明治書院
『平家物語必携』	梶原正昭編 1985 學燈社
『弁官補任』	飯倉晴武校訂 1982～1983 続群書類従完成会
『ブリタニカ国際大百科事典』	小項目事典 ブリタニカ・ジャパン 2014 オンライン版(コトバンクデータベース)
『有職故実辞典』	関根正直・加藤貞次郎 1917 六合館
天皇皇族実録(セット)	藤井譲治著・吉岡眞之監修・解説 2005～2010 ゆまに書房

その他

谷崎潤一郎 1953 『少將滋幹の母』 新潮社(新潮文庫) ※オリジナルは 1949~1950

『木簡画像データベース・木簡字典』『電子くずし字字典データベース』

※本文中では「くずし字データベース」と記す。

<http://r-jiten.nabunken.go.jp/kensaku.php>

京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学電子図書館 貴重資料画像

<https://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

国際日本文化研究センター 摂関期古記録データベース

<http://rakusai.nichibun.ac.jp/kokiroku/list.php>

国立歴史民俗博物館 データベースれきはく ※本文中では「歴博データベース」と記す。

<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>

国会図書館デジタルコレクション

<https://ndlonline.ndl.go.jp/#/>

国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>

コトバンクデータベース

<https://kotobank.jp/>

ジャパンナレッジ

<https://japanknowledge.com/>

東京大学史料編纂所データベース（大日本史料・古記録フルテキストデータベースを含む。）

<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>

文化庁 文化遺産オンライン・国指定文化財等データベース

<http://bunka.nii.ac.jp/>

<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp>

早稲田大学図書館古典籍総合データベース

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>